RECONSTRUCTION

改造

精神改造・新人評論

小西重直
高橋誠一郎
阿部秀助
室伏高信
藤井健治郎

獨裁政治・人間建築

賀川豊彦
堺利彦
大庭柯公
沖野岩三郎
武者小路實篤

幸田露伴
宇野浩二
生方敏郎
近松秋江
北原白秋

野上彌生子
江口渙
上司小劍
正宗白鳥
谷崎潤一郎

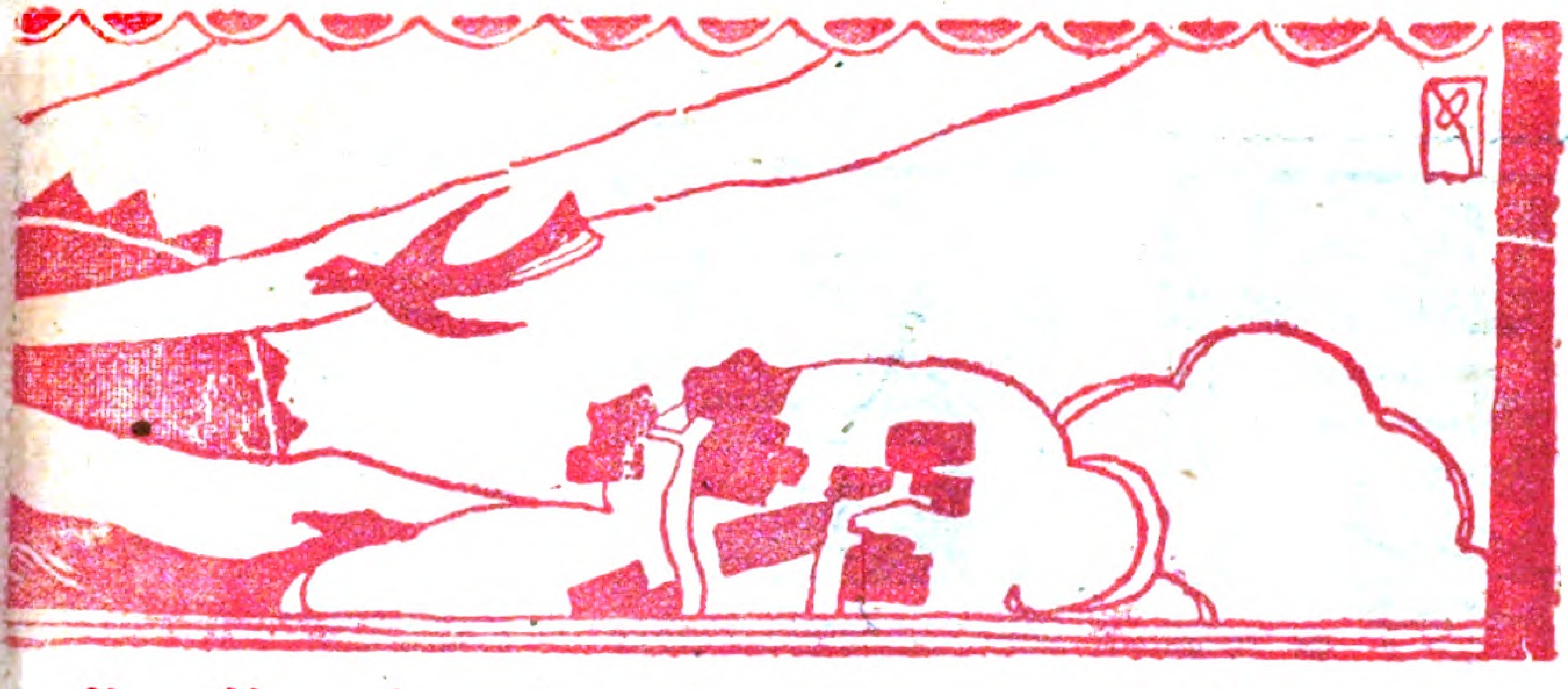
新年文藝

謹賀新年

一月元旦

白木屋呉服店

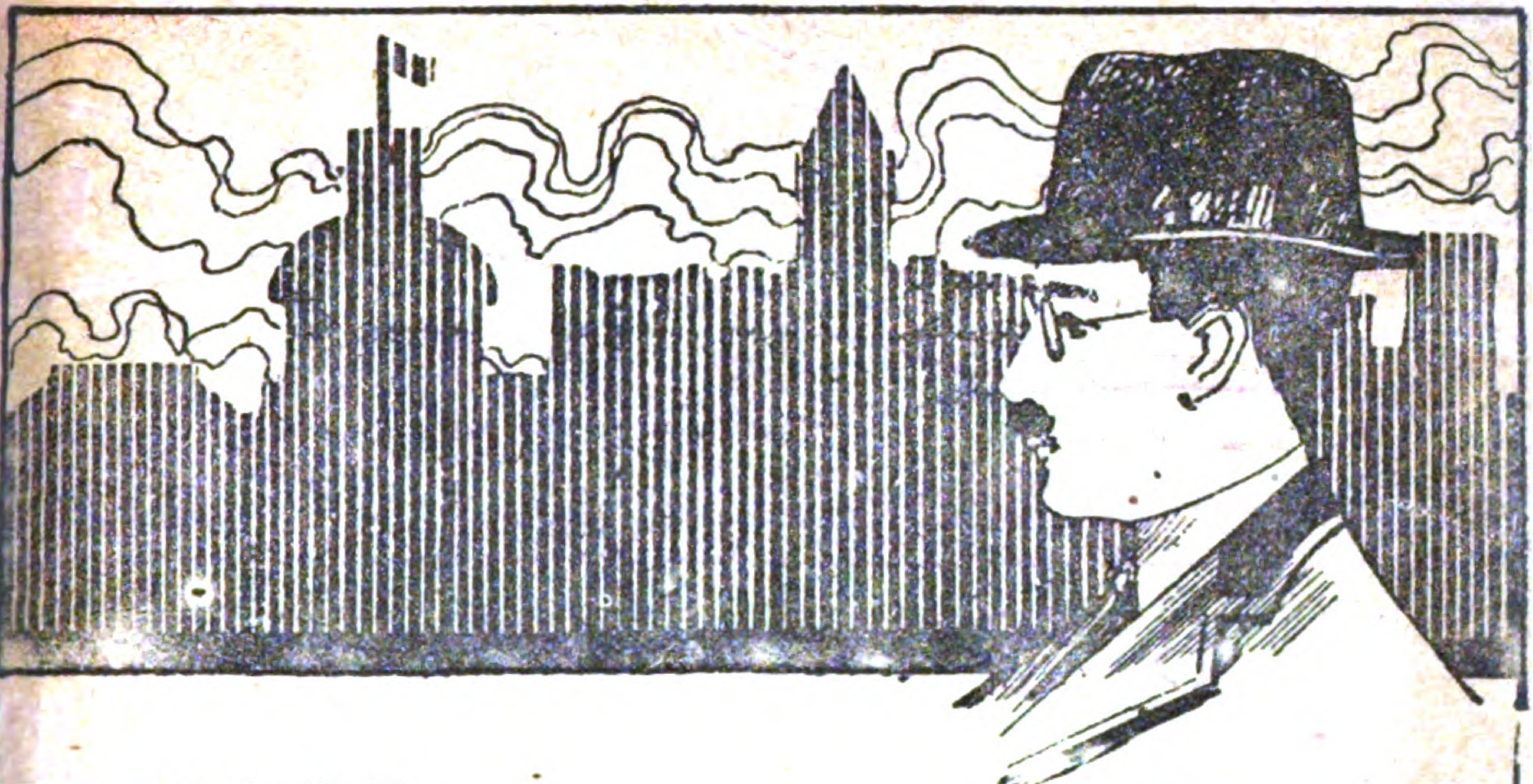
東京日本橋



改造新年特別號目次



思想・評論界新人評



新らしい年の
御装には
日ノ出向鳥印の
新らしき冬帽子を!!!

禮帽に、ソフト中折に
充分の信用を博しつゝあり……

登録商標

SUPERIOR QUALITY
TRADE MARK
Y.Y. MANUFACTURE
REGISTERED

商標御注意
御最寄帽子洋品店
にて御購求を希ふ

東京
吉安商店

遠藤無水著◆忽ち三版◆四六版箱入上製飾美本 定價金貳圓五拾錢 送料金拾六錢

改版 財産奉還論

日本帝國を資本主義化するを以て、使命とせし明治維新よ、德川幕府の政權奉還に依つて、血火の革命を見ずに行はれたり。今や資本主義行き詰まりて、第四階級の勢力勃然として振ふの秋に當り、資本主義制度の維持者にして、若し、自覺する處あり資本の奉還を以て、資本主義撤廢の前提と爲さんか、社會主義化を使命とする大正維新は、正に和平裡に行はれん。社會主義にして、日本の安全と發興との爲に死を以て盡さんとする著者は、曩に其運動宣言として本書を公表せしが、偶々政府は奉還の主張は是なるも、中に危險文字ありとて、之を禁止せり。然れども交渉の結果は著者に取りて重要ならざる十餘頁を削除したるのみ。玆に改版の本書は成れり。プル・ドン曰く「財産は掠奪の結果」と、而してマルクスの「資本論」は、其裏書なり。理論的に、實際的に本書の價値絶大なるを知れ。

四版◇遠藤無水譯

通俗マルクス資本論 全一冊

附録マルクス傳

定價金壹圓 送料八錢

既に資本論の解説ありて、猶ほ解説の解説を要すと云ふ。是れ通俗を求むるの聲なり。本書の歡迎せらるゝ所以怪しむに足らず。

六版發賣◇高畠素之氏序

遠藤無水著

社會主義者になつた漱石の猫

定價金貳圓 送料拾貳錢

吉野作造博士曰く 近頃最も面白く讀んだものゝ一つである。皮肉もあり、諷刺もあり、興味をそゝるやうに上手に書かれておる。就中社會主義者の人々の近狀が赤裸々に描かれておる點に於て面白いといふよりは寧ろ吾々にとつて難有益な本として是を世上に推薦するに躊躇しない

東京牛込神樂町二丁目十一番地 文泉堂 振替貯金東京四四六八七番

—近世科學的—

社會主義の鼻祖

ジョン、スパーゴ著　村上正雄譯

マルクス傳

▲日本は今不徹底なるトルストイの藝術を去つて、徹底したるマルクスの社會批判に耳をかたむけつゝあり。

▲マルクスの思想を知らうとする者は先づ本書に依つて彼れの人格と活動とを知るの必要があると思ふ。

▲故に多少でも新社會の思潮に觸れたいと云ふ眞摯な士に此書をお奬めする。

▲本書の體裁は箱入上製、菊半截です。

第一編　百四十頁、少年時代　定價金七拾錢
第二編　二百　頁、活動時代　定價金壹圓
（郵稅各四錢）
第三編　印刷中

■本書は原著者の快諾を得たる日本唯一の書なり

東京市芝區三田一丁目　**三田書房**　振替東京西一八一〇番

生田長江氏全譯◎堺利彦氏跋

マルクス資本論

第一分册愈出來して未だ半月ならざるに**重版**又**重版**十二月十四日**第四版發賣**

定價二圓二十錢
五千部限り特價
一圓九十錢
送料十二錢

印刷遅滯の爲久しく江湖期待に背きし所
十二月一日 **第一分册愈出來**

凄慘なる陣痛の呻きは地球の全面を蔽ふてゐる。十六億の生靈は『資本論』の教義を前にして、愈々『コオランか劒か』の去就を決すべく强ひられてゐる。しかも天才者の大なる獨創は屢々學究者流にとつての謎語でなければならぬ。マルクスも亦マルクスのほかに何物をも知らざるが如き一味學徒にとつてのみ、所謂難解であるのは異むを須ひない。今本書の譯者生田氏に於て特に人意を强うするものは、氏が其精嚴なる論理と尖鋭なる直觀とを以てして、總ての科學及哲學に精通徹底するの用意を具備しつゝも、尙ほ且つ其部門の孰れにも偏執することなく、常に渾然たる全人的努力を傾倒して澎湃たる文化運動の指導者となり、又永久に新しきを失はざる文壇思想界の巨人として日本の現代に重きをなしてゐる點にある。そして氏が前きに個人革命の詩人ニイチエの推奨に於て貢獻したところのものを、此度び更に社會革命の豫言者マルクスの紹介に於て貢獻すべく、昨冬以來此一事に沒頭し、最善の後に最善を盡して泣血の苦心を惜まなかつた。刊行者亦此の如き壯擧に參加し得たことの光榮を思ふものである。

全部十册一年間に完了

東京麻布十番通り　**綠葉社**　振替東京三二七五二番　電話芝七〇一二二番


百萬圓でも
君の強健な其の胃の腑を百萬圓出すから僕に寄つて呉れ給へ……ご言はれた處で是ればかつかりは出來ない相談。けれども茲に良法あり、金廿錢を投じてホシ胃腸藥を求め常に服用試みられよ。如何なる胃腸の患も直に治つて百萬圓でも買へない強健な胃腑に忽ちなれる
▲定價 金五十錢一圓 試用金廿錢▼
胃病良藥
ホシ胃腸藥
東京京橋南傳馬町
星製藥株式會社

平和に輝く新春は、コナミルクの御用意ありて樂しく年を迎へらるべし。

家庭——迎客
避寒——旅行

◇賜宮内省買上◇



進物用化粧箱あり

□滋養て美味□
□使用は輕便□

神童印

純粉末牛乳コナミルク
コーヒー入コナミルク
ココア入コナミルク
薄茶入コナミルク
紅茶入コナミルク
煉乳『コンデンスミルク』

△清淨なる牛乳を最新式科學の應用により乾燥したる純粉末牛乳と
△優秀なる特產調味料を加味したる理想的好飲料

疲勞を恢復し活動力を增進す

(丸罐 角罐 兩種)

明治屋、龜屋、三越、白木屋、松坂屋を始め、全國著名なる雜貨店、菓子舖、洋酒罐詰店、藥店にて販賣す。

製造元 東京市 日本コナミルク株式會社

賣文社編　勞働問題叢書

第一期刊行十二冊以下百編迄續刊

勞働問題研究の絶好羅針盤

(1) 現時の勞働問題概論
(2) 職工組合論
(3) 同盟罷工論
(4) 勞働經濟論
(5) 婦人勞働問題
(6) 少年勞働問題
(7) 勞働保險論
(8) 勞働運動の哲學
(9) 勞働者保護政策
(10) 失業問題
(11) 勞働爭議
(12) 勞働運動史

本邦唯一の勞働者教科書

製本既成各冊定價七拾錢賣行如霰
送料四錢

發兌
東京神田區表神保町十一
振替東京四二八二一番
大阪市東區内淡路町二
文雅堂書店



──((改造壹月號))──

智識階級を開放せ

勞働者は開放せられて、智識階級は全然開放せられざるは、我國の怪現象である。物質的にも幾分か勞働者の待遇は改善せられた。精神的にも今將に釋放せられんとする途上にある。しかし官吏は服務規律で束縛せられ會社銀行員また行則社規で以つて口を緘せられて自己の苦衷を語ることが出來ず。よし自分の考へが正義にあつたにせよ。それを文書にしても、口頭にしても、陳述するの自由を與へられず。また自己の經濟問題に對しても團體的行動が出來ぬのは遺憾事と云はねばならぬ。この現狀を默して忍從しつゝある智識階級の苦衷は多とせねばならぬ。

理解ある政治は智識階級に待たねばならぬ。穩健なる社會及國家の改造は智識階級の手を藉らねばならぬ。社會に理解があり、思想に理解があつたら國家の前途も、社會の改造も別に憂慮するに足らぬが、今この逆風潮をいかに轉回すべき。

大破壞から大建設へ、破壞しつゝその跡を堅實に建設して行かねば、そこに理想の國家も、理想の人道も劃くことは出來ない。煽動、妄動、暴動は恐るべく、また排斥すべきである。これ等は世の無識者によりて起さるべきものである。

無智識者が開放せられ、好遇されて、智識階級の虐待さるゝ今日の如きはなく、我國の現狀の如きはない。

國家を既倒に救はんと欲するものは、須臾く、智識階級の開放を斷行し、その中核勢力を善用して社會及國家の圓滿なる改革を期せねばならぬ。それには「官吏服務規律」よりの釋放、社規行則を打破して、智識の獨立を宣言する以外にない。現時の智識階級は文字ある奴隷に過ぎないことを自覺して、釋放への道へと進まねばならぬ。

生存權の倫理的考察

文學博士　藤井健治郎

一

生存權てふ觀念は、近世社會主義及社會運動が懷抱してゐる根本思想の一つである。そは如何なる權利かなれば、アントン・メンガーに從へば、『社會の各員は、現在してゐる方便の量に從つて、緊要の程度の比較的少い他人の需用の滿たされるのに先だち、その生存維持に必要なる物及奉仕の頒與されんことを要求する權利である』同氏著勞果全收權第四版九頁。猶同氏の其後の著述たる新國家論第三版九八頁。及新道德論第二版七六頁に於いては、前述の『生存維持に必要なる』といふ語は更に『人間相當（メンシェンヴュルディゲン）の生存をなすに必要なる』と言ひ直されてある。是は如何にも必要な修正と思はれる。）メンガーは此生存權を勞果全收權（Recht auf den vollen Arbeitsertrag）と及勞働權（Recht auf Arbeit）との二つに並べ加へて、之を三つの經濟的根本權利であると稱してゐる。（同書六頁）

然らばかうした生存權といふやうな觀念は、思想上に如何なる根據から生れて來たものであるかといへば、そは富の分配は、之を個々人の需用に從つてするのが、最も公平で又適當であるといふ思想に基づいてゐるのである。社會主義の中には一切平等にするのが、分配上最も公平なものであるといふ、所謂平等分配を主義としてゐるものもないのではないが、然し、當人が需用しても、しなくても、又欲しても欲さなくとも、すべて平等に分配するといふのは、甚だ無定義なことであつて、而かも形は平等に似て、實は甚だ不平等極まつたものである。それよりも各人の需用する所に從つて分配するのが、却つて公平なる分配である筈である。何となれば各人が富を求める所以は、それによつて其需用を滿

足せしめんが爲めであるから、今共需用に從て富を分配すれば、皆それ〲當人に滿足を得させることになるからである。そこでメンガーは多くの共產主義者が財產の平等分配といふ場合には、それは畢竟需用と現存してゐる方便とに從つて分配する意味であるといつてゐる（同書八頁）。さて需用に從つて財を分配するといふことを主義として、その實行の場合を考へると、各人の需用なるものは、性・年齡・事情・境遇・性格・習癖など、種々の事情によつて種々に異なるものであつて、實に千差萬別のものである。かうした多分に主觀的要素を含んでゐるものは、到底之を一般的な、客觀的な立法をなす所の基礎とするの煩に堪へない。從つて需用に從つて分配するといふことは主義として採用するにしても、猶之を實行的なものにするが爲めには、その需用といふものを制限しなければならぬ。然るに各種の需用の中でも、人間相當の生存を維持するのに絕對に必要なる所の需用、例へば衣・食・住・醫藥等は比較的一般的な客觀的な性質を帶びてゐるので、是等は或る立法上の基礎となることが出來る。メンガーは之を生存需用（エキジステンツベデュルフニッス）と名づけてゐる。（同書八頁、新國家論九八頁）。此生存需用といふ觀念を思想上の根據として生存權といふ觀念は生れてゐる。

しかし、人は生存權を有てるからといふので、唯生活に必要なる物資の供給を受けるばかりで、而して自分はブラ〲遊んでゐて宜いといふ法はない。そうした事は現代の經濟組織に於いて不都合であるばかりでなく、社會主義的社會に於いても亦許すべからざることである。若し人は供給を受けるばかりで遊んでゐても宜いものならば、誰が好んで働くものであらうぞ。そうしたなら供給すべき物資を生產する者がなくなつてしまつて、生存權といふは唯名のみになつて、その行使も止まつてしまはねばならぬに至るであらう。そこで生存權の裏には勞働の義務が付いてゐなければならぬ。即ち社會の各員は、生存權によつて生存需用の滿足に必要なる物資の分配を受けると同時に、又社會一般の爲めに勞働しなければならぬのである。かやうに考へ來ると謂ふ所の生存權なるものは、ゴッドヰンが唱道した所の交易主義（レシプロシティー）（同氏著政治的正義論）のやうな思想になる譯である。それでメンガーはゴッドヰンを以て財の分配は各員の需用に從てするのが正當であるといふ、所謂需用說を徹底的に主張した少數社會主義者中の一人であると數へてゐるし、（同書八頁）、

又、『社會は其各員に對し、必要にして又有用なる生産及奉仕を頒與すべき義務を負つて。而してそれと同時に其各員は、又其社會の爲に一定時間（一日六時間）必ず働かねばならぬ義務を課されてゐるのである』とのウィルヘルム・ヴィトリングの言を引用して、かうした論述をなす限に於いてヴイトリングは生存權を認めたものであると説いてゐる。（同書一六三頁）。それ故に社會の各員は義務的に勞働しなければならぬといふことは、生存權を單に其者として外に關係なく規定せんとする時には、必ずしも必要な説明でないが、しかし其生存權を周圍から觀て、それ等と關係を有たせて規定せんとする際には、必要なる註解である。此の關係については、後段、生存權について論議する際に、更に觸れる機會がある。

かうした譯であるから、生存權は社會の各員が之を有てるものであるとはいふもの丶、實際に於いては勞働に堪えない處の小供や老人、乃至病人、虚弱の人などの場合に最も明瞭に現はれるものである。即ち小供は養育と教育とを享け、老人・病人・不具者・虚弱者等は社會の保護を受け、而かも彼等自身はその代りに社會の爲に働くことをしないからである。（同書九頁・新國家論九頁）。此點からいへば今日現在成立してゐる制度の中で、孤兒院や、養老院や、乃至疾病・養老・傷害等の國家の强制的保險制度の如きは、此生存權を具象化したものであるといへる。（新國家論九九頁參照）。

二

生存權といふ觀念は、財の分配は需用に從でするのが、最も公平で、分配的正義に適つたものであるといふ思想から生れたものであるとすると、それは今日の私有財産權即ち所有權に對して如何なる關係に立つかが問題になつて來る。何となれば私有財産權のある今日に於いては、財の分配は、或は賃銀又は勞銀などの形に於いてもされるのは勿論であるが、それよりも多くは或はレント、或は利息などいふ形でされて居つて、需用の如何の如きは、此點に於いては殆ど顧慮されないやうな有樣になつてゐる。そこでそうした性質の私有財産權と、謂ふ所の生存權とは、果して如何なる關

係に立つかゞ問題になつて來ざるを得ないからである。メンガーは之に對して私法制度の持續と生存權とは、兩々相並存することが出來るもので、必ずしも相悖るものでない。勞果全收權を徹底的に行はうとすれば、それはどうしても無勞所得、從て亦私有財產制とも撞著するを免れないが、生存權はそうしたものでない。斯かる場合に於いては國家の各員が、其生存需用を要求するのは、謂はゞ國家の收入に對して抵當權を設定したやうに考へれば可い。即ち運り合せの好い有產者連が其無勞所得を收得するに先て、頒與さるべき優先權を有つた所の抵當權を設定したものと考へれば可いと說明してゐる。（同書九頁）。しかし此生存權も飽くまで徹底的に之を實行すれば、今日の土地及資本の所有者等が、單に其等を所有するといふことから得てゐる所の、無勞所得の大部分を取り去り、爲めに私有財產といふことも、甚しく其經濟的效用を奪ひ去られ、從つて其私有財產は忽ち共有財產に變ずるやうな傾向を呈するに至るであらうが、（同書九頁）、しかし理論上二者は相兩立することが出來るものでないといふのではない。そこで現時の社會運動は、一面に私有財產てふことを認容しておいて、而して他面に一定の範圍內に於いて生存權の確立を主張してゐるのである。メンガーは生存權と今日の私法的所有權との關係を、かくの如くに說明してゐる。

其點は判然たとして、然らば生存權と、三大經濟的根本權利中の他の二者、即ち勞果全收權と、勞働權との關係は如何うであるか。先づ勞果全收權との關係についてのメンガーの意見を聽くと、かうなつてゐる。勞果全收權が徹底的に行はれる社會、即ち私有財產制のない社會においても、國家の各員は自己の生存需用の資を得んが爲に、一日に若干時間は必ず働かねばならぬ義務があるとして、其れ以外の時間は一定の制限の下に任意に働き、かくて得たる所の結果は、すべて之を當該者の所得とするといふことであつたならば、そこに勞果全收といふことがある筈である。かうした譯であるから生存權は勞果全收權とも並存することが出來ること、猶私有財產制と並存することが出來ると同樣であると論述してゐる。（同書一〇頁）。

次に勞働權との關係は如何であるかなれば、メンガーは一方においては生存權は自己の勞働作爲に對し直接に生存需

用の滿足を國家又は自治體に向つて要求するの權利であるが、勞働權は人が如何にしても個々人の私的企業家から仕事を得ることが出來ない際に始めて行使し得る所の權利である。そればかりでなく、生存權は未成年者にも勞働不能者にもゐる所の權利であるが、勞働權は唯勞働有能者にのみ許される所の權利であると、明かに兩者の區別を說いてゐるが(同書一五頁)、又一方に於いては勞働權は生存權の一種であるとも述べてゐる。(同書一二頁)。そうして彼は更に此兩者は佛蘭西の大革命時代の憲法と、當時の社會主義者の論議とに於いて、或は混同されたり或は同一視されたりしてゐた變遷を概說してゐるが、(同書一五—二四頁)、其等の點から觀ても、此兩者は甚だ密接なる關係を有つてゐるものであることが理解される。しかし之についての考察は、後節の論述の場合に於いてする積である。

三

メンガーの生存權についての說明の敍述は此位に止め、進んでその倫理的考察に入つて見たいと思ふ。生存權の觀念は決してメンガーによつて初めて闡明された思想でない。ロックカヴー(政治論)、や、モンテスキュー(法律の精神)やフイヒテ(鎖國的商業國家)やなども、その內容は之を說いてゐる。唯メンガーは之を法學上の術語にして、法學的說明を與へたに過ぎない。さて此生存權なるものは、果して何等の根據をも有つてゐないものであらうか。若し有つてゐるとすれば、それは如何なるものであらうか。私は是は決して根據のない、空想のものとは思はぬ。何となれは近世國家が自覺してなす所の法律の設定、例へば第十七世紀の初年以來英國に發達した所の救貧法の如き、或は前世紀の中葉以後獨逸に創設された所の國家の强制保險法の如きと、及諸の社會的施設、孤兒院・貧民院等の如き、或は職業紹介所の如きは、或は之を國家がそれ自身の利益を主張とする所の國家その者の利己心に出たものであるとか、或は之を慈善な愛の心に出たものであるとか、種々に之を說明することも出來るが、又それを生存權の實際に實現された現象であるとも說明することが出來る。少くともさやうに說明してならぬといふことはないからである。既に何等かの根據を有

つてゐるとして、それは果して如何なるものであらうか。私は少くとも其の四つを擧げ得ると思ふ。

第一は人道の觀念である。苟くも縁あつて人間に生れてゐながら、或は疾病・或は老衰、或は廢疾・不具、或は羸弱、或は幼少、或は失業又は無業等種々の原因の爲めに、自分自らで其生命を維持する能はざるものを、見す〳〵之を見殺しにしてしまうといふことは、如何にも慘酷極まつた話で、人道上默して已むべきことでない。殊に其失業者・無業者などの場合に於いて、何等か執るべきの職業がありさへすれば、彼等は自分で自分を養つて行くことが出來るのに、それがないばかりに餓死しなければならぬとして、かうした失業者・無業者を生み出すやうな社會組織其者が、何等かの缺陷を有つてゐるといはなければならぬ。果して然らばそうした缺陷ある組織を有つてゐる社會其者が、彼等に對して責任を感じなければならぬ筈である。此點についてはメンガーも『もう既に占有されてゐる世界に生れて來た人は、若しも彼が當然要請し得べき兩親から養を享けることが出來ず、又社會は彼が勞働を要せざれば、彼は一塊の食物に對しても權利を主張することが出來ず、事實彼は此世に於ける餘計者なのである。つまり自然の大饗應中に彼に殘された一つの空席もないのである。是れ自然は彼に此世を去れよと命じ、而して速かに其自分の命令を行はうとするのである』といふマルサスの人口論中の有名な一節を引用して、是は如何にも慘酷な、しかし正直に現實を暴露した言で、これは啻に食物ばかりでなく、他の一切の需用にも當嵌まる言ではあるが、しかし是は、多くは今日の私法關係から生れ出た慘劇で、それを改訂すれば幾分か、其殘酷さを減ずることが出來る。かういふやうな意味のことを述べて、現代の缺陷を攻撃してゐる。(同書四頁)。こんな譯で、今日の私法關係の不完全なことからして、大自然の大饗應に列することが出來ずにゐる人々も尠いことではあるまい。是は人道上から觀てまことに遺憾なことで、吾等はあらゆる方法を盡くして一人も殘らず各其生存を遂げ得るやうにするのが、同類人間の本務ではあるまいか。

第二は團體生活の見地から生ずる根據である。人間の生活は、多數の人間が相集つて、非常に複雜な組織を構成してゐる團體の中にある、相依相助の生活であり、又それでなければ人間らしい文化的生活を成遂することが出來ないもの

である。此は前世紀の學術研究に於いて明確にされた事實である。所謂個人主義的人生觀は到底立し得ないものになつてしまつて、所謂團體主義的人生觀でなければならぬといはれてゐるのは、此事實があるからである。かやうに人間は團體生活をなさねばならぬものであり、團體は其自ら一獨立體として生存を遂げて行かねばならぬものである以上は、其團體からいへば、團體の構成分子全部が各其處を得て、其爲すべき職分を働き、一分子でも無駄になつてゐず、不健全になつてゐないやうな、狀態が、その團體に取つて望ましい、所謂理想の狀態に相違ない。即ち少くとも其一分子でもが、働かせさへすれば相當の働きをなし得るのに食ふに食へず、衣るに衣れないが爲めに、むざ〳〵犬死させるのは、團體として決して健全狀態、理想狀態にあるものといへない。此點から考ふれば團體が其各自に對し、少くとも最少限度の生活資糧を保障することが、團體其者の本務であるまいか。即ち社會の各員に生存權を認めるといふことが、團體其自らの生存發達といふ見地から觀て、當然のことであるまいか。殊に前世紀即ち十九世紀の初葉以來歐米社會の安定を破り、それをして動搖・不安の狀態に陷らしめ、今二十世紀になつて以來は、我が日本社會をも其渦中に取捲き、更に這回の世界大戰爭の中から其終結に至つた今日に於いては、一層猛烈なる勢を以て世界の全社會を動搖せしめ、世界の全文化民族の心をして悶々の念に打たしめつゝある所の、社會主義及社會運動は、つまり產業革命の結果として、世界多數の人々が、食ふに困る、生きて行くのが難かしいとふ切羽詰つた狀態から起つたものではないか。メンガーが、十八世紀の末葉以來、漸次文化民族を動搖せしめつゝあつた處の社會運動なるものは、所詮、勞果全收權と生存權と、二つの權利を社會又は國家によつて保障して貰はうといふことを目的としてゐるものである（同書五頁）といつてるのは、今日では殆ど常套語(トルイズム)として認められてゐる程のことである。斯かる不安動搖の際に、社會の他の一方の富豪階級、資本家階級の人々は、自分達は食ふに困らないから可いはで、平然晏如たることを得べきか。否々其不安・動搖の飛沫は必ず彼等の頭や、身體を濡らずんば已まぬものである。彼等は到底晏如たるを得るものでない。たとひ彼等は强いて恬然として不關焉の態度を取るにしても、社會又は國家は默してゐることの出來る譯のものでない。社會は國家がそれ

に手をつけるとなると、前述の理由によつて、自然生存權を認めるやうな傾向を取らざるを得ないやうになる。

第三今日文化民族の國家の現狀に於いては、救貧法、强制的國家勞働保險、孤兒院、貧民院、養老院等、若干の法律制度を除いては、國民に對して其生活上の保障を與へてゐるものはない。今日あるものは、既に生存は出來るものと假定しておいて、それが出來てから後に起つて來る事柄に對しての保障である。卽ち所有權相續權等の私法的確立、保護、及び生命身體の安全に對し、又居住、移轉、言論、出版等の自由に對する公法的確立、保護等である。是等はいづれも殆ど至れり盡くせり大に備はつてゐるのであるが、しかしながら、前にもいつた通り。是等はすべて生きることが出來てから後のことで、其の前に生まんが爲めに戰はねばならず、又戰つても刀折れ矢盡きて如何ともすることが出來ず又始めから戰ふ力さへないものには、所謂二階から目藥で、風馬牛相及ばない感がある。それはかりでない、なまじいそんなものが見せ付けられて焦らされるばかりである。つまりメンガーがいつてゐるやうに（同書一九三〇頁）近世法律は既に生存することの出來るものを保護するの法律で、生存の難しいものを保護するの法律でない。リチーが其『自然權利』に於いて、生命權を論じて未生兒の權利までをも說きながら、多くは死刑とか、自殺とかいふ點についてのみ詳論して、如上の意味に於ける生存權に稀に觸れる處があつたのは、（自然權利第三版一九一六年版一一九―一三四頁）、やはり近世法律に囚はれ過ぎた見解であるといはねばならぬ。生存することの出來るものを保護するのは、其生命其者の內實的價値及其尊嚴といふことと、それの團體に及ぼす效果といふことと、此等二つの根據から來てゐるのであらうが、果して然らばそれ等の同一の根據は、生存の出來難いものをも保護する立法の原理とならぬであらうか。

最後に第四には近世の文化民族の國家のすべてが既にやつてゐることで、それを徹底すれば、自然に生存權を認めねばならぬやうになるといふ根據である。此點はメンガーも幾分之を說かないではないが、それよりもシュタインが最もよく之を論じてゐる點である。（哲學の光で見たる社會問題。八九七。六一六―六一七頁）それは今日の文化民族の國家は何處でも墮胎及嬰兒殺等を嚴刑を以て禁止してゐる。是はそれによつて各國家は可成其勞働力と國家の防禦力とを增

し、常に青年の氣分を持して、國家をして老ひさらしめんが爲めである。親は必ず子供を生んでならぬといふことも勿論ないが、又必ずそれを生まねばならぬといふ義務もない。さりながら既に宿縁があつて小供を胎内に宿した以上は、最早親の自由でそれを處分することは出來ず、必ず生命を與へてやらねばならぬ。卽ち國家は法律の力によつて胎兒の權利を認め、胎兒は必ず產まるべきものにしたのである。此の如くにして國家は胎兒の生命權を認めた以上は、既に生れた小供に對して其生存權を認めてやるのは當然であつて、それを認めないのは不徹底であるといはねばならぬ筈である。卵は之を保護するけれども、雛は之を構はないでは理論が徹底せぬ。今日の文化民族の國家も無論其雛を全く看却してゐるのではない、其親に對して幼兒、未成年者の養育、敎育の義務を負はしめてゐる。其點からいへば暗默の中に未成年者の生存權が認められてゐるといつて可い譯である。しかし親の方からいへば、彼等は其義務を負はねばならないから、到底其義務を果たし切れないといふ考のあつた際には、墮胎なども亦全く已むを得ないといふ論に落ちてゆくやうであるが、それは國家から嚴禁されてゐる。そこに矛盾がある。重ねていへばその矛盾といへば、國家は墮胎、嬰兒殺等を嚴禁してゐる點から觀て、一方では生存權を認めてゐるやうであるが、生れてから後の養育、敎育の義務は自分で之をせずに、親にさせてゐるといふ點からいへば國家は生存權を認めて居らぬやうであるといふ矛盾である。そこで墮胎や嬰兒殺を嚴禁するといふ原理を、既に生れた後の子供にも適用するやうになれば、此矛盾に消ゆることになつて、生後のものにも生存權を認めるといふことになるのである。今日の實際問題としては、到底小供を養育したり、敎育したりする能力のない親達の小供は之を如何にすれば可いかといふ問題となつて來るであらうが、卽ち一の特殊問題となつて來るであらうが、しかし其根柢には一般的な生存權といふ觀念が裏付けられてゐなければならぬ筈である。

以上の四點が、先づ生存權の社會哲學的根據であるやうに思ふ。

四

以上を生存權の根據であるとして、私はそれについて更に研究して觀る積であるが、それをば稍少しく後へ廻はして其前に所謂經濟的根本權利の他の二つ、卽ち勞果全收權及勞働權に對する生存權の關係について論究して觀たいと思ふ。しかし其中で、勞果全收權との關係については、私は前節に述べた所のメンガーの所說以上、只今の處あまり多くの議論を行つてゐないから之を略して、專ら勞働權との關係について述べて見たいと思ふ。

既に述べたやうに、メンガーは生存權と勞働權とを區別して、生存權は自己の勞働作爲に對し、直接に生活需用の滿足を國家又は自治體に向つて要求するの權利であるが、勞働權は、人が如何にしても個々人の私的企業家から仕事を得ることが出來ない際に、始めて行使し得るの權利であり、第二には前者は未成年にも勞働不能者にもある所の權利であるが、後者は唯勞働有能者にのみ許され得る權利であると述べてゐる。先づ未成年者、勞働不能者、概括的に到底自分自らで自分の生活資料を得る能はざる人についていへば、若し生存權が認められたといへば、其生存權は此等の人々の上に最も顯著に表現される譯である。何となれば彼等は勞働といふ對立作爲（ゲーゲンライストング）をなさないでも、猶其生存を續けて行くことが出來るといふのは、全く彼等に與へられた生存權の御陰であつて、其場合には其生存權が最も簡單な、又或る意味に於いては最も純粹な形を表現したものといふことが出來るからである。此際に於いては明かに勞働權と區別される。しかしさうした場合でも、勞働權は可能狀態に置かれてゐるものであるいふこととが出來る。卽ち未成年者や勞働不能者等は、現在は勞働權を有つてゐないが、未成年者が成年者になつたり、病人又は虛弱な人間が健康體になつたりした場合には、彼等も當然勞働權を享有し得るとすれば、それを事實有つてゐない現在の狀態は、勞働者が現實狀態にならずに、可能狀態になつてゐるといはれ得る譯である。兎に角勞働不能者の場合は、一通り勞働權を區別された生存權が最も明かに表現された場合であるといへるが、十分勞働の出來る人に對して考察すると、生存權と勞働權との區別が甚だ明瞭を缺くやうになる。それでシュタイン（前出書六一七頁）や、ヲルフ（社會主義九二一頁）やがメンガーの生存權の定義であるとして只此の幼兒に對する養育及教育と、老、病者、不具等の勞働不能者に對する一時的又は永久的保護

が生存權であるといつてゐる一節のみを擧げてゐるのは、メンガーの全體から云へば其誤解であるといはねばならぬ。よし誤解でないまでも不備であるといはねばならぬが、しかしメンガーの論述の中に、さやうに誤解され得る契機はなくはない。そこでデルフは今日認められてゐる所では生存權は酷しい饑餓の權といはうよりも、むしろ病弱の權といふべきであると斷じてゐる。（前出書九三頁）。是は生存權は病弱者、幼兒等勞働不能者の場合には判然と其姿を表はしてゐて、直ぐ何人の眼にも付き易いが、勞働有能者の場合になると、所謂勞働權と混同して來るから、そこで自然生存權といへば勞働不能者の養育保護であると理解されるやうにするのである。此點からいへば生存權問題は、それが實際問題になると、救貧問題となつて來るのは自然の徑路であるやうに思はれる。

しかしそれが勞働有能者の場合になると、事情が全く異つて來る。假りに生存權が一般的に承認されて、それが一般的の立法原理とされたとする。しかし如何にそれが認められて、その原理で組織された社會が出來上つたにしても、自分は全く坐してゐて、すべて他人から養はれてゐて可い筈はない。若しそれが可ければ、その社會には坐して養はれてゆく人と、働いて養つてゆく人と、二種類の人が出來る筈である。其場合養はれてゆく人はそれで滿足ならんも、養つてゆく人は不平であるに相違ない。それ故に徹底的に生存權の認められてゐる社會でも、働かねばならぬ筈である。否意味の取り方によつては、生存權が認められてゐる社會であるから、働かねばならぬともいへる。フーリエーが自然狀態に於いては、野蠻人は漁、獵、果實の收拾牧畜の權利を有つてゐたが、自然が既に占有されてゐる社會狀態に於いては、此等の四根本的權利を行使する譯に行かぬ。そこで其等に代るべき等價の新しい權利が現れて來た。それは外でない、勞働權或は最少限度の生存權であるといつてゐるとメンガーは述べてゐるが、（同書一六頁）、フーリエーの此說は人間は生きんが爲めには、如何なる場合でも働かねばならぬものであることを示したものであるといへる。即ち自然の資料が既に他人によつて占有されてゐる社會狀態に於いては無論、猶天與の物資は饒多で、それに人口が甚だ少い時代でも、生きんが爲めには、猶やはり或は漁獵をやつたり牧畜をやつたり果實を收拾したりする仕事を爲さねばならぬこ

とを說いたものであるといへる。それ故に如何なる場合に於いても働かずに生きてゆける法はない。猶生存權は働ける人でも働かずに養はれてゆく權利だとすると、誰か苦んで働くものがあらうぞ。働くものがなくなつて、それで何うして人々を養つてゆく資料を得ることが出來やうぞ。だからどうしても生存權を、働ける者でも働かずに養はれてゆく權利と解釋することが出來ない。のみならず、權利は其半面には必ず義務を伴つてゐるものである。權利が表なら、義務が其裏であり、又義務が表なら權利は其裏となつて居り、權利と義務とは必ず相表裏の關係をなしてゐるものである。さうでなかつたなら權利と義務との概念は成立たない。此抽象論は、權利、義務の關係の殆どあらゆる場合に適用さるるのであるが、之を彼の生存權と勞働權との場合に當嵌めて考へると、個人は既に國家に對して生存權を有し、國家はそれを認めて彼の生存を全くさせる義務を負つてゐるとしたならば、其當該者は、自己の生存權を享受すると同時に社會又は國家に對し、勞働の義務を負つたものであるといはねばならぬ。かくて生存權といふ者は、勞働の義務といふ裏付を得た譯になつて、生存權の意味が始めて判然と確定されることになる。それだからメンガーはフーリエーは生存權勞働權の二概念の區別を沒却してゐると非難してゐるけれど、（同書一七頁）しかしそれは寧ろ言過ぎである。兩者は概念としては無論異つてゐるが、しかし互に甚だ近密な關係を有つてゐる。つまり右といへば左を豫想し、上といへば下を豫想するが如きものである。唯生存權に對して、勞働權といつて、それを權利であるかのやうに說くのは謬見で、それはむしろ前述の理由によつて勞働の義務といふべきである。此點からいへばメンガーは自分で言て置きながら、しかしあまり判然と論述してゐないやうに見ゆる所の『アメリカの共產村は予が既に生存權として擧げた所の權利と義務との和合を規範としてゐる』（同書一五八頁）といふ言は、生存權と勞働權との關係を最も明瞭に表はしてゐる言であるといはねばならぬ。かやうに考ふれば勞働は權利でなくて義務であつて、生存權を裏付けてゐるものである。前にも述べたゴツトキンの交易主義（政治的正義論）やカベー及ルイ、ブランの『其需用に從て各人へ、其能力に從て各人から』の主義の如きものは皆此生存權と勞働義務との一致を意味してゐるものと解釋することが出來る。

しかし、生存權と勞働義務との一致といふことは、生存權が徹底的に行はれてゐる社會を豫想しての上のことであつて、それが完全に行はれてゐない今日の社會に於いては兩者の十分なる契合を見ることが出來ぬ。而して又私有財産制即ち私法上の所有權といふものが儼存してゐる今日に於いては、勞働は義務と觀るよりは、やはり權利と觀念する方が妥當なやうである。何となれば勞働を義務なりと觀て、それを果たさうとしても、唯だ勞働力ばかり有つてゐて、それを活現せしむべき土地と資本との方便を有たぬ所の人は、到底それを果たすことが出來ないから。そこでそれを權利と認めて、メンガーのいつてゐるやうに個人の私的企業家から仕事を得る能はざるものに、國家が仕事を授けて、その權利を行使せしめるやうにすると觀るのが穩當な見方であるやうに思はれるからである。さうすると、その勞働權なるものは、今日の實際上の重なる問題としては、所詮は所謂失業者の問題といふことに落ちて行くやうに思ふ。

要するに生存權の觀念は、勞働の義務又は權利に密接に關係してゐるもので、勞働不能者に對しては兩者は判然と區別されるけれども、勞働有能者に對しては、兩者は屢混同される程に密接してゐるものである。

五

次ぎに生存權と所有權との關係について論述しなければならぬのであるが、是は他の機會に一題目として詳論して見たいと思ふから、姑く之を省き、直ちに自然權利としての生存權其者の性質について論じ。以て此稿を終りたいと思ふ。

生存權は勞果全收權、勞働權と相並んで、經濟上の三大自然權利であると理解されてゐる。メンガーは十七、八世紀の大なる政治運動は皆政治上の根本權利を獲得することを目的としたものである。是は全く詰らないものではないのは無論であるが、しかし單に一部有産階級に利なものであつて、無産者階級から觀れば其内容甚だ空疎であつて、それ程難有いものでない。然るにそれにも拘はらず格外に尊重されてゐた。しかし今日はそんな内容の空疎なものよりは、それの充實されてゐる、經濟上の根本權利の享有行使に向て叫ぶやうになつたといふ程のことを述べてゐる。(同書五頁)。

而してそこに謂つてる所の根本權利とは、所謂自然權利を意味してゐるのである。(同書二八頁)。「近世法理學は生具的、若しくは自然的と、後天的と二種の權利を區別する。前者は人間の生存に卽して各人に存してゐる所の權利をいひ、後者は契約、相續、其他法律上の事實によつて、特に各人に對して建設されねばならぬ所の權利である。勞果全收權(而して同樣に生存權も亦)明かに第一題に屬してゐるものである」新國家論三三頁及九五頁)。

そこで此處で問題としたいのは、此の如き生存權といふか如き自然權利なるものが果して存在するか否か。若し存在するとせばそは如何なる意味に於いてであるかといふ點である。今その問題を論究する前に、自然權利の概念について一言せんに、若し權利といふ概念を唯單に成法(ポヂチーヴ・ロー)によつて與へられたるもののみを意味するものと限定したならば、さうした意味の自然權利といふ概念は成立する筈がない。しかし其成法に何を標準として出來てゐるものであらうか。歷史派はそれは國民精神であると答へる。しかしそれはさうでない。國民精神は法律の內容を形成する材料に過ぎぬ。その材料だけでは法律は出來ぬ。何かの標準に照してそれが整理され、精錬されることによつて法律は始めて生ずるものである。其標準は何であるか、それが卽ち自然法律である。その自然法律が尺度となつて、それに從て國民精神が裁縫されて成法が出來上るのであり、又其自然法律を嚮導觀念とすることによつて、成法は變遷進步するものである。シユタムラーが此自然法律なくば、如何にして甲乙の二成法の優劣、若しくは價値を比較し、判定することが出來やうぞと論じたのは(經濟と道德)、全く如上の意味から、若しくは如上の立場からいつたものである。旣に自然法律がありとすれば、それから與へられる自然權利の存するのも當然のことで、何等疑を容るべき餘地のあるものでない。固より其自然法律及自然權利は理想的なものであつて現實的なものでない。それ故に自然權利の全姿を卽刻此に示現して欲しいといはれた處で、それは何人にも出來る筈がない。自然權利は人類のあらん限り、その發達の歷史中に段々に現はれ來るべき筈なものであるといつておきさへすれば可いのである。

さて右の如く自然權利を理想的なものと解し、生存權は一種の自然權利であるとすれば、其生存權なるものも亦理想

的なものと謂はねばならぬ。其生存權が理想的權利であるといふ意味は然らば如何なるものであるかといふに、それは生存が吾等人間の權利とあると認められる根據、又は理由は、それが或る理想を實現する所に存するといふ意味である。吾等人間の生活は、唯單に此肉體的生活を生活してゐるといふだけでは、何等の意味もない價値もない。單に肉體的、生理的生活ならば、啻に吾等人間ばかりでなく、動物でも、否植物でも、皆之をやつてゐる。從て單なる肉體的生活を、特に人間的生活卽ち人間相當(メンシェンヴュルディッヒ)の生活といへる筈はない。その單なる肉體的生活が、眞に人間的生活らしい、意味ある價値ある生活となつて來るのは、それがある理想を實現してゐるといふ處から來るのである。動物も植物でも、自己保存の本能を有つてゐるのは事實である。しかし其本能其者が直ちに權利の根據となるものでない。吾々人生が自然權利としての生存權を有つてゐるといふのは、その肉體的生存を通じて、或る理想を實現するといふ處に存するのである。然らば其理想は如何なるものであるか。前に述べた通り、理想は一時に其全姿を表はすものでなく、人類の永久的な歷史を通して漸次にその姿を表して來るのものであるから、直ちにこれを何であると說き難い。或は之を人類一般の幸福であるといふ人もある。しかし幸福といふ語は間に多義な語であるから、意味の如何によつては幸福でも可いかも知れぬが、しかし普通に解釋されてゐる意味ならば理想は幸福でない。それよりも理想は文化の創造であるといつた方が適當であらう。個人として國民として特殊の意義ある文化を創造するのが理想である。此理想は絶大な力を有つて一切のものを生々存續せしめてゐるものであるが、人間以外のものはそれを自覺してゐない、唯人間のみが自覺してゐる。中庸に誠は天の道であつて之を誠にするのは人間であるといつてゐるは全く此主義に外ならない。かく人間は理想によつて促進されてゐることを自覺してゐるから、そこで人間にはゾルレンがある。それ故に生存といふことも徹底的に考察すると、權利であるよりも、理想實現に對する義務であるといへる。ヲルフが生存權は其根底をいへば權利でなくして『文化義務』といつてゐるのは、(社會主義六一四頁)、詮此意味であつて、實に要領を得たものである。

　生存權は此の如くにして其意味を有つてゐるものであるから、所有權が絶對不動なものでないやうにやはり絶對不動なものでない。其國民、其社會、其歷史、其事情等種々の條件に制約されて、色々に其姿を表はすものと見做なければならぬ。今日の孤兒院、貧民院、養老院、失業者保護等は、生存權の今日に表はされた姿である。

(大正八、一二、三稿了)

人間の義務と其他

武者小路實篤

一

人間には實にいろ〳〵ある。

主觀的に云ふと、崇拜すべき人と、尊敬すべき人と、愛すべき人と、親しむべき人と、同情すべき人と、憎むべき人と、輕蔑すべき人と、卑しむべき人と、などがある。

又さうはつ切りしない多くの人がある。しかし少くも、人間の性質は同一ではない。

同一の性質の人は一人もないと云つていゝ。こゝが又面白い處ではある。しかし個人々々を見ると隨分淋しくなることもある。しかし全體として見る時、それも反つていゝのかと思ふ。ともかくいろ〳〵の人がゐる。そして何處へ行つてもその人は自分の肉體や顔をもつて歩くやうに性質ももつて歩いてゐる。動かせない、定められた性質をもつて歩いてゐる。可笑しい程甲はいつでも甲で、乙はいつでも乙だ。何を見ても、何をしても、何を云つても、甲は實に甲らしく心を動かし、乙は乙らしく心を動かす。よくもきめられた軌道を通るものだと思ふ。

甲はいつでも甲で、乙はいつでも乙だ。どんなにいゝことをしても、悪いことをしても甲は甲以外には出られず、乙

は乙以外には出られない。しかし甲は甲なりに自分を墮落させることも出來るし、自分を向上させることも出來る。乙は乙なりに自分を墮落させることも出來、向上させることも出來る。

普通一人の人は自分の内に、崇拜すべきもの、尊敬すべきもの、愛すべきもの、親しむべきもの、同情すべきもの、憐むべきもの、輕蔑すべきもの、卑しむべきものをもつてゐる。

だから同じく甲であり、乙であつても、或時は愛され、或時は嫌はれると云ふことはあり得るのである。寧ろそれが普通である。

聖人はその自分の内にあるよきものを生かすことによつて、惡しきものの生きるすきを與へない人である。惡人はその反對に惡しき自分を生かしすぎるのでよき自分を窒息させる人である。

しかし人によつて、善の傾向を多くもつ人と、惡の傾向を多くもつ人とある。

一方に祝された人があると同時に他方に呪はれた人がある。

救はれない人と云ふものがあるか。自分はあると云ひたい。

しかしそれに就てはあとで云はう。

二

自分は今便宜上人間を二つにわけやう。

地平線以上の人間と、地平線以下の人間。

多くの人は地平線以上に出ることも以下になることもある。しかし今の世は人間を地平線以上に出ることを不可能にする傾向をもつてゐる。社會問題は其處に根をはつてのみ、本當に生きるのである。その他に根をはつた社會問題は、人々の我利心をあほる傾きをもつてゐて、人間を内から腐敗させる傾をもつ。かくては人間はいつまでも暴力と野心家

の奴隷からのがれることは出來ない。

地平線以下の人間と云ふのは、獨立してゐない人をさす、獨立出來ない人をさす、その獨立出來ない理由にもいろ〳〵ある。しかしともかく獨立せず、何かの制裁、壓迫のもとに生きてゐる。自發的に働かない人、自分を制裁することの出來ない人、それは地平線以下の人間である。人間の尊嚴を傷つけられて、或は自ら傷つけて生きてゐる人を云ふのである。その內には境遇さへ改善されゝば獨立出來る多くの人がふくまれてゐると同時に、境遇がいくらよくなつても獨立出來ない多くの人をふくんでゐる。

之等の人を二つにわけると、獨立出來る素質をもつてゐながら、獨立出來ない人と、獨立出來る素質を少し切りもつてゐない人とある。社會はこの獨立性のある人に獨立を與へ、獨立性の少ないものに、最も平和で氣持ちよき獎勵と最も少なき制裁をもつて獨立させるやうにつとめることを目的にすべきである。

自分は今獨立する資格を內に殆んどもつてゐない人に就て云はう。

三

それは自制のない人、努力心の足りない人、一言で云へば意志の弱い怠惰な人間と、利己心の强い狡猾な人間とである。

どつちにしてもすきまがあつたら不當に樂をしやう、樂をして甘い汁を吸はうと云ふ人間である。

その內に消極的なのと、積極的のとある。

前者はお人よしだが呑氣もので、怠けもので、物臭で、內から力がわき上らない生理的にエネルギーの足りない人間だ。そして自分が生きるのに必要な勞働もやむを得ない限りはづるけたい人間だ。積極的にするけるのではないが、奮發心がないので、ついずるけるのだ。それにもいろ〳〵ある、安逸を求めたり、快樂を求めたり、遊惰心が强すぎる爲

たさうなつたのも、生得にエネルギーの弱い人もある。かゝる人は理想的な世の中のくることを恐れる人である。かゝる人は生きるのも面倒になつてゐる人である。この世に生きるには不適當な人である。尤もその内にも同情すべきのと、憎むべきのがある。許すべきのと、制裁すべきのとある。しかしともかく地平線以下の人間である、積極的に害はしないでも周圍の空氣を怠惰にし、働くものに不平を起させる傾があるから、困りものである。かゝる人は輕蔑されるのは仕方がないことである。

もし輕蔑されるのがいやならば、勇猛心をたへず起して、自分の習慣をかへなければならない。

四

以上の種類の人は猾いと云ふよりも、意氣地なしである。しかしこゝに體力はあり、活動的であり、拔目もなく、たへず何かをくわだてゝゐる人がある。普通の人よりもなほ働く力をもつてゐる、しかしその働く目的が自己の利益にのみ限られ、少しでも損はしない、自分にとつて無利益なことはしないと云ふ人がある。その爲には他人の迷惑はかまわない、寧ろ他人を不幸にする方が氣持がいゝと云ふ人さへある。嘘も平氣でつく。少しでも骨折損のことはしない。自分の義務と云ふことはまるで考へない。たゞ得すればいゝ。得にならないことには身體を動かすのは損だと思ふ。かゝる人は世界中がどうなつても自分さへ得すればいゝ。兄弟、隣人のことは考へない。その爲に他人の獨立をさまたげ、他人を利用しやうとし、中傷をさけず、利益の爲には相手をいくらでもおだて、又惡口する。一言で云ふと平和を好む人間ではない。事を好む人間で、その爲に得をしさへすればいゝ。善惡の差別は問題にはならない、たゞ利害だけが問題になる。ずるけて損のないことはずるけなければ損だと思ひ、正不正と云ふものを空なものと思ひ、ずるいことをすることを利口と心得て少しも恥ぢない。そしてずるくない正直者を馬鹿にする。かゝる人にあつてはすべての善行は僞善であつて、正直はたゞ看板であつてそれ以上の正直は馬鹿正直である。つぶしのきかない臆病者である。すべての人の

行爲を利己心だけで解釋して恥ぢない。

かゝる人間は危險な人間であつて、制裁される必要のある人間である。現在の社會ではかゝる人間が幅をきかしてゐるかも知れない。しかしこのことは現在の社會の缺陷を示してゐることになる、殊に現在の社會がさう云ふ人間の出ることを間接に奬勵してゐるとしたならばそれは現在の社會の不名譽である。

正不正が空であつて、利害關係だけが實際であるとしたならば、かゝる人間が自づと生れるのは當然である。人間の内にある、かゝる芽を現在の社會が一番生長させるのに適してゐるとしたらそれは現在の社會の恥である。

五

まだいろ〳〵の人がゐるであらう。しかしともかく自分が人間として生きる爲にしなければならない勞働を自らしやうとしない。やむを得ない時はしても、出來るだけ逃れやうとするもの、獨立力がなく、自制心がなく、自己の本務を内から果さうとしないもの、どんな境遇にゐても、人類にたいする個人の務がはつ切りしても果さうとしないもの、暴力か利益に支配されない限り働かうとしないもの、或は所謂竹筒ポーの蛇のやうに境遇に強いられなければ眞直になれないもの、他人に支配され制裁されるやうに生れついたもの、そしてそれをなほさうと努力しないもの、又自覺しないもの、或は努力しても自覺してもその境から自分を脱し切れぬもの、それは地平線以下の人間である。意氣地のないものは憫護され、ずるい者は卑しめられ、或は憎まれる。

六

しかしこゝにかう云ふ人がある。

それは人間の本務を自覺しないもの、自覺しても境遇に強いられて、自覺通りに生きることの出來ないもの。もしさ

う云ふ人が本務を自覺し、境遇がそれを許してくれる時には、その自覺通りに自己を生かす力を内にもつてゐる人かゝる人は一人立ちになれる力を内にもちながら、他の原因でその力を十分生かせず、心に何となく不滿を感じてゐる。かゝる人は愛すべき人であるが、尊敬すべき人ではない。境遇に打ち克つだけの力をもつてゐない。勿論その境遇にもいろ〳〵ある。わりに簡單にうちかてる境遇もあれば、一通りの力ではやぶれない境遇もある。その境遇をやぶることの出來ないのに又克己心の足りない場合もあり、又他人に迷惑を及ぼすことを恐れる場合もある。

又本務の自覺の强弱によつて、本氣さがちがい、その本氣さの强弱によつて又境遇にたいする力の强弱も生ずる。

自分はこゝに個人の本務に就て書いて見たい。

七

個人の本務と云ふのは個人の人類の一員として果すべき務を云ふのである。個人は國家の一員でもあり、家庭の一員でもありうる。しかし我々はすでに人類の協力を考へずに個人の存在を考へるわけにはゆかない。我等は國民だけの恩を受けてゐるのでない。人類の恩を受けてゐる。文明が日本だけだつたら、我々は今なほチョンマゲを結つて、將軍を戴いて歩いてゐたであらう。そして電氣や、蒸氣、その他のものを知らずにゐたらう。之等のことは云ふ迄もないことであるが、よく反省して見れば、我等はもう世界の波動に動かされてゐる。決して一國民としてのみ存在してゐるのではない。日本以外の國の人間が向上すれば日本も助かり、墮落すれば日本も困るのである。そのやうに日本人のよくなり、わるくなることは人類にとつて無關心ではなく、人類の文明、思想のレベル以上に立たない限り、世界の侮辱を逃れることは出來ない。制裁も逃れることは出來ない。そのかはり日本の文明や、思想、生活が他國の文明、思想、生活より段ちがいに高くなれば、世界を支配することも出來る。

ともかく我々はもう世界人として生きてゐる、世界の思想、生活、文明と直接交渉して生きてゐる。今に國と國の戰爭

も併つての內亂のやうに、今或る國をあらしてゐる內亂と同一に見られる時がくるであらう。

このことはものゝ勢ひを知るものゝ疑ふことの出來ない事實である。之に最後の反抗をなすものはやがて征服される運命をもつてゐる。

ともかく我々にとつて世界はさう廣くはなくなつたのである。世界の出來事は一日にして世界につたはり、世界の人心をあげさげし、或は恐怖さし、或は歡喜させ、そして深く反省させる。かゝることは眞面目になつて云ふにしては餘りに露骨なわかり切つた事實である。今度の戰爭はこの事實をなほはつ切りしらせてくれた。又知らせてくれつゝある。今の勢ひでゆけばこの勢ひは停止する處を知らない。保守的の人は勿論、いゝ加減の進歩的の人すら眉をひそめる時である。世界は世界を肩に荷つてゐると思つてゐる人を逐ひこして進んでゐるのである。

レニン、トロツキーの類ひさへ、過去の夢になる。人間はもつと人間であつて、勞働者、資本家の問題はやがて時代遲れの問題になつて、各自が人間として立つべき時が來、敵だと思つたのが、實は同じ目的に向つて走りつゝある兄弟で、手をとりあつてよろこぶ時が來ないとは云へぬ、世界中の若き人々の頭にはすでにその用意が出來てゐる。

人々が人類の一員として立つ時、其處に新しい、始めて動かぬ文明がなりたつのだ。舊き塔が倒れつゝある時、新しき塔は悠々と立てられつゝある。若き人の心の內に。

自分は說明を要しない程自明なことを云ふ。

「自分の衣食住、及びその他自分達が受けてゐる文明の恩澤を、當然と心得るものは、その勞働の分け前を何等かの形で、荷はなければ我慢の出來ない時は來たのだ。それを自ら荷なはぬものは、地平線以下の人間である」

八

こゝに於て職業が問題になる。

人類の存在及び文明に役立たぬ仕事に從事するものは恥ぢねばならぬ時が來たのだ。

九

個人のみの利益、便利、快樂に從事することは人間として恥づべき時が來たのである。以前でも恥づべき仕事にはちがいなかつた。しかし自覺をもつて恥づべき時が來たのである。自尊心の強き男や女は、職業の撰擇をする時、利益は少なくもより人間に役に立つ貴き仕事を撰擇すべきである。そしてその撰擇の仕方にその人の價値が露骨に顯はれるのである。

しかしくり返し云ふが今の時代では人間の爲に最も役立つ仕事と云ふものが、何かと云ふことをはつ切り知ることは困難なことである。人間に必要な仕事が、個人の利益とむすびつき、神佛と人との間に立つべき僧侶が、佛を賣つてくらしてゐるやうに、人類と個人の間に厄介な人間が存在して、利益を横取りしやうとしてゐる。かくて人類と多數の個人は餓えなければならない。この程度に於て勞働者と資本家の問題は解決しなければならない。それは人類の名によつてすべきである、勞働者の利己心をあほつてすべき仕事ではない。人間が人間らしくなりたい爲の運動である。人間が安逸や快樂の奴隷を羨やましがつてする仕事ではない。このことを眞に知るものには敵はない。兄弟が人間になりたがることに反對することは誰も出來ないからだ。

勞働時間をへらすのも、賃銀をあげるのも、人間となりたい爲の運動としてのみ權威がある。

だからこの運動の目的は萬人を人間にする點にある。資本家も、今では人間ではない、少くとも恥づべき人間である。勞働者は又憐な人間である。資本家を恥づべき境遇から脫しさせ、勞働者を憐な境遇から脫するやうにするのが今の人間の務めである。このことをよく知るとが必要である。過去の因果を脫して人間として靑天白日の身になるのが、今の人間の務めである。してこの仕事を亂用するものはこの仕事をさまたげるものと等しく制裁されるべきである。そして

その制裁は思ひやりのゆきわたるものでなければならない。同じ境遇にゐればさうなるのが無理がないと思へるものに苛酷にすると云ふことは心ある人の心をいためることである。我々は心ある人を味方にする運動をのみ正當のものと認める。

十

話はそれたやうであるが、かくて自分は安心して話を前にもどす。

人間は自分の性格を持つて廻つてゐることは既に云つた。しかし同時に肉體を有する人間は境遇に可なりひどく支配されることは云ふ迄もないことである。それに打ち克つ強い人もあるが、それは稀である。そしてかゝる強い人でも境遇の影響を全々受けないと云ふことは考へられない。正しきことをするのに適當な境遇にゐるものは仕合せだ。しかし今時にさう云ふ人は少ない。多くの人は今の社會に支配され、又社會に適應して生きて行くのに骨折り、少しでも金のとれる餘地があると人間は其處にもぐり込む、それでも金をとる餘地を見出すのに骨折つて思ふやうに見出せぬ者が多い、そして餓や借金はその人をどんな窮地にでも逐ひやり、正不正、職業の是非を撰む贅澤を許さない。ともかく食はねばならず、着ねばならず、住まねばならない。

かくて多くの人は自分の良心を賣り、自己を賣つて生きなければならない。人間としてしなければならない義務なぞと云ふ言葉は空の空の言葉になる。子供の教育は勿論、自己の教育も出來ない。その必要さへ感じない、感じるのは生活の壓迫である。そしてそれが骨の髄までしみこんで、生活に少しの餘裕が出來てもそれで自己の生活を改造する要求はしないで、たゞ金をためたり、酒をのんだり、快樂を逐つたりする。

かゝる人は多い。しかしその内に境遇さへよければ立派に一本立ちになれる人も多數にかくされてゐる。彼等の或者は強い意志をもつてゐる。強い身體ももつてゐる。正を愛することが強く、不正を嫌ふことも強い。根氣も強く、忍耐もあり、頭もよく働く。そして怠け者ではない。たゞ自分のしてゐることが腑におちないのである。何かこの世に不正

があることを感じても、自分でそれから超越することは出來ず、義俠心も強く、何か不平をもつて、常に敵を持つてゐるやうに思ひ、それにぶつかることを考へてゐる。社會主義者の中堅はかゝる人によつてなりたつてゐる。堅實な人である、かゝる人がゐなければ社會主義は空になる。憎惡や嫉妬だけでは主義は行はれない。正義を愛することの強いものがゐなければ、そして犧牲の精神を何處かでもつ人が居なければ。そしてかゝる人は社會主義や、勞働にとつてのみ大事な人ではなく、人類にとつて又大事な人である。彼は人間の文明の爲に基礎となる柱の一つである。讃美すべき「人間の爲の勞働者」である。他日理想の世が來た時、賴しき人として尊敬されるべき人である。しかしかゝる人は社會主義者許りにゐるのではない。勞働者許りにゐるのではない。いたる處に、軍人にも政治家にも、商人にも、教員にも……いたる處にゐる。三十人に一人づゝ、或は百人に一人づゝ位の割合に、（或は千人に一人、萬人に一人と云ふ人もゐるだらうが）全人類の内に甘く配置されてそれでこの世はまちがつたなりにもたもつてゆけるのである。たゞかゝる人の肩の上にのつてゐるものが正しくない時に、彼等の貴き實は泥土の内に埋沒して、人類の運命を助けるかはりにさまたげ、人類の歩く足もとに無雜作にふみにぢられるのである。

之はその人達の賢さが足りないことを示すとしても、過半境遇のせいにしてもまちがいはない。彼等は正しきものを戴き、その爲に働く時、天下に敵なしである。常にその中堅にゐて、あらはれない處で確固たる決心のもとに働き、動かない。そして他人の働きの足りないところを心よくおぎなひ、自分の爲には心をつかはず、他人の爲にのみ勇んで働きたがる、男らしい、たのもしい人間である。

十一

他に又かう云ふ人がある。

その人は意志や、身體のエネルギーでは前者におとるけれども、熱情では彼等にまけず、平和を愛し、正義を愛する

こと強く、時に過をおかしても、すぐ本道に歸り、或は前者にまさり、たえず何かを考へ、自分達の生活の正不正を吟味し、正しきことをなす爲に骨折る。しかし境遇が許さぬ爲に苦しみ、どうかしてその境遇から脱し、心にせめられない生活に入らうと苦心する人間である。その爲には現在の境遇よりもつと苦しく、もつと利益が少なくも、さう云ふことに心をいためず、より正しき生活に入らうと常に心がけてゐる人間である。そして何が正しく、何が不正であるかに敏感な人である。

そして他人によつてだまされず、利慾によつていさなはれない。たゞ意志が弱かつたり、境遇がわるすぎたりする爲に、心ならず正しくない仕事をつゞけてゐる人々である。

かゝる人は用心深く、まちがいはない。前者はやゝもすると不正なものに動かされ易い、しかしかゝる人は不正なものにはだまされない、そのかはり躊躇しやすい。前の人とこの種の人とが手をたずさへて立ち、互の缺點をおぎなひあへば、思慮深かく、剛氣な一團が出來る。しかし彼等はまだ、散らばり、無能力者として權力と金の支配のもとに、自らの一部を殺して生きてゐる。しかも一番貴きものを殺して生きてゐる。

人類に仕へることが出來る貴き實を與へられてゐながら、それを金に賣つて生きてゐる。彼等はまだ地平線以上の人間とは云へない。だが境遇が許せば彼等は共に人類に役立つ素質をもつてゐるものである。

十二

その他こゝにある人々がゐる。

それは學者、藝術家、宗教家、なぞの類である。もつとも今の世では之等の人は生活難の爲にある制裁をうけてゐる。その制裁は決して公平ではないが、ともかくあまりにひどいものは、何かの奴隷としては存在出來るが、一本立ちとしては存在を許されてゐない。すぐれた者がさう云ふ目に逢ふことも稀にはある。實際すぐれた人は稀でもある。すぐれた人

は專門的の仕事をする資格をもつてゐる。眞の學者は學問さへしてくれゝばそれで結構である。しかし眞の學者と、僞の學者とを區別するのは甚だ困難である。多くの人には反つて俗學者が、學者と通用し、眞の學者は反つて學者になる資格のないもの〻やうに思はれる。藝術家に就ても、宗教家に就ても同じやうなことが云へる、乃ち地平線以下の學者や、藝術家や、宗教家が、地平線以上として通用し、地平線以上の學者達が地平線以下として切り通用しないことは今は勿論今後もあり得るのである。しかし地平線以下のものは地平線以下であつて、地平線以上のものは以上のものである。千里の馬はたへずあるが伯樂は耐えずゐないと云ふ言葉は眞であつても、千里の馬は千里の馬で、百里の馬は百里の馬である。萬人の見る處、顯はれないと云ふ方が無理である。よし見とめられないにしても彼はいつかは幾重にもとりかこまれた雲を突切つて輝き出るにちがいない。

地平線以下の學者達も、ある點迄達したものは何かの役に立つ、たゞ萬人からその爲に尊敬されないこと〻、自分の仕事をする時間を十分にもつことが出來ないと云ふことに不平が云へないだけである。云つても通用しないだけである。

よき素質をもつものが、何等かの境遇でその素質を十分發輝されないのは惜しい。しかし發輝しても大したことのないものは境遇をのゝしるわけにはゆかない。それは人間の誇りになる仕事をしてゐるのではないからである。

すべての仕事が貴いのではない。その仕事を通してその人間の内にあるすぐれたものが生きる時に貴いのだ。どんな仕事でもその内に人間の心の優美とか、壯美とか、人並はづれて忠實とか云ふものが生きる時に。その人も、その仕事も貴くなるのである。勿論、不名譽な仕事と云ふものがある。例へば淫賣婦の如き、しかしその者の内にも何かよきものをもつものが、それをくさらさずに何處かにもちこたへてゐれば、いつかは地平線以上の人間にもなれる。マリヤ・マグダレナはその著しき例である。日本の地獄太夫の如きも人間の色慾の空を示す爲に、人並以上の働きをすることも出來た。しかし不名譽な仕事は不名譽な仕事である。たゞそれを責めることが威張つて出來ないのは今の社會が今の社會であるからである。自分を顧みて恥しくない人が稀であるからである。しかし金で賣つてはならないものがある。それ

は眞理と、愛である。

金の爲に僞つてはならない。金の爲に愛しないものを愛してはいけない。

學者や、藝術家や、宗教家は、金以上のものを持たねばならない。彼は自己を持たねばならない。時勢や、民衆に媚びてはならない。又内に強い要求をもたねばならない。殆んど彼等の眞價はその要求の如何にかゝはつてゐると云ふことが出來る。求めるものは、求め方さへ眞ならば與へられる。その熱心に正比例して與へられる。この要求の淺薄なもの、正しきものを少し切りもたぬもの、それ等は地平線以下の人間である。要するに、人類は餘り多くの學者、藝術家、宗教家は要求しない。

實行家は多い程いゝ。しかし頭の人間はさう多い必要はない。實質だけが問題になる。頭の非常にすぐれた人間は世界にさう澤山ゐる必要はない。よき本が餘り出られることを人類はよろこんではしない。鐵や石炭は多くなければならない。しかし金や、金剛石は少ないがいゝ。頭許りの人間、精神許りの人間が多く出ると云ふことは、人間の今の壽命、今の記憶力ではあまり必要がない許りではなく、困りものである。

學者、藝術家、宗教家にあまり秀れたものが出すぎることは人類はよろこばないのだ。そしてあまりすぐれないものが出た場合、人類は多く逆待する。之が人間の淺はかな手にあふ爲に稀に出る天才ある人間すら、文字通り餓え死にさせられることとすらある。

要するに、學者、藝術家、宗教家は撰ばれた少數の人のみがする仕事で、何かの理由で他の人がまぎれこむ時、侮辱と饑に迫害されることはやむを得ないことである。

十三

自分はごく簡單に、しかも幾分の不得要領な處さへ加味して、地平線以下の人間とは何をさすかを示した。大概は既

に感づかれたことゝ思ふ。

我等は、人類の一員で、人類がこの世に存在し、自己の文明を築き上げ、そして自己の運命を希望と幸福の方に向つて進ましてゆくのを助けてゆかねばならぬ者である。それを助ける仕事の分けまいのいくらかを分擔しなければならぬものである。

それは自己に許された少しの範圍内でいゝ。しかしその範圍内においては他物に制裁されず、自ら進んでよろこんで、その仕事の爲に努力しなければならぬ。そしてその努力をすることを本務と心得、それを果すことが出來ることに傲りと、感謝を感じなければならぬ。かくて自分は一本立の人間であり、誰の前にも恥ぢる必要のない人間であることをよろこばなければならない。

他人に制裁される必要なく、その他暴力、金錢、快樂、器械の支配を受けることなく、自ら進んでなすべきことを男らしく、或は女らしく果してゆく、それの出來るものが地平線上に立つ人間である。彼の足は他人の上にも他物の上にも立つてゐない、人類の内に足をおろし、自分の足の上に立つてゐる。かくて始めて獨立せる人間であり、自由をたのしめる人間である。他人に制裁される必要はない。自分で自分を支配すべきことは支配する。

苦しくとも自らなすべきものは自らなす。日常の勇士である。彼は社會の柱のみではなく、人類の柱である。人類のよい處である。健全な人間である。確固たる人間である。正しきものに頭はさげるが、利慾の前には頭をさげない、尊敬すべきものには頭はさげるが、暴力の前には頭をさげない。彼は辛捧強く、忍耐づよく、一氣にことが仕上がらないことを知つてゐる。しかし自分の努力を惜まない。我等が要求するのはかゝる人である。

自分達は罪人の友でもなく、病人の友でもない。悔い改めた罪人は我等の尊敬する友であり、心の清く、病を耐えるものは我等の尊敬する友ではあるが、我等は健全なるものゝ友である。男の内の男、女の内の女の友である。人類に奉仕する、人間の義務を勇ましく果す、人間の友である。人類の柱となるべきものゝ友である。杉の林の如く、自己の根

に立つて、天に向ひ、他人を犯さぬものゝ友である。人間が他人を犯さずに自己を生かせるやうにつくられてゐることとは讃美すべきである。

十四

自分はやつと本題に入ることが出來た。

今の世の立場から人間を見ず、人間の能力、人間の精神、人間の要求から、人間を見る。

其處に最も人間らしい人間を見る。人間にはいろ〳〵の性質がある。たしかに呪はれた性質もあれば、祝福された性質もある。自己の内を見ても、人類のあしと見る性質とよしと見る性質がある。呪はれた根性と、祝福された精神がある。人類の行進に歩調をそろへて進むのに不適當な性質と、適當な性質とある。日向で生長する性質と、日かげでなければ生長しない性質とがある。自分でそれをよく見わけねばならない。

そして正しきものには勇敢で、不正なことには臆病でなければならない。だが日陰の性質をもつてゐても、それにこだわる必要はない。それにこだわりすぎるとその人間は日陰ものになる。暗をはきのけるのは靜では駄目で、光を内にとほさなければならないと云ふのは本當である。我々は罪を犯し、過失を行なうとも、それを知られるのを恐れる爲に更に罪を重ね、過ちを再びするのはよくない。かくて罪は生長し、過ちは生長する。どんな罪も、どんな過ちも再びしない時には許される。再びしても三度しないものは許される。三度しても四度しないものは救はれる。かく百三十度過ちをくり返しても、其處でふみとゞまれるものには祝福がある。しかし其處にこだわるな。その罪ほろぼしは正しきことをより辛棒づよくすゝんでなすことによつて得られ、他人の罪を許すことによつて得られる。

このことは本當である。

神は寛大すぎる、だが人よつけ上るな、つけ上る時、人はやられるものだ。

十五

すべて革命は人間のつけ上る處からくる。つんではならないものを、いやが上につみ上げる處からくる。罪の罪たる處は人間をつけ上らさなければおかない處にある。資本家と勞働者の問題を、資本家がつけ上りすぎる處からくる。一つ一つまちがつてつんだものを用心深く、おろすものは救はれるかも知れないが、それはそのまゝにして、新に、しつかりしたものを人類の命に從つてつみ重ねてゆくものはなほ救はれる。だがその家を築くものが、少しでもはみ出し、つけ上つたならば元の默阿彌である。大事な時はたへずくる。油斷してならない時はたへず來る。だが人類の命に從ふものは確信のもとに、おちついて仕事をしてゆくことが出來る。

しかし自分のから云ふ言葉は多くの人にはわかるまい。自分は話を前にもどす。

十六

人間を二つに大別することは誰でもがやることである。惡人と善人、小人と君子、俗人と覺つた者、信仰うすきものと信者、そして自分は今、それを地平線以下の人間と、以上の人間と云ふ區別をつけた。

自分達が「新しき村」の仕事を始めたのも、地平線以下にたてる自己を地平線の上にたゝせたく思つたからである。人間にとつて地平線は、簡單に云へば衣食住の心配をなくすことである。誰もが必要な衣食住を無代にすることである。その爲に先ず働くことである。兄弟姉妹が助けあつて働くことによつて、衣食住の心配をなくすことである。換言すると衣食住の心配なくも自ら進んで働くことである。我等の內の最も無能力者のものも、ともかく一定の時間兄弟姉妹の爲に働くことによつて衣食住の心配をせず、一定の衣食住は與へられる。その勞働を自ら進んでよろこんでしく、他人に迷惑を與へず、他人に不快を與へず、他人に制裁されたりせずに果すものが、地平線に達した人間だと云ふに過

ずない。

しかしこゝで大事なのは病氣の他は、自ら義務を進んで果し、その義務は自己と同時に兄弟、殊に子供、年より、病人の分をも働くことを意味してゐることである。

この義務を果すことに不忠實であり、或は喜びを感じないものは、獨立した人間とは云へないのである。そしてその義務を忠實に果すかはりに、もつとずるい方法を考へ、樂しく金をもうけやうとしたり、自己を卑しくすることをさけないものは獨立した人間とは云へないのである。

又この義務は何處までも自己と兄弟姉妹の爲に人類の名によつて果すべきであつて、他の個人を不當に富ます爲に働くのではいけない。又他人の意志の上に立つのでもいけない。

このことをはつ切り知る時、地平線以下の人間とは何を意味するかを人は知るであらう。

そして多くの人は「なんだ」と思ふかも知れない。しかし今の社會を見、よく自己を顧みてほしい。このことは決して容易なことではないことに氣づかれるであらう。

自ら怠惰心に打ち克たなければならない。快樂をむさぼる心に打ち克たなければならない。僥倖心に打ち克たねばならない。義務を果すことに傲りを感じなければならない。このことは容易なことであるか。

殊に今の社會で他人の利慾心を増長させず、自己の利慾心を増長させない仕事を見出すことが出來るか。金錢と餌に支配されないで自ら進んでしたい正當の仕事が容易に見出されると思ふか。

それは容易なことではない。餘程しつかりした人でなければ出來ないことである。

十七

それならば人間は地平線にたつすればいゝかと云ふにさうではない。今の世でこそ地平線にたつするのは容易ではな

い。しかしそれで滿足は出來ない。我々は人間をせめて地平線上にたてたく思ふのである。地平線で滿足するのではない。地平線の上に立つてもらいたいのである。しかしともかく地平線に達したものは地平線に達したものであつて、地平線以下ではない。

十八

現代でも地平線以上に出ることは出來る。しかし地平線に立つことはむづかしい。このことが眞にわかつたものは新しき村の起つた理由の如何に深いかを知るべきはづである。

しかし自分はこゝで新しい村のことを云はうとは思はない。

ともかく現代でも地平線以上に出てゐる人はある。甚だ少ないけれども。そして彼等の足は地平線の上のには立つてゐないけれども。ともかく地平線の上に出て、人類の運命を發展さしてゐる。

或者は發明家として顯はれ、或者は學者として、藝術家として、道德家、思想家、宗教家として顯はれ、又實際家として顯はれる。

彼等の內の多くは似而非者であるが、中には眞に尊敬すべきものがある。かゝる人は暗夜の星であつて、人々により所と、希望を與へる。目標を與へ、反省させ、又人間を益々人類的にすることに働く。

かゝる人が居てくれるので人類はまがりながらにも進步してくるのである。そして理性が強くなり、人類に對する希望をますのである。

誰か正しき人間を知る時感動しないものがあるか。あればそれは病的な人間に限る。今の世には病的な人間が多いかも知れない。しかし萬人は動かされる。正義の士の動く所必ず、道づれが出來る。そは世を照らす光をもつてゐるからである。深き愛ある人は深く人を動かす。人類に役立つものを發明したものは、如何に世界の片隅にゐた所が、世界的

にならないわけにはゆかない。一つの思想でもそれが人類に役立つ思想ならばそれは世界用にたたないわけにはゆかない。

かゝる人の力は或時は非常によはいやうに見へる、だが、人の心にしみ渡つて何物以上強いのである。音樂は下らないと人が云ふ時に自分はベートベンのことを思へばいゝ。畫が下らないと人が云ふ時自分はレンブラントを思へばいゝ。レオナルド、ミケルアンゼロを思へばいゝ。道徳が下らないと云ふ時にソクラテス、孔子を思へばいゝ。人間が下らないと云ふ時に、釋迦や耶蘇を思へばいゝ。熱誠が下らないと云ふ時にトルストイを思つてもいゝ。

それ等の人はいざと云ふ時に生きてくる。

自分は最も淋しき時にミゼラブルをよんで救はれたことがある。

畑の仕事をしてゐるとよく二宮尊徳を思ひ出す。彼等は地平線以上の人間である。よく生きてくれ、働いてくれたと思ふ人である。かゝる人は實に多いのである。いたる方面にゐるのである。そしてそれはその方面の飾りとして誇りつたへられ、我等の心を清め、希望をとりもどし、勇氣を與へるのである。

辛棒強く、人類の爲に働きぬいてくれた人々よ。私はあなたの前に跪づき、よく生きぬいて下さつたと云ふ。この小弟を愛し助け玉へと云ふ。

いつの時代でも彼等を見出せられない時はない。彼等はいつの時代にも、何處かに居てくれた。社會はどんなに亂れてゐても、人心の内にある寶は亡ぼしつくされることはない、何處かに輝き出る。

彼等は自分の仕事に忠實である。その忠實さは實に驚嘆すべきである。彼等なくしては人生は考へられない。

民衆は時に彼等には忘恩であり、その時は殺しさへしかねない。しかし遂には彼等に從ふのである。

彼等は人類に仕へる。賢き、誠ある君主が臣民に仕へるやうに、彼等は萬民に仕へる。しかしその仕へるのは正義を通してゞある。神を通してゞある。彼等の利慾心におもねることはしない。個人に仕へはしない。君主に仕へた時はあ

つた。しかしそれは矢張り神を通してゞあつた。そして萬人の爲を思つてゞあつた。

しかし彼は萬人よりも、自分のたよるべきものを更に愛した人であつた。

人類を最も愛した耶蘇も、人類より神を愛した。其處からのみ、正しきものは生れるのだ。

人間を愛すると云ふのは利己心をたきつけることではない。他人の利己心をたきつけるものは他人を自己の爲に使はうと思ふものである。利己心は弱者のもつもので、本當に優れたものは容易に利己心にはうちかてるものだ。利己心の入る餘裕を彼等はもつてゐないのだ。彼等の仕事に忠實になり切る時、そんなものを入れる餘裕はないのだ。誰か、空な、無價値な、たよりにならないものと云ふことをはつ切り知つたもの丶爲に心を動かすか。利己心は優れたものにとつては兒戯にひとしい。人間を愛するのは、人間をなくて叶はぬ一つのものに結びつけることだ。人間を日向の人間にすることだ。自分の足で人類の上に立たすことだ。他人の獨立をさまたげずに自己の獨立と自由を樂しませ、自己の個性を發揮させることだ。人類の爲に自己を生かし切らすことだ。自己を生かし切る瞬間に人は神を見るものだと云ふことを知らすことだ。

獨立せるものにとつて自力の極は他力である。他力をすなほに、自己を卑屈にせずにうけ入れることが出來るものは自力の極を生かしたものだ。

嘘つき、不忠實者、利口がり、意地わる、意氣地なし、ごまかし者、慾ふか、女に甘すぎる者、或は男に溺れすぎる者、さう云ふもの丶よくないのは自力を正面に生かさずに、日かげの方へ、日かげの方へと消費するからだ。彼等は天を見るかはりに泥土を見る。彼等は太陽を讃美するかはりに、蛇の囁きをきく。彼等の友は、ミヽズ、土龍、百足虫、蛇、狐、狸、イタチ、ミヽヅクなどのたぐいだ。空とぶもの、日向者は彼等には用がない。

起てよ、そして美しきもの、輝けるもの、自由なもの、力こもれるもの、眞正直なもの、忠實なもの、忍耐强きもの、本氣なもの、誠あるもの、徳あるもの、光あるものを正面より見て讃美せよ。足は泥土になつてもそれを氣にせず、花

を美しく青空に向つて開かしめよ。

十九

惡しき境遇からは自己を脱するやうに骨折れよ。惡に向つてはなるべく時を費ることを少なくせよ。そしてそれから脱し得る機會を根氣よくさがせよ。ムダ遣ひをせずに。

二十

制裁されるべき人には制裁を、
だが制裁する必要なき者には、自由を與へよ。自由を。
地平線以下の人間には制裁も必要だが、自ら地平線以上に起たうとするものには自由を、自由を、自由を。
制裁は出來るだけ少なくし、自由を出來るだけ多くせよ。しかも悠々と存在出來る社會は讃美すべき哉。だが自由を神に任せずに、金に賣る者があつたら。それはその人の恥だ。恥だ。恥だ。
しかし今の社會は殘念ながら其處までは成長してゐないのである。

二十一

耶蘇と人類が道で出逢つた。人類が聞いた。
「お前はどんな人間をさがしてゐるのだ」
「罪人と病人」
「さうか、俺は最も健全な人間を捜してゐるのだ」

二人はわかれて、ある小さい町を隨分さがしまはつた。そしてやつと一人を見つけておちあつた。

「お前は見つけたか」。人類はきいた。

「やつと一人」

「さうか、俺もやつと一人見つけた」

しかも見よ。その一人は同一人であつた。

二十二

自分は最も健全な人間を求めてゐる。それは肉體的に云つても眞であるが、精神的に云つてなほ眞である。精神の健全な病人、尊敬すべき病人はあるが、精神のくさつた人間はいくら身體はよくも、尊敬するわけにはゆかない。天才は氣ちがいに近いかも知れぬ、しかし單なる氣狂ひではない。ある點に於て普通人よりもつと健全な、少くも發達した人間である。

最健全なる人間、人間の內の人間、男の內の男、女の內の女、かゝる人は讃美すべきである。いくら富んでゐやうが、貴族であらうが、いかに貧乏で、新平民であらうが、尊敬すべき人間で、お互に話がよくわかり、手をたづさへて仕事をすることが出來る。出來ないはづはない。世界中の健全な男女が結び立つて、力を一つにしたら世の中は彼等の思ふ通りになる。

健全な人間は過ちをおかさない人間ではない。しかし正を愛し、不正を憎む人間である。尊敬すべきものを尊敬する人間である。彼は稻をぬいて雜草をはやす人間ではない。鐵をさびにまかせて安心はしてゐない。

勞働者の名によつて立つのでは勞働者も救はれない。それは敵の存在を示す。敵を全滅させることを意味する。だが敵の手には人類の寶の一部がある。それを粉碎することはよくない。人間の名によつて立てよ。兄弟の名によつて立て

よ。即ち兄弟としてあつかつてくれ、受け入れてくれ、決して君達の敵ぢやない。さう云ふ態度で、それは正當だ。誰もそれに不服を云ふわけにはゆかない。强迫するな、一寸の蟲にも五分の魂はある。その魂を無視するのは、人類を無視することになる。人類の名によつてすべて平等に、人類の爲に働く特權を與へてあげると云へ。兩方が救はれ、兩方お握手出來る。それを信じ得る者は立て、今の時にこの信仰は大事な信仰である。兄弟が何も恐れない、憎みあはないでも話が出來る時が來つゝあるのだ。過去の人間の言葉をそのまゝ信じるな。彼等の功はむしろ彼等を越えて人類をすゝませた所にある。

中年以上の人間にはこの氣持はわかるまい。だが若き者にはこの氣持はよくわかるはづだ。

こゝに人類の生きる道がある。

二十三

すべての人が地平線の上に立つ。義務勞働はたゞでする。そのかはり衣食住はたゞで、病氣にかゝつた時や、齢とつた時は威張つて休め、自分の子供はたゞで育てることが出來る。その義務勞働は出來るだけ樂なものにし、且つ時間の短縮をする。そしてその他の餘暇で、個性を生かし、或は自分の趣味を生かす。かうなれば、貴族や、富豪も喜んで働くにちがいない。彼等の意志は尊敬していゝはづだ。人類の爲ならよろこんで勞苦すると云ふ覺悟を持つものを、あまり見くびるな。

もし競爭心が強く、征服慾の強いものがあつたら、自己を優秀な人間にすることによつてのみ勝て、人數をたのみ、暴力と金とによつて、勝たうとするものは卑屈漢である。虎の威をかる狐以上に卑屈である。恥である。一個の人間として立ちたい爲に、そして一個の人間として自己を出來るだけ立派なものにしたい爲に、またさう云ふ意志をもつ兄弟の爲に立ち上るものには祝福がある。だが憎惡と復讐と利慾心からことを起したものは同じ理由によつて復讐される。

たゞ正しきもの丶み、優者の寛大さをもつものにのみ、人類は勝利を與へる。

二十四

よく自分を省みて、自分は自分の足の上に立つてゐる人間か自分は地平線以上の人間か。自分は萬人の地平線以上の人間になることを望んでゐる人間か。

それを考へよ。そしてさもなき時は恥ぢよ。そして自分の境遇の奴隷であること、金その他に制裁されることの仕方がないことを知るべきである。そして傲りを失なうのがいやならば、自分を地平線以上の人間にするやう努力しなければならない。そしてそれが自分の力では出來ないことを知つた時、それが自分の力でも出來るやう。じり〳〵と力を養ふべきである。

二十五

衆をたのむな。たゞ正義をたのめ。人をたよるな。たゞ何か萬人の支配するものをたよれ。手を血にぬることを、さけるだけさけるものに讃美あれ。

二十六

人類は立ち上つて、かう云ふ演説をした。

「俺を愛せ、俺を信じろ、俺は兄弟姉妹の血を見ることは嫌ひだ。血を見ないでも仲よく出來る道をちやんとそなへておいてやつた。それなのにお前達は、意氣地なく、のらくらで、無精で、ずる〳〵べつたりで、俺を信ぜず、助からない處に自分を逐ひやつて、いざと云ふ時がくる迄平氣でゐる。そしていざと云ふ時がくると、始めてあはて出す、もう

おそいと云ふ時でないと目がさめない。實にはがゆい奴どもだ。氣の毒だと思ふより腹が立つ、勝手にしろと云ふ氣になる。だが俺を信じるものは安心しろ。俺の用意してある道を見出したものを信じろ。お前達はいくら見ても、聞いても信じないが、しかし大勢はどつちにしろ俺の意志通りに動くのだ。たゞ用意のわるい奴は、すなほには動けないのだ。そしてあつちにぶつかり、こつちにぶつかり、お互にはち合せをしないと我慢が出來ないのだ。だが俺の用意した道を見出した者は、實に悠々と、毎日々々、その道を切りひらいてこつ／＼歩いてゐる。その人間は少く、そして幼稚に見え、貧弱に見へるが、そしてそれ等の人間に從ふのを恥ぢとしてゐるが、彼等のゆく道に從はねばならない。俺の門に入るものは手を血みどろにすることを恥ぢざるものでなければならない。兄弟姉妹の名によつて來なければならない。そして日常の勇士であり、日々心に悔ひ改める者でなければならない。しかも俺を見つめて、自己に與へられた自力を大膽に生かすものでなければならない。そして兄弟姉妹の爲に自ら進んで額に汗をながすものでなければならない。わかつたか。わかつたら俺を信じろ」

しかしわかつた人は少ない。「わからねー」者が多い。しかし人類は笑つてゐる。氣の毒にも、いゝ氣味にも思つてゐる。

「わからねーで損するのは誰だ。損する前に目を覺すものは、祝された人間だ」

二十七

人類は進むことを知つて退くことを知らぬ者だ。だがその進みが早やすぎないやうに注意深く用意されてゐる。實に忍耐强くないものにこの世は無常すぎる。幸福は中々に來ない。「最後までわが爲に忍ぶ者は救はれる」と耶蘇も云つてゐるが、人類も云つてゐる。最後まで忍べぬ者は氣の毒なものである。又僥倖と幸福とをとりちがへて謹みを忘れるものも危險である。臆病はよくない。勇氣と希望をもつて人類の爲を根本的に考へて終るまで働くものは救はれる。三年

や四年の辛棒は辛棒とは云へない。ならぬ勘忍するが勘忍と云ふ言葉は、いゝ言葉である勇氣を失なひ切らぬ者、たほれても、たほれてもなほ起き上らうとするもの、そしてその目指す處が神のよしと見玉ふ處ならばその人はまちがいない。

二十八

人間は人間である。まちがいも、賤しい處も持つてゐる。自分を省みても、自分の賤しい方面だけを見られたら人々は顔を背けるだらう。だが同時に他面を見れば人々は感泣しなければならないだらう。賤しいのも人間である。優しいのも人間である。氣高いのも人間である。人間の内に、百の内九十九まで取り柄のない人間でも、たつた一つの取り柄をもつてゐるものは救はれる。その人は愛される。又尊敬される資格をもつてゐる。たゞその一つを窒息させなければそれでいゝ。他のものをのさばらさず、その一つのものを生かす時にその人は救はれる。

鑛石の内、千分の一、金をふくむものは捨てられはしない。千分の内九百九十九、取り柄のないものをもつて居やうが、たつた一つ有用なものをもつてゐる故にその石は捨てられはしない。人間の一生もさうだ。かみくだかれて、何か人類に役立つものをもつてゐるものは、その故をもつて人類からすてられはしない。人々はたゞその人のもつ有用なもので評價されるのが正當である。尤も有毒なものは、制裁されなければならないが。人を見る。その人はいろ〳〵のものを有つてゐる。しかしその内に動かせないよきものを持つものは愛される。其の故をもつて信用される。

自分の信用の出來ない人間は虛僞なもの切り何れももつてゐない人間だ。融通がきゝすぎて、其處から面白味が出ず臭味許りが出る人間だ。それは一寸救はれない。

人間に謎のない人間と、ある人間とある。謎のない人間は居るべき處にいつもゐる人である。安心な人である。深味はたりないが、愛すべく、信用すべき人間である。謎のある人間に二つある。一つは美しき鍵をもつてゆかないと開かない謎で、他はキタナイ鍵をもつてゆかないと開くことの出來ない鍵をもつ人間だ。前者は尊敬すべき人間だが、後者は氣味のわるい人間である。この二つをとりちがへないものは賢者である。

二十九

人間と人間の間の問題を、お互の人間の性質をぬきにして考へることは出來ない。

信用する者の云ふ言葉と、信用出來ないもの丶云ふ言葉とに同一價値を與へることは出來ない。同じことを云はれても、ある人から出る時にはその言葉を感謝して聞くことが出來ても、ある人に云はれると「甘く見てゐる、だまされはしないぞ」と云ふ氣になる。問題が起るのは後者の場合である。

本當に誠意が通じれば無理を云はない同士ならば話は早くつくのだ。かけひきや、うまくいつたら少しでも得してやらうと云ふので話がむづかしくなるのだ。

信じられる資格のある者の一言は、信じることの出來ない者の百萬言よりも力がある。又事實力があるのだ。其處が面白いのだ。嘘とか、だますとか云ふことは事を面倒にし、もつとひどく人間にたいする信仰をなくす。甚だよくないことである。信用のおける人間。

それは實に價値のある人間だ。

三十

「自分は本當の人間を求めてゐるものだ」

「それには先づ自分を本當の人間におしなさい」

「本當の人間でないものがどうして本當の人間を求めることが出來やう。たゞ自分にはまだ弱點がある。死が恐ろしく、女にもろいと云ふ點だ。しかしいくら死が恐ろしく、女に誘惑されやすいと云つて自分は信用のおけない人間にはなれない」

「君を女が誘惑するつて」

「さうだ。誘惑される素質がないことは感謝すべきである」

三十一

自分はわき道に入り過ぎたかも知れない。

ともかく手のとゞく處に果實がなるとついとりたくなる。しかしこの感想（之は小説ではない。この前の「變な原稿」は少くも小説以外のものではない）の目的を忘れてはしない。

自分は人間が他物の奴隷になることに承知が出來ないのである。人間はたゞ自分の内の精神に支配されるべきであることを主張したいのである。人類には仕へるが、生命の神には仕へるが、自己を生かす爲には働くが、それも自分がよしと思へることに限ることを主張するものだ。しかしそれを主張するには自らそれだけの資格をつくらなければならないことを知つてゐる。資格のないものが資格のないことを云ふのは虫のよすぎる人間である。我等は自力を生かさずには他力をまたない。自己を地平線以上の人間にするやうに骨折らずに、地平線以上の人間が得る特權だけを得やうとは思はない。我々は正當のものを要求しなければならぬ。そして要求するだけの資格をつくらねばならぬ。

自分を他人に嫌はれるやうにしておきながら他人に自分を愛せとは云へない。

信用をおとすやうなことをしておいて信用せよ、とは云へない。

嘘ついて本當にせよとは云へない。

自分が働かずに働いたものとして待遇せよとは云へない。

よきことをせずに、よき人間と思へとは云へない。

我等は虫のよき人間になる位いなら、人間に生れなかつた方が幸である。

人生は虫のいゝ人間には至つて都合わるく出來てゐるのだ。このことは感謝すべきである。

三十二

自分は又人間が生活の奴隷になることを承知出來ない人間だ。人間は生なければならない、生活する爲に一生をすてるのは我慢が出來ない。食ふ爲に生きるだけでは我慢が出來ない。生きなければならない。

生きるとは自己の内に生きてゐる精神に支配されることだ。

自己の内にあるものを外に顯はすことだ。自發的に行動をとることだ。

自己の内にあるものゝ命令をきくことだ。精神を生かすことである。自己の精神を生かすのに邪魔になるものに打ちかつことだ。それに打ち克つ爲に我々は先づ協力しなければならぬ。そして生活を征服しなければならぬ。しかも餘力を有さねばならぬ。

適當に働く時は、否適當に過度に働く時は、そしてそれがある度をこさない時は、精神がその爲に反つて強く生きる時がある。しかしあまり過度に働くことはよくない。その時精神は肉體の内にしなびてしまう。熱病患者のやうに頭は自由を失なひ自制を失なひ、不愉快な妄想がくり返りくり返りする。そして人間が、馬に近づく、もつと殺伐な無神經なものになる。自己の生命を安賣りしたくなる。健全な思想はあまりに過度の勞働からは生れない。そして愉しみ、うるおいはなくなる。人生に執着はなくなり、慘酷なことを好むやうになる。氣質が荒くなる。

自分は過度勞働、それも強いられたる過度勞働に反對する。それは決して人間を人間にしない。その點を殊によく考へるべきである。それは人類の爲、人間の爲に恐ろしいことである。

剛健なものはそれにある點まで打ちかてるであらう。だがそれは例外の人である。百人に一人、千人に一人と云ふ人である。そんな人を標準にして他の人の內の人生を殺すわけにはゆかない。

恐ろしいことはこゝから生れる。

生命を愛する餘力は誰もが持つべきである。萬人の精神が健全に生きられるやう、誰もが骨折るべきである。勞働時間の八時間制は人間を人間にする爲に必要である。寧ろ長すぎても短かすぎはしない。そして利慾の爲にあまりに過度に働きすぎるものには、むしろ制裁を加ふべきである。それは自己の內の人生を輕視する人間として。

この問題は經濟以上の問題であることを人々は知らねばならない。

三十三

人間が人間の美德を讃美出來ないのは大なる過りである。それは人間が人間になりきれないことを示す。さもなければその人間のもつてゐる主義の偏狹を示す。それ以上その人間のある主義にはまりこんだお弟子根性の强い小人を示す。或は利己心のからがやぶり切れないことを示す。

このことは嘗つての國家主義者が、敵國人を人間と見ないやうに骨折つた事實が示し、今はまた階級戰爭を起さうと骨折つてゐる社會主義者の末者が示してゐる。

しかし人間は人間だ。人間になり切れた曉は、人間の美德は彼等を春の日の如く照し、彼等の心をあたゝめるであらう。

彼等の偉大なる先驅者は人間としての美德を十分に與へてゐたものではあつた。そしてもつとずつと寛大ではあつた。

よし彼等の主義は十全なものでなかつたにしろ、それは時機に適してゐたものだ。

しかし今はもう時が過ぎて、新しきものが起りかけてゐる。彼等の思想はもう田舎まで逝つたのだから、人類の目標はもう一歩進んでゐる。

三十四

下等な敵を常に頭におくものは自分も下等になる。憎惡や、復讐や利慾に頭を向けるよりは、人間を人間らしくし、人間の心に愛をよびさます仕事をする方が賢い。愛から出たものではあらうが、憎みに終るのはよくない。自己と他人を人間にしたい望みからはみ出さずに、その爲に働くものには感謝と讃美をあげるのを自分は惜まない。

復讐が出來る時、敵を許すもの、そのものは讃美すべき哉。

三十五

人間の如く生きるものを讃美せよ。人間の傲りとなるものを讃美せよ。自己に正直であれ、主義に不忠實であつてもい丶、人間には忠實である、怪物となるな、人間をして顏を背かせるやうなものになるな。

ゴルキーが過激派に本當に殺されたならば、ゴルキーは本當の人間であつた。彼は本當の人間として同情すべきものを同情し、心配すべきものを心配した。ほむべきものをほめたそしるべきものをそしつた。自己に忠實な人間だつた。時にはみ出したにしろ、それは人間らしくはみ出した。器械らしくはみ出したのではない。

其處にゴルキーの人となりの美しさが出てゐれば、それは彼の創作すべての上に王冠の如く輝くであらう。

人間は自己に忠實であることが大事だ。しかしその自己が、私情や、利慾で、動いては醜い許りである。それはもつと人類をつらぬいてゐるものにたよらなければならない。それは云ふ迄もないことだ。

三十六

經濟のことは他に適當な人があるであらう。
人間のことになつては自分が出しやばらねばならない。
君達は人間だらう。私の云ふことをきけ。

三十七

信用出來る人間になれ。

神のみを恐れる人間になれ。神の命のみを聞く人間になれ、神を通してのみ人間の爲に働け。神に背けば、人間は實に弱いたよりにならないものだ。

人間のみたよるものは、失望しないわけにはゆかない。人間は不死ではない。人間の生命はもろい。人間は又冷淡だ。いかに愛ある人間でも、その愛には限りがある。人間の心は變らないものではない。あざむかれ安く、動かされ易い。

人間をたよるものは人間をうらまないことはまれだ。人間は恩を忘れやすく、つけ上りやすく、得意になりやすく、反感をもちやすく、反抗をしたがる者だ。昨日尊敬したものを今日輕蔑し、昨日賞めたものを今日そしる。

人間をたよるものは、罰を受けなければならない。人間は神にたよる時のみ、貴い。その他の人間をたよりにするものは禍だ。たよりになるものは實に少ない、しかもその人の生命も心も不變不易のものではない。眞心が必ず通じると云ふものではない。逢ひたい時に逢へるものでなく。話したい時に話せるものでない。いざと云ふ時に自分のわきに居てくれると云ふことは稀だ。

しかし我々は人間を愛し、信じることが出來るのはたゞ神を通してだ。あざむくことなく、滅びることなく、呼んで

來ないことのない神を通してゞある。

神と云ふ言葉を嫌ふものよ。一人で何ものかに祈つたことはないか。人間の力のたよりにならないことを知つた時。何かの助けを借らうとしたことはないか。自力ではどうすることも出來ないものにぶつかつた時、何かにたよらうとしたことはないか。そしてある慰めは得たことはないか。又私かに惡いことをした時、何かが自分を見てゐはしないかと思つたことはないか。何かにあやまりたく思つたことはないか。

又、よろこびの日に何かに感謝しやうとしたことはないか。悲しみの日に何かに訴へやうとしたことはないか。何か自分達を見守つてゐる見へないものを感じたことはないか。

感じたことのあるものは、その何かを神と名けよ。そしてそれに親しむやうにせよ。必ず其處から力と慰めと平和を得るであらう。

自分が人々から誤解された時に、何かゞ自分を知つてゐてくれると云ふことは喜びではないか。萬人がまちがつてゐて、自分一人が正しいと思ふ時、自分に味方するものが一人はあると思ふものは涙をながしてありがたく思ふであらう。ゲーテは人が高くなればなる程、自分を支配してゐるものゝあることを感じ、それから背かないやうに骨折ると云ふ意味のことを云つてゐた。之は本當である。孔子は天我をすてずと云つた。ソクラテスはデーモンの命を貴んで死に、耶蘇は天父の御心に從つて十字架を荷つた。それは神よりも他のものをたよることの出來ない人々の當然ゆくべき道である。

かくの如き人は神の如く信じられる。神以外には出ることの出來ない人だから、よし出てもすぐ歸らないではゐられない人だから。

かゝる人は實に貴い。その人はどんな誤解も、罵詈も、自分を傷つけないことを知つてゐる。どんなにまちがつたことを云はれても、そしてそれを萬人が信じやうとも、彼は自分の最後の勝利を信じて安心してゐられる。安心しないわ

けにはゆかない。神と共にゐるのだから。かゝる人は信じるべきものを信じた人だ。たよるべきものをたよつた人だ。恐ろしいことは内に疚しいことをたくはへることだ、それは神から自己を切りはなし易いから。しかしそれ以外は恐れない。人間を恐れない。ただ人間のことを思つてゐればいゝ。そして何處までも自己の信じる通り生きればいゝ。他を顧みる必要はない。内を省みてまちがいのないことをし、又云へばいゝ。彼は自由の人であつてしかも爲すべきことを爲す人だ。人々は其處を目指さねばならない。

三十八

しかし他人にそれを望むな。他人は幸福な人間になれるやうにつとめよ。地平線以下の人間には憐みと同情と、慰安と、鼓舞と制裁とを忘れるな。境遇のわるいものは境遇のよくなることを心から望め、重荷を負ひすぎるものには重荷を分擔するか適當の休息を與へよ。そして辛棒強きもの、人並以上自ら進んで働くもの、困難な仕事に打ち勝つもの、思慮の深いもの、神を尊敬し、その御心に從つて生きやうとするものを尊敬せよ。

三十九

尊敬するものを尊敬しないのは人類を墮落させることだ。貴きものと賤しきものとを同一視するのは人類を墮落させることだ。

優れたるものと劣れるものを同一視するのは人類の向上心をよはめる。

人を同情するのはいゝ。いたはるのはいい、しかし地平線以下の人間を地平線以上の人間と同等にあつかうわけにはゆかない。

地平線以上の人間には自由を與へればいゝ。彼等は自由民である。自分のしたいことをしていゝ。又さうさせるのが

人類の意志に叶ふ。しかし地平線以下の人間はともかく地平線に達する義務がある。それが出來なければ、一人前の人間にはなれない。しかしその人が何かの方面で人類に役立つ仕事をすればその時、その人は一足とびに地平線以上の人となることが出來、尊敬されるであらう。

地平線以下の人間も、元より、食はねばならず、着ねばならず、住まねばならぬ。彼等は理想的の社會に於てはその心配はまぬかれるが、最も貧弱な供給されるもので滿足しなければならない。特別に地平線以上の人の助けをかりれば又別だ。しかしさう云ふ生活にゐて、しかも何か人類に役立つ仕事をすれば傲るべき人間であるが、その仕事がしくぢれば一人前になれずに朽ちなければならない。それは人類の本當の食客で、義務を果さない人間として待遇をわるくされるのは仕方がない。

どんな時が來ても人間は平等にはなれない。人間は又理想的に公平になることも出來ない。ある人間は運がよすぎ、ある人間は不運だと云ふことは逃れない。又もつて生れた性質にも運不運はある、しかし將來に於て人間は今よりも、もつと眞價に從つて價値をきめられるやうになることはたしかだ。そして人類に役立つものは、役立たぬものより厚遇せられることは當然である。

藝術家に實にひどい高下があるやうに、人間にも高下はある物質的には高下の差は今よりずつと少なくなるであらう。そして公けのものが益々立派になるであらう。しかし精神的、働きの上から行つては高下は今までよりはつ切りし、評價は嚴格になるであらう。そして評價を誤つたものは今迄よりも嚴格に非難されるであらう。

働きものは尊敬され、

不平を云はずに自己を人類の爲に生かすことに骨折るものは尊敬されるであらう。

兄弟の爲に苦しむものは感謝され。

勞働は金錢で價値をきめられる前に、道德で價値をきめられるであらう。

優れたる人格者は敬せられ、
思慮深きものは尊敬され、
人心を高め、勇氣つけるものは賞讃され、
人類に役立つ發明するものは賞せられるであらう。
名譽は今よりも重じられ。
人間は、精神を内から生かすやう教育され、それに反對するものは攻撃されるであらう。
だが正義は名譽心を支配し、愛は正義を支配し、神は愛を支配する。
かゝる時がくるやう務めるものは讃美すべき哉。

四十

吾々兄弟は離れて立つが故に無能力者だ。もし吾々が人間の名によつて、同じ目的を有するものが集り、力を一つにすることが出來れば、吾々は無能力者ではない。吾々は巨人となつて自己の意志をこの世に生かすことが出來る。同じ目的をもつ。最も健全なる人間が、金と暴力によらずに、正義と愛と、人間の生命を愛する本氣さとによつて立ち上り、我等の要求する生活に近き生活をしやうとすれば、このことは決して不可能ではない。

吾々はなれたる兄弟が一つにさへなれゝば、合理的な社會をこの世の何處かに築きあげ、舊き家が倒れる迄には住いゝ新しき家をそなへておくことは不可能なことではない。自分はこの確信のもとに「新しき村」をつくつた。すべてのことはよくいつてはゐるが、人間が大事だと云ふことをしみ〴〵考へる。よき人間さへ出てくれば面白いことは必ず出來る。そのかはり惡しき人が出てくれば、村の内はつまらぬごた〴〵がたへない。いかなる世が來ても人間がよくならなければ面白くないことは必ず起る。制度は一朝一夕でもかはり得る。しかしよき人間が集り、力を一つにするのはむづ

かしい。我慾心が強く、野心が強く、安逸を好み、快樂をむさぼり、他人の迷惑を考へない人間が、まさにこゝではどんな仕事もうまくゆかない。そのかはり正しき、本氣さの強い、賤しいことの出來ない、正義を愛して、骨身を惜しまない人がゐれば、その仕事はうまくゆく。

制度も今のまゝではいけない。だが人間も大事である。よき人物を出さねばならない。よき人間が澤山出て來たらいかに世の中は面白くなるであらう。

自分は一生よき人間を讃美したい。惡き人間のことを氣にするよりは、よき人間の出ることを氣にするがいゝ。一人の二宮尊徳が出れば何萬の人が救はれ、一人の孔子が出れば何千萬と云ふ人が救はれ、一人耶蘇が出れば何億と云ふ人が救はれる。惡人の影響はそれに比べては知れたものである。しかし人命を損ねた點ではどうか知れぬ、しかし我等の精神にはあまり影響はしない。

ともかく正しき人間が出てくれ、思慮深き人間が出て來てくれ、神の意志を本當に知るものが出て來てくれ、さもなければ淋しすぎる。はがゆすぎる。自分は現代ではよき友を持ちすぎてゐる少數の一人だが。もつと〳〵出て來てもらつて困らない。新しき村の仕事も、よき人の加はることによつてのみ生長する。

さもなくも自分は神にたよつてゐるものだ。腹の底では安心してゐる。だがよろこびたい。

いろ〳〵の方面のよき男、よき女、それが出て來てこの正しき仕事を更に正しくする爲に獻身的に働いてくれたらこの仕事はめき〳〵と生長する。だが珍らしく駄目な男と女が入つて來た爲に新しき村のごた〳〵は新聞にまで出ることになつたが、しかし新しき村の生長がそれで阻害されるには、仕事が正しすぎる。こゝでは正しきもの、熱心なもの、本氣なもの、思慮深きもの、働き手がよろこばれる。人間としての値打が赤裸々に出る。ごまかしやうがない。

心から罪を悔ひるものは許されるが、ごまかしものは許されない。自分は神の御旨をかしこんでこの仕事を辛棒づよくつゞけてゆくことによつて、誤解も罵詈も邪推も自分は恐れず確信のもとに進んでゆくことによつて、人類に必ず役

立つて見せると思つてゐる。しかしこゝに新しき村のことはあまり云ふのはよさう。自分はこゝでは地平線以上の人間を讃美し、かくの如き人間が一人でも多く出現することを祈れば足りる。

四十一

恐ろしいことは起つた。起りつゝある、今後も起るだらう。人間は不幸と慘事を生む傾向を可なり強くもつてゐる。自分を顧みる前に不平を起し、他人の缺點には目がつき易く、怒りやすく、輕蔑しやすく、そして侮辱を感じやすい。恥知らずにならずに恥をしのぶことはむずかしい。今の人間の關係は金錢で支配されてゐる。しかし精神力の強いものはそれに打ちかてないことはない。しかし多くの人は苦しみすぎ、働きすぎ、時を賣りすぎ、疲れすぎて生きてゐる。このまゝではおさまらない。彼等が暴力をもつても起き上らうとするのは自然である。彼等が一致さへすれば、暴力では誰も敵對することは出來ない。しかし勞働者が勝利を得た時、彼等が自ら進んでよろこんで働かない以上は、彼等は新しき暴力と壓制をうけねばならない。誰か、しかも多數の人間が働かなければこの世はたもてない。人類の爲、兄弟姉妹の爲に働くと云ふ精神が強くならない以上はこの世から壓制をなくするわけにはゆかない。その壓制の仕方が人間を益々器械的にするものであつてはたまらない。人間の自由を束縛するものであつてはたまらない。それは何處までも人間らしいものでなければならない。效果を考へる前に、人間の要求を考へなければならない。なるべくその人を内から生かすやうにしなければならない。其處がむづかしい。其處さへはつ切りして、そして如何にも人間が住むのに適した社會制度が見出されゝばそしてその可能がはつ切りすれば、人々は自ら進んで入るのである。もし入らない人があれば、それは人間に不忠實なエゴイストになる。しかし今の多くの人はその點がはつ切りしてゐない。人々が不安に思ひ、恐れるのは無理のないことだ。

今なら儉約して、働くなり、又よき機會を待つなりすれば、そして金が出來さへすれば自分の好む所の生活、それは

孤獨ではあるが、そして何んもなく心にせめられ、人々に憎惡されるやうな氣もするが、入れないことはない希望をもつことが出來る。

だがまちがつた、かたくなゝ、もつと動きのとれない器械的な人生觀で、キチンと定められた法則のまゝに生きなければならないことを考へるとたまらない。それは逃れられない牢獄のやうな生活である。自分達の役わりがちやんときめられ、學問、結婚、子供、なぞのことまで政府にキメられてはたまらない。地平線以下の人間である間は制裁されるのも仕方がない。それ以上に出た時、人は自由を許されねばならない。そしていかなる人間が地平線以下で、いかなる人間が地平線以上であるかを律法できめられなければならない。

それに就て自分は簡單なヒントを與へて、この斷片的な感想を終らうと思ふ。

四十二

自分は再び云ふ。

次の人間は地平線以下の人間である。

自分の義務を進んでしないもの、ずるけられたら、ずるけやうとするもの、

他人の仕事を邪魔するもの、他人に害を與へるもの。他人の獨立をさまたげるもの。

信用に背いたもの。

自己を眞價以上に通用させやうと不正を行つたもの。

他人の負擔を重くするもの。

同盟その他勢力をはつて、不公平なことをしやうとするもの。

不當に利益をむさぼらうとするもの。

實力のないくせに不平を云ふもの。
一言で云へば自他の獨立を害するもの、獨立する資格なきもの、他人に厄介をかけるもの。自分のするべきことをしないもの。平和を亂すもの、公益を害するもの、
これ等は地平線以下の人間である。

四十三

次のものは地平線以上のものだ。
自己の務めを自ら進んでなし、他人の仕事を邪魔せず、迷惑を與へないもの、正當の理由で仕事は休むも、づるけることはしないもの、常になすべきことをなした上に、餘力あれば、何かで兄弟の爲に働からとするもの、浪費をいみ、人類の傲りになる仕事をしやうとするもの。
一言で云へば自他の獨立をさまたけず。不平を云はず。進んでなすべきことをなし、他人の個性を尊重し、愛憎に心を動かされず、批評眼を明らかにし、評價を正しくし、あやまることを心からはぢるもの、人類や兄弟の幸福を望み、尊敬すべきものを尊敬するもの。
それ等は地平線以上の人である。

四十四

しかしこゝに第三の人がある。
それは義務から超越したものである。
それに二つの別がある。一つは生理的に義務を果すことの出來ないものだ。

他は普通の人の義務を果さないでもいゝ特權を有する人だ。

前者には、子供、老人、病人、不具者が加はる。之等は名譽不名譽とは別だ。優れたる心をもち、慾の少ないものは尊敬され、又愛される。それ等の人は許された範圍で何か兄弟姉妹の爲に働くことをよろこびとするであらう。

後者は、名譽ある人に限る。秀れたる技術をもつもの、秀れたる思慮をもつもの、秀れたる行ひをなしたもの、秀れた人格者。

定められたる義務より、もつと偉大なことで人類に仕へる人に限る。皆、千人に一人、一萬人に一人と云ふ人である。

義務を許される人にも、四分の一許される人、三分の一許される人、二分の一許される人、全部許される人がある。後者程萬人から優れた人として待遇されるわけだ。

四十五

仕事はいろ／＼ある。そしてそれは人々の撰擇に任す。人々の應じることの少ない仕事程特權をふやす。そのかはり資格はやかましくする。

義務を果すことは名譽なことである。人々はこの名をよろこばない。しかし眞の人間は權利をふり廻すよりは義務を靜かに果すことによろこびを感じる。

義務を果して始めて自由をたのしむ。心は欲しさからぬけ切る。義務を果し得るものは感謝すべきである。

今の世に人間の義務を本當に果したと感じることが出來るものがあるか。その自覺を持たずしては我等は心のおちつきを得ない。

義務は讚美すべきである。義務と云ふ言葉は聞いただけでも奮ひ立つ位の權威を持つてゐるはづの言葉である。義務と云ふ言葉をいやがるものは末世の人間である。

我等はこの言葉を再び權威ある言葉にし、それを果すことの出來ることに傲りと感謝を感じなければならない。そして義務を果さないものは恥ぢねばならない。

我々が人間になる運動の最初は義務を果すことである。

我々をして人間の義務を果さしめよ。果す事を得さしめよ。

之が新しき運動のモットーにならねばならない。この言葉には決して卑屈なひゞきもなく、貪慾なひゞきもない。

我々をして人間の義務を果さしめよ。

我々は人間になるために働く、人間の義務を果す爲に働く。それは辭さない。又辭すのを恥ずるものだ。

神よ。

我々をして人間の義務を果さしめよ。そして兄弟姉妹を過勞から脫することを得せしめよ、よき人間が生れるやうにいたる處に日光と空氣を入れよ。地平線以上に出る事を得せしめよ。

人間を人間相當にあつかうことが出來ないのは恥である。

人間であらしめよ。人間の義務を果さしめよ。―

（一九、一一、一八）

人世の幸福と財產權

慶大教授　高橋誠一郎

一

私有財產の廢止若しくは然らざるも其の嚴峻なる制限に依つて、あらゆる惡の消滅を期待する理論は非常に古いものである。クレータの王ミノス、スパルタの立法者リコウルゴス及び羅馬の建設者ロムラスの如きは孰れも皆な土地均分の法（縱し各人に對するものに非ずとするも少くも各戶に對し）を實施したと傳へられてゐる。眞僞は姑く問はず、或る者はホメロスの詩篇中に共產主義の證跡を發見し得るものと思惟し、幽玄神秘なる生涯を有してゐたピタゴラス及び其の學徒も亦古來屢々共產主義史上に緊要なる地位を與へられてゐる。小亞細亞の舊市カルセドンの人フアリアス及び同じくイオニアの舊市ミレタスの人ヒポダマスによつて提唱せられた財富分配の新計畫のあつたとはアリストテリーズの「政治學」を繙く者の熟知する所である。

プラトーンが「少數の幸福なる市民を造るを目的とせずして、全體として、幸福なる國家を構成せんが爲めに」、其の「共和國」の第一及び第二階級に對し、僅かに直接必要品のみを除外した總ての生產及び消費の資料から妻子に至るまでも包含する最も徹底した共產主義を主張したことも萬人の知悉する所である。ペールマンの如きは既に西紀前第四世紀に於て吾人が今や白兵戰を交へつゝある戰鬪の前列戰が行はれたと稱してゐる。

而してオイケンの謂ふが如く、既に幾千年の以前にアリストテリーズは此の「外觀美なる（ευπρεπης）」學說に對し、葛藤は更に深く伏在し、最も重大なる惡行は貧迫よりも寧ろ倨傲及び「奢侈」より發し、從つて傳來せる社會制度の根本的變革は縱し特殊の過誤を廢除し、若しくは減殺することはあつても、そは之に代つて他のものを輸入し、又たは增大せしむるものでは

あると云ふ反省を對峙せしめてゐる。マルクスの流を汲める社會民主々義を支配せる幸福に關する原則にも亦た之に等しき陳套を發見するのである。

二

至全なる幸福は當に至全なる對象の觀想から生じなければならぬ。而も美と德とに優りて完全なるものありや。而して萬有のそれに等しき美、若しくは眞正不變の實在たる神性の仁愛及び公正に比較し得可き德を那邊にか發見し得可き。若し斯くの如き觀想の快感を減殺し得可きものがあるとしたならば、それは吾人からして是等の美と至善との最大部分を隱蔽する吾人が能力の狹少若しくは是に於て吾人を教養す可き十分なる時を許容することのない吾人が生命の短少に存しなければならぬ。人類に取つて永遠の事業たる可きものは不定假現の現實世界をして道德的世界(Die moralische Welt.)及び美の帝國(Das Reich des Schönen.)たらしむるに存するものである。「二つの物は之に就て沈思すること愈々多く且つ長ければ愈々新たに且つ賑大し行く嘆美と崇敬とを以て心意を滿す、吾人を蔽ふ星斗爛たる天と吾人の内に存する道德律とは是である」。

凡そあらゆる物は悉く勞働に對して賣却せらるゝものであるが、人は啻に外界の自然に對するのみならず、彼れ自身の上にも亦其勤勉を導かなければならぬ。彼れにして若し自己を圍繞する障害を克服せんことを欲したならば、彼れは須らく自己の才能、心意及び肉體を改善しなければならぬ。我れ等の了解する「勞働」は單に現代に於ける經濟學者の云ふが如く外部的結果を生ずるを目的とした人間(マカロックの如きに至ると人間以外に、下等動物、器械若しくは自然的要素をも含めてゐる)の能力表現又たは障害克服の盡力と結合した財貨取得、即ち經濟價値の形成を目的とした行爲のみに止らない。啻に外界と一定の關係を有する肉體的勞苦と等しく、内部の心理的作用のみより成る心知的のものをも亦た包含するものである。從つて又た吾人の領有せんと努力する「財貨」は單に占有し得可き外部的物質的の欲望滿足資料にして、併せて經濟的商業及び行爲の目的物たるものを意味するものでない。第十八世紀の英國哲學者の謂ふが如く、吾人が心意の内部的滿足、吾人が肉體の外部的利益及び吾人が自己の勤勉及び幸運に由つて取得し占有せる物の享樂の一切を包括するものである。「希望と欲望とに對する性向は眞の富である、恐怖と悲哀とに對するものは眞の貧である」。

「財貨（goods）」は「善（good）」でなければならぬ、而して事物は單に快樂若しくは苦痛に關聯して善、若しくは不善と爲るのである。「善」とは吾人の內部に快樂を惹起し、又たは增加し、若しくは苦痛を減少し、或ひは或る他の善の領有若しくは或る惡の缺無を取得し、又たは維持するに適せるものを謂ひ「惡」とは之に反し、吾人に或る苦痛を誘起し、又たは增加し、若しくは或る快樂を減じ或ひは又た或る不善を取得し、若しくは或る善を吾人より奪取する傾向あるものを名附けて謂ふのである。

洵に快樂及び苦痛並びに之を招致する善及び惡は吾人が欲情の廻轉する樞機である。或る物の現在の享得が必ず之と共に歡喜の觀念を導く可きものと認識せられた場合に、其の物の存在せざるに由つて、吾人が自己の裡に見出した不安は卽ち吾人が「欲望」と稱する所のものであつて。そは又た不安の大小に從つて大小あるものである。人間の勤勉及び活動に對し主要なる刺戟たるものは不安である、卽ち縱し如何に善美なるものが提示せられたとしても、若し其の缺無が何等の不快若しくは苦痛を隨伴することなく、人は之を有せざるも尙ほ安易にして滿足せりとしたならば、之に對して何等の欲望なく、又た之を求めんとする何等の勢力も起つて來ないが爲めである。欲望は又た提供せられたる善の不可能性又たは不到達性を認むるに由つて不安が癒治せられ、若しくは緩和せらるゝ限り、是に由つて停止若しくは減殺せらるゝものである。假令ひ太陽中に多量の金の存在することが發見せられたとしても、一般地球上の人民は之に對して何等の欲望をも感じないが如きは是である。

經濟行爲發動の原因は欲望である。而して之が目的は其の滿足である。經濟上の欲望とは外界の財貨を得んとする不安の狀態であつて、這個の欲望を滿足す可き手段方法を講ぜんとして人類の經濟的活動が起るのである。而して人類の經濟的生活は未だ滿足せられざる欲望に始まり、其の滿足を得んとする勢力之に次ぎ、欲望を滿足せしめ得可き財貨の占有を經て、遂に滿足せしめられたる欲望を以て一段落を來すものである。然しながら「時」は萬物の貪食者（tempus edax rerum）である。無限の創造力を有する「時」は亦た無限の破壞力を有して人類の享得せる物質物體を破却し去るのである。人類は更に新たなる物質物體を得て常住不斷再起し來る其の所要を補ひ、更に進んでは次第に其の數を增し、其の量を加へ、併せて又た其の質を變じつゝある所要に充てなければならぬ。

三

欲望は不安の意識狀態である、不安の存する所に乃ち欲望は在るのである。生命は永續不可避なる不安の壓迫の下に在つては支持す可らざる重荷である。獨り經濟行爲のみならず、あらゆる有意的行動に對する意志を直接決定するものは或る缺無せる善の上に定置せられたる欲望の不安である。單に或る物を以て抽象的に善にして、望ましいものと觀るのみでは、未だ吾人の意志を決定し、吾人を驅つて勞作せしむるに足らない。意志を決定するものは最大確實なる善に非ずして不安である。感情の急迫である。富の貧に優れることを知るも、而も貧を以て自ら足れりとする時は、之より免れんとするの意志を決定することはない。飲酒が健康上又た經濟上有害なるを知りながら、飲酒欲に對する不安の再現は則ち酒徒を驅つて酒家に入らしむるのである。

然らば何が故に不安のみ獨り意志の上に作用するやと云ふに、第一に不安の除去は幸福に到る第一歩であるからである。第二は不安のみ獨り現存するが故であつて、缺無せるものが其の存せざる所に作用するは萬有の本性に背反するものである。第三に意志が善の觀察に由つて決定せらる可きものとしたならば無極無終なる上天の歡樂の可能を承認する者は謂ゆる富、名譽又たはあらゆる他の現世的快樂を追求することなかる可きが故である。然るに經驗に徴して明かなるが如く、瑣々たる小事を追求する吾人が欲望の連續的不安を滿足せしむるが爲めに般大なる善は往々にして等閑視せらるゝのである。斯くの如き欲望滿足の用に適せりと認められたる資料の有する性質が經濟學者の謂ゆる「利用」とか「効用」とか又は「オフエリミテ」と稱するものである。然しながら吾人は此の世に於て種々なる不安を以て包圍せられ、種々たる欲望に惑亂せらるゝが故に、其の中に在つて最も急迫せるものが、自ら次の行爲に對して意志を決定す可き優勝なる地位を有するのである。

欲望の唯一の對境は幸福である。幸福と不幸とは兩極端の名稱である。其の極限の境界は吾人之を知らず、そは實に眼、視たることなく、耳、聽きたることなく、又思料す可く人の心胸に入りたることのないものである。然しながら兩者の或る程度に就いては吾人は一方に於ては悅喜及び歡樂、他方には苦惱及び悲歎の種々なる實例に據つて識野に銘ぜられた頗る鮮明なる印象を有してゐる。而して一定の程度の快樂を生ずるに適する

ものは善であつて、一定の程度の苦痛を生ず可きものは惡であるが、是等のものが其の同種の更に大なるものと競合する時は往々にして之を善若しくは惡と稱せないのである。即ち是等のものが互に相競合する場合には快樂及び苦痛の程度其の者も亦た當然選擇の目的物と爲るのである。從つて吾人の謂ゆる善惡を正しく思料する時は其の多くは比較に存するを見出すのである。何となれば快樂の些かにても大なる程度及び苦痛の些かにても少き程度に對して原因たるものは善の性質を有し、之に反するものは惡の性質を有するものである。

而も確實に幸福の原因たる可く認知せられた事物と雖も、彼れ等が特殊の個人に取り、其の幸福の必須なる部分を構成するものとして思料せらるゝに非ざれば必然其の欲望を動すことのないものである。凡そ總て現在の苦痛は吾人が現在の不幸の一部を成すものであるが、而も總ての存在せざる善は如何なる時と雖も、吾人が現在の幸福の必要部分を構成し、又たは其の缺無が吾人の不幸の一部たることのないものである。若し存在せざる善が幸福の一部を構成するものとしたならば、吾人の所有に存しない幸福の無限なる程度存するが故に、吾人は不斷且つ無限に不幸なる可きものである。斯くてあらゆる不安は除去せられて相當なる程度の善は現在に於て、人々を滿足せしむるに資するものである。而して一般享樂の連續に於ける快樂の或る僅少なる程度が彼れ等の滿足せしめられ得可き幸福を組成するのである。若し然らずとしたならば吾人の意志の決定せらるゝこと頗る多く、吾人が生涯の大部分を有意的に浪費するかの不善不惡にして、明かに瑣末なる行爲に對するの餘地はない筈である。而して又た最大なる善に對する不斷の意志決定に就いて怠慢なることはあり得ざるのである。

四

斯くの如き善は若し飢渴其の他多數の日常普通の必要或ひは生理的先天的欲望、並びに不時の損害の外、富、名譽、勢力、並びに習慣が吾人に自然なるものたらしめた多數の不安又たは心理的後天的欲望にして減退し、更に大なる對象の觀想に確然心意を捧げ得たりとしたならば、能く直接の善と競合することを得るのである。然しながら這般の觀想に對する障害は更に低い先天的欲望の欲むことのない再現である。吾人は勿論正當なる思料に依つて提供せられたる或る善の價値に對し適當なる比準に吾人の欲望を引上ぐることを得るのである、斯くてそは總て又

た意志の上に作用して追求せらるゝに至るを得るのである。然しながら幸福を求むる努力の第一歩は不幸の境界より完全に脫出せんとするに存するが故に、一切の不安が完全に除去せられたるを感知するに至るまでは、吾人の意志は他の何物にも向ふの餘裕を有することの出來ぬものである、而して此不十分なる狀態に於ては許多の缺感及び欲望を以て包圍せらるゝが故に、吾人は此世界に在つては永く之より釋放せらるゝことなきが如くに見ゆる。洵に「人は此世界の給與し得る總ての物を有する時と雖も、尙ほ不滿不安にして幸福より遠ざかれるものである」。

是に於て乎、心意の內部的平和、純潔の意識、吾人自身の行動に對する十分なる考査等が幸福に取つて頗る必要なる條件と爲る。心意は經驗に徵して明かなるが如く。大多數の場合に於て、其の欲望中の或る者に就いて之が決行及び滿足を停止するの力を有し、斯くて總てのものは順次に其の對象を思料し、あらゆる方面より之を審査し、而して之を他と比較するの自由を有するが故に、多數の不安中、次の行爲に對し、吾人の意志を決定す可きものは其の最大、最緊切なるものである。茲に人間の有する總ての自由は存するのである、而して此の自由を正しく使用せざるよりして總ての失錯、誤謬及び過失は生じ來るのである。之を妨止するが爲めに吾人は或る欲望の遂行を停止するの力を有するのである。而して此の停止の間に吾人は自己の當さに行はんとしつゝあるものゝ善惡を審査し、觀察し、而して判斷するの機會を有するのである。吾人自身の判定に由つて決せらるゝものは自由に對する制限に非ずして其の進修、補滅に非ずして其の行使である。眞正堅實なる幸福の愼重にして不變なる追求は自由の必須なる基礎たるものである。眞の幸福を追求せしむると同一の必要は亦た同一の威力を以て各個の相次げる欲望を停止し、考察し、而して其の滿足が吾人の眞の幸福と牴觸することなきやを審査せしむるのである。

人間の意志は常に悟性に由りて善と判定せられたるものに由つて決定せらるゝものであるが、而も彼れにして自ら選擇を過らんか、彼れは當さに是に由りて生じたる責罰を受る可きものである。永遠の法則及び萬有の本性は彼れが過れる選擇と一致するが爲めに改變せらる可きものではない。特殊の個人に對する外觀的善と對立して、眞正なる善の客觀的標準を認めなければならぬ。而して兩者の矛盾撞着は獨り愼重なる判斷に依つて除去せられ得るものである。各個の有意的行爲の選擇に際し、意志を決定する諸般の不安は一部分は吾人の力の及ばざる原因

例へば肉體的苦痛より生じ、他は過てる判定より生じたる誤れる欲望から發するものである。斯くて吾人が幸福の必要部分を形成する所のものに關する過れる判定から現在の快樂及び苦痛と將來のそれとを比較するに際し、眼前の物象は更に遠隔なるものに比し、事實其の形體小なるに拘らず、却つて之よりも大なりと思惟せらるゝと等しく、吾人が心眞の軟弱狹小なるに由り、往々にして過れる判定を下すに基き、又たは吾人の無知及び不注意に因り、行爲の結果を思料するに際し、過れる判定を下し、或ひは又た事實吾人の幸福に必要なるものを然らずと判定するに由つて惑亂せらるゝのである。吾人は吾人の趣味及び嗜好を教養し、嫌惡す可きものを快適なるものに變ずるを得ると共に、又た之を行はなければならぬ。德に對して不德を選ぶは顯著なる不正の判斷である。（以上主としてロック「人間悟性論」の論系に據る）。

五

凡そ如何なる性質と雖も、仁愛及び正義に越えて人間の效績に對して大なる主張を與ふるものはない。而も吾人にして若し仁愛が斯く大なる稱讃に値する所以を考究したならば、其の結果は正に該美德の社會に對する效用に依るものの大なることを發見するであらう。而して正義に關しても、斯くの如き德の存在其の者は亦た社會の存在を前提としてゐるものである。人間は其孤立の狀態に在つては正不正の區別なく、社會の形成前に於て、若しくば之と關係なくして正義の總念はない。公共に對する效用は實に其の唯一の本原であつて、其の有用性の移脫は復た之が效績の標準たるものである。從つて又た社會未生前に於ては私有財產と稱す可きものはない。即ち此の時代に於ては單に各人の取得するを得たるものが、其の之を維持するを得る間のみ彼れの有たるに過ぎないものである。凡そ此の地球上に生棲する總ての動物中、人間の如く自然の虐遇を受けたるが如き觀あるものはないやうである。自然は人間に荷はしむるに無數の欲望と必要とを以てするに拘らず、之を滿足せしむるが爲めには微弱なる力を賦與するに過ぎない。他の動物に在つては力の弱いものは必要の少ないのが普通である。然るに獨り人間に於ては貧弱と必要との不自然なる結合は其の極度に達してゐる。啻に其の生存を維持するが爲めに必要なる食料が其の搜索と追求とから逸脫するのみならず、天候時候の害から自己を防禦するが爲めに、衣服及び住所を有しなければならぬ。然るに

單に彼れ一個に就いて考ふる時は、斯く多數の必要を一定の程度まで滿足せしめ得可き武器、腕力若しくは其の他自然の能力の孰れをも十分に有してゐない。

然るに彼れが斯くの如き缺陷を補足し、自己を他の動物と平等の地位に高め得たのみならず、遙かに彼れ等の上に優越することを得せしめたものは惟り社會の力に依つてゞある。社會は悉く彼の弱點を補充する。彼れの欲望は刻々彼れの上に増加し來つても、彼れの能力は愈々益々增大するに至るのである。即ち互に相ひ分離し、單に自己の爲めにのみ勞働する時は、餘りに微弱であつて何等重大なる仕事を遂行するに足らなかつた彼れの力は其の連結に由つて著しく其の效果を增大して來る。種々なる必要品の全部を供給するが爲めに使用せらるゝが故に、如何なる特殊の技術に於ても完成の域に到達することのなかつた彼れの勞働は其の分割に由つて著しく其の能率を增進する。而して相互の救濟に由つて吾人は運命と事故とに脅かさるゝことが少なきに至るのである。

自然にして若し人類全般に對して外界の有用物件を給與することが放漫であつて、各人は何等の不安なく、又た勤勞なくして確然其の欲求する所のものを取得し得可しとしたならば、彼れが自然の美は總ての人爲的裝飾に優り、四季共に快和なる氣候は總ての衣類と居住とを無用ならしめ、調理を加へざる草根樹果は最も美味なる食物を給し、清澄なる湧泉は最も滋味なる飲料を與ふ可く、勞力を必要とする業務は一として其の必要を見ないことゝ爲るであらう。而して音樂と詩歌と瞑想とは其の唯一の事業たり、談話と悅樂と友愛とは其の無二の慰安たる可きものである。

斯くの如き幸福圓滿なる狀態に在つてはあらゆる他の社會的美德は愈々益々榮えて行くであらうが、正義の德は全然無用であつて、曾つて一度びも夢想せられたことすらないものと爲る。總ての人が既に十分以上を有する場合に財貨の分配を行ふ必要が果して那邊にある。或る物件が他人の爲めに略取せられたとしたならば、人は同一價値の物件を自ら領有するが爲めに單に其の手を延ぶるを以て足れりとする時、彼れは何の必要あつて所有權を主張す可きか。今日の如く人類が窮乏せる狀態に在る時に於てさへ一定の恩惠が自然に依つて無限の豐富を以て寄與せらるゝ所に在つては吾人は常に之を全人類の間に共有ならしめ、權利及び財產の細分を行ふことがない。水及び空氣はあらゆる物件中に在つて最も必要なるに拘らず、毫も個人の財

産として要求せらるゝことなく、又た何人と雖も、是等天恵の最も放漫なる使用と享楽とに由つて不正を行ふことの出來ないものである。

六

縱し又た人類の要望する財貨が今日と同一の狀態を持續するとしても、世界の人心にして寛洪と爲り、友愛の念胸裏に滿ち共同一致の觀念に支配せられて、總ての人は總ての人の爲めに無上の深情を盡し、其の侶伴の利益以上に毫末も自己の利益を念頭に懸くることがないとしたならば、正義の必要は全然消滅して、財産の區分は嘗つて人の意識に上ることがないであらう。人心の傾向、今日の如き狀態に在つては上述せるが如き廣大なる仁愛の完全なる例證を發見することは最も難しとする所であるが、家族の場合は最も之に庶幾いものであつて、個人の間に於ける相互の愛情が愈々強大と爲るに從つて、之に接近すること益々大と爲り、總てあらゆる財産の區別は大部分失はれて、彼れ等の間に共同のものと化す可きである。他方に於て一般的窮乏に際しては、宛も一般的充實の場合と等しく、嚴正なる正義の法則は停止せられて、必至と自己保存の更に強烈なる動機は之に代ることゝ爲るのである。即ち人は寧り正義を尊重するも、それは最早自他の安全に取つて何等の用もないからである。

一般社會の現實なる狀態は總て是等兩極端の中間に位するものである。吾人は生來自己の親近に對して偏頗なるものであるが、而も亦た更に不偏なる行動より生ず可き利益を學ぶを得るものである。自然の恩惠に依つて無償に賦與せらるゝ享楽は極めて尠いが、而も吾人は技術と勞働と勤勉とに依つて頗る豐富に之を取得し得るのである。是に於て乎財産の觀念は總ての文明社會に必要と爲り、正義は公共に對する其の有用性を取得し而して惟り是に由つてのみ其の價値と倫理的義務とを生ずるのである。詩人の謳へる黄金時代、彼れ等の謂ゆるサツルヌスの治世が無稽の假想たるが如く、ホッブスの謂ゆる「自然の狀態」も亦た等しく事實に於て實在せざるものであつた。彼れに據れば、個人は性來社會的なるものにあらずして、却つて ad mutuam cædem apti. 利己的且つ非社會的であつて、相互に戰爭の狀態に在るものである。斯くの如き自然の狀態に於ては何等の法律も存せざるのみならず、自然の法則と雖も、亦た存在することのないものである。總ての人は總ての物に對して權利を

有してゐる。彼れの欲望は無限であつて、其の意志は獨り其の力に由つて限定せらるゝのみである。そはプラトーンが「ポリタイア」の第二編に於て敍述した最強者に至上權を與ふ可き生存競爭の狀態である。而してそは爭鬪者が之を繼續するに由つて、彼れ等自己の所期を破壞するを承認するの時に於て獨り滅絕す可き爭鬪たるものである。

然しながらホッブスに從ふも亦た、「自然の權利 (jus naturale)」は總て「自然の法則 (lex naturalis)」を生むものである。自然の權利は單に各人が自己の存在を保全するが爲めに最良なりと思惟する所のものを行ふの自由を意味してゐる。自由は即ち外部的障害の缺如である。或る人が自己を保全するの力は環境に由つて限定せられてゐる。之に對して自然の法則は自由よりも先づ第一に制限を意味するものである。そは人が據つて以て其の生命を破壞するの行爲、若しくは不行爲を禁止す可き理性によつて創設せられたる教戒又たは一般的準則を表示するものである。自然の權利に據つて各人は總て其の欲望を滿足す可きものに對して要求を有し、自然の法則に據つて、彼れは自餘の欲望の更に確實なる實現の爲めに其の權利の一定部分を拋棄するの已むなきに至るのである。總ての人の同等なる權利は自然の狀態をして戰爭の狀態たらしむる所のものであつて、從つて又た人間の欲望中に在つて第一位を占むる生命の安固を脅すことゝ爲るものである。自然法は理性が生命を安固ならしむるが爲めに案出した本則の一體である。此の自然法の概念からして同法の第一義は正に平和を追求し、而して之を確保すること、即ち人類に自然なる戰爭の狀態より逸脫するに在りとの歸結を得可きものである。而も理性は各人があらゆる物に對する其の自然の權利を拋棄するに由りてのみ獨り之を實行し得可きを示すのである。

七

若し私利、殊に富に對する欲求が社會に於ける眞の原動力として認めらるゝとしたならば、人類は全然滿足せしめられたる心意の平靜に安んずることなく、其の欲望は絕えず一の對象から他の對象に向つて進みつゝあるものである。若し結局或る窮極の目的 (Finis Ultimus)」若しくは「最高の幸福 (Summum Bonum)」なるものが存し得可しとしたならば、そは無限に增加しつゝある欲望の永劫終止することのない滿足である。人世には永遠の平安を期待することが出來なくなる。人世は無感覺

なること能はざると等しく、欲望なく不安なくして存すること能はざるものと爲るのである。

然しながら人間の資性及び性向は絶えず高尚なる學問文藝に對する戯術なる注意、善良なる模範の追求及び習慣の力に由つて改善せらるゝを得るのである。而して宛も不幸が惡德及び痴愚に附隨するが如く、幸運は縱し必然に非ずとするも自然に德及び美性に結合せらるゝものである。財貨取得の欲念、少くとも自己及び自己の最も近親なる者の爲めにする富に對する愛戀は毫も社會を構成するの原動力として看做さるゝものに非ずして却つて直接社會に取つて破壞的なるものである。此の欲念が何等の制限なくして發動し、而して其の最も自然なる行動に消を讓つた時、そは最も怖る可きものと爲るのである。斯くの如き欲情を調整し抑制するに當つて遭遇する困難の大小に依つて亦た社會を確立するの困難は或ひは大となり或ひは小と爲るのである。富に對する欲求は寧ろ當然阻止するを要する破壞的勢力である。人民にして最大なる幸福に到達せんとしたならば、昔しアブデラのヘカテアスがフアラオ王國を理想化した「[illegible]」中に描き出したが如く、先づあらゆる營利欲、内爭及び之より結果し來る總ての病患から免れなければならぬ。其の理想とする所は最大なる富の増加に非ずして、最高なる社會的理想を目標とした人民の發達でなければならぬ。

然るに現代の人民は營利欲の爲めに最高なる社會的理想を抛棄して顧みないものである。分業を前提とする國民經濟の交易經濟的組織に在つては生產者は自己の爲めに生產するに非ずして、唯だ交易場裡に於て自己の生產物を交換して利潤を獲得せんと努むるが故に、あらゆる生產は爰に營利の基礎と爲るものであつて、從つて現今の生產業は同時に又た營利業たるの常である。斯くて人類の欲望に天然の物質的成分を適應せしむるに由つて行はるゝ自然克服であり、物質的財貨の存在量及び其の效用を增加するに由つて社會を利す可き生產は一般的交換資料たる貨幣の形態に於て利潤を獲得することを目的とする營利の前に降つた。生產業者の形成し增加せんとするものは全部效用に基く「全部價値」に非ずして、限界效用に因つて決定せらるゝ「部分價値」である。吾人の造語に成る「貧富を超越せる富の世界」に在つては社會的富は其の最大限に於て存在するが、而も現時に於て宮も藁屋も等しく日の光に浴し、貴族も乞食も同じく大氣を呼吸するが如く、萬人は悉く部分價値を絶したる物質の前に平等なる可きが故に、何人と雖も、富有なるものではな

い。今日の生產は斯くの如き理想境を目的とせずして、只管個人的意義に於ける價値卽ち交換價値の形成を目的としてゐるものである。斯くて生產業者は往々其の生產物の一部を破却するに因つて其の財貨の增殖卽ち利潤を期待し得るのである。是に於て乎、社會の正義は人類全般の幸福の爲めに人類全般に取つて有利なる生產行爲者の給付、人類全般に取つて有利なる財貨の產出及び移轉を命ずるに至るのである。「暴利を貪る者は死刑に處す」と云へる峻嚴なる法制は爰に其意義を見出すのである。

八

所有權に關する法規の如きも其の歸結する窮極の標點を人間社會の利益及び幸福に置かなければならぬ。是を尊重しない場合には所有權法は多く皆な最も奇怪不自然且つ迷信的なるものと爲るのである。人は迷信の愚を嗤笑するが、彼れにして若し所有權の客體を之と等しく學問知識の力に訴へて冷靜に觀察したならば、デヴイド・ヒユームの謂ふが如く、道德的情操によつて認められたる相違に對し、何等の基礎をも發見することのないものである、余は此の樹果に依つて適法に自己の榮養を攝ることが出來るが、僅かに十歩を隔てた同一種の樹果に觸るゝは余に取つては犯罪である。余にして僅々一時間以前に此の衣服を着用したとしたならば、余は最も峻酷なる刑罰を受く可きものであつた。而も其の賣手が僅々「數語の呪文」を唱ふるに由つて、そは余の使用に適するに至つた。然らば余に斯くの如き所有權を賦與したものは何であるか。必ずしも「占有」ではなかつた。必ずしも「勞働」ではなかつた。必ずしも「人類本來の自然的必要」ではなかつた。必ずしも「個人と社會との契約」が歷史的に存在して居つたが爲めでもなかつた。若し之を國家權力の下に於ける法律の力に據るものとしたならば、國家は如何なる必要があつて、如何なる理由の下に之を認めたのであるか。克く迷信を暴露せしめ得たると同一の推論は亦た正義にも適用することが出來る。然しながら迷信と正義との間には重大なる差違がある。前者は今日の人士に取つて浮躁、無用且つ煩惱なるものであるが、後者は人類の福利、社會の存在に取つて絕對に必要なるものである。若し「社會の利益にして毫も顧慮せらるゝことがなかつたならば、他人が承諾の意思を表示した一定の音聲を發するに由つて、特定の物件に關する余が行爲の性質を變ぜしむること、恰も或る僧侶が一定の形式に於て祈禱を誦するに由つて、木石の堆積をして爾後永遠に神聖ならしむると擇

ぶ所はないのである。」

凡そ私有權を認むるの絕對的必要は獨り一定の事業財に於て存するのみである。ロックが自然法の下に於ける財產權は依りて以て生命の維持を助成す可き總ての外界物象に對する支配を意味すると說いたのは此の意味である。卽ち各個人の生活に取つて絕對的に必要なるものは單に此の種財貨の一定種一定量に對し、他を排して自己の意のまゝに之を處分し得る事である。而してあらゆる財貨に對して私有權を認むるに至つたのは決して天然自然の本能に基くものに非ずして、歷史的社會的の事實に因るものなるが故に、他の社會制度の如く、之を考察する者も、之を攻擊する者も、將た又た之を辯護する者も等しく其の社會的利益を對象としなければならない。從つて所有權の內容、客體の限界及び主體の範圍は時代の變遷に伴ひ、又た社會上の必要に應じて變移す可きものである。總て財產權に關すると又たは其の他の人事關係に於けるとを問はず、等しく到る處に發見せられ、又た常に到る處に有效なる絕對の正義なるものは存在しない。ヒユームの謂ふが如く、同じ種類の鳥は如何なる時代と鄕土とを問はず、彼れ等の巢を造ること一樣である、玆に吾人は本能の力を觀る。相異れる時代と場所とに於ける人間は彼れ等の家屋を構ふることが區々である、此處に吾人は理性と慣習との影響を認むるのである。同一の推論は生殖の本能と財產の制度との對比に適用することが出來る。

九

總て所有權の問題は各個の社會に對する特殊の便益に從つて自然法の原則を擴張し、抑制し、改修し且つ變更する國內法の權威に從屬するものである。國家は洵に吾人が「不死の神（Immortal God）」の下に吾人の平和と援護とを受くる「有生の神（Mortal God）」であつた。國家の最も重要なる目的の一は財產權の擁護であつた。國家の外に在つては何等の法律なく、又何等の正義も存せざる觀があつた。國家の外に在つては、何人と雖も自己の勞働の成果を確實に收得することは出來なかつた。然しながら國家の內に在つては總ての人は之を確實に收得するの保證を有す可きものである。國家の外に在つては鬪爭が行はれても、內に於ては何等の恐怖も存在しないものとならなければならぬ。縱し外部は窮乏、無知、野蠻の世界であつても、內部に於ては理性、平和、安固、富裕、精美及び知識の支配がなければならぬ。是が吾人の自然的若しくは絕對的自由を抛棄した

對價でなければならぬ。

若し或る種の社會主義者の主張するが如く、社會に於ける唯一の眞實が掠奪階級と被掠奪階級との對立であるとしたならば、謂ゆる國民的利害なるものは純然たる幻想に過ぎないものと爲る。國民は單なる抽象と爲る。虎と其の生贄とが利益の共同意識を有し、共同團體を形成し得る筈がない。總て所有權を確認する標準が姑く國家の律令、慣習、先例、類推、及び其の他或る者は恒久不變、或る者は可變不定なる多數の事情に依從せざる可らずとしても、總て是等のものが明確に歸結する究竟の標準は人間社會共同の利益及び幸福でなければならぬ。共同の利益及び幸福に對する意識が消滅したとしたならば、宛も超自然的實在若しくは超自然的理性に對する信仰の存在せざるに至つた時、宗教の滅亡す可きが如き、國家は其の存在を失はなければならぬ。而して國家的統一を要求する者は軈て又た世界的統一を要求しなければならぬ。哲人は世界各國の間に窮極の調和を見出さんとするのである。而して其の解決は世界各國の間に共同の利害關係を樹立し得る可能性に依賴するものである。是こそ人間の歴史に於て自然の働きつゝある目的である。是こそあらゆる人間の諸力が展開し行く可き狀態である。

個人の利益が必ずしも社會全般の利益と一致しないものであることは事實である。而して個人の生活狀態が社會的條件に支配せらるゝの事實も亦た之を承認しなければならぬ。果して然らば吾人は社會全體の利益及び幸福の爲めに、國家社會をして個人の生活及び行動を支配せしめなければならぬ。同一社會に生棲する人々が區々にして相反せる選擇を爲すの事實は彼れ等が悉く皆な善を追求するに非ざるを論證するものに非ずして、同一の事物は必ずしもあらゆる人に對して等しく善として認められないが爲めである。總ての人が各々其の追求する所を異にするは彼れ等が其の幸福を同一の事物に置くことなく、又た之に對して同一の手段を選ぶことなきを示すものである。是に於て乎國家構成の目的は全人民の最大幸福であつて、特殊の個人若しくは階級の利益であつてはならぬことゝ爲る。國家は要に個々の靈魂と恒久の平行の下に正義の理想の表明と爲らなければならぬ。一致の支配す可き所に不一致と分離と多數とが在るよりも國家に取つて大なる惡なく、之を結束して單一不可分ならしむるよりも大なる善はない。快樂及び苦痛の共同なる所、總ての人民が同一の機會に於て等しく喜悲する所に結合は存するのである。共同の感情なくして單に個々の感情存し、國家若

しくは之を構成する者に對して起つた同一事件に際し、一半は欣喜し、他は悲歎するの時、其結合は解離するのである。

人民の間に於ける過大なる不平均、殊に財貨分配上の不平均は總ての國家的結合をして微弱ならしむるものである。若し能ふ可くんば、あらゆる人は生活必需品の全部及び其の有用品の多數に對し十分なる所有を得て、其の勞働の收果を享得す可きものである。何人と雖も斯くの如き平等が最も人間の本性に適合せるものであつて、貧民の幸福を増加するに比し、富者のそれを減少することと遙かに僅少なるを疑ふ者はあるまい。而して人民が這般の平等から離れた所に在つては常に彼れ等が富者に對して加ふるよりも以上の滿足を貧者より奪ひ、而して一個人の浮躁なる虛榮心に對する些末なる滿悦が往々にして多數の家族若しくは多數の地方に與へ得る麵包の全部以上をすら費さしむることあるを吾人は認めなければならぬ。全然公共の爲めに何事をも爲すことなきか、又たは其の行ふ所のものが國家に取つて殆ど全く必要なきものが懶惰富裕なる生活を營みつゝある間に、國家の存立、社會の維持の爲めに最も重要なる勞務を提供しつゝある者が難澁貧困の生活を營み、窮苦悲慘の生涯を送りつゝあるが如き所に何の正義かある。斯くの如きものが現在社會の事實であるとしたならば、それは正に矯正を要する一缺陷である。

然しながら人々が自己に對する裁判官たり、又た執行者たる可き權力を拋棄し、國家の統治權を承認し、自然の狀態を脫して、多數の決意に服從する國家的結合を締結しつゝある以上、自ら自己に適し、自己に屬す可きものと判斷せる物を直接把握することを許すことは出來ぬ。若し之を許す可しとしたならば國家社會は破壞せらる可きものである。縱令ひ吾人はクロポトキンに從つて、到る處に富者の富が貧者の貧より發生したるの事實を發見し得可しとしても、マックス・スチルネルに學んで、貧窮問題を解決す可き自我主義者流の方法は貧民に向つて、管理局が社會の名に於て、彼れ等に何物かを給與するに至るまで、忍んで待つ可きを說くに非ずして、彼等が欲する所の物の上に其の手を加へて、之を獲取することを教ゆるに在りとの言に聽從することは出來ぬ。斯くの如き行爲に由る國家の敗滅滅亡こそ唯一眞個の叛亂である。幸福、平和及び結合を擁護するが爲めに誘入せられたる法規の支配に對抗して、復も一度び排除した强力を用ふる者こそ、眞にロックの謂ゆる rebellare する者、即ち爭鬪(bellum)の狀態に復歸せしむる者(rebellantes)

でなければならぬ。吾人は此の點に於て曾つて引用した「何人と雖も自己の主張に對して判官たることと能はざるものである。而して權威によつて行はれたる過失は叛亂を有すことの出來ぬものである。總ての精靈をして高き權力に從屬せしめよ。劍を把る者は劍に由つて滅びなければならぬ」といふルーテルの言葉の意義を見出すのである。

經濟的活動の旺盛なる時代に於ては、人々は各々其の永續的業務を續行し、而して其の報酬として、彼れ等が勞働の果實たる富の享樂と等しく、業務其の者をも享樂するものである。爰に心意は新たなる氣力を取得し、其の能力を擴大し、正道に勉勵して、其の自然的物欲を滿足せしむると共に、安易遊惰に委はるゝの時、發生するを普通とする不自然なる欲求の發達を防止するのである。而して人間の幸福は物質的財貨の夥多なるよりも、寧ろ彼れ等が是等の物を享樂し得可き平和と安定とに存することの多いものである。快樂の生涯は業務の生涯の如く長く存續することのないものである、彼れ等は飽滿と嫌惡とに到達するの傾向遙かに大なるものである。加之ならず、總て享樂に向ふの情最も切なる場合には、吾人は往々にして其の對象たる物件を缺くに至るのである。此の點に於て外界の物件を追求する欲情は、個人自身の内部に靜止するものに比し、吾人の幸福に資することの少いものである。而して幸福は吾人の領有する快適なる財貨よりも、却つて吾人が自己に接近する總ての者の滿足を相共に享受す可き「同情」に依賴することの大なるものである(ヒューム「人間本性論」)。

實に吾人は吾人の幸福を導くが爲めには、單に外界の自然のみならず、先づ第一に吾人自身の上にも勤勉と勞働とを加へなければならぬ。吾人は此の點に於て第十九世紀の物質的社會主義者を擧んで、人間の性格は自ら之を形成するに非ずして、其の四圍の境涯に因つて成るものと觀、外部的及び經濟的事情のみを以て唯一の決定的效力と做し、内部的のものは何等の價値をも有するものに非ずと看るが如き推論を下さんとするものでない。物質的經濟的狀態が如何に人間の精神的發達に重大なる意義を有するとしても、勞働搾取及び貧窮からの誘惑を抑制したならば、人間の間にあらゆる惡を滅却し、而して純全なる善の本質が彼れから創造せらるゝ」とする者はオイケンの言ふが如く「個人を高めんとして、却つて人間の本質を低下する」ものである。官能的滿足が急速に内部的空虛に變じた時、吾人は深く大なる不幸を味はなければならぬ。

人間建築論

—社會改造の精神的動機—

賀川豊彦

光明（エンライトメント）の問題

最初の世界は暗黒であつた。その時に巨人プロメシアスが天へ驅け上つて、神の世界から光を盗んで來た。それで、世界は光の滿つる所となつた。然しプロメシアスは、彼が光を人間に與へたと云ふ理由によつて、神に罰せられ、コウカサスの山上の巖に結びつけられて、開放を待つて居た。之は希臘神話が我等に敎へる處である。

世界改造の第一の問題は、光の問題である。人がパンだけで滿足して居れるならば改造の問題は起ら無い。然し我等はパン以上に光が欲しいのである。それで神に反抗してまでも、地上に投げるのである。パラダイスには食物も充分有つた、然しアダムの最初の墮落は、神になりたいと云ふ墮落であつた。つまりアダムの墮落は上の方へ墮落したのである。

古代エヂプトのデモクラシーの進行の跡を研究しても私は光の問題を痛切に思ふ。最初、神は光であつた。即ち太陽（ラー）で有つた。そして王は神であり、太陽であつた。王は光で有つた。ところが、第二、第三と王朝が變ると共に、王の子達が殖えた。そして、王の如く、王の子達も神となつた。そして、第十二王朝頃には、神の子孫が頗る殖えて居た。その爲めに、昔は王にのみ許された神になる權利が、此頃になつては凡ての人に許さることになつた。そして、死後に於ても平民や奴隷は昇天し得なかつたものが、この頃になると、何人も昇天し得る特權が形而上的に與へらるゝことになつた。之は普通に考へるならば何でもない樣であるが、神の思想の發達史から云ふならば、非常な變化で有つて、民衆も王と神により近く接近することを要求した證據である、之が私の云ふ光の問題である。

カーライルは英雄崇拜論を書いて、英雄進化の方向は、神よ

り勞働者への進路であることを教へてくれた。玆に私の云ふ勞働者崇拜の眞意義があるのである。然し、神より勞働者への進路と云ふのは、神を勞働者の水準に持つてくると云ふことでは無い、勞働者を神に持つて行くと云ふことである。即ちパンの爲めに働く勞働者が、精神生活を捨てた文化につくと云ふのでは無い、神にならんが爲めにパンを神聖化すると云ふことである。いやパン問題即ち宗教問題であると云ふことになるのである。即ち之はパンと人間との責任を共に可能ならしめた宇宙意志が、パンの水準で滿足出來なくて、人間の基準に上る努力があると云ふことである。が、マルクスは人間をパンの水準に引き下げんとし、文化を人間拔きのパンの問題として取扱はんとして居るのである。然し、それは宇宙意志の苦鬪の跡を全く無視するので有つて、人がパンのみで滿足し、その爲めに奴隷で滿足して居るならば、パンの問題はそうたいした問題では無い奴隷に生活難は無い。解放せられた人間に生活難がある。それで問題が紛糾してくるのだ。世界の貧民發生史を驗べて見ても之は眞理である。貧民の多く發生した時は、いつでも自由の高調せられた時代である。一八六一年にロシアの農奴が解放された時にも一八六三年北米の黑奴が解放された時にも、國家が消化し得ない程の失業的貧民が現れた。プロメシアスがもし暗黑の中に座つて、神が投げ與へるパンで滿足して居たならば最初の社會改造の問題は起ら無かつたのだ。

それで私は云ふ、社會改造の根本問題はパン以上の問題である。それはパン以上の問題であるが故にパンの問題を含んで居るのである。それは光明の問題である。それは新しき人間の建築の問題である。

人間藝術と民衆藝術

人間の建築はパンの問題が中心では無く、光明（エンライトメント）の問題が中心であると云ふことを知ると、パンの問題は更に深い意義あるものとなる。即ち最初のパンは生きんが爲めのパンの問題であるけれども、最後のパンは建築の材料としての問題が發生する。パンより以上に登り得ない人間であれば——乞食の生活より進み得ないものであれば、社會問題も何にも起るものでは無い然し、自己が無限の力もて、パンの生産者であるにかゝわらずその生産するパンが口に這入らぬから問題になるのである。即ちその問題はパンの問題を通り越した人間の問題である。或人が自由であるに、或人が奴隸であると云ふ不條理の問題である

之は第一の出發點である。そして更に起る問題は、人間は充分食ふた後に猶人間としての藝術生活に生きねばならぬと云ふことである。所が藝術生活のはたらきかける世界は物質の世界を離れて何にも無い。ただし、その物質の世界に「生きて居る物質」か「死んで居る物質」かによつて區別があるが、死んで居る物質の藝術では、繪畫や、建築や、彫刻がある。生きて居る藝術では音樂や、舞踊や人體美及日常生活の美化がある。所が今日では死んで居る藝術が重用視されて居るが、生きて居る藝術は全く、無視されて居る。たとへば、會話や食事の藝術化は殆ど普通的になつて居るが、會話や、食事の藝術は貧民階級には全く禁ぜられて居る。金持のみが、上品な言葉を使用し、上品な膳の前に座るが、人々の九割は、日常の生活に藝術の神秘を味ひ得ないものであるから、自己を否定し、天國を憧れ、物質の假象的藝術に隠れんとするのである。私は今日までの凡ての藝術が、この方面に謬つて居ることを痛切に思ふのである。

民衆藝術と普通に云はれて居るものに、二種の解釋がある。第一の解釋は、民衆が或特殊な共通な心理的欲求から産れた藝術を樂しみ得ると云ふこと、即ち國民性を中心とした藝術、或は社會主義的色彩を濃厚に持つて居る藝術、その他、勞働階級の根本的藝術的要求から流れ出る、階級的自覺ある藝術等を普通に、民衆藝術と呼ばれたるものである

然し更に、私自身は、この群衆心理を基礎にした藝術の外に第二の民衆藝術を考へるのである。それは、凡ての人間が人間として、根本的に味ひ得る藝術である。即ち人間として、人間を自覺する運動そのものを基礎とすることである。

今日畫家と建築家の藝術は、全人全靈全生の藝術ではあり得ない。それは眼の自覺であり、耳の自覺であり、嗅覺の自覺である。それはあまりに部分的である。それで資本主義的物質世界には適するが、人間そのものを資本として、その活動と生命のみにしか投資を知らざる、勞働者には何の効用も無い。それでもしも、人間それ自身が藝術とならなければ、今日の生産者は最も哀れむ可きものである。

之は所謂貴族藝術と云はれて居るものを、破壊して、下等な勞働者のみの藝術にしやうと云ふのでは無いのだ。凡そ人間である以上、人間としての藝術が最も尊重されねばならぬのである。所で、今日の生産者は、幸にしてか不幸にしてか、今日の所では死んで居る物質的藝術に近づくことを經濟的に、社會的に嚴禁されて居るのである。然し之がまた幸福なのである。人間

はその本然に於て、その人體の外は何者をも所有はして居ら無いのである。それで、今日の勞働者は、新しき、そして眞正な藝術を出すに最も純正な立場に置かれて居る。即ち生きた物質の藝術は、今日ではたゞ、勞働者しか持つて居ら無いのであるそれで、所謂藝術家と稱する、畫布と大理石の小使が何事を世界に仕出かさうとも、生産者は、それを笑ふ權利を充分持つて居るのだ。生産者はその凡てを無視する。彼は眼と鼻と耳と唇として生きて居るのでは無い。そんな部分的な、切れ切れの裝飾品を信用することが出來ないのである。ショペンハウエルは音樂は時間の上に延び得る藝術だから最も純正なものであると云ふて居るが、人間そのものを自覺し得て、生きて居ることそのことが、一個の體驗による全生全身全靈（身靈は空間時間の表現として置かう）の全人藝術であると云ふことから見れば前者は餘りに貧弱な藝術品否、お玩具にしか過ぎ無いのである。

人間否定の藝術の貧弱

日本の藝術を見るに、それは、凡て客觀の藝術である。人間性否定の藝術である。古事記、萬葉集ではそうでも無かつたが佛教が傳來すると共にそれが甚しくなつた。バイロンが三like Mature better than man" と叫んだが、日本の自然は美しく、日本人の生活はあまりに貧弱で有つたから、皆人間から逃け出したのである。それで永らくの間、日本の繪畫には人間の繪畫が現れ無かつた。日本畫に、裸體美を畫いたものは一も無い。たま〳〵有つてもそれは浮世繪から來た春畫である。これには日本人が美しい民族で無かつたからでもあらう。然し日本人がより自由であり、より眞實であり得たならばどうして人間性から逃げ出すことが出來たらう。古事記、萬葉であの樣に精氣潑溂たる民族で有つたものが、源氏物語では幽寂と迷信に封じ込められ、徳川時代になつては、足利時代の能樂面が蒼白となり、固結化して、一つの顏面筋だつて動か無くなつて居ると云ふのは、どうした理由であらうか、之は日本の人形を見てもよくわかる。日本の人形は、全く死んだ屍の樣なものである。それは資本家のお孃さんの形をした、顏面筋の少しも動か無いものである。（西洋の人間には下女の姿をして居るものもあれば田園の子娘の姿もある。）日本のお雛さんはその最も極端である。親しみの無い、溫かみの無い、靜止と、瘀血と、蒼白な顏面と、着物だけ着せられて、一所に坐らせられる人形の悲哀よ！　然し日本の人間的藝術で、日本の家庭に地位を與へ

られるものはこのお母さんだけであるから、心細い。日本の子供は勞働と活動と人體美に生きて居る勞働者の筋肉美に對する理解を敎へられ無い。そして靜止と、凝血と、蒼白と、所有藝術の昔話の死んだ藝術を與へられる。それで日本の藝術家が、こんな藝術に飽きが來てそんな藝術しか持つて居ら無い人生がいやになるのは至極尤もなことである。

それで人生を否定せざる爲めに、藝術が入るならば、どうしてもそれは人生藝術を中心とせねばならぬ。そして人生藝術の基底は、生活そのものである。藝術を生活の外に求めることが既に間違つて居るのである。それで、眞の民衆藝術とは、生活藝術である。卽ち凡そ生きて居るものは、何人と云へども知つて置かねばならぬ、生の肯定の工夫と生の內容の充實の工夫である。

そして之が果して、今日の民衆に許されて居る事實であらうか?、今日の民衆は食ふにさへ困つて居るではないか、どうして之れで、人間藝術など云ふ暇があるであらうか? それで資本家は、呪はれたものとして汚れたる顏と、喧囂たる雜音を逝れる爲めに人間性の藝術とか云ふものに逃げるのである。そして、完全なる崇物主義と偶像敎が成立するのである。

偶像の成立

偶像の成立は、いつでも人間無視から來るものである。死んだ偶像の殿堂が生きた人間の住宅より大きなものである間、偶像主義から目醒めることは出來ないが、客觀の世界に超自然性を求めて行く時に、それはいつでも偶像主義を成立せしめる。そして偶像主義の眞價はその崇物症(フエチシユ)的狂亂にある。美の爲めの美、藝術の爲めの藝術、偶像の爲めの偶像の究極はいつでも此處に陷るのである。また象徵と稱する假面を借りて、生命を死んだ物質で表徵せんとする時に、それは、いつでも偶像主義に墮落しないことは無い。

私は必ずしも美の運動を否定するものでは無い。私は道德の爲めに藝を犧牲にする勇氣を持た無い。然し美の爲めの美、藝術の爲めの藝術と云ふ分化主義、生命の袋小路を恐れるものである。私は「美の進化」を主張して、人生の目的が美しくならんとする意志にあることも嘗て述べた。(拙著『精神運動と社會運動』參照)然し私は、人生の目的が特定な美だけにあるのでは無くして、全人生活卽ち生活そのもの丶藝術化にあることを信じたいのである。卽ち私が美人を見て妻を捨て無いと云

ふのは、新しき女の顔と云ふ特定的な美にのみ私が生く可きもので無くして、私のその他の生活の部分、私の子供に對する美しき心、社會に對する美しき心を持ちたいから、その全人生活の美人の爲めに、女の顔を捨てるのである。それを、美は生活そのものの中にあるのでは無くして、客觀界の、女の顔、畫、寺と云ふ所にあると考へるものだから大きな間違をするのである。私はこの種類の藝術を捨てる。客觀の藝術に生きんとするが故に、資本の集積と、骨董品の賣買と、檢番と遊廓と偶像が出來るのである。

即ち客觀藝術の崇物主義が近代資本主義の根底をなして居るものである、カントが認識に於ける、客觀性を破壊した如く私も價値評價に於ける、客觀主義を破壊する。價値評價の根底は主觀の成長にあるのである。即ち偶像は先方にあるのでは無くして、此邊にあるのである。美は畫布の中にあるのでは無くして、眼の中にあるのである。セザンヌと印象派は此處に氣がついたから、畫布の上に一大革命が起つた。即ち今迄の繪はブラシュで布の上に書いたが、新しい繪畫は、眼底神經網の上に、色彩を構成せしめるのである。それで美が漸く動いて來た。即ち人間が成立すると共に、線と色彩が進化することになつたのである。即ち畫布が生きて來た。それで生きた畫布を大事にすることが、畫布そのものよりも大事なことになつたのである。それで、色彩だけで美が成立し無いことがわかつたので、偶像は畫布の上から消滅した。そして、偶像は人間それ自身の懐の中へ隱れることゝなつた。人間が偶像であるのだ。即ち美は生きて居る物質——人間——を離れて決して存在せぬのだ。美の爲めの美、藝術の爲めの藝術と唱へても、『人もし全世界を得るともその生命を失はゞ何の益あらんや』の言の通り、生命即藝術、藝術即生命の世界が生れ無くて、寺と、繪畫と、ピアノが出來上つても、肝心の人間が消滅しても何の役にも立た無くなるのである。即ち眞の藝術は、生そのものゝ藝術にある筈である。生きた藝術、生きること即ち藝術——之が眞の藝術である。之を私は主觀藝術とよぶ。即ち充分人間的な、充分主觀的な藝術である、で私は美の主觀的効果 (Subjective Effect) を離れて美を論ずることを欲し無い。いくら家が美しくても、人間の顔が穢い中は、私はそれを藝術と云ふことが出來ない。私の藝術は先づ人間それ自身の根本的改造である。メストフエレスはフウストを伴つて人間を改造して居るワグネルの所へ行つたが、私の考へて居る、眞の藝術は、人間それ自身の改造であ

る。之を離れて、建築をも、畫布をも、彫刻をも――凡ての客観的固形藝術をも私は否定する。ところが成長することを知ら無い、客観界の袋小路に迷ふた資本主義的崇物症に腐つてしまつた、人間はこれを全く理解せずして、二億圓のセント・ポール寺院と、五億圓のヴエルサイユ宮殿を建てゝ悦んで居る。

大工イエスが或時四十六年かゝつて建造されたエルサレムにあるヘロデ大王の建てた神殿を見た時に彼はかう云ふた。『此宮を毀て、我三日にして之を建てん』と。いくら勞働者イエスが精力絶倫であつたにしても、如何に彼が建築に通じて居たにしても、ヘロデが一億圓近い金を費して建てた神殿を三日で建てることは出來なかつたのである。然しイエスには一億圓の神殿も藝術的價値が無かつたのである。彼は振返つて、自らを指した。そして、彼自身の生活が卽ち藝術であると云ふたので有つた。そこで偶像主義の最後に殘つて居たものが破壊された。

今日の美學者の最も多く間違つて居る點はその點である。卽ち神殿の爲めに勞働者一人を無視することにある。眞の藝術は勞働者一人の生活そのものゝ中にあるのである。一萬の暇人が帝劇や、文樂座に集まり、九千九百九十九萬人が、貧に窶れて居る間、どうしてそれが藝術的だと云へるのだ。彼等は自宅と劇場と寺院だけを藝術的に飾る。そして、一度この外に出ると世は醜惡に充つて居る。それで彼等は、その醜惡なる世界を見ざらんが爲めに、深く垂れこめた自動車の引き幕で、自分と世界とを隔離する。此處で、完全に藝術的階級が出來る。そして禮儀と稱する道德美術が發生し、その秘訣は自己を禮拜することと、自己が禮拜を強いられることになる。かくして出來上つた藝術的世界の雲の上に住んで見ると、彼自身は知らず知らず、象徴的實在であるかの如く誤信する。そして、自分が勝手に定めた相場で、自分一人を偶像として自らを拜し隣れる多くの他人を統制するのである。かうして、偶像主義は掠奪と無智と、非藝術の中に、完全に成立するのである。

然し一人しか美的生活を送り得ないと云ふその偶像的藝術的生活がどうして、眞の藝術であり得やう。殊にその、美の尺度が金であると云ふから、多く集めたものが、最も美術的で、少なく持つて居るものが非美術的である。と云ふのであるから、我等は實際それに堪へ得ることが出來るであらうか？　私はそんな、安價な藝術を否定する。私は藝術を人間の方へ取り戻す卽ち所謂ペトロン付きの貴族藝術――一名金貨藝術を笑ふ。私は偶像の爲めに建てる建築を笑ふ。私は凡ての枯死せる物質藝

術を笑ふのである。眞の藝術は常に生きて居らねばならぬ。それは飯を食ふものである。

最も美術的な飯を食ふもの

飯を食ふものが最も美術的であるのだ。實在の驚異は人間そのものである。哲學史の最初に宇宙の本體が木火土金の四元で成立して居る樣に考へたこともあつたが、藝術生活に於て、人間はまだ、自己が實在の驚異であることを知らずして、人形と家と、畫布に刺激を求めて行く、實在の驚異は人間である。世界で人間程美しいものは無いのだ。花よりも太陽よりも、美しきダビデの顏と、ダアイアナの顏は美しかつたのだ。然し人間は肉體美を捨てゝ、表象の爲めに衣類を纏ふた。そして衣類は表象の推移によつて遂に財產の問題となつた。財產はダビデの顏の榮と、ダアイアナの美を奪つてしまつた。私は貧民窟に長く住んで居て、最も美しく感じるのは嬰兒の皮膚とその人體美である。貧民窟の外の凡てが穢くても、神が嬰兒を美しく作つたことは美いことで有つた。美しく作ら無ければ、何人が赤ン坊を可愛がることが出來やうぞ？ 貧民窟の藝術で最も美しい創作は、私は嬰兒の生存であると考へて居る。それで神の創作の中で一番美しいものは、人間である。然し、人間は誤れる方向を取つて居る爲めに、この美しかる可き嬰兒の顏の秀で居ることと、勞働者の筋肉美の輝きを段々奪つて行く。安價な賃銀と長時間の勞働は彼等をして絶望せしめる。彼等も遂には眞の藝術觀を捨てて、有產者階級が捏造した唯物美術に心を傾ける樣になるのである。

然し唯物美術が永遠に成功せざるものであることを私は此處に確證せねばならぬ。人間の主觀性の呪ひ、否、その蔭は何處の何處までもつき伴ふて、唯物藝術が破產するまで之を動搖せしめ得るのである。この法則を我等に最も強く敎へてくれたのは、ジョン・ラスキン John Ruskin である。殊に彼の二名著 “Seven lamps on Architecture”（建築の七つの燈）と “The stones of Venice”（ヴェニスの石）はラスキンの文明批評家としての地位を永久的なものにならしめたのみならず、又他面に於ては、藝術批判に新紀元を開いたものである。

『建築の七つの燈』に於てラスキンは(1)眞理(2)美(3)力(4)犧牲(5)從順(6)勞働(7)記憶 Truth, Beauty, Power, Sacrifice, [illegible]dience, Labour. Memory の七つの精神的作用が、建築の凡てに現れて居るものであると詳しく論じて居るのである。勿論ラ

スキンは、後になつて、この著は成功して居らぬと云ふて居るけれども、彼は建築を見るに人間性を採用したことは一大發見で有つたのだ。

ところが、更に『ヴェニスの石』になつて文明批評家は全く驚いてしまつたので有つた。彼はヴェニスの建築史上に現れた一つ一つの石の出處から由來を凡て研究し、文字通りに『石』を研究したので有つた。彼はヴェニスの建築史を三期に分ち、第一期ビヰザンチン Byzantine Period 第二期ゴシック期 Gothic Period 第三期レネサンス期 Renaissance Period とし更に第三期レネサンスを三分して初期レネサンスと、ローマンレネサンスと、變體レネサンスの時代に細分し、時代思想と建築が全く相平行するものであることを編述して居るのである。即ちラスキンは、ヴェニスの市民生活が墮落すると共に、成金的藝術が跋扈し、遂に救濟す可らざるものになつたと云ふて居るのである。ラスキンは各所に論して居るが、たゞ金を消費する爲めと、贅澤と裝飾の爲めの裝飾主義が重ぜられる樣になつて建築が全く墮落したと云ふて居る。ラスキンは云ふて居る。

『この汚拔けしたことゝ、完成はそれ自身の危險性を持つて居た、そして近代伊太利の歴史は先づ、快樂に、それから腐敗に沈湎することゝなつたから、たとひ彼女が再び純粹なラテン語を讀み書き出來る樣になつても運命は一つで有つたらうと思はれる。……形式に與へた、時代の影響はレネサンス期を支配する惡い原理の僅かな部分である。その根本的誤謬は、私が既に述べた通りに、その初期に於てどれだけ金がかゝつても、完成したいと云ふ大まかな要求に有つたのだ。……私がゴシックの性質に就て述べた通りに普通の勞働者からは完成を要求することは出來ない——それは建築家の全生涯と、全思想と全精力をかけて初めて得られるものである。そしてレネサンス期の歐洲は手數のかゝる完成の爲めには、之も僅かな代價だと考へたのである。ヴェロチイオ Verrocchio ギベルチ Ghiberti の樣な人は、いつも、どこにでも居るわけで無いから、彼等たげ普通の勞働者がやる樣に要求することは、彼等の模倣するに限ると考へて、發明と熱情を捨てゝ形式と技巧の完成を眞似たが、それと共に彼等は、その靈魂を失つてしまつた』(Ruskin: The stones of Venice Vol. III, P. 14—15—)ラスキンは金ピカのレネサンス、色彩の濃度が益々深くなるレネサンスを見て、之を成金藝術だとしその藝術的の衰退史を道德的に審美的に文明批評史的に我等に敎へたのである。その批評

された推移期間は實に一一八〇年代より一四一八年に三世紀に渡つて居るが、ラスキンは、その間に公私の生活が如何に建築の様式に影響して居るかと云ふことを論じて居るが、彼の考へでは、宗教と、旧識と、秩序が、凡ての根で有つて、藝術はたゞ、その花にしか過ぎ無いと云ふので有つた。

勿論彼は晩年になつた、彼自らの「ヴェニスの石に書いた建築の宗教的批判を多少誤つた所があるとして居るが、（Frederick Harrison: John Ruskin, P. 72 参照）彼が『近世畫家』より『ヴェニスの石』『シセーム、エンド、リーリース』その他、彼の文明批評的書物を論じて流れる命脈には、カーライルが『衣裳哲學』に書いたことゝ同じ思想が流れて居るので有つて、それは、靈魂の動く方向に、凡ての藝術が動くものであると云ふことを明示して居るものである。

たゞカーライルが、ヘーゲル的であるに反して、ラスキンが心理的であることは見脱す可らざる、彼の特長で有つて、彼の解釋は間違つて居らぬと私は思ふのである。

人間の建築

即ち私は、凡ての藝術は靈の呻きであるとしたいのである。靈と云へば、或人は反對するであらう。之を生きた物質とすることに私は少しも反對しない。生きて居るならばそれで善いのである。マルクスは、動く物質として、唯物史觀——實は唯流動物質史觀を書いたが——私は、生きて居る物質それは、生え上り、呻き、成長する意志の運動が凡て、藝術であることを主張するのである。

即ち、私はマルクスの生産と云ふことを全く藝術的衝動として、解釋したいのである。それは、電流の様なトランスミッションでは無くして、ベルグソンが云ふ様な、創造衝動から湧き出づる靈——生きた意志の衝動であるのだ。それが、客観の條件即ち物質の形式を借りて、生産と創作の方向に移るものであるのだ。

だから、生そのものから云へば、生命も物質も渾一的なものであるのだ。凡てがローゴス Logos λόγος であるのだ。花にも葉にも、進化史上の意義ある如く、凡ての建築の様式——羅馬希臘の柱、羅馬の圓塔、エヂプトのピラミッド、アラビアの百合葉形の塔、バビロンの直角建築、印度の尖塔、支那の瓦屋根日本の唐破風、ゴシックの窓とそのスチプル——之等は見るだけで、その國民性と、思想を現して居るものである。

それであるからもしも建築と云ふものが石と鐵と木と土で出來ると思へば非常な間違ひである。建築の礎は人間性の建築である。それで賢い建築技師は、家を建てる前に人を建てた。然し近代の社會政策家は、人を建てる前に家を建てよと云ふのである。

境遇の感化が偉大なものであることは、何人もよく知つて居る。今日の貧民窟の嬰兒死亡率の高いのも、群衆生活の罪であることもわかつて居る。それで唯物社會主義者も、私も住宅問題を八釜敷云ふのである。然し唯物社會主義者はそこに止るのである。彼等は物質の缺乏が、今日の罪を産んだのだと云ふのである。然し私から云へば、人間が人間を大事にせずして、物質を集積し、尊き隣人——生産者——最も尊き藝術品を愛することをし無いものだから、こんなになつたと云ひたいのであるつまり物質の缺乏が第一の問題では無くして、人生藝術の標準が第一義の問題であるのだ。

金を多く儲けて何をする？家を買ふ、家を買ふて何をする美人を買ふ。美人は何處から來る？貧民窟から來る。然し貧民窟もパンと住宅の爲めに美人が缺乏する樣になると、成金も結局は貧民を藝者屋に移して、パンと住宅と衣服を支給して、今度は物質そのものの爲めでは無くして、人間性を手なづける爲めに、物質を豊かにするのである。美術も金儲けも結局は人間から出て、人間の處へ歸つてくるのである。人間には矢張り人間が一番面白いのである。それで唯物社會主義を叫ぶのも人間の爲めである。パンの不足を訴へるのも人間の爲めである。それをマルキシズムがパンが充分食へるならば、人間が出來上る樣に云ふのは間違つて居る。パンは數ある中の一個の條件である條件で人間は出來ない。人間は煉瓦造の家とは違ふ。煉瓦石を積む樣にパンを積んでも人間は出來ぬ。それで、我等が唯物社會主義に目醒める前に我等は、人間性の偉大を充分知る必要があるのである。即ち、パンの計算は人間性の爆發の運動に於て運動のＡＢＣである。まだまだもつと大きな問題があるのだ。

マルクスは生産の形式が文化の基礎だと云ふたが、生産の形式が——そんな特殊な部分的なものが基礎であり得る筈が無いそれは文化の形式の基礎で有つて、文化の本體の基礎では無い本體は矢張り人間である。人間が經濟組織を編み出すので、その生産の形式がお伽噺の不思議國のアリスの樣に、自分の眼から出た涙の爲めに漂流して居ると云ふのがマルクスの說き方であるが、アリスが自ら救ふ工夫を知つて居た如く、人間の編

み出した生産の形式は、また人間が變更し得るのである。それで、社會改造の根本動機は人間の爲めの人間の運動であらねばならぬのだ。

境遇と陶法をあまりに重ずることは十九世紀後半の社會科學の通弊で有つた。之はダアウヰンから來た、悪い癖で有つた。然し二十世紀では生物學的に又數學的にメンデリズムが證據立てられたから境遇より、本質的遺傳が、進化の爲めには大切なものであると云ふことがわかつたのである。之は社會改造學に於ても同樣なことが云へる、マルクス流の社會境遇學（Social Echology）から出發しても、人間改造の本質にはまだ遠い。それはどうしてもメンデリスチツクに人間の本質から出發せねばならぬ。進化の道程を歩む段になり、優種を得る點になるとマルクス學派は結局ダアヴヰニズム同樣失敗である。之はカール、ピヤソンや、ド、ヴリズが證據立てゝくれる。境遇陶法は本質陶法に比較して勢力が無いとは云へぬが、非常に弱いものである。つまり境遇陶法は不自然なものである。卽ち私は今日の資本主義的社會境遇が不自然なものであると思ふと共に、マルキシズム的社會境遇を非常に不自然なものであると思ふのである。それで私は人間性の本質が充分爆發し得る程度に於ての社會境遇を要求するのである。

カーライルはサータス、レザルタスに於て、衣裝と云ふものも要するに一個の思想であると云ふことを敎へてくれたが、私はそう信じたい。私はパンの生活も一個の表象であることを信じたいのである。表象と云へば、何だか眞實性を缺ぐ樣に響くが、生の延び上る方向と形式の指示表だと信じる場合に、私は必しも之が眞實性を缺ぐものでは無いと思ふのである。物質は要するに、生命の衣裝である。パンも建築も衣服も、生命の表象である。表象なくして、生命には意義が無いから、生命は常に肉の衣をつけて居るのである。パンも一個の衣飾である。

パンが一個の衣飾であることを、了解した時に、我等は、その偉大なる人間性の爲めに藝術品としてのパンを要求する權利を持つ。卽ち乞食としてパンを要求するのでは無くして、人間としてパンを要求するのである。であるから生産者が資本家にパンを要求するのは、彼の從者であるからでは無い。自らに屬するものを○○○○だけのことである。で、勞働者がパンの運動をすることを笑つてはならないそれは○○○○のＡＢＣであるのだ。○○はそれから始まるのだ。

人間の生産

パン生活も要するに、人間建築の一部分にしか過ぎ無いことを私は物語つた。人間建築は、凡ての衣裝にして、眞直に上に延び上るのである。

物質は衣飾である。それはまた人間性の本體では無い。それで、人間建築の第二の階級に移るのである。それは、人間の生産である。

人間の藝術で最も面白いのは、人間それ自身である。人間の創作の中での傑作は、人間の子の製作である。「我」の完成した後に「汝」を産むことは、完成した藝術である。我がも一つの我を分裂させたものを「汝」と言ふ。そして、第一の我を愛し、育み、尊敬する如く、第二の我を、愛し、育み尊敬することによつて、社會と云ふものが發生する。それで、社會と云ふものは、我が「汝」を分裂させて後に産れるものである。社會はデカルトの「我」でも、カントの「我」でもない。コントの「我」の表象で、産れかゝつて居たが、まだ産れ無かつた。そして今日もまだ、「汝」が充分産れて居らないから、社會は産れて居るとも云へぬ。然し、汝の誕生の準備として、「愛」は既にイエスによりトルストイによりタゴールによつて長く説かれて居る。

それで、社會主義の誕生は、この愛と「汝」の誕生の上に置かる可きもので有つて、パンとその生産の形式の上に据えらる可きものでは無い。社會——主義とは、「汝」——主義或は『愛』——主義と云ふことである。愛と相互扶助の無い世界に社會主義があり得ない。それで、「汝」が充分孵化し無い日本の國に、そこには、「我」と「金力」と「我の奴隷」のみが支配する所で「汝」主義が歡迎せられる筈が無い。

然し間違つてくれては困る。ニーチエは「汝」主義を「我」を「汝」に服從（サブシッシーブ）することだと考へて、第一期に、之を説いた勞働者イエスの道德を奴隷道德だと云ふたが、私は「汝」主義の道德に於て、奴隷道德を唱道するのでは無い。「我」の誕生し無いものに「汝」の誕生する道理が無い。オイケンが云ふた通り、敵をも愛し得ると云ふことは、自分が餘程豪いからであると云ふて居るが、我が誕生した後に、汝の偉いことが始めてわかるのである。宗教上に於ても「我」の生活から、「神」の生活に移ることを、生の更改と云ふて居るが、私は此場合、「神」の變りに「汝」を借りやう「我」より「汝」に移るのは一つの

世界の創造を意味して居る。即ち之は神の力を以つてゞ無ければ不可能なことである。即ち最も強大なる自我の持主、たとへば母の如きで有つて初めて、「汝」を愛し「汝」を産むことが出來るのである。之は生の更改である。それで社會主義の時代は、愛と尊敬の時代を意味して居る。何人も他人を略奪せず、何人も他人を侮辱し無い時代を豫想して居る。それでこの時代は生産者だけの時代では無い。生産者は、他の藝術品としての人間を産む――その中に自分の子も、他人の子も、自分の妻も他人の妻も這入つて居る。そして自分の子の教育者も、科學研究者も、各種の藝術家――消費者も這入つて居る。即ち、生産者は、汝を産むと同時に、藝術としての人間――消費者階級そのものまでも許容し、之に尊敬を拂ふことになるのである。そして消費者階級も生産者の爲めに消費するのであるから、生産者に不利益になる様な消費はしない。愛は此處に成立するのである。妻は人形では無い。然し彼女は彼に取つて一個の藝術品で無いことは無い。即ち彼はその生きた藝術品に愛を注ぐ。そうするとその生きた人形は愛の中に人間として復活する。彼女は生産者である夫より、生活費を要求する權利を持つて居る。彼女は一個の藝術家である。人間の創作をする。(その人間創作はも一つの不生産者を臨時殖すことになる。)この理屈と同じく、生産者は消費者に分化し、その分化したものに威張つて貰ふのが、「汝」の誕生の意義である。眞の社會主義はこの「愛」の源に湧くものである。

人間建築の内容

「汝」と「愛」とが人間建築の最後の階段であるとすれば、男女間の愛と敵手に對する愛民族間の愛罪人に對する愛とが問題になる。男女間の愛はマルキシズムの云ふ如くたゞ財産の問題だけを取り除いてしまつても猶問題が殘つて居る。之は自由に愛し得る時代になつて猶一層問題が大きくなるのである。之は社會改造の鍵である。たゞ物質の改造をしても人間がよくならなければ駄目である。その爲めには人種改良が必要である。そして人種改良の基礎は、男女間の愛の問題である。然しベルトランド、ラッセルなどが考へるやうに、男女問題は遂に宗教問題である。宇宙意志の飛躍の方向を知らずして、たゞ美人のみをよりわけて行くことは無意味なことである。

然し、更に苦痛を感ずることは、競争者に對する覺悟である自己のみを中心として、それに反對するものを憎み、ボルセヴ

キズムの樣に、その主義に賛成せざるものを凡て殺して居れば愛と汝の產れることは無い。それで「社會」を產む爲めには、符合によれる專制を全廢する必要がある。或は何主義或は何黨と、凡ての人間性を離れて、符合と表象によつて、人間性を滅却しまうことは許され無い。私はこれ等の凡ての虛僞を排斥する。昔は、宗教の名によつて、殺し合ひをしたものである。新教と舊教の戰爭は三十年續いた、マホメット教とキリスト教、キリスト教と佛教――宗教に於ては符合と表象の名の下に嘗て專制の無かつたことが無い。私はこの種類の符合政治と、表象宗教を破棄したい。私達は先づ人間として相愛したい。私等は偶像の統治を避忌する。私は人間としての凡てのものを、人間の相場で愛したい。佛教や基督教の名をつけて、憎み合ふことを教へる凡ての手段と方法に私は反對する。イエスは『善きサマリア』人の喩を以つて時代の人にこれを說いた。愛は符合を超越して居る。

更に國境の問題である。私は人間の迷妄が餘りに强い爲めに國境が地球の表面にほんとに引かれて居るものだと考へて居ることを憐む。私は國境を越えて愛したい。それは人間性の回復と、汝の誕生の爲めである。それで私は軍隊主義と凡ての武裝に反對する。

然し更に深い處に人間性の改造がゐる。それは、犯罪者に對する態度である。今日の監獄と裁判制度は人間が人間に對する取扱をする爲めに出來たものでは無い。それは驕慢と恥辱の巣である。人間社會にそんなものがあることすら、目醒めたるものには苦痛である。米國シンシン監獄の典獄トーマス、オスボルン氏（Thomas Osborn）は一九一五年頃囚人に監獄の自治を與へて、凡ての囚人に獄內の自由を與へた。その爲めに囚人がベース、ボールの遊技をすることが出來る樣になつた。之が紐育州の大問題となつて、オスボルン氏は非常に批難されたことが有つたが、然し、最後はオスボルン氏の勝利で有つた。オスボルン氏は先天性犯人種なるものを信じ無いのである。彼は囚人を病理的に取扱ふ爲めに、先づ囚人の自治的精神を養成せねばならぬと云ふ理由で自治體を組織させたのである。オスボルン氏自らの獄中生活の研究の結果、今日の樣な監獄生活は人間を獸類として取扱ふものであるから、人間として、よくなることは無い。それで、空氣と光線と遊技を與へねばならぬと云ふ彼の精神病理的硏究から、根本的に彼は監獄を改良した。その爲めに、さしも多かつた、紐育市の再犯者も、その改良案

の採用と共に、直に減少してしまつた。その前は出獄者が一年の中に七割位まで再犯者として歸つて來て居たものが、この囚人自治制と共に二割何分に減少してしまつたのである。それで効果の上から見て、オスボルンに反對することは何人も出來なかつたのである。

罪人に對する愛…罪人に對してまでも愛を注ぎ得る社會になつて始めて、人間性の確立が出來るのである。然し之はパン問題だけで凡てを解決せんとする唯物社會主義に取つては餘りにデリケートな問題である。此處へ來ると、大工イエスの取つた行き方『わが來りしは罪ある人を招きて悔改めしめんが爲めなり』と云ふ大膽な態度は、あまり宗教的であるから、普通の人は近づき難いが、結局は凡ての改造運動はそこへ落付く可きものであるのだ。つまり罪人までが悔改に導かれる爲めに愛せられ、育まれて初めて完全な社會と云ふものが出來上るのである。その時には、法庭も、死刑も、巡査も刑事も無用になるのである。今日これ等の人はどれだけ人間性を沒却して居ることであらう。人を疑はねばならぬ様に造られた、檢事と刑事の爲めに私は悲しむ。人間の悲しみの中に、人間を疑はねばならぬと云ふ役程辛いものは無いのだ。

人間殿堂の讚美

大きな太陽が昇る。人間性の回復とその隆起は、何人も妨げることが出來ない。之は世界の建築の中で、最も壯嚴なものである。獨逸の學者は細胞の模形から造つて居れば、人體だけでも二億圓の價値があると云ふ。どんな人でも、二億の持主で有るのだ。どんな貧乏な勞働者でも二億圓の自動宮殿を毎日運んで居るのだ。その自動宮殿に色々な額がかゝる——或は科學、或は宗教、或は藝術、之れみな一個の裝飾品である。然しその實際に於ては、人間殿堂程偉大な藝術品は無いのである。

然し、今日の資本と工場は、この絶大なる藝術品を油壺の隣に据えて、機械の間に鋏んで、軋るのである。今日の時代の工場こそ魔物である。

然し光明が工場の窓から、漏れてくる。工場は神の子で一ぱいになつて居ることが氣附かれてくる。そして、自由と光明の爲めに、機械よりも、この光明の子等の姿が拜まれる時代が來る。そしてあれ、今、太陽が昇る、人間建築は今や完成に近いのである。

（おはり）

物的改造か精神的改造か

慶大教授　阿部秀助

一

吾人々類が影を地上に印してより玆に約四十年、然かも此悠久な「タイム」の流れに於て、未だ今日の如く難問題の多きに苦められ、惱まさるゝ時代はないと思ふ、今の時代は一切を擧げて「謎」の時代であり「スフヰンクス」に翻弄せらるゝ時代である、然らば斯くの如き末法の世に於て吾人は何を求む可きか、何を解決す可きか、調和の闘爭か、精神的解決か物的改造か、現代文明の死活問題は一に是等の點に存するのである。

論者の見る處を以てすれば、近世文化生活の基調、少くとも其一面は ego の解放であり、社會の「スチルナー」式改造である、更に言を換へて云へば希臘人の所謂「汝自身を知れ」よりも一層深酷な「汝自身を利せよ」である、而して斯くの如き心的要求の下に近世の國民經濟生活が畸形的發展をなし、到る處に enrichissez-vous の叫聲を耳にしたことは深く怪むを要せないことである、勿論此時代の先覺者として思想上に多大の印象を遺した「アダム、スミス」の如きは眞に經濟的自由、自由競爭を以て吾人々類の個性發展上に於ても、又た一般世人の幸福を增進せしむる上に於ても最上の手段方法と信じたことゝ思ふ、即ち當時の彼れには墺國の經濟學者「ノイラート」が曾つて其「アダム、スミス」論に「朗らかな春の光が地上を照した際に、濕氣（うるほひ）ある地中に横へられた種子は著しく發育して、其萌芽は頭を擡げて先づ自分に接した部分を動かさんとし、長く保護者の地位に立つた總苞は餘りに狹く、加ふるに既に汁液なく脆弱なる結果、忽ち萠芽は之れを一蹴して其幼葉を自由な空に、光の天地に延ばし、其根は自己を支持し且つ養料を求むる爲めに地中に入るのである、即ち萠芽が一個の草木として新たなる裝を凝らす爲めには其肉果は解體し外皮は破壞せられなく

てはならぬ、若、吾人にして斯くの如き萌芽を有する種子の心を想ふ時、社會の活動要素として一箇の種子に比す可き我等自身は此植物的生活を體驗するを得るのである、げに種子の活動的要素に就きて考へらるゝことは甚だ新しき生活上の理想を實現する爲めには單に既存の外皮を破壞することゝ、自由に活動し得る物に解體せらるゝことが必要なことである、自由解放――之れが總ての解決上の表現語である」と述べた如き、情緒が其精神的內容に漂ふて居たことゝ思ふ、然かも其後に於ける事實は此偉人の要求を裏切つて、法悅的世界を出現せしむ可き自由の鍵は單に資本家又たは企業家の獨占物と化し、彼等は「人」を以て生產又たは消費作用をなす機械と見做し、其全力を擧げて如何にせば多くの富を集積し得べきかの方面に努力するに至つたのである、而して此間の消息を吾人に向つて最も能く示すものは此時代の思潮を體驗した「リカルドー」其人である、卽ち彼れは其著政治經濟學の中に或國民の富に對して、其國民が千萬たると千二百萬たるとは別に何等の意義を有しないことを云つて居るのである、斯くて吾人は富其者に對する個人的な集中運動は果して如何なる影響を近世文化生活に與へたかの嚴粛な問題に逢着するのである、論者の信ずる處を以てすれば彼の自由競爭によつて齎らされし經濟的文化の改造は遺憾なく聰明な自由主義者の期待を裏切つて其處には何等調和的な堅實な中流階級の發達を見ることなく、只だ目に映ずるものは一面に於ては大なる資本の集積と他の一面に於ては無產者階級の悲慘な生活のみである、斯くて勞資の挑戰は吾人の社會生活をして益々不安動搖の巷たらしめ、我等は玆に深く深く近世文化生活の惱みを感ずるに至つたのである。

二

嗚呼「プロレタリアト」！なれの運命には何等の刺激なく、何等の光明なく、冷たき生活の流れ、韻律なく、情熱なく、內容なく、平凡、單調、さながら寒冷にして雨多き十一月の空の如しと「ミヘルス」は叫び、更に「ゾムバルト」は其著「プロレタリアト」の中に資本主義的發展の結果として一般の興業が移されし第一の狀態は荒寥、寂寞、殊に精神上の寂寞、萎縮のそれなり、げに、何等寄邊なき「プロレタリアト」の群が倚ほ多く荒ばざることは驚異に價す」と論ぜし如き運命の下に生活する彼等は云はゞ近世文化の產出せし繼子で、其數に就きて「ゾムバルト」教授が、千八百九十年の獨逸の職業統計によつて吾

人に示す處によれば、「プロレタリアト」たる運命を有するものは全人口の六七、五「プロッエント」即ち約三分の二の多數を占めて居るのである、次ぎに英國に關して「チオツア、モネー」が年所得を基礎とせる人口統計を見ると七百磅以上の年收入ある富者階級は其家族を合して一二五〇〇〇〇、左迄生活に苦しまざる七百磅以下百六十磅以上の所得者は其家族を合せて三七五〇〇〇〇、百六十磅以下の所得を有する貧民は三八〇〇〇〇〇〇、即ち四千三百萬の中、三千八百萬、換言すれば全人口の八八・四「プロッエント」は貧民である、北米合衆國に就きて千八百九十年の統計によれば家族數一二五〇〇〇〇〇の中五五〇〇〇〇〇は五百弗以下の年收入である、更に同國に對して「グラハム、ブルークス」の精細な計數によると貧民四七六二五〇〇即ち全家族數の三八・一「プロッエント、」極貧六二五〇、〇〇〇即ち五〇〇「プロッエント」、而して以上の兩者三合算する時は、其數は八八・一「プロッエント」となるのである、斯くて數に於て近世文化生活を經せんとする「プロレタリアト」を哲學に連絡せしめて玆に一個の統一を見出さんとせしものに所謂科學的社會主義の創始者と稱せらるゝ「カール、マルクス」が存するのである、即ち彼自からの言に徵すれば「獨逸にとりて只一の可能性ある實際的自由は人類最高の本質上より其者を說明する理論の見地に基づいた自由である、獨逸に於ける中世の解放は一個の解放運動としては同時に中世其者を一部征服することによつてのみ可能である、獨逸にあつては總ての隷屬的狀態を破壞することなくして、隷屬的狀態の何れをも破壞し能ふものでない、獨逸の根本的基礎に對しては、根本的の革命を齎らすことなくては革命に到達し得るものでない、獨逸の解放は人類の解放である、而して此解放の頭腦は哲學で、之れが心臟は「プロレタリアト」である、即ち哲學が「プロレタリアト」、の反抗運動なくして實現し能はざるが如く、「プロレタリアト」は哲學の實現せらるゝことなくて其反抗的態度を高め得るものでない」と、知る可し彼れの哲學は「プロレタリアト」を以て之れが物的武器に供すると共に、「プロレタリアト」に向つては、其哲學を以て一種の精神的武器と見做したものである、然らば此の「プロレタリアト」式解放哲學の理論的根底には果して何れの點に於て吾人の服することと能はざるもの存するや、之れ次ぎに吾人の考察せんとする處である。

三

人は知らず知らずの間に自己の運命を其「勞作」に膨するものである、卽ち吾人は「ミレー」の畫を通じて彼れの敬虔的な態度と農民生活の間に生立つたことを理會し得るが如く、「マルクス」にとりて資本論以下の著作は彼れの作らざる運命の告白書である、而して此運命劇の道具立として特に彼によりて使用せられたものは「ヘーゲル」の辨證法（彼れの「ヘーゲル」に對する態度は其生活を通じて必ずしも同一でない、其初期に於ては「フオイエルバハ」に共鳴して辨證法の價値を疑つたが、其後「プルドン」に反對した著作以來、彼れは屢々辨證法を利用したと共に、殊に最近「ムクル」が十九世紀社會主義思潮史によれば晩年の彼れは四十餘年の活動後、倫敦に於て再び「ヘーゲル」研究に復歸したと云ふことである、「エンゲルス」の如きも「ヘーゲル」の辨證法は「マルクス」にとりて最も主要な研究法上の要素であつたことを云つて居るのである）と、佛蘭西式な思想とである、彼「マルクス」は何故に「カント」に走らずして啓蒙的思潮の崇拜者と化したか、「カント」と彼れとの間には到底相合すること能はざる一大鴻溝の存せしものありしか、之れ「マルクス」。「プロレタリアート」式解放哲學の構成要素を考察する徒にとりては注意に價する問題である、卽ち「カント」の自然科學に對する憧憬に貧弱な思辨哲學に對する反抗的態度とは「マルクス」にとりて充分、受入れらる可き要素たるに不拘、彼れが「カント」に走らずして、佛蘭西の啓蒙的思潮に動かされたことは勿論「フオイエルバハ」の感化もあるが後者が前者よりも、より多く彼れの運命に適合した點にあると思ふ、彼の「ルヰ」十四世時代の反動的思潮たる非國家主義、非基督敎主義の如き遺憾なく猶太民族たる彼の運命を象徴化したもので、而して此思潮の波を浴びることによつて、更に「サン、シモン」の一派に近づき、彼等の思想中より出來る丈け精神的要素を遠ざけて一個の思想的體系を求むるに至り、玆に「マルクス」の社會主義は經濟的福利の中に人類幸福の王冠を認めんとするに至つたのである、然かも斯くの如き理想主義に對する冷膽なる態度は果して所期の目的を實現し得可きか、露國の哲學者「ソロウヰエフ」は我等に代つて次の如き言をなして居るのである、社會主義は社會の倫理的道德的完成を直接經濟的秩序に隷屬するものとなし、且つ之れが改造が經濟的革命の方法によりて到達せらるゝものとの本質的事情は明かに社會主義なるものが其根本に於て彼れが最も嫌厭せる「ブルジョア」と同一の基礎――物質的利益を支配する基礎――に立てることを明か

に示せるものである、即ち金權的寡族政治の代表者に向つては物質的富の所有者たる人間の意義は營利者として其特性を發揮せるに對して、社會主義者に向つては人間其者は同じく單に物的幸福の所有者たる意義を有するのであるが、只だ前者と異なる點は、其特性が生産者たる點である、即ち以上兩者の場合を通じて人間は單に經濟的要素として觀察せらるゝのみで、更に兩者の場合を通じて其終極目的として、最高の良法として物的幸福のみが認めらるゝのである、即ち金權的寡族政治と社會主義との間には何等第一義的の區別が存して居ないのである、只だ社會主義は金權的政治の主義原則を徹底的に實現せんとするのである、若し經濟的營利的要素たる物的利益をより多く求むることが「ブルジョア」の特徴とせば吾人は吾人と類を低級な利害問題に極限せんとする社會主義を以て「ブルジョア」の最高の表現、終極的結果と見做すものである」と、而して歐米に於ける最近の勞働運動を觀察せし士には此哲學者の見解が必ずしも架空の論にあらざることを認むることを得ると思ふ、試みに最近に於ける米國の勞働狀態に就きて見るに、本年八月以降の同國に於ける同盟罷業數は同國政府の調査では全國に亘つて一日平均三百八件に上つたと云ふことである、殊に本年九月二十二日の夜半を以て開始せられた鋼鐵業同盟罷業の如きは同國の勞働運動史上、稀有の例で、之れが範圍は市俄古「クリーヴランド」を始めとし約二十餘州に亘つて工場の閉鎖されたものが多く、其初め同團に於ける勞働者側の計算によれば之れに加入せる人員は二十八萬五千人に過ぎずとせられしが、實際は其數を超過して三十二萬七千人に達したのである、而して之れが原因に就きては製鐵所側が米國勞働組合員を排斥せんが爲めに多數の歐洲方面の勞働者を雇用せんとせし點と一週六日間一日八時間勞働要求の如き之れが主要なる要素なる可きも、然かも尚ほ其根本に於て極めて重大な意義の存することは此運動がI. W. W. の建設者にして「サンヂカリスト」たる「フオダース」のなす處と稱せらるゝ點から見ても、又、此同盟罷業を直接指導した「ジョン、フイッツパトリック」の云ふ處を見ても、此同盟罷業の目的が米國に於ける各種の基本的工業を社會主義化せんとするもので、斯くて同團の勞働運動は漸次過激的の色彩を有し、然かも、之れによりて米國の國民生活は益々不安と動搖を呈しつゝあるのである、我等は現時の社會主義的運動が屢々勞働者の代表者を各會社の重役會に加入せしむる割込運動と化する場合に於て社會主義＋代議國會＝資本主義、資本主義－社

譫言=無駄話の感なきを得ざるものである。現に覺醒せる社會主義者たる「ツガン、バラノウスキー」の如きは「吾人にして人格の絶對的價値説を拒否せんか、現代に於ける總ての民主的要求は一種の空虚なる無駄話に過ぎず」と、云つて居るのである。――社會主義の理想化――之れ實に現時の文化問題に於て最も重要な意義を有するものである。

四

社會を對象とする改造の精神は、總てを通じて精神の改造に存する如く、我等の求めんとする態度は「マルクス」に向つて「コペルニクス」的轉移を齎らさんとする點にある、即ち「マルクス」の政治經濟學批判の吾人に傳ふる處によれば「人類生活上に於ける社會的生産中に、人は其意志によつて左右せられない特殊の必須な狀態を認め得るのである、而して此生産狀態なるものは吾人の物的生産力の特殊な發展的階段に相當せるものである、更に此生産的狀態の全部は眞の基礎たる社會の經濟組織を構成するもので、此眞の基礎の上に所ゆるものに法律的政治的の上層部が存し、此の眞の基礎に相當する特定の社會意識形體なるものが見出さるゝのである、物的生活の生産方法は概して社會的、政治的、思想的生活過程を條件付くるものである、即ち吾人の意識が吾人の存在(ザイン)を規定するものでなく、寧ろ其れと反對に吾人の社會的存在が吾人の意識を決定するのである、吾人の發展上、或階段に於て社會の物的生産力が既存の生産的狀態即ち單に法律上の言葉を以てすれば動搖し變化する生産狀態を有する所有關係と矛盾撞着を惹起すに至り、生産力の發展的形式上より以上の束縛的狀態は〇〇せられ其處には〇〇〇〇〇到來す、而して經濟的根本則の變化につれて全部の宏大な上層は後かれ早かれ變化を被むるものである、次ぎに斯くの如き變化を觀察する際には吾人は常に經濟的生産條件に於ける物的自然科學的に眞なる變化と法律的、政治的、宗教的、藝術的或は哲學的即ち之れを簡言すれば思想的形體――其處には吾人が此軋轢を自覺し且つ反抗的態度を有す――との間に絶えず區別すること必要である、何が個人なるやに就きて吾人はそれが現さるゝことに依つて批判することと僅少なると共に、又、吾人が斯くの如き變化的時期を各自の意識によりて批判することも同じく僅少にして、寧ろ斯くの如き意識は物的生活及社會的生産力と生産的狀態の間に存する軋轢から説明さるゝことが必要である、或社會的組織は總ての生産力が發達する以前には決し

て破滅するものでなくて、寧ろ持續するものである、又、より發達せる生産の新狀態に之れが物的存在條件が舊時の社會の胎内に於て發育する以前には決して其地位を占むるものでない、かるが故に人類は常に彼等が解決し能ふ任務を課するもので、之れを詳細に觀察するに於ては、次ぎに述ぶるが如きこと絶えず發見せらる可し、即ち任務其者は其解決の物的條件が既に存するか、少くとも之れが發展の過程に於て考えらるゝ點より發生するものである、極めて概括的に見て亞細亞方面、古代、封建時代及近世の生産方法は經濟的社會組織の進步的時期として表示せられ、次ぎに町人的生産狀態は社會の生産的過程の反抗的形式で此反抗的形式は個人的反對の意義でなくて、寧ろ個人の社會的生活條件より發生せる反抗であるが、然し外人的社會の胎内に於て發生せる生産力は同時に反抗的態度を解決する物的條件で、此社會組織を以て人類社會の先史時代が其終りを告ぐるのである」と、更に「エンゲルス」の云ふ處によれば『新たなる事實は過去に於ける歷史の全部に向つて新考察を加ふ可きことを以てするのである、即ち總て過去の歷史が階級鬪爭の歷史たること、斯くの如き社會に於て相互の間に軋轢する階級が何れの場合にも生産的流通的狀態即ち簡單に云へば其時代の經濟的狀態である、更に詳言すれば社會の各時代に於ける經濟組織が眞の基礎を構成せる場合に、此眞の基礎より法律的、政治的制度の一般的上部組織及歷史上の各時期に於ける宗教、哲學其他の表象的方法を根本的に說明するのである、斯くて理想主義なるものは最後の避難所から、又、歷史上の解釋から驅逐せられ、これに代つて物的史觀なるもの與えられ、過去に於て見し如き人類の存在が其意識から說明せらるゝ代りに、却つて人類の意識が彼等の存在より說明せらるゝ途を見出すに至つたのである』と、即ち吾人が「マルクス」及「エンゲルス」によつて理解し得る處は、意識が飽迄賓であり、副である點である、論者は斯くの如き兩者の態度に「コペルニクス」的轉移を試みて、意識其者に中心的意義を與へんとするものである、けに「マルクス」と「エンゲル」とが單に吾人の意識を以て現實の表象となす以外に更に多くの注意を拂はなかつたことは、彼等が獨逸理想主義の迷子と稱せられた「フオイエルバハ」及當時に於ける佛蘭西の思想に共鳴するの甚しきを加えた結果である、我等の見る處を以てすれば意識の内容は自から個別的、普遍的とに區別し得可く(「エッアルト、スプランゲル」參照)而して吾人の所謂、普遍的意識なるものは絆さるゝ處のない自由な意識其

者で玆に「カント」の普遍的な客觀的な超經驗的な超個人的意識を求め得可く、玆に統一的作用と、創造的綜合力とを求め得るのである、而して吾人が社會共者を以て一個の形而上學的内容を有するものと見做すことが、最近、哲學の要求と背馳するものであることは「カント」の超經驗的哲學を出來る丈け徹底的に出來る丈け確然たる形體を以て表現せんとする新「カント」殊に「リッケルト」の價値哲學が漸次「フイヒテ」の哲學に接近しつゝあるを以て證することが出來ると思ふ。(「エステルライヒ」「十九世紀の後半期に於ける獨逸哲學」參照)

我等は重ねて云ふ、改造の精神は精神の改造である、彼の「マルクス」の「プロレタリアト」式解放哲學に鞭打たれてから玆に約半世紀、我等は今や新人生觀、新世界觀の黎明期に達せんとして居るのである、而して此新人生觀、新世界觀は其一端を「カント」「フイヒテ」に發し、更に他の一端を「ジョーレス」に求めんとするのである、社會主義の理想化、調和的哲學の構成これ實に吾人の求めんとする改造運動の中心的楔子である。

(十二月三日脫稿)

教育問題に對する勞働者の自覺

文學博士　小西重直

一

勞働者は或る程度まで生活の壓迫より自由ならんとして居るのは實際生活上の當面の問題として已むを得ぬことであらう。また其政治的自由に關する運動も國民生活といふ點より見て自然の勢であるであらう。而かも此等の問題解決の根本力となり其社會的地位を高め人間として國民として充實せる生活向上を促かし得るものは彼等の自發的な文化運動であるのである、此問題は國家社會といふ大局より見ても極めて重要な意義を有して居るのであるが、いふまでもなく教育問題が其中心問題であらねばならないのである。而して其教育には成人勞働者の

教育、青年勞働者の教育及幼年勞働者の教育、勞働者の幼兒保育などの問題があるのである。

二

工場に於ける成人勞働者の中には中等學校の卒業生なども多少見出される樣子であるが、まだ千人中四人か五人に過ぎないといふことである、概して言はゞ一般に教育の程度の低きもの、又は無學のものも少くはない樣子である。即ち百三十五萬人余の勞働者中で義務教育を完了せるものは約三分の二であつて高等小學を卒りたる者は約十五萬、而かも不就學の中でも自分の姓名を書き得ざるものは五萬に近いといふ樣な情況らしいのである。

元來筋肉は筋肉によりて動くものではなく、夫れが内面の意識の支配を受くる場合に初めて其活動の方向や樣式が定まるのである。熟練とか、正確とか、耐久とか、敏捷とか乃至は運動の強さとか、いふ樣なものは多くの場合に於て正確な統一ある意識に基くものである。之れに反して運動の散漫とか其統與安定の缺乏といふ樣なものは多くは不正確不統一の意識に基くのである。ホールの言葉を借るならば彼の所謂筋肉上の德も筋肉上の缺陷も單に筋肉其ものにのみ原因があるのではなく、深き意識の中に其主力を求めねばならぬことは今更多言を要するまでもない、嚴密に言ふならば純なる筋肉の勞働といふことは考へられない、所謂筋肉勞働といふことは筋肉が一定の目的、一定の方面に向い一定の樣式の下に運動する動的狀態であるのであるが此れは意識の下に統一され支配されて居らねばならない、唯だ熟練といふ樣なことは筋肉の習慣とも見ることが出來るので必ずしも常に意識的でない場合もあるであらうけれども其習慣が形成さるゝまでは意志の努力の下に筋肉が修練されたものに外ならないのである、然し機械工業が益進歩して殆んど人力を俟つの要がなく、職工は機械の番人となるならば是には筋肉其ものよりも寧ろ注意力とか觀察力などが必要であつて筋肉勞働といふよりは精神勞働に近づいて來るのである、勿論概念的加工の思考や情念表現の藝術の如きものに比すれば甚だ單純なものであるけれども、矢張統一ある意識の働であるに相違ない。ナトルプは勞働を意志の最低度なる衝動に即したものと見て居るが生產的勞働は衝動的勞働以上のものであらねばならない、衝動的勞働には勞働に對する深い反省や自覺は豫想され得ない、夫れは唯だ眼前の一局部に對する盲目的な動作に過ぎないのである。例へば軍艦製造の場合に其一局部の勞作

に堪能である許りではなく軍艦の全體に關する理解を有し居る所に其の分業の意義が存するのである、分業は局部々々の分擔であるけれども全體と關係する局部の分擔である、少くも全體に關して理解して居ることが必要である、卽協同的な態度に基く所の分業であつて初めて分業の眞義が發揮さるるのである、斯くて仕事の意義も鮮明となり勞働其もの丶自覺が一層明かとなつて來る、然して此全體に關する理解は教育の方法によるより外はない、デユイーなどのいふ様に直接の經驗によりて理解するか又は符號によりて理解するかであらうが、何れにしても教育的な働に因らねばならないのである。局部の勞作も無論教育の力に俟つのであるが、全體に關する理解は筋肉上の習慣よりは心意上の働を豫想するものである。

斯くて勞働其ものに於ても教育は根本の力となるのであるが勞働者は家庭の一員として、家庭生活の維持者として、社會の一員、國民の一員として、人類の一員として相當の義務と權利を有し、意識内面に於ては益々高き自覺的な統一を進め、外に對しては協同生活を充實して行く所に眞に人としての向上生活に入るものであらうが、意識内面の統一には理性を發展させる必要が起り、協同生活の充實には少くとも外圍に對する意義的理解が必要である、意義的理解が出來れば外圍と自己が一體となつて來る、デユイーの所謂同一の地位に進んで來るのである、而かも此等は皆教育の力に俟たねばならないのである。政治の事を理解せずしては普通選擧は無意味である、理性的に選擧する能力がなければ選擧權は意義のないものである。政治の實體と同一の地位に立つには先づ政治を理解する必要があるのである、道徳の實體と同一地位に立つには此を理解し其意義の實現に力むる必要がある。一般に文化と同一地位に立つには直接に文化創造の運動に參加せずとも少くも此れに對する理解と同情を有して居らねばならない。之等も固より教育の力に俟つものであつて、苟くも勞働者の生活と地位とを高めんには勞働者自ら進んで其教育的要求の實現を圖らねばならない勞働時間の短縮や、勞働向上の要求には教育的要求が一の主要な要素として豫想し置かれねばならないものと思ふのである。實際生活の費用を多少節しても茲に意を致す様になることが欲しいのである。

三

青年及幼年勞働者にありては彼等の身心の發達に於て成年者

と比較し得ざる程其機的の意義を有する時代に相當するが故に其教育問題は成年者の夫れに比して勞働夫れ自身と一層深き關係に立つて居るのである。英國などに於ては十八世紀の末に一方には手の勞働より機械の勞働に移らんとし、他方には機械勞働が一般に普及する前に手の勞働によりて出來る丈の利益を占めんとし、殊に屋內勞働を主とするものは工場と競爭せん爲めに出來る丈勞働率を高めんとし兒童勞働の要求は著しく增加し子供の夜業は勿論六歲前後の子供は一日に十四時間以上の勞働を强いられたといふことである。而かも雇主の態度は頗る殘酷なものであつて子供を打つたり縛つたり、減食を命じたり色々な苛酷な鞭が無邪氣な子供の上に落ちかかつて來たのであつて、甚しきは十八世紀の初頃より行はれたことで、五六歲の幼兒を煙突內部の掃除に使役し、煙突內の子供は下より吹き上げらるゝ火氣の混じた煙の爲めに煙突外に投げ出されて悲慘な最後を遂ぐるものや、煙突內部が未だ冷却し居らざる爲めに內部で燒死するものさへあつたのである。從つて政府は十九世紀の初頃より此等の點に關し多少保護を加へて來たのであるが千九百〇三年、殊に昨年のフイシヤーの教育法案と關聯し餘程改善の域に進み今では十二歲以下の幼年者には絕對に勞働を禁止することになり、十四歲以下のものは學校の始業前や午前六時前や、午後八時以後には使役されない樣になつて居るのである。其他勿論健康上有害の作業や、危險の伴ふ作業に雇用することが出來ないのである。（Engel the Elements of child protection 1912 p 157-198）獨逸プロエセンに於ても千八百二十四年頃より兒童の勞働に關して調査を初めたが其頃は一日十四時間の幼年勞働者の數は仲々少くはなかつた。千八百三十九年には夜業や日曜日の勞働を禁じ、年齡も九歲以上と制限したマルクスの如きも千八百四十八年の社會主義宣言書に於て兒童の勞働廢止を叫んで居る、其頃度々保護法も出たのであるが千九百〇三年の保護法は比較的整つたものである。而かも獨逸に於て此等保護法の下にある幼年勞働者の數は何程位かといふと千八百九十八年の調査では十四歲以下の幼年勞働者は獨逸全國で五十四萬四千二百八十三人であつて小學校學齡兒八百三十三萬四千九百十九人に對し約百分の六、五三に相當して居る、（Lexis-Unterrichtswesen in deutschen Reich III S. 14, 50.）而して千九百十三年に至りては工場に於ける十四歲以上の青年勞働者は五十五萬六千人以上に達するも十四歲以下の幼年勞働者の數は僅々四五千人に過ぎぬのである。之れ畢竟主として

兒童勞働保護法の結果であらうと思ふ。而かも此等の中大多數は十七八歲迄の補習教育を義務的に受けて居るのである。日本に於ける此種の調査の十分に出來上つたものが公表されて居らないのは遺憾であるが幼年や青年勞働者が日本の產業界に於ける一大勢力であることは許容さるゝ事實である。然しながら國際勞働會議の大勢より見れば日本に於ても將來は通則として十四歲以下の勞働を禁止することにならねばならない、從つて眼前の問題としては兎も角、近き將來に於ては幼年勞働者といふものはなくなつて余の所謂青年勞働者の教育が問題の中心となるのである。そこで日本に於ては義務教育を二ケ年延長するか、又は現在の狀態其儘ならば六ケ年の義務教育を實行したものは成るべく高等小學校に進入することを獎勵すると共に他方には補習教育を完備して少くも十四歲迄は放浪生活をなさしめぬ丈の施設をなさねばならない。理想としては戰前の獨逸や、昨年通過せる英國の教育法の如く十四歲迄を小學教育の義務となすのみならず十八歲位迄補習教育をも義務となすことが最も望ましいことである。而かも是に問題として考究して見たいのは補習教育の意義である補習教育の精神は義務教育未完了のものに其の不足の點を補ふといふ意味ではない。義務教育完了者に對して不完全ながらも夫れ以上の教育を新たに與ふるといふことが其意義でなくてはならない。過渡期に於ては成年者であつても義務教育を完了せないものは少くはない、之れは適當の方法で社會教育的に修養を積ませるより外はない、幼年者で義務教育未完了のものにも夫々便宜此を補足するとか無論必要である。即ち各種の工場に於ける勞働者の中百分の三十パーセント以上は義務教育未完了者であるといふことであるが、此等には其勞働時間の短縮と共に夫々相當の方法によりて教育上の補足を行ふべきは勿論であらうし、殊に彼等は自ら進んで教育を受くることが望ましいのであるが積極的向上的に國民の能率を高むるには義務教育完了者に更らに新しき高き補習教育を與へねばならない、此意味での教育を從來の如く補習教育といふ言葉で取り扱つてよいか如何かは問題である補習といふことに義務教育丈では不十分であるが、さりとて一般の中等學校の如く完備した教育を一般に義務とすることも出來ない、又一般に夫れに入學する資力や能力を欠いて居るものもあるので、不得已義務教育と中等教育の中間のものを授くるのが補習教育である。然し其深さより見れば修業年數の如何によりては或る特種の學科や技能に關しては或は中等學校で授くる以上のもの

もあり得るのである、此點より見れば必ずしも中等學校より以下のものと見ることも出來ない場合がある。假りに英國の如く、若くは戰前の獨乙の如く十八歳位迄も補習教育を義務とする場合には Continuation School とか Forthildings School とか日本の様に補習教育といふ様な手輕な名稱と組織では餘り輕く見過ぎる様な嫌があるのである。余は寧ろ少くも「簡易中學校」とか「特殊中學校」とでも改稱し、單に小學教育の不足を補習するといふ様な輕い意味ではなく特殊の意味と組織と權威とを持たせたいと思ふのである。斯うしたからといふて義務と出來ない理由もない。永い將來には今の中等教育を國民一般の義務となすの時が來らないとも斷言が出來ない。又名稱は強いて改めずとしても殊に活氣横溢理想大なる青年が其境遇の拘束の爲めに勞働に從事し、其餘暇を以て而かも疲勞に堪へつゝ教育の恩典に浴せんとするものゝ爲めには、其組織や内容に於て實質上少くも或る點に於ては中等學校と劣らざる位のものにしてやることが社會が彼等に對する義務であらう。從來は勞働時間の多いことゝや、父兄の教育熱が少いことや、學校も不完全な爲めで、補習教育を完全に熱心に受けやうとするものは大都市等を別にして一般には未だ少數であるかも知れないけれども勞働階級の生活改善と共に其自制節約に於て戒心する所あらば自然に子弟を教育する餘裕も生じ來るべく、青年勞働者も其勞働時間を減少せらるゝに至らば此を其教育的修養に利用すべきである。而して國家社會は補習教育の組織内容を完全にするならば彼等の好學心も一層強くなつて來るであらう。殊に一般勞働者の全體的生活の向上と其全體的地位の向上との爲めには勞働者自ら進んで補習教育の充實を叫ぶの必要あるべく、國家も亦た國民生活の向上の爲めに一日も速かに此機關の充實を期すべきである。國家的見地より見れば國家は其發展の必要と義務的に補習教育を課し得べしとするも、教育の本質上より言はゞ國民自ら進んで學に就かんとするの自發的態度が最も根本的のものである。國家が補習教育を義務となすの前に勞働者の側よりも補習教育充實の聲が高まらなくてはならない。自分達の生活の改善の根本には斯の様な重要問題の豫想がなくてはならないといふことに自覺せねばならぬと信ずるのである。幼兒保育場の如きも勞働者に は勿論今日は夫婦共稼の知識階級に對して痛切に其必要を感ぜられて居る、幼稚園の改造問題も之れと關聯して來るのであるが、此問題に對する卑見は他日に讓ることゝにする。



思想・評論界新人評

見た儘、聞いた儘

―長谷川如是閑―賀川豊彦―室伏高信―
與謝野晶子―山田わか―

堺　利彦

一　天衣無縫の逸品

私の近來知つた人物の中で一番の逸品は長谷川如是閑君だ。三四年前、私は或事で初めて彼を『大阪朝日』に訪うた。如何にも一種特異の人物だ、といふのが先づ私の感じだつた。背の高い、寧ろ痩せた、フロックコートのスッキリした紳士が、其の黑い稍長く延ばした髮を奇麗に中央から分けて、兩方の耳の上で著るしく其の末端を縮らせ、嚴肅な、而もおだやかな、其の長い顏に白い前齒を少し見せて私の前に立つた時、どうしても世間並の新聞記者とは見えなかつた。學者、詩人、藝術家、其の三つの特徴を兼ね備へたとでも云ひたい風采だつた。髮の縮れをキザに感じさせるには、餘りに氣品が高かつた。社會部長といふ職名がどうも此人にそぐはないように思はれた。

『朝日』騷動が起つた時、主筆の鳥居君よりも寧ろ長谷川君が元兇だらうといふ話を聞いた。間もなく雜誌『我等』が東京で發行された。長谷川君と大山郁夫君との立ても

つた歳である。長谷川君の思想上に於ける個人的色彩が初めてハッキリ私の目に映つた。彼は論文を書き、時評を書き、小品を書き、随筆を書き、小説を書いた。而もそれらを同時に多量に書いた。彼れの哲學的な所と、それにも係はらず非常に世間的な所と、又極めて飄逸で無邪氣な所と、そうして又、それにも係はらず編輯上に甚だ事務的であるらしい所とが、『我等』を光らせ、湛はせ、賑はせ、引締らせた。

二個の人物が共同して一事業をやる時、大抵の場合、その一人は謂ゆる女房役になる。勿論、女房役にも色々あつて、從順な世話女房もあり、腹のすわつた賢夫人もあり、才氣縦横のヤリテの奥さんもあり、時としてはオツカさん（若しくはネエさん）然たる保姆的監督的の細君もあるが、いづれにしても御亭主を表に立て、自分は主として内助の功を立てるに努めるのが通例だ。『大阪朝日』に於ける長谷川君は、或は『賢夫人』であつたかも知れない。或は『監督的細君』であつたかも知れない。然し『我等』に於ける長谷川君は、明かに亭主役と女房役とを一緒に務めてゐる。彼れの學問、文章、識見、力量、手腕は燦然として『我等』の紙上に輝きわたつてゐる。

『朝日』騒動は頗る重大なショックを一般人心に與へた。彼等脱退連は新思想の代表者、急進思想のチャンピオンとして一世の渇仰を博した。爾後一年有半、彼等の多數の現状はどうだらう。松山君は『讀賣』に據り、鳥居君は『大正日々』を創めた。兩者共に紛れもない資本家新聞だ。尤も、今の時、資本家に依らないで新聞の出來る筈がない。昔しマルクスが主筆となつて活躍したライン新聞及び新ライン新聞も矢張り其の持主は資本家だつた。資本家新聞を利用するのも一策に相違ない。然し『讀賣』が今に於いてサッパリ舊套を脫した點が見えず、『大正』が創刊の劈頭から貴族的、資本家的の紛々たる俗臭を放つてゐるのは、どうしたものだ。此に於いてか『我等』の小城が益々光つて見える。私は長谷川君、大山君等の籠城の苦心を察すると同時に、深く其の意氣俠骨に敬服せざるを得ない。

私は此ごろ著作家組合で屢々長谷川君と會つてゐる。近く其人に接して見ると、初見に感じた嚴肅が消えうせて、只だ其の砕けた方面が著るしく現はれて來る。最近、私は又、新人會の一週年記念會の席上で彼と同席した。彼は同會者から『何かお話を』と頼まれた。彼は手を振つて斷つてゐたが、強いて頼まれてヤオラ演壇に立つた。彼は大島のカスリの羽織にセルの袴をはいてゐた。私の初見のフロックコート姿とは非常な違ひだ

髪が餘ほど短くなつて、縮れが餘ほど小なくなつたのも、大いに通俗味を示してゐた。彼れの『お話』は眞に卽興だつた。『革命なんといふ事は、私の雜誌には書くめいと思つてゐる』などゝいふ洒落で人を笑はせ、『然し、レヴオリユーションとは廻轉といふ意味ださうです。機械は廻轉しなくちや仕方がない』と少しとぼけた口調でやり、『尤も、機械が廻轉すれば、上の方は下になり、下の方は上になる』と手眞似をして見せ、『だから、上から下に廻つた者に取つては危險だが、下から上に廻る者に取つては大いに愉快です』と云つたような話し方で、始終例の齒を見せて笑ひながら、輕妙、滑脫、溫籍、含蓄の妙を極めた。同席の生田長江君は彼れの演說を評して『天衣無縫』と讃した。之も同席の山川均君は其日はじめて彼に合つて、『實に素晴らしい人物を見た』と感嘆してゐた。(『素晴らしい』は、或は『驚くべき』であつたかも知れない。少し私の記憶が不鮮明になつてゐる。)

聞く所に依れば、彼は獨身主義者である。少くとも今日まで獨身生活者である。こゝに獨身といふのは、單に妻と稱する者と同棲してゐないといふだけではない。そして彼れの親しい友人でも、其の理由を知らないといふ。何にしても彼は實に『逸品』だ。『一種特異の人物』だ。年は知らないが、もうそんなに若くはない。

二　アメリカ式と無抵抗主義

『新人物の出現!』といふ廣告文で『精神運動と社會運動』といふ本が出た時、私は初めて賀川豐彦君に注意した。尤も、其前にも『貧民心理の研究』といふ本を寄贈された事もあり、關西の勞働運動者として有力な人だといふ話を少しぐらゐ聞いた事もあり、或る席上でチョット一度會つた事もある。實際『新人物の出現』だらうと思つた。其後、彼は論文家として、又友愛會の運動者として、メキメキと社會に賣り出した。

實を云ふと、私は餘り彼れの文章を讀んでゐない。少しは讀みかけて見たが、何しろ博學で、そして私とは全く正反對の、純粹精神主義の行方なので、どうにも齒が立たない。二度目に著作家組合の大會で合つた時、唯物史觀について早速議論をしかけられたが、私は只だ降參するより外なかつた。

三度目に偶然會つたのは、去年の夏、山川均君を訪問する電車の中だつた。大森の停車場で降りて、餘り暑くはあるし、汗を垂らして人の内に行くも厭だから、人力車に乘らうかと思つ

て賀川君の意向を聞くと、『僕は歩きます』と誠に簡單明白だつた。私も早速同意して一緒に歩いた。其の道々、彼は翌日の友愛會大會を見に來ないかと私に勸めてくれた。

それが縁となつて私は友愛會の大會を傍聽した。其の大會に於ける彼は實に善く働いてゐた。關西友愛會の代表者として、勢力もあり、信用もある花形だと見受けられた。『目さめよ日本の勞働者』といふ彼が自作の勞働歌を黑板に書いて、音頭を取りつゝ會衆と一緒にそれを歌つてゐたのなどは、實に心持のいゝ光景だつた。然しどこやら少し耶蘇臭い所があると思つた。

或る議案の說明の時、彼れの說明が餘り簡單で、『理由は之だけです』と云つてソツケなく元の席に復したのを見て、何だか少し調子が變だといふ感じがした。くどくど說明する必要が無かつたのだらうとは思つたが、それにしても餘り愛嬌が無さすぎると思つた。彼と話して見ると、溫厚で、柔和で、快活で、社交的で、愛嬌がないどころではないが、どうかすると斯ういふソツケない所があるらしい。忙がしくしてゐる所に人が來訪すると、『僕今日は忙がしいです』と、行きなり頭から浴せたりするので、面くらふ人もあると聞いた。そこがアメリカ式かも知れない。

彼はまだ三十の上を幾らも出てゐないだらう。勞働首領としては謂ゆる貫目が少し足りないようにも見えるし、其の瀟洒たる風采に今少しの逞ましさがあつたらとも思はれるが、然し其の演說は可なり煽動的で、猛烈の氣に富んでゐる。精力の旺盛な所も眉宇の間に現はれてゐる。其の精力、其の腕力、其の筆力、正に働きざかりの新人物だ。只だ實務の才、畫策の才はどんなものか。餘り人が好すぎるといふ批評も聞いた。

私は先ごろ大阪の勞働問題講演會で賀川君と同席した。其時の彼れの演題は『生物學上より見たる顏の進化』といふ面白いもので、演壇のテーブルに紙を張つて幾つも顏の畫をかいたりして、ジエスチユア澤山で諧謔的の諷刺談をやつた。其の聲は隨分大きかつた。ジエスチユアには西洋人らしい所があつて、聊か厭味に見える點が無いでもないが、兎にかく含蓄の話しぶりは頗る巧妙だつた。其の講演會が解散になつて二千餘の聽衆が大混亂を現出した時にも、彼は只ニコニコしてゐた。

『改造』の去年十二月號にある賀川君の『無抵抗主義』を讀んだ。階級鬪爭說は見事に否認されてゐる。然し『階級鬪爭は事實である。』ストライキもサボタージも『許容』されてゐる。然し、ストライキは『勞働者の宗敎的斷念である。』『敎育的

直接行動である」即ち無抵抗主義である。此の潔癖な無抵抗主義、此の無抵抗的階級闘争主義、此の階級闘爭的無抵抗主義が、今後の複雑な勞働運動に應用されて、實際上に果して矛盾撞着を生じないか。そこが少し案じられる。

之を要するに、賀川君は善人である。温厚柔和の君子人である。然るに其の善人君子が『勞働者崇拜論』の爲に起訴されてゐると聞く。又紀州に起つた或る不敬事件の被告が賀川君の門人見たいな人だと云ふので、賀川君は先生として門人の責任の幾分を負はされ、少からず政府筋から睨まれてゐると聞く。善人でも君子でも油断のならない、恐ろしい世の中だ。

三　蘭の葉の様に亂れ立つた髮

去年の十一月、『改造』發展の祝宴が築地の精養軒で開かれた時、私も招かれて出席した。お行儀のいゝ方々は十時前に退散せられて、あとに十人ばかり長尻連が殘つた。尤も、其中には主人側の山本君、横關君、秋田君があり、外に與謝野晶子さんがあつた。晶子さんをお行儀のよくない部に加へては相濟まぬが、兎にかく平氣で長尻連の中に踏み止まられたのには感服した。そこで皆々晶子さんを『女王』の席に招じて、其の左右に居ながれ、散々馬鹿話をして夜を深かした。其時、女王席の左側には白柳秀湖君、高畠素之君、及び私などが居り、右側には片上伸君、室伏高信君などが居つた。所が段々容貌の棚おろしが始まつて、布袋然たる秀湖君、土色の私などは問題にならず、高畠君は問題になつても、『ボリシエヰキの下廻り』といふ山本君の評語が大いに喝采を博した位のものだつた。私はそういふ批評を聞きつゝジツト向ふ側の席を見てゐた中、つい心の底から斯ういふ聲が出た。曰く『此中で畫になる顔は片上君と室伏君との二つきりだ。』

之には列座の人々悉く贊成した。先づ片上君は若いに似合はず禿げ上つた廣い額が目につく。況んや白皙でキメが細かで、我々のような土蜘蛛の子孫らしい者から見ると、どうしても一段優等の人種らしく感じられる。少くともヨーロッパ人との合の子ではないかと思はれる。次には室伏君。彼れの顔には一種の殺氣が現はれてゐる。彼は痩せてゐる。可なり高い鼻梁背の兩側に深い皺が出來てゐる。笑ふ時にはそれが一層深くなる。從つて其の笑ひの間にも殺氣が漏れる。彼れの目は少しく尻さがりになつてゐる。笑ふ時にはそれが一層さがるように見える。其の目尻のさがる所に愛嬌も生じてゐるが、其の愛嬌の中

にも矢張り多少の殺氣が混じてゐる。そして目の光は可なり鋭どい。況んや彼れの斯ういふ顔が、蘭の葉のように亂れ立った髮の下に位してゐるのだから、そこに最も多くの殺氣が認められる。

一體、髮毛の有無と長短と其の形狀とは、人相の上に大影響を與へる。有無は體質上の自然の結果で本人の趣味に關係がないが、長短と形狀とには多くの場合、本人の趣味が現はれてゐる。然し體質上の自然がやがて其の人の自然の趣味だとも考へられる。又其人の意識的趣味に俟つた長短形狀も、矢張り體質の自然、毛質の自然を基礎としての巧みであり、拵へであるとも考へられる。そこで何れにしても、髮は其人の趣味氣質を表現する事になる。

我々のような、何等の特徴のない、平凡な顔の持主は、髮も矢張り五歩刈のグリグリ坊主にでもして置くより外に仕方がない。實際私はそうしてゐる。そしてそこに又、自然に私の無趣味、若しくは平凡趣味が現はれてゐるとも云へる、前項の長谷川君の著るしく縮れた(或は縮らせた)髮の事も、ここで又思ひだされる。

そこで室伏君の髮は蘭の葉のように亂れ立つてゐる。或はそういふ風に亂れ立たせてゐる。立つてゐるのか、立たせてゐるのか、それは今私に分らないが、右に云ふような考へ方からすれば、どちらでも同じ事である。立たせようとしても立たなければ仕方がない。自然に立つから立たせようともするのである。髮を延ばすと延ばさないとは本人の自由に出來る事だが、延ばして美しくもなく、面白味もないなら、自然延ばさない事になるだらう。故に延ばされた髮には大抵必ず美しさがあるか面白味がある。そして其の面白味と美しさとの中に其人の趣味と、意氣と、抱負とが現はれてゐる。

重ねて云ふ。室伏君の髮は蘭の葉のように亂れ立つてゐる。(但し此蘭は細葉の自然生の蘭だと想像して下さい。)そして室伏君の野心と、自負と、矜持と、少し惡く云へば衒氣と、虚榮と、修飾とが、此間に現はれてゐる。彼れの顔が畫になるのは、其の目と鼻と頬の皺との特徴に依る事も勿論だが、然し第一には此の蘭の葉に依るものと考へる。

私は室伏君の思想上の立場について幾度も批評を加へた事があるが、實は今日に至るまで、まだ彼れの正體を見定める事が出來ないでゐる。然し近來、度々その顔を見るにつけて、どうやら直覺的の判斷が出來たような氣もする。

改造會の席上で、誰だつたか、室伏君は支那のアナキストのようだと云つた。之は『ボリシエヰキの下廻り』と一對の好評であるかも知れない。兎にかく彼れの顔はアナキスチックである。ソーシャルスチックではない。然し『支那の』を改めて『軟性の』としたら一層よく當るかも知れない。或は『半燒の』を適當とすべき理由があるかも知れない。

隨分妙な人物評が出來上つたが、室伏君の親分なら横山雄偉君は『印象的人物評』が得意で、『加藤高明其他』と題する、特色ある人物評の文集を出してゐる程だから、或はこんな妙な物をも面白がつて呉れるかも知れない。私は特に此の一項を横山君に捧げる。

四　偉大な體格、しなやかな姿

同じく改造會の席上で、與謝野晶子君と山田わか君とが並んで着席して居られた事を思ひだす。

與謝野君と山田君とは近來盛んに論戰を交へてゐる。婦人職業論と母性保護論者との爭ひである。山田君が『母性を保護せよ』と云へば、與謝野君は『寧ろ女性を保護せよ』と云つてゐる。私はそれらの論爭文を委しく讀んだわけではないが、兩君とも可なり激烈な字句を用ゐ、嘲罵の語氣を示してゐるらしく見える。然るに兩君は右の席上で久しぶりの邂逅を樂しむものゝ如く、誠に心安げに語つてゐた。

それから數日の後、私が與謝野君に會つた時、『あの日、山田さんと論戰の問題についてお話がありましたか』と聞くと與謝野君は『いゝえ何も。女はいけませんねえ』といふ答であつた。然し之は必ずしも女に限るわけではない。若し斯ういふ態度の虚僞とか、お坐なりとか云ふならば、それは男も女も同じ事である。それよりは、私は寧ろ、論爭は論爭、私交は私交として、論敵同志が私交上には睦まじく相語り得る面白味の方を取りたい。

そこで兩君が並んで着席してゐた其時の態度風采を少し思ひだして見る。兩君とも年配は大抵同じ位だらうが、山田君の偉大な體格と與謝野君のしなやかな姿とは正反對のコントラストを成してゐる。服裝から云つても、山田君は地味で與謝野君は派手だ。兩君とも失禮しながら美人とは云はれないが、山田君のドッシリした、而も無邪氣な所と、與謝野君の若々しい、そして澄ましやかな所とは、共に多大の旨味を示してゐる。與謝野君は人前で物を云ふのも恥かしいと云つたような、昔し風の

謂ゆる女らしさを表に立ててゐるが、それで底には毅然とした犯ぐ可らざるものを蔵してゐる。その蔵してゐる者が自然に態度言語の間に現はれるから、人は自然に敬意を拂はねばならなくなる。山田君は待合の女將と云つてもい丶位の恰好で、一向無頓着に誰とでもガラガラ喋つてのけそうだが、それで中々用心ぶかい、矢張り女の嗜みを重んずる人らしい。其晩初めて、改造會の部屋にはいつて來た時でも、先づ私の顔を見つけて、「マアよかつた。知らないお方ばかりかと思つてゐたら」と云つて私の隣りの椅子に腰かけた。そして子供が待つてゐるからと云つて、九時過にはモウさつさと歸つて行つた。

山田君は近來、あちこちで講演をやつてゐる。體格は堂々としてゐるし、從つて聲も大きいし、其の方では先づ當今名流婦人中の隨一だらう。『幾ら喋つたつて思想がカラツポぢや駄目です』といふ謙辭を聞いた事もあるが、何と云つても、謂ゆる新らしい女の中に、大勢の聽衆を前にして講演や演説の出來る人物は滅多にないのだから、其點で山田君は今後大いに振ふだらう。

私が山田君に初めて會つたのは、彼女がアメリカから歸つた當座の事で、單純な洋服を着た其姿が實に立派なものだつた。それで私は此頃でも、又洋服を着る事にして其姿で演壇に立つてはどうですと勸めた事が毎度ある。但し其話は『それぢやアナタ洋服を拵へて下さい』と云はれたのでオジヤンになつた。誰か山田君に洋服を寄附する篤志家はないものか。

講演（若しくば演説）といふ點になると、與謝野君は全く駄目らしい。第一、聲が小い。聲の小いといふ點では平塚明子君も同樣だそうだ。山川菊榮君は折々講演をやつてゐるが、之も餘り大きい聲ではない。與謝野君は曾て何やらの集會で演壇に立つには立つたが、唇を少し動かすのが聽衆に見えたばかりで、跡はスツカリ關係の生田長江君の聲で代辯されたといふ話を聞いてゐる。惜しい事だと思ふが、どうも仕方がない。尤も、總ての人が兩刀を使はねばならぬ事はないのだから、文章一本槍でも十分結構ではあるが、只あの人が直接演壇から其の思想を吐きだしたら、又別樣の感動を世人に與へるだらうと、慾な考へが我々に起るだけの事である。

山田君はツイこの二三年來、世間に賣りだした人で、自分では非常な晩學だと云つてゐるが、晩學と否とに係はらず、可なり年を取つてから初めて世間に現はれた人々は、一種堅實な所がある。四十過ぎて辯護士試驗や文官高等試驗に及第した老秀

才には、餘り大成した先例がないようだが、永いあいだ靜かに才學を養つてゐて、實生活の經驗と合せて其の才學を發揮した人には、謂ゆる『大器晩成』が多い。山田君が果して其の實例の一人であるかどうかは分らないが、兎にかく晩成の堅實さは見えてゐる。廿歳前後から『名士』になつたような、早熟の天才の輕佻な弱點はない。

與謝野君は之に反して、青年時代から和歌の名人として喧傳せられ、其點で餘ほど危險な運命を持つてゐた。然るに早熟の天才の弱點は少しも此人の上に現はれなかつた。彼女は歌人から一轉して社會評論家になつた。歌人としては早熟の天才であつたが、社會評論家としては寧ろ中年の晩成であつた。從つてそこに思想の堅實と練達とがある。殊に驚くべきは、其の思想の進歩、學問の進歩が、今も猶ほ年々歳々著しく見えてゐる事である。

山川菊榮女史

大庭柯公

夫婦の好配偶が、その時代の羨望の的となることは、甚だ稀ではあるが、今昔ともにある。江戸時代に在ては、池大雅と共妻玉瀾女史が、文人として理想の配偶であると云ふので、當時に羨まれ、後世に語り傳へられた。明治になつて何年頃であつたか、花圃女史が三宅雪嶺氏と結婚された時に、世人は理想的夫婦であると稱した。今日私はまた此の羨望の的を、山川均氏と菊榮夫人との上に見出す、多分は之に就て私と同感の人が、極めて世に多いことゝ信ずる。

マルクス學說の研究者として、山川均氏が我國現代の第一人であることは世に定評があるが、單に論文家評論家として、その犀利奇鋒を極むること、山川氏の如きは他に多く類を見ぬ。恰かもそれと同型の鋭さと正しさとを以て、議論を進められるものが菊榮女史の論文である。その攻擊の文には、敵に息をつかせる隙をさへ與へぬ。身をかはす餘地をさへ、敵に容さぬ。この點に於て山川夫妻の論容陣形は頗る相似てをり、その論文家としての地位も、全く同一級に置かるべく思はれる。たゞ閨秀作家のものが、概して力に乏しく、且つ非合理的であるものゝ多い我國に在て、論文家としての菊榮夫人が、總ての閨

間の上に合理的に推論して行つて、一番の隙さへ見出し得ない手際は、他に斷じて比到がない。私は斯んな上から見ても山川氏夫妻が、極めて似寄つた特長を持たれる理想的好配偶であると思ふ。

山川氏の御宅へ遊びに行くと、私は何時も、清澄な氣分とでも云はうか、何んとなく引しまつた感じに充たされて來る。勿論高い上ッ調子の話振りはないが、しかも決して沈んだ氣分などは毫もない。主人の均氏が物靜かな澄み渡つたやうな態度に、敬虔な念が自然湧いて來る、お一人の小兒さんをお二人の間に擁せられる菊榮夫人が、御主人の態度を女にしたといふまゝの容子で、客に接せられる。我國で家庭を訪問すると、私は何時も主婦の言動中に、ものゝ二三十分もする中に、如何にも理性を缺いた愚昧な點を見出すのが常であるが、その事の全くないのみならず、客として山川氏の家庭に主人主婦と共に半時間なり一時間なりを過ごしてゐる中には、清澄な而かも徹到した氣分が、自然に湧て來ることを覺える。

或時の座談に、山川氏が過般（最後の）下獄の時の事に及んだ。すると種々の實話があつた末、菊榮夫人が均氏に向つて『出獄して宅へ歸つて來られた時、あたたはまるで神樣のやうでしたョ』と言はれた。嚴冬を獄中で懺うして、營養不良のために血の氣が薄くなつて、而かも物靜かな澄み渡つた氣に充ちた出獄の日の山川氏が、顏、容ちとも神樣のやうであつたことは容易に想像される。そしてその菊榮夫人の『神樣のやうでしたョ』といふ短かい言葉に、性格と理會の合つた夫に對する『神樣のやうな愛』が見出されるではないか。

大正の理想的夫婦、理想的家庭は、山川氏夫妻であると私は思ふ。

三田の思想家評論家

（一）

加田忠臣

評論界の新人として慶應義塾大學に於ける小泉信三、高橋誠一郎、阿部秀助、三邊金藏の諸教授を改造誌が掲げたことに何人も異議はないであらう。右の四教授は共に理財科教授で經濟學者である。經濟學者なる點に於て空疎な政治評論家や獨りよがりの哲學者などに比して明確な智識を提供し得るのである。

慶應の理財科に籍を置いたもので其本科一年の近世經濟史の講義を聞かぬものはないであらう。其内容の興味多いのと其講義の雄辯とは何人も深く感ずる處である。其擔任者は阿部教授である。教授は東大文科史學科の出身であつてこの外獨逸經濟學説研究なる講座を持つて居る。其經濟史に關する造詣は何人も認める所である。私は經濟史や經濟學の專門的研究に關して述べるのは他の機會に讓つて各教授に共通な問題即ち社會問題に關する所論の大要とそれに關する私の感想とを述べるに止めて置かう。

阿部教授は理想主義者である。この意味で教授の社會問題に關する意見はカアル・マルクスのそれと異る。教授はマルクスが其社會主義に魂を入れることを忘れた者であるのを指摘し、社會問題は魂のある人間の問題なるが故に、機械的な唯物史觀や勞働價値論に依つては其眞髓を見ることを得ないと主張する。即ち經濟生活が人間生活の全部ではない故に「過去の社會主義者が試みんとせしが如き經濟的改造は單に吾人の社會的生活の一隅を破壞するのみで、同時に吾人は他に三隅の存することを知らなくてはならぬ。」（改造七月號）教授は人間生活を全部的に觀察し、人間の精神に崇高な價値を認め、マルクスよりも寧ろカントに近いて居る。唯物的社會主義は西洋文明の病弊の生み出せる所である。

人は主であつて經濟は從である。かゝる見地から教授はベルトランド・ラッセルの「政治的理想」や「社會改造の原理」に共鳴さし、我論壇がラッセルに對して何事をも論じなかつた時に私達にラッセルの讀むべき價値あるのを教へられた。其理由はラッセルの理想主義にあつたと私は推察するものである。斯くてマルキシズムに對する批判的態度は人間を一個として見たる健成の社會主義——社會主義の理想化に對する衷心の要求と次の渇望となつたのである。

（二）

高橋教授は義塾の政治科出身であるが、其專攻は經濟學史經濟原論である。教授の精密周到な講義には多くの學生が頭を惱すものであるが試驗には參考書持込自由と言ふ極めて便利なやり方である。洵に教授の經濟學史に關する論文は三田學會雜誌に於ける中樞的讀物であることは經濟學界の均しく認める所である。

教授は經濟學が說明的科學であるのに滿足しないで經濟學をかゝる狀態から脫せしめて價値の世界に導かんとする。即ち經濟學を社會的價値批判の學問とするのを要求するのである、斯く社會的價値批判の見地に立つ經濟學から人間の經濟生活を眺めるとこゝに人間の終極の目的と其經濟生活との間に矛盾がある。貨幣に依る人間の束縛これである。從つて先づ人が人として生活する爲には貨幣から解放されなければならぬ。而して人は其部分的價値の問題から社會的の全部價値に赴かなければならぬ。（解放七月號）人が社會的解放即ち理想的社會を建設するの道は人が其共通の運命として有する消費方面に之を求めなければならぬ。マルキストやサンディカリストの主張する樣な階級鬪爭は例へ資本主義制の下にあつては事實——而も殘忍な事實であるけれども、この階級鬪爭は理想的社會の創造に對してはあまりに殘忍な方法である。マルキストは餘剩價値の掠奪に依る資本家的集積（一方に資本の集積せらるゝと共に他方に貧困の增すとなすもの）の結果大破產となり、この時に於けるプロレタリアの改革に依つて新社會は出現すべきものと說く。けれどもこれらのことはベルンシュタインの既に其不可能を論破せし所である。而してまた現在社會に存する階級鬪爭の事實を緩和し、社會的革命を避けんとする所に社會連帶觀論者の消費組合に依る社會改造の議論が生ずるのである。高橋教授は「若し人性が完成せらるゝならば、それは消費者の改變に依るべきもので、生產者の道德化に依るべき所のものでない」と言ふバスチアの言を引用して、消費組合に依る社會改造が幾多の缺點を有するにしても尙ほ推稱するに價するものであるとして居る。

（改造十二月號、黎明講演集第二卷第一輯）

（三）

高橋教授の消費者の側よりする社會改造說に對して生產者側を論じて居る人は小泉教授である。教授は高橋教授と同じく政治科を二年後（と記憶す）に卒業し、其留學前に、ジエヴオンス「經濟學純理」の譯者として知られて居るから其學說等に就て私

が云々する必要はない。其受持は經濟原論、同學史、社會問題である。教授は久しく病氣の爲に靜養されて居つたが今は教壇にも立ち、評論の筆も振はれる様になつて居る。「二種のユートピア」(解放九月號)「勞働の苦痛」(中央公論九月號)「學問藝術と社會主義」(三田學會十一月號)は其最近の產物である。

教授の社會問題に關する思想を最もよく表明するものは勿論其講義であらう。けれども私の在學中には休講であつたので聞くことを得なかつた。然し教授の思想を知り得るものは前揭の論文以外に河上博士の有名な「貧乏物語」を批評せる一文がある。(三田學會雜誌十一ノ六號)博士は現代に於ける貧乏は經濟上の貧乏であつて、而して、其原因を富者の贅澤に歸し、其必然の結果として社會問題解決法として富者の贅澤抑制を論じたのは讀者の既に周知せる所である。小泉教授は之に對して現代に於ける貧乏が單なる經濟上の貧乏でなくして生活の不安固と結び付く物質の不足である。即ち資本主義制度の下に於ては貧乏人の多數は被傭勞働者であつて常に景氣の如何に從つて失職の危險に脅かされつゝあるものであるが、其超個人的勢力に依る生活不安も亦問題でなければならぬ。而して其貧乏の原因を贅澤に求めるのは貧乏の窮極の原因を示すものではない。窮極の原因は所得分配の不平等より起るものである。何となれば贅澤をすると言ふことは既に其資力を前提とするからである。斯くて其解決法として贅澤抑制よりも制度の改造を教授は推す。「先づ金持ちに向つては贅澤をするより外に使ひ途のない程の所得を與へて置いて然る後に贅澤する勿れと訓戒するよりも、直ちに前提となつて居る貧富の懸隔其物を矯制する方法を講じた方がより一層適切でありより少なく迂廻的であると思ふ。」河上博士が社會の改造は人心の改造より始めざる可からずと言ふに對して教授は「人心の根本的改造は社會組織の改造を俟たずして之を期すべからず」と言つて居る。(河上博士も近頃貧乏物語を絶版として社會組織の改造論に加擔せられる様である。)

然らば如何に改造すべきかの問に對して答ふるのが前揭の諸論文である。教授は極めて藝術的趣味の深い人である。其ウヰリアム・モリスの社會主義や最近のギルド・ソシャリズムに多くの一致點を見出されたのは偶然ではないと思ふ。モアとモリスとを比較して、モアのユウトピアが畫一的事務的で沈滞的であるのに對してモリスのそれが生氣に充ち、創作の喜悅を以て人間生活の第一義となしたのを推稱して居る。そして勞働を快樂たらしめ、人をして充分に創造的衝動を滿足せしめるには生產者としての人間を重視して社會組織の改造を企てなければならぬと主張する樣に思はれる。

三邊教授は高橋教授と同期の理財科出である。經濟政策、經濟原論等の教授で最も得意とせらるゝ所は工業政策で其勞働組合、同盟罷業の如き所に到れば萬丈の氣焔を揚げる。其社會思想を端的に表現せるものは「倫理の要求と經濟の組織」（社會政策學會論叢第九冊で）ある。倫理の最高善とは自己の滿足と同時に他人の滿足を持ち來すことである。かゝる倫理の最高善の理想は現代の社會生活に於て可能であるか。「倫理の要求と現在の經濟組織と此二つのものは互ひに反撥して相容れないものである。隨つて現在の經濟組織を有りの儘、其儘に保持しながら他方に於て倫理の要求をするといふこと其自身に於て矛盾である。」何となれば現在の社會制度は個人的自由主義にあつて經濟上に於ては營利主義に依るのである。この制度を前提とする以上、倫理の最高善の命令に從へば經濟上の失敗者であり、經濟上の成功者であることを願ふならば倫理上の失敗者である。從つて人が倫理的生活を必要とするならば現在の制度は變改されなければならぬ。其方法として教授は社會改良主義と社會主義とを提供して居る。社會政策を現在の私有制度を基礎として其上にある改良を加へるとの意義に解するならばそれは何等價値のないものである。私は教授が他の方向に行くことを信じ且つ希望するものである。そこに始めて倫理と經濟との一致、人間性を尊重する社會を見出し得るからである。

（五）

其抱壞する思想は色々な形態を取つても行くべき先は一つである。個人の幸福と全社會の幸福この二つのものが調和する樣な新社會の建設である。其建設にあるものは精神上から或者は社會制度の方面から進む。けれども其先は理想の社會である。

私をして恣に豫見することを許さるるならば、社會思想は經濟的方面に於てコール、ホブソン等に依つて代表せらるるギルド社會主義に、其精神的方面に於ては其哲學と言はれるベルトランド・ラッセルに赴くであらうと思ふ。ラッセルの指示する方向には人間性の奧底を深く洞察した社會思想家ピョトル・クロポトキンが立つて居る。兎に角資本主義は思想上に於ては最早敗北者の地位に立たなければならない所に達したのである。

（八・十二・三）

山川均君と會ふ前夜

室伏高信

□

「無名氏」が雑誌『新日本』によつてデモクラシーの流行評論家を罵殺しておつたことはもう一年半も前のことである。その『無名氏』が山川均君のことであつたことは私には初めから分つてゐた。それは山川均の名前で「新社會」に書かれてゐたことがそのまゝ「無名氏」によつて繰返されてゐる節もあつたからである。最初に槍玉にあげられたのが吉野博士であつたように思ふ。その同じ論文のうちに私の名前も引用してあつた。といふことを友人から聞いて私も讀んでみた。それからは殆んど全部「無名氏」の論文に目を通した。私も二度に亘つて槍玉にあげられた。可成り手ひどくやられたところもあつた。私には無論不服なところもあつたが充分にこれに報ゐるの機會もなくしてすんだ。しかし何れにせよ「無名氏」は論壇の一異彩とされた。「無名氏」とは誰れだらう？北昤吉君かしら？といふような評判もきいたことがあつた。兎も角、北昤吉君と「無名氏」とは立場こそ違へ、論壇での新進の花形であるとして、私とつきあつてゐる學生の友人などから始終評判をきいてゐた。北君とは金澤で一度會つた。その時の印象が私には甚だ悪るい。友人として頼むに足らない人だといふ感じを抱かざるをえなかつた。私が被告として法廷に立ち、北君が證人として私の横に立つてゐられた時のことであつた。――その北君は今ま日本に居ない。華々しかつた北君は再び華々しき日のきたるまで寂しき北君であるかも知れない。それに比べると、一方の人氣役者の「無名氏」は、「無名氏」といはなければならないほどに不幸な日本においての幸ある未來をもつてゐる人であつた。山川均君はこうした覆面のうちに機會の來るを待つてゐた。機會は聰明の迫害者ではなかつた。大正八年の論壇は山川均君に健闘した一年であつた。われ等は驚異の眼をもつて山川君の[illegible]論壇における地位を見てきた。山川君以前に山川君はなかつたこういふては少し言ひ過ぎのようにも思ふが、また或はさうでないかもしれない、一々過去に遡つて取調べることのできない今の私は、言葉を曖昧にすることに利益を感ずる。何れにせよ山川君の奮闘振りは目ざましいものであつた。しかしありていにいへば山川君が「デモクラシーの殺戮」に無中になつてゐた

間はそこに山川君の論客としての精鋭さが見えたにしても、あまりに精鋭であることは、私どものやうに評論のうへにも曲線美を愛するものからすると、必ずしもいゝ感じだけをもつて迎へることはできなかつた。私はこういふことを友人なぞに話したこともあつた。さうして山川君は態度を一變する必要があるとさへもいつたことがあつた。幸か不幸か、今日の山川君は「無名氏」の山川均ではないやうだ。「無名氏」の精鋭が曲線美によつて隠されるやうになつたかに思ふ。近頃では堺利彦氏の論文に却つて手厳しいのがあるやうだ。福田博士に對する堺氏の態度のごときはその一例である。

□

山川君と堺さんとは始終行動をともにしてゐる。賣文社事件の時がさうであつた。唯物史觀に對する態度もさうではないかと思ふ。中央公論の「勞働問題號」に現はれた山川君の論文にさうしたところが見える。またマルクスの經濟學説にも贊成してゐるらしく思はれる。この點において山川君はマルクス主義者である。しかし山川君のマルクス主義は或はラブリオラやソーレルの謂ふところのマルクス主義であるのかもしれない。私にはさう思ふよりほかにない。さうしてこゝに山川君と堺さんとの分裂があるではないかと思ふ。何れにせよ、オルソドックスマルキストとは思はれない。日本においてのオルソドックス、マルキストは私の知つてゐる範圍では河上教授と堺利彦さんである。もつと他の人まで引合ひに出すと福田博士は資本主義、（福田博士は資本主義の攻撃者のやうにも見えるが結局資本主義者である、また私は福田博士の攻撃者の一人のやうに思はれてゐるがこれも間違ひである。博士は私の畏敬する先生である。しかし大庭柯公君が「吾等」で書いたとほり私のやうな無名な男は福田博士のやうな大家に時々喰つてかゝることが賣名の手段であるから時々喰つてかゝるといふまでゞあらう）さうして吉野博士はポリチカル、ラヂカリスト、高畠素之君はボルシエヴヰキ的社會主義者、堀江歸一氏は急速に左行してゐるやうに見えるから今日では充分に見當がつかないが私はこの人に多大の期待をもつてゐる。

□

そこで私が改造社から依頼された問題について一應話して置く必要があるが、山川君を主として、それから賀川高橋の兩君のことを何か書けといふことが私の頼まれた範圍である。賀川高橋兩君のことは私の外に書く人もあらうから、私はたゞ附け

たりに書けばいゝといふことになる。しかし私は高橋誠一郎君のものを讀んだことは一、二回あり、さうして小泉信三、高橋誠一郎の兩氏が慶應の新進教授として提敬すべき人々であるといふことの評判が如何にも成程だと思はれる。こういふ篤學にして且つ勇氣ある若い學者（若くはないかも知れないが）からどしどしよき研究を發表されてわれわれ無學者に材料を與へてもらいたいものだと思ふ。賀川豐彦君は恐らく今の論壇で山川君と並ぶべき新進の評論家である。大正八年の論壇は福田、河上の兩博士山川、賀川の兩君などが最も活躍されたように思ふ。堺さんは「改造」十二月の論文で「福田時代から河上時代へ」といつたようだが河上時代から賀川、山川時代へゆくことを豫想したかどうかをも序に聞きたかつた。賀川君はキルド社會主義の主張者である。私もこの點では賀川君の後からついて行きたいと思つてゐる。しかし私は山川君にせよ、賀川君にせよ、高橋君にせよ、まだ一面識もない。だから本當のことの分らう筈がない。今日は三君を崇拜してゐても會つて見たらいやにならぬとも限らぬ。明日は山川君に初めて會う日だ。私は今山川といふ人はどういふ人だらう。おとなしい人だといふ評判もあるが、あの文章で見ると鋭さが勝つた人のようにも思ふ。

高畠素之君は山川君を評してレライアブルな人物だといつた。その高畠君は片上伸君の毛唐人らしい風彩を見て、片上君はチエック、スロバツクのようだといつた人だ。その口の惡るい高畠君からレライアブルな人物だと聞くからには立派な、やさしいさうしてやさしいうちに鋭さのある人物であらうと想像される。

（大正八年十二月四日夜）

來月號の新人論には帝大、京大、早大を中心として評論を乞ふ筈

驚くべき効能の

トモヱ人蔘劑

□どことなく身體の弱い人
□神經衰弱の人
□病後、老後衰弱の人
□腦と胃腸のわるい人
□婦人病、血の道の人
□ヒステリーの人
□產前、產後の人
□肺病、心臟病、肋膜炎の人
□心經痛やリウマチスの人
□痔のわるい人

本劑の特色

朝鮮人蔘は起死回生又は不老長壽と稱せられたる幾百年來の靈藥にして其驚くべき效能は今や內外學者の學理的研究の結果何人も疑ふの餘地無きに至れり、本劑は朝鮮開城產人蔘中の優良なるものより最新科學的方法に據り有效成分を採り更に之を精製し幾多類似人蔘劑と區別するため特にトモヱ人蔘と稱せり、故に效能極めて確實迅速にして早きは二日遲くも一週日を出でずして其靈能に浴するを得べし、病者は勿論健者と雖も本劑を服用すれば新陳代謝を旺盛にし食慾を進め體量を增し頭腦を明晰にし心身の疲勞を癒し老衰を豫防し長く身體の强健を保持す。

トモヱ人蔘腦（十日分金一圓二十錢・二十分金二圓二十錢 三十日分金三圓・五十日分金五圓）
トモヱ人蔘錠（百錠入金一圓・二百二十錠入金二圓）

送料不要

實驗報告 無代進呈

朝鮮人蔘一手販賣

東京麴町區三番町四拾八番地
朝鮮蔘藥合資會社
電話番町二七一七番
振替東京四〇三三一番

本社 東京銀座

電話 新橋
特長九五八番（金物部、石炭部）
特長九、九番（電機部）
一三五一番（織物部、雜貨部）
一九七五番（穀肥部、藥品部）
一〇一二番（砂糖、食料品部）
二五八一番（保險部）
三〇〇六番（工業部）
三四四九番（鑛山部）
三五八二番（經理部）
三五八七番（總務部宿直兼用）
三七四五番（社長專用）
三七六二番（支配人專用）

振替口座東京二九八一〇番

資本金五百萬圓

TOKIWA CO. LTD. TOKYO. JAPAN.

株式會社 常盤商會

社長 松方五郎

支店出張所

大阪市東區今橋四丁目
福岡市博多蓮池町
吳市本通七丁目
横濱市山下町
佐世保市松浦町
八幡市枝光新地宮田町
朝鮮京城太平通二丁目
上海江西路八號

工場

巖手縣上閉伊郡岩根橋 鐵合金電氣製錬所
巖手縣九戸郡久慈 小久慈鑛業所

主なる取引國
支那、南洋、印度、米國、英國、佛國、伊國、露國等

營業概要

◉直輸出入品種目

鋼材銑鐵類
金屬地金類
特殊高速度鋼類
鑛產物類
石炭コークス類
機械器具及材料類
調帶皮革類
自動車及附屬品類
織物毛類
雜貨類

肥料工業藥品類
染料塗料類
砂糖茶類
食糧品類
農產物類
水產物類
漁網及漁網染料類
銃砲及火藥類
醫療機械類

◉工業部特賣品目

メタリックタングステン
フエロタングステン
メタリックモリブデン
フエロモリブデン
フエロマンガニーズ
フエロシリコン
フエロクローム
燐銅 燐錫
満俺銅
硅素銅
耐摩合金
アルミニユーム合金
トキメタル
眞鍮 銑鐵

◉保險業

外國火災保險（英國リバープール、ロンドン、クローブ保險株式會社外英佛十大火災保險會社代理店）
外國海上保險（英國ニユージーランド保險株式會社外二大海上保險會社代理店）

◉鑛業

各種鑛物の採掘及精錬

賀正

本社　東京市麴町區内幸町二丁目二番地

電話新橋　重役用　特長五六三番
　　　　　　　　　特長五六四番
　　　　　宿直用　二六〇四番
　　　　　　　　　二六〇五番

振替貯金口座東京二〇七五〇番

東海生命保險相互會社

社長　松方五郎

◎當會社は相互組織にして加入者の利益最も多し

宮地嘉六氏著（四六大判 箱入 美本 定價一圓六十錢送八錢）

煤煙の臭ひ

身を勞働階級より起して親しく其體驗を活寫せる宮地氏の創作集は、勞働問題の核心を把握し此を生命化せるものにして勞働文學の先驅なり。

近松秋江氏著（中判 箱入 美本 定價一圓六十錢送八錢）

秘密

纏綿たる婦人の情緒と執着深き異性の戀心とを巧みに描寫して、秋江氏獨特の筆致を鮮やかに發揮したるものは本書也。

谷崎潤一郎氏著（定價一圓六十錢 送料八錢）

小さな王國

芳醇美酒の如き魅力ある潤一郎氏の特色は、本書に於て最も鮮明に發揮されあり『少年の脅迫』の鬼氣を帶たる『柳湯事件』『人間が猿になつた話』の怪奇なる『小さな王國』の社會主義的なる、切乞一讀。

岩野泡鳴氏著（四六判 箱入 美本 定價一圓八十錢送八錢）

非凡人

大膽に、赤裸々に、一氣描寫の奧底に達したる手法の冴えは之を本書に見るべし、泡鳴氏最近の傑作は悉く收めて本書にあり

廣津和郎氏著（四六判 箱入 定價一圓七十錢送八錢）

握手

鋭く人生の暗黑面を剔抉する裡に一味清新の人情味を穿ちて至眞の靈性を寓するは和郎氏の作風にあらずや、他に比儔を見ざる本書を見られよ。

谷崎精二氏著（四六判 箱入 定價一圓七十錢送八錢）

地に頰つけて

堅實なる作風を以て文壇に重きを爲せる著者の作は近來益々圓熟を加え來り、令兄潤一郎氏と文壇の双壁として稱揚せらる。本書刊行後忽ちにして初版盡き、直ちに版を重ねたるものなり。

東京市飯田町一丁目二番地　株式會社　天佑社　振替東京一〇一二八番　電話番町一一七九番

豫言者賀川豐彦君

——北澤新次郎——森戸辰男——與謝野晶子——

沖野岩三郎

「生産者の道は創造にあるのだ、騷ぐな人々よ、もう少し落付いて居れ、神經衰弱では何にも仕事が出來ぬ。過激派がどう云はうと社會主義者がどう云はうと、そんな事はどうでも善い。帝國主義者がどうであらうと、資本家閥がどう爲やうと、それは彼等の勝手である、國際聯盟がどうであらうと、萬國勞働法が何であらうと騷ぐに及ばない。我等勞働者の道は一筋しかない。夫れは愛によれる生産! これだけだ……外國から直輸入の職業別組合がどうの、勞働組合がどうの。工業組合がどうのと直譯的に區別しなくとも善いではないか、日本人には日本人の道がある、卽ち創造と發明にあるのだ……騷ぐな人々よ。外國電報の神經衰弱にかゝるな、冷靜に、そして的確に我等が打降す鐵槌の跡を見よ、生産者の道は創造にあるのだ!」

これは賀川氏が最近の筆に成る或る論文の一節である。しかしこれは彼れの理想であつて、彼は決して過激派や社會主義や帝國主義や資本閥の行動に超然たる事の出來ない人である。しかも彼には斯う云ふ超然とした態度を執りたい理想がある。これは彼が基督教の牧師であつて神を信じイエスを愛する結果であらねばならない。

彼は關西に於ける勞働問題勞働運動の巨將のやうに見える。悦愕の議論、突撃的の態度、夫れ等は非常に猛烈な男のやうに見える。しかし彼は涙の人である、愛の人である。彼は豫言者エゼルケを以て自分と同じ人であつたと思つて居る。

エゼケルよ!
九年十月の十日を　忘れはすまい?
エルサレム包圍の日、
朝、けなげに立働いてゐた君の妻が、
神、神の……兆として、
夕方、突然死んでしまつた!
其の朝、君は大勢の人と、
話してゐたが、元氣よく。
翌る朝、君は、聲もたてず、嘆いてゐた。
しかし、死人の爲でなく、
神の都と、祖國の爲に。

やがて又た、君はまるで狂人のやうに、
冠を蒙つて手、に靴持つて、
町を右へ左へと、走つてゐたぢやないか。

あゝ豫言者の生活、
君よ、同感だ！
これがつらいのだ！
目の喜ぶ、妻が死んだのだ、
イスラエルの兆とは云へ、
最愛の妻だ——
墓まで共にしたい娘ぢやないか！
それに、犧牲となつて、頓死さすとは
神も非道ぢやないか？
これを平氣で……
君よ、同感だ！
同感だ、同感だ！

これは彼れの新著『貧民窟詩集、涙の二等分』中の一章である。彼は本當にエゼケルだ、豫言者エゼケルである。彼は個人として既に死の谷を見て來た。彼は血を吐いて死にかけた。しかし彼は熱烈な信仰に活きてゐた。

五歳の秋
父母に別れ
十六
兄を失つて
孤獨！
身はイエスと
生きんとすれど
貧しき者は
天國に遠し
肉は（あゝ）亡びぬ？　（涙の二等分の一節）

彼は死を決した、彼は自滅の最後を笑つて待たねばならなかつた。しかし彼は死にたくなかつた。どこまでも此世に噛りついて生きて居たかつた。彼は遂に病の癒えた時、社會の『死の溪』を覗いた。死の溪とは神戸の貧民窟であつた。

彼は一枚の衣の使徒となつて、十四錢の下駄穿いて、毆られながら打たれ乍ら、神の國近きを宣べ傳へた。そして彼は薄闇い氣味の惡い貧民長屋の、しかも殺人犯者の住んで居た。天井が物を言ひ出し、柱が時々喚き出し床板の吠え出す化物屋敷に居を構へて、乞食の子を拾つて來ては、夫れを抱きしめ乍ら、神は愛だ！と泣いた。

春が來ても花の咲かない、矢張り冬から殘つた冷たい空氣を吸ひ乍ら、血が氷つて足が解けて了つたと思ふやうな苦しみを忍び乍ら、ありとあらゆる、罪惡の現實暴露を見た。

或人は言ふ、彼は矢張り實際の勞働者で無い、矢張一學究の

徒だと。成程然うであらう。彼は慥に學者だ彼れの學問は本當に廣い。神經質な男は彼の學問を雜駁だと言ふ。夫れは雜駁だらう。彼はあれだけの感情家であり乍ら數學の天才だ。彼は彼の春子夫人と結婚すると直ぐ夫人に算術を敎へ代數を敎へ幾何を敎へた。彼れは米國のプリンストン大學に學んだ、彼は主として埃及、希臘の宗教と基督教との推移交渉を研究したらしい。しかも彼れはプリンストンで高等數學を研究した。そして進化論を研究した。彼が進化論の研究を願ひ出た時、當時の教授は彼れに進化論に就て從來讀んだ書物の數を問うた。彼れは即坐に四十五冊の書名と其內容の梗概を書いて出したので敎授を驚かしたのであつた。

彼はバチラア、オヴ、デビニチーの學位を得た。けれども彼はユタ州に行つて砂原の中で古代生物の骨を探つて生物學を研究したのであつた。だから彼の說く勞働問題の諸說は神と基督とが礎石となつて、其上に數學と進化論と生物學が柱となつゐる。經濟學が屋根となつてゐる。其の屋根は唯物論の菲葺でない無神論の瓦でない。彼の信ずるイエスは神であつて勞働者の大工である。だから彼の信ずる神は六日にして安息に入つた神で無く、生産者の神である。世界始まつて以來今に勞働してゐる神である。日曜日にも勞働すると云つたナザレの大工イエスが死んだ代りに、千億の勞働者が立ち上つて今や世界の改造に取懸つてゐるのである。即ち現在の勞働者は神の直裔だといふのである。其所に彼れの勞働者崇拜論が發生するのである、

彼は數學の天才であり生物學者である、同時に哲學者であり、詩人である。彼の文章には文法の間違ひがあらう、彼は嚴密な假名遣ひを知らないだらう。しかし彼はそんな小さな事を飛り越して實に大きな詩を作る。試みに彼れの新著『涙の二等分』を讀んで見よ。彼は全身涙である。彼は全身同情である。彼は神戶の葺合といふ死の溪に復活の息を吹きかけるようにして叫いてゐる預言者エゼケルである。

私は嘗て彼れの學問に對して最も多く驚いてゐた。宗教に科學に――夫れは當然として、英語に獨乙語に――夫れも普通として文學に歷史に――夫れも當り前の事として、彼が人間の顏の歷史を研究し髮の結方を研究して居る事も。菊版二千頁に亙らんとする『宇宙悪論』を更に英文に書直してゐる事も。

しかし今日では既う賀川といふ男を知つてゐる私には當然の事となつた。彼としては夫れが左程不思議な事でも困難な事でも無くなつた。

しかし、しかし、しかし、どうしたつて驚かねばならぬ事に、彼の貧民窟傳道である。彼が滿十ケ年間、あの恐ろしい死の溪のやうな所で生活したといふ事は實に非常な驚異である。

年ケ年中ジメ〴〵したドス黑い道、糞尿の溢れて居る共同便所、朝ツ腹から博奕の行はれて居る三坪ばかりの公園、――と云ふべき廣場――喧嘩、口論、人殺しの絶間なきあの恐ろしい貧民

宿の三疊敷に起居してゐる彼等夫妻は全體何といふ偉大だらう

賀川君を勞働者でないから、一學究の徒だからと云つて、床の置物と同樣に思はうとしてゐる勞働問題研究者があるなら其の人々を彼の貧民窟へ半日立たして置くが宜い、あんな恐ろしい町、しかも世界の一等國の五港の一なる神戸市の中央に、あんな恐ろしい町があると云ふ事は全體何といふ恐しい事であらう。

彼はこんな恐ろしい町で何百回毆られたであらう？　何十回兇器をもつて脅やかされたであらう？　現に春子夫人は危く一目の明を失はうとした。誰が何と云つたつて賀川豐彦君があの貧民窟でやつて居る事業を非難する事は出來ない。あんな事は到底常人の出來る事ではない。米國あたりで皿洗ひをした位で勞働をしたと吹聽したり、四回や五回や十回工場を視察した位で一廉の工場通になり濟す連中と同一に論ずべき男ではない。

私は彼の賀川君の事業を觀る度に思ふ、多分賀川君は狂人だらう！　何故ならば、あんな生活は普通の人間に出來る事では無いから……彼れは明治學院時代に、極めて何でもない事に憤慨して書籍も机も皆な賣飛ばして姿を隱した事がある。私は其時から賀川君を狂人だと思つたのであつた。其後彼れは神戸神學校に轉じて、まだ學生の身であり乍ら、貧民窟へ入つて博徒を傳道してゐると聞いた時は、いよいよ狂人だと思つた。彼れは路傍說教の結果ライオンのやうな大聲が出るやうになつた其の聲を聞いてゐるとどうしたつて其聲には狂的震動が含まれてゐた。

彼は明治四十五年の春、浪花中會で基督敎傳道師の試驗を受けた。無論及第して准允狀といふ免狀を貰つた。しかし彼れは其の傳道者の免狀を僅か一時間ばかり携帶してゐただけで、夫れを電車の中へ置忘れたのだか、うどん屋へ置忘れたのだか、夫れすら忘れて了つたのであつた。神學生が鬼の首を取つたやうに思ふべき筈の傳道者の免狀を大阪から神戸へ行く間に無くしてしまふといふのは、どう考へても常人ではないと思つた。彼れは血を吐いて死にかけた身體だ、青白い顏して死にさうであり乍ら、忍耐強い愛の人、春子孃に愛せられて遂に結婚した私は其時賀川君の常識を疑つた、しかも賀川君は私に對して結婚の通知に長い論文を送つて來た。其の內容は人間にも獸と同じく『交尾期』があるといふのであつた、私は其頃まで、どうしても彼れを狂人だと思はねばならなかつた。

しかし私は彼れを段々正視するやうになつた。彼は私の前に非常に偉大な人間となつて現はれて來た。彼は奇蹟のやうに健康を恢復して貧民窟の子供達から『先生々々』と云はれながら宛然たる辯合の先生として實に尊い働きをし始めた。

彼れの事業と日々の行動を見た時、私は彼れを犯人だと思つた事の非を心から悔いた。彼れは決して犯人では無かつた。人並勝れて偉い男は皆な犯人じみて見えるのだらう、イエスでも

稀過でも實際一緒に生活して居たなら、犯人のやうに見えたのかも知れない。

試みに讀者諸君が神戶に行つて、彼れに葺合の貧民窟を案內して貰つて御覽なさい。彼は意地惡く諸君を便所の側ばかり引廻すやうに思はれる程。臭氣紛々たる便所の側を縫うて通り乍ら二疊敷三疊敷に七人八人宛の生活してゐる窮狀を見せて吳れるだらう。尚ほ不可思議な現象は、彼の說教場である。

彼が猛烈な熱辯を揮つて說教してゐる時、其の會堂內に淫賣婦が公然入つて來て說教を聽いてゐる靑年を引張出して行くといふ事である。說教所から彼の住宅に行く僅一二町の間に十數人の淫賣婦が居て頻りに通行人の袖を引ばつてゐる。中には臨月の女がある。人の妻がある。十三四才の少女がある。恐ろしい妖艶の國は警察力でも何とする事は出來ない。牧師賀川君が其の暗い所を通る時賣笑婦は、慣々しく『先生、もうお歸りですかもうお說教がお濟みですか。』などゝ話しかけたり挨拶をしたりする。賀川君は叮嚀に、『はい、濟みました、左樣ならお寢みなさい！』と云つて彼等と別れる。さうして彼等賣笑婦には賀川君をエライ先生として見るやうになる。

どうしても賀川君は狂人じみた程勢力の強い男だと云はねばならない。彼は說教をする學校を敎へる、新聞を發行する雜誌社から引張凧にせられて原稿を書かされる。しかも彼は研究といふ事から一步も退かない。彼の勢力は實に旺盛なものである。

しかし彼は一面に於て不幸な男である。彼は若くして失戀した。病を得た、あれだけの學力をもち乍ら。彼れの卒業した神戶神學校は彼を聘して講師とだにしない。日本基督教會は昨年十月に東京で牧師の大會を開いた。そして勞働問題の講演をする事にした。しかし幹部では賀川君に其の講演を賴まうとはしなかつた、で、全く門外漢である高知教會の多田素君を勞働問題の講演者としたのであつた。これは何故であらうか。賀川君は基督教徒からは社會主義無政府主義者と同じ過激な思想を有する者として恐れられる。と云つて社會主義者や無政府主義者には、有神論者、基督教徒としての彼に慊焉たる所があらねばならない。しかも政府からは眈々の眼光を彼れに對つて放たれるに相違ない。穩健らしく見せかけては居るが煽動的な陰險な男だと見られてゐるかも知れない。

且つ彼は一個の天才的詩人である、彼の作『淚の二等分』を讀んでも、隨分突込んだキワドイ文句がある。しかも夫れは彼れの天才的詩人の言葉であらねばならぬ。だから彼は堂々と議論をしてゐる時でも、不用意に詩的の言葉を出す。夫れが時々大變な誤解を招く事がある。假令ば、

『最早今日の勞働者は、昔日のやうに、ポテト王だとか、葡萄王だとか、海上王だとかいふ大資本家にならうなどいふ馬鹿な考へは持つてゐない。』

といふ事を書く時に、彼の文章は頗る要領を得過ぎてゐて、

『最早今日の勞働者は、〇〇にならうなどいふ馬鹿な考へは持たない。』と簡潔に書いて了ふ。

彼の頭では其の意味がよく解つてゐる。しかし讀者には了解出來ない。十二月の本誌卷頭に掲げた一文の中にも斯んな文例が澤山ある。これは彼の文章ばかりでなく、彼れの日常の言行も矢張斯うである。彼れが他人の誤解を受けるとすれば確かに詩人肌の欠點＝或は長所かも知れず＝が其の招致の原因である

私は何故だか、賀川豐彦君を想ふと同時に北澤新次郎君、森戶辰男君、與謝野晶子君の三氏が直ぐ頭に浮んで來る。夫れは何故か知らないが多分どこかに共通點があるからであらう。

北澤新次郎氏と話してゐる時一番愉快なのは彼れが腹の中を悉皆打明けて本當に玲瓏である事である。此點は賀川君と能く似てゐる。私は賀川君から得た第一印象と同じ意味に於て北澤氏と話し合つた時も『これは常人でない！』と直覺した。非常に直率で動的で且つ傳道心の強い、基督信徒である點は兩君に共通した所であらう。

森戶辰男氏も基督教徒である。婦人問題の研究家である。しかも私の觀た森戶君は立派な一個の詩人である。其の有神論者であつてしかも詩人である自由思想家である所が賀川君に似通つてゐる所であらうか。

賀川君と共に與謝野夫人を想ひ出す所以は其の勵精な點と數學の才能に秀でた所の共通點であらうと思ふ。

晶子夫人が詩人であるといふのは今更言ふまでも無いが、彼女の頭腦が頗る數學的で實際的だといふ事は驚くべき事である

二十人近い大家族の主婦である彼女は每週一二回の徹夜を餘儀なくさせられる程、原稿を書く事に多忙である。朝から晩まで頭腦を働かせ續け乍ら、三度三度の食事の献立は決して他人にさせない。一錢二錢の茶ッ葉も一つのマッチも悉く彼女の懷から手づから出す金錢で買ふのである。彼女は年に似合はぬ派手な着物を着る、夫れは單に詩人の派手好みではない、實は經濟的の考へが土臺となつてゐる。彼女が呉服屋に行つて自分の衣服を買はうとする時、先づ考へるのは自分の娘達の事である。で、彼女は派手なものを買つて、暫く夫れを自分が着た後で夫れを娘達の着物にしようとするのである。斯んな事を言ふのは甚だ失敬な話だが、私は常に晶子夫人が詩人であり評論家であると同時に、全然家庭的の婦人であるといふ事に非常な尊敬を拂つてゐるのである。そして常に強い忍耐力を持つて居夜を日に繼いで孜々として勉強するといふ點も賀川君と同時に夫人を連想せしむる一因であらうと思ふ。

晶子夫人は賀川君を平常から尊敬してゐた。夫れは賀川君の勇氣と學問と熱誠に尊敬を拂つてゐるのであつたが、近時に到つて更に賀川君を賞讃する一つの材料を得た、夫れは賀川君の詩的方面を發見したといふ事である。晶子夫人は賀川君を日本に於る、人生派又は人道主義の詩人だと賞揚してゐる。

道路

露伴道人

一達これを道路と謂ひ、二達これを岐旁と謂ふと、爾雅を引出して言ふまでも無く、徑は牛馬を通じ、畛は大車を容れ、塗は乘車一軌を容れ、道は二軌を容れ、路は三軌を容ると、鄭說を承繼いで論ずるにも及ばず、今の習は大路をも小徑をも皆なべて道路とはいふなり。人事の簡よりして繁に至り、單よりして複に之き、利害の錯雜し、得失の紛糾するや、此の道路といふものも轉むづかしくなりたり。毛を衣として血を食とし、弓一張に箭の二筋三筋にて事足りたる世、或は山菓野蓏に腹を充たして、樹の皮草の緜に身を被ひし頃は、如何ばかり煩はしき物思ひも無くて濟みけんと、大古のなつかしからぬにもあらねど、それも二十世紀よ、改造時期よと、罵り騷ぐ今に生れあはせては、願ひもとむべくもあらず。寒くしては纊を挾み、暑くしては葛を被るべし、任運に衣裳を増けて、滯まる無く泥む無く、夜が明けたらばお早うと挨拶して、さら／＼と埒をあくるが倦れ氣の無き生活といふものなれば、自動車といふ大きなおもちやを鬚の生ひたる茶目丸が走らせ來るに醜い顏して、エデンの園の樹の下道、淸苔わづかに人の足跡に讓る好い景色の昔を想ふとも甲斐あらんや。たゞ應に時に隨ひて謀を定め、機に對して礙無かるべし、楮製の美人にあこがれていたづらに涙を流すは、情すなはち眞なりと雖、心つひに癡ならずばならず、六七千年の遼き古は、また今の世にかへるべくもあらじ。

太古の道はいかなりけむ。おもふに道ありて後に人の歩めるにはあらず、人の歩みて後に道の成りたるなり。泉に赴いて水を求め、林に入りて果をあさるほどに、人の足跡の平らかなる、おのづからにしてはらゝげる土を踏み固め、萌え出づる小草を踏みしだきて、いつとは無しにノヽと左行き右行き、逶迤とめぐり曲れる道を成したるならん。其道の細くしておぼろげなりけむは言ふまでも無かるべけれど、其の滑らかにして美はしかりけむもまた言ふまで無かりけむ。幽邃林樾に入り、山鶻夕陽に啼く、閑寂清涼の天地、汚すべきものゝなく、壊るべきものゝ無ければ、露潤ほして飛塵を絶ち、風掃つて落葉空しく、一條の路たゞ是畫の如くなりしなるべし。今も伊豆の大島の泉津あたりの椿の下道の如き、車馬殆んど稀にして人の踏み成したる路の美はしさ、島を訪へるものをしてそゞろに欣美の情を起さしめ、瑯玕削りなしたる如き緑葉の間に紅花點綴せる樹々の奥より緩く流れ來る御神火節の歌聲を聞きて、文華未だ煩はしからざる世の優に樂しかりけんを想ひて恍惚たらしむるに足るものあり。文明何物ぞ。文明の人をして樂しからしむると思ふは、譬へば多錢の人をして樂しからしむとおもふに同じ。多錢必らずしも人を幸ならしめず、幸不幸は吾が懷にありて物の上にあらず。智を竭し慮を積みて、砥の如く平に、鐵の如く堅き路をつくり、電の如く駛り、風の如く飛ぶ車を走らすとも人は必らずしも破顔開口して心のどかに笑ひ樂むを得可らうず。たゞ既に虎に騎つて時を經ぬ、今遽に下るべからず、いやが上にも文明の世を造り出さんとするけ、已み難きの勢なり。今また人の足跡をもて踏み成せる路の美はしさを現はさんことを求めんは、かなはぬ望の、あへなき夢なり。

さかしき路を超えて山のあなたの戀人を尋ね、濱の蠣貝に夜まだ明けぬ路を相思のふたりの行きわづらふなど、昔の惡き路に昔の人の苦み悲みしも幾許ぞや。碓氷峠の羊腸たる嶮に、此山の十も重なりてあれかし、我ひとり越え行きて思ふまゝのあきなひせんと、云ひし近江商人の意氣は好もしき物語ながら、伏見の雪の路に三孤を伴なひてなづみし美

人の語の何ぞあはれなるや。人の力なほ微にして、自然の威ひより大なりし世は、道といひてもはかなくしき道に亦あらず。車のつくりなた精しからず、馬牛の挽く車、手ごしなんどのはかなきものをたよりとしたる頃、思ふにまかせぬ身の老幼婦女の、長途嶮路に疲れ惱みしさま思ひやらるゝことなり。されど然る頃には又人の脚の力も今に比べては遥にすこやかに強く、我等の思ひも及ばざるものなりしは疑無し。今も伊豆の果の海邊、群馬の奥の山中なんどに住める者の、崎嶇たる峻路に行きならひて、前なるは後の人の頂を履み、後なるは前なる人の踵を視るやうなるところにも、さまで苦み喘がで上り得るなり。まして古き代の賀茂の武津怒身命なんどは、紀伊大和の境の山坂をも飛ぶが如くに走りたりとあるも、よも僞りにはあらじ。日本武尊は貴き御身をもてすら、東夷征撫の幾百里の路を歩ませたまひ、筑波より酒折宮までを十日九夜に到りつかせたまひぬ。荒川上流を經たまひしといふと、玉川上流を傳ひたまひしといふとの兩口碑あれど、いづれにしても其頃の野道山道、御裳には萩の露小笹の露重く、御袂をば茨の刺拔葜の刺の障へまつれるなるべきに、天翔けるばかりの雄心猛くましましたればとて、かしこくも岩根木の根ふみさくむ御脚の力のいと強くおはしたればこそ跋渉し得たまひたるなれ。今の人の脚の力にては、甲武信嶽の山路に迷ふや否や可惜若者の足たちまちに三重に屈りて、魂はやく一身を離るゝに至るなり。女も弟橘媛は、燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はもと詠じたまひし御歌によりて考ふるに、正しく茅瀬の焼けたる末黒の根株踏み分け踏み分け、尊に追隨して走りあるきたまひしにて、御踵の御皮のほど、徳川期に成りたる唄に、むばらからたちそぎ竹や道の小石に足痛みと唱はれたる深草の少將の如き柔弱なるものにあらず、一日六里づめの軍人ぐらゐには容易に歩み勝ちたまふべく思はる。慣へば慣れて濟む所なり。馬駕籠出來て人弱くなり、一里と聞きて行かぬ松島、と江戸の俳人は不風流を行脚に敢てし、予濟勝の具に乏し、と淡様の名を誇る儒者は紀行に筆を起するに至れるも、自然の威の偉なりし世は、人の脚力の威もまた偉なりしなり。蜀道難無かりしなり、鄧艾功を立てき。アルプス越ゆべかりしなり、奈翁威を揮ひぬ。天山蔥嶺、勇者の前には、何ほどの事も無かりしのみ。

○

天は空し、障ふる者有る無し。されども鷲の飛ぶを見るに、夕々の行く道おほよそは定まりありて、風雨と雖さのみは變らず。村舍に住むこと久しくして、予ひそかに天行く鳥も其飛び行く道のおのづからにして存するを悟りぬ。古より跡無きものを鳥の道に喩へたるが、鳥の道に跡無きことはまことに跡無けれども、道無きにはあらず。鷲も飛ぶこと必らず道有り。カムチャッカより千島に飛來るに、およそ定まれる道ありて、年經れど變らず。されば鷲を獲んとする者は、其道に當りて廬を構へ、潜み居てこれを狙ひ撃ちて獲ると聞けり。燕と鴈とは遠き路を往來する者なるが、おもふに此もまた必らず定まれる道を經るなるべし。海は潤きなり、支ふる者いくばくも無し。されども魚の海を行くもおほよそ定まりたる道あり。漁夫は魚道を探りて知り、長綱これを擱めて巨群を獲るを期するなり。古より漁村として榮えたるところは、大抵魚道の衝に當る地か、さらずば魚族の放卵地なり。魚道もし變ずれば、魚またこれを通らざること、たとへば人の新に良き道を得れば、また舊道を行くもの無くしておのづから荒廢梗塞するに至るが如し。奥州金華山附近の某島の如きは、魚道一變してより、また漁利を得る能はず、年々衰弊して殆んど救ふ可からざるに及べり。鮭、鱒、秋刀魚、皆魚道あれば、他の魚もまた然らん。鱒は河中を行くにも魚道ありて必らずこれに由れば、熟く其道を知れる者は、唯一條の銛をを手にして水に沒し、要衝に潜みて突刺して之を得。鰻もまた道あり、人或は土砂を塡めて道を斷れば、草頭の夜露身を潤ほすに足るに乘じて、水を出で陸に上り、行かんと欲するところに行くをもて、これを獲ること容易にして稀ならず。木に緣りて魚を獲るは、外國の鱸の一種と鯢魚とのみなれども、草を撃つて鰻を得るはめづらしきことならず。猪鹿の道ををつくるは誰しも知るところなり。源平盛衰記鵯越の條には鹿道の事見え、猪道の立木を撓めて「ぶつばね」をしつらひ、或は猪道に一二三を爭ひて潜みて銃を擬するは獵者の常なり。これ皆其通ふ道の定まりあるに本づく。鼠も鼠道を得ぬ間はむざとは進み入らぬものにて、一たび鼠道開けては人之を塞ぎても頓には思ひ棄てぬ

なり。されば鼠を防ぐの法は道を開かしめぬに在り、鼠といふもの道いまだ開けざれば跋扈して心小なれども、跡路に通ずれば跳梁して驕張る。猶は既に開けたるの道に候して功を立つるのみ、微技頼むに足らず。家に儲蓄無くして洒掃備に至り、すべての物齊整亂れず、かげ無く汚無ければ、鼠はなか〳〵道を開かで、假令家には住みても害をば成さぬなり。蟻もまた道を爲す。熊野詣りといふは人の知るところにして、絡繹繽紛右往左往す。此蟲甚だ微なりと雖、意圖の確、智計の密、人をして却つて啓發するところあらしむ。川の底を穿つて彼岸に至るの隧道を成せるが如きは、人未だ爲すことを敢てせずして、蟻既に功を成す。槐安國裏に才有りといふべし。鳥獸蟲魚、或は道を定めずと雖、或は路をたがへざる有り。人の道路無くして已む能はざるも、おのづからなる約束といふべし。

○

人の徒歩するのみの代には、道はおのづからに成れるのみにして足りたらん。されど家のめぐり、門のあとさき、庭のあたりなんどは、凸凹を除き、草穢を去り、卑濕を忌みて、少しく施爲經營するところありしなるべく、人情の自然の勢、さ無くては已むまじかりけんとおぼし。其後馬を役し牛を使ふに及びても、猶さしたる變りは無くて有りけんも、車といふもの丶造り出されて、重きを載せ遠きに致すの事起りてよりは、路の濶さは必らず車を行きちがはすに足るを要し、道の剛さはおよそ車の輪を承くるに足るを要し、こゝに道路のやゝ備はるに至るの第一段を成したるならん。軒轅氏車を造ると傳へたれば、車の世に出でしも遙に古きことなり。馬牛をして大なる車を牽かしむるに及びては、道いよ〳〵廣く、いよ〳〵固からざるを得ざれば、こゝに人文の進むと共に道路の觀も大に改まりしなるべく、車戰の法の夙く周以前の古に起りて、軍といふ字も陣といふ字も皆車に從へるをおもへば、おもひの外に早くより道路を治むることもこれ有り、又戰に臨みては之を截り之を塞ぎて道路を毀てることもこれ有りしなるべし。又高山大岳を祭り封ずるのことは、功を一世に立てゝ威を天下に揮へる者の必らず之を爲すためしなれば、貴者の登臨に際して、泰山などには

夙くより道を治むること行はれしなるべく、管仲以前に七十餘王の跡ありといへば、其路の開けしこと推測り知らる。輦もまた路狹くしては用ゐ難ければなり。秦始皇の雄威を以てしても、尾羽しほたれたる雞の如くに、わづかに松の下やどりして雨を凌ぎしといへば、古の天子の質素なるや、山路は膝くり毛に限るとありしや否やは知らねど、よし輦は用ゐざりしまでも、道を治むるほどのことは有りしなるべし。又市といふことの古より行はれたるに、物多く搬ばれ人多く群れたる、道もかならず治められでは叶はぬことなり。又宮中の衖に接する之を壼と謂ひ、廟中の路これを唐と謂ひ、堂塗これを陣と謂ふなどいへば、帝王の宮廟には夙くより美しき道の設けられたるなるべく、すべて古も今の人の思ひ下すよりは萬事具備して、今の清潔法の石灰を撒くことなどは、古きも古し周の代の法なるを、進歩したげな顏つきで學び居るほどなれば、道路の制も古を侮るべからず。經涂緯涂は九軌とあり、車九をならべたるほどの道幅にて、一軌およそ八尺、九軌七十二尺なり。環涂は七軌、野涂は五軌とあり。車を以て道幅の標準とせるは、理ありて情に近し、鑿空に計を立つるとはいふ可からず。今の人皆賢にして古の人皆愚なるにはあらず、今のみ道路ありて古に道路なきにはあらず。

○

戰は厭ふ可けれども亦免かれ難し。戰の起るや必ず道路を爭ふ。道路は軍の由つて進退するところなればなり。されば古人の戰を避けんとするや、道路を通ぜざるの地を存して、軍兵の由つて出づる所を塞ぐ。高山なり大川なり沮洳なり湖海なり、これを存して天塹と爲せば、彼此相爭ふ無し。固陋は固陋なれども、安泰は安泰なり。されば蜀は道路を開き峻嶮を夷らげて國奪はるゝに至り、黄金を產するの鳥を得んと欲せし癡望を悔れど甲斐無し。是の如きの情理によりて吾邦の亂れたる頃は、群雄各々一方に據りて、各々其の疆域の山の高からざるを是嫌ひ、河の濶からざるを是苦しみ、交通の路の梗塞し杜絕せんことを是希ひぬ。吾邦の國を立つる、海中の一島に於てすれば、峻山急流おのづからに

多く、平原廣野おのづからに少く、坦々たる大道いくばくも無きは、自然の勢に制せられて然ることなから、又一には羣雄割據列侯對立の情勢より、おのづからに山河の障礙を利用し保存せんと力めたるによらずばあらず。道相通ずれば事遷ひに生じ、事遷ひに生ずれば爭必ず起るは、數の免れ難きところなれば、これもまた已むを得ざるのことにて、今の心を以て古の政を非とするは苛なり。今日存するところの道路は、およそ德川期の道路に本づくものにして、德川氏の時に及びては、仁人志士の交通行旅の便をはかりて道路を開くものありと雖、猶險隘に關を置き吏を配し、山河の勢を藉りて、國家の安を護りたるの跡明らかに、列侯もまた各々共の疆を鎖し城を固うし、自から嚴守したるの狀歷々たり。明治に至り、四海一家の親をなし、各地の險漸く夷らげられ、砥の如き大道四通し八達せんとするに及べりと雖、今猶鐵道一朝の風雨に廢すれば、行旅忽にして困滯するは、積年の餘弊急に除き難きものなり。今の勢、民睦み衆和すまた國內に爭闘の生ずべき無けれども、兇惡の戰必ず道を爭ふが如くに、平和の戰も亦必ず道を爭ふ。それ兵の多寡は兵の多寡にあらずして、戰に參する者の多寡なり。兵多しと雖、戰に參する者寡ければ弱く、兵寡しと雖、戰に參する者夙ければ强し。路隘くして兵多ければ、兵多きも功少し、進むこと難ければなり。道廣くして兵寡ければ、兵寡きも功多し、進むこと易ければなり。道路の廣狹險易を以て兵の多寡種類に比し、兵の多階寡類を以て道の廣狹險易に擬し、兩者を校量して而して時を得。時は卽ち戰の樞機なり。古の語に、合期する、合期せぬといへるは卽是なり。時を計り數を計り、地を計り、計り得て皆中れば、計りごと合期せるにて、共勢勝つ。而して參戰の兵數、合戰の地處の定まる所以は、一に時にかゝつて存し、時の定まる所以は、主として道路にかゝる。道路の戰に於けるは最大要件たり。平和の戰に於けるも亦然り。農や工や商や、各競進して覇を一世に爭はんとす、共計りごと合期する者は勝ち、合期せざる者は敗る。今吾邦と各國と日々相競ふ、吾邦の平和の戰士をして戰に參する者多からしめざるべからざるや論無し。如何なる山の奥海の果より零細の貨物をなりとも容易た迅速に出でしめ得て、伍をなし隊をなし、堂々として世界の市に臨み、旗鼓相見えしめざるべからざるや論無し。共計一にかゝつて先づ域內の道路を治めて兵の運用を容易にし確實に

し、次で域外に於て敵と要衝を爭ひて之を收め獲るにあるのみ。綠水白雲に路を遮ぎらしめて、桃花源裏に寔永く眠るが如きは、好きこと甚しと雖、今復得可からさるなり。

○

人の路は人のみ踏みたらんには、おのづからに成りて、おのづからに美はし。馬を用ゐてこれに騎りこれに荷なはしむるに及び、人の路は壞れぬ。馬の蹄は人の蹠より固く、且又人は左右足あるのみなれど、馬は前後足ありて、しかも人は輕く馬は重ければ、路は馬の爲に陷沒して凹處を生ずるなり。凹處一たび生ずれば、馬は心の安きを好むものにて凸きところを踏みて滑らんよりは、むしろ凹めるところを踏みて汚れんと、また復凹處を踏みて行く。雨つゞきて地軟らかなる時など、かくすること度重なれば、馬の蹄のあたるところは終に深くなりて、道に段を刻みたるが如くなるに至る。巢林子の虎が磨に、馬ざくりと見えたるは、卽是にて、さくりは今の語のしやくりなり刳の義なり。車を用ゐてより路はいよ〳〵壞れぬ。輪は薄く、荷は重し、わだちに鮒の居たる喩さへ莊子にあれば、深く地を刳りたるさま見えて古の路の惡さ想ひやらる。馬は橫にさくり、車は縱にさくる。このほかにまた牛といふものありて、體大に身重く、力强く蹄小に、牛起きと云ひて、卒かにむつくりと立上るほどのものなれば、地をくぼむること少からず、足跡に水を湛ふるに至るを以て、牛蹄の涔といふ諺さへあり。馬あり車ありて牛まであれば、地は縱橫に刻劃されて、點々に壞敗さる道路修治の事起らでは已まざるの勢なり。其後自轉車といふ小賢しきもの、人力車といふ悲しきもの、自動自轉車といふけたゝましきもの、自動車といふゆゝしきもの出で來りて、羊車、馬車、牛車の間を走りぬくれば、法華經の聲も古ぼけて聞え、堅牢地神の頭も痛むべきかと見ゆ。人力車は孝子に起りて、二十四孝の噂に殘り、戲作者に中して。妙々車、白縫物語の繪に現はれ、終に駕籠屋の手に梶棒を取つて挽出されけるが、人を役するによりて其德は薄けれど、路を毀ること少し非難は鮮からん。自轉車自動自轉車自動車の類は、馬車牛車の類といたく異なり。古の車は車留先づ動

かんとして車輪隨つて轉するなるが、新しき車は車輪先づ轉ぜんとして車體隨つて動く。されば馬車等の輪はたゞ地を壓するなれど、自動車等の輪は地をかきむしらんとす。此故に最も重き自動車は路を毀つこと最も甚し。墨陀の堤路は鐘淵沿ひの荷馬車なんどの大きく重きが通ふこと少からざりしも、絕えて壞れ毀たるゝこと無かりしに、自動車の行きかふやうなりてより甚しく毀たれて自動車さくりの大溝小溝、雨少しく續くときは人をして歩む能はざらしむるに至れり。且又自動車の輪は荷馬車の輪鐵などの如くに外緣平らかならで、タイヤの形恰も藥研なんどの如くなれば、路の濕を帶びて軟なる時は、特に甚しく地を割裂くなり。自動車無かりし時の路は彼の如く美しく、自動車有りし後の路は此の如く惡ければ、畢竟するところは人の自動車を呪ふに至るもあながちに理無からず。富貴の人に用ゐらるゝ自動車の爲に破られたる路を自動車に得乘らぬ多くの人々の租稅によりて治め繕ふといふは此の理あること無し。自動車の路を破ることは拔群なれば、宜しく自動車に拔群の稅を課して、其財をもて道を良くすべし。かくするも猶富貴の人は衆人に債を負ふものなり。自動車の走るや、抑何の權ありて人をして右に避け左に退かしむるぞや。全く人をして避け退かしむるの權有る無し。衆人たゞ其の小取廻しのならぬを憫むと、過つて衝觸して身を傷つけんことを忌むとによりて、寬假して避け退くのみ。理屈づくめに言はゞ、車上の人は寬假の美情に對して、一禮して去り、一言して去るべきが、本當のことなり。明治十餘年頃までは、人力車の衆人雜閙の間を馳るや、車夫は必ずゴンサイ〳〵と云ひたるものなり。ゴンサイは御免なさいの急促せる音にして、其意吾の故を以て人を煩らはすを謝する也。人情菲薄甚しからずば、かくまでは無くとも、此心はあるべきならずや。德を積み功を立てんとする者は、怒れる蛙の道に當れば、國王の貴きを以て猶車をとゞめたるためしあり。今の世、人忙しく事多し、自動車上に於て一々慇懃に衆人に謝することは能くし難く、衆人もまたこれを求めずと雖、衆人の心中、固より吾の彼に讓る者は吾が寬假に出でゝ彼の權利に存せざるを知れり。知つて而して寬假し、自動車上の人をして便を受け、吾みづからをして晴には塵土を浴び、雨には泥濘を承け、急遽蹌踉として下駄の鼻緖を斷たしむるに至るも、敢て恨まず取て怒らさる者は、柔和敦厚なる吾邦老幼婦女の眞情なり。自

動車上の人の衆人に債を負ふも多しと云ふべし、これをこれ察せずして、富者漸く肆にせば、衆人の情漸くにして激し、睚眦瞋視よりして扼腕戟手に至り、其の忍ぶ可からざるに及んで、變や意外に勃發せんとす。今眼をあげて衆庶の色を視、耳を放つて天下の聲に聽き、而して瞑目反聽して慮るに、吾邦優美敦厚の俗は、日に失はれ、西戎弱肉強食の風は月に長じ、上下相爭ひ、貧富相剋し、社會は安定を缺き、人情は險惡を加へんとするが如し。自動車如きはまことに些々たる事なれば多く言ふに足らずと雖、些々たる事の積り積りて、人情は微々の中に大變易し、時勢は暗々の裏に大推移せんとす。一點の星火も阿房を焚くと云はずや。若夫れ薪に澆ぐに油を以てし、風に乘じて火を放つ者あらば、瞋視して已める者は、眦を決して立ち、扼腕して止める者は梃を執つて揮ふに至らんとす。俗をして敦からしめ、風をして美ならしむる所以を思はずば、道路は砥の如く平らかに、自動車は箭の如く奔るとも、泉に就いて飲み、林に入りて食ふの史前の福も、亦復得るに由無からむ。

○

酒無きも活くべく、烟草無きも活くべし。然れども酒已に世に生じ、烟草既に世に行はれぬれば、これを惡みて吾が此を用ゐざるは可、擧世を強ひて酒盃を抛ち煙管を折らしめんとするは能くし難し。甚だ人情に遠ければなり。所謂二十世紀の文明といふもの、これ無きも活くべく、これ有るも人をして眞の幸福を得しむるに足らざるもの甚だ多し。然れども此等のもの既に世に生じたれば、これを惡み斥けて吾一人これを用ゐざるは可なり、擧世を強ひてこれを用ゐざらしめんとするは能くし難し。甚だ人情に遠ければなり。若し極論すれば、人類ありてよりの文明といふもの、果して人類を幸ひしたりや否や、甚だおぼつかなし。古今六七千年、贏ち得たものは何ぞや、紛々のみ擾々のみ。二十世紀、收め穫たるは何ぞや、戚々のみ悽々のみ。西人智多しといふも、其智の醞釀し出せるものは、曠古未曾有の大戰熱戰毒戰酷戰愚戰にして、國破れ國亡び國披れ國亂れ、民傷つき民死し民苦み民泣き、世界全面の混亂迷亂動亂狂亂紛亂にして、人

叫び人唸き人騷ぎ人諍ひ、心騷き心顚き心悖れ心毀はれたるのみ。社會の安定は缺け、精神の崇高は失はれ、善良なるものは禍を受け、兇妄なるものは威をなし、生産の量は減じ、請求の聲は荒び、歐米を擧つて幸多からざるが如し。交通機關の備はり、戰鬪機關の備はり、生産機關の備はれる、此等所謂文明の進歩といふもの、人類の幸福を大にしたりや、慘禍を大にして避け易からざる急湍激渦の中に生靈を投じたりや。亢高傲慢の心を棄てゝ謙遜平夷の懷に住し、仔細に思量檢校するを要す。されど其の人類を幸にするとせざるとに論無く、今遽に此等のものを棄てゝ用ひざらしめんとするは、たゞに情に違きのみならず、又勢に於て不可、理に於て不倫のことなり。されば自動車もよし、自動自轉車もよし、何もよし、彼もよし、此等のものをして世界化醇の段階の一塊石たらしむれば可なるのみ。

○

自動車もまた人を利すること多し。其速力の大なること一、馬牛なんどの如く疲れざること二、行かんとするところに行き、止まらんとするところに止め得ること、汽車の不如意なるが如くにあらざること三。たゞ其の路を壞り衆を屈するを妙ならずとす。これを濟ふの道如何。衆人をして不安と不快とを覺えざらしむるは、人稠き都市に於ては車道人道を別たざるの路を駛ることを許さず、廣路には車道人道の別を立つることと是なり。かゝれば折角速力の高きを功とする自動車の歩みをして牛の如くならしむること無く、又衆人をして不安不快を覺えしむること無からん。路を壞るを防ぐは共計二。一は自動車に税を課することを多くし、國家が堅硬の美路を造り成すことを助けしむるなり。一は自動車のタイヤの式を改めて地に接觸すること平らかならしめ、且其幅を濶くせしむるの令を下し、又タンクの無限軌道の如きものゝ輕快にして用に堪ふべきを發明採用せしむべき也。たゞにタイヤを改めしむるは小補あるに過ぎず、無限軌道を具へしむるは發明の成否と新意の巧拙とによると雖、多雨にして加之土質固からざる我邦に在りて、單に既成の功をのみ襲用し、一も新意を加ふる無きは、日人模倣を能くするのみとの評、辭する能はざるところたらずんばあらじ。

諸葛孔明木牛流馬を造りて運輸の利を蜀道の險に通ず。木牛何ぞ能く負ひ、流馬何ぞ能く行かん。或は曰く、木牛流馬は名のみ、牛馬の形をなすにはあらざるなり、車の轅の長く双び出で丶數人一行にして挽く可からしめたるを木牛となす。多力にして双轅あるを以てなり。單轅獨出して人これを脇にして挽き。車軌狹少、或は單輪なるを流馬となす。力は牛に及ばずと雖。捷なること牛に勝るは馬なり。且其車體、馬首前に伸べるが如しと。蓋し臆測するに。車尾に二杆ありて地に曳く、猶牛馬の後足の如くすれば、阪路に少休するを得て車後退せず、挽夫一息して復新に勇を鼓するを得。木牛流馬およそ是の如くならん。然らざれば說通ずるを得ずして、孔明は左慈費長房の流の人とならん。流馬の如きものは、我が京都附近の地また此有りて、其捷なるは人の利とするところなり。古より兵家は道路と運輸と地勢と器仗とに思を致すこと多し。墨翟は兵家にあらずと雖、其の平和論者にして好戰者を壓倒せんとするの故を以て兵を論ずること少からず、其書攻防の事を說いて實際の言多く、今の讀む者の精解圓通し難きところは、工兵科の施設を要する處に在り。且や凝慮三年にして木鳶を造りて之を飛ばしめしといへば、今の飛行機模型は既に成れりとすべし。是の如くなれば孔明の知の多くして慮の長ぜるは、小說演義の書の記するところの如くならざるも、必ずや難を通じ功を濟くるの計を爲し丶ならん。前說の如きは、眞を得たりや否やを知らず。然も我勇者の前には蜀道の險無く、而して又智者の前にも蜀道の險無きを知る。區々たる日本小國、今の智と力とを以て、何ぞ道路難を言はんや。

○

道路を修むるの難易土質の甲乙による。東京の地は軟、西部の地は硬、東京の地は却つて密にして雨を湛へ、西部の地は却つて疎にして水を洩らす。其の砂を含むの此は少くして彼は多きが爲なり。壤土ははらゝぎ、埴土はねばり、埴

土は輕きの類、土に應じて計を立てなば、勞少くして功多からん。吾や土木の學に通ぜずと雖、如何なる土地にも磧礫をだに布かば好道路を得んとなすが如きは、如何なる人にも葛根湯をだに與ふれば健康を致さんとするが如し、醫にあらずと雖、此のことわり無きことを思ふ。凡人にして專家の爲すところに喙を容るゝは、己を知らず人を知らざるの甚しき者なれども、およそ專門家ほど賴る可きも無く、又賴る可からざるも無く、信ず可きも無く、又信ず可からざるも無し。人あり、眼力衰へ、且神經衰ふ。眼科の名醫に就て治を請む。醫曰く、神經衰弱は眼の故に因ること多し。適度の眼鏡を用ゐ、吾が治を受けなば、神經衰弱も隨つて治せんと。其の早く舊に復せんことを欲するの故を以て、別に神經科の名醫に趨り治を乞ふ。醫曰く。神經衰弱は眼力衰耗を致すこと多し、吾が治を受けなば眼力の衰も隨つて治せんと。其人怪訝疑惑して、二醫の孰か優れるを一親友に問ふ。友慮ること良久しくて曰く、二醫の言皆是にして、而もまた蓋し皆非、病は物價騰貴の故ならんのみ。爾の性嚴固なり、爾の妻かつて予に語るらく、物價日に昻る、しかも月額一定、苦請すれども增されず、妾の家政を執るも、殆んど堪へさらんとすと。おもふに細君は耳を彈鋏の歌に聾にして、足下は口を滹沱の飯に糊するのみならん、疾く報德宗の分度論を捨てゝ、せめては櫻肉に馬の小便の如き酒にても飲めと。其人翻然として悟りて謝し、家に歸りて改むるところありけるに、旬日にして病癒えたりといふ。此は是譬語に過ぎざるも、世おのづから此の如きの事多し。砂利を布き、割栗を塡め、煉瓦を充て、板を貼り、木口をならべ、石を甃き、たゝきをつくり。アスファルトを流し、コンクリートを用ゐるなど、道を造るの法も多し。此等の中、費少くして功長く、觀て美に履みて快きを取るべし、何ぞ勞多くして毀るゝこと速きを取り、隨つて成れば隨つて壞るゝの陋を數々するを要せんや。步道はやゝ堅からず、車道は最も固かるべく、水を吸收することは少かるべく。熱を放散するものは忌むべし。雨水の流去を圖るの勾配は緩に失するなかれ。小溝の道に沿ふもの、大路には必ず具すべし。道塗の塗字、經涂の涂字、皆水に从ふも、遂人匠人の條に照らして古を考ふべし。家屋の高低は道路の廣狹に準ずべし、小路に高屋あるを許す勿れ、陰鬱の氣を生じ、濕を引き弊を生ず。大路に矮屋あるを許す勿れ、貧弱の觀を呈し、地を賤しくし利

を塞ぐ。道路にして完成すれば、家屋は道路によつて利と不利とを受く。故に家屋税は一は道路の廣狭に準じ、一は其大小により定めらるべく、道路の修繕掃除の費は、其一部より支持さるべし。およそ此等の事、都市と村落とによりて斟酌あるべきは論なきのみ。

○

行路樹は、夏は蔭を與へ、冬は日を遮らぬものにて、路上に生育するに堪へ、人目を慰悦すべき、其邦の美樹を植うべし。平安城の昔は柳櫻をこきまぜしか否やは知らず、もし道美しく樹榮えなんには、いかばり人を樂しません。されば極樂淨土もさるものなりと見えて、阿彌陀經を讀めば、道の整ひて樹の麗はしきさま詳らかに說かれたり。今の路を見わたせば、さま〳〵の樹あり。柳櫻は論なし。銀杏は大樹となりて雲つくばかりに立ち、乳のやうなるものだら〳〵と垂る姿を現はさんには、いさゝか昔物語めきたる景色となりて、有りがたげなることならん、たま〳〵市中に一二本あるだに化銀杏拍子木銀杏なとの噂の出たりしを、數多の老樹のすく〳〵と生立つに至らば、賑やかなる町には定めし宜く似合ふことならんと、感服す。日本は樹のよろしきも無き國にや、外國の何とやらいふ半鐘泥棒の墓からでも生ひ出たるやうなる樹を植えたるも感服のほかなし。外國の物としていへばベストもつき合つて見たいと思ふ人の多き世なるよしとて、あの樹の味も趣も分らぬ奴は話にならぬと斥けらるゝを恐れて、成程よい樹と拜見いたしまする、今に貧乏いたしましたる時、はあの樹をマッチの棒にして輸出致しますカナ、御深謀御遠慮のほど畏入り奉りますと申して說くが先づ當世さと人の云ひたるに愈感服す。玉づさの樹とやら、何處の田舍から御出になりたる事ぞや。坂上田村麻呂が鈴鹿山から御持になつたのでもござるまいし、玉ぢしやならば奥州仙臺陸奥守様御家來筋の千松が、雀が三羽とまつたと空つぽな胃の腑の横丁から悲鳴をあげて歌つたあのちしやの樹のことか。さては忠義奬勵、出茂在佐保太郎如き不埒者になるなよとの御諭しのこゝろかと、横手を拍つて感服のほかなし。猶いろ〳〵一々感服して後おもふに、松は街道め

きてよろしからず、もみぢは潮風に脆く、桐は一葉落ちて無常くさく、梅は埃に枯れ易く、桃は凡、李は俗、梨は花が冷く、檜は山めき、椿はころりと落ち、椎はもつさりと暗く、槐は唐様なり、榊は柳と共に神様ちかく、榛の樹は横の木は田舍び、槻楠は大きくなり過ぎ、杉は稲荷の外圍ひと、一つも宜いものは無く、何としても西洋ぶりのものならではと、思ひついたは、あくだら、名の響がおもしろく、次に橡の樹、とちめん棒ふるため、その次に八ツ手、われ人共に羽團扇がはりのため。

○

アラスカ、カムチヤツカの間にアメリカは鐵道を布設せんとするとかや。我はまづ樺太北海道の間に海底鐵道を布くべく、北海道より陸奥へ、紀伊又は播磨より淡路を經て四國へ、長門より九州へ、九州より對馬を經て朝鮮へ、又樺太より對岸大陸へ、各々海底に鐵道を設くべし。別に又國際道路を開くの議を立て、西伯利、滿洲、支那の鐵道は言ふに及ばず、歐維巴の鐵道を連ねて、印度、波斯、阿刺比亞、阿弗利加を帶び、東は亞米利加、加奈陀、南米に至る共幹線道路は盡く國際聯盟の手に管理權を收むべし。かくして萬里一路柳櫻を植ゑ、世界をして泰平の春光に歡喜せしむべし。この事爲すあらば、この事成るべし。我にして爲さずんば、代つて出でゝ爲すものあるべし。今の時に當つて國家民人を思ひ、道路と政治とを思はんものは、これしきの事を企畫し思議せではあるまじき也。是の如くなるに至つて、道路といふものは始めて意義ある也。



わが假寓の記

近松秋江

九月の下旬、東山に程近きこゝ安井神社の畔に假りそめの居を卜してより日は流れるやうに過ぎてゆく。前の住ぬしが植えて置いた朝顔が前裁の建仁寺垣にゆく秋の霜にも凋れず何時までも寢覺めの眼を悅ばしてゐたが、十一月の初になりて、北の窓より眺める東山の木々が次第に紅葉するやうになつてからは、しほらしくも過ぎし夏の名殘りを咲きとゞめし花もいつしか蕾の數少くなりて、今は垣根に絡む蔓に茶色に枯れた實の殼のみ眼に立つばかりになつた。三坪ばかりの前裁にはそれでも十種ばかりの庭木が植えられてあるが、中にも向うの塀際の白木蓮はやがて三四間の高さもあらう。夏の末よりつい此の間まではまだ重さうな綠の葉を蔽つてゐたが、この四五日の木枯しに淅瀝たる音を立てつゝ黄褐色にうら枯れて無殘なる姿を冴えわたる初冬の碧空に曝してゐる。落葉のために狹き庭は堆かく埋もれてゐるが、其等を掃き集めて燃きすてようと思ひながら、今しばらくはさうして落葉に散り埋んだ庭をそのまゝにしておきたいやうな心持ちがして未だ手をつけずに置いてゐる。そして窓硝子の内から木蓮の梢に散り殘つた黄葉を眺めてゐると、風無く暖に輝いてゐる小春日にも初冬の氣象は爭はれず、眼には冴かに見えないでも透きとほるやうな輕い風が瘦せた其等の枝葉をさら〳〵と搖つてゐる。

かねて京都は、冬の底冷えが強くつて凌ぎがたいと聞いてゐたが、去年から今春へかけての冬は、これまで幾十度過した經驗のある東京の冬に比べて格別凌ぎにくいとも思はなかつた。殊に秋は何處も穩か美しい日和がつゞくものであるが、近年の

東京の秋は、秋らしい美晴の日が稀であるが、京都の秋の日の溫暖と透明と穩和と閑寂とは自然に對して甘え、天に向つて心から感謝の意を表したいといふ氣にならしめるのである。私は京都の冬を、去冬一度だけの經驗によれば決して凌ぎ難いものとは思はない。

殊に今日この頃晩秋初冬の快さ。すこし朝小早に起きいでゝ北の窓を押すと、肱掛けの閾際に立つてまともに遠く北山つゞきが、前の家の家根の上に蜿蜒と連亘してゐるのが、やゝ淡紅がゝつた蒼白い朝靄の中に糢糊として見えてゐる。左の方の祇園町の女紅場の大きな屋根の彼方には愛宕の頂も見えてゐる。さういふ靜かな朝靄に罩められた日の暖さと靜けさとは、もう朝の内から確かに豫知することができる。私の二階の南の方の窓からはまた、東は八阪の五重の塔、淸水の山、二重の塔から右手にかけては遥く西山連山が脉々として近くの建仁寺の森の彼方に望まれる。段々詰まつて來た初冬の太陽は丁度その淸水の音羽山の頂からさし昇つて終日私の二階の南の方の座敷の窓に勿體ないやうな麗はしい光線を漲らして軒端を巡りつゝ、夕方には建仁寺の森の彼方、老の坂の方とおもはれる西山に沒する。靈山から音羽山の中腹を宛然綴錦のやうに斑々と彩取つてゐる銀杏や櫻楓の濃黃濃紅の色彩が、秋寂びた松林を背景とし、均整美的な古い八阪の塔を前景として六曲屛風を開いたやうに一幅の風景畫を展開してゐる。私は朝に夕にそれ等の風景を眺め、自然の色の日に／＼移り變つてゐるのを凝乎と眼に留めて心に深く味つてみるのである。二年坂から産寧坂の方につゞく家居が段々に重なり合つて淸水の二重の塔の方まで上つていつてゐる。その中に一とゝころ普請をしてゐる家の新しい木組みが靜かな秋の日を浴びて白々と眼に入る。

銀杏の木が一本高く黃葉してゐるのが黃金を懸けつゞつたやうに美しく麗かな日に輝いてゐる。

「何といふ美しい好い日だらう！」

と、私は屢々ひとり心でいつて見る。そして穩かな、明るい、寒くも暑くもない。肌觸りの軟い空氣の中に包まれてゐると頻りに旅情が湧いて詩意といふやうなものが動いて來て、世界の果てまでも行つて見たいといふ氣にならされる。

しかし私は、こんなに京都に長く逗留してゐても、京都の人間とは、自から進んで交際しようとは嘗て思はない。一體私の近ごろは、單り京都の人間といはず、凡ての人間と餘りに深入りした交際をすることを厭ふてゐる。それは一つは自分の病的な

性癖であらうと思つてゐるが、芭蕉翁が幻住庵の記にいつてゐる翁の心持がそのまゝ私の心持ちに共鳴を感ずる。

………かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず、やゝ病身人に倦みて、世をいとひし人に似たり。……

やゝ病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。と、いふのが、そのまゝ私の實狀である。身體が優れないから從つて何をするにも心から活潑な興味を感ずることが乏しい。人間は互に相解する程度は極めて淺いもので、窮極するところ各人すべて底を叩けば孤獨であることを免れない。東京にゐれば、それでも思想や興味を略ぼ同じうする人が多いのであるから生活の賑かさを感ずる場合が從つて多い筈であるが、私はそれにすら、最早多きを望まない。退いて唯一人になつた時を思へば、その一人よりほかに頼むべき處はないかの感がある。そしてそれが最後の歎かざる事實であることを何うしようもない。

況んや京都などにゐると右を向いても左を向いても東京に殊に多くゐる私達のやうな一種の階級の人間は極めて少くて、私達の生活や興味に理解を持つてゐる人間は甚だ少い。

私はそれゆゑ京都にゐるのは京都の人間が造つた趣味を愛でてゐるのではない。今日の京都の現實とは遠く懸隔してゐる古い京都、古典文學に表はれてゐる京都を、わづかにその遺物によつて偲ぶことの出來るやうな頽廢した過去の世界に空想を驅つてみるところに興味をもつことが出來るのである。そのほかには京都の自然そのものが最も私の眼に美しく、肌に快い。山城國は十年の昔此地にまだ帝都を奠められなかつた以前から自然の山河が一つの名勝區であつたにちがひない。それで私は、美しい暖い日に出會ふと時々それを心に讃美しながら伸び上つて北の窓に凭り北山つゞきから愛宕の巍巍を遠望するのである。

それ等の山はいろ／＼なことを思はしめる、私はその山の色を眺めて過ぎ去つた夏のこと、春のこと、冬のことなどが、それからそれへと想ひ起される。冬の頃寒いさむい雪空の下に其等の山々は皚々たる雪に被はれて白刃を逆まにしたやうな險しい峰の背や山の襞を見せてゐた。その寒い、つれない感じが、去年の暮から今年の春の初にかけて、朝夕の出入り、日暮れて散歩の歸り路、冷い雨の降る日の風呂への往きかへりなどに、どんなに私の心を傷ましめたであらう。私は其等の嶮岨な雪の峰を眺めて、世界は永久に、こんなに荒寥としてとりつく術もなく

突く、つれないもの丶やうに思つてゐた。

それでも、月日の經つのは案外速いもので、やがて春が來て、京の街から眺める四方の山々には眩い春靄を罩め、鴨川の岸に立つてゐる櫻の並木にまだ〳〵と思つてゐる間に早くも黄緑の嫩芽を萌しそめて、絹絲のやうな細かい春雨のしと〳〵と降りそゝぐごとにそれらの木々は長い間の冬枯れから若い生命を蘇らして來た。いたづらに心のみ齷齪としてゐる間にも日は流れるやうに過ぎてゆく。分けても今年は氣候が少し進んでゐたせゐか花の咲くのが例年よりも大分早くつて、いつもは四月の十日頃を見ごろとしてゐる圓山の枝垂櫻が、もう三月の二十四五日には眞盛りであつた。京都には東京ほど櫻が多くないが、動物園の櫻が近年人を呼んでゐる。その動物園の櫻をふいと見に入つたのは、三月の二十八日だつたか、もう滿開であつた。その頃から何となく頭の重い憂欝な氣分にとざゝれがちの體にはもう懊く、焦々暑いやうな春の日が照つて來た。私にはさういふ氣候を凌いでゆくのさへ生存の苦艱を感ずる。さうかと思ふと、傍にはめづらしいやうな爽かな美しい日に出會ふことがある。空の色の美しさは夏のおはりから晩秋にかけてのみが美しいとはいへない。冬から春に移つてゆく時分の空の色に何ともいへない美しい色の見られることがある。初秋の頃の空の色とはちがひ、飽くまでも潤味を持つた碧の空の一ところにどうかすると薄墨を流したやうな千切れ雲が漾ふてゐる。その雲の形態は人を脅かすやうな不穩な感じをしてゐる。天の大半は靑磁色に深く澄んでゐても、どうかすると地上に旋風を捲き起してその雲から冷い大粒の雨滴を落して來ることがある。雲は倍々墨の色を增し、襤褸を千切つたやうな亂雜な形態をなして刷毛でなすつた如き雨脚をつけてゐるのが仰がれる。それは西洋畫に屢々見るとほりの空の色雲の色の美しさである。暖い〳〵と油斷をしてゐた陽氣が俄に寒くなつて、先走つて咲いてゐた櫻の花がその爲めに不意打ちを食つたやうに梢頭に慄へてゐる。さういふ春の初の頃の空の色も今は懷かしく思ひ起される。

京都の夏は慘酷に暑い。私は今年の夏は早くから叡山にいつてゐたが、月に一度か二度京都に下りて來て山上の僧房で貧しい精進料理で耐えてゐた餓を慰めた。京都には、これまで時々三ケ月四ケ月とつゞけてゐたのを繼ぎ合はしてみると、いづれの月もゐたことになるが、ひとり八月の月は居らない。そのために私はまだ京都の古い年中行事の一つである東山大文字を見

たことがなかつた。それで今年の夏はぜひともそれを見るつもりで八月の十五日に叡山から下つて來た。六月の下旬から市中の暑を山の上に避けてゐるので、夏の都會の賑ふのをみるのも、偶には、さほど苦痛でないばかりか、めづらしくつて緊張した興味を感ずることが出來る。加之私はこれまで夏病みをするので、夏が嫌ひなので通つてゐたが、近年それを改宗してゐる。夏は清凉な高山にいつてゐさへすれば、夏くらゐ心地の好い季節は一年中にない。私は夏が好きである。夏は四圍の自然や氣候の推移から襲はれる寂しさといふ感じを嘗て覺えぬ。

東山の大文字は今では新暦の八月十六日の夜點るのである。その日は朝から雨が降るかと思へば又止み、止むかと思へば忽ち降つて來るといふやうな天氣であつたから、これでは大文字も好い具合に看られないかも知れぬと思つてゐたが、夕刻になつて丁度雨も止み、雲はあつても、處々に星さへ見えてゐた。私は何處からみようか、上の方にゆけば如意嶽を眞正面に見ることが出來る。昔は御所の池に映るその大文字の火影を見て宮中の人々が樂んでゐたといふことだ。まさしく御所のあたりへゆけば遺憾なく見ることが出來ると思つたが、ひとり靜にしてゐれば涼しい夏の宵もいぶせき人込みの電車に乘るのを厭ふて、私はやつぱりいつもさういふ時にゆきつけてゐる、四條大橋東詰の菊水洋食店の屋上から觀ることにした。そこから大文字の點火する如意嶽は斜に見ることとなる。大の字の左の半分しか見ることが出來ないけれども、身を休める位地がいゝので屋上は非常な雜沓である。晴天ならばもう初秋の宵、星屑明かな蒼空に鵲でも鳴いて渡りさうなところである。何處までも人群の雜沓を厭ふ私は、まして何方を向いても京阪訛りの言葉の喧しい中にまじつてゐるのが名狀し難い苦痛であるが、加茂川の流域を見晴した四層樓の屋上は雨模樣の空でも、さすがに夜風が涼しいので私は多數の見物にまじつて宵暗に濕つた東の方の大を今か今かと見つめてゐた。私はさうしながらも、周圍に足の踏み込むところもないまでに混雜してゐるこの街の人間を見るともなしに見てゐると、どうしても私は此の市の人間が私とは趣味の一致しない多くの特色を持つてゐることが妙に眼に付く。彼等は厭に黃金の輝きを好む人間である。でこ〳〵した指環を嵌めて得意になつてゐるのはいふまでもなく、腕時計を着けてゐる上になほ帶のまはりに金鎖を裝飾して喜んでゐるやうなところがある。着てゐる衣類の縞柄も私が東京にゐて見馴れてゐるものとは稍意氣がすつかり違つて特殊な京阪趣味を表は

してゐる。私は到底私とは一致することの出來ぬ趣味であると思つて眺めてゐた。

　そんな人間が耳の傍でがや／＼いつてゐるのが酷く私の氣分を傷けたが、私は常のとほり周圍の喧騷には堅く耳を閉ぢた氣になつて如意嶽と思ふあたりの暗の空を見てゐた。そこにゐる人々も皆頸はそちらに向けてゐる。やがて八時ころと覺しく、眞北にあたつて舟の形に火が點つた。皆があれよ／＼といつてゐる間に西北にあたつて此度は鳥居の形に火か點つた。するうち如意嶽の方に一道の火焰が起つて看る／＼うちにそれが大きな大の字に燃え廣がつていつた。雨模樣の暗の空は暫く明々と焦げ靡いてゐた。

　その眺めを肴に私も京の市の人々の間に伍して冷いビールの酒盃を傾け、私が夏には薩摩上布の着心と一つ聯想を起さしめると稱する大好きな蕃柿の清爽な味に舌皷をうつた。涼しい夜氣はすぐ眼の下を流れ落ちてゆく鴨の河原から湧いて來て、黑く繁つた岸の柳の並樹を透して向岸の先斗町の川原には明るい凉床の火影が短い夏の夜の更けゆくをも忘れて妓等を對手に戲れ遊ぶ浮かれた人達の聲が高く聞えてゐる。けれども私自身はもうさういふ遊びを羨ましいとも面白いとも少しも思はない。蕭々たる夜の川風の中にビールの酒盃を、ひとり心靜かに呑み乾し、舌觸り爽かな蕃柿の味に一入氣分を和げつゝ屋上を下つて東山の方の假寓に戻つて來て慈悲深い宿主の御隱居が吊つてくれた蚊帳の中に入つて安らかに身を横へた。

　さういふ過ぎ去つた春夏の事どもが、私には月日の推移の流れるごとく遠かなるにつけ、いとゞしく懷しく振顧へられるのである。私は過ぎ去つた事を、そのまゝ過ぎ去らしてしまひたくない。それを二たび三たび想ひ返へして懷しみ考へることによつてのみ私の生きて來たことが味はゝれるやうな氣がするのである。

　今年は京都でも例年にない何時までも暖かな日がつゞく。私の書いた物を、私の知らぬ遠い以前から愛讀してくれてゐる若い醫學士は此の春の頃から時々、旅の空に寂しい獨棲生活をしてゐる私の庵を訪づれて、私の寂しさを慰めてくれてゐる。私は、自身の愛讀者といふ人に會ふごとに、或はこれでは頼母しくないと思つたり、見當ちがひのことを賞められて嬉しい感じがしなかつたり、或は穴にも入りたいやうな羞しさを感じたりすることがあるが、既に一定の學業を卒へ、社會に獨立してゐる

やうな人の中に偶々自分の愛讀者を發見する時には、自分のやうな創作を怠つてゐる者にでも、こんな愛讀者があつたかと思ふと、大變濟まないことをしてゐるやうに思つて、大に努力してその好意に報ひなければならぬと思ふ。私にも文壇以外に人知れぬ愛讀者があると思ふと常に新聞雜誌の月評欄から忘れられてゐる自分は、その度に案外に思ひ、さういふ人達の者にも創作せねばならぬと思ふ。さうだ、私は月評子の爲に創作してゐるのでない、人知れぬ愛讀者の爲に創作せねばならぬ。

飛んだ外の事に話がそれたが、その私の寓に時々音づれてくれる若い醫學士の話では、今年の秋は實に好晴で統計上、去年の今時分に比べて非常に病人が少いさうである。平年に比べて今年は霜が降りるのが二十日遲く、昨年に比べて二十五日も遲れて十一月の十九日の朝はじめて朝霜を見た。それ故京の都をとり卷いてゐる山々の紅葉の名處が今年は例年よりも遙かに遲れてゐる。それくらゐ今年の秋は暖かく和かな日がつゞく。長くて一晝夜、大抵晝間か夜半か、半日も降雨がすると、あとは潔く雨は止んでまた五六日から一週間ぐらゐは穩かな暖い日がつゞく。

私はさういふ暖い日に洛北の方の山の中へ行つてみやうと思ひながら、その暖かさに、つい自分の油斷から十月の中ごろから十一月の初にかけて、輕微な風邪に罹つて長い間外出を控へてゐたので、毎日々々その暖かな麗日を二階の北の窗前の窗から眺めて過した。しかしその頃はつい眼近の東山一帶はまだそんなに木々は錦しなかつた。十一月の上旬から山の色は漸く黃變しそめた。

九日の午ごろ東京にゐる人間で、今尾張の半田にゐてある工業會社の支配をしてゐる知人が一と月ぶりにまた京都に立寄つて私の假寓を音づれてくれた。私は文壇の人に會ふよりもその人間に會ふのが嬉しい。彼は私より六つ七つ年下の男で、早稻田の政治家出身だが、その父祖累代の關係から云つても寧ろ系統は純粹な三田派であつて、私とも早稻田の關係で知つたのではない。私はよく彼に戯れて君は、故の中上川彦次郎氏の容貌に酷似してゐるといふと、彼を知つてゐる人々の間でもそれが定評であつたさうだ。彼は中上川氏の姻戚の家に長く食客をしてゐたのである。風采の立派な男好きも女好きもする聰明な表情を持つた顏で、如才のない、下手に出る軟かな處があるかと思ふと、見識があつて、話が要領を得てゐて、剛腹で直氣で、ツケ／＼と物をいふ。藝者などを捉へてツケ／＼と物をいふので

一層好かれるのであらう。それに話しが巧みで、何にでも豐潤たる興味を持つてゐて、美術鑑賞の好い道樂がある。五六年前失意の境遇にゐた時分でさへ、此の人間が話しに來ると、寂しさに沈み切つてゐる私の氣分を獨り手に引き立たしてくれた。況んや今日の彼は一つの有望な工業會社を創立の時から預けられて支配をしてゐる。神戸や大阪あたりへ商用で來た序には必ず京都に立寄つて骨董屋を見てまはつたり、古い社寺を巡覽したり、變つた食べ物を食つたりしてゆくのである。私は去年の春から東京を出てゐるので久しく會はなかつたが、彼も去年の夏から尾張の半田の工場に來てゐるのであつた。九月の末に三條の通を私は丸善の支店にゆく途中で、ばつたり出會つた。彼は鷹ケ峰の光悦寺へいつた歸りだといつた、

「君は感心々々。實業に從事しながら、曾てその方の趣味を忘れない。僕も光悦寺へはぜひ行つてみたいと思ひながら、まだゆかない。」

それから三條の彼の宿へ立寄つて一緒に湯に入つて夕飯を食つて又四條の通を散歩したり圓山にいつたりした。その翌日彼は叡山に寺寶の展覽にいつた歸りに私の處に寄つて夜まで話していつた。その翌日もまた早くから訪ねて來て一緒に歩いた。

それが、また一と月ぶりにやつて來たのである。

「どこか出てみよう」

といつて外に出た。まづ石段下に出て、そこから圓山に上つていき、智恩院の境内に入つて本堂をまはりを一とめぐりしながら裏門の方にぬけて粟田口を歩いてゆき、深碧の水の淀み流れてゆく疏水の橋を渡つて岡崎の公園に入つていつた。

私達は疏水の橋の上に佇立して川の上下を眺め、また秋晴の空に美しい藍色に染めなされてゐる比叡、鞍馬、愛宕の山々を顧望し低徊した。そこの橋の上から疏水の水上を眺めた景色は好い。南禪寺の山の松林が深々と茂つてゐる間から古い堂塔甍が隱現してゐるのは好い感じを與へてゐる。それから北へつゞいてゐる深い松木山には次第に楓その他の雜木が多く混つてゐるので、それ等がそろ／＼上品な黄紅色に寂びてゆかうとしてゐる。夏の頃一日叡山を下つてこの邊を歩いたことがあつたが、その時分に比べて、いたく山が痩せてその代りに清らかになつて來た。

「かうしてブラ／＼歩くのは京都は好いねえ。」

「うん、好い。」

さういひながら私達は公園の方に砂まじりの清らかな道を歩い

てゆくと、左側の圖書館の入口に聖徳太子に關する古文書遺品の展覽の掲示が出てゐた。それを見ると、私の同伴者は、「あゝこれだナ。新聞に出てゐたのは、一寸入つてみませう、」といつて、熱心な彼は私を誘ふて展覽場に入つていつた。私は今日(けふ)彼にすつかり行動を任した心になつて展覽場に入つていつた。場内には好事家らしい人や僧侶や歴史研究家らしい人達が靜に壁間に掲げた書畫やケースの中の古文書などを順々に見て歩いてゐる。畫幅には聖徳太子の繪像などが多く見られた。彼はポケットの中から紙入れを抽いて、中から小い天眼鏡をとり出して其等の畫像を精しく見てゐた。彼はしかし、自分にはあまり古い物は分らないばかりでなく興味も起らない。雪舟や狩野など餘りに年代が遠くつて何處が面白いのか分らない。自分には古くつて精々二百年、文晁や應擧あたりから後、華山、椿山、竹田あたりからが丁度自分には分り好いといつて主にさういふ處を研究してゐる。殊に南畫が好きで、單に技巧のみの畫家よりも士人の樂として弄んだ文人畫を愛好してゐるのであつた。彼は今應擧を一と通り研究して、今、竹田の研究に入つてゐた。竹田は最も彼の好む一人であつた。

私は文壇の噂、小說の事などを吾々と同じ事業の知人などゝ話してゐると、何だか神經性の眩暈でも感じて來さうであるが、實業に從事して相當に豐かな生活をしながらさういふ書畫の道樂を樂んでゐる人間との談話には何となく餘裕があるのが好ましい。

やがて一とゝほり見おはつて私達は外に出た。その間に太陽は大分西にまはつて、短い晩秋の日はもうそろ〱夕暮の色を漾はしてゐる。太極殿の前のとある茶店の女主人は、もとある旅館で古く女中をしてゐてよく知つてゐるので、そこへ立寄つて私達は茶菓を喫して暫らく憩ふた。身體の壯强な私の同伴者、

「あゝ、腹が減つた。」といつて、彼はシュークリームやワップルを瞬く間に五つ六つも食べてしまつた。

「さあ、これから何處かへ飯を食べにゆかう。貴下どこか、好い處を知つてゐるですか。鳥料理に東京の末廣のやうな處がありますか。」

「うむ、末廣のやうな處はないが、仕方なく京都の末廣といつたやうな處はある。……末廣はいゝねえ。」さういつて、私は東京の食べ物屋を想ひ起してゐた。

「あゝ、好い。京都には、それから牛屋にもいゝのがないね

え。銀座の松喜とか、四谷の三河屋とかいつたやうな處がない。」
「あゝ、ない〳〵。本郷の豊國も書生の行く處になつてゐるが、あそこも甘いよ。あゝいつた盛な牛屋の多い處を考へてみても東京は偉大だな。」
私達は大極殿門前の茶店を立ち立でゝ、それから櫻の馬場の廣場をブラ〳〵歩いて疏水の橋を西に渡り淺々と深碧の水を湛えた疏水の岸に沿ふて川端の方に出て來た。愛宕はもう夕暮れかけた黒い色を見せて西北の空に聳えてゐる。日暮に近づいて少し寒くなつたが、それでも堪えられぬほどではない。話しながら歩いてゐると丁度適度の氣温である。それから夷川橋を西に渡りずつと何處までもゆくと寺町二條を上つたところに出る。寺町通は東京ならば一寸本郷の通りか牛込の神樂坂から通寺町といつたやうな街筋である。私達は行く〳〵商店を覗いてみたり、道をゆく男女の話をしたりしながら極めて閑散な遊歩の氣分で寺町を下へしもへと歩いて來た。同伴者は時々煙草屋に入つて、何とかいふ西洋煙草を訊ねてゐたが何處にもなかつた。それから彼は、名古屋の藝者に頼まれてゐるのだといつて、とある硝子屋の店に入つていつて、帶の間に挾む紐の付いた懐中鏡を取り上げて、これよりもつと大きなのはないかい。と、試いてゐる。
「おい〳〵、それならほかに好い處がある。そんな鏡は好きなのが、いくらでもある。丁度君のとほりに、その店は、藝者や舞妓が、買うとくれやすといつて、お客にねだるところだ。」
私はさういつて、彼をしてその店から外に誘ひ出した。
私達は寺町をそのまゝまた下へいつて四條通りに出た。その日は日曜日なので、四條の通りの兩側の人道はめづらしく銀座通りほども賑はつてゐる。それから大橋を東に渡つて南座の筋向のある裝飾品の店へ彼を誘ひ入れた。
「さあ、こゝには好きな物がある。」
彼はそこで遂々例の懐中鏡を二三個買つた。それから花見小路の鳥料理菊水へゆくと、午後の六時丁度潮時なので、「えらい鈍なことどすが。」といつて、女中に玄關先きで柔かに斷はられた。そこを出て此度はまた先斗町の菊水まで引返へしたが、そこでもまた斷られた。もう何處でも駄目だ。彼は、ぢや圓山の平野屋へゆかう。平野屋ならば屢々飯を食ひにゆく。といつてそこから電車に飛び乘つた。遂々上の平野屋で座敷に通された。

翌日は私も一日家にゐて、東京へ書いて送らねばならぬ物を急いだ。晩には、まめなあの人間のことだから、商川さへ濟めばやつて來るだらうと思つて心待ちにしてゐたが、京都にゐさへすれば來る筈なのに、五時六時になつても訪ねて來ない。外に出たついでに宿へ電話を掛けると、今日は神戸へ行つて留守だといふ。歸つたら遊びに來るやうに傳へさして置いて、私は早くから寢床に入つて獨棲の唯一の友なる新聞を見てゐると、十時頃になつて、

「徳田さんもう寢たの。」

と門の外から聲を掛けて、先生やつて來た。何かしてゐなければゐられない男のことだから到頭やつて來た。俥で來たといつて、肥つた身體に宿の褞袍を着てヅボンの皮帶で締めてゐる。

「今日神戸にいつて、それから箕面の紅葉を見にいつて、今歸つたら、あなたから電話が掛つたといつたから來た。」といつて、

「今短冊を買つて來たよ。これに書いて下さい。」と短冊だの色紙だの十枚ばかり持つて來た。

「おやく遂々僕に書かすのかい。困るなあ……僕もこの頃は字か畫が上手になりたい。上手ならば書く機會が多いんだ。」

彼自身は實業家でゐながら、文字は天性に巧みで、漢詩も一寸作るし、山水や蘭竹などを巧く書く。文壇を見渡したところ、私の知つてゐる範圍では、死んだ夏目さんを除いたら、ほかにこれくらゐやつてのける人間はなさゝうだ。

「君は巧いよ。僕と反對だよ。僕が本當なら、君くらゐやらなければならぬのだ。君はやつぱり家で描いてみてゐるのかい。」

「うむ、暇な時には描いてみてゐるよ。」

「君は感心な人間だよ。……今日は神戸は商用？」

「あゝ、また工場を一つ增築するので、外國人の商館へ鐵材を買ひにいつた。三萬圓ばかり買つて來た。……さあこれを書きなさいよ。」

と、私に短冊を押付けて何でも可いからぜひ書けといふ。

「困つたなあ。今更字の下手なのを悔んでも役に立たず。」

「構はない。あなた方のやうな今の文士のを非常に欲しがつてゐる人間が名古屋あたりに大分ゐるんだ。さあ、書きなさいよ。書きなさい、かきなさい。」

それで、今日は東京へ書く物を急いだので疲れてゐるから、明日にしてくれといつて、その晩はまた話して彼は待たして置いた俥に乘つて宿に歸つた。

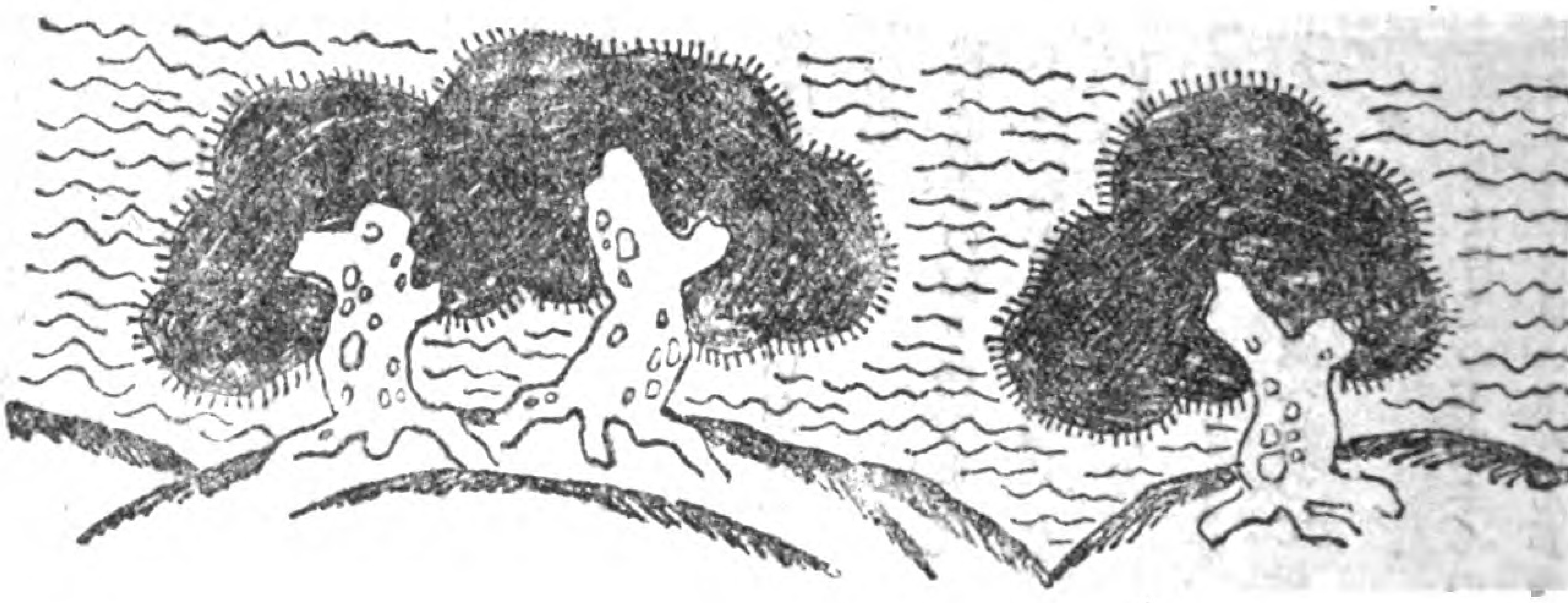
翌朝起きてゐると彼は「やつて來たよ。」といつて入つて來た。そして遂に新しい短冊と色紙を十枚ばかり汚させられた。

「さあ何處か出てみようぢやないか。」と彼は私を誘ふてまた外に出た。私達は此度は、東京の何處を探してもないやうな閑靜な下河原の街筋を歩いて八阪の塔の脇から二年阪の方を上つていつた。道々商店に何か珍らしいものがあると立ち止つて覗いてみた。そして淸水の境内に上つていつて暫らくその邊を徘徊しながら、そこらを歩いてゐる京の女の風俗や好みを批評したりした。彼は今日半田に歸るつもりなので時々時計を出して見てゐたが、淸水を下りて、ぶら〳〵歩きながら高臺寺の方へ戻つて來て眞葛ケ原に出た。閑かに輝く午後の日影に欅や榎の老木から黄葉があるとも覺へない秋風に吹かれて高く澄んだ碧空をはら〳〵と散つてゐる。私はその落葉の降りかゝる樹下の休息石に腰を掛けて、いつまでも話しつゞけた。どちらも話好きな上に職業が違つてゐるから、厭な現實感によつて長閑な感興を緊張させねばならぬ處は少しもなかつた。遂々そこから腰を上げて圓山公園を通ぬけ、石段下の電車の乗り場まで來たので私はもう別れようと思つてゐたが、彼は室町一條の虎屋の饅頭を貰つてゆくんだから一緒にいつて見ようといつてまた私を誘つて電車に乗つた。そして上京の方を今度は方々歩きまはつた。彼は酒も好きだが此の頃身體を大切にして酒は殆ど飮まず、食ひ道樂の方をやつてゐるらしい。

たうどうもう一晩泊ることに決して虎屋の歸りをまた三條の彼の宿に戻つて一緒に湯に入つて夕飯を食ひ、彼は今度買つた竹田の詩畫論を取り出してそんな話に耽つた。

その晩三條から、八時過に私は獨棲の巣に戻つて見ると、留守の間にいろ〳〵な人間が、めづらしく訊ねて來てゐた。鎖した門の扉の間に名刺を挿入したり。紙片に何か書いて置いてある。炭屋が炭とたどんを持つて來て門の外に置いていつてゐる。私に絶妙の詩間が吐けるならば、何だかこれは俳聖芭蕉の庵のやうな趣があると思ひつゝ懐から鍵を取り出して錠を明けて家に入つた。

（十一月廿五日しるす）



小說

死線を越えて

賀川豊彦

一

東京芝白金の近郊に谷峽が三つ寄つた所がある。そこはあちらもこちらも滴る計りの綠翠で飾られて居るので唯谷間の濕つぽい去年の稻の株がまだ覆されて居ない田圃だけに綠がない。

大崎の方によつた谷の奥には大きな甍の上に出る樣な大杉が幾十本となしに生えて居る。そこは池田侯爵の屋敷である。白金の岡にはお寺が一軒二軒、中の岡には屋敷も無ければ寺もない。細い栗、椎、櫟が三十本六十本と生えて居る。

五月の初めであつた。ある日本晴れの日に此のまん中の岡の森陰に草を敷いて横になつて、本を讀んで居た者があつた。

見ると、背は普通より高い、痩形で、黒羅紗のチャンとした正服を着て居る。慥かMGを組合せた金ボタンをつけ、顏色は非常に青く、鼻は高いが、頬骨が少し出ている。目はどちらかと云ふと、大きくて鋭い然し氣高い輪廓の持主で有つた。

此男はいつも此處に來る男だが近頃は此處へ來て本を開いても別に讀まうともして居らぬ。

たゞ眼を閉ぢて默想をして居る。然し之もあまり長くは續かぬ。すぐ眠つて終つて居る。が夢が醒めるとまた急いで本をひき開いて讀む。三四行の處を繰返し繰返し讀んで居て、此度は急いで畔道傳つて白金の方に飛んで歸る。

今日も彼は例の如く此處へ遣つて來て例の如くやつて居た。

その時彼のねて居る頭の上の細道からだんだら降りに降りて來る一人の廿前後の青年があつた。小薩張りとした絣の衣服に眞岡木綿の黑の兵古帶をしめ鳥打帽を被つてステッキをついて居た。

彼は背は高く無いが骨格の逞しい眉の濃い髯の多い、赤い顔した男だつた。

彼は散歩の歸り路である。

不圖洋服着た男が横になつて本を讀んで居るのを見たから急に立ち止つて聲を掛けた。

『新見なんしてるか？ よせ、よせ？』

『ア、鈴木か、何處へ行つて居たんだ？』と本を讀んで居た男は叫んだ。

『僕か僕は目黒の不動さんの方へ行つて居たんだ。君、此春色駘然たる時に古臭い本なんか讀むな。僕は君が此那處でぐずぐずして居るのを知つて居たら、目黒の方へ連れて行つて遣るんだつた。新見また今日も煩悶か？』

『馬鹿！』

『何だその本は？ 哲學か？よせ、よせ』と彼は歩を進んで新見の傍に腰を降して、彼が小笹の上に捨てた洋書を取り上げた。

『何だ之れや？ Upaniashed と發音するのか？ウム。The Sacred books of the East つて何だ一體？』

『これか、之れは紀元前千三百年から六百年の間に出來ただらうと云ふ印度の經典だが、君、知らぬか？リグ、ベタつて。昨日、上村の佛教史の講演に一寸と話して居たじや無いか。』

『ウムあれがどうした？』

『あれから、之が進化したのだよ。』

『面白い物讀んで居るな。僕など學科の準備にあくせくして居る計りで、外の本を讀む暇なぞ無いかア。君は感心だな。內容は這那者だ一體』と今迄本の體裁計り見て居たが三十頁もあらうと思ふ序文をめくつて大きな文字で印刷してある本文から讀み始めた。

『凡ては梵なりか？世界は梵の中に始まり終り又呼吸するものなるを默想すべし…………か。アハハ…………

汎神論かい。然し、面白い事を云ふね』

鈴木は本を閉ぢながら、

『新見君然し君は、此本の云ふ事を眞面目に信ずるかね。此那昔噺の樣な汎神論を？』と問ふたが、

『なに君等小供には解ら無いよ。印度哲學の一冊でも讀んで、そんな事を云ひ給へ。近頃の小供は印度哲學の一冊も讀まない癖に生意氣な事を云ふ。まだ超越しない中は駄目だよ。大に超越して解脫した者が初めて汎神論とか何とかかんとか云ひ得るんだ。』鈴木は新見の一年下だ。

『それでも君常識から考へても因果律と物質は同一じやあるまいし、凡ての物を統一する者が切れ切れになるなら、統一も何も出來ぬじや無いか？』新見は一本突き込まれた。

『スピノザでも研究して見給へ。科學的頭腦を持つて居る者が誰が馬鹿らしい創造論など信ずるものか。然し君に熱心なクリスチヤン。而も傳道の準備に學院に來たのだから、敢てスピノザ氣取るのぢや無いが君は信仰を迫害せんさ。勝手に神樣を創造し給へ。然し物質不滅や勢力保存や進化論を信じて居る二十世紀文明が誰が馬鹿らしい天地創造論などを信ずる』と眞面目に論ずる。

『君そうだけれども物質不滅だつて勢力保存だつて進化論だつて皆假定だらう。信仰だらう。僕等はあまり知らんさ。然しそれは自己の演繹で決して歸納では無いのだらう。僕は論理學で一寸と其樣な事を讀んだ事があるが……………』

『然しヘツケル——君は讀んだ事があるかね？一元論さ。物質精神一體兩側面說さ！我等は無限に進化しつゝある者即ち神になつて居るのだ』議論はいつか全く眞面目になつた。

『君それじや死ねば人間はどうなる？』

『死ねば分子さ。何も不思議な事は無いじや無いか』

『滑稽だな！神樣がまた分子から復習するのか？君それじや進化が退化になつて居るだらう！道德も藝術も夢だな。』

『君は解らんから困る！』

『兎に角、もう四時だ、三十分すれば、飯が食へるよ。そろ〳〵歸つて行かう。大分今日は理屈並べたね』と鈴木は時計を見乍ら云つた。

『それじや歸らうか？』と立ち上つた。洋服について居た塵を拂つて、細い畔道を鈴木を先に立てゝ新見は歸つて行く。岡に沿ふて廻つて水車場の邊を上り森の垣根に沿ふて歩んだ。

鈴木が問ふには、

『君佛教は今日の科學的信仰と同じ事を云ふじや無いか。それに君は何故明治學院などに這入つて來た？佛教大學にでも入學すれば善いに。』

『僕はそれだから哲學の方面から云へば佛教を取るが、然し佛教は駄目だよ！僕は十七八位の時から哲學じみた事がすきで隨分苦悶して歩いた方だがね。…………十五の時分に岡の中學の三年終んで直ぐ東京へ遣つて來て、あつち、こつちの中學を漂泊したさ。その間は教科書などは少しも手につけずに詩や哲學や雜誌を朝から晩まで讀んでね、隨分それは苦悶した者だよ。僕は高輪の佛教中學卒業したのだよ。君は誰から聞いたかい。』

『いや、聞かなかつたが。――それぢや君は小さい時から哲學が好きだつたのだね。君、一體どうして哲學が好きになつたのか？』

『なに、一つは母と十歳の時に別れて、繼母に養育せられたのと、僕が國を出ると云ふ動機が、姉の死と云ふのにあつたのだからね。自然僕の心が哲學に向いたと見えるね。そうだらう、君のクリスチャンになつた動機を聞いた事があるが、君だつて三陸の海嘯に父母兄弟を失はずに居て人生を疑うこと〻が無ければ信仰とか神とか云ふものを問題にしなかつたらう？』

『そら相だ。君は高輪中學に居たのか？面白い處に居たのだね。駄目か、佛教は？』

『駄目だね。僕は宗教學校に這入つて僕の疑問を取り去つて貰ふと思つたが全く駄目だね。反つて苦悶を増して來たさ、彼等の内幕を悟つたから。』

『さうかね？』

『僕は鎌倉の建長寺へ參禪した事もあるが、馬鹿らしいよ。禪と云ふのも。此頃大分禪が流行して居る樣だが君、佛教と云ふのは眞に禪の樣な者だね、輪廓計り殘して色彩を消さうと云ふのさ。だから鎌倉何十の寺院之れ皆借屋さ。君來光寺の本尊が賣物に出たと云ふことを此間の新聞に見たらう。あれは運慶の名作でね。彫刻家の喜ぶものだがね。…………佛教は道德だとか人格だとか云ふものは全く否定して居るのさ。そして言葉で愚婦愚夫を欺いて居るのだ。駄目さ。肉と血の躍る者が信ずるものじや無いな。』

『全くだね本願寺の失態なども、馬鹿氣て居る位い墮落してゐるからね。君それでは這うして明治學院の樣な處に這入る樣になつたんだ？』

『僕の父がね僕を强いて法律研究せよと勸めて一高に居たのさ。然し三年の一學期と云ふ時にね、急に吐血してね——僕の母も姉も肺で死んだんだよ——醫者が肺だと云ふじや無いか。茅ケ崎で一年と八丈ケ島から小笠原島で一年遊んでね。今度はもう法律をなどやる勇氣は無いじや無いか。非常に宗教的に傾いてね。然し佛教の方も飽いて居るから。明治學院の高等學部で一二年遊ばうと思つて、去年の九月だね、僕が明治學院へ來たのは。』

『君明治學院は迚う思ふ。』と鈴木は新見の顔を見て尋ねたが。

『僕は實際、基督教と云ふのは、も少し愛に滿ちて居る者だと思つて居たがなア』と新見は答へた。

『然し僕も明治學院へ來て特別にそう感じたね。然し新見君。田舍のクリスチヤンは東京の信者と同樣だと思つたら大違つて居るよ。眞のクリスチヤンは田舍の陬の無花果の樹の下で神の國の夢を見て居るナタナエルだよ。』

『僕は基督教の熱烈な歷史が今の信者の中には湧いて居ない樣に思ふよ。』

『實際僕だつて痛切にそれを感じて居るのさ。戰爭の時に……………會など開く今の信者だからね。』

『使徒時代の夢は何時にか消え、肉を十字架の上に釘いたこの熱烈と輝きも何處にか消えたね。』

『實際だね。僕もその爲めには祈つて居るさ。』

『然し遂に經濟問題さ。ね鈴木君、君、此間僕と平野の討論を聞いたかね。文學會の時に?』

『君は幹事に叱られた相じや無いか?』

『やられたさ。然し君、凡そ精神界の事は肉の表象を取らなければ人間と云ふものには感應が無いだらう。基督教だつて、アメリカと英國のコンモンウエルスを造ら無くて、支那帝國の樣な者を造つて計り居れば何の價値も無いじや無いか。そうじや無いか?キリスト教と云ふ者が今日の社會主義思想を産んだが、サン、シモンやフエリエルは使徒時代の樣な世界を實現さそうとしたのだよ。全くだよキリスト教が社會主義的思想の表象を取ら無ければ……………。それだから僕は幹事にそう云つたさ、帝國主義に、あなたの學校で教育なさりませ。然しそれはキリスト教じや御座いませぬよつて。』

『君がそう云うと幹事は這う云つた?』

『そしたらね。兎に角文部省の方から社會主義を學生間に宣傳する者があれば嚴重に取締れと云つて來て居るから、君も此學

校に居る間は彼の樣な熱烈な破壞的な演說を講壇に立つて大勢の前では爲て呉れるなつて。』

『…………………。僕はキリスト敎と國家とは決して一致する者じや無いと思つて居るがね。僕は社會主義を全く贊成は出來ぬが、今日の日本の信者が國家とキリスト敎とが相衝突せぬと云つて辯護しやう、辯護しやうといつて居るのがお可笑くつて堪らぬのだ。彼等は皆キリスト信者が…………追ひ出される事が恐ろしいのだね。』

『馬鹿だよ。世界的のクリスチヤンが何にも井上哲次郞や加藤弘之の樣な曲學阿世の徒を恐れて國家とキリスト敎の衝突を辯解しなくても、國家とキリスト敎とは衝突する。衝突するが〇〇〇〇〇〇〇にあると云ひ切れば善いのだに。』

『………………………』

此那に話が先から先へと花を咲いたが、屠牛場の橫を通つて大きな杉の木が兩側に生へた道を、白金の方へ步んで行つた。その時話が大分切れて居たが鈴木は

『君は中々面白い經驗を持つて居るね』と口籠つた。

杉の間を通りすぎて右へ曲らうとした時に、後から聲がする。

『鈴木——』

『新——見』

鈴木と新見とはハタと立ち止つて顧れば大食倶樂部の面々、田村、井上、松田、三田の四人皆高等科一年の連中で普通科出身の火氣ある靑年達だ。

田村はハリス館の食堂に一番近い室を占めて居る。中背の頭を五分刈にして普通科から滿四年間蒙つたと云ふ黑の羅紗が赤くなつて居る帽子を蒙つて居る。此男が大食クラブの會頭で、一日三度の食事の時に食堂の戶がまだ開かぬ時は、鍵穴から食卓の準備を覗て居た男である。或生徒が田村を歌つた事がある。

『朝起きと自習時間のしかめ面、食堂さして惠比壽顏かな』

井上と云ふ男は肉の人と云ふ名が付いて居るので、戀愛研究が專門だと云ふ愉快な男である。縮れ毛に眼鏡をかけて居るが、高等科になつて、髮を長くして眞中から別けたから、髮の癖をつける爲だと云つて寢る時も自習する時も帽子を取つた事の無い男である。

松田と云ふ男は賣卜と云ふ名が付いて居る男だが背の低い大黑さんの樣な男である。

三田と云ふ男は背の細高い朝から晩まで、犬が人間の糞を踏

んで云つたとか、誰れそれの、鼻の穴の廣さが何寸あるとか云つて笑つて計り居る男である。

呼び止められて新見と鈴木は立ち止つて居たが、四人は何か頻りと笑ひ乍ら、足並揃へて二人に近づいた。そして或は腹を抱いたり、仰向いたり伏向いたりして聲を出來るだけ大きくして笑ふ。

新見と鈴木は不思議に思つて見て居たが、四人はまた新見の顔を見ては笑ひ、見ては笑ひ、滑稽な眞似をする。新見は狐か狸に馬鹿された樣な氣味になつて、

『ウフ…………………。何だ人を莫迦にして居るじや無いか』と云つて見たが

『オホ…………………。新見君。云つてあげましようか』と松田は新見の肩を押して初めて口を開いたが。横から田村が

『アハ…………………。ねえ。君がワイフは一生持たぬと云つて悲觀して昨日一日學校にも出席せずに寢て居たと云ふ事ですよ。』

『それに君が、奇麗に髮を眞中から別けて帽子も冠ずに、昨夜は二本傾でおでんを食つて居ると云ふ事ですよ。哲學者近頃何か感じた事があると云ふので……』と松田が附け加へた。

『何だつまらんウフウフ…………………。』と新見は輕く笑つた。

井上は松田の語尾を次いで、

『そのおでんを食つて居た顔は矢張り悲觀して居たそうな。』

三田は鈴木に向つて、

『君は哲學者の隣室でせう。昨夜は賭つて貰ひましたか？』

『いや』と鈴木は輕く答へたが、

『僕は新見君が芋を買つて居るのを見付けたのだが。それじや…………芋を獨りで帝國主義したのだな、昨夜は。』と八田は笑つた。

六人は歩んで行つた。新見は辯護を初める、

『昨日は夕食が甘く無かつたから、遲く出て行つて芋を買つて食つたのですよ。』

『どうか知ら？』

と松田は云ふ。

鈴木は『君達はいつも盛んだね。』と云つたが、

『そら我々は君達より二倍も三倍も食つてエネルギーをそれだけ多く製造して居るからね。』と會頭田村は衆を代表して答へた。外の三人は『贊成。贊成。』と和した。

新見は唯默つて歩んで居る。大食俱樂部の連中の樣に快活にして見ようと試たが、重い蓋が胸の上にある樣に思つて喜劇を演じて見ようとは思へ無かつた。頭には四五日前、リテラリーダイヂエストで讀んだ、喜劇は現代に於て悲劇に代るであらうと云ふ論文を思ひ出して、エチズ、シアテ、グロスマンは少なくも僕の胸の中を知らぬと考へもして居た。

　男全家の新築して居る借屋のあたりに差しかゝつた時、石を積んだ車を曳いて居る馬が、頸から牧草桶を吊つて口を桶の中に入れて食つて居る。

　之を見た新見は、――

『田村君、此馬は隨分君には敗けぬよ。君は箸を持つて食はなくちやならぬが、此馬見給へ。這うだ君、君も此那にして食ひませんか？』と遣つて見た。

　一同はドツと笑つたが、田村は至極眞面目な顏をして

『君、新見君、僕は社會主義の事は餘り知ら無いが、社會主義といふのも大食主義と云ふのも同じ意味じや無いのですか？』と口を尖らして論じ始めた。

　三田は『卓論。卓論。』と叫ぶ。田村は猶も續けて、

『……………要するに、パンを多く與へよと叫ぶのですね。そうでしよう。我等も斯がパンを多く與へよと云ふのですよ。なア三田君、………………………』と云つたが、

『實際…………』と三田は應じた。

　新見は唯笑つて居る。何だか皆が騷ぐのを避けたい樣に思つて居た。松田は、

『おい、明治學院萬歲を三唱しようじや無いか』と三人の顏を見て動機を出した。が、

　鈴木はニコ〱しながら

『然し君、その動議はまだ早いよ。明治學院〇〇歲と大食クラブの名を變へるのなら新見君を會頭にせなくちやいかぬぞ。松田君。』と云ひ出した。

『ウム、贊成。』と會頭の田村は云ふ。

『哲學者の會頭贊成！ラブ、レターの會頭贊成！』と松田も叫ぶ。

『贊成僕も』と三田が應じる。それに松田は猶加へて、

『ハイカラに髮を別けておでんの立食ひして、芋を獨りで皆食ふ會頭贊成！』と付けた。

　此那に騷ぎ乍ら六人は明治學院の坂を上つて門の前へ來た。田村の主唱で

『新見會頭萬歳』と三唱したが、夕食を報じる鐘が寄宿舍の方に鳴つて居た。それで皆は思はず大笑ひをした。

二

新見は食後、入浴して室へ這入らうと思ひ乍ら、少しの間ハリス館の入口の下駄箱の横に立つて何見るともなしに見て居た。

サンダム、ホールのB室には瓦斯が點いて居る。幼年黨の會合であらう。山川總理の宅にも玄關に瓦斯がついて居る。

サムダム、ホールと山川總理の宅の間にはダムダム館の尖つた塔の先が見える。尖つた先には十字架が付いて居る。が、黄昏時の木葉に包まれて、ほんのりと薄く見えるあたりは、森の中の脩道院が忍ばれる。

年々植ゑ込む卒業生のクラス、ツリーは繁りに繁つて夕闇が段々、木と木と、枝と枝と葉と葉を繋いで、もう何本あるか數へられぬ様になつた。

瓦斯が益々光つて運動場に人影が絶えた。

神學部には何の光もない。小杉に包れたインプリーさんの西洋館からは小さい光が洩れる。ヘボン館は大きく高く、そして廣い場を取つて、つき立つて居る。瓦斯の光が各室から輝いて居る。

ヘボン館の裏から單調なピアノの音が聞える。ヘボン館の入口から今出て來た者がある。新見の立つて居る方へ來る。ハンチング帽を冠つて羽織を着て居る。新見は直ぐ塚本だと見て取つた。二間計りになつた時、

『塚本君』と、こちらから聲をかけた。

然し塚本は寂しく足を運んで答も何もしない。入口の裏に昇つて、初めて、

『ア、新見君、僕は失敬した。昨日、來うと思つて居たのだが、一日忙しくてね。今日、舍監室へ來た序でに君の所へ寄らうと思つてね——』

『それじや、まア僕の室へ行う』と新見は塚本と梯子段を上つて行つた。四段上つてステーヂに來ると、新見は一寸と塚本を顧て

『駄目？』と尋ねたが、

『アレ？アレはもう駄目だ。高等商業の生徒がもう疾に○○居る相だ。そして全く金儲にはならないつて。』新見は此答に少なからず失望した。然し別に顏色にも現さず塚本を自分の室に

伴ひ入れた。

梯子段を上つて左に入口がある。入口の正面が鈴木の室で、その西隣りが新見の室である。鈴木はまた食後散歩に出て行つて、未だ歸つて來ぬか、瓦斯がついて居ない。

新見は自分の室に這入つて瓦斯に火を付けた。瓦斯の光は室の隅から隅まで照らして氣色がよい。

室は六疊敷。疊を敷いてある。壁は眞白。褐色にセピアを混ぜた色の腰板が打ちつけてある。之は昔敎室であつた紀念物である。窓は西と北に二つ開いて居る。南は障子で隣室と境をしてある。テーブルが西北の隅に置いてあつて、本箱の大きな者が、入口の正面にある。

『まア、かけ給へ』と塚本に云つて瓦斯管を出來るだけ長く延ばした。机の上は美しく照されて、ブック、ケースの金文字がよく讀める。敎科書らしい者はウイリアムスの政治汎論だけで、其外は皆宗教哲學の書籍であつた。赤色の一番厚いのはフリントの歴史哲學、青色の薄い本が四冊、これはプッフライダラーの宗教哲學。カントを大分研究して居るらしい『理性批判』も見えたがミラーとチヤアドのカントの研究も見えていた。一番隅の樺色の表紙のついた本はゼンド、アベスタ、と讀めた。關いたまゝ横に捨てゝあるはツバニヤセツド。聖書もあつた。

塚本は入口に立つて居たが、

『ア、有難たう』と答へて本箱の上に掛つて居る、レロラの畫を見に行く。

『新見君之はいつ見ても善いね。僕は之が非常に好きだ。』

『君もこれが好きかね、北欧れつぽい自然に、女性に捉れた男の兒を現してあるのが、僕も何となしに、心の中に浸みる樣に思つてね、好きだよ。』

女性云々と聞いた塚本は笑ひ乍ら、

『君、お可笑い事を云ふが、君は近頃女の人から手紙を貰つた相だね。そして悲觀して居るつて？』と云ふ。

『誰れに聞いたの、そんなことを？』

『先きね、ヘボン館で大勢で噂して居たよ。君が昨日悲觀して學校休んだと云ふ話からね。原因は高田が四五日前に君が女の人からラブ、レターを貰つて讀んで居る所を見付けて皆に喋つたからだつて？昨日の晩、君はワイフを一生持たぬと云つて室に閉じ籠つた相だね。ほんとかね？』

『嘘だよ。五日前に妹から手紙を貰つたのさ。それを高田が云ひ觸らして終つたのだよ。』

『然し、妹の手紙なら見せても善いぢやないかと高田が云つても、君は見せ無かつたつて？』

『そら少し秘密が書いてあつたから見せられなかつたのさ。彼の連中は、騒げば善いのだから哲學者が女から手紙を貰つたと云つて大騒ぎするぢや無いか。明治學院へ這入つて妹から一度しか手紙を貰はないし女の友達と云ふのは外に無いものだからラバーだと騒ぐのも當然だね』と新見は語つたが、妹からの手紙の内容を頭の中で繰返して胸苦しい鼓動を感じた。

新見は塚本が椅子に掛け無いので、自分が掛けて尋ねた。

『塚本君、例の事件は何うなつた？』

塚本は顔を一寸上向けて新見の顔を見たが、また右の手で羽織の紐を弄りながら、

『僕は實際困つた。今舍監室へ頼みに行つて來たのだが、駄目じやつた。僕はもう學校を退くことに決心した』と云つて俯いた。

『退く？そう決心したのか？全く同情するよ。然しそうなれば仕方が無いさ。が、君は學校を退いて何うする積り？もう二年辛抱して高等學部を卒業すれば善いがね。左すれば社會の信用はあるし、また外國語の素養も出來るし、非常に都合は善いのだがね。然し君、此度君が明治學院を出ると云つても君の過去三年間に對しては明治學院は、君の恩人だよ。』

『實際僕は三年間の恩は忘れぬね。また忘れられぬよ。然し此上恩は受けたく無い。今迄でも寄宿舍の諸君に、そら賣るのは賣るのだけれど、何だか、菓子を見せて金を絞り上げる樣な氣がしてね。何度も菓子を賣る事を止めよう。止めようと思つたのだがね。』

『いや、そらそうじや無いよ。菓子を賣るのは正當な事で、君が賣ら無くとも皆が外へ食ひに行くから同じだが、舍監は何う云つた。』

『舍監はね、三ケ月の食費が滯つて居るので、もう整理の付け樣がないから、君は昨日迄に一ケ月分位出來ると約束したが、それが出來ないと云ふのなら仕方が無い。賄も決して慈善的に遣つて居るのじや無いから、それじや、一先づ寄宿舍を出て貰ふと云ふじやないかね。僕も悪いと思つたから、別にエクスキユーズも無いので『ハイ』と答へて出て來たのさ。』

『然し舍監は、云ひつ振が嫌だね。』

『舍監は正當さ。』

なに、生意氣だよ。賄は慈善事業じや無いから出よつて。‥ケ

月位此上待つても善かりそうなものだにね。』

『然し實に、斯も僕の樣に遲れては困るよ、ね。』

『でも、會監はクリスチヤンじや無いか、君の事情は知つて居るし、君が困れば立て替へて置いても君の修業の爲めなら盡力すべき筈だらう。——君、それじや一ケ月分收めたら臨時の間は學校に置いて吳れるのかね。』

『そら置いて吳れるだらう。』と塚本は答へて見たが、哀れに低い聲であつた。

『ね、塚本君。それじや、君。』と新見榮一は決心の色を顏に現して右の手をさしのべて机のひき出しから五圓紙幣を取り出した。

『君。之れを君に用立てるからね、會監に拂つて來給へ。そして少しの間でも學校で勉强し給へ。然し僕に返す必要は無いよ。之は君に永遠に借すよ。』

『然し君、先月の四圓もまだ拂つて無いに、また之れだけ貰つちや君に氣の毒だよ。君は本を買は無くちやならぬだらう。僕は之を貰へぬ。こちらから四圓返濟し無くちやならぬのじや無いですか。』と恥しさうな眼付きをして紙幣を取る事を拒んだ。

『然し君、君は僕の心事を能く知つて居るだらう。僕が一冊の本を多く讀むより君に一ケ月勉强をして貰ふのが僕の意志だと云ふ事は君も知つて居るだらう。』と新見は眞面目になつて云つた。それで塚本も、

『そら君の意志は知つて居るさ。—— 然し、』と語尾を濁らした。で、新見は、

『塚本君。それじやね。僕も實は之れを妹から貰つたのだ。今日小切手を紙幣にして來た計りなのだよ。僕も、そら君に何か翻譯の口を探して貰ふ位いだから僕が學資に豐で無いことは知つて居るだらう。然し、いくら豐かで無いと云つても本が買へぬと云ふだけだから、決して君が之れを取つて困ると云ふ事は無いよ。何に君、貰つた物だから君も取ればそれで善いじや無いか。』と情意を盡して說いた。

塚本は一寸と南隣の室を見て誰れも居らぬと思つたから、

『それじや、少しの間だけ借して貰ふ。』

『貸すも、貰さんも無いよ。』

『ありがとう。——』と塚本は答へたが、少しの間默つて居た。

新見も暫時沈默して居たが、

『君、それでは矢張り學校に出席する?』

『僕ね、新見君、舍監もあア云ふから暫時寄宿舍を出て英語の出敎授をやつて少し學資を作らうと思ふが宜うだらう。』

『然し、また學校へ歸ることが出來るかしら』

『まア出來るか、出來ぬかやつてみるさ。』

『然し世界は全く我々の思つて居る樣に都合よく行か無いからな。』

塚本は俛いて默つて居る。瓦斯の下品な光が彼のチックで剝けた縮れ毛の上を照らす。

『君、世界に出て行くには信仰と云ふ者がいるよ。僕なども信仰を得るために、どれだけ苦心して居るか知れないよ。』と新見は云つて見たが、塚本は窓に倚つて瓦斯の光を凝視しながら、

『然し、君、僕には耶とかキリストとか云ふのは全く解らぬ。僕は何だかキリスト敎と云ふ者を迷信の樣に思ふよ。』と少し微笑んで云つた。

『そう云つて終つたものじや無いよ。僕だつてクリスチヤンじや無いが、何に云つても四千年の歷史を貫いて流れ出た宗敎の眞理が少しも無いと云ふ事は出來ぬよ。僕にはまだ十字架の眞理は充分解らぬがキリストの人格は實に偉人じや無いかね』

『そら偉大と云ふ位の事は僕も知つて居るが、僕には解らぬ。信者でも信者で無くても、日に日にすることは同じじや無いかね。事によつたら、未信者の方が信者より品行方正な事が多いよ。』と強く塚本は反對して見た。

『君にはいつもそう云つて居るが假に社會へ出て見給へそれで遣つて行けるか、信仰なくつて、…………』と此時新見は、妹の手紙と故郷のことを思ふて居た。

『然し、人生は悲劇だね』と新見は續けて云つたが、塚本は唯輕い笑を洩らして、

『君は、いつも悲劇とか喜劇とか云つて居るね。僕には人生は悲劇でも喜劇でも無いよ。全く何が何やら薩張り解ら無い。』と云つた。新見は唯、机に向つて頰杖ついて沈默して終つた。塚本がそう云へば自分の頭にもそう云ふ響がするからである。

暫し過つて、塚本は去つた。新見は引き出しから妹の手紙を取り出してまた讀んで見た。手紙は書翰文と言文一致と混ぜて書いてあつて、誠に讀み難い。

一筆申上候

兄上様には御機嫌よろしく候や、久しく御不沙汰申候私儀も無事暮し居り候間御安心被下度候

さて兄様、私は日に日に泣く事ばかりで、こんな事ならいつそ死んでしまいたいと思ふ位いで御座ります。田舎のお母様には朝から晩まで使ひ立てられて、何につけ、かにつけ、お梅さんの子じやのに何んでそんなに出來が悪いのだとおこられてばつかり、ごぜんもろく／＼食はしてくれず。下女よりひどく使はれ、つらうて／＼て堪らず、四十日程まへにお父様の所へ逃げて來たのです。然しお父様は少しも私をかあいがつてくださらず。お父様の今度の妾宅のお梅がそれはそれは私をひどいめにあはして、こゝへ來ても日に日に泣いて居ります。兄様何卒妾を助けてください。妾は唯兄さんばかりたよりにして居ります。それにお父様は兄さんを非常に御立腹なしていらつしやいます。此月からもう學資金は送らぬとおしやつて。兄様此余五圓を少しにても學資のたしにしてください。私もなんなら東京へ、兄様を便りに逃げて行うかと思つて居るので御座ります。田舎のお母様やお梅に使はれるより東京へでも行つて下女奉公でもした方がずつとましで御座ります。兄様何かよいお考へでもおありなさるなら至急お知らせ被下度候。私はつらうて／＼て涙がこぼれて書けませぬ。

まだまだ色々申上たい事もあれどまたいつか申上可く候。

猶御身體を大切になし被下され度候。

二伸

返事一刻も早くくだされ度候。

讀んで、新見は妹美子の哀れな運命に同情を表した。そして再び讀んで涙を流した。が此涙は塚本の運命と自分の運命を悲む涙も含れて居た。

新見は頭を抱へて机の上にうつ向いて、もの思ひに沈んだ。

隣りの室に足音がする。軈て塚本の聲がして

『それにやれ、五圓。六圓出來て居たのだが、外に遣らうしても使はなくてはならぬ事があつて、一圓使ひましたから。』と云つて居る。

『ハ、有難う。』と丁寧に答へる。

『失敬』と塚本は云ひ捨てゝ、障子も閉めずに梯子段を降りる足音がする。

『ア、また』と遮つた聲の男が云ふ。そして續けて。

『田中君、塚本は逞うもいかんね、矢張り』と云ふ聲がする。

『ほんとに、いかんね。自分は生徒に菓子賣つて、食費は納めず買ひ食ひして、辯解には嘘計り言つて、他人の室へ來ては尻もふかずに…………』と丁寧な答をした男が云つて居る。

之を聞いて居た新見はハッと驚いて涙を拭き乍ら『田中君』と自分の悲しみの聲を隱すためにわざと大きな聲をして隣室の男を呼んだ。

『ハア、何ですか？』と少し驚いたらしい。

『塚本君は嘘を云ひますか？』聞いて猶驚いた田中は、

『君、そんなこと、どうでも、いゝでしよう。』

『それぢや君。僕は君に問へ無いのですか？』

『な、な、なに、なんでも無いのですよ。』と田中で無い若い聲がする。春日であらう。

『春日君。君塚本は這那嘘を云ひましたか？』

『新見君。普通部の五年の相田御存知でしよう。』

『知つて居りますよ。該うしました？』

『相田君が此間塚本君を擲つた相ですよ』

『擲つた？なぜ？』

『あの…………云はない方がいゝさね。田中君。』

『云つて呉れ給へな。』と新見は云ふ。田中は

『君はそんなに聞きたいのですか？君も物好きだね』と苦笑ひして云ふ。

『僕は物好きと云ふのじや無いのですが、塚本君とは、僕は親密にして居るからね。聞いて置く必要があるのです。』

『き、き、きみ、塚本君が惡いのですよ。菓子賣つて食つている僻に、月に幾回と外で買ひ食ひするでしよう。そして食費を拂はないのですよ。之を相田が聞いたのでしよう。相田君すぐ怒つてね。制裁を加へる必要があると云つて一昨昨日の晩神學部の裏で塚本君を擲つたのだそうです。塚本君、賄の方へは總賣が多くて拂へぬと云つて、口實計り造つて居るのです。實は林檎や菓子を食つて居るのですよ。』

新見は、聞いて全く驚いた。然しまた不憫な塚本が擲られたかと可哀相にと思ひながら。…………

『然し相田君は矢張り惡い』と云つた。

『何故ですか』と今度は田中が聲をかける。

『君、そうでしよう、塚本の收入は月に僅か八圓でしよう。その中で賄をする人が一圓として、食費が一圓。殘りは六圓でし

よう。六圓の食費を拂つて、授業料免除して貰つて一毛も殘らぬでしやう。然し授業料免除して貰ふ爲めには放課後一時間なり二時間勞働しなくちやならぬでしよう。その上に勉强して運動しなくちやならぬと云へば。社會は殘酷ですねえ。快樂の一雫も塚本君には與へ無いのですね。人間は快樂なしに生きて行く必要があるかしら？」と新見は論じた。

塚本は實際意志は堅固でない。屢新見に菓子の資本を借りに來て返さ無かつた。然し新見は之を罪として責め無かつた。それで今も同一の論法で論じて居る。

先きから障子を隔てゝ問答して居たが顏を見ぬと何だか、もの足らぬので、

『そう云へば、そうですけれども』と田中は間の障子を開いて新見の室へ這入つて來た。春日も後に追いて來る。田中は年の頃二十三四。大きな背の男で顏付の魁偉な、然し何處かに少し足らぬ所がある樣に見える。彼は塚本と同級生で新見の一級下である。彼も苦學して居るので、賄の手傳をして食費を集める役をして居る。之をすると食費を拂はなくても善いことになつて居るのである。春日は十七八の美しい青年、高等科の一年である。田中と春日とは大の仲善しで、自習から、散歩、運動、旅行、教會に二人の一緒に居らぬ事は無い。それに妙な性質が二人に共通してある。即ち、非常な冒險家で自然を熱愛するのが共通點である。眞夜中でも春日が天文學の本を持つて田中がランプを見せて運動場の眞中に星座を研究して居る二人を見ることは度々である。

彼等二人は、塚本に對する新見の辯解を聞かうと思つて連立つて新見の机の横に立つて居る。田中は春日の右の肩に手を掛けて、机の上を見下した。田中は靜に口を開いて、

『君の議論は非常に極端だから駄目ですよ。僕は塚本君が制裁を受けるのは當然だと思ふ。塚本君は他人の金で勉强して居る樣なものでせう。それに快樂を求めるなと云ふのは一體間違つて居るのですよ。元來他人の金を的にするのが間違つて居るのですよ。學校が苦學をさして置るのは非常の恩澤じやないですか。その上快樂まで求めたいのなら、學校を退いた方が善いですよ。』

感情の强い新見は田中の慘酷な論鋒に泣きたくなつて來た。

『田中君。僕は君の樣な品行の正しいクリスチヤンからそんな消極的な道德論を聞きたくはありませんよ。君等クリスチヤンが、そんな淺薄な道德に滿足して居るのならもう東京中の大き

な敎會堂を捨てゝ芝の增上寺へでも行つて說敎を聞き給へ。今度塚本君は退校されて、從つて休學しなくちやならぬ樣になつたのも、全く君等クリスチヤンの無情からだよ。舍監に同情なく、君に同情なく塚本君は遂に休學し無くちやならぬ樣になつたのさ。キリスト敎は唯敎理ばかりかね。眞に、口にアーメンを唱へるならば進んで衣服を賣り書籍を賣つても塚本君を救ふべきじや無いですか。記憶て居り給へ――君達クリスチヤンは既に塚本と云ふ一人の男を地下に葬つたのだよ。』

眼には涙を浮べ乍ら激した句調で新見は論じた。

『それなら君ら、そうして試てはどうですか？』

『僕は少なくもそうして居ると云ふ自信はあります。』

『然しそん那事が行へるかどうか僕は疑ふね。』

『然し君キリストは何と云つた。…………キリストは君等の中には居らぬ。敎會は皆キリストの敵だ。』と云つて新見は二人の視線を避けて袖で涙を拭て居た。田中と春日は新見が此那に感情の高い男だとは知ら無つた。それで今更ながら驚いて、

『僕は哲學者と云ふ者は此那に感情の强い者だとは知ら無かつた。新見君の樣にそんなに感情を强くしては議論が出來ぬ』と田中は云つて、春日を誘つて自分の室へ歸つた。二人は何かぶつ〳〵話して居たが直に瓦斯を消して何處かへ出て行つた。

新見は唯泣いた。

クリスチヤンの道德の程度の低い事から敎會の事、此月限りに自分も苦學生の中間に這入らねばならぬこと、可哀相な塚本の運命、愚鈍な妹のことなどを思つて泣かざるを得なかつた。そして、妹も已も何故此樣な悲哀な境遇に立たねばならぬかと思つて歔唏した。

遂に新見は決心した、…………もう自分も明治學院を退學して平凡に――然し高貴な理想を以つて現實生活に身を投じなければならぬ、繼母も父も可愛いがつて呉れぬ獨りの妹と眞に高尙な理想生活を田舍で實現するに勝るものは無いと。彼はその夜直に故鄕に出發しやうと決心した。旅費の事をも心配したがすぐ本を賣らうと覺悟した。

先づ面を洗つてとバケツを取つて井戸側に降りて行つた。大熊星はまだ北の空に、高く懸つて居る。時刻は八時を過ぎまい。幼年黨は拍手して騷いで居る。新見は『淋しき十字架の杯！』と甁を手に持つて獨言云つた。

面を洗つて居る時鈴木がヘボン館の方から來たので、故鄕へ

歸る意志を述べて、十時三十分の列車に間に合ふ樣に古本屋を呼んで來て呉れと依頼した。

晩の十時三十五分、神戸行の列車に品川から乘つた一人の學生があつた。五六名の友に送られて淋しく西に立つたそれは新見榮一であつた。

三

客車は滿員で新見は神奈川まで立ちすぐみであつた。神奈川から床(ゆか)の上に毛布を敷いて、その上に腰を降して寢た。名古屋へは朝の七時頃着いたが、岐阜あたりで悪い夢を見た。

彼は自分の今取つて居る行動を暗黒面の方から觀て震ひ上つた。何の爲めに、そして何處へと自問したが答へは無かつた。唯、妹を慰めることゝ、父に自分の意見を述べて見たいと云ふ事が喉を摑んで居る樣に思ふ。が、「故郷!」と云ふ響きは決して新見の耳にはよく聞えぬ。悲哀で陰鬱な事計りが連想される。そしてまた神戸と云ふ地名が恐ろしくいやに彼には響く。

神戸は彼の出産地である。彼が二十二年前に産れた處である。十歳になるまで彼は此處に育つた。十歳の時母が死んで阿波の板野郡の本妻の處へ姉と二人で引き取られるまで、その山と海に教育せられた。引き取られた時、妹と弟二人に別れて、姉と甲板の上に立つた事が今でも連想される。また母に死に別れたあの暗い陰氣な家が直に連想される。兵庫の棧橋を行き詰めて山本氷室と書いた大きな廣告が出ている倉庫がある。その東隣りが我家島上町三十二番地である。道を西へ行けば、寺は小さいが有名な築島寺へは半町。東へ行くと少しづゝ曲つて商業銀行の前へ出る。家並は低くて穢い、土は灰色を帶びて何となしに蒸せ熱い。自分の家の軒には點燈が懸つて、正面には消えかゝつた新見と云ふ字を讀む事が出來る。家は格子付の家で入口には日本郵船會社荷客取扱所と云ふ看板が掛つてをる。向へは山本の茅屋(とまや)――此近邊の大金持で、氷室も持つて居る。東隣りが藥屋。藥屋の隣りは角で、散髮屋。床屋と藥屋の間に小さい地藏さんが祭つてある。床屋は東向きで磯野町へ出る通りの角の家となつて居る。床屋の向へが金物屋――金物屋の娘さんは死なれた姉樣のお友達。金物屋の裏隣りは車屋。車屋の前に泉がある。泉の横を南へ濱に降りる道がある。此道に向いて新發商の井筒がある。その隣が白谷――新見の小ない時のお友達の家。茅屋の東隣りで丁度新見の格子の前が藤井の裏となつて居る。藤井の隣りが小栗。之は正米の相場師である。その隣りが

天羽の裏天羽の裏に例の井戸がある。新見は夏の夕、車夫が大勢で此井戸の水を浴びて居るのを思ひ出す。小栗の今の家は元、長谷川と云ふ金満家の住んで居た家で、株式に失敗して大阪の方へ引き越した。その家の息子と新見とが學校友達で而もよく喧嘩した事も思ひ出す。

思ひ出すも悲しい、或秋の夕方長谷川の息子と自分が喧嘩した事があつた。對手が店の戸の貫抜きを持ち出して來たので、こちらも貫抜きを持ち出して、今にも擲り合ひを初めやうとして居た時。番頭の熊吉に呼びに來られて無念に思ひ乍ら宅へ歸つたが、その時長く病んで居たお母様は早や死んで居られた。熊吉がお母様に會つて來いと云つたから二階へ昇つて行つてお母樣の顔を見たが息も早や絶えて、唯青白く光つた額だけを拜したことである。

之を思つて新見はいつも慄とするのである。大阪も過ぎて神戸に近いた時、新見は之を回想して益々未來を暗く思つた。

神戸ステーションに降りた時鼓動が變調で、脈の中には水が流れて居るかと思ふた。そして唯未來に對する恐怖が全身を震はせた。一刻も早く問題を解決したいとあせつて車の上で靜粛として居るのが堪へ切れぬ様になつた。で、車を飛び降りて我家へ走つて歸らうかとも思つたが、それもあまり氣狂じみて居ると思つたので車夫の足計りを眺めて手を握つて居た。

島上町三十二番地へ降ろして貰つたが、新見の看板も無ければ瓦斯燈も無い。天羽と云ふ標札が懸つて居るが戸は閉つて居る。隣の藥屋で聞くと鍛冶屋町へ先月お引越になりましたと云ふ。商業銀行の前へ出て左へ曲ると鍛冶屋町。教へられた通り大黒湯の横向へに新見の軒燈がついて居る。時はもう午後の六時、夕闇の黄ない空氣が市街に充ち滿つて居た。何となしに淋しい。何故二十幾年來住み慣れた島上町を離れたかと思ふと稍淋しい。

然し外觀は前の家よりは立派だ。入口は硝子戸が入つて、鐵格子に硝子障子、白のレースの窓掛も氣がきいて居る。

然し内へ這入つて驚いて終つた。顔覺えのある男は一人も居らぬ。新見は二年前の冬、一寸と小笠原島へ行く前に。神戸まで歸つた事がある、その時はまだ父は代議士の職に居つたし議會開會中の事でもあつたから宅には居らなかつたが、二十年來の支配人島盛平が居たから何とはなしに〆つて居る樣にも思つた。その時は我家に歸つた様な心持もした。然し今夜と云ふ今夜は、誰も見覺えの無いのには驚いて終つた。

番頭が三人。皆簿記帳に急しくペンを動かして居る。金庫の前に坐つて居るのが支配人であらう。三十五六か三十七八と云ふ男、髪は如何にも商人らしく叮嚀に分けて顔は少し苦みが走つて眉と眉の間に立て皺がある。『御免なさい』と新見が云つた時に、此男は入口の方を見てペン軸を置いた。外の二人も顔を上げたが一人はまだ年の若い男。一人は背の高い、目の細い、眉の太い、然し色艶の善い男である。

新見は續けて這う云ふかと思つたが。

『新見さんは御内で御座りますか？』と問ふて見た。それで支配人らしい人が

『そうで御座ります。あなた樣はどなた？』と問ひ返す。

『私は榮一で御座ります。』と答へると

『榮一樣でいらしやいますか』…………………と立上つて、

『さ、どうぞお上り、お上り、店は取り散らして御座りますからまア、お二階へ………』と非常に丁寧に接待する。

新見は上つてみる氣になり、何となしに嬉しくも思つて靴を脫いで上らうとした。車夫が荷物を運び入れたのでそれを受取つて、自分は導かるゝまゝ二階へ上つた。

梯子段を上つて直ぐ十疊もあらうと思ふ室がある。その向ふは六疊ばかりの室だ。此二室とも天井が低くてしまりが無い。所々に番頭の衣服が懸けてあつて物置きの樣な感じがする。襖を開いて奧の方の八疊へ這入ると、四十恰好の女が竹の臺ランプに火を點けて居る。禮をして急いで下に降りて行つたが、室は明るく照されて居た。

導いて與れた男は隅から皮蒲團を取りだして

『どうぞお敷きなして』と云つて自分は入口の方で畏まつて坐る。それで榮一も畏まつて入口の處で坐つたが

『どうぞ、どうぞ』と男は皮蒲團を勸めて、

『初めてお目にかゝります、私は村井三吉と云ふもので御座ります。何分に宜敷御願ひ申します。………』と頭を疊にすり付けて禮をした。榮一は戶籍面に於ては此家の戶主であるが、威張ると云ふ氣もし無いから

『私が榮一で御座ります。何分宜敷御願ひ致します。』と挨拶を濟ました。

『學校は？』と村井は不思議相な眼で榮一を覩る。

『まだ一年あるのですけれども、少し感じた事がありましたので………』と後を濁らして答へた。

『基督教主義の學校で御座りましたかね。若旦那の御勉强にな

つて居らしやいました學校は？』
『ハア、キリスト教主義で御座ります。』
『何でも大旦那が、此間そんな事を仰つて居らしやいました。それでは何か御用事で徳島へ？』
『ハア、一寸と考へがありますので………此間お父樣はこちらへいらしやいましたか？』
『ハイ、役所の方が非常にお忙しいそうで、三月に一度位しか兵庫の方へはお見えになりませんが、此間宿替へ致しましたので、その時は一寸とお見えになりまして御座ります。』と云つて手を叩いて
『お烟草盆に、お茶を』と梯子段の方に向いて云ふた。そして、
『一寸と御免』と云つて降りかけたが、
『お夕飯はまだおすみになりませんで御座りませう』と問ふて中途まで降りたが丁度先刻火を付けて居た女が昇つて來たので、何かその女の耳に囁いて居た。
　新見は室を見廻した。床の間の軸は、過去十幾年の間、彼に記憶と云ふものが出來てから懸つて居ない事の無い軸物と氣がついた。又その横の、花瓶も、幾十年前か知らぬが、父が若い時に金澤の藍の賣場に、祖父から出張を命ぜられた旅行先で、放蕩した時に買つたと云ふ傳のある物。その花瓶の臺になつて居る黑柿の小机も、窓先に置いてある大きな立派な黑柿の棚も皆記憶にある。隅に立つている屛風も新居水竹先生の筆で小さい時父が之れは新居先生から贈られたのだと語つて居たことを忘れない。
　品々に付いて歴史を考へて居ると何となしに懐しい樣な氣もする。然し徳島に歸つて父と對面すれば這那感じがするのであらうと思ふと胸がどき／＼する。
　村井は元の坐に立ち直り、
『その後の御病氣は如何でいらしやいますか？』と問ふ。問はれて恐縮して
『有難う御座ります、此病氣は全く全快すると云ふ事は出來ますまいが、唯今の處では善い方で御坐ります。去年の冬は東京で一冬送れるかと思つて心配したので御座りますが、いや、一日も風邪で寢る事も無く非常に健康で御座りました。』
『そら御結構で御座りました。』
『ハイ、有難う………穗積や森はもう店には居りませんか？』
と二年前の番頭と丁稚の名を思ひ出しながら尋ねた。
『ハイ、居ります、まだ沖に居るので御座りませしよう。今夜

は波が少し高いのでランチが少し遅れませう。』

『船は何丸で御座ります？』

『土佐丸で、ズット沖に懸つて居りますからランチで無いと歸れ無いので御座ります。』

　話して居る中に小供二人、少さい方が菓子盆を持つて大きい方が煙草盆を持つて上つて來た。その後からお母様も追いて來た。小供二人とも額の廣い、どちらかと云へば凸助の方である。お父様の様に眼が奥まつて、可愛らしい子では無い。お母様は先つき火を付けて居た女で縮れ毛の、髪の少ない、口の廣い人である。相應に挨拶をすませて三人とも下に降りて行つた。

　村井は頻つて今夜一晩宿つて行けと勸めたが、榮一は急いで居るからすぐ歸ると主張して、その中に、妻君と子供は西洋料理の皿を運んで來た。榮一は何を云つて善いか解することの出來ぬ或思ひに胸が充された。

　フークを取つて見たが決して自分の宅で食つて居る様な氣もしなかつた。

　夜の何時に德島行の汽船が出帆するかと聞くと。食事中村井は立つて電話をかけて聞いて與れた。そして上つて來た『今夜は少し波があるので大阪から來るのが皆少しづゝ遅れまして、十時のが十二時になつて、十二時のが一時になる相です、』と答へて居た。

　側に居た妻君は『まだ七時ですからお風呂にでもお召になつてグッと一寢りたさいやす、波があつたら寢られんさかへ。今日は汽車でお疲れでおまつしやろ……』と云つて居た。

　食後妻君に勸められた通り横向への大黒湯へ浴らうと思つて居に降りて行つた。

　若い男も山田と名乘つて禮をする、色艶の善い男も細川と名乘つて禮をした。妻君が奥から大きな西洋手拭と洋銀の石鹸入れを持つてきてくれた。その時、穗積と森六彌が歸つて來た。そして驚いた様に、

『坊々。德島へ。いつ東京から？』と尋ねて居た。六彌は厠へ這入つたが穗積は、

『お風呂？私も御飯喫たら後から行きまつさ。』と云つて臺所の方へ數戸を開いて這入つた。

『今日はでえらい波やつた。』と奥に穗積の勇しい若い聲がして居る。

　榮一は大黒湯へ行つた。

四

湯で計らすも二十年來新見家に勤めて居た吉田由太郎に會つた。榮一は今でも由太郎が新見に居る事の様に思つて居た。然し由太郎は何となしに慊き足らぬ挨拶振りをして、

『お父様が市長になつてから、まるで店は、わやや。天狗には差押へを食ふし、店のものに月給は拂はず、館詰は抵當に入れるしさ……』と大勢の中も關はず喋べる。然し湯が非常に込んで居るから耳を傾けて聞く人も無い。

『坊坊。お前さんもお父様の様になつたら困るぞい。お金を皆嬶に入れて終ふて店は空つ洞にして終ふたら。………已あな旦那に何遍も云ふたんじやけんど大將、由太郎の云ふ事なんぞ相手にせんツて。已は四月計り月給を貰はずじや。そして大將と約束して貯を預つて貰ふてな今では獨り遣つて居るわい。……榮一様が確固とやらな新見はもう駄目じやぜえ……お父様は銀風樓のお梅と云ふのに現をかして居るわい。お父様はそれに吸はれて居るじや。今度大きな家を徳島本町に建てた相じやが田舎のお母様も困つて居るだらう……然し榮一様のお母様は利口であつたなア。なかなかお母様が生きて居つたらお父様に金を費すものか。利口な人であつた。榮一様はお母様の顔を覺えて居るかい。お前さんに詳く似て居つたかな。そら奇麗な人あ あつたな……』

と、榮一に答さす間も與へずに獨りで喋る。榮一が『お老婆様は？』と尋ねると、

『老婆も、もう年が寄つたので新見を止めて今では宅で子を守りして居るが……此二月に妻が死んだのと、……村井の家内があアやつて店へ來て居るだらうな。あの嬶は何から何まで店のお金で費用を濟すだらうな。宅のお老婆はそれ、二十年も三十年も新見に居るだらうな。それで村井の嬶があまり我儘なに腹立てゝな……そうでないで、去年の七月まで宅のお老婆が益則さんと義徹さんを世話して居つただらうな、こした處が村井の嬶が自分の中からあの二人の鼻垂れ小僧を連れて來て我儘の云はし放題にするだらう。小坊のお玩具もお菓子も皆自分の子に遣つて終ふて聞いて。それでお老婆も七月に小坊が二人とも阿波へ行つてから、もうこれで安心、……宅へ歸りたい、歸りたいと云つとつたんじやけんど、ついつい村井の嬶ばかりに托せて置くと斯那事に店がなるかと思つたでな、それ此二月まで延びたのでないで、そして已の妻が店で死んだ

だらうな、仕方なしに歸つて來て貰ふたのじやが……いやまア達者で御座ります、……その後、坊々の御病氣はどうです。勉強が出來るやうになつたかい。もう勉強はすんだのかい？』と赤心を籠めて問ふてくれた。

新見は自分の知らぬ我家の悲劇を聞いて、思はず知らず身を震はせ、また吉田由太郎の悲運に同情した。

『有難う。もう病氣もズツと善うてね。去年の九月から勉強して居るのだが……由さんの妻君が死んだのかね、少しも知らなかつた。そらお氣の毒でしたね。然しまアお老婆さんが達者で居て呉れるのは結構ですね。僕も隨分お老婆さんにお世話になつたね。』

『そうじや榮一樣は十から阿波の川谷の繼母樣の處へ行つたからそんなにでもなかつたが下の二人は隨分お老婆樣を泣かしたな。然し早いものじやな。益則さんが今年中學校へ這入つて、義敬さんが來年這入るつて云つて居るが。あの下の子がお母樣の死んだ年の正月二日の朝産れたのじやが……そうそ、榮一樣の上の姉樣も正月の二日に生れたかな。そうすると義敬さんは今年十二で、十三で？』

『滿十三で數へ十四だらう。』

『そうなるかな早いものじやな。中學校は滿十二歲から這入れるのだらう。義敬さんは何故這入らんのだらうな。』

『ア、眞違つて居つた、數への十三だらう。』

『然しそれでもお父樣は義敬さんを中學校へ入れそうな者じやが、』

此時穗積が這入つて來た。

『ヤア、由さん、久し振りやな。近頃は何處へ。』

『何處となしに行くが、此三四日前は新宮まで行つて居つた。どうだ豐吉此頃店は？』

『矢張り、あかんな、隨分荷は出る事は出るが。村井の婢がうるそうて仕方が無いわ。昨日も村井に大きな魚を付けて己には骨計りしか呉れへん、ね。それで庭へ拋り付けて遣つた。すると今日までぶつ／＼云つて居るのやで。』

『ちつと、やつて遣るのが善いぞ、』

三人は笑つた。

『豐吉此頃は毎晩新川へ行く相じや無いか。あまり行くと梅毒かくぞ。』

『馬鹿云へ由さん、そんなに金があるか。』

『細川に連れられてよく行くそうじやないか。』

『冗談じや無いぜえ、行くなら獨り行くさ。』

穗積は二十三四の面長の小黒い、鼻の高い眉の薄い五尺四寸もあらうと云ふ細長い男である。髮は一寸と短い髮を左の方によつてチツクで別けて居る。

穗積が湯槽から出ると由太郎と榮一は浴室から出て行つた。由太郎は身體を拭き乍ら、

『坊々。覺えて居るでか、濱で由太郎が、坊々の、も少しで死によつたのを助けて上げたのを』と問ふ。

『僕に覺えて居るね、あの鳥上町の臺所でお母様に抱かれてお醫者様に診て貰つたこと。』

『あの時分に己が助け無かつたらもう五分間で坊々は死んで居る處であつたんじやがなア。』

『さうだね。』

『あの時分の事を思ふと大きくなつたなア……お母様に眞によく似て來るな、坊々は。』と由太郎は小首かたげて榮一を見る。

榮一は髮を別けようと、鏡の前に立つたが、

『奇麗な髮じやな。』と由太郎は賞めて居る。

風呂から歸つて東京のお友達に手紙を書いて一寸と、ひと寢入りした。

ひと寢入りしたと思ふと、穗積が起して呉れたから兵庫の棧橋へ行つた。

三等の切符を買つて穗積を驚かしたが、新見は平氣で第二共同丸に乘つた。

その晩の航海は非常に荒く三等に殆ど醉はぬ者は無かつた。然し新見は醉はなかつた。德島本町の洗濯屋だと云ふ男と知り合ひになつた。聞けば父の新築の邸宅と隣り合だ相な。それから朝になつて甲板に出ると井端の本屋に居た小僧が大夫になつて居る事を發見した。こちらも忘れ無かつたが向ふも忘れて居ら無かつた。

『新見さん評判が惡う御座りまつせ、お父様は。ちつとお父様にしつかりやらないかぬと云はな、いきまへんぜ』とその男が憮つた顏の眉と眉の間に立皺をよせて云ふ。

『どんなに評判が惡い』と聞くと、

『津田の川口が埋つて居るのに、浚渫船を修繕にやつてあるとか、何とかかんとか云つて、日に日に汽船が德島へ這入るのが延びて、去年の八月から今に小松島へ着いて居るでしよう。新聞が攻擊するのせんのつてそら話になりませんね。それに一昨

日は富田橋が今度架け變へになるのでしよ。あれに市長が賄賂を取つたとか云つて新聞に攻撃して居りましたぜ。』と遠慮會釋もなく云ふ。新見は益々身が縮る樣に思ふた、

『火夫はどうです面白いですか』と尋ねると、

『面白い。面白く無いつて、母親を養はなくちやなりませんからな。月九圓でも取らな遊んで居れませんから。』

『女郎買はどうだね？』と笑つて尋ねると、

『私は行きませんが事務員やボーイは大阪へ上ると直ぐ松島へ飛び込んで行きますわ。そらお話にならん位です此船の中でも借金で頸の廻らぬボーイが幾人もありまつせ』と云つて居る。そして說明して『そら海の上に働いて居るのですからな……』と加へた。

その火夫が機關室へ降りて行つたので、彼は唯獨り甲板に殘つて曙の海の景色を見て居た。

風が強いので大きな雲が西南から東北へと飛んで居る。そして一つの波に大きな汽船が浮いて居るかと思ふ程搖れる。東の方に水平線を一寸離れて一直線に薄い赤色が雲の下を流れて居るが、何分待つても赤味が增さぬ。今にも雨が降り相で海は灰色の淡い色彩で天地が充されて居る。心細く淋しい。太陽も照らさず雨も降らず、唯波の音と檣（マスト）やブリッヂに衝る風の響が如何にも物凄い。

少し發熱して居るので風が莫迦に冷い。然し下に降りると醉ふであらうと思つたから續けて甲板の眞先きへ行つて低い聲で聞き覺えの讃美歌を繰返してみた。が、矢張り德島に歸つてどうするとかと云ふ事が案ぜられた。父に會つて何と云はうかと思ふと何だか心せわしい。

東京に居た方が善かつたかも知れぬと思ふが、哲學と宗教は研究しても果て切りの無いものだ、と思ふと東京にも居りたくないと考へられる。でも不自由な田舍に這入つて何をするかと考へると、凡てのことがつまらない樣に見える。假に幾多を對手に社會改良とか云ふことをした處で新聞の一隅に模範事業と云ふ題で一日か二日か掲載せられて、その後はまた世人に忘れられて終ふのだと思へばつまらぬ。然し哲學の著作をしても世人が讀んで吳れぬ時は反つて苦痛だと思ふと社會と云ふ者は無情なものだと思つて悲觀したくなる。また自分は一生土になつて何の社會に貢獻する處が無いと思ふと、高名心が胸に湧いて反つてまた悲しくなる。父がどんどん學資を送つて吳れて宗教哲學を專攻して獨逸へでも留學すれば愉快は、愉快だかと思

ふと父が憎い。妹が何故本妻にも父にもお梅とか云ふ女にも可愛がられぬかと思ふと泣きたくなる。泣くまいと思ふても泣けて來る。今更人生は海に浮ぶ舟だと古い譬を思出したくなるが、人生は逆卷く怒濤の樣な者であると考へる。皺立てゝ平凡な水平線を破つても雲はまだ遠く天はまだ遠い。その中に風が靜まつて、また平凡な水平線に滿足せねばならぬのだ。主義と理想の十字架を背負つて故鄕に歸るが夢が醒めて殘るものは唯屍計りでは無いかと思ふと、唯泣きたい。屍！屍にもなれぬ。唯灰であると思ふと腹が立つ。然し灰も殘らず、細い雨に、女はたゝかれて何處かの溝に漂つて行くのだと想ふと咽ぶ。

　然し今となつては雲と漂ひ雨とをちるより仕方が無いと覺悟する。が、大きな雷が鳴つて大粒の雨でも降れば善いにと考へる。否、今急に颶風でも起つて船諸共、海の底に沈めば、平和に僕は沈んで行くにと新見は微笑んだ。

　雨がぽち／＼降つて來て、雲は海上に近く飛んだ。新見は頭垂れて涙を拭うた。

五

『ア兄樣が――』と玄關を出かけて這入つた洋服を着た小供がある。榮一を見て急いで奧へ飛んで這入つた。

　榮一は今小松島から車に乘つて歸つて來た處である。蒸汽船は六時に小松島に着いた。

　榮一は父の屋敷の想像以上に立派なものには驚かざるを得なかつた。見た所、橫に十五間高さ二間半もあらうと思ふ鼠色の土塀がピカ／＼光つて居る。腰板の六尺もあらうと思ふものは杉の燒板、上は上製瓦に定紋を拔いてある。その前へもつていつて丈四尺計りの檜の六角柱の垣。門はひとしほ奇麗で木は質の緻密な光の柔和な材を用ゐ。敷石は青石の一枚。門から玄關まで二間半もあらうと思ふが、實に大きな石である。幅は四尺もあらう實に立派な者だ。

　車から降りて玄關に進んで敷戶を開いた時、

『そう……………オホホ……………』と女の可愛い笑ひ聲がする。小供の足音が之れに先き立つた。

『兄樣お歸り』と色の白い眉尻の上つた頰の細い弟の益則が禮をした。

　障子に隱れて女も『お歸り』と禮をした。女は通りから見られるのが恥しいのであらう。

『御機嫌……』と輕く答へて車夫に金を拂つて靴を脫いだ。

『さ兄樣奥へ。長くお目に懸りませんでしたね。』と女は云ひ乍ら奥へ通らうとする。

榮一は此女か？銀風樓のお梅と云ふは。此女なら四五年前父と水屋と云ふ旅館で一緒に宿つた時一寸と見た事のある女だがと思ひ出した。兎に角お梅の歡迎は嬉しかつた。

『有難うお父樣は居らしやいますか』と問ひ乍ら上る。

『は、居らしやいますよ。今二階で神樣を拜んで……』と女は答へる。

榮一は女の云ふまゝに「お次ぎの間」から奥へ通つた。

『洋服をお脫ぎやす——荷物を開くまでお父樣の着物を一寸と御召。』と笑を含んでお梅は云ふ。女の親切は憎いものではない。榮一はお梅の云ふ通り洋服を脫ぎかけたが、お梅の手も上衣に觸れた。

『ア、兄さん、まるで、しよぼですなオホホ』とお梅は笑つて居る。

『今着物を出しますよ』と云つて奥の簞笥の引き出しを開けて居る。益則は默つて榮一の洋服を脫ぐのを見て居たが、

『まア學校へ行つて來ます。兄樣それじや、また』と云つて出て行つた。

榮一はお梅に、

『益則は大きくなりましたね』と云ふた、

『ほんとに大きくなりましたでしよう』と答へ乍ら紬の袷と縞紬の帶を出しに來た。衣服を着ながら

『お父樣はまだ降りて來られないの』と問ふと、

『そらお父樣の長い事每朝每朝一時間位い拜んで居られますよさ。あなたお面をお洗ひやす煤黑くなつて居りますよお水を取りましよう……およし若旦那に御水を取つて上げて頂戴』と云つて洋服を持つて椽を傳つて化粧の間の方へ便所の前を通つて去つた。

『はい』と臺所から出て來る足駄の音が聞えて、見付きの善い十八九の女が窓の前を通つて椽先の流しにある金盥を取つて井戸端に立つ——。釣瓶の鎖の音が聞える。

榮一は十幾年目に絹の衣服を着て見た。心持の惡いものでもない。お梅は椽を小足に走つて來て、榮一に大きな西洋手拭と齒磨楊子を渡した。そしてまた

『はいこれ石鹼』とニツケルの石鹼箱を渡した。榮一は楊子を使つて面を洗つて居た。女は後ろに立つて、

『あなたの髮の黑いこと、ほんとに黑いわ、女にしたら善い髮の毛ですな……チック付けはりますか？チックなら化粧

の間に御座りますよ。』と云ふ。
『いやチックなど付けません、下品ですからね。』
『そうですかチックを付けぬのがハイカラですか？』と眞面目腐つて尋ねるので榮一も少々閉口して、
『アメリカの上品な人はチックは使ゐませぬね』とまア答へて置いた。それで女もその上問ふとはしなかつた。面を洗つて手拭を取つた時、
『昨夜は荒うございましたでしよう。』と問ふ、
『はア』と答へると、
『あなた鏡？化粧の間へいらしやい。こちらへ。』と云ふ。女に追いて行くと浴室の隣りが化粧の間。萬事和式で窓の方に大きくて綺麗な鏡臺がある。左は押入。押入の前に衝立が有る、父の洋服であらう立派な者がかゝつて居る。榮一の濡れた洋服もかゝつて居る。女は鏡臺の引出しから西洋櫛を出して、
『どうぞお使ひなして』と云つてまたチックを出して見て『お使ひなら……これは御父様の……』
お梅の輕々しい態度に、面白くない榮一は「お父様の」と云ふ句を聞いてドキッとした。
榮一は髮を分けて居たが、『私は一寸と失禮します、お膳のこしらへをしますから』とお梅はまた緣を臺所の方へ急いだ。
髮を梳き終つて榮一は化粧の間から出て來たが、お梅は臺所から首を出して、
『もうおすみなさいましたか？』と尋ねる。
『はア』と答へて『お父様はまだですか知ら』と臺所の方に來ると、
『もうおすみになつた様です、お聲が聞え無くなつたから…………忙しくてまだお辭儀を忘れて居りましたね。臺所でまア改めて』と臺所に坐る。それで榮一も坐つた。
『暫く。其後は御變りも。ついつい御無沙汰計り……こんなにお父様に御世話になつて居ります。幾分にも宜敷――』と口上を述べる。榮一も、變に思つたが、
『どうも暫く、御盛んでいらつしやいますか、どうしましてどちらいか宜敷。』と改めて禮をした。
『學校はお濟みになつたので御座りますか？』
『いゝえ濟んだと云ふのじや無いのですが――』
『まアよく、御歸りなさいました。四年前で御座りましたかね。水屋で一寸とお目に懸つたのは。』とお梅は臆面も無く云ふ。
『はア。』神經の過敏な榮一は妙に感じた。

『お父様も長くお會ひにならぬから近い中に會ひたいと仰つて居らしやいました。』

『そうでしたか』と榮一は一寸と笑顔を見せて答へたが、挨拶と云ふ者は仕樣でどうでも云へる者だと考へた。榮一は急に笑子の事を思ひ出して、

「笑はどう致しました。」

『三日前に田舎の方へお歸りになりました。』と答へて居る。その時、二階から父の降りて來る足音がした。

お梅は『御免。お父樣が……』と座を立つて、二階の上り口の襖を開いて、

『兄さんがお歸りで御座ります。』と上を見上げて云つて居る。父は返事もせずに降りて來る。

榮一は頷垂れて指をもじ〳〵して居たが、父を見て『お父樣……』と云つた。が、父は、

『オ、榮一か？……』と云つたまゝ仲の間へ通つて終う。

榮一は何だか物足らぬ氣がして俛いて居た。

『まア、こつちへお出で。』と仲の間から聲がする。お梅は押入れを開いて膳立てに忽しくして居る。榮一は坐を立つて臺所と奥の間の「仲の間」の入口に俛いて坐つた。

父は長火鉢の前に絹を纏つて角帶をしめて居る。背は低い方で、顏は小黑い。厳格な顏で口數は無い。

臺所からお梅の聲がする。

『旦那さん、もう御膳が出來ますが……。』父は默つて居る

そして長火鉢の横の小さい黑梅の棚から茶飲み茶碗を取つて居た。榮一は、

『お父樣。暫く。御機嫌はおよろしう御座りますか？』と禮をしたが、父は茶毘杓で大きな鐵瓶から湯を急須に入れながら輕く、

『久し振りじやな。』と云つて居る。そして續けて

『お前顏が青いじやないか、まだ病氣が惡いかい。』と加へて居る。

『有難う御座ります。然し別に變りは御座りませぬ。』

『榮一學校はどうした。……もう卒業したのかい』

『いゝえ。』

『どうしたの、それじや此頃は休みかい？』

『いゝえ。』

『それじやどうしたの』

『一寸と感じた事がありまして。』

『それじや退校でもせられたのかい？』
『いや。』
お梅は入口に手をついて『お二人共お茶漬をお上りなして』
と云つて居る。
『まア、それでは、茶漬けでも食つて……、己も役所から歸つて來てから悠然と話をしよう』と父は立ち上つた。
お梅は『そちらへ持つて參りましようか』と問ふたが、
『臺所で結構』と云つて居る。榮一は父の悠然して居るのが腹が立つて氣がいらだつて仕方がないが、默つて俛いて居た。お梅が呼ぶから臺所の自分の席に着いたが、
『榮一昨夜は少し風があつたので、よく轉つたゞらうなア』と父は少し諧謔に出る。
『はア、』と答へたが後に續く言葉が無い。
『何等であつた？』
『三等で――』
『そら、おえらかつたでしような』とお梅が云ふ。
『榮一、お前の學校は一體ありや違う云ふ學校じや？』
『基督教主義の學校で御座ります。』
『それじやお前も耶蘇になつたのかい。』
『いゝえ。』
『それじや、なぜあんな學校へ這入つたの、己の云ふ事を聞かずに……そしてお前もう學校は退校したのかい？』
『はい退校する積りで歸つて來たので御座りますが、……明治學院は主義が賛成で御座りますから今迄で居りましたが。』
『主義つて、キリスト教かい？』
『博愛主義です。』
『それじやお前は社會主義にも贊成して居るだらう。』
父に問ひ詰められて、阿波の名物の燒味噌にも味が無い。
『はツ、…………。』と答へたが。
父は聞かぬ振りして
『お給仕』と茶碗を膳の上に置く。お梅は『およつさん、一寸と上つてお給仕をして』と庭で益則の辨當であらう、小さい瀬戸物の辨當入れに、飯をつめて居た下女を呼んだ。
『はい』と答へて、下女は上つて來たが、飯櫃の横に坐つて恭しく禮をする。
『旦那樣お早う御座ります。』
『うむ』
『奥さんお早う御座ります。』

『お早う』

『若旦那さん、お早う御座ります。初めてお目に懸ります。幾分よろしくお願ひ致します。』

『お早う御座ります。どちらいか宜敷。』

主人は先きから茶碗を持つて待つて居る。禮を終つて下女は默つて盆を出した。父は下女の飯をつぐのを見守つて居たが

『榮一お前博愛主義じや何じやと云つた處で、遊んで居つてそれで濟むのかい。學生の間は空理空論で事も足るけれども、今、お前が退校して何すると云ふことを知らぬ者が、社會主義じや博愛主義じやと騷いだ處で何の役にも立たないぢやないか。それより一文でも儲ける法を考へた方が勝つて居る。昔から理屈を云ふ者に限つて貧乏して困つて居る者が多い。……榮一……お前は○○○もいらぬと云ふのだらう』とはは落ち付き拂つて榮一の攻擊を始めた。榮一は、『時でない』と思つたか、默つて居た。

『己もお前が己の云ふ事を聞かずに耶蘇教の學校に這入ると云ふから、初めから學資を送るまいと思つたのじやけれども、それも少し可愛相じやと思ふて先月迄送つて居つたが、少し此頃は金の融通もきかぬ様になつたから此月はもう學資は送ら無かつたが……………勉強さしても己の思つた様なものにもなつて吳れず、耶蘇に改宗して家を出て終うのなら、幾何骨折つても駄目じやと思つたからな。それで此月も送らなかつたのじやが……然し榮一歸つて來て何うする積りじや。内には耶蘇や社會主義の男はいらぬが。それかと云ふて遊んで居つて乞ふわけにも行かぬし。己の云ふ事を聞かぬ子は宅の子じや無いが……………國が嫌だと云ふ人などはあまり内へ出入して貰はぬ方がよいが――』としめり〱。父は低い聲で榮一の頸をしめる。お梅は默つて聞いて居た。榮一も默つて聞いていたが、熱い胸の下を冷水が流れる様に覺へて思はず知らず、

『ウフ、……』と輕く笑つた。笑ふや否や

『榮一貴樣笑ふとはなんだ衔も父に向つて』と眼を怒せて父が叫んだ。お梅は、

『旦那、およしなさい、旦那、今歸つた計りの人に、そんなに云ふのは失禮でせんか。』と氣の毒そうな顏をして宥る。

『生意氣な東京で少し勉強さして遣つたら生意氣な事計り考へて、親を少しも親と考へぬ様になつて……』

『旦那、今朝は少し御飯が遅ふ御座りますからお話は後にして、御飯をお濟しなさらぬと遲刻なさいますよ。』

榮一は父が何だか芝居して居る樣に思はれてならぬ。頑固な父をよく芝居で見るが現實のものじや無いと思つて居た。が、現實——而も我父が頑固阿爺の標本だと思へば可笑しくて堪らぬ。

『少し學問が出來たかと思ふと父を嘲弄して笑ふ。』と父が云ふので冷りとした。父は此ふ云つて默つて立つて奥へ這入つた。

『おい洋服を出して、』と云つて居る。お梅が、

『旦那御膳は召上らないので御座りますか？』と問ふたが答は無い。で、

『お父樣は此頃なんでも怒る樣になつて居られますから、どうぞ御許しなしてよ』と榮一に謝して居る。

『いゝえ、怒つたり致しますものか』と榮一は云つたが顏は上げぬ。涙が眼に集つて居る。奥から、

『何を喋つて居る早く出さぬかい。』と云ふ。

『へい』とお梅は慌てゝ化粧の間へ走つた。

『どうぞ澤山お上りなして』と先きから、呆氣に取られて見て居た下女は新見の箸を置くのを見て盆を差し出した。その聲が可愛い。然し榮一は「有難う」と云つたなり臺所の隅の障子を開いて下女の室へ這入つて、身を倒して涙にくれた。雨は烈しく降る。

暫くして父が出勤した後、お梅が、二階に床を延べたから昨夜の疲れを休めてはどうかと親切に云つて呉れた。それで榮一は二階へ上つて寢た。

午後の四時頃まで少しも知ら無かつた。雀が三四匹喧しく鳴いたので眼が醒めた。一寸障子を開いて外を見ると雨は小降りになつて天はボウと明く、黄い光線が屋根の瓦を照らして居る。乾を見ると倉の陰に二階立の家が見える。柿の木がその横にある。窓を開いて若い女の人が本を讀んで居る。一寸と顏を上げてこちらを見る。

『ア、美しい女——』と榮一は思つたが恥しかつたから障子を閉めて茫然何とはなしに考へて居た。父の聲が下にする。

『父が早や歸つて來たのかい』と思つて縮み上つた。

夕飯の時に榮一も席をまた連ねたが、父は晩酌の醉が大分まわつてくると、そろ／＼榮一を攻擊し初める。お梅と新川は唯默つて聞いて居る。然し榮一は決して默つては聞いて居らぬ。醉つて居るからと云つて無責任なことを云はさぬと覺悟して居る。

『今迄幾百圓幾千圓と入れさして、二十二も三にもなつて何

の役にも立たぬと云ふのは情ないではないか？お前ももうこれから本を讀むのは止めて兵庫の店へでも行つて番頭の代りか丁稚の代りでもしてはどうだい？それも出來ぬかい。出來ぬ、と來ては困るなア。東京へ行つて遊ぶことゝ無理云ふことを稽古して來た樣な者じやなア。一體榮一それでは、今から何をする積りじや。今の處どんな考へを持つて居るのか？』

『今の處は別に何にもありません然し唯お父樣が笑子をまづ可愛がつて下さいと云ふことゝ此那大きな家を建てゝまづ借金しなくとも小さい宅を建てゝ私に勉強さして下さいと云ひたいのです。』と榮一は出來るだけ熱烈な言葉を並べて父を刺激しようと考へた。

『フム、生意氣な事を云つて居る。借金するもせんも勝手じや、あまりおまへの樣な漂浪者に云つて貰はぬわい。勉強は勝手にするがよいわ。今迄さうして遣つたので結構では無いか。中學卒業して四年も五年も東京へ遣つてやつて肺が惡いと云へば小笠原まで養生さしに行かしてやつたに一言のお禮も聞かぬ。まだその上に久し振りに歸つ來て、やア笑を可愛がらぬとか、自分を可愛がつて吳れぬとか。……フム、生意氣なそれが高等學校に居た學生か、耶蘇と云ふのはそんな者か？……それじや耶蘇教では親不孝を教るのだなア』

『………、耶蘇教では…………………子を可愛がらぬ親、一人の女を愛せぬ夫は…………お父樣なぞはそれだから…………………。』と榮一は冷く云ひ切つた。

『フム、お前は………………………、お前は已の子では無いのじや内にはお前の樣な浮浪者はいらぬわ。よくまア過去の御恩を忘れてそんな事が云はれるな。お前はそれまで、わしが憎いか？』と父も敗けぬ。すると榮一も

『お父樣もよくも何人も女を…………………。嘸々私のお母樣が墓の中で泣いて居る事で御座りましようよ。それに新聞に攻擊せられても平氣でよく市役所に出られますね。』と本氣になる。

『生意氣な、何をぬかす。』と父は立ち上つて、榮一の處に近ずいた。

『云はして置けばよくまアそんな生意氣な事が云へるなア。も一度云つてみい。』と聲を震はせて咽びながら云ふと、榮一は繰返して、

『賄賂を取つたなど云はれて平氣で市役所に出られますね』と

平氣で云ふた。が、此言葉の云ひ終るか終らぬかに父の掌は榮一の頬に強く落ちて、持つて居た箸と茶碗は膳の上に轉つた。そして續いて父の足に蹴られた榮一は横に倒れた。倒れた榮一の頸筋を掴へて父は玄關へ引きづつて行つた。番頭も下女も小僧の吉三郎も默つて見て居たが、お梅は立つて

『旦那様、およしなさいませ。もしお怪我なしても悪いですから……』と申譯の仲裁をして居た。

榮一は決して反抗しない。父は玄關の障子を開いて

『出て行け！』と

榮一を蹴落した。そしてぴしやりと障子を閉じて泣いて居る。

障子の影で榮一は強く泣きながら苦しい笑を漏して居るが少しゝて何か心に浮んだのであらう急に中門から裏に廻つて化粧の間で洋服に着替へ、また玄關に來て哀れな靴を穿いて傘もさゝずに家を出た。

外は闇だ。

（つゞく）

死線を越えてに就いて

本篇は何分六百枚に亘る長篇なので、本號には僅に其五分の一しか掲載する事が出來なかつた。夫れに肝要な部分に伏字又は削除の餘儀なきものあつたので、何となく不徹底の憾みがあるのは洵に殘念である。本篇の主人公が、眞に活躍するのは來月號からである。賀川氏の豐麗なる詩想と、徹底せる思想とが、血と涙とによつて描き出される、火の如き熱筆を期して待たれよ。

山川均氏の「獨裁政治とデモクラシー」（八十枚の長論文）を卷頭に掲載する筈であつた所、其筋よりの注意に依り全部削除した、表紙は訂正不能の爲め其儘とした。諒せられたし。

新刊紹介

◉**女性中心と同性愛**（堺利彥、山川菊榮共譯）「女性中心」はウォードの原著を堺氏が伸暢なる筆致にて譯出したもので「同性愛」は英國の詩人にして哲學者社會主義者であるカーペンター氏の原著を山川氏が譯筆を執つたものである、男性中心說に依つて築かれた現代の社會制度に滿足して居る人々は此女性中心說に依つて根柢より誤謬に陷つて居ることに驚くであらう、而して同性愛に於ては中性的——混合的性格　男女の著しく吾人に肉迫しつゝあることに膽を冷すであらう。吾人に提供せられた新問題として大に研究して置く必要がある。（定價壹圓六十錢神田仲猿樂町アルス社）

◉**マルクス資本論全譯**（第一分冊）（生田長江譯）如何はしい資本論の出た後を享けて現はれた者だけに大分世の注意を惹いて居るそしてニイチエの新譯に苦しみ拔いて來た譯者だけに、此新譯は信用すべきものとして推す者が多い、譯者は序文中に穩健な言葉で自分の立場を云つて居られるが、此大譯を獨力で仕上る覺悟は大に多とせねばならぬ、譯筆も文學に堪能な人だけに非常に讀み易くして原文の價値を現はすことに努めて居る定價も安い。（定價壹圓九十錢麻布十番通ニ葉社）

◉**朝鮮滿洲支那案內**（鐵道院編纂局）東亞案內邦文版として鐵道院が例の美々しい體裁と簡にして要を得た旅行案內との腕を更に支那に及ぼしたもの四六小版の美裝六百頁の可愛い本に、百廿餘枚の寫眞と廿四面の石版地圖とを添へた頗る氣の利いたもの、案內書として比すべきものゝないのは勿論である（定價五圓麴町區三丁目丁未出版社）

◉**趣味の寫眞術**（三宅克巳著）著者は美術家であつて且寫眞の大家である、曾て初心者の爲めに一本を著して稗益したが本書は更に趣味としての寫眞を主として親切丁寧に手引草としたものである、學理に偏せず專ら實際を主として指示してあるのは素人にとつて何よりも有難い。（定價一圓八十錢神田仲猿樂町アルス社）

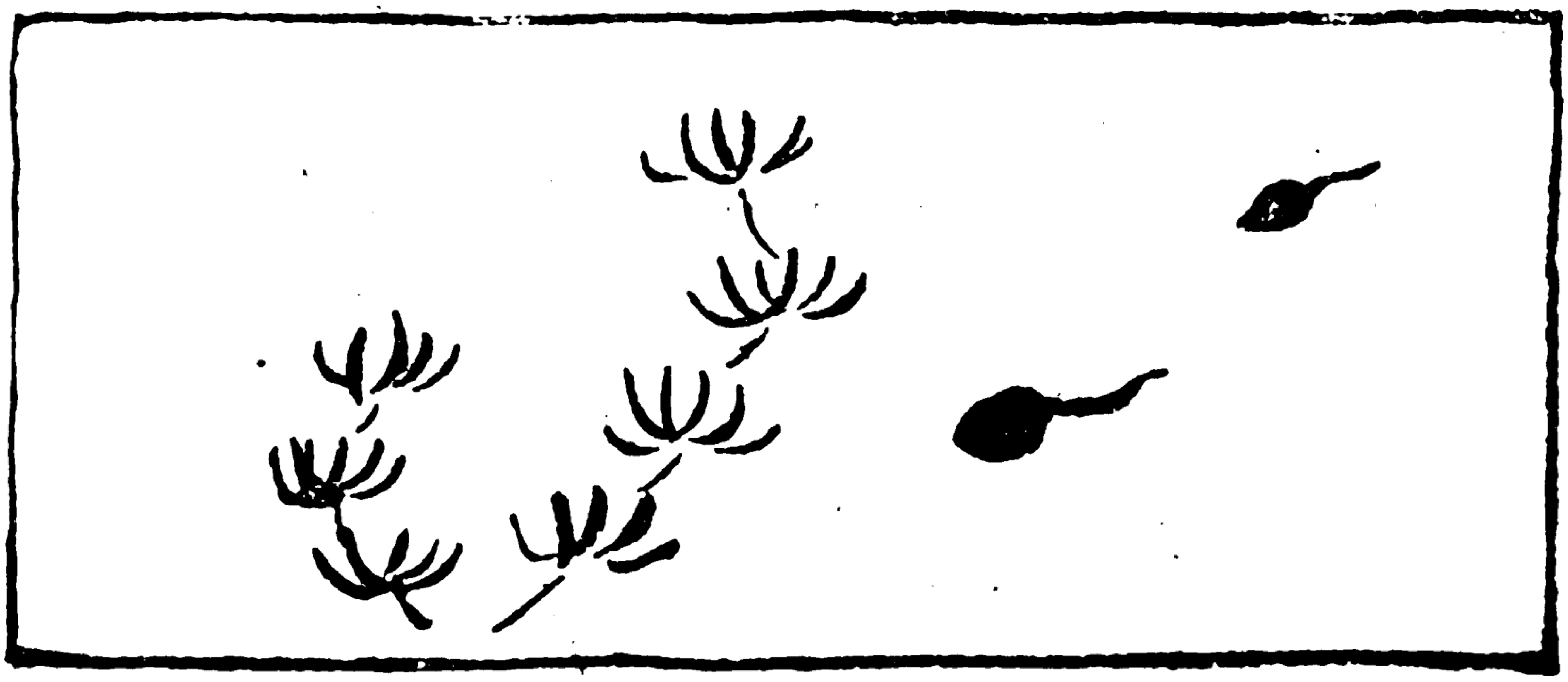
◉**マルクス經濟學入門**（第四級民叢書第一篇）山川均氏の監修に依つて發行されるもの、あまり學理に偏し、高價に傾き勞力にも經濟上にも實際第四級民の手に達することの出來ないのを遺憾として計畫されたものである（定價五十錢芝區三田一丁目三田書房）

◉**貧民窟詩集淚の二等分**（賀川豐彥著）與謝野晶子夫人曰く「現實に對する不滿と、之を改造しやうとするヒユマニテイの精神とは此詩集の隨處に溢れて居る」と又「春の日の如き感情の豐かに持つて居る人、貧民詩人、勞働詩人、戀愛詩人である」と本書の價値と內容とは此れで盡きて居ると思ふ（定價一圓六十錢京橋尾張町警醒社）

◉**社會問題十二講**（生田長江、本間久雄共著）社會問題が今日の如く勃興した時代はない、隨つて此問題に對する眞正の理解を要することは緊急事である。本書は佛國革命より說き起して勞働階級の發生に及び、資本主義の實體を解剖して社會主義の起因を說明して居る、そして今日の社會問題の歸着する所を指示して居る。（定價二圓牛込區矢來町新潮社）

◉**不自然の貧乏**（茅原華山著）內務省の檢閱に四ケ月の長日月を費したと云ふ觸れ込みで世の中に飛び出したのは飽迄華山式の遣り方であらう卷頭先づ「タンタラスの苦悶」「不自然の暴富と不自然の貧乏」と云ふ文句に強かに威嚇して居るつまり現代の暴富も貧乏も皆不自然だと云ふことを氏一流の詩的論文に現はしたもの。（定價二圓卅錢下谷下根岸帝國出版協會）

——(新年號創作大附錄)——



藤戸

野上彌生子

人物

佐々木三郎盛綱。
老媼。
老臣。
兵士數名。

佐々木三郎盛綱が直垂に梨子打烏帽子の姿で、一人の太刀持を隨へて、正面の床几にかけてゐる。老臣の佐衞門がその右に坐つてゐる。一人の兵士が入つて來る。

兵士、申上げます。――また昨日の婆が參りました。幾ら追つても歸りません。

盛綱、昨日の婆が來た。――それは何のことだ。

老臣、殿樣はまだ御存じないことでござります。實は昨日、一人の見苦しい漁村の者らしい樣子をいたした婆が參りまして、今度お國入りなされた殿樣は、人民の訴訟、公事一切を御自分でお裁きになる、に就いて、訴へのある者は何人に限ら

す申出ろと云ふ高札が村々へ立つたさうな。自分も是非直々殿様へ御訴訟申上げ度いことがあるから取り次いでくれと申すのでございます。見ればひどく年を取つて、足腰も利かぬほどの年寄りでございます。さう云ふ者が殿様へ直々御訴訟申すやうなことがあらうとは思はれませんし、乾度老いぼれて氣でも狂ふてゐるものだと存じて、追拂はせました。これがまた參つたものと見えます。

兵士。　左様でございます。今日こそはどうしても殿様にお目にかゝる。取り次いでくれなければ日が暮れても、夜が明けても此處を退かぬ、と云つてお玄關前の砂利石の上へ坐り込んで動きません。恐ろしくしぶとい婆でございます。

盛綱、　連れて來い。

一人の家來、　お逢ひになるのでございますか。

盛綱、　うむ。

一人の家來、　それは餘り御寛大に過ぎはいたしませんか。愛も度を超えると御威光にかかはります。

盛綱、　逢つてはいけないと云ふのかね。

一人の家來、　殿様のなさることを家來の私が否定いたすことは出來ません。たゞ考へて頂き度いと申すのでございます。

盛綱、　併し、何人の訴訟をも悦んで聞かうと云ふわしの宣言はもう國ぢうに知られてゐる。現にその年寄もそれを聞いて來たのだと云ふ以上、逢つてやらないのは間違つてゐる。それがどんな賤しい身分のものであらうが、老いぼれであらうが、その人は正當にわしに面會を要求する權利があるのだ。——さうだ、この國のものでありさへすれば。

一人の老臣、　併しその國は以前は敵の根據地であつたことをお忘れになつては大變でございます。勿論人民たちは殿様を崇拜いたしてはをりませう。左様でございます。あの藤戸の先陣と云ふ功名だけでも、彼等を怖れさせ、歎美させるに十分でございます。神様のやうに云はれてゐる人でも、十人の中に一人は批評家を有つてゐるものでございま

す。今が大事な場合でございます。輕々しいお振舞があつてはなりません。

盛綱、お前の云ふことはよく分つてゐるよ。併しわしは自分の宣言に忠實であり度いのだ。この國の政治と云ふことに就いては、わしは非常な興味と決心を有つてゐる。それだけこの半島の一國はわしの氣に入つてゐる。氣候もよければ、景氣もよく、産物も豊富だ。山には植林が行き屆いてゐるし、海には漁介が夥しい。また軍事上の見地から見る時は、後に山を負うて、三方は海と云ふ要害堅固の地だ、京へも遠くない、斯う云ふ土地がさう澤山あらうとは思はれない。わしは此處で出來るだけ善い政治、出來るだけ正しい政治をして見度いのだ。この國の美しい天然に負ない位ゐ、美しい制度、法律典禮、風俗を拵へあげ度いのだ。人民が身分身分に應じて滿足し合ひ、樂しみ合ひ、尊敬し合ひ、どの家にも一軒々々に平和あり、愛あり、富あり、悅びありと云ふ生活を造り上げ度いのだ。さうだこの半島をその儘で龍宮にするのだ。それがわしの計畫なのだ。武器と血の間から長く、長く夢見てゐたわしの理想なのだ。劍を取つて第一の武將であつたわしは、文の人となつても亦第一の偉大な政治家であることが必要だ。まあ、兎に角その婆さんを連れて來るがよい。わしはその訴訟を聞かなければならぬ。その年寄の胸にたゞ一つの小さい不平が、取り除かれないで殘つてゐても、わしの計畫に取つては怖ろしい破綻だ。さ、よいから、直ぐ連れて來い。

兵士が退いて、一人の老媼を連れて來る。

盛綱、お婆さん、心配は要らないからずつとこつちへおいで。

老媼、有り難うございます。

盛綱、お前はわしに訴訟し度いことがあるさうだね。

老媼、はい。

盛綱、何でも聞いてあげるから遠慮なく云ひなさい。

老媼、どうかお人拂ひを願ひます。

盛綱、人拂ひを。いや、そんな必要はない。此處に居る者は皆んなわしの信じてゐる近臣ばかりだから、何を云つても構はない。

老媼、本統によろしうございますか。

盛綱、いいとも、いいとも。——一體どう云ふ話だね。

老媼、實は、私の亡くなりました息子のことにつきまして、御訴訟申し度いのでございます。

盛綱、亡くなつた息子。——

老媼、はい。一言で申しますと、息子が或る場所の大事な秘密を知つてをりまして、それを或人に教へたのでございます。その人は息子に報酬を約束なさいました。それに秘密を教はつてしまふと、報酬の違約をしたばかりではございません。話すも殘酷な程の方法で、恩を仇に返したのでございます。私はその人を罰して頂き度いのでございます。

盛綱、——その人を罰してくれつて。

老媼、その人のことはお殿樣が一番よく御存じの筈でございますから。

盛綱、分らないことを云ひ出したね。——

老媼、お人拂ひをなさらないからお分かりにならないのでございませう。

盛綱、いよ〳〵妙なことを云ふ。——〔家來たちを顧みて〕矢張りお前たちの想像した通り、老いぼれて、氣が變になつて居るらしい。兎に角遠慮してやつたらよからう。

家來たちは退く。

老媼、お殿樣、私をどう云ふものだとお思ひになりますか。

盛綱、——わしには分らない。

老媼、——あなたに殺されたあの若い漁夫の私は母親でございます。

盛綱、——何だと、——

老媼、——去年三月二十六日の合戰の前の晩に、あなたに藤戸の淺瀨をお敎へ申して、而して殺されたあの漁夫は私の一人息子だと申すのでございます。

盛綱、あ、聲が高い、聲が高い。

老媼、びつくりなさいましたか、さうでございませう。あなたは誰も知らないと思つて、安心してゐらしたのでせうから。

盛綱、いや、わしにはちつとも覺えのない話だ。藤戸の淺瀨を敎へたとか、殺されたとか、そんな漁夫のことなぞをわしが知つて居る筈はないではないか。

老媼、まだそんなことを仰しやるお積りでございますか。それは卑怯と申すものでございます。私は何もかも存じて居るのでございますよ。息子があなたに何を敎へ申したか、その恩義ある若者をあなたがどんな殘酷な目に合はしたか——藤戸の先陣と云ふ、あの名高いあなたの功名は、誰のために得られたものか、その花々しい名譽の底には何が隱されて埋まつてゐるのか、あなたは考へて見たことはないのでございますか。——あなたの主君なる兵衞ノ佐様は、あなたに正しい報い方をなさいました。あなたは藤戸の先陣をなされたその功名で此の國の主となられました。それに、あなた御自身は、その功名をあなたに與へたものに對して、どんな報いをなさつたでせう。それを聞かして下さいまし。

盛綱、——

老媼、それとも、まだ藤戸の浦の漁夫のことなぞ知らう筈はないと仰しやるのでございますか。

盛綱、ああ、どうして、どこから洩れたらう。

老媼、さあ、何處から洩れたでせう。誰が見たとも、聞いたとも分らぬなりに、たゞひとり手に知られてゐるから

怖ろしいではございませんか。浦の者は皆んな存じてをります。

盛綱、——皆んな知つてゐる。

老媼、私の息子を殺した下手人は、今度のお殿様だと皆んなが申して居ります。

盛綱、——あゝ。——わしを人殺しだと云ふ者どもが、わしのあの宣旨を讀むのだな。——訴訟、公事一切、わしがわし自身の手で公平に取り裁くと云ふことを、善い事は善く報はれ、悪いことは悪く報はれると云ふことを。何と云ふ恥ぢだらう。死んでも足りない、醜い恥だ。——お婆さん許してくれ。わしが間違つてゐた。何もかも白狀しよう。お前の息子を殺したのは、お前の云ふ通り此のわしだ。——わしは何處までもその罪を負ふことを誓つてよい。——がたゞ意味なしに殺したのでないことだけは知つてゐて貰ひ度い。殺さずにすんだら何んで殺さう。憫怜さうな、よい若者であつた。——それを殺さなければならなかつたのだ。あの場合、その一人の人間を殺すことが、わしの運命からの必然の命令であつたのだ。恩を仇に報ひることが、避け難い必要であつたのだ。——

老媼、皆んなお聞かせ下さい。殺さなければならなくて殺したと仰しやる、その譯をお聞かせ下さい。

盛綱、その譯を云つて聞かさう。——さうだ皆んな何もかも話してやらう。——去年三月二十五日の晩のことだ。明日こそいよ／＼兒島に據つてゐる平家の一軍と勝負を決する日となつた。敵は、大將の行盛が中々しつかりした男である上に、要害の地を占めてゐる。後は山、前は海、守るに易く、攻むるに難しと云ふ好陣地である。明日の合戰は骨が折れるぞと思つてゐるところへ、ふと思ひついたのがあの海の淺瀬を知つて置かねばならぬことであつた。わしは誰にも知れぬやうに陣屋を忍び出で、たつた一人で海岸傳ひに浦手の方へ行つて見た。すると其處で一人の若い漁夫に出逢つた。——お前の息子も運が悪かつたのだな。——「この海に淺瀬はないか。」と尋ねたら「ございます。」と答へた。「南無、八幡」わしは心の中で神に謝した。「どうかその淺瀬をわしに敎へてくれ。褒美は望み次第だ。」と云ふと、「淺瀬は川の瀬のやうになつて唯一ヶ所ありますが、時に依つて位置を變へます。月の初めに東になり、月の末には西へ移

る」と斯う云ふのだ。小舟を出させて、二人でそつと乘込んで、實地についても水路を委しく調べあげた。「これで大丈夫、明日の合戰の先陣は佐々木三郎盛綱だぞ。」と斯う叫び出し度いほどにわしの心は躍つてゐた。岸に着くとわしは若者の手を取つて云つた。「わしの功名は、悉くお前の功名だ。恩返しをするよ。」その瞬間、惡魔がわしを生擒にした。いや、油斷は出來ない、わしが海を渡ることに目をつけたと同樣に、味方の中にも淺瀨を探るものがないとは限らない、その男が若しこの若者を手に入れたら。――でなくともこの男の口から、源氏方に海の淺瀨の秘密を知らせたと云ふことが、海の向ふの敵の軍に這入つたら――大變だ。わしは震えた。と同時に決心は直ぐについた。――軍人の素早い、最後のたつた一つの決心だ。――わしは無言で若者を摑んで、引寄せた。左の乳の下を二刀刺すと倒れた。それをその儘海に沈めて歸つたのだ。

老媼、――海は何處のどの邊に沈めたのでございます。

盛綱、――あの向ふに見えてゐる浮洲の岩の、少し手前になつた水の深みに沈めたのだ。

老媼、――廣い海の中で、死骸一つ沈める場所にことは缺かぬ筈が、それはまた何と云ふ悲しい選び方でせう。あの岩の蔭は、息子が何處よりも好いて釣をしてゐたところでございます。夏はあの岩の上から、强い、男らしい身體を海に躍らして、泳ぎました。釣をすれば誰よりも多く釣りました。泳げば誰よりも上手に泳ぎました。――皆んなから愛せられて、褒められて、母に孝行を盡してくれたあの可愛い息子、たつた一人の息子、不運な息子、もう一度歸つて來ておくれ、その岩の下から歸つて來ておくれ。水の底から現はれてもう一度姿を見せておくれ、顏を見せておくれ、聲を聞かせておくれ。――これ程呼んでも歸つて來ないのは、水が深くてわたしの聲が聞えぬためかも知れぬ。いいえ、浮洲の險しい岩と岩の間に足を締めつけられて、苦しんでゐるのかも知れぬ。それとも胸に刺された刀の傷跡が痛むのか。――よし、よし、お前が來られなければわたしが行きます。わたしが行つて介抱してあげます。お殿樣、さあ私をも息子と同じやうに殺して下さいませ。而して同じやうにあの浮洲の岩かげの深みに沈めて下さいませ。

盛綱、――お前は本氣に氣が狂ふたのだな。

老媼、――氣は狂ひはいたしません、正氣のお願ひでございます――いいえ、矢張り氣が狂うたのかも知れません。さうでございますとも。氣が狂ふのは當り前でございます。自分の可愛い息子を殺した憎い人殺し奴は殿様となり、殺された息子は――その憎い人殺し奴を殿様にしてやつた當の本人は、何の御恩賞にも預らないで、怨み死に海の底に沈んでゐると云ふ怖ろしい目に逢うて、氣の狂はぬ母がございませうか。さあ、息子を歸して下さい。元の通りの姿にして歸して下さい。――でなければこの私を殺して下さい。

盛綱、――どうか、頼むから息子のことだけは諦めてくれ。佛家の云ふ因緣ごとだと思つて諦めてくれ。――その代り、その償ひはどんなことでもしよう。息子に約束した恩賞は、勿論お前のものだ。その他何なりと望んでくれ。わしの富を傾けても、償つてお前を滿足させて上げるから。

老媼、子供を失うた母のうつろな胸が、富や、榮華で充たさるものなら――。私には何んにも欲しいものはございません。

盛綱、――ではわしはあの若者のために寺を建てよう。出來るだけ立派な寺を。高い塔も築かう。而してあらゆる有難い佛像と經文をその中に一杯に納めよう。而して都方から高德な坊さんを迎へて、お前の息子の冥福を祈つて貰はう。

老媼、――私には千人の坊様の有難いお經より、あの息子のおつ母様と呼ぶ一と聲が聞き度いのでございます。――

盛綱、では、わしはどうすればよいと云ふのだ。どんな償ひをすればお前は滿足するのだ。

老媼、――人の生命の償ひを、生命より外のもので償つて、すまさうとなさるが、間違ひでございます。

盛綱、――わしに死ねと云ふのだな。

老媼、――あなたの死ぬることはあなたの御自由でございます。――

盛綱、　――いや、わしにはもう死ぬる自由はない。わしの生命は、わしの仕事のために必要なのだ。運命から選ばれた仕事のために。――わしは長く生きなければならない。健康で、富んで、豐かな土地と、聰明な家來と、善良な人民を有つて生きなければならない。――お婆さん、まあ聞いてくれ。わしは餘り戰爭に馴れすぎた氣がしてゐる。近頃頻りにそんな氣がしてゐる。敵と戰ふことが、忠義の一念からでもなければ、強い功名心からでもなければ、戰爭そのものに有つ興味からでもなければ、敵愾心からでもなければ、單に血に勇む興奮からでもなくなつた。たゞ習慣で戰つてゐるやうな氣がして來た。生活の方便としてだけで戰つてゐるやうな氣がして來た。自分と同じ仲間の人間を、一人でも多く殺し、一人でも多く傷けることのみを考へてゐる生活、それが自分自身の生活であることを思ふと、わしは怖ろしくなつて來た。陣屋で一人きりぽつねんとしてゐる時なぞわしは不思議な淋しさに襲はれ出した。その後では又その反動で、ひどくいら／＼して來る。溜らなくなつて敵の中へ突進すると、敵はその勢ひに怖れて逃げ出す。世間はいよ／＼わしを勇敢な武將とした。わしの心は一層憂鬱になつた。わしは幾度落着いた、休養の生活を望んだらう。武器と血の間から逃がれて、犯すこともなければ、犯されることもない、自分の領地の靜かな城の上から、實りのよい田畑や、繁昌してゐる城下町を見下ろして樂しむと云ふことを、何遍空想したゞらう。この兒島の半島の一國は、わしのその夢の國だ、運命に選ばれた約束の地だ。わしは此處でわしの長い夢を實現させなければならない。地上に存在する國の中での、最も優れた、最も美しい、最も平和な、最も完全な國を造りあげなければならない。それが完成されるまでは、わしは死ねないのだ。その目的のためにわしの生命は貴い生命だ。

老媼、　――あなたの生命が貴いなら、私の息子の生命も貴いのでございます。あなたに生きる目的があれば、私の息子にも生きる目的があつたのでございます。

盛綱、　――さうだ、違ふのはたゞその目的が大きいか、小さいか、だけのことだ。

老媼、　――大きいと、小さいは問題ではございません。問題は目的に對するその人の態度でございます。私の息子

は正直で、素直で、神様を崇め、人を愛して參りました。漁をも一生懸命いたしました。何一つ邪念も有たぬ眞面目な、まつ直な人間として生きようとしてをりました。この息子の打ちはまつた心は、あなたの夢の國に有つ心と同じ心でございませんか。劣りも、勝りもない心ではございませんか。

盛綱、――心と心、――生命と生命。

老媼、その心をあなたはどんなに無造作に引き裂いたか、またその生命をどんなに殘酷に絶ち切つたか、今一度考へて御覽なさいませ。いゝえ、いゝえ、一人の心、一人の生命ではございません。何百人、何千人、何萬人の心と生命が、これまで至るところの戰場で、あなたの手にかかつて亡ぼされたかと云ふことを考へて御覽なさいませ。それも恐らくあなたの目的のために必要であつたと仰しやるのでございますか。さう云ひ切つて、氣は咎めないのでございますか、怖ろしくはないのでございますか。

盛綱、――怖ろしい必要――

老媼、――どんな美しい國をお拵へになつても、どんな立派な町をお建てになつても、どんな見事な政治をお布きになつても、その舖石一つの下には、それだけの死骸が血身泥の儘で埋まつてゐることをお忘れなさいますな。またその死骸の一つ一つに、私のやうな母親があり、妻があり、子供が有ることをお忘れなさいますな。而してこの私が呼ぶと同じ聲で、人殺し――とあなたのことを呼んでゐることをお忘れなさいますな。――あゝ、呼んでをります。あの通り呼んで居るのがあなたの耳には聞こえないのでございますか。人殺し――人殺し――夥しい人聲で呼んでゐるではございませんか。あゝ、息子の聲がはつきり聞こえます。――あの誰よりも悲しさうな、誰よりも切なさうな聲で呼んでゐるのが、私の息子でございます。三月二十五日の晩に、浮洲の岩かげで刺し殺された時も、屹度あの通りの聲をあげたのでございませう。何と云ふ苦しさうな叫び聲でせう。――息子や、息子や、其處で迷うて身を苦しめて居るより、早く出ておいで、水の底から出ておいで。お前の淺間しい。血まみれな姿をこの人に見せておやり。その醜い傷口をこの

人の手に觸らしてお呉り。而してお前の心臓の下を、この人の刺した二刀がどう貫いたか、血がどう流れたか、話しておやり。でなければこの人は自分の罪を本統に思ひ知らうとはしないのですよ。――さあ現はれて來て、母に力を借しておくれ。一緒に責めておくれ。呪つておくれ――修羅道のまん中に呪ひ落してお呉れ。

盛綱、――怖ろしいことを云ふな。怖ろしいことを云ふな。――南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

老媼、人殺し――人殺し――

盛綱、――誰か居らぬか。――この氣ちがひ姿を引つ立てろ。

老臣と數名の兵士が出て來る。兵士等は老婆を奥へ連つて行かうとする。

盛綱、――手荒いことはするな。――病氣なのだから。女たちに優しく介抱させてやれ。

兵士と老媼退場

盛綱、――左衛門、聞いたか。

老臣、――聞きました。

盛綱、――わしにはもう何んにも聞いてくれるな。評もしてくれるな。たゞわしの命ずることだけを聞いてくれ。

左衛門、――何なりとも。

盛綱、――わしの宣言の高札を皆んな取り捨てるのだ。一つの町、一つの村も洩らされてはならない。一本の高札も殘されてはならない。取り捨てた杭の後も――埋め度い。――わしはまた戰に行くよ。

老臣、――何日、何時でもお伴がいたされます。――馬は厩で威勢よく鳴いて居ります。武器は研かれてきら〳〵してゐます。――兵士たちも大分退屈いたして居るようでございます。――

盛綱、――さうか。――今度こそ誰かわしの首を取らぬかなあ。――一つ、若い、氣持ちのよい奴に功名をさせてやりたい。――(幕)

――禁無断上演――



よぼよぼ順禮

北原白秋

一

春ももう半ばになつた。

相州小田原近在は水之尾の山中松緑山東照院と云ふ貧しい山寺に、もう彼是半歳の餘も、その妻と佗住ゐをしてゐる、これも貧しい新詩人の三原素春はさうしたとある日の午後、その南向きの表書院の椽側にぬくぬくと日向ぼつこをし乍ら、恰度今が眞盛りの寺内の櫻や、その向ふの簡素な枯れ枯れの孟宗竹などを、たゞぼんやりと、心ゆくまで眺めてゐた。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ、
春はふけ、春はほうけて、
古ぼけた草屋の屋根で、よ、
鳩が啼く、白い野鳩が、
啼いても、けふ日は逝つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ、
庭も荒れ、荒るるばかしか、
人も來ぬ葎(むぐら)が陰に、よ。
茨(ばら)が咲く、白い野茨(のばら)が、
咲いても、知られず、散つて了(しま)ふ。

素春は物靜かに、かうした曾て自分の作つた詩の一二聯を口咏(くちずさ)みながら、あの去年の春も寂しかつたと獨で破れ着物の袖を掻き合せて、また、繚亂と咲き枝垂(しだ)れた古い吉野櫻の花の梢を振り仰いだ。その上には空が蒼く晴れ亙つて、麗かな溫い午後三時頃の日射(ひざし)は、あらゆる寺内の角芽ぐむだ雜木や、鮮かな綠の苗生や、物寂びた墓石、ココア色のよい濕(しめ)りを含むだ畑の土やに降りそそいで、まことに春も今が酣らしく思へた。その蒼い空の圓天井を振り仰いでゐると、何處からとなく白い綿見たやうな雲がぽうつと湧き出して來て、それがまた、門前の喬い巨松の群立(むらだち)の上を薄るるともなく輕く薄れて消えかかると、その雲の中から小さな千鳥か雀かの數千羽が、まるで豐花火の銀星のやうに燦々と四方に亂れ落ちてゆくのも見えた。長閑な、緩やかな浪の音までが聞こえて來た。その浪の音が、山下あたりの鷄の聲や犬の聲などと交つて、いかにも浮世の春景色らしい、人里近い物戀しさをもそそるのであつた。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
空は、空は、いつも蒼いが、

わしや元のねんねちやなし、よ、
世は夢だ、野芙の夢だ、
夢なら、醒めたら消えて了ふ。

あゝ、かうしてねんねえの昔も消えて行つて了ふのだ、何もかもがと思ふと、また彼は、悠久不變の蒼い蒼い大空の景色を見上げながら、溜らず心細くなつて、思はずはあと奥深い溜息を一つ吐くと、くるりと寝そべり乍ら、今度は後ろ向きに兩手でその頬を支へて見た。頭のうしろの方で甘酸ゆい花のかをりがした。赤茶の蘇枋か、黄色い山吹の花か、それとも金絲花の匂か、何かは知らぬが幽かに潮つた海の鹹風にそよいで來た。何の木の花とも知れずにほひかな。さうした神秘な芭蕉の一句が、この時彼の頭の中に光つて消える、と、また、輕い翅を鳴らして、その薫りのあたりを飛び廻つてゐる細蜂の有るか無いかのつぶやきまでが、彼の投げ出した足の裏の下から動いて來た。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ。

おゝ、ほろほろと、それはたゞ口の中で何と云ふ事なしに呟いてゐるに過ぎなかつたが、呟いてゐるうちに、彼はもうその歌聲に曳き入れられさうになつて、その地藏眉の、眼のきれの長い、桃花心木色の下膨れの童顔を、いよいよ澁く引き歪めて來た。さうして何だかさうしてゐれば、了ひにはその大きな兩つの眼の底から、まるで子供のそれのやうな涙の玉でも轉がり出さうに思へるので、たゞそれを強ひてまぎらさうとするかのやうに、片手を伸べると、そのつい目の先に吹かれて來てヒラヒラと動いてゐる薄紅い落花の一二片を爪ぐつたり、つくづくとその鼻に押し當てたりするのであつた。が、さうすればするほど、猶さら陰欝な重い心持からどう爲やうもなくその後ろ頭を壓しつけられるばか

りであつた。

彼はしきりに、上向けた彼の兩足を膝のところから曲げて、平べつたい舌平目のやうな、白い兩つの蹠をかはる〴〵上げ下げしてゐた。

彼はふさふさとその長髮を眉の上まで波うたせてゐた。さうして彼の着てゐる、彼の妻のお祖母さんのお古だと云ふ一樂織(いちらく)の破れ着物には、肩と兩袖とに藍や黄染のモスリンのつぎはぎをしてあつた。どう見ても紀州根來(ねごろ)の山中に閑居してゐる眞田幸村と云つた如何にも大名の落ちぶれらしい風體であつた。その背中がぽかぽかと温まつて來た。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ
おお、ほろほろ。
昨日(きのふ)まで堪へては來たが、
明日(あす)ゆゑに今日(けふ)は重し、よ、
見るもいや、聞くもいやなり、
それでも獨ちや泣けて了ふ。

全く獨ぢや泣けて了ふ。さう思ひ乍ら彼はチラと、部屋の内部を覗いて見た。が、彼の眼の外にはたゞ濃い紫の影ばかりが擴がつて、その紫の靄の中には還時(さつき)空に見た無數の銀星ばかりが燦々と散り亂れてゐた。あまり長く日向ばかり見てゐたので眼が狂つたのだとは思ひ乍ら、それが彼には溜らなく寂しく思へて、思はずまた眼を瞑つた。

「あなた、何をしてゐらつしやるの。」

その銀星の光の中から、突然、女の聲がして、たゞまた闃寂(ひつそり)と紫の影ばかりがもやもやした。

「日向ぼつこ。」
「何か歌つてらしつたわね。」
「あゝ、あのほろろん、ほろろん。」
「まあ、あんな寂しい詩を、厭ね、あなたは。」
「いいさ、いいさ。」
「いいさぢやありません、私はあれを聞くともう溜らなくなつて、ほろほろして了ひますわ、それでなくてさへ寂しいのに。」
寂しいのは私の方がもとだと云はうとしたが、素春は凝(じつ)とそれをこらへて、またくるりと頭を外の方へ背(そむ)けて、その後ろ頭を引つ摑へるやうにし乍ら、まじまじと眼を開くと、倏ち雨のやうな熅々とした外光に射りつけられて了つた。
「ね、貴方はどうしてこんなに不運でせうね、何かにつけてケチばかりつけられたり、もう邪魔物扱ひにされて、生きてる內からその將來に呪ひをかけられるなんて、口惜しいぢやありませんの、ここにもこんな非道い事が書いてあるのに、貴方は知らぬ面をして、いゝざまね、日向ぼつこばかりして。」
「何が書いてあるのかい。」
「非道い事を。一寸讀むで見ますよ、よござんすか、もう素春の時代は過ぎた、彼の今後は最早、彼が花やかな昔日の幻影を追ふにのみ生きる幽靈に過ぎないであらう。ね、隨分ぢやありませんの、まだこんなにお若いのに幽靈扱ひをして。」
「いゝさ、幽靈扱ひでもさしとくさ、構はないよ。」
「構はないよとお仰つたつて、あんまり失禮過ぎると思ひますわ、私はこんな事を聞くともう病氣になりさうです。え

え、弱氣になりさうです。憎たらしいぢやありませんの。まだ三十そこそこでもう墓標を立てられるなんて厭な事ですわ、これぢや私たちはどうなります。」

「どうもなりはしません。墓標を立てるなら立てさして置くさ。幽靈なら幽靈でいいさ。その私の幽靈の後を追つかける人もあるからね。で無ければ、佛蘭西の詩人たちの幽靈を追つかけてるか、ホイットマンやトラウベルの幽靈を追つかけてる人もある。幽靈にでもなればまあ仕合せさ、生き乍ら影も分らぬ人も居る。」

「ほほ、そりやさうですけれど、貴方は幽靈で我慢ができて。」

「まあお待ち、私は現在生きてゐるのだよ。たとへばだね、私を亡者扱ひにしたところで、私は何度でもノコノコ墓場の下から飛び出して來るよ、大丈夫さ。こんなにまるまると膨れきつてゐるぢやないか。」

「ほんとに貴方は豚見たいね。」

また、ヒステリーが初まつたと、紫存は五月蠅さうに一寸落花の一片を弾いたが、

「豚はひどいね」。と振向きもしなかつた。

「でも隨分野呂間だわ、そして少し神經遲鈍ね、お人よしで。」

「お人よしでもいいさ。そんな事には少々神經遲鈍の方がいゝ小面倒だよ。」

「よかありません。利用されたり、つけこまれたり。」

「利用するなら利用されるさ、つけこむで來るならつけ込ませて置くさ、それで私がどうならうと云ふのぢやなし。」

「騙して來ても。」

「騙しに來るなら騙されてやらうよ、騙す方では一生懸命だからね、あれも正しくは無いが美くしい藝術を買つてやるさ、騙された振をしてね。」

「結局損ぢやありませんの、騙されたら。」

「損な事は無いよ。少々お莫迦さんかも知れんが、別に私の良心に病む事は無いからね。騙すより本氣に信じて騙される方がどんなに正しいかわからない。騙した先方が恥ぢるばかりさ。私は安心して騙されるよ。然し、ね、本當に底の底まで騙しぬいて呉れる人が無いから心細いよ。」

ほんとに、それは心細い事であつた。素春はふと、足の上げ下げをやめて、遠い破れ山門の方に凝つと眼を放つた。その山門の敷石を超えて、何だか白いものが此方に動いて來る。よく見ると、それは此の寺の白い鷄の一羽であつた。それは恰度御墓參りにでも來る人間のやうに殊勝らしく小腰を屈めて、コツ〳〵と長い舗石道を首を振り振り傳つて來るのであつた。

「それはさうとこの頃あまり御墓參りは來ないやうだね。」

「御墓參り、誰の御墓參り。」

「素春の御墓參りさ。幽靈を吊ひにさ。」

「まあ、厭な、誰が。」

「閑人がさ、あつちこつちの。」

「ほほ、御墓參りですつて、貴方の。」

「でもそれはさうぢや無いかね、Xだつて盛んに利己的な阿諛で日參り夜參りだが、內實は矢つ張り私を死人扱ひだからね、そしてその死人を存分に利用しさいすればいいのだからね。そして自分はこれからだが、貴方はもう功成り名を遂げた死人だから、今後は飽迄死人になつてゐて呉れなくちや困る、出て來られちや邪魔だといふから、隨分虫のいい話さ。」

「それはさうですわ、臆面もなく貴方に向つて明治詩壇第一の功勞者だなぞと祭り上げて置き乍ら、その言葉の裏では、つまりは大正の時代には何の價値も無い廢物だと云ふ事に爲てゐるのだから、よく貴方は腹がお立ちにならない事ね。

「いい氣持はしないさ、然し腹を立てるだけ莫迦々々しいぢやないか、ありやお阿諛の積りが一寸やり損つて本心をさらけ出したといふ格だよ。面白いぢやないか。ほんとに私を何にも眼の見えぬお人よしだと思つてゐるから、お人よしになつてゐやうよ。」

「ふふ、なつてゐなくたつてお人よしよ。貴方は面白いかも知れないけど、私は御免ですよ、今度機會があつたら一度はビシリと云つて置かうと思ひます。さういふ人には。」

「御墓參りならお斷りしますつてかい。」

「ええ。」

「莫迦な、折角御參りして吳れるものを。」

「それでも、甘く見たら承知できません。」

「承知して置くさ。矢つ張り可愛いいぢやないか、それに御墓參りの積りばかりでも無いだらうよ。嬉しがつてあんなにして來るところを見ると、矢つ張り私と遊びたいのだらうよ。遊びに來て吳れるなら、本當に氣持よく遊ばせて歸さうぢやないか。」

「だから、貴方はお目出度いと云ふんです。」

「いいよ、御目出度たくとも。それに無理に言葉に出して何も說法しなくとも、今にわかるよ、默つて莞爾してゐても說法はできる。見てゐて御覧、今に次第にわかつて來るから、わかつて來たら耻かしくてたまらなくなるから。」

「尤も、私にも厭な面はできないけれど。私だつてあまり狹量な事はいいとは思つてませんわ。」

「だからさ、兎に角、無やみに毛ぎらひするんぢやないよ、何でも、みんな人間同志は可愛がり合はなくちやいけないと思ふね。さう思はないかい。」

「そりやさう思ひますわ。でも貴方の人柄や將來に對して少しでも侮蔑した言葉を吐かせるのは、私としては許して置

けませんわ、どういふ人であらうと。」

また、彼女は躍鬼となつて、向ふの茶の間で縫針をし乍ら、蒼白い痩せ細つた頬を振り上げ振り上げしてゐたが、溜らなくなつたか、つと云つて來た。立つた儘、膝頭で彼の後ろ頭を小つぴどくぐいぐいとこづき廻はした。

「お馬鹿さん。護謨人形、赤んぼ、ほんとにしつかりおしよ。」

「あ、痛、痛いよ。」

「痛いなら少しは性根をお入れなさい、みんな貴方を馬鹿に爲過ぎるぢやありませんの。口惜しか無いのですか。打ちますよ。」

「打つたつていゝよ。いゝ氣持だよ。もつと叩いてお與れ、恰度肩が張つて困つてゐるところだから。」

「爲やうの無い方ね、貴方は。」

「まあ。」と呆れたやうに彼女はまた膝を打つて、彼の永くなつた身體をつゝと押しのけると、其處へペタリと坐り込んで了つた。

素春も慌てゝ起き上つたが、何かしら眼の底が痛くなつて、キチンと坐り直すと、彼の妻と膝を並べて、今更らしく境内の櫻や、紅い杏の花や、墓場裏の椿の耀きやを眺め廻すのであつた。

鴉が二三羽かをかをと向ふの松が枝から離れて、井戸端の孟宗籔の上を斜め下りに渡つて行つた。その孟宗の笹葉は細かに風にきらきらして、盛んに何かのお饒舌りでもするかのやうに、萬遍なく金と銀との日の光を振りこぼしてゐた。その孟宗の幹の間からは隣の畑の黄色い菜の花も見え、白い蝶々もその花の間を輕く羽ばたいて留つたり、ヒラヒラと飛び立つたりしてゐるのであつた。

素春は寂しさうに彼の妻を振り返ると、笑つて彼女に云つた。

「いゝぢやないか、人や世間はどうでも、二人でほんとに信じ合ひ理解し合つた、かうした愼ましい生活を爲てゐるの

は。ね。さうは思ひませんか。これ信心丈夫な事はあるまいぢやないか。」

　さう云はれると、彼の妻もしみじみと眼を落して、正しく坐り直して、本當の虔ましい凜とした姿に返つた。さうしてから答へるのであつた。

「それは、私も安心はしてゐますわ。貴方のお仰る事も本當に有り難い事だとは思つてゐますわ。それに、私は貴方が決して此の儘朽ち果てる方では無いと思ひますわ。(またそんな事があつてたまるものですか) 然し貴方を私が病身だからと云つて、いつまでかうした山の中に埋もれさせて、花やかな夢から島流しにされたやうなこんな寂しい境遇にゐていたゞき度くはありませんわ。お願ひですからもう一度東京へ出て本當に活動して下さらない。是非さうして頂戴、でないと全く私が濟まないのです。」

「東京、東京へ出て、何を爲るのだね。」

「詩をお作りになるのです。盛んに。」

「詩なら、此の山の中でも出來るよ。」

「でも、若い身空で閑雲野鶴だなんて云はれるのは厭ぢやありませんの、老いぼれてでも了つたやうに思はれて。」

「いゝよ、そんな事位はどうだつていゝよ。まだまだ貴女の病氣だつて充分に癒つたとも云へないし、それに今のやうな貧乏では却つて東京へ出たところで苦勞かけるばかりだし、當分山の中でも辛抱爲てゐやうよ。慌てるには及ばないさ。」

「辛抱がお强いのね、貴方は。」

「强くとも强くなくとも、今の私としては決して東京なぞへ出るには及びません。かうやつて遠のいてゐるからこそ、文壇や詩壇の馬鹿騷ぎがハッキリとよくわかるし、時代思想の推移と云ふ事も却て手に取るやうに觀察できやうと云ふ譯では無いか。なまじつか、あんなどさくさまぎれの中に飛び込んで行つたところで、ただ不愉快な土埃や馬の糞でも

かぶるばかりで、何が本當のいい生活ができるものかね。」

さうして素春は次のやうな彼の所信をぽつり〳〵と、それも幾らか吃り乍ら、時々はまた紅い顔をし乍ら、彼の妻に說いてゆくのであつた。

眞のいい藝術と云ふものは決してあの馬鹿騷ぎの中からは生れて來るものではない。さうして眞のいい藝術と云ふものは、靜かなつつましやかな溫和しい感激の底から、恰度溪間の岩清水のやうにこん〳〵と穩かに湧き出して來るもので、それにこそ本當の淸冽さも澄徹さもあり、眞の信仰も安心もある。眞の大勇と云ふものもさういふおとなしい安心の底に根を据ゑてこそ初めて溢れて湧く。眞の沈默は金砂のやうにその水の底に光つてゐる。愛憐の心もその底から本當に金砂を徹してにじみ出して來る。あの粗暴や我武者な言說若くは行爲の上からいくら人道を叫び愛を叫び、巧みに時機に投じて群集の喝采を博し得たところでその實さういふもの位孱弱で、臆病で、僞善で、不正直で、不純で無雜なものはあるまい。またあれ位利己的な僞愛もあるまい。それは氣まぐれにひよつとかすると大洪水をも起すだらう。そしてその洪水の流れが、どうかすると、一時は眞の本流のやうにも見えるだらう。然し時が來れば、その本流だと見えた流れのあとにはただ亂脈なごろた石や木片や塵埃ばかりが殘つて、その跡からは、また元の通りに森閑とした岩淸水のみがこん〳〵と岩を傳ひ、草を濕してゆくものだ。何にしても現代式に圖々しくて、世間師で、附け燒刃で、ジャアナリズムの幇間で、見え透いた阿諛や、酒間の交際でもうまくやるとか、駈け出しの若い身空に恥かしくもなく安協批評や相互賞讃や人氣取りの芝居でも立派にうてる丈の度胸さへあれば大概の小才子は作家だの詩人だのとのさばつて步るける今の時世である。さうかと思へば眞に實力があり相當の蘊蓄もある人で、ただ氣が弱く心が綺麗すぎ、さうした世間的な交遊も無いばかりで隨分と埋れ木になつてゆく人もある。だから今の文壇詩壇と云ふものは隨分不公平で、玉石混淆と云つたらこれ位甚だしい現在はあるまい。それに高材逸足の眞の鑑賞眼を持つた眞の意味での理想的の文藝批評家が一人でもゐて吳れたらと思ふが、それさへ今では覺束ない。然し、時は自然に陶汰して吳れる。矢つ張何と云つ

てもいいものしか殘らない。それを思ふと安心していい。最後の勝利は眞にいい素質を持ち、眞にいい表現を持ち、眞に虔ましくおとなしやかに、何事をも堪へ忍ぶ眞のいい藝術家の手に歸する。で無ければ何が藝術であらう、何が藝術の德、美、眞、善、妙と云へるであらう。何が天才であらう。何がまた名人であらう。

また、輕薄で冷酷極まる世間の人氣といふものが果してどれ丈の正鵠をうがち、またどれ丈の信賴をも贏ち得るものか、槿花一朝の榮と云ふけれど、今の流行作家の地位ぐらゐ危險至極のものはあるまい。私なぞはさういふ人氣に乘せられて隨分と有頂天になつたものだが、その有頂天の一瞬には既に大墜落の禍機が同時に胎むでゐた事を後から氣がついた時はもう既に遲かつた。だからああいふ有頂天になつた人たちを見ると、私はもうハラ／＼する。私はもう詩では墓標を立てられた人間だから、(島國根性と笑つちやいけない、このケチくさい日本では詩人は三十小說家は四十の坂を越えたが最後倏ち墓標を用意せられるものだといふ事は覺悟してかゝらなければならない。それはコツコツと丹念に鍛ひあげ苦勞し拔いて來た先進たちがさうであるから、生若い一夜漬の流行作家などはせいぜい一二年の壽命だと思うたがいゝ。)殊に此頃のやうに。本氣の苦勞もする事か、何が何でも一足飛びに、一時でも早く世間に出ればいいといふ風潮ではね、一にも金二にも金で。一時の榮華さへ得ればいゝのだから、さういふ輕薄な功名がいつまで永續さするものか。私ももう安心して氣永にゆつりと、我を張らず、名聞心も去り、これからは愈詩人として人間としての其の自分を省察し、眞に自分から少しづゝでも此の汚れ腐つた自分と云ふものを救ひあげなければならない。私は私自身を眞に救ひあげさへしたら、その事丈で多少とも人をも世間をも救ふ事ができさうに思はれる。今の私には決して大きい事は云へない。私くらゐ自分の醜さ弱さ小ささと云ふものを痛感してゐる人はあるまい。それだからこそ私は恥ぢてばかりゐる。苦しんでばかりゐる。祈りの心で自分と自分で洗ひ淨めてばかりゐる。どうして今の私が見え透いたいゝ加減な賞讃やお上手に乘つて有頂天になり得やうか。どうしてまた今の私が世間の陰口や冷嘲や輕侮やなどに對して飛びかかつて措つたり、慌てて酒間の八百長を敢てしたり、弱氣を出して悄れ返つたりする氣になり得やうか。私はコツコツやつて行

から、地味に執念强く、どう考へても三日天下の流行作家にはなりたくないものだ。私はかうやつて地道に歩いて行つて、四十位になつたら本當の詩と云ふものが一つや二つはできさうにも思はれる。五十にもなつたら多少の世相もわかつて、どうにか小説らしい小説も書けさうに思はれる。辛抱する事だ。苦業しぬく事だ。さうしてせいぜい長生をする事だ。何事によらず最後の眼を瞑る時までは一生修業だと思はなければならない。現世は修業だ。ただ生きてゐる限りは自分の靈を少しづゝでも高めて行つて、本當に眼を瞑つた時の一瞬本當に自分の靈をして高く飛揚させる丈の修業をして行かうと私は思ふ。地上からたつた二三間ばかししか羽ばたき上れぬ鷄と、高山の巓から颯爽と天空へ飛翔する鷲の高度とはどれ丈け違ふかを考へなければならない。

人間、人間と云ふ此の言葉くらゐ甘へものの人間に取つて融通のきく簡易な自家辨護の武器はあるまい。然し人間だからこそ、惡を除き、醜を去り、少しづつでも、たとへ一歩づゝでも宇宙の神靈へ通ずる眞實の正しい一路を歩まねば眞に許されないものでは無からうか。それを思ふと私は身の毛のよだつやうに慄然とする。よくのめのめと私のやうな醜惡な人間が天日の下に安閑と生きてゐられるものだ。私は必死に私の中の惡と醜とを剔り出さなければならない。もつと私はそれらを凝視しなければならない。もつと私は私と戰はなければならない。もつと私は私を苛酷に、血まみれに取扱はなければいけない。それでなければ私はとても救はれさうにも無いのだ。私は今さういふ身垢と汚辱とにまみれ盡してゐる。この私をどうしたらいゝのか、所謂社會の改造も急務かも知れない。然し私は私の靈魂の淨掃を先づ敢て爲なければ、高が私たちのこの小さな家庭をすらまだ白い蓮華のやうに清淨化し得てゐないではないか。人を救ふどころでは無い。

それに詩に就ても私は隨分永い間苦しむで來た。

それは貴女もよく知つてゐる。あゝ、私は決して天才では無からう。さういふ自分を天才視するほどの驕慢ゝ自尊も今の私にはさら〳〵無くなつて了うた。全く身の程を思ふと恐ろしくなる。が、何と云つても私は詩を離れて生きてゆ

けない人間だ。端くれでも矢つ張り私は藝術家の一人だ。藝術家の藝術に奉仕する苦しみと云ふものはまた格別なものだと云ふ位は知つてゐる。あの葛飾にゐた頃にしろ、私は字を削り句を削り、一念に彫心鏤刻の極を盡した、が、了ひには、思ひつめた「白金の獨」のやうになつてたゞ潸々とした涙ばかりが頬を傳うた。何にも云へなくなつて、たゞ、うむとかおむとか云へばそれでよかりさうにも私を思へて來た。然しそれつきりになつては詩が無くなる。そこから切端（せつぱ）つまつて溢れ出したので詩になる。詩は詩の形で表現されなければ詩とは云へない、結局は表現せなければならぬないのだ。その表現にしてからが、無論最上最的確のもので無ければならないのだ。表現などはどうでもいゝと云ふ人があるが。それはあまりに詩の德詩の妙といふものを知らない人の言葉である。一枚の木の葉を畫くにその一生を以てした貧しい畫家もあつた。たゞ一點をうつ爲めに十年の酸苦を嘗めた大愚な畫家もあつた。そこまで行かなければ眞の藝術とは云へない。眞の天才眞の名人とは云へないではなからうか。詩の德といふものはそれほどに貴くてそれほどに靈驗（いやちこ）なものだ。それを僅かでも私が知つてゐるからこそ苦しむのだ。愛の藝術と云ふものは決して愛そのものゝ概念を蕪雜に演述したものでは無くて愛そのものを藝術として眞に體現したものに外ならぬ。空力み（からりき）では何にもならないのだ。

つくづく慕はしいのは芭蕉である。光悦である。北齋である。利休である。遠州である。また武藝神宮本玄心である。私もどうかしてあそこまで行きたい。風流が風流に了らず、眞に自然に還つて、一木一草の有るが儘におのれをその中に置く、さうした自然に任せた、あなたまかせの境地こそ眞の藝術の極致では無からうか。私はその心を以て心としつゝある。さうなりつゝある。

私の此の超脱的閑居の精神もそこにある。人から見れば極めて弱氣な消極的なものにも見えやう。然し私に取つてはこれ以上の積極的生活は無い。見てゐてくれ、どちらが眞に光つて來るか。

私がかうした生活は少くとも此の現代と逆行して見える。然し、現代に生きてゐる限り私は現代の人間に逆ひない。少しも逆行は爲てゐない。あらゆる現代の薫染を受ける。薫染は受けるがその爲めに胡麻化されはしない。殊に思想的

推移の狂激な現代に於ては、ともすると不時の旋風に捲かれた蜻蛉のやうに眼玉をクルクル回轉さしたゞけで何一つその思想の本體さへ抓め得ない人が少くない。とすると、稍離れて徐に靜觀してゐるに如くは無い。さうして心を不易に遊はしてゐるに如くは無い。時代思想は倏ち變轉する、流行は一時に過ぎない、あの奢侈と淫佚とを極めた元祿の思想は赤穗義士の討入に依つて、倏ち敵討の一大颶風を捲き起して了つた。然し今はどうであらう。奢侈も敵討も倶に煙散霧消して、その跡にはただ一代の俳聖芭蕉のみが燃然として曉天の金星のごとく殘つてゐるでは無いか。

兎に角芭蕉が入寂してから可なりな時代が私達との間を隔離して了つた。世相も幾變轉してゐる。然し芭蕉の生々とした靈(たましひ)の動悸は一足飛びに後代の私の胸をうつ。ここを考へてくれ。私の此の胸の動悸が一足飛びに、また隔絶された後人の胸に或は直通するかもわからぬといふ事を。高が五年や六年詩を作らぬとて、いや、發表しないとて、直ちに拜み倒したり幽靈視したりするケチくさい人達の狭量と輕薄とを憐むでやるがよい。

それからまた、此の頃ではさうした一方に、摯實なる一團もあつて、桃青會といふのがある。聞くところによると、現代の浮華輕躁を歎いて、かの閑寂の聖芭蕉を尊崇して、何事も我等は芭蕉主義を以て生活せなければならぬと叫むでゐる。私にも入れと云つて來たが(いやその前に、私が知らぬうちにもう會員にして了つてゐたが。)面倒くさいから默つてゐる。芭蕉と共鳴するのはいい、研究するのはいい。然し他の生活方式を以てその儘自分の主義とするのはいけない。私は飽まで三原素香で生きてゆく、主義といふ小さな繋縛を作るのは厭な事であるが、強いて主義とするところを求められれば私は飽迄素香主義で生きてゆ〱と云はふ。

「そこで。」と彼は久しぶりの、それも愈ぼつつり〱した口不調法の長廣舌を止めて、また寂しく笑ひ乍ら、彼の妻の方を振り返つた。さうして、

「貴女(あなた)はかういふ一徹な私に連れ添つて、さぞ辛い事ばかしだらう。隨分苦勞もかけた。然しよく私と一緒に苦勞して吳れた。此の親からも、弟妹からも、無論世間からも眞には理解してもらへず、また作品以外には自分から一と思ひに

理解して貰うやうな手軽な手段も取らず、ただぬらとして馬鹿のやうに堪へ忍んで來た私をよく〳〵理解して一緒に堪へ忍んで呉れた。私は感謝する。私はいい妻を得た。貴女(あなた)が有るばかりで私の生活もいよいよ光つて來るやうな氣がする。ありがたい。」

かういふ意味の言葉も云つた。それから、あの菜根譚の冒頭(はじめ)にも、かう云ふ事が書いてあるだらう。道德を棲守する者は、一時に寂寞たるも權勢に依阿する者は、萬古に凄凉たり。達人は物外の物を觀、身後の事を思ふ。寧ろ一時の寂寞を受くるも、萬古の凄凉を取ることなかれ。さうではあるまいかね、藝術の中に本當に住まうとする人も之と同じだ。一時は寂しからうが、貴女も辛抱して下さい。」

さう附け足して、素谷は櫻の空の寂しい松風の聲に暫らく耳傾けてゐたが、それから、彼はまた徐ろに言葉を次いだ。

「何と云つても矢張り私は寂しいよ。此の頃は殊に寂しい。かういふ氣持を春愁とでも云はうか、櫻が咲いて、日が朧かで、そよ〳〵と風が花の香や海のかをりを吹いて、雲が白く湧いて來るので溜らず寂しい。然し此の寂しさにも私は堪へなければならない。うき我を寂びしがらせよ閑古鳥。そのやうに、せめて此の寂しさの中に心を遊ばせるほどの餘裕が私にも必要だ。どこまでも涙なぞは禁物でね。」

「いいえ。」ともう妻のすみ子は片手を眼に當ててゐたが、

「いいえ、それはもう私は覺悟の前ですけれど、私は何だか貴方がお氣の毒でなりません。貧乏や、私の寂しい位は何でも無いと思ひますが。」

「いや、私の事は安心して呉れていい。私に對して、何かにつけ目の敵にしてケチばかりつけやうとしてゐる人も隨分とゐる。然しそれだけ深切に、常住私の藝術に注意して呉れるかと思ふと有り難いぢやないか。またさういふ小我的利己的のものでなく、私を眞に天下の害物と見て、眞劍に眞正面から切り込んで來る人がある。かういふ人こそ決して私の敵ではない。私の救ひ主だ。またかういふ人こそ眞底もろいものは無い。悪るかつたと思ふたらバタリと折れる。ど

うかすると、眞の私の理解者、私の靈の伴侶はかういふ人の間から出る。さう思ふとこれも難有い。さういふ人が多ければ多いほど私は浮び上る。それよりか、此の私の手からまざ〳〵と世間に飛び出したやうな人こそ私に取つて危險極るものは無い。私を恐ろしい陷穽に陷し入れたり、裏切をしたり、（それ。意久地もない裏ぎりでね。）ただおべつかばかり使つて立身出世の道具にしたり、時によると、直ぐに目の上の瘤扱ひにして一時も早く葬むつてその後から取つて代らうとする。さういふ小生意氣なのは大概甘やかした自分の手の下から出るのだよ。現在、私だつて、さういふ人から絶對的に私の將來まで否定した慘酷な論評を書かれた事さへ有つた。いかな私でもその時には火のやうに腹を立てたが（あの頃はまだ私も可なり憤りつぽであつた。）また直ぐ思ひ返して一時でもさういふ不祥な事は忘れて了はうと決心した。それによく忘れて了つたものだよ。さうして自分の寂しさは自分の寂しさとして止めて置いて、さういふ人には猶さら本氣で親切にしてやりたいといふ氣が起つた。さうしてさういふ場合には眞底盡してやらうとも思つたし、援してさへも來たやうに思ふよ。それよりか、本當に寂しいのはね。」

「え。」と彼の妻が寂しさうに振り向いた顔を、彼もまた寂しさうに見返つたが。「本當に寂しいのはね。」とまた前の吉野櫻をふり仰いだ。落花がハラ〳〵と彼の破れ着物の袂にふりかかつて來た。

「寂しいのは、さうした事よりか、本當に私を師とも兄ともなづいて、私の周圍に集つて呉れる一周歳下の人達の事だがね、あの中に何人、今の私のかうした生活や詩境を理解して呉れる人が有るだらうかね、おそらく一人も無いやうな氣がする。みんながみんな天才氣取りで浮かれてゐるけれど、――この私の現在がほんたうにわかつて呉れてゐるか知ら、それを思ふと何だか私だけがぽつんと山の上にでも取り殘されたやうにも思ふよ、こんな寂しい事が有るだらうか。

尤もあの大天才レオナアド・ダ・ヴインチさへ生きてゐるうちならまだしもだが死んで了のてからまでもその弟子達にはたうとう理解されなかつたと云ふではないか。さうした生き方も隨分寂しいものだらうね。」

彼の妻はもう何にも云へなくなつてゐた。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ。
おお、ほろほろ。
日は暮れた、昔は遠い、
世も末だ、傾きかけた、よ。
わしや寂びる、いのちは腐る、
腐れていつかと死んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ、
ほろほろ、ほろろん、
おお、ほろほろ…………

素春も凝つと坐つた儘、懐手をしてゐて默り込んで了つてゐたが、ふいと、その時また、あのほろろんの詩の最後の聯を頭の中に思ひ浮かべると、急に澁面作つて、溜らなくなつたが、

「ああ、厭だ、厭だ。豆腐買ひにでも行つて來やうかね。すみさん。」

いきなり立ち上つて、稍暮りかけた部屋の中へ駈け込むだので、すみ子は思はず驚いてその後へ蹤いたが、

「いえ、よござんすよ、お豆腐なら私が買つてまゐりますわ。」

「いいよ、丼をお出し。」

「でも。」

「いいよ。早くお出し。」

「ええ、そんならね、私も御一緒にまゐりませうよ。靑い葱でも買ひに。」

「さうかい。それぢや笊でも持つてお出で。いい格好だよ、二人で出掛けたら、浪人者の御夫婦のやうで、はは。」

「ほほ。」

二人が丼と笊とを持つて、本堂から下りて、すり切れ下駄をつつかけると、もう大分に日が暮れかかつてゐた。空にはふつくらした薄桃色や葡萄色の雲が物温かに夕燒方の彩色を匂はしてゐた、何處にか白い月でも出かかつてゐるやうな薄明りに、寺内の櫻が白く、未だに上光りがして、それが土手の靑い松風の冴えに幽かにうち搖らいでゐるのであつた。

破れ山門の前にも山櫻が一本白く暮れ殘つてゐた。その下にかかると、向うの坂から、和尙の是信が、赤ん坊を負ぶつて、片手に鈴がらがらや白い鳩ぽつぽの玩具をぶらさげ乍ら歸つて來るのに、二人はハタと行き當つた。

「先生。」と若い和尙は嬉しさうににこ〳〵したが、

「いよいよ、順禮は明後日(あさつて)ときまりましたよ。行らつしやいますね。」と立ち留つた。

秦春も思はず莞爾(にっこ)りして立ち留つたが。「ええ、お伴しますよお約束どほり。」と彼の妻を振り返つた。

「ほんとですか、貴方、あれは戯談(じようだん)でせう。」

「ほんとだとも、戯談ぢやないとも、ねえ和尙(おつ)さん。」

「ほんとですとも。そりや面白いでせうよ。お婆さんばかりで。」

「まあ。」すみ子が呆きれてゐると、圓い頭の和尙は西の方を見上げて、

「おや、山火事ですよ。」と手をかざした。

見ると函根の山續きはもう餘程暗くなつて、ただ、いくらか枯草色に明つてゐる二子の山の上には、白い綿帽子のや

うな雲が薄い紫の環輪を穏かに濕めして、それが冠さるやうにもつくりと浮むでゐた。そしてその蔭から山火事の赤い光がチラチラと風に吹かれて靡いて動く。

と、暮れ殘りの老鶯が、つい、山門の裏あたりでホウ、ホーホ、ホーケキョと啼いて、また前の櫻の中ほどの枝に移ると、ホウ、ホケキョと啼き續けた。

山火事燒けるな、ホウホケキョ、

可愛いい小鹿が燒け死ぬぞ。

無邪氣な和尚は子供のやうに、昔流行つたと云ふこのあたりのねんねこ唄を歌ひ乍ら、後ろ手に背中の赤んぼをゆすぶりゆすぶり、ねんねこねんねこねんねこやあと、その古ぼけた破れ山門をくぐつて行くのであつた。ポウポウとまた鳩ぽつぽのお笛が鳴つた。白い櫻の薄闇で。

⁂

その晩、すみ子は何と思つたか、紅い縁のついた煤ぼけた紙笠のランプの下で、小さな餉臺を机に、缺けちよろけの硯を持ち出すと、筆を執つて、寂しさうに片手でさらさらと江戸川を繰り延べてゐた。それは彼女の夫の妹で、今は牧と云ふ洋畫家の夫人である日暮里の千枝子に宛てた久方ぶりの消息であつた。

その手紙にはかういふ事が認められつつあつた。

「千枝子樣。すつかり春になりましたねえ。東京のお花見の賑やかな有樣がつくづく思ひ出されます。すつかり春にな

りましたねえ、この山寺も何となく陽氣になりました。それにしても私たちには永い永いどうしやうもない一年でした。かうした山寺にどうにか住みついては見ましたが、まだまだ若い私たちにどうして、何も彼もを堪へ忍んでゆける筈はありませう。ですから何も彼もを堪へ忍んで行かうとする兄さんの心持が、ともすれば私をいらいらさせて了ふのです。それで私は時々（寂しくてならなくなると）ありつたけの憎らしい言葉で兄さんを火のやうに怒らして見たくなるのです。然し、それはいつも無駄でした。あの（近頃は殊に）絕對的無抵抗主義ですからねえ。

ああ、ああ…………。ですが、私にはまだたまらなくなると思ふ存分當り散らしてゆける相手がありますが、それによつて受くる二重の苦悶を兄さんは果して何處に持つて行かうとするのでせうか。

千枝子樣、私は兄さんが氣の毒です。兄さんがたまらなく氣の毒です。それでどうにかして兄さんを慰め力づけて行き度いと思ひます。旅行でもされたらよいのでせうと勸めて見ますものの、それもお金の事がありますので、いつも立ち消えになつてゐました。ところが此頃兄さんは隨分と思ひ切つた大旅行をしやうとしてゐるのですよ。それはいづれ御知らせしますが…………

二

世尊は妙相具はりたまへり、我今重ねて彼を問ひたてまつる。「佛子何の因緣あつてか、名づけて觀世音と爲る。」
妙相を具足したまへる尊、偈をもつて無盡意に答へたまはく、「汝觀音の行を聽け、善く諸の方所に應じて、
弘誓の深きこと海の如し、劫を歷とも思議せじ。多千億の佛に侍へて、大淸淨の願を發せり。
我汝が爲めに略して說かん、名を聞き及び身を見、心に念じて空しく過ぎざれば、能く諸有の苦を滅す。
假使害意を興して、大火坑に推し落されんに、彼の觀音の力を念ぜば、火坑變じて池と成らん。
或は巨海に漂流して、龍魚諸鬼の難あらんに、彼の觀音の力を念ぜば、波浪も沒すること能はじ。

或は須彌の峯に在つて、人に推し墮されんに、彼の觀音の力を念ぜば、日の如くにして、虛空に住せん。
或は惡人に逐はれて、金剛山より墮落せんに、彼の觀音の力を念ぜば、一毛をも損すること能はじ。
或は怨賊の繞んで、各刀を執つて害を加ふるに值はんに、彼の觀音の力を念せば、刀尋いで段々に壞れなん。
或は枷鎖に囚禁せられ、手足に杻械を被らんに、彼の觀音の力を念ぜば、釋然として解脫することを得ん。
呪詛諸の毒藥に、身を害せんと欲せられん者、彼の觀音の力を念ぜば、還つて本人に著きなん。
或は惡羅刹、毒龍諸鬼等に遇はんに、彼の觀音の力を念ぜば、時に悉く敢て害せじ。
若しくは惡獸圍繞して、利き牙爪の怖る可からんに、彼の觀音の力を念せば、疾く無邊の方に走りなん。
蚖蛇及び蝮蠍、氣毒煙火の燃ゆるがごとくならんに、彼の觀音の力を念ぜば、聲に尋いで自ら廻り去らん。
雲雷鼓掣電し、雹を降らし、大雨を澍がんに、彼の觀音の力を念ぜば、時に應じて消散することを得ん。
衆生困厄を被つて、無量の苦身を逼めんに、觀音妙智の力、能く世間の苦を救はん。
神通力を具足し、廣く智の方便を修して、十方の諸の國土に、刹として身を現ぜざること無し。
種々の諸の惡趣、地獄鬼畜生、生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしむ。
眞觀淸淨觀、廣大智慧觀、悲觀及び慈觀あり、常に願して常に瞻仰すべし。
無垢淸淨の光、慧日諸の闇を破し、能く災風火を伏して、普く明かに世間を照らす。
悲體の戒雷震のごとく、慈意の妙大雲のごとく、甘露の法雨を澍ぎ、煩惱の燄を滅除す。
諍訟して官處を經、軍陣の中に怖畏せんに、彼の觀音の力を念ぜば、衆の怨悉く退散せん。
妙音觀世音、梵音海潮音、勝彼世間音あり、是の故に須らく常に念ずべし。
念々に疑を生ずるこれ勿れ、觀世音淨聖は、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と作れり。
一切の功德を具して、慈眼をもつて衆生を視る、福聚の海無量なり、是の故に應に頂禮すべし。」

是が妙法蓮華經、觀世音菩薩、普門品、第二十五の中心となるべき偈の和譯であつた。

素春は内陣の經机の前に坐つてゐた。さうしてそつと有り合せのその小本を膝に置いて、たゞ默つて讀み耽つてゐた偈を讀んで了ふと、またパラ〳〵と前の方をめくつた。その頁には次のやうな數節があつた。

「若し衆生有つて婬欲多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち欲を離るゝことを得ん。
答し瞋恚多からんに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち瞋を離るゝことを得ん。
「若し愚癡多からんに常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち癡を離るゝことを得ん。」

「婬欲。」「瞋恚。」「愚癡。」から口の中で繰り返した時、彼は突然顏を赤くした。何だか腋の下から冷汗が流れ出さうに感じたのである。

それは朝の八時頃であつた。和尚の是信はいつもの看經を濟まして了つて、その時はもう庫裡に引き下つて、しきりに赤ん坊をあやしてゐた。

鳩ぽつぽ、ソレ、鳩ぽつぽ、ぽつぽぽつぽと飛んで來い。

ポウポウ…………

おほほほとその細君の笑聲がした。和尚は圓い頭と兩手を戯けて振つて、しまひにポウと、赤ん坊の耳根へ持つて行つてお鳩の尻尾を吹いたらしい。おぎやあゝゝと啼く聲がした。

「お止しなさいよお。」

「いゝよ、いゝよ。」

「しつこいね、あなたは。」

「いゝよ、いゝよ、なあ、たあちやん、おゝ、よし〳〵。」
「おぎやあ、おぎやあゝゝ、わあゝ、わゝあゝ…………………」
「彼方へ行つて下さいよ、しようがないねえ。」
「行くよ。」と慌てゝ頭を擁えて立ち止る氣勢がしたが、直ぐと、「此處は皇國を何百里、離れて遠き滿洲の、赤い夕日が何とかで、何とか何とか何とかで、時計ばかりがコチコチと…………時計ばかりがコチコチと。……………。」足踏しながら外の廊下へ出て行くらしかつた。

素春はそれを聽くと、思はず聲を立てゝ笑つたが、また凝つと頭を垂れて、膝の上の普門品を指の先で靜かに飜してゐた。さうしていつとなく考へ深い眼付になつてゐたのであつた。

自分が今度の觀世音靈場順禮の一行に加はつたのは果して眞の信心であらうか、それは何かの大悲な力にひかされたには違ひは無いが、何と云つても矢つ張り寂しまぎれの遊樂に過ぎないでは無いか、さういふ風に自問自答して見ると、何だか此の自分といふものが可なり哀れに戯けて見えて厭でたまらなかつた。と。
「あゝ、きやつたるい、きやつたるい、はあひやあ。」

聽き馴れぬ頓狂な皺枯れ聲がして、本堂の前が急に騷がしくなつた、と、驚いて彼が振り返ると、其處には一人の肥つた六十ばかりのお婆さんが黒の蝙蝠傘を杖に、尻を端折つて、はあはあと胸を叩いてゐた。皺は寄つてゐるが、愛嬌があつて、何處やらにまだ上品な田舍の物持らしい作りであつた。それが腰を屈めると、
「和尙さんはござらつしやるかね。」と下から覗いたが、もう彼の答を待たずに、とつかはと横の茶垣の間から書院の石崖の下に廻つて、
「ほう、きやつたるい、何ちふえれえ坂づらかよ、やれ、やれ、うんとこしよ。」と庫裡の石段に腰を据ゑた。
「やあ、安城のお婆さん、どうしました。」緣側へ和尙の是信が飛んで出ると。

「へえ、今日は。」と襟巻を除つて、小さな髷の胡麻鹽頭で、ひよこりと御辭儀を一つして、一寸と顏面に人のいいお愛想笑ひを見せて仰向けになつたが、

「あの、和尚さん、何づらか、順禮の御同行はまだ見えねえづらか、どうしたづらよ、根府川ちやね旦那、それはこれは暗えうちから大騷きでね、もう何でもね、郵便の處へは四五人ぐれえやつて來たづらよ、八人のつもりがね、ふふつ。」と、さもをかしさうに吹き出すと、急に手を小さな口へ當てて、また一息に喋舌り出した。

「甚兵衞のとこの孫めがね、馬力に轢かれたごぜえますよ、ふふふふふ、學校の免狀貰ひに行つたで、その歸りにね、ふふ、それで行けましねえで、あのお婆さんは。大騷ぎでごぜえましたよ。ふつふつ。」

「あら。」と素春の妻が居間から立ち上つたが、本堂との敷居に立つて、吹き出しながら、チョイ〳〵と指さした夫の顏を見ると、たまらず「おほほ。」と腹を抱えたが、眼と眼でうなづき合つて、そつとまた、その方の障子の方へ寄つて行つた。

和尚さんも「そりやあ。」と頭を叩いて笑ひ出したが、急に氣がついたか、大きな聲でから云つた。

「お婆さん、違ひますよ順禮は明日ですが。」

「おや、へえ、あの何づらか、今日ぢやありましねえづらか。」

「明日つからですよ。—

「へえ、今日ぢやありましねえで、まあ何ちゆ事づらよ。裏の權十のお婆が今日じや今日じやと喚き立てるでね、—てつきり今日だとばかし思つてね、みんながてつくりてつくり山坂越えてさ、やれやれ、お辨當もだいなしかよ。どうしたづらよ、ほんとに、——ああ、ああ、腰も張りも拔けましただ。」

「まあ、上つて休んでお出なさいよ。」

「へえ、ありがたうごさえます」と眼をしよぼしよぼさせたが。「それでね、旦那、みんな下で待つとるですよ、もう坂は上にねえから、ここで待つとるで、御同行が見えたづらが一寸つくらわしに見に行つて吳れちふてね、蟲のいい婆ど

もだよ、ほんとに、一日取りちがえてさ。見に行つて呉れもねえづらよ。ああ、ああ。」

すつかり弱つて了つたが、

「仕方がねえさ、こうなりやお湯にでも入つて泊りませうよ。また酒くらひのオヒリツピイ踊でもやらかすづら、あいつらは。やれやれ、うんとこしよ。」と腰を上げだ。

「オヒリツピイ。」と和尚が不審相に首を傾げた。

「ふふふ。オヒリツピイの踊と來たら、それは旦那、見ものでごぜえますよ、ふふふ、どうも巡禮へ出たら見めえと思つても見せずには置きますめえよ。あの婆さんは、頓狂でねえ旦那。」と蝙蝠傘と辨當嚢とを兩手に提げると、「それでは。」と御辭儀をして「何ちふ事づらねえ、莫迦々々しい。權十の婆しようがねえだよ、慌てくさつて。見に行つて呉れもねえづらよ。朝つぱらから人たたき起して。腰も張もねえだよ、ほんとに、ああ、ああ。」

ぶつぶつ、せかせかと山門の方へ俯ひかがんで行くのであつた。

「和尚さん、あれが御同行ですの。」とすみ子が障子をサラリと開けて轉げ出ると、

「ええ、おもしろいでせう。」と是信も笑ひ出した。

「日を一日早まつたのですつて。」

「ええ、滑稽ですなあ、氣の早いお婆さん。」

「ほほ、そんなにうれしいんですかしら、順禮が。」

「それは樂しみでせうよ、まるで小學生徒の遠足です。」

そこで思はず素春も笑ひ出したが、すつかり上機嫌になつて、「どうしても明日は行くよ。」と彼の妻を振り返つた。

「まあ、ほんとに行らつしやるのですか。あんなお婆さんたちと。」

「行くよ。行つてもいいだらう。」

「ほんとですの、まあ、何といふ事でせうねえ、なさけない。」

つくづく呆きれて情なささうに坐つて了つた。

❀

光明遍照、十方世界、念佛衆生
攝取不捨。
南無阿彌陀。
南無阿彌陀佛。
南無阿彌陀。
南無阿彌陀佛、

カンカンカンカンカンと鉦を叩く、木魚が鳴る、念佛が始まる。水の尾の山中東照院の本堂は暗い中から大變な騒ぎになつた。

それは陽春三月廿三日、相模は觀世音札所八ケ所の順禮へ鹿島立つ白髪の老婆四十有五人の最も輝ある、而もその當日の早曉であつた。

和尚は茶けんじやうの旅衣を凛々しく裾短に着て、もう本尊佛の前に端坐してゐた。

普門品をあげてゐる。

「世尊妙相具。　我今重問彼。　佛子何因縁。　名爲觀世音。
具足妙相尊。　偈答無盡意。　汝聽觀音行。　善應諸方所。
弘誓深如海。　歴劫不思議。　侍多千億佛。　發大淸淨願。」

美くしい朗らかないい聲であつた。それが一心に香を焚いて、經を讀み、磬を鳴らしてゐた。

金色の阿彌陀如來の坐像の隣には同じ金色の煤ぼつた觀世音菩薩の立像が、銀紫の夜明の微光と薄黄ろい燈明の瞬きとにかうかうとしてその頭の圓い光輪を搖がしてゐた。白い薔薇と薄紅色の櫻の花も一枝獻げてあつた、ほかほかとまだ湯氣の立つてゐる白い佛飯も、白い干菓子も一山供養してあつた。

素春から見た此の和尚は天眞爛漫の壯年僧で、いかにも生れた儘の人間らしい人間であつた。さして學識の深い様子も見えなかつた代りに、名聞心も極めて薄く、まことに當今の出家としては珍らしい我慾のない無毒な人物であつた。それで、その日常の生活から見てもあの妙な抹香臭も無い代りに、さうしてまた在俗のそれらとも大して變つては見えなかつた。たゞ素直に安心して、その貧しい山寺に住持して、たゞおとなしく三寶に奉仕してゐるといふ風であつた。兎に角臭みの無い無邪氣なお坊さんであつた。

彼が此度の順禮行を思ひ立つたのは素春のやうに寂しさまぎれの鬱晴らしと云ふよりも、少くとも眞劍な一途なものが彼の心を衝き動かしたのは事實であつた。

それは街も一個の佛弟子として、有縁の優婆塞、優婆夷を誘うて、大慈大悲の觀世音菩薩の妙功力を瞻仰する事によつて、現世の利益後世の安穏、無量の福徳を授からして遣り度いと思ふのは畢竟彼が眞實の發露に違ひ無かつた。それに多人數の團體を晴々しく自分が先立つて連れて歩るくといふ、それが幾らかは田舍の坊さんらしい罪の無い見得坊心を滿足さした一つであつた。

それにもう一つは、此の東照院はもともとが由緒もあり御詠歌もついた觀音の靈場の一つであつた。その壯嚴な堂宇もあつた。然しその堂宇が惜しい事には先住の時代、明治の八年頃に近火にかゝつて灰燼に歸した。その儘に礎ばかりが境内の地藏堂傍に殘つてゐる。それをどうがなして再建したいと云ふのが彼の一念であつた。今の貧しい有様ではとても昔通りの立派な觀音堂は望めさうに無い。それで差當り兎にも角にも小さな型ばかりのでも建てゝ、一先づ昔のま

ゝの端厳なあの観世音像を安置したいと云ふのであつた。最近になつて、素春とも気が合ふところから二人で色々と熟議したが、素春も結局は自分の力で此の荒寺を中興開山したいと思つてゐる。それで、その観音堂再建の事も始終心にかけてはゐたものゝ、彼もまだ貧しい詩家の一人であつた。當分のところどうにも手のつけやうが無い。そこで、此の小田原町内のある天神の殿祠へ（それは一間四面の亜鉛葺のものであつた。）が僅か拾五圓で賣物に出たを幸ひ素春が、詩を賣つてそれを手に入れやうと爲た事があつた。和尚も喜んでさうなつたらその御堂の傍に二疊敷位の小さな部屋を取りつけて、其處へ素春を据ゑるつもりであつた。さうなると、素春も大喜びで、夢のやうな傳說的空想を逞しうした末には、その小房に小さな經机を一閑据ゑて、ちよこなんと經典や詩集に讀み耽つてゐる自分の取り澄ました閑寂な風采が目に浮かんで來た。（それは隨分子供げた見得坊だと素春自身にも後から苦笑されたが。）それからまた茶の頭巾に十徳姿の白髯の素春翁が縹緲たる神采をもつて現はれて來た。（それも隨分彼をして赧然たらしめた。何といふ情けない想像であつたらう。）

然し、凡てが空になつて了つた。何となれば、僅か拾五圓の殿祠も一旦解いて、此の山上まで運び、再び建てつけるとなると、どうしても七八十圓の費用がかさむと云ふ事が大工や仕事師の經驗から立證されたのであつた。それで二人ともすつかり投げ出して了つたのである。小房の建て增しに到つては猶更の事であつた。それでたうとう仕方がない、またいい時節を待たうと云ふ事で、何も彼も葬むられて了つたのであつた。

さういふ事から、和尚の心が順體行に推移して行つたのも、矢張り寂しさのあまりに自然と何かの衝動に驅られたかもわからなかつた。

若い和尚の是信はいよいよ普門品を讀み進んで行つた。

眞觀淸淨觀。　廣大智慧觀。　悲觀及慈觀。　常願常瞻仰。
無垢淸淨光。　慧日破諸闇。　能伏災風火。　普明照世間。

彼の背後にはまた、根府川、早川、函根、山王、酒匂、井細田、小田原町内から組を作り伍を成して、ぞろ〳〵と暗まぎれから詰めかけて來た白髮、胡麻鹽、鶏羽色の染髮の、老けたのは八十、若くて五十位の百姓町家様々のお婆さんの連がもうぎつしりと油くさい髷を並べ、皺面を集め、骨ばかりの痩膝を並べてたゞもうワヤ〳〵と目白押しに押しかたまつてゐた。無論本堂には坐りきれないので、溢れたのは素春寮の書院にまで侵入して、赤い帷や、洋風の書棚や、机の上の紫ヒヤシンスの花瓶、欄間の司馬江漢の彩色銅版畫などを、不思議相に覗き廻つたり、無遠慮に觸つたり、聲あげて驚いたりしてゐた。

それぱかりか、あちらこちらでゴツタ返して御詠歌をあげたり、般若心經を合唱したり、延命十句觀音經を稱へたり、眞解や、和讃、甚だしいのは手を拍き合せて盛んに、浪花節見たやうな御詠歌の新ぶしと云ふのを唸つたり、踊つたりしてゐた。

「さあ、今日はなあ飯泉が初まりだよす。飯泉からおさらへだよお。いいづらか、さあ、よい、初まりますぞえ。

第五ばん、さがみの國、あしがらしも郡。
いいづみむら、
いいづみさんせうふくじ、
ほんぞん、
十一めん觀世音菩薩、
おんたけ二尺八寸、
びしゆかつまのおんさくにして
どうきやうほふしのかいきなり。
かなはねば、

たすけたまへと
いのるみに、
ふねにたからを
つむはいゝづみ。…………。」

「摩訶般若波羅蜜多心經。
觀自在菩薩、行深般若、波羅蜜多。
時照見五、蘊皆空度、一切苦厄、舍利子、色不異空空不、異色色即、是空空即、是色、受想行識、亦復如是、舍利子、是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不増不減、是空中、無色無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界、無無明亦無無明盡乃至無老死、亦無老死盡。無苦…………。」

「觀世音、○南無佛、○與佛有因○與佛有緣○佛法僧緣○常樂我淨○朝念觀世音○暮念觀世音○念念從心起○念念不離心。」

「南無大慈大悲觀世音菩薩。種种重罪。五逆消滅。自他平等。即身成佛。」

「唵阿呂褒迦娑婆可。かあかあああ…………。」

『閻魔大王の詔には、澆季末世の悲しさは。
善行する者少なくして、惡業作るものおほく、
極樂往生まれにして、地獄へ落つる者おほし。
その苦しみの數々はア…………。」

『嫌々ながら死出の旅。路錢も無くて越すならば。
早くも三途の大河也。煮立釜に落ちこんで、

焔に燒かれて苦を受くる。　平生娑婆にゐるうちに、
年は二八の若いとき。…………』
『さあ、さあ、皆さん、和さん、刈かや道心。
筑前筑後、肥前肥後オ。ソレ。
大隅薩摩で六ケこく、ヨイト。
たんだい守護を司さどるッ。
ぶんぶ二道に秀でたる。ソレ
加藤左衛門重うぢはアア。
嫉妬の念とぞ知りたまいイ。ヨイトヨイト。
コリヤ、コリヤ。
あははは。
ふあつふあつふああ。…………』
『遠離一切顚倒夢想、究竟涅槃三世諸佛、依般若波羅蜜多、故得阿耨多羅三藐三菩提、故知般若波羅蜜多、……
……………………………………………………
羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶』
『南無阿彌陀佛。南無阿彌陀。…………』
『南無妙法蓮華經。南無妙法蓮華經。…………』
いやはや何も彼もが滅茶苦茶で、ゴチヤ交ぜの、勝手放題の亂痴氣騷ぎであつた。
すみ子は蒼くなつて、隣の部屋から差覗いてゐたが、そうつとその夫の袖を曳くと。

「まあ、貴方、どうでしやう。まるで地獄の釜でも覗いたやうぢやありませんの。恐いわ。私。」
「ふふ、凄まじいね。」
「貴方、どうでも行らつしやるの、あんなお連れと。」
「行つて見やうぢやないか。」
「まあ、隨分物好きね。」
「ふふ、面白いや、こりや。」
彼は早速、古ぼけた黒天鵞絨の背廣に、ふつさりと黒ネクタイを蝶々に結び、色の變つた去年の麥稈帽子を手に持つて、笑ひ笑ひ、その場へ押し分けて行つた。
和尚が坐を立つて、にこ〱笑ひ乍ら彼の傍に來ると、「どうです、この景氣は。」と大きな數珠を押し揉むだ。
「驚きましたな。」と素春も笑つて見廻してゐたが、「そして先達は貴僧お一人ですか。」と訊いた。
「いや、それがね、すつかり困つちやひましたよ、S寺とP寺とT寺とが行く筈になつてゐましたがね、みんないさとなつて逃げつちまひましたよ。地理がさつぱり不案内でしてね、わたしは困つちやいましたよ。仕方がありません。どうにかやつつけませう。先生も一つ加勢願ひます。」
「いいですとも、旗持ちでもやりませうよ。」
「まあ、あなた旗持ち。」すみ子がうしろに來て、くすりと笑つて、横を向いた。
「いいよ、何でも。」
「はは、ちやあ、會費を一つ今の内に集めて置きませうかね。」と云つて、和尚は中央に割りこんで立つと、一きは大きい聲を張りあげた。
「皆さん、それでは會費を前以ていただいて置きます。」

「何けえ會費つてえ、何づらか。」

「お島目づら、割前の。」

「さうけえ、いくらづら、三圓けえ、三圓五十錢けえ。」

「ほうい。誰にやつたらよかんべえかよ。」

「おまつ婆よ、いつしよにすべいかよお。」

「旦那え、わつし、お辨當持つて來ただからな、いくらかまかるべえね。」

「お釣りを願ひますだよ。」

「太郎兵衛どん、おらの蟇口何處へやつただあ。」

また一騒ぎが持ち上つた。

紫蓉は和尚を助けて、一人前三圓五十錢づつの會費を貰つて廻るのであつたが、平常から金の勘定には極めて不得手ではあつたし、釣錢の算用がいくらでいくらだか、つい、マゴマゴして了ふのであつた。ガヤガヤと圍りでは喚き立てる。がさごそ臍繰を鼻紙やお守りと一緒に抓み出す、小錢を一つづつ丁寧に疊の上に並べて幾度も幾度も數へ立てる。さうした間に屈んだり、立つたりする面倒さはとても惱ましくて堪へられないのであつた。

それから、愈、觀世音靈場巡拜團と大書した白い長旗を彼が押し立てて、和尚と並んで先頭に立つと、顔を紅くして歩き出した奇體な、そして如何にも調和の取れぬ異様な鹿島立の一ときまでには可なりの時間が經つてからであつた。

彼と和尚との背後には、汚ならしい田舎まる出しのお婆達がぞろぞろと總勢四十數人、それに二人の爺さんとが交つて、風呂敷を背負つたり、袋を下げたり、大きな破れ蝙蝠傘を杖についたり、裾を高々とひつからげたり、百鬼夜行の體たらくで、ワヤワヤガヤガヤ蹤いてゆくのであつた。

すみ子と赤んぼを負ぶつた寺の細君とはおづおづと、笑ひ笑ひ山門の白い櫻の下まで蹤いて來たが、そこへ來ると、
「行つて來るよ。」と素春が振り返つた。そしてまた紅い顏をして笑つた。
和尙の是信も「行つて來るよ。」と振り返つたが、「たあちやん、お土産（みやげ）買つて歸るよ、待つといで。」とその赤んぼの紺羅紗の帽子に手を當てた。
「奥さん、先生樣貰つてゆきますだ。」
「可愛いい先生樣、抱いてやりますだあ、ひやつひや。」
頓狂な婆が露骨で、そして厭な猥らがましい笑聲を立てゝ、素春をその妻から押しのけるやうに、無理に割り込んで駈けて行つた。
「あれ、見や、もう、あの婆（ばばあ）、この人におつ惚れたゞあ、助平婆ア。」と折からの函根颪に櫻がひとしきり、その怪體な順禮の一群に散りかゝつた。
素春はぞつとして、また振り返つた。そして思ひきつて、すたすたと、門前の急坂を驅け下つた。

＊＊＊

その晩、すみ子は、しみじみと、また千枝子に當てた第二信を書き綴つてゐた。

その手紙

千枝子さん、兄さんはたうとう順禮に出かけましたよ。よもやと思つてゐたのですが、…………
實はかうなのです。この冬うちからこの寺の和尙さんが思ひ立たれて、相模八枚觀音靈場巡拜團といふのを募つてゐましたが、いよいよその同行四十幾人と（其お同行がどういふ人達かはあなたの想像にまかせます。それはもう話にもできませんのよ。）白い旗を押し立てゝ、勢ひこんで出かけて行きました。私は今殘されて見送つたばかりのところで

す。まあ、何といふ事でせう。一體兄さんは私たちをいつもビツクリさせ過ぎます。誰だつてさう云ひますわ。このせち辛い世の中に、而かも若い身空で順禮に出かけるなんて。

私も一應はさう云ふ意見も持ちました。が、極力この思ひたちを反對し得なかつたばかりか、この二三日は旅に出る兄さんの爲めに手さげ袋を縫つたり、（私の持ち合せの小ぎれの中では一番上等のものでした。刺繍入です。）お辨當のおかずの事も色々と考へたりしました。

千枝子さん。この矛盾した私の心持ちと、そして兄さんの順禮ゆきとを、あなたはどういふ風にお考へになりますか。

私はそれを現在の洋畫家の夫人としてゞなく黄金花咲く菜の花の國筑後柳河の美しい、ゴンシヤンであつたあなたに望まなければなりません。あの淸水山觀世音の麓の、雉車や駄菓子を並べた古風な店先に足を休めてゐる菅笠に白い笈の若い順禮の姿や、黄色い海のやうなからしの花の中をうねつてゆく御詠歌や、リン／＼と振り鳴らす鈴の音を思ひ出して下さる事によつて。

千枝子さん。私は自分の淋しい心持からあまりにあなたの鄕愁をそゝり立てるやうな事を語りつゞけました。あの菜の花の毛氈も、雉子車の素朴な靑や赤や紫の色の思ひ出も、どうかあなたのカンバスを染めるのみに止まつて呉れるやうにと。——

南無觀世音大菩薩…………

三

それは素春の幼ない春の思ひ出ともあまりに相違した醜い老いぼけた順禮の姿であつた。順禮と云へば、素春は直ぐにも、櫻が咲き、その下に閑雅な葭簀の小茶屋があり、靑々と眉を剃つた町家風の意氣な女房が圓いお盆などをいそい

そと拭巾にかけてゐると、上手から、チョボの御詠歌に乘つて、普陀落ヤア、チリンチリンと鈴を鳴らして、菅笠を手に、細い杖をついて、『順禮に御報謝ア。』と可愛ゆく首を傾げて出て來る笈姿の阿波の鳴戸の小娘が目に見えて。その順禮がいつも美しくていたいたしくて溜らなかつた。

その娘のおつるも金の小判を身に着けてゐたが、（尤もその爲に可愛さうに殺されたが。）少くとも彼が育つた筑後平野の菜の花の海をうねつてゆく順禮の娘たちは豊麗で、皆富家の子女であつた。諸行無常を說く佛の敎も凡てを現世的の遊樂と結びつけて、そこに夢のやうな戀慕の情を通はしてゐたのがかの南國の美くしい風習であつた。彼女達は皆未だ浮世の苦勞も知らず、男の熱い溜息も膚には觸れず、ただ何とはなしに紅い血潮のゆらぎ心のゆらぎ初めた、所謂物の哀れがやうやうと解りかけた、ほんの初心の町家の少女達であつた。柳河で云ふヨカラカ・ゴンシヤン（可憐な孃さん）であつた。さういふゴンシヤンが巡禮の旅に出て三春の行樂をほしいままに詠歌を流して西國何ケ所觀世音の札所を禮拜供養して廻る事は決して緣の遠い後世の安樂を願ふ心からでは無かつた。女一代の良緣を求むる爲めに、見ぬ先の戀人を尋ね求めて、ただ焦がれあこがれて步くるのであつた。それがその町の不文律であつた。その笈姿の菅笠の順禮の旅から歸つて來て初めてそのゴンシヤン達は他家へ緣づく資格をも認めらるるのであつた。とりもなほさず彼女達は戀の順禮であつた。その姿がどんなに姸やかで、その歌聲がどんな晴れやかで朗々と燃え立つてゐたか、またその振り鳴らす鈴の音がどんなに揃うて淸らかであつたか。そのまた揃うて續いてゆく向うの空の色がどんなに惱ましい紅いろの花盛りで、見渡す限りの黃金の野原がまたどんなに薫りが深くて、長閑で、溫かな微風も吹きそよいで、それらが繪日傘や、蝶々や、それにある蓆張の圍ひ芝居小屋の幟と交つて、またどんなに鄙びた明るい繪模樣を織り出したか。

それに較べると、此の今自分が先頭に立つてゐる御同行の衆は、これはまた何といふ幻滅な干からびた地獄畫であらう。その萎び盡した姿から、色も戀も無い皺くちやの面から心から、これはまた何といふ慘めさ情なさであらう。さう思つて、時折彼はその背後を振り返ると、つくづくとそのよぼよぼの順禮に交つた自分の醉興さと突飛さとが滑稽で哀れ

で、笑止でならなかつた。仕方なしに彼は顔を紅くして、莞爾して、思ひきり長旗を押し立て、肩には人から借りた洋杖仕込の蝙蝠傘に手提嚢を引つ掛け、穴のあいた腐れ古靴を鳴らし鳴らし歩るくのだつたが、始終見知り越しの町家の内儀や小僧どもから呆きれたやうに手を拍かれたり、腹を擁えて見物に飛び出されたには、いさゝか面喰らつて了つて、その極り惡るさと照れかくしから、いよいよ高く旗を振つたり、引つ擔いだりした。それは極々親しいN家の皮肉屋さん達に見つけられでもしたらそれこそ大變な事であつた。

四十幾人の姿どもはもう遠慮會釋も無かつた。種々雜多の肥料臭いをかしな身装をした上に、列も行も揃はず、思ひ思ひに傘杖をつき、襟巻を引つ被り、すり切れ下駄や藁草履に砂埃を上げて、宛然老いぼれ白鷺の群れ騷ぐやうによぼよぼがやがやと絶間なく左顧右眄して喚き散らすのであつた。これがあの端厳微妙の、大慈大悲の觀世音菩薩の光顔を慕つて巡拜供養して歩るく順禮の有様かと思ふと流石に素春もがつかりしたのであつた。

春らしい、いい日和ならまだしもであつた。が、その日に限つて怪しな空の雲行であつた。それに急變した寒氣に加へて凾嶺颪しの西風が次第に面も向けられぬ烈風とさへなつて了つた。それでも蒼い空の色が吹きちぎられて凝り固まつた橙色の雲の間からあちこちと覗いてゐたが、それも冴えきつてゐて嚴冬のやうな冷たい眼の色であつた。

昔ながらの白い物見の櫓が御濠の水に映り、江戸繪のやうな薄紅い櫻の並木の續いた濠端を南無や大悲と通つたところで、且つはその眞白な花吹雪に路幅いつぱいに吹き捲くられたところで、その順禮の一行は少しも淸楚な風情を添へ得る筈はなかつた。かと云つて俳諧的な飄逸味とても感じさせなかつた。ただ貧乏つたれであつた。對照が對照であつただけ猶更薄汚なくむさくるしく過ぎた。亡者の行列その儘であつた。尤も誰も彼もが、最早慌ててその死金でも掻き溜めねば安心して眠も瞑れぬ人生の廢り者であつた。もう棺桶に片足突つ込む位はまだしもの事、その中から白髪頭だけやつと出して糞力に泣きもがいてゐるお婆さんも五人や六人は有つた。無論飛行機が空に唸り、タンクが奔り、毒瓦斯の砲弾が爆發し、人間の死體から燃料を搾り出す此の今日、若くは革命虐殺國際聯盟、デモクラシー、同盟罷工の此

の烈しく目まぐるしい實際的現代の文明と威力とに對しては何一つ理解あり交渉の有らう人種ではなかつた。殆どが、無智で、貪欲で、すれつからしで、猥雑で、お目出度くて、而も耄碌しきつてゐた。これは言ひ過ぎたか知れぬ、然し多少の例外を除いて、殆どがさうであつたと云へる。

小田原の長い長い通りを過ぎ、やつと井細田の坎々した家並を出はづれかかつた時、素侭はふと足を擱めて、思はず愛くるしい赤んぼのやうな眼付をした。紺絣の子鶏が一羽、茱繻子の兩脚を小意氣に敏捷に動かし乍ら、とある家の新らしい金網の籠の前を頭を三角にして一直線に歩るいてゐたのである。彼はこの子鶏を眼にすると同時に彼が崇込しきつた時それと同じやうな子鶏と食を頒ち、愛撫し合ひ、談語し合つた自分の三年前の商業的生活を思ひ出したのであつた。彼は蹲むで、その子鶏を一寸掌の上に呼んで見やうとした。と、一人の同行の老婆が餘めきかかつてその金網を撼り飛ばした。子鶏は驚いて飛びたつたが、慌てて家の中へ逃げ込んで了つた。そして盛んに異様な一行に向つて啼き喚めいた。彼は寂しさうにその中を覗き込んだ。

「怪體な鶏啼きじや、また亡者が一人ふえたづらよ。厭な事つちや。」

誰だか、それとは知らずに屋根を見上げたのがあつた。

「何の、わつしでも道中でへつ斃死るづらよ。ひつひ。」

「ええわい。お葬式の衆がこれだけあればなあ。」

「ふふ。好いた爺も今は無しよ。結句その方が賑かでよかんべ。」

「嘘つぱし云ふなえ、お助送、裏の六兵衛爺は獨り者でよ。」

「ふふ。あんな脊つたれ爺がどうするだい。」

「ふん。色は思案の外だとよい。」

「ひつひ。」

「あはあは。」「うふふ」「ふふふふふう。」

「コリヤコリヤ、スツトコ、ドツコイナ。」

倏ち、小さな、色白の眼のしよぼしよぼした、青風呂敷に白脚胖のお婆さんが、氣輕るな戯け切つた腰をひねつて兩手を上げ下げ踊り出して來た。

「ヨウ、ヨウ、オヒリツピ。そこそこ。」

一同が哄となると、その小び婆さん、ますますお調子に乘つて、「スツトコドツコイ、ドツコイナ。」と蹌々して來たが、トンと素春に尻をぶつつけて、「おやつ、」とくるつと廻つた。

「へへ、御免なさいまし、眼が薄うございますで。」

菱形の小さな茶の襟巻を除ると、慌てて頭をひよこりと下げた。

素春も吃驚りしてお尻を撫でた。皆がまたげら〳〵と笑ひ出した。

その騒々しい一行も、眞つ黒に煙を渦巻き立ててゐる製紙工場の大煙突の下に出ると、皆驚いて眼ばかり空に向けたが、いよいよ出雨道になつて酒匂川の腐れ吊橋にかかる頃になると、それこそ全く大山嵐に吹き曝らしにされて、蹌け飛ばされながら、蒼くなつて、ガタピシ〳〵と駈けて逃げた。で無ければ危うく河原に吹き落されさうになつたのであつた。皆が寒さでブル〳〵慄へ出した。

「おお寒々。觀音樣參りも容易な事つちや無えの、命がけじやわ。」

「かうなつたら後生も有ろかい、今さら爺の懐が戀しいぞい。」

「へえへ、お火燵にへえつく觝つてゐた方がまだましだんべえ、何の因果で寺參りか。」

「くそ、この罰當り婆。」

さうして、やつと辿りついたのか、足柄下郡は豐川村飯泉の觀世音であつた。此の寺は阪東第五番の札所で飯泉山勝福寺、例の「かなはねばたすけたまへと」云ふ御詠歌のついた靈場である。

其處は北の常盤木の樹立で工合よく風が遮られてゐた。着くと、恰度明るい午前十一時頃の日光が射しかけたところで、その稍過た日溜りの中に古ぼけた藁葺の朱塗の山門が眞盛りの櫻の花と相映じて、いかにも幽雅な田園の精舍らしく鄙びてゐた。山門をくぐると、同じく藁屋根の觀音堂があつた。朱塗の柱や極彩色の欄間も古くなつて、剝げ荒してゐたが、そこには「普門閣」と青く彫つた横額がかかつてゐた。大勢は下駄ばきの儘大騷ぎで階段を上ると、すぐに内陣の格子に取りついて、「唵阿呂勒迦娑婆訶」を唱へ出した。その内陣には燈明一つ點いてゐなかつたが、それでも薄明るい落ちついた陰影の奥の方に金色の佛龕や天蓋や燻ぶつた香爐や蠟燭立や、赤と白の千匹猿の飾り物やが、まこと觀音の佛前の如く森閑とした靜さを寂びさしてゐた。

この體を拜むと皆が急に子供のやうに押しへしして、賽錢を投げる、御詠歌を上げる、普門品を讀む、がなり立てる、中には喧嘩腰に人を搔きのけて一番先きに一人だけが先づ御利益を受けねばならぬもののやうに鐵拳を合せて蹈み込む、その白髮の豆髷に蝙蝠傘の柄を引つ掛けてまた外のが一緒に共轉びをする、それを笑ふ、囃し立てる、それらでぎつしりと詰まつた本堂は埃と髮油のにほひでもうむんむん爲出したのであつた。

「おやおやおや、白銅だつたづら、一錢ぐれえでよかんべえと思うたに、――取んねえづらかよ、その傘でちよつくら取つとくれよ、おさきさあ、なんちゆ事つぢやろかい。」

「ふん、お參りちやねえかよ、ケチな事云うで無ねだよ、罰當り婆。」

「さう云ひながら忝々しく五厘錢一つ投げて、また矢鱈に「大慈大悲」を唱へる婆もゐた。

素春は呆されて、隅の方に押し遣られてゐたが、その儘默つて頭を下げた。

延命十句を上げて、それから一旦下の庫裡へ行つた和尙が、稍上氣したやうになつて歸つて來ると、思ひきり伸び上りながら大きな聲をあげて。

「皆さアん。」と云つた。それから「納經と御判とをいたゞきたい人は三錢づけて下さアい。一緒に持つて行きまアす。」とまた反りかへつた。

それを聞くと一同はまた大騒ぎで背中の風呂敷包を解いて下ろす、洗ひざらひはだける、引つ繰り返す、矢庭に笈を引きずり出して眼をキヨロ〳〵させる、それから慌てくさつて階段に置いた笈の方に駈け出すはづみに、人の蝙蝠傘に足を取られて、足を踏みはつして仰向けに引つ繰り返る、そこでまた可なりの滑稽劇が演じられるのであつた。

「旦那、一錢でいゝづらか。」

「いや、納經が二錢、御判が一錢。合せて三錢ンつ。」

「お札は。」

「お札は一枚一錢ンつ。」

「高えね」

「納經はいらねえから御判とお札で三錢でまけときなあえ。」

「よし、よし。」

「お札は二枚貰ひてえだあよ。」

「お札は一枚づゝにして下さアい。そんなに幾分は無いさうであります。」軍隊にゐた事のある和向はすつかり軍隊式に受け應へしてゐる。

大勢が一緒に笈と、粟紙を二つ折にして四五枚綴ぢたのを、さながら受持の先生に集る小學生徒のやうに一齊に、そ

して雲崩を作つて我勝ちにと押し寄せるので、和向はたじたじとなつて一人づゝですよ、一人づゝ、ハイ、笈、よろし、ハイ、誰さん。ハイ。」と一々調べながら金と一緒に兩手に受けて、もう額に汗をたら〳〵流し出した。

「おつ、茲に名が無いのがありますが、これは誰さんですか、名を書いて下さアい。間違ひまアす。—

「さうけえ、そんならきやあてえくんねえゝ。書けねだよ。」

「書けなければ先生に書いて貰ひなさアい。」

「先生て誰づらよオ。あの洋服きア。」

「ハアイ、さうでありまアす。」

素春は、和向さん少々上氣してるなと思つたり、苦笑したりしてゐたが、おづおづと後から出て來ると、直ぐに小びつちよの大眼玉の鼻低の面の赤い頓狂な白髮婆にとつゝかまつた。

「お前きア先生つてえのは」

「えゝ。別に先生ぢやありませんがね。書いてあげませうよ。」彼はすつかり恐縮して頭を掻き乍ら、ポケットから鉛筆を取り出した。

「さうけえ、先生ぢやねえけえ、測量づらか。ヒヤアカラだからさうづらと思つた。違えねえづら。」

「えゝ、測量師です。」

「失禮な事申すでねえだ、東照院の先生様ぢや無えかよ。」と外のが云つた。

「ふう、あの夫婦者の食客きア。」

和向の是信はもう夢中であつた。

「さあ早く出して下さい。間違はないやうに。——先生済みませんが、一つ名前を扣えといて下さいませんか、どうもこんなに一緒に出されちやどう爲やうもありません。お金の方もついでにお願ひします。」

「えゝ、やりませう。」

素春も一としきり急忙しくなつた。

二人で笈と納經とを山ほどに擔いで、庫裡へ行くと、其處には、横着さうな爺と小僧とがたゞ二人ぼんやりと留守居してゐただけで、日向の緣には猫一匹香箱を作つてゐなかつた。だが、その庭にも老木の櫻がうらうらとして今が眞盛りであつた。長閑な靜かなものであつた。

二山になつた笈と納經とを見ると、その爺と小僧とは急に驚いたやうにマゴマゴしたが、和尙が判と朱肉とを大いそぎで取り出さして、それを一緒にせかせかと笈に押し初めた。素春に納經の方の字を書いて與れと云ふので、彼は云はるる儘に坐敷に上つて、机の前に坐ると、一帖づつ、手に取り上げて、

奉納經

大悲殿

大正八年三月廿三日　飯泉山　勝福寺

と大きくその一枚目毎に書いて、また判の方へ廻す、和尙はそれを受取るとまた大きな菱形の三寶印と［坂東五番］の印と寺號印とをぺたぺたと押しつける、それは數が多いので可なり手間の取れる仕事であつた。だが、素春にはさうして筆を取つて手習のやうに觀世音の納經を認めてゆく事が何となく彼の心を晴れやかにさした。全く彼はそれらをあどけ

ない手習子のやうに一生懸命に書いて行つた。書いて行くうちに何かは知らぬが、彼の心の中にそよそよとした春の微風でも吹き通つてゆくやうな穩かさと喜びとが次第に感ぜられて來た。さう感ずると、また何處やらからか高貴圓滿な觀世音の御姿も、その春風の中に顯いて來るやうな、何だか彼自身の肉身までが一層明るく輝いて來るやうな安らかな赤んぼのやうな心もちになつた。

「南無大悲觀世音菩薩。」

さうした唱名が時々爛熳と咲き盛つてゐる櫻の花の向うから聞えて來た。鶯の聲も何處やらにした。

「溫かくなりましたね。」

和尚は自分の傍のところまで射しかけて來た麗らかな陽の光をその衣の袖で、チラチラと振りこぼし振りこぼし爲作ら、彼もまた一心に、新らしい晒木綿の皮に各種の朱印を力を籠めて一つ一つ皺もへこむまで壓しつけてゐた。安らかな鷄の聲も聞こえて來た。野良道をゆく馱馬の嘶も、聲高い百姓の話も聞こえて來た。と、どやどやとまた一人二人の姿どもが門口から水呑みに來て裏へ廻つてゆく。

「いい日和になつたぢやねえかの。」

「さうよなあ。これも大方觀音様の御利益づらよ。」

何がなしに善春は莞爾した。さうしてまた心のどかに墨を磨つたり、たつぷりと筆の穗をひたしたりした。

一時間の後、彼等は國府津へ向けて、門前の農家の裏を、昔の順禮街道の方へと出かけて行くのであつた。風がすつかり凪いで、廣濶とした田圃のそこここには黄色い菜の花の畑や、淺綠色の麥の畑などが點綴して、向うに赤い崖の見える低い小山などが親しさうに圓い大空の下に蹲つて、空にはしきりに野雲雀の囀りが聞えてゐた。

行くうちに思ひがけなく小川があつたり、櫻の咲いた百姓家があつたりした。ころ、ころころころと鳴く蛙の聲も所こ

なつたり後になつたりした。その蛙の聲を陽春三月の薄靄が遠く霞ませたり、また近く賑やかしたりした。
「何づらか、亞米利加でも櫻が咲くづらかね。お前さん。」
突然、呼び掛けられて素春が振り返ると、蜜柑をむきむき、一人の背の高い赤と茶色の毛糸の襟卷(多分それは孫娘のらしく思へた。)を三角に前に垂らした鼻の高い目つかちの白髮婆が、すぐ彼の横を歩いてゐた。
「さあ、咲いてるには咲いてるだらうがね。」
「おや、お前さんは亞米利加に行つたでねえかね。」
「いいえ、行かないよ。」
「左樣きやあ。俺、行つたとばかし思つてゐただ、ヒヤアカラだからね。」ふふ。と聲を立てて笑つて、
「お前さん、蜜柑一つどうだね。」と、澁茶色の汚ない鐵手から剝れたのを一つ、苦笑してゐた素春の手にと押しつけて
「らめえだよ、食べて見ろよ。」と云つた。
「ありがたう。」と彼も莞爾し出した。そしてその婆と肩を並べながら、その頂戴物を嬉しさうにむきむき、一袋づつチウチウと吸つて行つた。
旗は今度は先頭に立つた和尚が擔いでゐた。その後に直ぐと續いて、足の早い根府川組の一團がせつせと急いでゐた。白鷺の調練のやうに、
「隨分早いのね、あの人たちは。」
町家の内儀らしい稍若い上品なのが、そろ〳〵疲れたらしい足どりで、もう小鼻を顰めかかつた。
「彼奴ら毎日、野山ばつかし歩るいてゐるだあからな。」と誰かが小憎らしく小石を蹴つ飛ばした。
その間にも素春は前に出たり、後に退つたり、方々を眺め廻したり、突然田圃へ押し出されたりした。一同は思ひ思ひに勝手な饒舌や、家内の愚癡や、嫁の讒訴や、猥らな色話やを高々と喚めき散らし乍ら、埒もなく列次を亂して、そ

の野中の一本道を埃をあげあげ押しへししして行く。

「お前、何かね。坊さんの大學校かね。」と一人が訊ねた。

「いや、何でもないんだよ、お婆さん。」

「でも、ただの坊主ぢやあんめえ。」

「いや、坊さんでも無いよ。」

「んぢや、お醫者の先生づら。」とまた外のが口を出した。

「お醫者でも無いよ。」

「んぢや、何づらな。先生樣云ふから偉え學者にも違えなかんべゑが。」とまた一人が振り返つた。

「偉え學者なものかい、お婆さん。私は何にも知らないんだよ。」と急に素春は顔を紅くして了つた。

「でも感心な事だよ、若えのになあ、よくお參りなぞして。」

さう云はれると益々彼は困つて、擽ぐつたい一種變な笑ひ顔をした。そして照れかくしに殘りの蜜柑を一口に口へ放り込んで了つた。

「感心な事だよなあ、若えのになあ、信心な事だよ、ふんとに家の餓鬼奴等に見せてやりてえだよ、この人を。青二才の糞つたらしのくせにしやがつてよお。女郎買や情婦狂ひばかりしやがつてさ、彼奴ら、しようねえ餓鬼共だ。」と、さも感心したと云ひた氣に眉間に大きな疣のある小さな白子のやうな紅顔の老婆が、青風呂敷を首に引つ掛けたまゝ後から杖を突いて、腰を延ばし延ばし泣きめだつて來た。

「感心な事だよなあ、信心なものだよ。なあまいだあえ、なあまいだゞあぶ。」

素春もこれには何と答へていゝかわからなかつた。默つて、顔を紅くして、また

「困るよ、何にも知らないだよ、お婆さん、私には、何にもわからないんだよ。困つたな。」と頭を掻いた。

「ふつふつふ。この人かあいらしい子だあ。可愛がつてやるべえよ、みんなして。」とまた一人が音頭をとつた。

でも、それからすつかり彼はそれらの婆達から親しい同行の一人として許されて來た彼自身を喜ばずにはゐられなかつた。今まで彼を何か奇妙な異種風のやうに白い眼を以て迎へてゐた一人二人も、その時、みんなの笑ひ聲を聞きつけると、急いでガヤガヤと彼の周りに集つて來た。

「先生様、お前さん、幾歳だね。」

「三十五だよ、お婆さん。」

「へえ、そんなになるかね、から子供のやうちやねえけえ、云ふ事は。」

「さうけえ。」と彼が戯けて答へた。

「ふゝ、さうけゑだつてよ、面白え子だよお。この子は。」

一人の白髪を振り亂したくりくり眼の鼻の胡坐かいたのが嬉しさうに大きな齒の無い口を開けて笑ふと、反り返つてあつちこつちとその奇妙奇天烈な皺面を振り向けるのであつた。

「お婆さん、くりくり婆さん。」と彼も輕い護謨鞠のやうに彈むでから呼びかけると、一寸と眼で笑つた。

「あれ、くりくり婆さんて、何の事づらよ。」とまた振り向く。

「眼玉がくりくりしてて大けえからさ。」

「何の事ちや、しと、莫迦にするでねえだ。」

「まあいいよ。」と彼は笑つて、「あれは何だつたつけね、敎へてくんねえかよ。」

「くんねえかだつてよお、何をさ。」とくりくり婆も敎へて呉れと云はれたので、いよいよ嬉しさうにまた振り返つたが、一寸立ち留つて、今度は彼と肩を並べて歩るきかかつた。

「あの唵阿……。何とか云つたつけな。」

「唵阿呂藜迦娑婆可けえ。」

「ああ、さうさう。唵阿呂藜……。」

「迦娑婆可。」

「唵阿呂藜迦娑婆可。」

「さうだよ。唵阿呂藜迦娑婆可。」

「そんなら、觀世音。南無佛。與佛有因。與佛有縁て知つてるきや。」

「さあ、先刻聞いたけど。」

「知るめえ、ぢやあ普門品知つてるきや、世尊妙相具、我今重問彼。」

「知らないよ何にも。」

「ほんとに何にも知らねえのだねえ。」と驚いて、また眼玉をくりくりさした。そしてつくづく憐れむやうに彼を見てゐたが、また首背いて、慰め顔になると、ついと彼が耳傍に口を寄せた。

素春はあつと寒氣だつて身體を引つ縮めた。その慄て方が餘程をかしかつたか、思はず背後から哄と手を拍いて囃し立てた。

「ヨウ、ヨウ。」

「おつほつほ。内術談するでねえだぞ。」

「お角婆ア、今夜もあるづらがよ。」

「急くでねえだよ。ふつふつふ。」

「先生様一人占めにしやうたつてなあ俺が許かねえぞい。あつはつは。」

「それを聞くと、莫迦こくでねえ。助平どもが、なんがなんちゆうだあ。」とお角婆は急に振り返つて目くじら立てたが

また、素春の耳根へそうつと寄つて行つた。素春も紅くなつて觀念してゐたが、ふと「なあ、何んにも知らねえたつていいだあよ、ただなあ、南無大慈大悲觀世音菩薩とかうなあ、たつた一言唱へりなあ、觀音樣はすぐに出てござつてお聞き屆けなさるじやよ。南無大慈大悲觀世音菩薩となあ。」と云ふ聲が耳に入ると、急に眼を耀かして、その汚ならしい婆の顏を凝と振り返つた。

「さうだ、それに違ひない。何にも知らなくたつて、それでよい。偉らい。此の婆、よくそこまで行つてる。」と頭の中で驚いて叫ぶと、冗談まぎれに、今の今まで輕い氣持で、眞言や何かを鼻唄交りにした事を心から悔しい氣持になつた。それ位の事知らない自分でも無いとは思へるが、たゞその一言だけを心から信じて、眞に順禮するほどの恭敬な信心といふものが此の自分にあつたかと自問自答して見ると、流石に赤面しないわけにはゆかなかつた。今は却て此の無智な百姓の汚ならしい老婆風情から逆まに敎へられる事になつた。

「三つ子に敎はる。」とは此事だと彼は酷く恐縮したが、「ほんとにさうだね、お婆さん、その一言で澤山だな。」とまた眼を耀やかしてキツとなつた。お角婆はほくほくして。

「わかつたかえ、先生さん。」

「うむ、わかつたよ、南無大慈大悲觀音菩薩難有うよ。」

「さうだよ、さうだあ。」とまた嬉しさうに彼女は笑つた。

その一行が國府津の停車場へ着いたのは彼是もう正午間近であつた。着くとまた倏ち大騷ぎのゴツタ返しが演じられた。無論、三等の待合室も彼女等でいつぱいになつたが、其處で溢れたのはまたどや／＼と一二等客の方へも山崩をうつて押しへした。

「先生樣、此處へ入つてもいいづらかね。」「おお。おさきさあ。此處が空いてるだよ。」「お角婆よ、此處へ來う。此處

へ坐つてゐべえや。」「おや、凹むね、これは、何んちゆ腰掛づらよ。」「やれ、やれ、さうかい、うんとこしよ。」「ひやあ、どうするだあ、この婆ア、わしの辨當おつつぶれるだい、あふつふつ、あんまり空腹じいで眼が見えねでよ、勘辨さつし。」「おや、わつしの辨當何處へ行つたづらか。」「へつへつ、お熊さあ。お前家い忘れたんぢやねえけえ。さつきから何にも持つてゐなかつたがよ。」「ひやあ。」とまた尻餅ついた。

上りの汽車にはまだ一時間の餘裕があつたので、素春も、その片隅に行つて腰を掛けると、また二三人ぞろ〳〵と彼の前に騷ぎ立て乍ら寄つて來て、やれ辨當を食べやうかの、買つて來やうの、いやそれは高えから止したがいいの、便所は何處かだの云ひ爭つてゐた。そして蝙蝠傘を擔いだり、手提を開いたり、慌てて尻を端折つて駈け出したり、キヨロ〳〵四方を見廻はしたり、ただもう埒の無い事ばかりであつた。

「その時おや先生。」と驚いてその背後から聲を掛ける人があつた。で、彼は吃驚して顏をあげると、向うでもまた、驚いたやうに、そうつと、此方を差覗いた。

「おや奥さん。」彼も思はず立ち上つたが、たうとう取つつかまつて了つた、これはと少々マゴついて、また腰を下ろすと思はず笑ひ出して了つた。

それは先刻から見つからねばいいがと内心彼がビク〳〵ものでゐたN家の老夫人であつた。

「まあ、先生。」とその老夫人は彼の傍に來るとしつとりと其處へ腰を下ろして、「何處へ東京へですか。」と彼を見た。

「いや、巡禮ですよ、いつかお話した。」と彼女の方に改めて一揖すると、一旦脫いだ麥稈帽子をその儘膝に置いて、ニコリとした。

「おや、巡禮、まあ。」と彼女は呆きれて、暫らく向うと此方とをジロ〳〵と見較べてゐたが、ふつと吹き出しさうになつて、手を口に當てると、

「まあ、そして、あれが御同行。」

「ええ。どうです、面白いでせう。」

「ふふ、面白いどころか、あなたまあ、厭ちやありませんか、あんなお婆さんと。」

「をかしいですか。」と素春は一寸頭を掻いた。

「をかしいの何のつて、あなたおほほほほ。」と彼女はまた手を口に當てたが、

「先生は物好きねえ。」と、さも厭さうに眉を顰めた。そして、「まあ汚ない、あれちやあなた話にも何にもなりやしないちやありませんの、奥さんが可哀相よ。」と彼女はまた急に皮肉さうに眼を動かして、「いい順禮ね。お賑やかで。」と、彼方此方と見廻してゐた。

「コリヤ、コリヤ、スツトコ、ドツコイナ。」

小さな、色の白いしよぼしよぼ眼の婆が、また、腰をひねりひねり兩手で踊つて這入つて來ると、

「來た、來た、オヒリツピー、先生樣其處へござらつしやるだよ、其處へ行けよおい。」と向うから、白髪をおどろに振り亂したお角婆や、痩せひよろけの高慢さうなお熊婆や、出つ齒の胡麻鹽婆などが、ムシヤムシヤと握り飯を頰ばつたり、梅干をしやぶつたり、蜜柑を引つ啣へたりしていち時に笑ひぞめいて手を拍くと、オヒリツピー婆は、

「はい。」と踊を止めて、「どれ何處にへ。」と小腰をかがめて、その海い眼をしよぼしよぼさしたが、

「おや、これは御免下されう。いや、まづこれへ。」と何も彼も一人でお芝居して了つて、とつかはと、素春の片つ方に腰を下ろすと、「やれやれ。」と吐息をついて、「戀し戀しの先生樣。」とイキナリ彼の肩へ、ヒヨロ〳〵としなだれかかつて來た。

「おやおや。」と老夫人は横を向いた。

四

改札口を一度にドヤドヤと出やうとすると、折角の御同行が急に喧嘩腰になつて呼み合ふその混雑と云つたら無かつたが、一旦出て了つてからまた小面の憎い切符切りから押し戻されて、改めて人員調べをやらされる和尚と素春の極り悪るさと云つたら無かつた。それでもやつとプラットホームに押し並んで汽車を待迄の騒ぎ、汽車が来てからの騒ぎ、車内に這入り込んでからの騒ぎ、汽車がまた動き出してからの騒ぎ、これはもう讀者の想像にお任せする。

素春の前と傍には段々に年を老つた顔のよく似た三人の上品な町家作りの老婆達がつつましやかに腰かけてゐた。それは彼にもいい感じを與へた。その間を置いて、隣の腰かけには安城の婆さんと、それによく似た四十四五のこれも品のよいお内儀さんが膝を並べてゐた。

「お若いのによくお參りなさいましたね。」とその三人の中の一人が彼に御辭儀をした。彼も一寸と御辭儀をして「ええ。」と何ともつかぬ曖昧な答をした。

「私共はあなた三人姉妹ですが、その三人とも寡婦ばかりで。おほほ。」その一人が寂しく笑ふと、外の二人もまた寂しさうに顔を見合せて笑つた。

「ほれ、はあ、お前さん方も寡婦さんけえ、これは面白え、私のとこもねえ、先生矢つ張り何でごぜえますよ、親子寡婦であふふつ。」と安城の大婆が人の好ささうな皺面で笑ひ出すと、その中婆の方も改めて、彼の方に淑やかに挨拶をした。さうして親しさうに彼と顔を見合せて笑つた。それでも何だかその寂ひ顔が寂しさうであつた。

「おや、寡婦さんばかりが浮きものか。」と向うから顔の眞黒な鴉天狗のやうな婆が口を尖らすと、

「男一人に寡婦五人、先生、大もて。ひつひつひ。」と誰やらがまた頓狂に叫び出すと、車内が一時にわあつと噺し立てる。

「うるせえ婆ども、默つてゐくされ。」と安城の大婆が怒號つて、また大業に笑ふたが、「やれはあ大變だ、先生が若くてお綺麗だあからもう、みんなが夢中で大騒ぎしてますだあ、さぞお迷惑づらけどのうえ。折角婆どもとおつきあひして下

せえたしよ。」と面をしかめて、また、「でも旅ぐれえ面白えものはなかんべえよ、なあ、お勘婆。」と頭の後ろへ聲をかけた。

「さうよ、さうよ、年に一度の法樂だあものなあ。」とお勘婆もその後ろから、さも嬉しさうに相槌うつて、また食べ殘した挽わり麥の握り飯をムシャリムシャリとやらかし初めた。

それは誰もが同じやうにいそいそして浮かれてゐた。が、誰もが眞底は寂しくて溜らなさうに見えた。隨分とすれつからしの一同であつたが、それはもう色も戀も褪め果てて了つた今の寂しい老齡から、無理やりに巫山戯散らして飛び跳ねなければ、どうにもその寂しい魂の遣り場に困ると云つた風な、畢竟は悲しい法樂の旅に過ぎなかつた。彼女達がさうして年を忘れ老を忘れて、まるで嫁入り盛りの自墮落娘のやうに燥ぎ立つてゐるのが、却つて淺間しいやうにも、また却つて寂し過ぎるやうにも、素春の眼にはハツキリと映つて來た。

「何といふすれつからしどもだらう、だが何といふ悲しい骸骨踊りだらう。」

さう思ふと、素春も溜らなく心細くなつた、さうして泌々と眼を伏せて、急に思ひ出したやうに手提の中から握り飯の包を開くと、窓の方を向いて噛ぢり初めた。

線路の兩側の土手はもう春の若草で眞つ靑であつたが、その土手の上を、二三間隔位に、紅い風船玉を浮かした子供や、櫻の枝を擔いだ男や、赤ん坊を負つた山高の男や、玩具の汽車を持つた內儀さんや、白い兵兒帶を胸高に幅廣くしめて横つちよに太く結んで飛れた在郷の若い衆やが、一人づつ立つた儘足も動かさずに、ピョイピョイと汽車と反對に飛んで行く、それがまた面白いやうに向うから向うからと現はれてはピョイピョイと消えて行くのであつた。

汽車が進むに連れて、向うから來る人數がいよいよ絡繹と繁くなつたが、何でもその近在に鎭守の祭でもあるらしい。宮幟のはためきまでが聞えて來さうに思つた時、汽笛が鳴つて、「二の宮、二の宮。」と呼びながら驅けて來る驛丁の聲々が彼の耳元に起つた。と、素春の眼には、その時までに停車場の大きな白蠟盤の大きな柱時計がピタと留つて了つてゐ

たのであつた。そこで皆は下りた。

驛の外へ出て、さて何處へ行くのかと云ふと、和尚の積りでは、七番の金目と六番の飯山とを打つて今晩は泊り、明晩は八番の星野谷から平塚へ出て鎌倉泊り、その翌日はその殘りの札所四枚丈濟ますと、江の島や藤澤の遊行寺やを見物をしてもその日いつぱいには充分寺へ歸れると云ふ腹であつた。で、日々の歩行程せい〳〵五里。今日の行程は何でもこれからもう一二里と云ふのであつた。

が、その豫定は和尚の、大誤算であつた事が追々に證明されて來た。全く地理不案内のせいであつたが、之が爲め一同が思はぬ難澁と不相應な行路の困厄とを受けねばならぬ仕儀に立ち到つた。

殊にその日は初日でもあり、まだ三里とは歩いてゐなかつたにかかはらず、もう一同はかなり疲勞してゐた。聞けば金目までは二里半、飯山は何里あるかわからぬ聞いた事も無いと云ふので、すつかり氣を落してもうワヤワヤ愚圖ついたが、まあ行くところまでは行かうといふので、またガヤガヤと長旅を押し立てて二の宮の宿はづれから、昔の東海道の松並木へ差しかかるのであつた。櫻や菜の花の散々と咲いた方々の藁家からは何事かと娘や若いのが飛び出して來た。

そしてそのあまりに異形なよぼよぼ順禮の風體を見ると、また誰もが腹を擁えたり手を拍いたりしない者は無かつた。

「何だ、何だ、何と書いてあるだ、あの旗は。」

「はつはつは、婆の行列、よめにくいだ。」

「ヨウヨウ、ふんとに嫁憎くいだ。あつははつはあ。」

婆どもなか〳〵負けてはゐなかつた。

「ふん、何が嫁憎くいだ、親不孝奴。」

「穀つぶし。」「二本棒野郎。」「お婆さんの肩でもたゝけ。」

行くうちに道は岐れてその左手から清々しい簫箏の聲や、賑やかな鉦や太鼓、長閑かな物見高い群集のぞめきなどが聞えて來た。そしてその間には風船玉のピイと鳴る笛の音や、覗きからくりの繪解や、猿芝居の陽氣な三味線の囃子なども交つて、まことに田家の春蒐らしい祭の催しであつた。一行はその方へと思はず雪崩れて、浮々と輕い足どりで御詠歌をあげあげ進んで行つた。素春もその鄙びきつた群集の波に揉まれ、揉まれて、物珍らしく露店の前に立つたり、からくりの繪看板を覗いたりして行くうちに、心は何時かしらその子供の昔に還つて、赤と綠の縞のついた小さな西洋獨樂や岩見重太郎の繪本などを、よく乳母の背中で大切さうに握りしめた儘、すやすやと眠つて了つたその水天宮の水祭の事などが思ひ出されてならなかつた。彼はたうとう、一番大きな紅い風船玉を一つ買つた。

それから麥畑の中の白く曜いた一本道を、向うの小山續きの青い空を見上げながら、一行はゆる／＼と進むのであつたが、折からの南風に素春の手から放たれた紅い風船玉は糸をつけた儘、フワフワと舞ひ揚つて、その向うの向うの遠い青空のあなたをめがけて小さく小さく流れて行くのであつた。

白髪の婆達は急に鬨の聲をあげて、「玉ヤア。」「風船玉ア」などとひとしきり手を拍いて子供のやうに、その後を追つかけてゐたが、その紅い玉も遂には何處へ行つたか、影も形も見えなくなつて了ふと、また急に彼女達は默つて了つてぐどぐどと話は例の愚痴つぽい嫁の讒訴や生活向きの不平やなどに落ちて行つた。

「お前んちのお袋も何だよ、もう大概にくたばりやいいがえ、隨分子不孝な婆アだあ。」

「さうだともよ、しよんねえ婆アつちやありやしねえ、酒ばかりくらひやがつてなむ。浮世は花だよ、くよくよなさんな、お歌ひなされよだとさ、まだ色男でもこれからこさへやうつてえ氣だあから恥知らずの婆アだよ、ふんとに。」

さういふ婆ももう彼是六十にも手の屆きさうなよぼよぼの皺つ面であつた。

「八十にもなりやがつて嫁いびりも凄まじいやな。」

その婆はまたつくづく情けなさうに溜息をついたが、

「それでなア、俺は稼ぎに出る、餓鬼共も海にゆく。爺は網場へ行つて、あとはあの婆アひとりづら、どんな事成べえか知れねえでな、爺が出る時きやな、入用の米だけ茶碗に一杯預けといつてな、あとはチャーンと米櫃に鍵掛けてよいて出る事に成てるだ。俺は俺でな、爺の酒喰えが油斷がなんねえからの、ぽつ〳〵内際で貯金してるだ。通帳一つ見せられやしねえ、だからの、俺も毎朝の事だけれど、山へ草刈い出る時はよ、通ひ帳と檢印をチャーンと懐に入れてるだ。餓鬼共が可哀相だあからの。」

母親に留守して貰つて、それで安心がならずに、米櫃に鍵を掛けて出る子の爺も爺もだが、その亭主の爺に安心ができずに、貯金帳を毎朝ないしよで懐に匿して出ねばならぬ婆も婆だと、素春はもうその話だけ聞いても浅間しくて、溜らず顔が紅くなつた。

「何といふ事か、これが親子か。これがみんな貧しい人間どもの通例の生活であらうか。」

これはどうにかせなくてはならぬと彼はまた頭を深く傾ぶけ乍ら、考へ考へ歩るくのであつた。

その頃から、ズボン下も穿かずにぢかにズボンを着けてゐたので、彼の軟らかい股や膝の表皮が、その粗らいスコッチの毛に磨れて、いつからとなくヒリヒリした痛みを感じて來た。ばかりか、あまり肥滿つてゐるので、自然と股ずれがする、歩るく度にそれが觸る、益々痛みが激しくなる、それに靴が意固地に固く硬ばつてゐるので、足の裏や指尖やがいよいよ水ぶくれがして來る。それで素春の歩みも次第次第に遲くなつた。

何時からとなく彼は褐色の中折をかぶつた背のひよろ〳〵と高い痩せぎすの中年男と肩を並べてゐた。その男は此近在の××宗の感化院の監督の一人だと彼自身を説明した。さうして不良少年を監督する事の困難と、さうした精神的の善化の中々に及ぼし難い事を巨細に彼に向つて、稍自慢らしくぽつり〳〵と訴へ初めたのであつた。

「院長の×さんも隨分德の高い方ですし、宗門の方でももともとが宗教的に高い理想もあつてさういふ德育事業をも思ひ立つたといふ譯ですがね、どうにもかうにも彼奴らには腹が立つてなりませんよ。然し考へて見ますと、彼奴らが惡い

のぢやなくてみんな彼奴らの家庭が惡いのです。それに社會もよくはありません。さう思ふと可哀相ですからな、まあ私にしても一身を犧牲にしてでもどうにかいい感化を與へてやり度いと思つて、それぱかりで生きてゐるやうなものです。でなければ何であなた、この物價騰貴の當節に安月給で、あの油斷も隙もならぬ泥棒の子や掏摸の小僧どもと一緒に寢起きができますものか。この安月給で。」

だが、その男には何と云つても、矢張この安月給が可なり癪に障つてゐるらしく、素春にはふと思へて、それが何より頭に強く響いた。

おい、おい、そんな處で、のらくらしてはいかん、早く行つた。」

近づいて見ると、菜の花畑の土手下に荷車を一輌放り出して、小生意氣な眼の敏捷(はしつこ)い人相のよくない十五六の少年が二三人泥まみれの野良着を着て、その荷車に腰掛けたり、その傍の櫻の枝に登つたりしてゐたが監督の一喝に遇ふと、直ぐと澄した顏をして、揃つて帽子を脫いだが、

「はあい。それそれ大變だ。婆アのお尻を追つかけろ。ハイチヤイ。」ワアと叫むで一齊に荷車をガラ〳〵と引くと、闇雲に一行の眞ん中めがけて衝き入つて行つた。婆共は慌ててよたよたと兩側に立ち別れたが、倏ち、恐ろしい樣々の罵聲が其婆共の間から湧き返つた。

「なんだ、此の餓鬼、覺えてゐくされ。」

「小僧つ子。」

「青二才(あをにさい)。」

「鼻つたらし。」

「ちよつ、生意氣べえしやがつて、なんだ此の野郎。」

「へへん、色女の一人もこさへて見やがれ。」
感化院の小僧つ子どもゝもかうなると、中々負けてゐなかつた。
「糞つ婆ア。」
「骸骨。」
「死損ひの慾ばり婆ア。」
「狸に搗かれて死んぢやへ、こん畜生。」
そしてワアイ、ヤハハイ、ワアイ……と皆で手を拍いて一目散に逃げると、ハイチヤイ、ガラ〳〵〳〵と枝道へ駈け下りて了つた。
瘦せぎすの背高は「こらつ。」と此方から怒號つたが、すかさず、
「あれです、あれですからね、全く手もつけられませんよいくら叱つても、」と面をしかめた。
「まあ、可愛がつておやんなさいよ、お叱りならずに、あんなのは、（何でもさうですが）可愛がつてやるに越した事はありませんよ。」と素朴も笑ひ乍ら見送つてゐた。そして、「此方のお婆さんも中々元氣でせう。」とまた他意の無い眼付で彼を振り返つた。
「さうですな、えらいお婆さん達で。」と瘦せぎすも吹き出したが、その岐れ道に來ると丁寧に帽子を脫つて、
「金目へ行らつしやるなら、この山狹間を何處までもおいでになれば、もう譯はありません。せい〳〵一里半位のものですよ。それに金目の觀音樣は今、櫻が眞つ盛りでせうよ、」と云つて、「では行ていらつしやい、左樣なら。」と荷車の後をコツコツとまた克明に步るいて行つた。
素朴もおとなしく帽子を脫つたが、また金目の觀音樣も櫻の盛りかと思ふと、心から足が輕くなつた。だが、彼の內股の痛みは益激しくなるばかしであつた。

行くところに紅い椿の花が咲き、それが山阻の小笹の蔭に餘つ程腐れて落ち溜つてゐた。しきりに鶯の啼き聲をしてゐる寂しい百舌の聲にも出逢つた。村里にはおきまりのやうにまた凸凹の鏡に椅子一つのお粗末な床屋や、その端れにはまた紅い椿や櫻の花の散りかゝつた貧乏さうな酒屋が一軒位は必ずあつた。

安城の大婆はさうした酒屋の一つに入つて、早速二合瓶を縄でブラ下げて出て來ると、すぐにオヒリツピーが飛んで行つて、その後からイヤに小尻を空に向けてピョコ〳〵した。

「オヒリツピー、御神酒でもいただかうよ。とてもきやつたるくて歩けはしねえがや。」

「御意で。えへへ。」とまた額をポンと片手で叩くと。オヒリツピーは直ぐと踊りの手になつて、

「下地は好きなり、御意はよし。それ、ドツコイサノドツコイサノ、ドツコイサノサ。」とその二合瓶を受取つて、

「いざ、先づ、まあづ。」と片手をあげて小さな髷の頭を下げると、倏ち、芝居の友奴といふ格で「へイ、へイ、へイ〳〵へへへノへ。」と續いて小腰をまた屈めた。

「腹が減つては戰がならぬ、………。」

浮かれ騒いでゆくその一團の上に、ともするとまた、山の櫻がハラ〳〵と散りかかつた。

春は全く今が酣と思へた。

花を追うて花に行く。それこそ全く三春の行樂と云はうか。金目の觀世音は花水川の滑らかな流れの向うにあつた。

花水川の兩岸にはまだ若い薄紅櫻の花の並木が、遥かに東の方へ續いて、末は煙霞と棚曳いてゐる。

疲れきつた一同はその繚亂たる花の波を見ると、ひとしく娘のやうな歡聲を、長い板橋の此方から擧げて、急に、いそいそした歌聲になつて、「なア…ア…に…ごオ…オ…とオ…もオ…。」と第七番の御詠歌を流し初めた。

いまはかなひの

くはんせおん、
こせあんらくを
たれかいのらん。」

が、その花の並木が平塚から行程一里の一本道だと人から聞くと、直ぐに腹立たしげにチエッと舌うちした婆もあつた。

「何んだ、莫迦らしい事ぢやあの坊主、人に一里半の餘も無駄骨折らせやがつてよお。平塚から廻ればのうのうと歌つて來られただに。あの花の下をよお。知つたか振りもようできたぞい。」

「さうだよ、あの坊主いやに見識ぶつてやがるから癪だよ、こんなに歩く位なら、俺來なければよかつただ。嘘つ吐き坊主。」とまた一人が爲やうの無い我儘っ子のやうに地團太踏むだ。

「お婆さん、さう云ひなさんな、もう觀音樣が見えたぢやないか。」

素春がニコニコしてこれを取り做した。彼の股ずれがまたヒリヒリした。

第七番相模の國大隅郡今は中郡金目村、金目山光明寺、本尊聖觀世音菩薩、おん丈五尺、行基菩薩の開基にして開山どうぎ上人なりと云ふその寺は、古るび盡してはゐたが、水にのぞむで莊嚴な山門もあり、本堂の風致も飯泉よりは一倍と勝れてゐた。そしてまた櫻も水に映つてゐた。

此處でもまた一と騷ぎした。下の庫裡へ行くと、また此處も留守居の外には閑寂として人の氣はいも爲なかつた。素春と和尚とは代るがはる納經の文字を書いたり。笈に朱印を押したりした。

それがまた素春の心を温かにのびのびと快い春の日永に融け入らせた。

「南無大慈大悲觀世音菩薩。」

そのお角婆から教はつた一言を、彼は心靜かに念誦して、「長閑な春だ。」とまた獨語するのであつた。

留守居の爺に訊けば、飯山までは六里の餘もあると云ふそれに山の中故旅籠も有るか無いか怪しい。とてゝまた夕景までには行きつく筈もなし。伊勢原の町が此處から一里半しか無いから、其處で一と先泊つたがえゝと云つた。それではさうしやうと云ふ事になつた。

其處で可なりに時間が經つたので、一同が花の堤にかゝる頃にはもう日射は可なり傾いて、もう彼是四時に近かつた。

安城の大婆に二三の根府川組は、

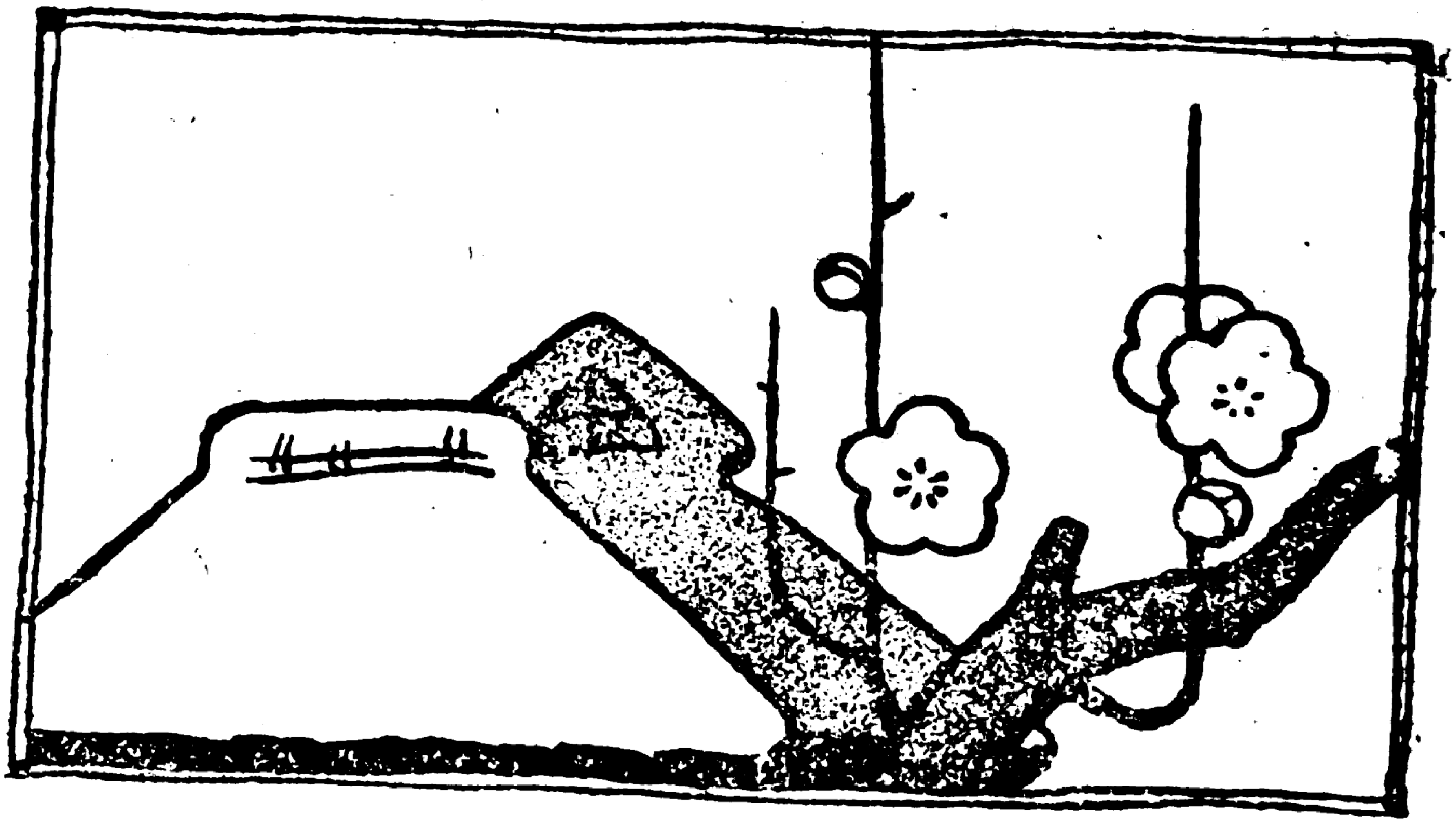
「新家のお里が何でも此處ら邊に嫁づいてゐる筈じやが、ちよつくら訪ねて見やうか。」

「おゝそれがいゝ、わしも逢ひたう思ふとつた。伯母さんが行くなら行つて見やうかの。」といふ風で、人に訊き訊き、その花の堤から一つ二つ下の細い板橋を渡つたり、引き返したり、また渡つたりして、たうとう向うの花の蔭にまぎれて了ふと、けん／＼と今度は川原の何處やらで、卵を生みに下りた山雉子の啼き聲がして、後はただ深々とした花水川の水の瀨ばかりが聞こえて來た。

榮春はその時、ただ一人ゆつたりゆつたりと、その堤から下りて、やや黄ばみかけて光つて來た野原のうねうね路を見ず知らず北の方の伊勢原の町へと辿つてゐた。見ると、一同はもうズツト遠くの小さな城郭めかしい杉の森や雜木山の蔭を菜の花がくれに歩るいてゐた。

彼はもう可なりに同行の亂痴氣騷ぎに疲れてゐた。それに足は痛む、一足毎に火のつくやうに股が擦れるので、なるべく連に離れて、ゆつくりと四方の春景色を眺め乍ら、兎に角晩方までにはその町へ行きつきさへすればいいといふ氣持になつた。

ある小川では枯れ枯れの蒲と早咲きの白い野茨の花の蔭に蹲むで、白髯の長い品のいいお爺さんが、これもゆつたり



謹賀新年

大正九年一月一日

株式會社秀英舍

と釣竿を延べてゐた。

素春は「釣れますか。」と小橋の上から聲をかけた。さうした事も如何にも片田舎の春の閑寂味が見えて、彼には嬉しい眺めの一つであつた。

「いや、中々でござわす。」とそのお爺さんは彼を見上げてまた眼を瞑つた。おそらく魚を釣らうと來たのでは無いのであらう。ただ眼を瞑つて無念無想と云つた風情であつた。

然し、その水面には泛子の頭が一點、チョツポリと赤く浮むでゐた。が、その泛子とてもただ水面に浮むだ儘でまた少しの微動をすら見せなかつた。

素春もまたその小川の野茨のかげに腰を下ろして、のうのうと「朝日」の烟を吹かし初めた。

彼が伊勢原の町へ這入る頃には、隨分と永かつた今日の一日もどうやら夕暮の薄明りになりかけてゐた。彼方此方の小汚ない小家續きからは薄紫の濕やかな炊ぎの烟が小家らしい柴のにほひや枯れ松葉の燒け燻るかをりなどと共に、廣くもない路筋へ流れて、チラチラと黄色い灯が點いた駄菓子店や車の帳場も目について來た。でもまだ、廢家の壞れた壁のうしろで、遊び足らぬ子供の喚き聲も暮れ殘つた白い櫻の花の蔭から聞えてゐた。

かうした夕方に見も知らぬ町の入口へ疲れた足を引きずり引きずり、その夜の旅籠をあれかこれかと窺いてゆく旅人の心もちは世にも寂しい中にまた何とも知れぬ心の小躍りがするものである。素春も恰度さういふ旅の順禮として、先發の彼の同行の跡をそは〳〵と探ね求めて歩るくのであつた。

と、とある町の眞中で、ふとぼうと赤い火が燃え上つたのであつた。驅け寄ると、それはその薄暗がりに幽靈のやうに誰だか彷徨いてゐた、その片袖が焔になつて燃え上つたのであつた。あつと云つて、彼は矢庭にその手に持つた手提袋で引つぱたくと、――その幽靈のやうな人影が倒ち蹌いて悲鳴をあげた。その拍子に其奴が狂氣のやうに「あれあれ

あれあれ。」と火のついた左の袖を振り散らしたが、見ると、それは白髪の姿であつた。驚いて、二三度續けざまに彼はその火を叩いて、やつと揉み消してから、その顔を見ると、それは彼の同行の一人で、驚婆と人が呼むでゐるうつそり者の少々頭の怪しい鼻の黄色い老婆であつた。

「どうしたい、危ないじやないか」と彼が肩をたたくと、

「火が點いたあ。」とそのまだ燻つてゐる燃えかけの片袖を泣きめだち乍ら、急に慌てて押し揉むだ。

締りの無い大きな口には煙管を啣えた儘でゐる。その驚婆も連れに遅れた一人であつたが、宿が見つからぬので、ただもううろ〳〵と其處ら邊をマゴマゴしてゐたのであつた。それにしても、煙管を啣えて煙草をのみのみ歩るいてゐたのが悠長な、流石は驚婆であつた。雁首の火が落ちて袂に燃えついたのも知らずにゐたのはなほさら寛々たるものであつた。

「どう爲べえ、情けねえ。」と云ふ。その姿に、「困つたな、それでもまだよかつたよ、宿は見つかつたかい。」と訊ねると

「見つからねえだ。」とたゞポカンとしてゐた。

と、コトコトと朴歯の下駄を鳴らし鳴らし和尚がこちらへ急いで來た。

それを見ると、急に悲しくなつたか、驚婆はその街の眞ん中で、初めておいおいと泣き出して了つた。

宿は阿夫利屋と云つて、可なり大きい老舗らしかつた。灯がカン〳〵と點いて、土間の臺所では突然の團體客で、番頭や女中がゴッタ返してゐた。

三間ぶつ通しの廣坐敷には、もう大勢が、三々五五に押し固まつて、彼女達もただワヤワヤ騒いでゐた。それでも風呂敷や蝙蝠傘や手提袋を自分の側にしつかと引き寄せて、何處に盗かうか、油斷がならないと云つた風で、皆が皆キヨロ〳〵と眼ばかり光らしてゐた。やれやれと足を投げ出して片手で息をきつて擦つてゐる婆も、その片手ではしつかと

自分の持ち物を押えてゐた。

やがてして、渡の櫻をたづねて新家のお里のところへ立ち寄つた安城の夫婦と、その連れの細とが、「あゝ、きやつたるい、きやつたるい。」と異口同音にぞめき作ら、ドヤ〳〵と這入つて來た。

素春は上つてから、早速靴下を脱いで足の裏を見ると、どちらも赤く腫れ上つて、其拇指の爪には一つづつ豌豆大の白い水ぶくれができてゐた。

「まあ、旦那、痛かつたでせう。」と安城のお内儀が痛まうに差覗くと、一寸と手で觸つて見た。

「ええ。」と彼は微笑した。彼は何だか、その淑やかさうな中婆さんが好きであつた。

「これぢやあ、あなた、とても痛いでせう。明日はゴム足袋にでもなさいなしよ。買つて來てあげませうか。」とまた彼の足の指に觸つて見た。

「ええ、難有う、いいんです、私が買つて來ませうよ、それにゲエトルもついでに締める事にしませう、本式に。」

「それがようございますわ。それに私も。」と云つて「御免なさいまし。」と片足をそつと延ばすと、兩手で擦り擦り

「もうへとへとですの。あれではねえ」と眉を顰めた。

「全く、これ、御覽なさい、私の足はペタ足でせう。だから駄目なんですよ。それに破れ靴だからね。」と彼は開けすけに笑つて、片手でそのペタ足をパタパタと叩いて見せた。彼女も「まあ。」と云つて吹き出した。

素春はすぐに外へ出て、前の洋品店で、ゴム足袋と、霜色のゲエトルと。メリヤスのズボン下とを買つたが、靴の仕末に困つたので、そこで空函を一つ貰つて、泥まみれの大きな破れ靴を小包で妻の元に送つて貰ふ事に賴むだ。「ええ、よろしうございますとも。」とその店の主人は愛想よく受取つて、その紙函を恭々しく疊の上に上げた。

「おう、俺の破れ靴も出世したな。」と彼が面喰らつて感嘆すると。

「へへ、御冗談で。」と如才が無い。

寮番が歸つて來ると、あちこちと熱心に周旋して廻つてゐた和尚が素速く彼を見つけて、先生お湯はいかゞです、入つていらつしやい。と聲をかけた。

「沸いてゐますか。」とそのまま素つ裸になつて湯殿の硝子をガラリと開けると、中にはランプが點いて、溫かい白い湯氣がもやもやと立ち籠めた中から、

「そら、ごさつたぞ。噂をすれば影とやらだつてね」と一人の中婆が倏ちげら〳〵と笑ひ出した。

「あら、先生。」と安城のお内儀がそこそこに身體を拭きにかかつたと、

「先生樣、みんな先生樣に悃惚れしてますだあ。あふつふつ。」と今度はほんたうによぼよぼの皺くちや婆が湯槽の中から白髮頭だけ出して、齒の無い大きな口を耳根まで開けて、また、「あふつふつ。」と笑ひ出した。

彼は思はず顏へ上つたが、今さら逃げ歸れないので、「いいかい、入つても。」と笑ふと、「さあさあ。」と誰かが今度は親切に應じて呉れた。湯へすぽりと蹲むと、それこそ激しく疼痛が足の先からヒリヒリと上つて來たが、それでもいい氣持に身體が溫まつて來た。

彼の周りを見ると、どれもどれもが白髮頭であつた。そして、それが恰度色の變つた曝らし首のやうにフラフラと湯の上に浮むでゐた。

「先生樣、何が面白うて、こんな白髮婆と順禮さつしやるだ。」と一つの首が笑つた。

と、また、「惡るいお友達ができたで、さぞ奥さんが嫉いてござらつしやるだろな」と、一つの首がにたにたした。

「莫迦云ひなさんなえ、こんなお婆どもがどうするものけえ。ねえ、先生樣。」とまた一人が云つた。

「ふん、これでもなあ、篤啼かせた春もある、とね。」とまた一人がほざいた。

彼がながしへ上ると、寄つて集つて無理やりに背中を流して呉れたり、足を洗つて呉れたりした。

彼はたゞ「難有う、難有うも、うい、もういい。」と云ひ乍ら、その爲す儘に任してゐた。そして、多於婬欲、常念

恭敬、觀世音菩薩、便得離欲、と心の中で繰り返して見たが、これではそれにも及ぶまいと、をかしくなつた。

一としきり騒いだあとは、婆達もまた默つて了つて、ただ一心にその皺面や皺くちやの手足をこし／＼とこすり初めた。南無阿彌陀佛と誰かが湯へまたすぼりと浸つた。南無觀世音菩薩とまた誰やらが、もごもごと湯の中で口をしてゐた。

「ああ、いい氣持じや、順禮もいいなえ。」とまた一人が心から溫たまつたらしい息の根をほうと吹いた。

さういふ時、みんながおとなしい、心からの安らかさを覺えたやうであつた。

八時近くになつてもなか／＼膳部は揃はなかつた。隨分と待つて待ち草臥れた一同は腹をペコペコに空かした儘、仕方なく、あちらこちらで輪を作つて、また御詠歌や、新よしやを歌ひ出した。

床の間を背にして陣取つてゐる片川組の中でお大さんと云ふ大きなお角力のやうな、まだ水々した、少々高慢ちきな赤面の婆が中心になつて音頭を取つてゐたが、それは美しいいい聲であつた。調子も非常によく整つてゐた。さうして手を拍いて唸り出すと、その一團のみんなが一緒に手を拍き連れて合せてゐた。

これはこの世のことならず。
死出の山路のすそのなる
賽の河原の物がたり、
きくにつけてもあはれなり。
二つや三つや四つ五つ、
十にも足らぬみどり子が、
賽の河原にあつまりて、

父上戀ひし、母戀ひし、
戀ひし戀ひしと啼く聲は
この世の聲と異かはり
悲しさ骨身をとほすなり。

悲しい、そして派出な、鄙びた、ともすると源氏節のやうな節廻はしで、調子をそろへてやると、可なりいい聞き物であつた。それで部屋中が闃寂として聽き惚れてゐた。と、突然、反對の隅つこから、「熊谷次郎は聲をかアけエ……い。」と、突拍子もない調子はづれの金切聲が飛び出したので、みんなが一度にプッと吹き出した。そしてもう、ワアワアと云ふ騷ぎになつた。

「ヨウヨウ。」と誰かが手を拍いた。

「千兩。」とまた誰だか手を拍いて、くすりと笑つた。

と、向ふでは褒められたと思つたか、それとも逆上て夢中なのか、ますます度はづれて來た。

「いかに若君、聞きたまへ……い、
御運きはまる此の上はアい。
御名を名のり、熊谷にイい、
てがらをゆウづり玉へかアしイ……い。
尋ねに敦盛優しげにイい。
名乘るまじとは思へ共オい。

今は何をかつつむまじイい。
我とて平家にかくれなきイい。
むかんの太夫敦盛とォい。
なのり玉へば熊谷はアい。
我が子の事をイ、思ひやりイい。」

楽春ももう溜らなくなつて引つ繰り返つて笑ふと、和尚までが、はつはつと笑つて、「うまい、うまい。」と手を拍いた。一同ももう腹を擁えて、歯の無い口でふはつふはつと泣き笑ひした。その中でも茶目ぞろひの根府川組はもう凝としてはゐなかつた。

「誰づら、變な聲出すじやねえか。」

「ふふ、ありや牛屋の婆ぢやねえか、小田原の。」

「ふつ、牛屋の婆ア、褒められたんじやねえんだい。やあい。」

「をかしいねえ、先生、あれで御自慢のつもりでごぜえますよ、ふふ。」と最後に安城の大婆が、さもをかしさうに手を口へ當てた。

いや、それは最後のものではなかつた。

この時、晝間の二合瓶の殘り酒をあまりの佩じさに、こつそり拜領に及んだオヒリッピーが、もう可なり空腹に醉ひが廻つて來た、恰度その頃だつたから溜らなかつた。突然何處から取り出したか、花見のヒョットコ面を引つかぶつて扇子を開いて、飛んで出ると、イキナリ、「オヒリッピイ」と奇妙奇天烈な戯け聲を頭の頂邊から天上さして、また「オヒリッピイ」と腰をひねつた。と、お凸の、まんまる眼の、赤いヒョットコ口が、一緒に「オヒリッピイ」と上

を向いた。

「オヒリツピイ、

「オヒリツピイ、

オヒリイ、オヒリイ、オヒリツピイ、

ピイ、ピイ、ピイ、

オヒリツピイ、

オヒリツピイ、

ソレ、オヒリイ、オヒリイ、オヒリイ、オヒリツピイ。

ピイ、ピイ、ピイ、オヒリツピイ。

オヒリツピイ。……」

おしまひには、見れば見るほど笑はせるその呆け面のヒョツトコが、へとへとよたよたになつて、ふらふらし乍ら、ただもう出まかせに、コリヤサのコリヤサのオヒリツピイ、スツトコヨヤサのオヒリツピイ、蒸汽や出てゆくオヒリツピイ、煙はのこるオヒリツピイ、スタコラセツセのオヒリツピイ、プウプウプウプウ、オヒリツピイとなつてどさりと疊に倒れて了つた。

一同はもう呆氣にとられて、ハアハア云つて手を拍いた。

すると、眞紅な長襦袢一つになつたお角婆が、小田原提灯を腰の横つちよに結はえつけると、そのまま、「コリヤコリヤ、かつぽれ、かつぽれ、」甘茶でかつぽれ、鹽茶でかつぽれ、」と狂氣のやうに、千變萬化の秘術を盡して情痴の限

りを極める。そのをかしさと云つたら、口にも筆にも書き現はせるものでは無い。

さうなつて來ると、誰も彼もが一緒に浮かれ出して、無茶苦茶矢鱈に踊り出す、歌ふ。その猥雜と醜態とは、若い素春にとつてはとても正視してゐられる譯のものでは無かつた。だが、それが殆どもう幽靈に近い白髪の婆だけに、それは一層凄くて恐ろしくて淺間しい極みであつた。まるでそれは地獄繪の骸骨踊りであつた。

それでも膳部が並ぶと、誰もかも口一つきかなかつた。ただ夢中になつて眼を皿にして掻き込む、ムシヤムシヤと肴を引つ啣える、まるで化猫屋敷の眞夜中の會食見たいに、たゞもうしんねりむつつりと白髪頭を下へ向けて、チュチュチュと音ばかりさしてゐた。が、その中でも或る一人の婆なぞは、近所の皿に殘り物でもあると、直ぐに掻き集めて、

「俺の腹塵埃溜だあ。」とほざいてゐた。

その夜食のはじめに素春は和尚に「お酒一つやりませうか。」と云ふと、和尚も「結構ですね、それでは二人で一本位にしときませうよ。」と自身から取りに行つて、熱い酬をして來ると、先づ素春の盃に一杯注いだ。素春も和尚に注いで、また。

「みんなにお酒でも奢りませうかね。」と云つた。

「いや、それはお止しなすつた方がいいでせう、大して飲める口も無いやうですから。」と押し留めたのでその儘になつた。然し、二人が三杯づつほど飲むで差置いた徳利は、いつのまにか誰かが後で持つて行つて了つた。それから殊勝らしく酒一本とらずに飯ばかり掻き込んでゐた爺の一人は、しばらくすると一寸前に出て眞紅な顏をして歸つて來た。さうして

「宿屋で一本二十七錢の酒なぞ勿體ねえだ。町へ出て見い、十七錢でええわい、差引十錢がとこ莫迦らしいじやよ。あつにはあ。」と御機嫌であつた。

素春はたうとう煎餅を四五山ほど和尚に云つて運ばせて貰つた。みんなは初めは極めて遠慮勝ちに、ポツリポツリと

やつてゐたが、驚いたには半時間と經たぬうちにそのお盆もうすつかり空になつて了つてゐた。そして、銘々は一人で掻き寄せて袋に入れて了つたの、俺は三枚しか食べなかつたの、俺はたつた一枚貰つて收つといたのを誰それが盜んで了ふたのと、可なりゴタゴタしたり、睨みあつたりしてゐた。然し、素春には丁寧に一人一人宛畏まつて禮云ひに來た。

さて、その晩、食事が濟むだ後の一行は、もう以前ほどの空元氣も立てず、ただ滿腹してぐつたりと足を投げ出したり腹を撫でたり、溜息を吐いたりしてゐた。

オヒリツピーはまた澄ました顔して安城の親子の足を揉むだり、肩をたゝいたりしてゐた。その跡でお内儀が何か紙にひねつて渡すと、オヒリシピイは非常に生眞面目な顔を一寸見せて、御辭儀をすると、慌てて、その紙包を袂に押しかくして了つた。

「あれはあなた、按摩さんですよ、御存知。」とずつと跡で安城のお内儀が彼に囁いて聞かした。

「ほう。」

あれはたつた一人者でねえ、あなた、小さな小屋に豚と隣り合せに住んで、一人であゝして平生は按摩をしたり、酒の座へ出ては御愛嬌振りまいたりしてゐますの、尤も却てそれも安氣かも知れません。あれで別に惡氣がある譯ではなし、ただ人を面白がらせるばかりですから、もう根府川ではあれが無くてはならないものになつて了ひましたよ。それで一寸見ると隨分剽輕で巫山戯きつてはゐますけれど、なかなかあれで家にゐる時は鹽一つぱも無駄にしない程の、それは節約家ですよ、正直でね。」

素春も、若干かを紙に包むと誰にも知れないやうに呼び出してオヒリツピイにそつと渡すと、彼女はまた慌てて頂いて袂に押しかくした。そして「コリヤサノコリヤサノヨイトマカセ。」と踊り立てるやうな手つきをして内へ這入つて行つたが、その聲にはすつかりさういふ時は、いつもの張りも元氣も見られなかつた。

いよいよ、床を取る段になると、また急に一同が燥ぎ出した。それは恰度消え壺きやうとする蠟燭の灯が、突然パッと思ひもかけぬ大きな火焔を照り輝かすその斷末の一瞬によく似てゐた。

老婆達は和尚と三人の爺とを向ふの離家に追ひ遣つたが、素春が續いて立たつとすると、中でも茶目ぞろひの根府川組の一團が、一度に手を擴げて彼の行手を遮つて了つた。それを見るとまた皆がヤンヤと囃し立てた。

「さあ、今夜は先生樣を俺らの眞ん中に寢かしてあげるだ。」

「さあ、先生樣を分捕つた。もう何處へも逃がすこつちやねえだ。」

「先生樣、こつちござれ、今夜はみんなで先生樣を王樣にしてあげるだ。」

お角婆を初め、オヒリツピー、おさき婆、などが先立ちで、その眞ん中に三四枚ほど蒲團を積み重ねて、それを王座のやうに一段高くすると、

「いざまづ、御寢あられませう。」とオヒリツピイ婆が芝居がかりで、その下にハツと平伏すると、一同、へへえとまたその周りを押つ取り圍むで畏まつた。

「冗談しちやいけないよ、困つたな。まあいいや、寢て遣はさう。」と素春が洒落して悠然とその上に坐ると、それから顔を眞紅にした。

「あふつふつ、それお掛け申せ、お枕を差上げい。」お角婆がほくほくもので聲をかけると、オヒリツピイがハハツとまた、横になつた素春の頭の下にそつと枕を當て、上蒲團を一二枚掛けて、裾を廻つてトン〳〵と叩くと、

「やれやれ、これで先づ安堵。さてこれからが臣下ども。」と、暫らく一緒にバタバタしてゐたが、倏ちのうちに素春の兩側にお角婆とおさき婆。それに對して安城の親子婆さん、オヒリツピイ、その他が並んで、白髪頭や胡麻鹽の小さな髷をチヨツポリチヨツポリと寒さうに蒲團の中からつん出すと暫時はただ彼方向き此方向きしてゐた。

「先生、お五月蠅いでせうね、ほんとに。」と安城のお内儀が向ふの天井を見上げながら、聲ばかりの彼の方に投げ

かけた。

「いや。」と彼は眼をパチパチさせた。

「随分お厭でせうね、髮のにほいが。」とまたその人は氣の毒さうに頷けた。

「いや。」と彼はまたそれに答へたが、その婆どものむさくるしい髮油のにほひは、全く何とも云へぬ不愉快な、厭な胸苦しさを彼に與へたのであつた。で、彼は溜らなくなつて、仰向いた儘、その掛蒲團をそうつと眼の上まで引つ被つて了つた。

「あら、王様、まだ眠つてはいけねえだよ。」とお角婆が聲をあげた。

「眠つたつていいだらう。もうそろ〱眠むくなる時分だよ。」かう彼はわざと眠りかけた振りをして、また蒲團を額の上まで引つ被つたが、

「いけねえだよ、王様は一人でお寢るものぢやねえだ。さあ、これからみんなで王様の子守唄歌つてあげべえ、なあオヒリツピイ」とお角婆がまた妙な事を考へついた。

「さうだ、さうだ、ねんねんころ〱ころ〱やあだね。」とオヒリツピイがまたはさき立てた。

「ねんねがお守は何處行た、あれがよかんべえぢやねえけえ。」と今度は安城の大婆がやり出した。

「それ、よかんべい。」

「ぢやあね、私に音頭取らしておくれよ、ねえ先生、私の音頭でようござんすか。」と安城のお内儀が念を押した。

「ええ、ええ、どうでも。」ともう婆は眠りかけてゐた。

「どうでもはちと可哀さうね。」

「何云つるだね、早うやるべえ。」と、そこでおさき婆がちりぢりした。

「ぢあね。やりますよ、すぐに、いつしよにつけとくれよ、いいかい。」

ねんねんころりん、ねんころり〳〵、
ねんねがお守は何處行た、
あの山越えて、里へ行た。
里の土産は何々ぞ、
でんでん太鼓に笙の笛。
起き上り小法師に犬張子。
泣かずにねんねん、ねんころよ

「王様、御寝なりましたかね。」
「ふふ、王様、默つてゐるだ。」
「眠つたかしらの、ふんとに。」
「狸寝入りかもわかんねえぞ。」
「もう一度、ゆさぶつて見ろえ。」

素春はくすりと蒲團の中で吹き出しかけたが、今度は思ひきつてすうすうと安らかさうな鼾を掻きはじめた。

「あら、莫迦にたわいのねえ王様だあ、どうしたんづらよ。」
「今日はすつかり草臥れてゐらしつたからね、無理もないさ。」
「だからつまんねえじやねえけえ、なんの張り合ちありやしねえ。この王様は。」
「いいわい、こちとらでは勝手に嶋節でもやらかすべえよ。ハイノヘイか。」

お角婆が「私や大嶋ア御神火そお……おお……だちよお、」とやり出す。オヒリツピイが「それ、お歌いなされよ、泣くよりやましだよ」と蒲團の中から兩手ばかりを上に向けて、盛んに戯けて振り廻す。と、向うの隅でもまた早川のお

大婆が新節の「やなぎのお柳」を歌ひ出す、と、その跡から例の牛蒡の婆が突拍子も無い金切聲をあげるので、一旦そろ〳〵と眠りかけた誰も彼もが、すつかり眠を醒まされると、今度はそれらが却つて自棄氣味(やけぎみ)になつて空聲(からごえ)立てて罵つたり、笑つたり、騷ぎ返したりしてゐたが、後には次第に聲が低くなつて、ただぼそぼそとした幽界の囁きでもあるやうな弱々しい婆達の、本當に作り飾りの無い本音ばかりが聞えて來た。

「ああ、厭だ、厭だ、つまんねえな、お作。」

「さうだの、面白くもねえ世の中だあ。」

「よく騷いだなあ、彼奴らは、何が面白れえと云ふづら。」

「面白(おもしれ)え事も無えさ、騷いだつてよ、何になるちふぢやなし。」

「さうだあとも、若(わけ)えうちならなあ、ちつとやそつとは面白(おもしれ)えかも知んねえが。」

「もうかうなりや、何もかもおしめえだよ。」

「さうだよ、おしめえだよ。」

「年は老るしよ、貧乏はするしよ、餓鬼どもからは莫迦にされてよ、生きながらの地獄ぢやえ。」

「全くな、長生は恥多しちふが、ありや本當づら。」

「さうだあけど、まさか三五郎婆のやうに首縊る氣にはなれずよ。」

「生きてゐたつて、しやうが無(ね)えけれど、死んぢまつちやつまんねえからの。」

「考へると、心細うくなつて、――ああ、つまんねえ、もう止さうよ、こんな話は、つまんねえだよ。」

「何と云つたつて仕方が無えからの。」

「ああ、ああ。」

「ああ、ああ。」

それから暫時経つた。

素春は無論眠つてはゐなかつた。彼はみんながいよ／＼寝靜つたと思つた時、そつとその掛蒲團を眼から下ろして見た。

彼は横を向いて見た。すると向うむきに眠つてゐるお角婆の白髪頭の光澤氣も何にも無い小さな髷に、何時折つたものか、薄紅色の櫻の花の小枝が、娘々らしく突き挿されてゐるのを見た。

「色きちがひ。」

彼は苦笑した。然し、それと同時に明狀し難い深い寂しさと恐れが彼の靈魂の底から衝きあげて來た。

南無大慈大悲觀世音菩薩。

彼はまた元の如く仰向きなつて、靜かに此の一句を念誦して見た。さうしてまた深く上の掛蒲團を引つかついだ。

かうして、彼が觀世音順禮としての第一夜は、更にまた沈々として更け亘つて行つた。

五

素春と和尚とが順禮に出て行つてから、東照院ではもう三日と三晩は過ぎて了つた。その間に境内も山門前の櫻も日ましに盛りが過ぎて、今はまう散りじまひの眞つ白な花吹雪でも散り亂すばかりとなつた。

春とは云つても、折ふしの函根颪は時ならぬ寒さと、まだ霙まじりの霧雨とを、その殘んの櫻に吹きつけて來た。

夜は夜で、山火事の赤い火が花曇りの濕つた霧の合間に映つたり、その下からは慌てふためいて喚き弄る山人の罵り聲なども聞えて來た。

留守中、すみ子はただ一人であつた。寂しい山寺の書院にただ寂しく一人で寝起きして見ると、それが櫻の三月だけに猶さら心細くて、胸騷がしくて、頼り無くて、氣が滅入つてならなかつた。平常は心の底には尊敬しながら、あの大鳥

鹿の、頓間の、のつそりの、大きな赤んぼのやうな夫の爲る事成す事が歯がゆくて、阿呆らしくて、腹が立つてならなかつたが、その夫がゐなくなつて見ると、却つて今は物足らなくて、あの賴り無いお馬鹿さんでも、まだゐてくれたがいいとさへつくづくに思へて來た。

「馬鹿々々しい、あんな子供のやうな人がどうしてこんなに戀しいだらう。」彼女はさう獨語しては、ハツと氣がついて獨りで眞紅になつた。

「あんな赤んぼの癖にほんとに生意氣だよ。人を一人を置きつ放しにしたりしてさ。」さう思ふと、また、今度歸つて來たら、思ふ存分打つ擲いたり、酷めたり、揶揄つたり、小馬鹿にしたり、あやまらしたり、泣かしたりしてやるからいいと、一寸頭を突き出して、敏捷さうな皮肉な眼をして笑つたが、

「でも馬鹿らしいわ。どんな事したつて、今さら喧嘩の相手になつて與れるやうな人ならいいけどいくら小つぴどく酷めてやつたところで、結局馬鹿を見るのは私なんだからね、ああ、ああ、暖簾に腕押し、張りも力もありやしない。」

さう思ふと、がつかりして笑ひ出した。小面が憎いやら、阿呆らしいやらであつた。

すみ子はただ遣瀬無くてならなかつた。朝は思ひきり早く起きて、パタパタと采配をかけたり、夫の壊れ机のまはりを綺麗に掃き淸めたりしたが、掃除するにしてもその書物には何一つ手のかかるものとて無かつた。ただ支那の白い拂子が一つ長押から長い毛を垂れてゐるばかりであつた。あまりに簡素で、あまりに淸淨であつた。

「貧乏もいいけれど。」と夫の机の前に一寸座つては見たが、その上にも一茶の『おらが春』がただ一卷載つてゐるきりで外には何にも無かつた。

「あんまり淋しい。あんまりお氣の毒だ。」と彼女はまたその前でしよんぼりと破れ袷の袂を合せた。障子を開けると、櫻が面白いほど散り亂れてゐた。寺の白い鷄もその蔭で面白さうに駈けづり騷いだり啼いたりしてゐた。

破れ山門の方を眺めても誰一人たづねて來る人影も無かつた。

時折、浪の音や、松風の音や、鳥の聲やらが聞えて來るばかりであつた。

彼女は心細くて溜らなくなると、よく庭に下りては落ち散つた花を竹箒で掃き寄せたり、築山の明るい日向に菜の薹などを探しに出たり、赤んぼ貝ぶつた寺の細君と、裏の竹藪に入つて蓖蒻玉の根を堀つたりした。然しそれでも何の慰めにもならなかつた。

「私も順禮にでも出たらよかつた。」さうは思つて見たが、また自分が病身だと思ふと、とても險しい山坂を五里も六里も人並に歩き續けられさうにも無かつた。

夜になると、毎晩、彼女は茶の間に坐つて、何かせつせと仕立つてゐた。薄黄ろいランプの火光は、前屈みになつた彼女の痩せこけた細い姿を、後ろの煤ぶつた白の襖へ影だけを大きく映して、絶えずシンシンと小砂の入つた廉油を吸ひ上げてゐた。

すみ子はもうもう夫にあの肩當てのある破れ着物は脫がしてやらうと思つた。どうしてああも平氣でうつそりしてゐられるだらうと情けなくもなつた。さうして「蚤や虱までも飼はうと云ふのだもの。」と呆きれ返つて了ふのであつた。

すみ子は蚤が一匹破れ疊から飛び出してさへもそれこそ眼の色を變えて大騷ぎした。さうして見つけたが最後、何處までも探し求めてそれをパチッと火の中に投げつけねば承知ができなかつた。

素春は着物に集つても無頓着で、痒いとも痛いとも云はなかつた。あまりに神經痴鈍だから、いちめてやらうと思つて襟首から彼女が手を差し入れて引つ掻き廻しても、まだ知らぬ顏をして本を讀むでゐた。そして、もそもそするやうには思ふが、俺の身體でもそもそしてゐると思ふと、可愛いい氣がする、何だか濕つたかいよと莞爾してゐた。

「このお馬鹿さん、まるで乞食坊主の良寛さんの眞似なんかしたりしてさ。」

「さうかい、だが俺は良寛禪師の眞似なんか爲やしやしないよ。蚤が可愛いいから可愛いいと云ふだけだよ。」

「それぢや蚤と私とどつちが可愛いい。」

「どつちも可愛いい。」

「まあ、情けないわねえ。」

これでは喧嘩の爲甲斐も無かつた。

兎に角、あの浪人着物ももう止めてほしいと思つた。それで、留守の中に慌てて引つぽどいて了つて、淸潔に洗濯したり、トン〳〵と張り板にかけたりした。然しもうそれを改めて縫ひ直す氣にもなれなかつた。着せるものなら何でも默つて着て、何を着てゐるともすぐに忘れて了ふ人だから滅多に着せられもしず、それかと云つて、さつぱり仕立てて着せたところで直ぐに煙草の火で燒き破つたり、灰だらけにしたり、御飯をボロボロこぼしたり、お茶をこぼしたりする、あれでは折角こさへても何にもなりやしない、それに貧乏だしと彼女もつくづく苦勞になつた。

で、色々苦しい工面をして、やつと銘仙の匹物を手に入れたのであつた。さうしてそれを羽織と袷との對に仕立てて夫が順禮から歸つたら、それを默つて着せてあげやうと思つて、それでせつせと物尺を當てたり、切つたり、くけたり縫ひ針してゐるのであつた。殊勝なしほらしい彼女の心根であつた。

「これを着せても、氣がついて喜んで呉れるだらうか、やつぱりいつもの着物のつもりでぼんやりと坐つてゐるだらうか、一つ默つて着せて、こちらも知らぬ顏を爲てゐやう。」とも思つた。

「然し、氣がついたらそれこそ大喜びで、一と月も二た月もそればつかり着てゐるのだらうが、また直ぐに三日も經てば燒き焦をこさへたり汚したりして了ふだらうと思ふとあんまり情けなかつた。それだけならいいが、「そんなに六づかしい着物なら俺はいつもの浪人着物の方がいい、あれを出して呉れ。」と云はれたら、それこそ大變だと思ふと、慌ててその引つぽどきものを行李の奥に突つ込むだが、自分でもをかしくなつたか思はずくすくすと忍び笑ひして了つた。

四日目の朝になつても、赤春からは何の便りも無かつた。「毎日これに書いて下さるのですよと、あれほど念を押して葉書を五枚ほども手提に入れて置いたのに。」さう思ふと彼女はまた氣がイライラした。

「一體あのお馬鹿さんは私をどう思つてゐるのだらうか、あなたは私をどう思つて、可愛いと思つて、それにほんとに惚れて呉れてるかしらと揶揄つて見たら、惚れてるかどうだか何だかわからないが、俺はあんたに賴つてゐるよと云つた。ぶつ。何と云ふ事だらう、もう三十五にもなつて、髯まで生やしてゐながら、自分の女房に賴つてゐるよなんてなんて子供のやうな人だらう。少しは女房に對しても大人らしい尤もさうな見識を持つて貰ひたいわ、それでなきや、ちつとも私の方で賴りになりやしないぢやないの。

見得も何にも無いんだから、あんまり開けすけだわ、あれぢや私が突然とかしてゐなくなりでも出たら、きつと大聲あげて泣き出すだらうよ。赤んぼが。ほんとに赤んぼだよ。偉い人だと思ふけれど、あんまり赤んぼだわ。困つて了ふから思ふと、また吹き出して了つた。

午後になつても夫は歸つて來なかつた。あんまり淋しいので、すみ子は一人ぼつんと夫の机の前に坐つて、國譯大藏經の法華三部經をめくつてゐた。さうして觀世音普門品第二十五のところが目つかると、改めて『爾の時に、無盡意菩薩。』とおとなしく默讀し初めた。

閑寂なシーンとした春の眞晝であつた。默讀してゐると、部屋つづきの寺の庫裡の方では奥さんが里芋でも煮るのかごろごろと桝でころがしてゐる音がしてゐた。時々赤んぼのむづかる聲がしたが、さういふ時は「おおよしよし、おおよしよし。」と物靜かにその背に搖ぶりあやす聲もした。

鴉が明るい麗かな空で、かあと啼いた。

『世尊、觀世音菩薩は何の因緣を以てか觀世音と名づくる。』

「郵便。」と、郵便配達が本堂の前の赤紫の蘇枋の花越しに葉書をパラパラと四五枚緣側に投げ込んで行つた。

飛んで行つて拾つて見ると、それは待ちに待つた夫からの消息であつた。葉書で五枚あつた。鉛筆で、大きい子供のお習字のやうな字で、番號もつけて無かつた。何の葉書から讀んでいいかわからなかつた。そして何處で出したのか處

も日附も何んにもしてなかつた。

「何といふお馬鹿さんだらう、滅多に便りもしてくれないで、出すとなると五枚そつくり一緒に書いて了ふなんて、一日に一枚づつつてあれほど念を押しといたのに。」から云つて彼女は呆きれてゐた。「どの葉書から讀むでいいかわからないぢやないの。」

一つの葉書にはから書いてあつた。

お金を落して了つた。困つたと思つたら、和尚さんが奥さんから外に五圓私が預つてゐるからいいと笑つてゐた。よく氣がついたね、感心した。ありがたい。

と書いてあつた。

彼女はそれを見ると、「まあ。」と笑つた。「きつと落すだらうと思つてゐたが、矢つ張りさうだつた。でもまあ和尚さんに預けて置いてよかつた。」とホッと胸を撫で下ろした。そして「感心したもないものだ何といふ野呂間さんだらう。」と獨語した。

一つの葉書にはから書いてあつた。

昨夜は伊勢原に泊つたが、婆どもが、俺を婆ア國の王様にして了うた。詩壇ぢや幽靈、順禮に出れば婆ア國の王様、えらいもんだな。

「ああ、厭だ。」と彼女は急に眉を顰めてその葉書を放り出した。なんといふ情けない事だらう、ほんとに厭になつて了ふ。と泣き出しさうになりながら、も一度手に取り上げて見た、

「詩壇ぢや幽靈、順禮に出れば婆ア國の王様。えらいもんだな。」

えらいもんだなが溜らず悲しくさせた。そして茫惚して爲るまゝに王様にされてゐる夫の顔が目に見えるやうであつた。がその實どんなに心ぢや淋しいか、笑ひ顔が目に見えるだけ、彼女にはもう氣の毒でならなかつた。

彼女はホロ〲と涙を取り落した。

もう一つのには。

「今日の山道は隨分ひどくて弱つた。あんまりみんなが弱つてゐたから芝居をして行からうと云つたら、オヒリツピイの婆(面白い婆だ、歸つてから話す。)がおさんと權助の道行をやらうと云ひ出して、私に權助になれと云つたからよからうと權助になつて、オヒリツピイのおさんの手を執つて、そんなら駈落いたしませう、エッサツサのエッサツサと坂を駈け上つた。」

・と、書いてあつた。

「まあ。なんといふ事だらう。あんまりだわ、あんまり情けないわ、横助になるなんて何といふ不見識な事をする人だらう、それに、ああ、汚ない、そんな腐れ婆アの手を曳いて、——ああ、厭だ厭だ。今度歸つて來たら酷い目に逢はしてやるから。」ど彼女はヂリヂリし出した。「人の氣も知らないで、あんまり呑氣過ぎますよ。どんなに私が苦勞をして袷を縫つたり羽織をこさへたり爲てゐるか、ちつとは考へて呉れる事ですよ。」と、素脊がまるで目の前の坂でも駈け上つてゐるかのやうに、疳癪玉を投げつけた。

「いい格好でしやうよ。あの肥大漢の大尻でエッサッサのエッサッサは。ふん、人を馬鹿に爲てゐるよ。」とムキになつたが、ふつとをかしくなつて笑ひ出した。

もう一つの葉書には。

「今日の行程は十里位あつた。一同へとへとになつて、宿屋に着いたらもう病人のやうに倒れて了つた。みんな和尚さんを恨むだが、和尚さんが辛からうけれど修業だと思つてこらへて下され、私も地理不案内で御同様に泣きたくなつたと立つて挨拶をしたら、みんなが泣き出して了つた。明日は鎌倉へ行く。豫定が狂つたから何時歸るやらわからぬ。留守中大切にして下さい。」

殘りの一枚は初めは大きく書いて、書けなくなつたので、逆樣にして今度は小米のやうに細かに記してあつた。

「立派な鶯色のゲエ一ールを買つた。うまく結えないでゐたら、片足は和尚さん、片足は安城のお内儀さん（あの婆さんの娘の婆さんです。）が結えてくれた。飯山は山は深くて、ほんたうに觀世音の靈場らしい靈場であつた。ここも亦山櫻の花盛りだつた。四十何人の婆がみんな順禮道の山櫻に取りついて、みんなが花簪にした。原の古賀へゆく山の中で日が暮れたが、みんなが私に傘や笈を一時に持たして、山道の兩側に並ぶと、すぐ妙な格好をして立ち作ら放尿した。私は目の遣り場が無くて、仕方なく空を向いた儘、天のお星樣を數へてゐた。」

これには彼女も轉げて笑つた。それがあまりに生眞面目に眞正直に書いてあるので、猶の事をかしく、感じられた。

あんまり笑つて涙をボロ〳〵こぼした。ゲエトルの件では、いつもあゝだけれど、ほんとに何といふ不調法な婆んださんだらうと笑つた。花曾のところでは、まあ、年にも恥ぢないでお婆さん達が何だらうと睨らしくなつたが、それが極端に不調和なだけ亡者のお盛飾のやうで非常に淋しい譯の分らぬ暗い心持に襲はれるのであつた。それに連れ立つてゐる夫の遣場の無い淋しさも推察できた。山道の件はもう論外であつた。空を見上げてぽんやりと天のお星を數へてゐる夫の滑稽な野呂間さ加減を目に浮べると、溜らず小腹が立つて、後ろから一と思ひに突き飛ばしてもやりたかつた。

――確つかりなさいよ、何ですよ、よぼよぼ婆の箱屋なんぞになつたりして。――

然し、また一つ酷めてやる材料が出來たと、一寸皮肉な眼付を光らした。

すみ子が呆きれ返つてゐるところに、

「今日は、順禮さんはもうお歸りですか。」と、珍らしくN家の老夫人が音づれて來た。

「あら、入らつしやいまし、順禮さんはまだ歸りませんの、鐵砲玉のやうに飛んで行つたきりですの。」

すみ子は急にいそいそしてその珍客を書齋に招じた。

N家の主人も夫ののつそりであつた。大臣級の政客の一人であるが、そののつそりの爲めに、此の生馬の眼でも拔くすばしつこい現代の政界には容れられず、ただ默々として花に水をやつたり、泥溝に轉げ落ちたり、ひよいと朝鮮や南洋に行つたり、漢詩を作つたり、浪花節を聽いて大きな仁王のやうな眼の玉から涙をボロ〳〵こぼしたり、所謂天下の浪人もので、恐らく東洋流の豪傑としてはもうこの人位で打止めであらうと思はれた。大西鄉のやうな人であつた。頭山滿の友人でもあつた。もう六十に近いが大きな圖體をして、いつでも着物の肌をはだけて、ただぬうとしてゐた。あまりに柄が大きくて何が何やらわからなかつた。

家内中で、この主人公を女中までが馬鹿にしてみんなで晝行燈晝行燈と呼んでゐた。そして「奥さん、あなたのところ

の先生も行燈さんね。」とその夫人はすみ子に笑ひ笑ひした。それで「大行燈に小行燈」とその兩家では手を拍いて囃し立てた。

大行燈に小行燈はよく性格が似てゐるので氣が合つた。逢つて見ればどちらも何にも話は無かつたが、そしてただ黙つて発願ばかりしてゐたが、ただそれ丈でよかつた。時々逢はないと何だか淋しくしてゐた。

大行燈の夫人と小行燈の細君ともよく氣が合つた。二人ともよく似た夫を夫と爲てゐただけに、その陰の所帶や對世間の苦勞も並々では無かつた。それにその質はよくその夫を理解もし、あの大馬鹿のところに何か頭の下るやうな氣がしてゐたが、その目前に埒もなく曝け出される顚間な失策や日常の不調法さ加減を目つけると、溜らなくをかしくなつて馬鹿にしたり、揶揄つたり、惡口云つたり、小憎らしく突つかかつたり、甚だしくなると、菜葉の妻の如きは打つたり擲いたりしてゐた。それがまだ非常に皮肉な快感を催すらしかつた。さうして一つでもさういふ何かの失策を發見するが最後、すぐに鬼の首でも取つたやうに勇んで行つて披露したり、それをまた兩方で面白がり合つたり、大笑ひしたりして寂しいその日その日を送つてゐた。さうして兩方ともそれを非常に滿足に思つてゐた。兩方の夫人とも二人だけにはまたそれが非常に大自慢な事でもあつた。この兩夫人ともまた少々現代の變り物であつた。

今もそのN家の老夫人は嬉しさうな皮肉さうな顔をしてやつて來たのであつた。中々一と通りの訪問では無いらしかつた。

「こちらの小行燈さんね、たいへんなお格好でしたわ。」とその老夫人が坐ると直ぐ鼻聲でもう茶化しにかかつた。

「おや、あなたはどうして御存じ。」とすみ子が吃驚りして訊ねた。

「存知てゐますとも、あなた、國府津驛でお目にかかつたぢやありませんの。」と笑ひ出した。

「あら、さうでしたの、まあ、たいへんな方に取つつかまつたものですね、あの野呂間屋さんは。」

「厭ね、こちらの先生は。ふつ。」と吹き出して、「あんな汚ない。」と手を眼のところで、さも穢らはしいものでも見たや

らに一二度振つて、

「ほんとに見ものでしたわ、お話しにも何んにもなりやしないぢやありませんの、あのお婆さんたちは、あれで巡禮、おほほほほ。」とその手を口に當てて、また腹を推えて笑ひ出した。

「おほほほ、ほんとに厭になつて了ひますわ、それに大喜びで簇なんか捻いだりして。見つともよく無いからお止しなさいと云つても、きかないんですもの、あの赤さんは、」

「ほんとに厭な赤さんねえ。それにあれは何ですの、オヒリツピイとかオツペコペエとか云ふ眇目見たいなお婆さんは。」

「へえ、そんなお婆さんが、——ああさうさう、そのオヒリツピィとおさん權助の駈落をやつたのですつて。」

「へへえ、あの眇目婆と、おふふ。」と老夫人は思はず吹き出すと「まあ、厭ねえ、先生は。馬鹿ねえ。」と眉根に八の字を寄せた。

さう云はれると、すみ子の方では急に顔を耀やかして笑ひくづれると、

「ほんとに馬鹿馬鹿しくてお話にもなりませんの。」と、内の坊やは惡戯でと云つた風にいそいそした。

「そのオツペコの婆アがあなた、戀し戀しの、ぷつ、ほんとにねえ。」

「え、何ですつて、戀し戀しのですつて。」

「ええ、氣まりが惡るいぢやありませんの、人が大勢ゐる前であなた、しなだれかかるぢやありませんの、あなたの旦那さまに。」

「誰が。」

「オツペコペエの婆アが。」

「まあ、」と顔の色が變つた。

「戀し戀しのせんん……」と節をつけて「せいさまア……ごすつて。」

「まあ。なんていふお馬鹿さんでせう、それで默つてゐましたの、あれは。」
「ええ、大莞爾ですよ。」とチラッと皮肉さうに見て、横を向いた。
「まあ。なんて野卑な人でせう。今度歸つて、來たらほんとに取つちめてやるから。」とわざと口惜しさうに齒ぎしりして見せた。然し、それは嬉しくて溜らなさうであつた。
「ほんとに取つちめておやんなさいよ。」と老夫人がまた、けしかけた。
「見て頂戴よ。こんな下らない葉書を寄越して。」
すみ子は坊やのお清書は何處にあつたかしらといふ風に後ろを掻きさがして、大自慢で差出すと、老夫人もどれどれと云ひ乍ら、一枚一枚に手に取つて讀んで見て、「まあ。」とか「なんて野呂間さんでせうね。」とか「馬鹿アねえ。」とか「おほほ。」とか、「厭やねえ。」とかうまくまた感嘆詞を入れた。すると、すみ子の方でも「野呂間でせう。」とか「ほんとに馬鹿アねえ。」とか「厭ですわ。」とか「困つたものですわ。」とかすぐにも相槌をうつた。さうして二人ともがそれで充分に樂しんで滿足したらしく見えた。
「大行燈さんはどうなすつて。」とすみ子が急に坐り直した。待つてゐましたと云ふ風に老夫人が直ぐと、莞爾し出した。
「そんなに面倒くさい事云ふなら、俺一人で出てゆくと云ふちやありませんの、今日、百圓札一枚おくれつて。」
「へえ。」
「百圓札一枚あればあなた、一年も二年も食べてゆけるものと思つてゐるのですよ。このせち辛い世の中に。」
「まあ。家の小行燈とおなじね。」とすみ子の方でも我が意を得たりといふ顏で、急に笑ひ出した。
「それにね、あなた、今日變な法螺つ吹きの男が來てゐますの。」
「どんな方ですの、また朝鮮から。」
「ええ、なんでも今度の金は使つてはならぬと思つて褌の紐に三百圓しつかとくくりつけて置いたのですつてよ。厭や

あね、それであなた、どうでせう、京城で遊びに行つて、つい官妓から一晩にそのお金をふんだくられて了つたのですつて、それつきり一文なしになつたのですよ。その男ですの。」

「まあ、野卑な、なんて厭やな人でせう。」

「そしてね、今度は二人で、朝鮮中の鰻――鰻ですよ、あのによろ〳〵の――を買ひ占めて、函根の蘆の湖あたりで盛んに養殖しやうなんて話してゐますの、その事で來たのですつて。」

「まあ、冗談ぢやありませんの。」

「本氣ですのよ、明日は實地探檢ですつてさ。瓢簞を擔いで。おほほ。」

まだ〳〵色々な話題があつた。すみ子はそれに連れて「まあ」とか、「ほんとにうつそりさんですわ」とか「お困りでせうねえ。」とか盛んに調子を合せてゐた。それでもうその老夫人もほくほくもので、日の暮れ間近まで陶然として、北の書齋に坐り込んでゐた。さうして晴々しい嬉しさうな顔を耀やかして歸つて行くのであつた。

すみ子もそのせいか、その後はすつかり上機嫌になつて、獨で思ひ出しては莞爾々々してゐた。

何も彼もが嬉しくてならなかつた。夫の壞れ机でも、隱者めかしい白い拂子でも、縁側の外の貧しいビスケット函の臺所でも、自分の木綿着物でも、それに今度丹精してこさへた夫の銘仙のそろひでも、本堂の金佛でも、庭の麗かな山櫻でも、何もかもが樂しく美しく見えてならなかつた。

さうして、また、机の前に坐り直すと、讀みかけの普門品を正しく開いて、今度は小さな聲ではあつたが、正しい虔ましやかな聲で、聲に出して、心靜かに念誦し初めた。

『世尊、觀世音菩薩は何の因縁を以てか觀世音と名づくる。』佛、無盡意菩薩に告げまはく、『善男子、若し無量百千

萬億の衆生有つて、諸の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞いて一心に名を稱せば、觀世音菩薩即時に其の音聲を觀じて、皆解脫することを得せしめん。若し是の觀世音菩薩の名を持つこと有らん者は、設ひ大火に入るとも火も燒くこと能はじ。是の菩薩の威神力に由るが故に。若し大水に漂はされんに、其の名號を稱せば即ち淺き處を得ん。若し百千萬億の衆生有つて、金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、眞珠等の寶を求むるを爲つて大海に入らんに、假使、黑風其の船舫を吹いて、羅刹鬼の國に飄墮せん。其の中に若し乃至一人有つて觀世音菩薩の名を稱せば、是の諸人等皆羅刹の難を解脫することを得ん。是の因緣を以て觀世音と名づく。若し復人有つて當に害せらるべきに臨んで觀世音菩薩の名を稱せば、彼の執れる所の刀杖尋いで段々に壞れて解脫することを得ん。若し三千大千國土の中に滿てらん夜叉、羅刹來つて人を惱さんと欲せんに、其の觀世音菩薩の名を稱するを聞かば、是の諸の惡鬼尙ほ惡眼を以て之を視ること能はじ。況んや復害を加へんをや。設ひ復人有つて若しは罪有り若しは罪無きに杻械、枷鎖其の身を檢繫せんに、觀世音菩薩の名を稱せば、皆悉く斷壞して即ち解脫することを得ん。若し三千大國土に滿てる怨賊あらんに…………」

念誦してゆくうちに、次第に彼女の心に觀世音菩薩の大慈大悲の大御心がしんしんとして流れ込んで來る淸らかさと輝かしい恭さとを感じて來た。さうしてその如何なる人間の苦難をも解脫せしめ得る觀世音の威神力を思ふと、心から大盤石のやうな信念と安心と勇氣とが、下品の女人にもこんこんと湧き溢れて來るやうに感じて來た。おとなしく靜かに溢れて四方に流れ出て來る感じがした。

「ここだ。」と彼女は思つた。夫の常に云ふ藝術の大慈大悲もその威神力も妙も德も、あの大盤石のやうな夫の信念も安心も大勇も皆ここだと思へて來た。

　彼女は「南無觀世音菩薩。」と唱へた。さうして改めて「三原素泰」と夫の名を稱へた。夫の藝術、夫の安心にさへ敬

つてゐれば、夫の名をさへ唱へてゐれば、彼女はほんたうに何もかもから解脱しさうに思へて來た。

全く、三原素春は彼女の爲めには取りもなほさず觀世音であつた。無論さう思つた時、彼女もまた觀世音であり、三原素一であつた。

藝術＝三原素春＝すみ子＝藝術。

小包と云ふ聲がした。

彼女は驚いて坐を立つて、本堂の上り口へ出て行つた。二尺四方ばかりの紙函が紅白の糸でぐるぐる卷きにしてあつた。その函だけが、上り段のところにただ一つ載つかつてゐた。郵便屋はもう影も見えなかつた。

もう日が暮れて、境内の櫻がただ朧に白く霞むでゐる外には、とつぷりと紫色の春の宵闇が四邊を暗く立ち籠めて、ただ森閑とした山中の松風の聲のみが蕭々と吹き澄むでゐた。

白い櫻と向ふの孟宗藪の空の美しさは何とも云へなかつた。明るい落ちついたそれは透明なプルシャンブリューの宵空であつた。その空にチラチラと星が瞬いて來た。

暗いので、すみ子はその紙函をすぐそのうしろの内陣の方へ持つて行つて見た。

金色の阿彌陀如來と觀音と藥師三尊の前には、もう燈明の蠟燭を二本かかげてあつた。白い櫻の枝も白い薔薇の花もまだ獻げてあつた。

黄赤い温かな蠟燭の裸火の下へ、その紙函を持つて行つたすみ子は、その函の見なれぬ書體を訝かりながら、つと裏を引つ繰り返して見た。其處には夫の名が書いてあつた。夫から送つて來たのであつた。

「まあ、何か送つて寄越したわ、何だらう。」と彼女はいそいそした。さうして暫らくは息をつめて嬉しさに胸を躍らしてゐた。早く開けて見たくもあればまた容易には開けられなかつた。彼女は兩手で函をゆすつて見た。可なりそれは

重かつた。強く振ると、ごつとごつとと音を立てた。

「何でせう。」と、彼女はふと、何氣なく金色の三尊佛の方に眼を遣つた。佛のどの顔もどの顔も確かに蠟燭の火光に明つて、何だか人間の伯父さんのやうに莞爾してゐられるやうに見えた。

彼女はあの夫の郷里の清水山の觀世音のあの素朴な原始的の玩具「雉子車」を思ひ出した。大方この函のもさうした何處かの觀世音の玩具ではあるまいかと思つた。そして、あの氣のつかぬ薄ぼんやりさんが、よく氣がついて送つて呉れたものだと思つた。さう思ふと嬉しくてたまらなかつた。

彼女は心から微笑して、また、三尊の方を見上げた。どの佛もどの佛も温顔に微笑を湛へて、「開けて御覧。」とでも首肯いてゐられるやうに思へた。

彼女は思ひきつて、糸を切つて、その函の蓋を急いで引つ剝して見た。新聞紙がむしやくしやに詰められてあつた。それをまた拂ひのけると。――

「あら。」と吃驚して反り返つた。反り返つたも道理、中からは泥靴が、夫の穿いて行つた大きな大きな腐れ靴の泥まみれの靴が一足ゆつと中から顔を出した。

「あら、泥靴だよ、まあ。」と叫むだが、思はず函ぐるみ引つ摑えて、如來の傍から逃げ出すと、古ぼけた紅いてらてらの下り眼の大木魚の前にペタリと腰を落して了つた。

「おつほつほつほ。泥靴だよ、まあ、勿體ない、佛さまの前で。おつほつほつほ。まあ、泥靴だよ、お馬鹿さんの、おつほつほつほ。おつほつほつほ。」

右と左のを兩手に持つて、思はず、ペタリと兩方から打ち合すと、まあ、泥靴が歸つて來た。おお、足ばかりが先きに歸つて來た。おお、幽靈の足が歸つて來た。おお、婆ア國の王様のお靴が歸つて來た。おつほつほつほ、おつほつほつほ。」

彼女はイキナリ如來様の前に、その泥靴を放り出すと、溜らなくなつて、身體を突つ轉がした。さうして思はず、後手で背中をぶつ叩いた。ひいひい笑つた。

坊やにも、まだ家の坊やにも足があつた。足があつた。おつほつほつほ。まだ幽靈ぢやなかつた。おつほつほつほ。おつほつほつほ。」

轉げて笑てゐる彼女の頬にはもう涙がいつぱいに振りこぼれてゐた。

彌陀、觀音、藥師三尊の光顔はいよいよにこやかさうに、舞つて上る泥靴の埃と蠟燭の裸火とのうしろから、いよいよ大慈と大悲に滿ち耀いて來た。

（完）



門を開ける話

江口渙

第×高等學校の校長西岡氏が、學校に赴任して來てから、もう三年にもなる。その間に起つた大小の事件の中で、何が一番校長の氣になつたと云つて、學生がグラウンドの周圍の垣を平氣で乘り越す事位、氣になつたものはない。否。現在でも現に氣になつてゐる。

第×高等學校は、□□市の郊外の、一面松林に埋め盡された、至極形の好い丘陵の南側の麓にあつた。その丘陵のなだらかな裾の餘波を一杯に取り入れてあるためか、學校の敷地は如何にもひろびろとしてゐる上に、矢張、形好く伸び上つた松林に依つて、ぐるりと周圍を取り捲かれてゐた。そして、松林の外側には、六萬坪とかあると云ふその敷地と、敷地の外の芋畑とを區切つて、一間以上の石垣の土堤が、整然たる長方形に長く〳〵續いてゐた。その何丁もの長さに續いた石垣の土堤には、門がたつた三つしかなかつた。正面に一つと、左側に一つと、そして、後に一つとである。然も、如何云ふ譯であるか、所謂裏門であるところの後の一つは、年が年中締めたつきりで、唯の一度も開かれた事がない。

ところが、學校の裏門と芋畑を隔てゝ遠く向き合つてゐる丘陵の懷には、一とか

たまりのさゝやかな村があつて、そこには可なり多くの生徒達が、下宿してゐた。何時も裏門が締め切りになつてゐる以上それ等の生徒達が學校へ行くには、芋畑の間をぬけて裏の石垣にぶつかつた後、表門へ出るためには、更に石垣の蔭に添つて、幾丁かの途を歩かなければならない。然し、不精者ばかり揃つてゐる第×高等學校の生徒達に、そんな殊勝な心懸を出すものは一人もない。無論、どし／＼石垣を越して、斜にグラウンドの上を横切つて、そして校舍へ行くのであつた。そのためグラウンドの後の石垣には、二ケ所ほど、自然に途が着いてゐた。そして、そこだけは何度竹の籬根を結ひ直しても、直ぐ様壊されて終ふ上に、誰が何時作つたのか、石垣の内と外とに、石垣の石の崩れたのを利用して、簡單な踏み段さへも出來てゐた。生徒達は往きと還りとに必ずその踏み段を足臺にして、一間餘もある石垣の上堤を平然として越すのであつた。

西岡校長は赴任早々から、ひどくその事が氣になつた。西岡氏の考に依ると「ちやんと門と云ふものがある以上、生徒は當然門を通つて登校す可きである。如何にちか路でも、何でも、垣を越して構はないと云ふ道理はない。第一、垣は學校と云ふものと、その以外とを區別する、最も神聖なる境界である。むしろ、低くければ低い程、神聖である。假令、繩一本を曳いただけでも、それが明かに境界と云ふ認識を與へるならば、生徒はそれに對して十分に敬意を拂はなければいけない。その敬意はつまり生徒が學校に對して、當然、拂ふ可き敬意であるから」かう云ふ考から、西岡校長は生徒が石垣を越す事を、嚴禁した。

然し、不精になり切つた生徒の方では、今まで浸つて來た習慣を、なかなか生やさしい事では改めない。矢張、相變らずにどし／＼石垣を越すのである。況んや、芋畑の眞中あたりで、始業のベルを聞く時などは、みんな先を爭つて我勝ちに垣の神聖を犯すのであつた。否。神聖を犯すのは、啻に通學生ばかりではなかつた。寄宿舍にゐる生徒でさへも、グラウンドを散歩してゐる次手に、もう少し散歩がしたくなると、みんなどし／＼垣を越へては裏へ出た。殊に、夜遅く裏の畑へ芋を盗みに出懸る時には生徒にとつて、そこが、たつた一つの通路であつた。そして、いよ／＼校長の頭を悩

まさせるだけであつた。

そのため西岡校長は、何かの機會がある度に、何時も必ず垣の神聖を說いた。始業式の時にも、終業式の時にも、大祭日にも記念日にも、必ず講話の後にそれをつけたした。その度に、校長は自分が第〇高校時代に眼のあたり見た、垣に關する一つの挿話を必ず話した。それは或る時、グラウンドで野球の試合か何かゞあつた時、外の往來を通りかゝつてゐた西洋人が、珍しいもの見たさにひよつこり垣を越して入つて來た。無論、大した惡る氣があつて垣を越したわけでもなかつたのであらう。然し、それを見附けた學生の方では承知しない。直ぐに寄つてたかつて袋叩きにした。その結果、國際問題をさへも惹起しかけた揚句、撲つた生徒達は官憲の壓迫に依つてとう〳〵嚴重な處分を受けた。その時、一代の名校長△△先生は、處分を受けた學生達に云つた。

「諸君が垣の神聖を飽くまで主張した心持は、實際、十分な敬意に値ひする。唯、それを現はす手段が惡かつたがために、諸君を止むなく處しなければならないのは、殘念である。然し、自分は諸君の尊い心持は決して忘れない。まことに垣は低くければ低い程、神聖である。諸君は今後もます〳〵その神聖を重んじて欲しい。」

西岡校長は、△△先生のこの言葉を引いては、頻りに生徒に說いた。「垣は低ければ低いほど神聖である。諸君は今後もます〳〵その神聖を重んじて欲しい」と。そして、何時の間にか生徒の間には、「垣は低くければ低いほど神聖である」と云ふ言葉が非常な勢で流行つて行つた。

その裡に或る時、生徒の方から校長に一つの抗議を呈出した。それは

「折角、あゝして裏門と云ふものがあるのに、わざ〳〵締めて置くのは不都合である。裏門さへ開けてくれゝば、吾々は何も好んで垣の神聖を犯さうとはしない。あまりに裏門が遠過ぎるから、仕方がなしに犯すのである、どうか一日も早く開けてくれろ」

と、云ふのであつた。

然し、それに對して校長は、矢張、

「門と云ふものがあるのに、わざ／＼垣を越すのは不都合である。垣は低くければ低いほど神聖である」

と、云つたゞけで、格別裏門を開けてやらうとは云はなかつた。そのため犯す可からざる神聖なものを、生徒は相變らず犯す事を止めなかつた。

「如何もこれでは仕方がない。是非とも積極的な態度に出て、飽くまで犯させないやうにしなければいけない」

かう思つた校長は、とう／＼自分でもつて出懸けて行つて、垣の神聖を見張り始めた。つまり一人で散歩をしてゐるやうな風をしながら、グラウンドの後の方の、生徒が石垣を越しさうな處をひまにあかして、往つたり來たりしては、見張りをしないやうに見張るのである。それは直ぐ様、多少の効果を生じた。無論、校長の姿を見ながら、中から外へ垣を越さうとするやうな圖々しいものは一人もなかつた。その上、外から中へ越さうとしたものでも、校長の姿を見ると恰度、敵影を發見した斥候のやうに、直ぐに石垣を飛び降りて軀を隱して終ふのであつた。そして、校長がグラウンドの後をひまにあかして往つたり來たりする事と、生徒が乘り越しかけた石垣から、慌てゝもとへ飛び降りる事とが、その時から現在までとう／＼三年つゞいたのである。

一晩中、柔くどう／＼と土を叩いて降りしきつた南國の早春の雨が、やうやく霽れた、或る日の朝であつた。

校長は何時もと同じやうに、グラウンドの石垣の内側に添つて、頻りに往つたり來たりしてゐた。前夜の雨を一杯に含んで、ぐつしより濡れてゐる芝草が、靴やズボンの裾にびしよ／＼と吸ひつくやうにからまるのが、可なりに校長の氣持を傷けた。然し、そんな事に怖れて校長としての大切な職分を、垣の神聖を擁護しなければならないその職分を、放棄するやうな校長ではない。校長は、昔のお公卿様に詰襟の服を着せたやうな形をしながら、時々、大きく跨を開けて枯草の深いところを踏み越へたり、眉と眉との間に皺を刻んで、濡れ切つたズボンの裾をそつと眺めたりした。然し、その間にも、時々振り返つては生徒が乘り越しさうな土堤のあたりに、絶えず注意を配つてゐた事は無論である。

その時、並んで聳えてゐる寄宿舍の屋根を越へて、遠い校舍の方から、朗かな始業のベルが鳴り響いて來た。カラン、カランと云ふやうに澄み切つたその響が、前夜の雨に洗はれて麗かに霽れ亘つた早春の朝の大氣を氣持好く搖がせながら、下萌の鮮かなグラウンドの上に漂ひ、周圍の松林の中にひろがり、更に、頭上の空を越えて裏の丘陵の懐へまでも、ずん〲遠く流れて行く。それが如何にも霽れ渡つた早春の朝らしい、長閑な長閑な響である。朝早くから垣の神聖を擁護してゐる校長も、それを聞いてゐると流石に春らしい歡が心の底から溢れて來たので、思はずその響にうつとり耳を傾けながら、又、石垣の内側を一人ぶらりと歩いてゐた。

恰度、その同じ時刻である。丘陵の懐にある村の方から、五六人の生徒が一とかたまりになつて、雨に汚れた芋畑の田舍路の泥濘を、學校の方へ跣足のまゝで、一心不亂に走つて來た。元來、この高等學校の生徒の中には、雨降や雨降り揚句には、隨分、跣足でやつて來る者が少くない。殊に、裏の村に下宿してゐる連中は、芋畑の田舍路の泥濘がひどいので、こんな時には、みんな申し合はせたやうに跣足である。

五六人の一とかたまりは、ところどころ裂け目の見えるズボンの裾に、せつせとはねを揚げながら、麗かな早春の朝の光の中を、一心不亂に走つて來る。校舍の方からは頻りに始業のベルが響いて來る。カラン、カランと朗かな聲を立てて、頭上の空を流れて行くベルの音も、「遲刻」を念頭に置いてゐる生徒達の耳には、少くも長閑な響を與へない。否。ベルの一と聲、一と聲が、全くのところ、早く早くと急き立てるやうである。みんなは泥濘に足を辷らし辷らし、踊を踊るやうな形をしながら、あたふたと走つた。

無論、こんな緊急の場合には、わざ〲表門まで廻るやうな生徒は一人もない。みんな猛然として、垣の神聖を犯すのは云ふまでもない。五六人の一とかたまりが、やつとの事で芋畑を通つて、何時も乘り越す石垣の土堤の下まで走りつくと、先登の一人は、先づ石の踏み段を足臺にして、早速石垣の割れ目に足の爪先をかけた。そして、片手で書物の包みを抱へたまゝ、片手で石角をつかんで、體を少しねぢりながら、攀りつくやうに段々石垣を登り始めた。足臺はたつ

た一つである。だから先へ登り始めた者が、石垣の上の、土堤の芝草のあたりへ達するまでは、なかなか後の者は登れない。後の者は鳴りしきるベルの響に脅かされながらも、登つて行く者の樣子を見上げ〳〵、一心に自分の順番の來るのを待つてゐた。

やがて、先に上つた一人の生徒が、雨に濡れた築地の土に辷り〳〵、やつとの事で土堤の上まで登りついて、壞れた竹垣の間へまさに體を入れやうとした時、グラウンドの直ぐ內側を歩いてゐる校長の姿が、突然、眼に入つた。

今まで長閑なベルの響にすつかり恍惚としてゐた校長の心は、この侵入者の姿を見るや、否や、忽ちその平安を亂されると同時に、思はずきつと瞳を据えて、下から鋭く生徒を見上げた。無論、生徒も一瞬間、土堤のてつぺんに立ちすくんだまゝ、息を殺して校長を見た。そして、二人の視線と視線とが、かつきり合つた。

「失敗つた」と思つた生徒は、忽ち一と聲大きな聲を揚げて、

「もとへ」

と叫んだ。そして、直ぐ樣身を躍らして、一氣に後へ飛び下りやうとした。その時である。土堤のてつぺんの、踏み固められてゐた黑土が、すつかり雨で濡れてゐたため、生徒は思はず足を辷らせて、あつと云ふ間もなく、どしんと大きくひつくり返つた。恰度、お神樂のひよつとこがもんどり打つてひつくり返つて見せる時と同じやうに、尻のあたりが校長の眼にさへはつきりと見えた程に、生徒は開いた二本の足をにゆつと大きく天へ向けて、ひつくり返つた。そして、ひつくり返つたと思ふ間もなく、生徒の軀は、矢張足を大きく開いたまゝ、非常な速度をもつて眞逆樣に土堤の向ふへ辷つて行つた。

壞れた竹垣の間から、先づ第一に泥にまみれた生徒の尻が消え、更に、黑いズボンが消へ、最後に、汚れた二つの足の裏が消えた時、校長は、凡ての出來事があまりに唐突であり、あまりに急劇であつたゝめに、暫時、茫然と顏を上げて、辷り落ちて行く二本の足を眺めてゐた。然し、その次の瞬間に石垣の外側で一度大勢の笑ひ聲が起つた後、ど

しんと何かが石にでもあたつたやうな不氣味な響が、その笑ひ聲を壓してまでも聞えるとともに、更に數人の氣魂しい叫び聲が聞えた時には、何時の間にかすつかり强い不安に充たされた校長は、もうそのままではゐられなかつた。

麗な早春の朝の歡も、長閑なベルの響も、忽ちその心から消えるとともに、思はず知らず眞白な手でもつて、石垣の石の割れ目を摑むが早いか、身を躍らせて一氣に土堤の上まで飛び上つた。そして、辷りかかつた靴の裏をやつとの事で踏みしめながら、慌てて下を見降すと、石垣の下には今の生徒が、頭を大きく抱へたまま、泥濘の上へ仰向けに倒れてゐた。そして、その周圍には四五人の生徒が、倒れた者を抱き起さうと焦りながら、頻りに不安心らしく立働いてゐるのが見えた。

見ると、倒れて居る生徒は、土堤から辷り落ちる時に、足臺にしてゐる石でひどく頭を打つたためか、帽子の脫げた耳の上あたりが大きく裂けて、赤黑い血が、頻りにそこから噴き出てゐた。

「おい。君。君。如何したんだ。如何したんだ」

凡ての出來事にすつかり心を脅かされて慫つた校長は、これだけの言葉をやつとの思ひで聲に出して、土堤の上から下へ向つて呼びかけた。友達がひつくり返つて大きな怪我をしたのに驚いた生徒達は、上から呼びかけた校長の聲を聞いて二度驚いた。然し、前の方の驚が、後の方の驚に打ち勝つたためか、生徒の一人が、土堤の上の校長を見て、怖る怖るかう云つた。

「ひどく頭をぶつて怪俄をしたのです。卒倒したのです」

「そりやいけない。そりやいけない。ひどい怪俄か。よつぽどひどいか」

聲を慄はせながら、かう訊いた時には、校長は何時か土堤から飛び下りて、生徒の側へ立つてゐた。

「こりやひどい。ひどい怪俄だ。眼を廻してゐる。眼を廻してゐる」

腰をかゞめて、生徒の怪俄を眺めながら、あたふたとかう口早に叫んだ校長は、更に周圍の者をせき立てるやうに、

「君達。この生徒を早く醫務室へ擔いで行つてくれたまへ。早く。早く。…………早くしないと取り返しのつかない事になる」

と、叫んでみんなを励ましたので、みんながよつてたかつて倒れた生徒を、やつとの事で擔き上げた。

「君達。早くつれて行きたまへ。やあ。大變に血が出る。どんどん血が出る」

校長が尚もせき立てながら、かう叫んだ時、擔いでゐる生徒の一人が、突然、校長にかう訊いた。

「矢張、表門を廻つて醫務室へ行きませうか。それとも土堤を越して行つて、差し支へないでせうか」

この言葉を聞いた時、校長の顔は忽ち火のやうに赤くなつた。そして、唯、無闇に口をもぐもぐと動かしたまゝ、暫時、きよときよと眼ばかり見張つて、少しも返事をしやうとしない。

「垣を越へれば、醫務室は直ぐそこですが、…………早く手當をしないと取り返しのつかない事になりますから」

後の方を校長の口調に似せて生徒の一人がかう云つた時、思ひ切つたといふ風な色を顔に出して、やつとの事で口を開いた。

「どうも、止むを得ない。みんなこゝから垣を越して入りたまへ」

「ちや、止むを得ない場合なら、好いんですね」

「どうも、止むを得まい。急を要する場合は止むを得ない」

「ちや、急を要する場合なら好いんですな」

かう云つたと思ふと、生徒達はみんな一緒に力を合せて、卒倒してゐる男を擔いで、やつとの事で一間あまりの石垣を越した。洋服の汚れるのをも關はずに、みんなに力を添へてやつた校長が、みんなと一緒に垣を越したのは、無論である。

「かう云ふ時には、この石垣はどうも高過ぎて、困るな」
越しながら誰かゞ一人、かう云つた時、又誰かこんな事を云つてそれに答へた。
「こんな時には、もつと〱神聖な垣が欲しいね」
この言葉が、みんなの耳に響いた時、みんなが、聲に出してまでも、一度にどつと笑つたのは、云ふまでもない。然し、校長だけは笑はなかつた。唯、きつと口を結んだまゝ、不安さうな眼を動かして、擔がれてゐる男の傷口ばかりを見詰めてゐた。

第×高等學校の裏門の扉が、永年開かれた事のなかつた裏門の扉が、開かれるやうになつたのは、それから間もない後の事であつた。



戀愛合戰

宇野浩二

一

法科大學生大下千吉郎は、暑中休暇が來ても暑中休暇前と同じく、下宿の一間で毎日ごろ／＼と寢たり起きたりしてゐた。寢たり起きたりと言つても、それは彼に聞くと、やれ頭が惡いのだとか、鼻が惡いのだとか、何でも何處か身體に故障があるのだ等と言譯をするが、なアに一口に言へばそれは怠け癖で、病氣と言へば彼が高等學校に入つて以來の、もう五年越しの病氣なのであつた。それに、彼は法科の學生でありながら、法律を少しも勉強したことがなく、それどころか殆ど法律書さへ買つたことがない位で、お門違ひの文學にばかり浮身をやつしてゐた。その代り友達も文學の方のそればかりで、文學に就いては文科の學生以上の知識を持つてゐて、その方の才能は決して彼等に劣るものではないと彼自身は信じてゐた。それが何故法科に籍をおいてゐるかと言ふと、彼の家は既に彼の亡くなつた父と共に財產といふものを持たなかつたので、止むを得ず彼は彼を後見し保護するところの、親戚の意見に從つて、それで止むを得ず法科に入つてゐるのであつた。

さて、その法科大學の或年の暑中休暇のこと、——二方が壁で、他の二方も同じ

やうに壁なのであるが、たゞその後者の上部の方にだけ横に長い窓がついてゐる、まるで箱のやうな小さな下宿の部屋で、毎日ごろ〱と寢たり起きたりしてゐた千吉郎は、讀書どころか、本當に病氣になりさうな暑さを堪えなければならなかつたのであつた。今言ふその二方の壁の上部についてゐる横に細長い窓の彼方には、隣家の或陸軍大將の庭のどす黒い木々の葉が、吹く風にきら〱と日光に反射しながら搖れてゐるのだが、その蒸風呂のやうな部屋の中に寢そべりながらそれを眺めてゐる彼の方には、少しも風が訪れないばかりか、感じられるのはそのきら〱する、いたづらに眼を苛つかせ、身體を火照らせるに役立つところの、日光の反射ぐらゐなものであつた。起きてゐてもたら〱と油のやうな汗が、まるで虫のやうに身體中を這ひまわるのだ、と言つて寢てゐてもにぢみ出すやうに身體中の毛孔からべと〱と膿のやうに汗が吹き出すのだ。昨日も今日も、さういふ日ばかりの八月の或日を、彼はたゞ芋虫のやうにごろごろしながら、金さへあればわざ〱避暑に行かなくても、それさへ持つて町に出れば、何とでも凌ぎがつくのだが……など思ひながら、下宿の一間で呻つてゐたのであつた。

彼は退屈なまゝに、枕元から何とか雜誌を取り上げて、別に何を讀まうとするのでもなく、無責任に頁をくつてゐると、ふと『現代百名士の銷夏法』といふのが目についたので、それを又飛び飛びに拾ひ讀してみると、甲名士は各々自分の好む仕事なり研究に沒頭せよ、避暑に出かけるなどといふのは、却つて暑さを感じに行くやうなものだ、と說いてゐる、乙名士はそれには精神修養が何より肝心で、例へば休暇を利用して參禪をするなどもいゝだらう、と言つてゐる丙名士は抵抗療法とも言ふべき避暑法を自分はとつてゐる、と言ふのは日盛りの炎天に、屋根に上つて一時間ほど仰向きになつて焦げつくやうな日光を浴びて來る、そして自分の部屋に歸つて來ると、普段は暑くて堪らないと思つたそこが水の中のやうに凉しく感じられる、と變つたことを述べてゐる、丁名士はそれは出來るだけ凉しい土地、輕井澤とか日光の山奥とかに出かけて行つて、風通しのいゝ部屋で、凉しい飲食をとる、出來れば部屋の中に氷の塊を絶やさずに積んでおくこと、と主張してゐる。いづれも皆いゝ方法だ、と法學生は思つた、だが、彼自身が雜誌記者なら、それ等は百

名士の名前さへ借りて來れば、彼一人で考へ出せる方法でもあるのだ、そこで、やつぱりつまらない、と思つて、彼は雜誌を傍に投げ出した。

だが、よく考へて見ると、この法學生の問題は銷夏法などといふものではなかつたのだ、彼のは單に夏だけのことではなくて、如何に春夏秋冬を過ごすべきか、といふことであつた。籍を法科に置きながら、文學に浮き身をやつしてゐる彼のことであるから、文學こそ彼の好む仕事であり研究である筈なのだが、目下彼にはそれがつまらなくて、退屈で堪らなくなつて來たのであつた。貧乏して、苦勞して、骨身を削る思をして、要するに泣き事や感想を文に綴つて、婦女子や又それ等に類似の人間どもの、蔭ながらの同情や賞讃を得たところが、一體それが何するものぞ、と彼は思ひ出したのである。そして、夏になつたればとて、凉しい土地に出かけて行つて、風通しのいゝ部屋で、凉しい飲食物をとる、などといふことは思ひも寄らない程の、貧しい報酬に甘んじて、それもよい、それもよいとして、さうして泣き事や感想の類を、なるべく巧みに、なるべく萬人の同感を誘ふやうに、文に綴つて活字にすることが、それが一體何程のことぞ、と彼は近頃考へ始めたのである。目も鼻も、さては頬も手足も、身體も何もない、空氣の靈魂かのやうな、ふわ〱の影もないものなら兎に角、斯うして夏は暑さを感じ、冬は寒さを感じ、甘い物を食べたい口を持ち、美い物を見たい目を持ち、良き物を着たい觸れたい四肢を持ちながら、言ひ換へると、それ等を有難い神樣から與へられながらそれ等を單に頭の一角を占領してゐるところの、腦味噌の奴隷にせよ、とは誰が教へた？　人間と生れて來たからには何か一つこの與へられた肉體を完全に利用して、と言つて筋肉勞働をして手足に無理な疲勞や不平を起させるやうな方法ではなく生れる前は暗、死んだ後暗、その間の僅な時間を、何か生き甲斐のあることをして見たいものだ、と法學生大下千吉郎は暑さに閉口しながら、寢たり起きたりごろ〱しながら、無論永久に實行されさうにない考へ方で、昨日も一昨日も、そして今日もぼんやり考へてゐるのであつた。

その時、女中が一枚の葉書を持つて來た、繪葉書で、差出人は波川珊子としてあつて、見ると、「今度こそ喜んで頂

かねばならぬ時が來ました。それは私のために朝が來たのです。七日か八日頃に上京します。」と讀まれた。表をかへして見ると、繪葉書はその波川珊子が、何處かの洋館の扉を中から開けて、心持ち首を傾げて、嬌態を造つて立つてゐるところの寫眞である、何でも郷國の京都で、彼女の保護者があつて、その男の斡旋で小さな美術品店をしてゐる、とこの前に手紙で大下に報告して來たことがあるから、大方その店の戸に立つて寫したものであらう。

始めて會つたのが、彼女の十六歳の時だつたから、と法學生は、丁度具體的に考へねばならぬことが何一つなくて、退屈してゐた時なので、繪はがきの寫眞を眺めながら、指折り數へて綿密に回想し始めた。早いものだ、して見ると、珊子ももう二十一歳になる筈だつた。大下千吉郎が中學を卒業して、京都の高等學校に入つたばかりの時であつた、彼の中學校の同級者で、當時そこにある或私立の繪畫學校に通つてゐた、その名前を秋澤滿吉と呼ばれる男が、或時「君素的な女を紹介しよう。僕は近頃、學校の外に狩野さんの塾に通つてゐるんだがね、そこへやつぱり繪を習ひに來る女なんだ、年は十六だがね、文學なども好きで、色んな本を讀んでゐるよ、ニイチエなども讀んでゐるよ。……」と力說した。

「美人かい？」と大下が聞くと、

「美人だねえ、」と秋澤は言下に答へた。「それが素的にハイカラで、素的に新しいんだ。兎に角、一遍會つて見給へ今度の日曜に五條通のA——館で筑前琵琶の會があるんだ、そこへ彼女が行くから、君のことももう話してあるんだ、君、僕と一緒に行かないか、そこから一緒に何處かへ散步する約束をしておいたから……」

そしてその豫定の日曜日に、始めて彼は秋澤の紹介で會つたのである。どうしてあれだけの分量の、多分澤山のかもじが入つてゐたに違ひない、髮の毛を支へてあるのか、と先づその點で見る人を驚かしたところの、現今では珍しくないが、當時はその琵琶會の席に來てゐた數多の女たちにも見られなかつたばかりでなく、法學生大下が步く範圍では決して目に觸れたことのない、髮の毛を頭の上にでなく、頭の後方の空間に盛り上げて、芝居でさへも容易に見られないやうな、小さな花束かとも思はれる、派手な花櫛を挿して、十六歲の波川珊子は開演後一時間ほど遲れて、見物席の中を

割合に穩した色もなく、靜々と婦人席の一隅に向つて歩いて行くのを、法學生は始めて見たことであつた。彼等は、秋澤がそれより前に彼女を誘ひに行つた時は、これからまだお湯に入つて、そして仕度をしてからと言ふ次第だつたので別々に會場に行つて、そこを出てから行動を共にすることに約束しておいたのであつた。

「あれだよ、君、」と、つる〳〵に頭の禿げた、併し立派な八字髭を生やした琵琶師が、高座で『石童丸』だつたかを演じてゐた最中に、入場して來た彼女の方を、みな一時に琵琶を聞くことを止めて、その方に目を聳てゝゐた群衆の頭越しに、秋澤は顎をしやくつて彼女を指しながら、大下に向つて誇りかに言つた。だから、大下が始めて見た波川珊子はその横顔に依つてゞあつた。眉、目、鼻、口ともに、それ〳〵荒削りで、見る目にくつきりと映る上に、濃い髮の毛に對稱して、多分に青色白粉を應用した化粧ぶりには、退屈の餘りその頃から女のさういふ事に就いて注意してゐた法學生を、驚かせるに十分であつた。「なる程、これは秋澤の言ふ通り、素的な女だわい、」と法學生は心の中で感心した。

「仲々の美人だ？」だが、何事にも何物にも、第一印象ほど確なものはない、といふことを、彼が彼女に就いても、その後屢々思ひ當つたことがある、といふのは、美人だ、とその時彼は心の中で九割まで賞讃しながらも、確に一割位は「はて？」と再考させられたことである、例へば非常に美味な、且つ珍しい料理を味つて、珍味、珍味！と賞讃しながら、何かその材料に一つ多少腐敗味のあるものでも混つてゐたとかして、珍味珍味！と二三度叫んでゐるうちに、始めの言葉の發音より最後の言葉の發音が、多少言ひ澁ることがある、それに似た感じであつた。

それから、多分夏のことだつたのと、天氣がよかつたので、琵琶會を中途で外して、彼等は、大下と秋澤とそして波川とは、疏水に依つて近江の湖に出て、そこで夕方までボートを浮べて遊んだ。初對面の大下と波川とは、話の緒として、波川がニイチエを愛讀してゐると聞き及んだので、法學生はそれに就いて彼女と最初の言葉を交した。だが、相手も噂ほどにそれに通じてゐさうにないのと、大下その人も辛うじて『ツアラツストラ』一卷を卒讀した位の知識だつたので、直ニイチエの話は切りあげてしまつた。漕ぐことと。唱ふことの好きな秋澤が、頻りに漕ぎ且つ唱つてゐる間に、

ポツリ／＼と他の二人はこんな言葉を交した。

「戀といふものをどうお考へになりますか？」と大下千吉郎は何と思つてか、多分相手のハイカラな、厚化粧した顔を見るともなしに見てゐるうちに、ふとそんなことを思ひついたのだらう、波川珊子に向つて尋ねた。

「私には戀といふものが分りません、」と彼女は斯う言つて、ちらと目を反らして、少しばかりにいつと笑顔をしてから、口をつまへて、すました顔をした。その時大下は、おやツ、この女、黒目勝の大きないゝ目だが、藪睨みだな、と氣がついた。それから、口が少し大きいわい、と思つた。

「ちやあ。あなたはまだ戀をなすつたことはありませんか？」と法學生は聞いた。

「えゝ、ありません。」

「では、これからですか？」

「いえ、私には、」と彼女は又藪睨みの目をして言つた。「私には戀は出來ないのです、戀といふものが分りません、一生出來さうにありません。」

これ等の會話中に、大下千吉郎は相手が正面の顔と横向きの顔とが大分表情が違ふことを發見した、どういふ譯だらう、とそれが氣になつたので、相手の言葉などを考へてゐる暇がなかつた程、一層注意して相手の顔を見てゐると、正面の方は相當に美人型だが、横向きになると、何處かゞ看過することが出來ない程、目觸りになると迄は分つたが、その何處かゞ仲々分らないので、少し苛々する氣分さへ感じ出した。

「ちやあ、あなたは男厭ひですか？」と法學生は顔の探索の方に夢中になつて、言葉は殆ど無意識に口から出してゐた。

「それや、」と彼女は、相手に顔ばかり見詰められるのを左右に避けるやうにしながら、言ふのだ、そのために彼は益々彼女の顔立の吟味に困るのだ。「それや、男にも好きな人と厭ひな人とありますわ。」

「その好きな人に戀するといふ‥‥」と言ひながら、法學士は心の中で膝を打つて、さうだ、この女は鼻が高い、といふよりは少し大きい、殊に小鼻が大き過ぎるのだ、それに少々獅子鼻なんだ、と氣がついて、やつと安心して言葉をつゞけた。「‥‥戀するといふやうな傾向になりませんか？」

「好きなのと戀とは違ひますわ。」と彼女はきつぱり答へた。

辻褄の合ふやうな、合はないやうな話ではあるが、その答へ方が餘りはつきりしてゐるのに彼は少なからず驚かされながら、尙も相手の顔を吟味してゐるうちに、この女は本當に十六歳なのか知ら？　その言葉つきから、顔立ちから、さういへば舞臺で着る役者の衣裳でもこれ以上に派手ではないその着物や、その厚化粧は、本當の年を隱すための化け道具ぢやないか、とさへ思はれ出した。化けるといへば、彼女は可成り妖怪味のある美人であつた。——

それから、彼と彼女とは大變仲がよくなつて、彼女も彼のところへ遊びに來るやうになり、彼も屢々彼女を訪問した彼女は女ばかりの五人姉妹の末の妹で、彼女の家には中の一人を除いてもう婚期を十分に過ぎた姉たちがゐた、彼女のすぐ上の姉は、無論その前にも何人かの戀人があつたに違ひないが、當時は熊本の醫學校に在學中の戀人の卒業するまでと言つて家にゐた、その上の姉は三人目の養子にひどい目に遭つて、その上に捨てられたといふので、極度のヒステリイに陷つて、朝から晩まで一間に入つた切り、滅多に人に顔を見せない、といふやうな日を送つてゐた、その上の姉たけが神戸の或商人に緣づいて行つてゐるだけで、一番上の姉は、市内の或商人の家に嫁入つてゐるのだが、始終夫と嫉妬の上の喧嘩をしたり、姑と仲違ひしたり、病氣になつたりして、一年のうちの十ケ月以上家に歸つてゐた、そして彼女等の父親は、あるにはあるのだが、妾をこしらへて、その家に行つたまゝ、二ケ月に一度位しか歸つて來なかつた、だから憐れな彼女等の母親が、彼女等の身の上を案じながら、一緒に暮してゐたのだ。さて、大下千吉郎と珊子とは、仲がよくなつたとは言ふものゝ、唯うまが合つたと言ふ程度であつた。だん／＼と附合つて見ると、一ケ月と經たないうちに、彼女が「戀といふものを知らない、」と言つたのは、それは單に言葉の上の遊戲で、別に具體的には開かなかつ

たが、仲々知らないどころの種類ではないことを、大下は知つた。無論、彼女もそれを隱してゐる譯ではないので、折に觸れ時につけて彼に話したことであつた。が、大抵の場合、彼等は多く文學や哲學に就いて話し合つた、無論大下が多く語る役目で、終にはその方では彼にかぶれさへした程であつた。

そのうちに、彼女はいつとなく繪の稽古を止めてしまつた。

「文學をやつたらどうです？」と大下が勸めると、

「えゝ、やりたいと思つてるんですけど、」と彼女は答へた。

だが、別にそれを專門的にやり始めるといふこともなく、時とすると筑前琵琶に二三ケ月ほど熱中したり、かと思ふと「もう何にもするのが厭になりました、」と大下に言つたことが屢々あつたり、要するにやはりこれといふ事を何にもしないで、結局他所目に見たところに依ると、始終變らないのは化粧に浮き身を窶すことだけであつた。

大下が東京の大學に來てからも、彼等は月に一二度はたよりをし合つてゐた。それに依ると、彼女は女優にならうと考へたり、どうも女といふものは窮屈でいけない、色々な事情や境遇のために思ふやうにならないと嘆じたり、かと思ふと、先にも一寸言つたやうに、突然美術品屋を始めて見たり、容易に他から窺ひ知るべからざるものがあつた。――

さて、「私のために朝が來ました、」云々といふ彼女の葉書の文句であるが、それだけでは、それを讀んだ大下千吉郎には何の意味か、よくは解らなかつた。だが、何でも彼の所に來た彼女のこの一年來の手紙の中で、兩三度、どうかして一切の束縛から免れたい、そして自分の思ふ道を進みたい、それには是非東京に行きたい、さういふ私の生活の、謂はゞ『朝』を一日も早く迎へたい、」といふ意味のことが認められてあつた。して見ると、今彼女が「朝」と書いたのも、さういふ意味のことに違ひない、と法學生には直に察しられたが、さて東京に來てどういふことをしようといふのか、どういふ「朝」を迎へようとするのか？　それは彼には想像がつかなかつたし、又想像しようとも思はなかつた。とはいふものゝ、彼女のさういふのに對して、實は彼に多少の責任がないと言ふ譯には行かなかつたのだ、といふのは

五六年前に始めて彼女に會つた時以來、彼は若氣の至りで、（だが、その頃は、言ふこと、なすことに、どんなにか張があつたらう！　とそれを思ひ出すと、僅な年月の距たりだが、今の退屈な生活や思想と比べて、愉快に堪へなかつた、と法學生は回顧するのだ。）人は自覺しなければいけない、殊に女は。そして古い因襲に囚はれてはならない、そんなものは一日も早く振り捨てゝ、新しい、自分自身の生活を始めなければならない、なぞと始終彼女に說いたものだ。それが今、說かれた彼女には完全に感染して、燃え上つた形であるに引きかへ、說いた彼の方の火は消えて、一體そんな新生活とは名前ばかりで、あるかないのか、と模索してゐる形なのだ。たが、由來、生活に於いては、男子より女子の方が、空想拔きで、常に足が地についてゐるものだ、使ふ言葉は同じでも、女子は男子と違つて、何事につけても實際的で、實際的であるといふことを、法學生は氣がつかなかつたのだ。

しかし、彼は前にも言つたやうに、退屈で困つてゐた時のことだから、そんな理屈や思案は一瞬のうちに振り拂つてしまつて、葉書の中の「七日か八日」といふのは、昨日今日のことである、早くやつて來ればいゝな、早くやつて來れば、と久しぶりでひどく心の勇むのを覺えて、「銷夏法、銷夏法！」と心の中で叫んだ。

そのうちに、彼は又いつかうと〳〵と、眠つたつて定つて不快な夢に惱され勝なのだが、他所目には他愛なく、寢入つてしまつた。

二

それから數日後の午後、木下千吉郎は、待つともなく待つてゐた、彼女からの次の葉書を受取つた、文面は「やつて來ました、入らつしやいまし、一先づ此處に落ち着きましたから、」と極めて簡單に、寧ろ彼には冷淡に見えた、認めてあつて、駿河臺の相當な旅館が差出し所になつてゐた。

それを受取つた者をして、飜り勇んで尋ねさせるやうな葉書ではなかつたが、例に依つて例のやうな日を送つてゐた

法學生は、その可成り神經質な性質にも拘らず、誰をおいても、彼のところへはこんな葉書どころか、先づ彼女自身で訪問して來なければならぬ筈だ、と彼は一寸いま〳〵しく考へないではなかつたが、よく〳〵無聊に苦んでゐたと見えて、早速電話帳をくつて彼女の旅館の番號を見出し、それに依つてわざと、これから訪問しても差支へないか、と問合せてから、出かけて行つた。それでも、彼はまだ心の中で、一年前に會つたまゝの彼女を想像して、これから旅館の一室で、落ち着いてゆる〳〵と、彼の刺戟が原因となつたところの、彼女の所謂『朝』に就いて、彼女から妹らしい相談をかけられることの快さを豫想しながら、いそ〳〵と彼女の旅館の玄關に立つたのであつたが、取次の女中に「唯今お湯をお召しになつてゐらつしやいますから、どうぞこちらで暫くお待ちを……」と言はれて、その時もまだ彼女の派手な衣裳や、女らしい色々な持物で、綺の貝殼のやうに散らかつてゐる、艶かしい部屋を見ることを快よく考へながら、案内の女中の後からついて行つた時、ふと通りすがりに目についた、少なくとも十二疊以上の、開け放した大部屋の中にまるで何かの會でも始まつてゐるかと思はれる程、多勢の人々が車座になつて雜談してゐるのを見たが、その人たちの大部分が、髮の毛を長く延ばしたのや、天鵞絨の洋服を着て、大きなネクタイを派手に結んだのや、一見して所謂藝術青年の寄合であると感じると共に、直覺的に彼等が悉く波川珊子の訪問客であると氣がついたので、大變なところへ飛込んだ！と急ち後悔されたが、「どうぞこちらで暫く……」と女中に促されて、往來に面した六疊の、明らかに今迄人氣のなかつた部屋に通されてしまつて、叩きのめされた程がつかりしてしまつた。だが、今更しやうがないので、狐にでも憑かれたやうに、ぽかんとして、立てつゞけに煙草ばかり吹かして見たが、それが又彼が懷にあつた煙草をすつかり喫ひ終る時分になつても、彼女は仲々現れなかつた。

いつそのこと、このまゝ無斷で歸つてしまはうか、と三四度も考へてゐた時、漸く彼女が愛嬌笑を浮べながら部屋に入つて來た。昔ながらの厚化粧で、一口に言ふと白粉と紅と香料の壺の中から飛び出して來たかと思はれるやうな派手な顏をして、それに十分相當するところの着物を纏つて、彼の目の前に現れた彼女を、一見すると、一年程前のまだ幾

分少女らしい面影を止めてゐた珊子しか知らない法學生は、一年が五年經つても、外見の少しも變らない彼自身をも思ひ合せて、相手がもう一人前以上のりゆうとした女になつてゐるのに、少なからず壓倒された氣味であつた。で、半分は恐縮のあまり、

「しばらく……」と大いに改まつて、叮嚀に挨拶した。

「まあ、いやだわ、改まつて、」と彼女は、妹どころか、一躍姉さんらしく、抑えるやうに斯う言つて、一轉して微笑しながら、大いに嬌態をして見せた。

「彼方には色んな人だちが來てゐますのでね」と彼女はまるで年下の戀人でもあやすやうに、べつたりと法學生の傍に坐つて言つた。「日本劇の歌劇部の人が多勢來てゐるんですの。それに階下の部屋には現代劇社の人と美術座の人が多勢集まつてゐるんですよ。」つまり法學生は第三の部屋に通された譯であつた。「で、うるさいでせうから、こんながらんとした部屋ですけど、あなただけ此處へお通ししたんですよ、御免下さい、」と彼女は附け足した。

「盛んで結構ですね、」と法學生はやつとこれだけの厭味を述べた。

「まあ!」と彼女は心もち、その藪睨みの目で、睨んで見せて、苦もなく相手を制してから、東京は凉しいところですね、とか、私、一昨日來たんですけど、ごた／＼してるもんですから、今日までお知らせしなかつたんです、とか、あなた、近頃はおからだは如何、とか、暫くさういふ雜談に移つた。だが、大下が期待したやうな、彼女の『朝』に就いての說明も、報告も、それらしい言葉は何一つ聞かれなかつた。それに、彼も亦先程から、彼女及び彼女の周圍のアトモスフィアに幻惑されてしまつて、そんなことを思ひ及ぼしてゐる餘裕を持たなかつた。

「あの……」とその時彼女は言つた。「あなた御存知でせう、美術座の曾部さんを?」

「いえ、知りません。」

「あら! おかしいわ彼方では御存知ですのに。」

「でも、知りません。」

「そんなら、」と急に、だが豫定の行動らしく、彼女は敏捷に立ち上つて、ばた〳〵とそのまゝ部屋を出て行つたかと思ふと、間もなく、その今度新らしく起つた、美術座といふ劇團の、男優長をしてゐる、寶部といふ男を伴つて入つて來た。

大下との初對面の挨拶に、寶部は「あなたのことはよく知つてゐたのですが、いつも駈け違つて、お目にかゝれませんでしたので‥‥」と言つた。そこで、さう言はれて始めて、前者もこれ迄二三度その友人から後者の名を聞いたことがあるやうな記憶を、ぼんやりと思ひ浮べることが出來た。それから、一座は取止めのない雜談に移つて行つた、それは主に芝居の話で、殊に寶部の屬してゐる美術座に就いての話がよく出た。そこで、漸くだん〳〵に常識を回復して來た法學生は、珊子の所謂『朝』とは女優になることだな、と氣がついた次第であつた。

「先生はほんとにいゝ人ですね、」とその時彼女が言つた。「私、始めて會つて、すぐ好きになりましたわ。」

「先生といふのは誰のことです？」と大下は聞いた。

「藏原先生‥‥」と彼女は當然のことだといふやうに答へた。

そこで寶部も一緒になつて、藏原先生に就いて、その言行や逸話に就いて、いろいろと話が盛つた。その藏原先生といふのは、彼がこれ迄關係してゐた、演劇協會といふ、彼の先生の山口といふ文學博士が經營してゐた劇團を辭して、今度先に言つた美術座といふ新しい劇團を起す人なのであつた。寶部も亦以前はその山口博士の演劇協會に屬してゐたもので、兼ねて何年間かその人の訓育を受けて、どうにかかうにか一人前の役者になつた者なのである。だが、その時の彼の言葉に、「若い者の力ほど强い、恐ろしいものはありません、」とくり返し言つてゐた。「あの地盤といひ、位置といひ、あれ程堅固に見えた山口先生の演劇協會でさへ、僕等青年の力には一たまりもなく壞されてしまつた譯ですからなあ、」と彼は言葉をつゞけて益々熱心に、演說口調で、問はず語りに說明した。「實際です、それは謂はゞ僕が卒先者

で、大方僕一人で壞したやうなものです。それは山口先生に對しては濟まない譯ですけれども、我等若い者のためには新しい時代のためには、如何とも仕様のないことなのです、」と實部はその額際の禿げ上つた、大きな丸い頭を役者らしく振り立て〳〵興奮するとその強度の近視の目を細く一の字にしてしまつて、胃病患者。でもあるのか、臭い息を遠慮なく吹きかけながら、大聲に喋つたものだ。

「それでは、」と相手が興奮して來ると、妙に落ち着いて、底意地の惡くなる癖の大下は言つた。「ぢやあ、藏原さんはあなた方が、そのあなた方の運動の道具に、かつぎ上げたやうなものなんですか？」

「全くさうです、全くさうなんです、」と正直な、興奮してゐる實部は相手の言葉を眞直にとつて叫んだ。

「では、女優丸尾つき子と藏原氏との今度の噂なんかも、そのあなた方の道具にこしらへ上げたんですか？」と法學生は可成りからかひ氣分で聞いて見た。といふのは、その丸尾といふ人間も、實部と同じく元は山口博士の演劇協會に屬してゐて、彼に敎育されて相當な女優になつたのみならず、一躍して當時は可成り有名な役者になつた者なのであるが、その協會の敎師であつたところの藏原と戀愛關係に陷つて、今度その協會を彼と共に辭して、美術座を興したといふ噂の婦人なのである。

「いえ、あれは」と實部は法學生の言葉を打消して、「あれは全く嘘ぢやないのです。藏原さんは年の四十にもなる人ですが、今迄の生活が餘り寂し過ぎたんです、彼は四十の年になるまで戀といふものを知らなかつた人なのです。だが彼は要するに詩人です、」と後の方の說明をごまかして、そして斯う附け足した。「決して、あれは、僕たちが運動の道具に揑造したんぢやありません。……だが、結局果はそんな風になりますね。兎に角、あれをあんな風に騷ぎ立てたのは、やつぱり僕たちの手段だつたんですからね。」

結局、この男、頭ばかり丸くして大きくて、額ばかり廣いが、餘り悧怜な男ぢやないな、と法學生は片附けてしまつて、今度は珊子の方に向きなほつて言つた。

「あなたはその美術座へお入りになるつもりなんですか？」

「えゝ、」と彼女は何故か少し氣まりの悪さうな顔をして、「今日、丸尾さんにも會つて來ました、」と答へた。

「で、愈よ美術座に入ることに定つたのですか？」と法學生は聞いた。

「いゝえ、」と彼女は答へた。「それがはつきり定るまで此地(こつち)にゐて、定つたら一度京都に歸つて、今度は母を連れて來る、それからずつと此地で暮したいと思つてゐますの。」

「結構ですね、」と法學生は言つて、ちろりと宍部の方を見て、「だが、その美術座に入ると言ふのはそんなに難かしいのですか？」

「いや、さう形式張つた、難かしいことはないのですけど、」とその美術座の役者兼幹事である寶部は聞き捨てならぬといふ風に言葉を挾んだ。「その藏原先生は役者の方に關しては全く放任主義で、で大體、女優なら丸尾つき子と相談して、男優の方は僕ですがね、つまり女は女同志、行末長く共同してやつて行けるかどうか、双方で理解し合へば、それでいゝといふことになつてるんです。」

「で、五日間か十日間お互に話し合つて、その間に理解し合はう、といふんですね？」と法學生は、寶部の方を見ないいで、珊子に向つて言つた。それから彼は、又寶部に美術座の話で興奮されるのを恐れて、話題を變へて、こちらへ來てから？」と矢張り珊子に向つて言つた、「芦屋君にお會ひになりましたか？」

「いゝえ、」と彼女は多少不快さうな顔つきをして答へた。「……私、芦屋さんからは二度も絶交狀を貰つてるんですもの。」

「絶交狀？」と、たが、法學生は餘り驚いたやうな發音でなく言つた。「あの人間はあれで良い人なんですよ、但し少し一本調子の嫌ひはありますがね。絶交狀なぞに驚くには足りませんよ、文學などをやつてゐる人たちの一部には、持病見たいに、月に一度やそこら屹度それを出したり受取つたりしてゐる者があります。殊に芦屋君のは特別で、いつか

などは、毛利といふ或文壇の老大家が、芦屋君が常々注告してゐる說をどうしても用ひないといふので、とう〳〵絶交狀を送つたものですが、それと同じ日に、芦屋君の友人の弟の十一歲になる子供に、その子がよく兄の使なぞで度々家に來たものですが、いくら言つて聞かしても禮儀を心得ないと言つて、その子供に同じ郵便で絶交狀を送つたといふやうな話もある位です、絶交狀なぞ文字通りに取らない方がいゝんですよ。」

「えゝ、芦屋さんは私のことを誤解してゐらつしやるんです、會つてお話したらよく解るんでせうが……」と雅子は言つた。

「さうでせうとも、ぢやあ、一度會つてお話なすつたらどうなんです？」と法學生は頻りにおせつかいな口をきいた。これは先にも言つたやうに、一つは實部の劇界話を避けるためであつたと共に、もう一つは芦屋といふ男に關して、彼との間に嘗て次に述べるやうな一事件があつたので、芦屋と雅子との間を多少とりなしたいやうな氣がしたからであつた。――

三

一年程前に、大下千吉郎は汐見といふ文學青年の友人と、四五人の仲間の同人雜誌を出す計畫をたてゝ、そのための金の調達にそれ〴〵の目的をもつて、彼等の故鄕へ出かけることになつた、大下のそれは京都で、汐見のは大阪であつたが、そこで彼等は一先づ京都に來て或旅館に泊つたことであつた。が、彼等の空想たつぷりの計畫は、まだ碌に實行の運びにさへならないうちから壞れ始めて、よく落ち着いて考へて見ると、誰がこんな夢の外にはない、馬鹿げた計畫を立てたのだ？ とその癖一度はお互に眞面目な顏をして相談し合つたことを、今更どちらが考へ出したのだ？と怒り出した程、愚かしいものだつたので、二人は氣を腐らして、毎日ぼんやりと暗い顏をして喘ぎ合つたことであつた。そこへ、或日東京から芦屋がやつて來たので、先の二人の氣も晴れて、そのため遥々やつて來た計畫のことなぞはすつか

り水に流してしまつて、うか〳〵と遊び暮したものであつた。

その或晩のことであつた。相變らずその宿屋の一間で、大下と汐見と新來の芦屋と、それからその二三日前に、大下が他の二人に紹介したところの、その町の彼の舊友の畫家秋澤滿吉と、四人で無駄話に耽つてゐた。彼等は始め藝術に就いて談じてゐたが、それの種が盡きて來ると共に、例に依つて異性の話に陷ちて行つた。だが、彼等のは普通一般の青年たちが無駄話にする女話と、多少色彩を異にしてゐた、といふのは、法學生大下がさうであるやうに、汐見も芦屋も可成り風變りな人物どもであつた。房々した濃い髮の毛を長目に延ばして、無雜作にそれをまん中から分けた、目鼻立ちのそれ〴〵がこれと非の打ち所もない程よく整つた、多少顏色は青白いが、身長五尺五六寸の、文字通り美男子である汐見は言ふ迄もなく婦人たちに好かれてちやほやされさうであるが、案外さうでなく、却つて一般には敬遠されさうな傾さへあつた。といふのは、一口に言ふと彼が餘りすまし過ぎてゐるからに違ひない、現に彼と最近まで二三年の間相愛の仲で同棲してゐた、當時可成り世間を騷がした「赤襯衣」社といふ、一派の新しい女たちの一人に對しても、決して敬語の外の言葉を使はなかつた、それだけでも略々一端が窺はれるやうに、本能的に窮屈といふことを憎み、親密といふことを求める女性の通有性を、彼の情人の新しい女も持つてゐたと見えて、二三年の戀愛を打ち止めて、彼女の方から手を引いたのだ、と友達は噂し合つた。——汐見といふのは大體さういふ人物である。又、髮の毛を、男でありながら、一尺以上の長さに延して、それを後に撫で下げ、常に紋付の羽織を着ることを好む芦屋は、可成り一本氣な人物で、絶交好きの性癖を持つてゐることは既に前に述べた通りだが、婦人に關する彼に就いての或噂を一つ紹介すると、例の新しい女の一團の赤襯衣社の頭目と見做されてゐる某婦人に、彼がある時交際を申込んだ手紙を送つたことがあつたが、その手紙に夥しく色々な香料の匂ひが仕掛けてあつたと言ふので、それが以來赤襯衣社の婦人たちの間に有名になつて「匂の人」といふ仇名を密かに附けられてゐるとのことである。それは、虛無主義者のやうな目をした、餘り高くないが極めてすつきりと鼻筋の通つた、口は、それはどんな優しい、小柄な顏立ちの女にそれを附け變へても、やつぱり餘

りに小さ過ぎるに違ひない、と思はれるやうな、小さな口をした、そしていつも端然と長髪を後に撫で上げて、好んで哲學を論じる彼に、最も似合はしくないとも、又最も似合はしいとも思はれるものであつた。それ等の人々から見ると秋澤は最も平凡で最も普通の靑年であつた。ふと、或話が切れた時、芦屋が秋澤に向つて斯ういつた、「この町にも、秋澤君、君は色男だから、さういふ方には精通してるでせうが、新しい女がゐますか？」

「ゐますよ、」と秋澤は即座に答へた。

「紹介してくれ給へな、」と芦屋は言つた。「僕等は女の友達がなくつて困つてゐるんだから。」

「おや〳〵、この紹介好きの男！」と大下は、まん丸い目をした、子供のやうに丸くふくれた頰の、それ等の丸々が集まつて、殆ど四角にさへ見えるところの、丸い、可愛らしい顏をした秋澤の顏を斜から眺めながら、この男、紹介することも好きな代りに、紹介されることも好きな男だ、よくこの男の知らぬ友達と同席した時なぞ、法學生がそれ等の人たちに彼を紹介することを忘れてゐると、屹度彼の肩をつゝいて、「紹介してくれないか、」と促す男だ、今、新しい女とは、波川珊子を紹介するつもりだな、と心の中で思つた。

「行きませう、」と案の上秋澤は早速芦屋の注文に應じた。「これから行きませうか？」

「新しい女といふのは一體どんな女です？」と汐見は相變らず靜かな調子の言葉でまぜつかへした。

「新しい女といふのは君の淸さん見たいな人だよ、」と芦屋は早速一矢報いた。淸さんといふのは、先に話した汐見が二三年の間同棲してゐた、赤襯衣社同人の、彼の戀人のことである。

「これはうまくやられたね、ハハハハハ、」と、例の、取つて付けたやうな笑ひ方をして、汐見は言つた。「ぢやあ、一つお供して、その人を見に行くことにするかな。」

そこで、行くことになつて、四人で宿を出た、その頃彼女の家は嵯峨の方の田舍にあつたのだ、だが法學生はその方へ行く電車の乘場まで行く途々、何といふ譯もなく憂鬱になつて來た、と言つて、自分一人で皆に別れて歸る譯にも行

かず、妙に苛々した氣分になりながら、並んで歩いてゐる、秋澤の子供の顔をそのまゝ擴大したやうな、可愛らしい、だが餘り恰好さうでない顔や、赤襯衣社の女たちに「旬の人」なぞと笑ひ話にされてゐるも知らずに、長い髪を風に吹きなびかしながら、哲學者の口眞似見たいな言葉ばり吐かいて、いやに胸を張つたゐる芦屋の恰好や、髪の毛を長目に延ばして、立派な顔を親から生みつけられてゐるにも拘らず、始終何か屈託ありげに下を向いて、物を言ふ時には厭に落ち着いた、靜かな、思はせ振りな口のきゝ方をする、生白い顔の、文學青年の型のやうに見える汐見の様子や、何を見ても變に癪に觸つて來た。彼は殆ど專門的に文學に沒頭しながらも、どうかすると變な時に法學生であることを自覺して、友達の文學青年たちに反感を抱くことが往々あつた。今もその氣分の一に浸りながら、「秋澤の奴、自分が勝手な者を引張つて行くのはいゝが、俺まで巻添にしてしまつて、行きたくもないところへ附き合はせながら、いゝ氣になつてはしやいでゐやがる。大體、今時分に、(もう餘り宵のうちとは言へない時分であつた、)まるで自分の娘か妾かのところへ行くやうに、相手の都合も聞かないで……」とだん／＼秋澤に對して憤慨を感じ出した。そこで、歩きながら、秋澤の耳の傍に口を寄せて、

「今時分、珊子さんとこへ連れて行くつもりなんだらう、のこ／＼と多勢で行くのは惡かないか」と反省を促した。

「どうして？」と秋澤は法學生の言葉の意味がよく分らないので、丸い頬を一層丸くして聞き返した。

「だつて、君、考へて見給へ、」と大下は更に苛々して、聲に力を込めて、だが外の二人に聞えぬやうに、相手の耳元で言つた。「兎に角、相手は妙齢のお嬢さんだし、それもお母さんもゐる家ぢやないか？ そこへこんな夜遲くに、男四人もで、而もその中の二人は始めての彼女の知らぬ人だし、何も今夜に限つたことがないぢやないか、餘り亂暴過ぎるぢやないか？」と言つて外の人たちに對する言質もあることを考へて、大下は斯う附け足した。「彼等には、急に思ひ出したやうにして、今夜は先方の女が留守の日だ、とか何とか言つて、兎に角今夜は止めた方がよかないか？」

秋澤は法學生のいふ筋道が通つてゐるので、不満さうに丸い頬をふくらましながら、承諾しなければならなかつた。

そこで、それから二三丁行つたところで、彼は人々を路傍に待たしておいて、「一寸、」と言つて、その邊の菓子屋か何かの家に入つて行つて、そしてすぐ出て來て、

「その女はあそこの二階にゐるのですが、」と待つてゐた人々に言つた。「生憎留守でした。」で、一先づ法學生の意見が通つた譯であるが、それと共に、何といふ向ふ見ずなことを、この少し頭の働きの鈍い男はするんだらう？と法學生は思つて煩悶しなければならなかつた。言ふ迄もなく、やがて、明日でも明後日でも、この次に本當に彼等を珊子に紹介する場合、この菓子屋の二階の嘘を秋澤は何と言つて辯解するつもりか、斯う思ふと、法學生はそれが自分が途中で差し出口をしたゝめに起つたことだけに、更に一層悄氣(しよげ)かへつてしまつた。で、行く時よりは更に何とも言へぬ、厭な、苛々した氣分に襲はれて歸り道を歩いた。

その翌日、大下千吉郎は輕くなつた財布を抱いて、その町から一里ほど離れた、そこへ彼は東京へ行つてからは休暇毎に歸省する習慣になつてゐたところの、伯父の家に、友達と別れて歸つて行つた。彼はそこで、二三日前の消印のある、珊子からの手紙を讀んだ。「あなたの方からまだお知らせを受けませんが、此地(こちら)に歸つていらつしやると聞きましたから、この手紙を書きました、」と先づ斷り書がしてあつて、「(中略)久し振りでお目もじしたいとも思ひますし、それに少しお話したいこともありますので、失禮ですが、この葉書を御覽次第來て下さいませんか、」と認めてあつた。で、その翌日の午後、大下は彼のゐる所から二里ばかり離れてゐる彼女の家に、珊子を尋ねて行つた。

彼が驚いたことには、彼女のその時の話に依ると、彼女は一週間ばかり前。それは丁度彼と友達等が京都に來た頃、東京に行つて來た、と言ふのである。

「東京に行つて、すぐ歸つて來たのですか？」と何かそこに譯がありさうなので、が、遠廻しにこんな風に彼は聞いて見た。

「えゝ、」と珊子は、どうかした拍子にする藪睨みの目をして、甘えるやうな笑ひ方をして言つた。「實は、ある男と、

たのあ駈落のやうなことをして行つて來たのです。……」

そして彼女がつゞけて言ふところに依ると、それより前に彼女は一ヶ月餘り、山根といふ、彼自身は可成りな財産家であるにも拘らず、株主なぞである關係から、好きで道樂にそこの記者をしてゐる男の世話で、（この男の名を讀者諸君の頭に止めておいて貰ひたい。）或新聞社に勤めてゐたことがあつた。さう言へば大下の所へもいつか手紙の末に、そんなことを報告して來たことがあつたのだ。そこで彼女は多勢の男に附き纏はれたが、その中の或男と、ある晩比叡山に死にゝ行つたことがあつた。さう言ひながら、彼女は決して戀とか心中とかいふ言葉を使はなかつた。だが、その男は柔術の出來る男で、始めに「當て身」を彼女に入れて、昏倒させたところが、その假死の狀態の彼女の顏が、彼女をそのまゝにしておかせなくなつたばかりでなく、彼も死ぬのが厭になつたので、早速又「活」を入れて彼女を回復させ、そして二人で山を下りて來たことであつた。その同じ男と今度東京へ駈落のやうなことをして行つたが、彼女は「駈落のやうなこと」といつて、「駈落」とは言はなかつた。行つて見ると、又急に心細くなつて、自分から警察の保護を願ひ出て歸つて來た、その二日程の滯在中に大下のところへ電報を打つたが、返事がなかつた筈だ此地に來てゐらつしたのだもの、と彼女は言つて、けろりとした表情をして笑つた。だが、珊子が千吉郎に話したその話は、どの邊のところ迄が本當で、どこが嘘で、又どの點が本當と嘘と半分づゝであるか、それは神樣が知つて居られるばかりだ。

けれど珊子は、そんなことに頓着なく、その種類の話を、更につゞけて言ふのに、彼女を取卷く男たちの話、少なくとも彼女と何等かの交渉をした數人の男たちの話、中には、彼女の言葉そのまゝで言ふと、「私も、それは本當に何一ツ口答へしない、人形のやうに大人しい人なんですもの、そして又人形のやうに顏の奇麗な人なんですもの、私もだからその人を人形のやうに好きになつたんでせうね、」といふ、何處かの細君のある男との交渉に就いて、どうしてもその男と離れられなかつた、とか、ない、とかそれが比叡山に一緒に死にゝ行つた男なのか、それとも外の男なのか、それ等のことは十分說明されなかつたが、兎に角、「戀愛」といふ言葉を當て嵌めても、凡人ならば不服は言へないと思はれるやうな色々

な事柄を、御叮嚀に彼女は「いや、戀ぢやありません、そんなもんぢやぁ…………」と打消し打消し話したのである。「この春にも、その人から(これが又どの人なのだか、甲美男なのか、乙美男なのか、實際彼女がその時の話に出て來た十數人の男は皆美男だつたので、美男でない大下千吉郎はひどく恐縮したものだ、少しも要領を得ないのだが、)默つて五百圓包んで、何とか(法學生は聞き洩らした、)として持つて來ましたので、私も默つて取つておきました、」とそんなことを言つて、どういふ意味なのか、彼女は、藪睨みの目をして、そして又けろりとした顏をして甘へるやうな笑ひ方で笑つた。

大下も詮方なく附き合ひに笑つたが、何のことか分らないので、さううまく輕快には笑へなかつた。兎に角、何のことはない、彼はわざ〳〵二里の道を呼び出されて、彼女の胸の中にもや〳〵とたまつてゐた惚氣を、無生物にでも對するやうに、吹き込まれたとでも言はうか、或ひは彼女の戀人の銘々傳を、稽古中の、下手な講釋師の弟子が壁に向かつて本讀みをするやうに、下手に讀み立てられたとでも言はうか、そして最後に、おまけに、折に觸れて聞かされる彼女の男性觀まで、復習されたことである。それは、讀者諸君の參考までに、簡單に言ふと、彼女は遊冶郎型の、色の生白い、顏ばかり人形見たいで、內容のない、頭のない男は、唾棄したい程厭ひだ、と言ふのである。その癖、普通の言ひ方で言ふと、彼女が惚れる男は十人が十人とも、恐くその類の男なのである、どういふんでせうね！と彼女は笑ひながら、大いに意味ありさうに言ふのが常であつた。そして、彼女が尊敬すると稱する、所謂頭がしつかりした、內容のある男たちは、少々美男であつても、大抵敬遠の形をとることになる…………なにを、くだらない！と法學生は腹の中では、聞きながら、思ふのだが、氣の弱い男で、そのくだらない話に相槌さへ打つて聞いてゐるのが常であつた。そして、彼が歸る時になつても、彼女が彼に「葉書でお話したいことがあります、」と言つてやつたのは、要するに先の話だつたのか、その外の話らしいことは何も言はなかつたが、大いに當てられた法學生はそんなことはすつかり忘れて、彷々の體で立ち上つた。

「明日ね、」と彼女は「まあ、いゝぢやありませんか、」と止めてから、自分も立ち上つて、そして言つた。「秋澤さんから今朝お葉書を頂いたんですが、紹介したい人があるから、五條の何とかいふ宿屋まで來てくれと、言つて越されましたから、外へ出たついでに、あなたの方へもお廻りしようかと思つてゐましたの。」

「あゝ、さうですか、」と大下は何氣なく答へたが、心の中は明らかに穩かでなかつた。「多分それは僕が東京から一緒に來た、二人の友達のことでせう。」

「本當に、」と彼女は彼を玄關に送つて行きながら言つた。「本當に、今日は、つまらない、自分勝手な話ばかりお聞かせしまして、失禮しました。」

「いゝえ、」と法學生は別のことを考へながら答へた。「大變面白く拜聽しました。…………さよなら!」

そして二人は別れて、以來先に言つた駿河臺の宿屋の時まで會はなかつたのであるが、秋澤の口から、先の晩のことが變に歪んで蘆屋と汐見に傳へられたのであらう、その時から彼等と法學生との間が、妙に物が挾まつたやうな關係になつてしまつた、殊に一本氣な芦屋が、明ら樣に大下を排斥するやうに見えたのと、今一つはその後汐見とは深い交渉もないやうだが、芦屋とは彼女は屢々手紙などの往復をしてゐるやうに、彼女から大下への手紙にも屢々書かれて來たことがあるので、さてこそ法學生は珊子と芦屋とを殊更に近附けることに、今度は骨折らうとした次第である。──

四

「兎に角、一度芦屋君をそのうちに訪問なすつたらどうです?」と大下はくり返して言つた。だが、いつ迄も、さう話題もないのに、傍にゐる寶部を無視して、彼に何の關係もない芦屋の話もしてゐられなかつたのと、のみならず、彼女自身はその寶部の關係してゐる美術座に入るためにわざ〳〵上京して來た、位であるから、そんなに寶部を度外するのを彼女は氣に入らないらしいので、法學生は仕樣がないので、又話題を變へた。

「しかし、」と彼は言つた。「その美術座に入るについて、そんなに時日がかゝるとすれば、こんな立派な宿屋に暮してゐちやあ、不經濟でたまらないでせう、どこかいゝ下宿を探して引越したらどうです？」

「僕もさう思ふんです、」と實部は忽ち發言權を見出して、勢込んで言つた。「さうです、お金にはお困りにならないんでせうが、餘り贅澤にして居られると、自然美術座の方でうけがよくないでせうから。さうです。下宿がいゝでせう。丁度今は學生の休暇時で、どこの下宿でもひつそりしてるでせうから。どうです？ 大下さんさへ御迷惑でなければ、大下さんの下宿に、無論部屋は空いてるでせう？」

「それもいゝかも知れませんね、」と大下は半分は歡迎するやうな、半分は躊躇するやうな心で答へた。

「さうですね。」と珊子は言つた。「知らない下宿は厭ですから、大下さんのとこなら、御迷惑でせうが、お世話になつてもいゝわ。」

「さう、それがいゝでせう、」と實部も大いに讃成した。「そしたら僕の家にも近いし、美術座の事務所の方にも近いしますから。」

そのうちに、大分夜も更けて來たので、翌日珊子が一度大下を訪れるといふことになつて、後者も、「ぢやあ、いらつしやい、僕んとこから芦屋君の下宿も直ですから、その時ついでに彼を訪問なすつたらいゝでせう、」と言つて、そして實部と二人で歸途に就いた。もう終電車がなくなつてゐたので、二人はぶら／＼と夏の夜更の町を歩いた。

途々、實部は又色々と演劇界の話を始めて、前の山口博士の演劇協會のこと、それから今度の美術座のことなどを話した。彼の言ふところに依ると、演劇協會では、山口博士は役者を敎育するのに、殆ど鞭をも使はないばかりの「[illegible]い、恐しい」方法を用ひた。あれでは新しい時代に適しない、尊敬すべき學者ではあるが、同時に「餘りに舊弊な、頑固な人」だと評して、それに比べると、今度の「我々の美術座」のやり方は、萬事に於いて如何に新しいかといふことを力說した。

「だが、蔵原といふ人は、」と大下は言つた。「僕は以前からあの人の書かれたものは随分愛讀してゐますが、人間はちつとも知りませんが、さういふ事業といつた類のことの出來る人なんですか？」

「えゝ、それは頭のいゝ人ですからね、」と寶部は即座に答へた。

そこで、又大下は話頭を變へて、「前の演劇協會では、生徒、つまり役者の男女の間を非常に嚴しく取締つて、若し不都合なことを仕出かすものがあつたら、即座に退會處分をするといふ規則があつたさうですが、本當ですか？」と聞いて見た。

「本當ですよ、」と寶部は力をこめた言葉で答へた。「蔵原さんと丸尾つき子なぞの例がそれです、その規則に觸れたものですから、一人はなくてならぬ先生で、他の一人は、これも出られては困る大事な女優だつたんですが、山口博士は涙を流して首斬られた譯です、つまり博士は自分の造つた罠に掛られたやうな譯ですね。」

「僕は博士の方に讃成ですね、」と大下は言つた。「役者なんてものは、いや、これは失禮、さういふ共同事業を營まねばならないものには、それ位の規則をこしらへて置かないと、上に立つ人が治めようがないんぢやないですかね？」

「さうかも知れません、が…………」と寶部は苦笑しながら言つた。

「丸尾つき子といふ人間は、世間の評判に依ると、ひどいヒステリイで、それに近頃は有名になつたので威張り出して、傍若無人の振舞をするやうに言ひますが、本當ですか？」と大下は聞いた。

「いや、少しはそんな所もないではありませんが、」と寶部は言つた。「始めは僕も非常に嫌ひでしたが、近頃は大いに接近して、なアに、人には誰にだつて多少の缺點はあるものですよ、近頃は僕は彼女とうまが合ふといふ程、意氣投合してゐますよ。」

そこで二人は暫く無言で歩いた。

「あなたは、」と暫くして寶部は急に話題をかへて言つた。「あの珊子さんとはもう長く交際してゐらつしやるんです

か？」

「さうですね、」と大下は冷淡に答へた。「あなたより長いでせうね。」

「一體どんな人でせう？」

「さあ？」

「その、」と寶部は言ひにくさうに言つた。

「その、何かこれ迄に戀愛事件でもあつた人でせうか？…………これ迄は兎に角、現在？…………。」

「僕はその方のことはよく知りません、」と大下は冷淡に答へた。

五

翌日、珊子が大下を彼の下宿に訪ねて來た時は、誰に遠慮もなかつたので、話は自然に芦屋のことに陷ちて行つた。芦屋に就いて珊子と色々な話の出てゐるうちに、ふと大下が思ひ出したのは、これも今度出來る美術座の脚本係をしてゐる人で、前川と呼ばれる劇作者が或時彼に齎らした、芦屋と珊子に就いての一つの話である。それは、彼女は大變芦屋に戀ひ焦れてゐるが、芦屋は彼の主義として、一人の婦人なぞにかゝつらつて居られない、しかしそれにも拘らず彼女の方からは度々手紙でいどんで來るので、彼は近いうちに或主義者が婦女子からいどまれて迷惑する心持を一篇の小說に書いて發表するから、それを讀んでくれたら引いては彼女の心持が分るだらう、と言つてゐた、といふのである。法學生大下はそれを思ひ出して、少し會話に退屈を覺えてゐた時を見計らつて、しかし幾度か止さうと躊躇したのだが、面白半分に、芦屋と珊子とをからかふつもりで、その話を彼女に持ち出して見た。

「まあ！」と彼女は大袈裟な叫聲を上げて、わざとらしく迷惑さうな表情をして言つた。「それはまるで反對ですわ。芦屋さんこそ始終私に手紙で、戀をどうの斯うのと言つて入らつしやるので、それで私が氣が向いた時は相當のお返事

さし上げますし、でない時はちつともお返事さへしないものですから、ですから一度も絶交狀を貰つたやうな譯ですもの。」

そこで法學生は直に又その話を撤回して、「兎に角、芦屋君の家は直こゝから近くですから、僕がその邊まで送つて上げませうか、是非一度お訪れになつた方がいゝでせう、」と勸めた。

そこへ、「あなたが來てゐらつしやるだらうと思つて、やつて來ました、」と珊子に言つて、肝心の主人公の大下を無視した言葉を最先に吐きながら、寳部が訪れて來た。

寳部が來ると、話が又美術座のことばかりに移つて行つた。寳部が昨夜話したところに依ると、今度珊子が美術座に入るためには、そこの頭領の藏原の愛人で、且つ美術座の俳優の立看板であるところの、丸屋つき子と意氣投合すればいゝ、といふことであつたが、先程、まだ寳部の姿の見えなかつた時、珊子が密かに大下に洩らしたには、彼女は餘りつき子を虫が好かない、恐らく相手も彼女を餘り喜ばないらしい、とのことであつた。で、大下の察したところでは、寳部は甘い男らしいから無論珊子の加入するのを讃成してゐるのだらうが、肝心のつき子の交渉が、女同志などゝいふものは變に敵對し合ふものだから、それがうまく行かないのであらう。

「で、一體、」と大下は言ふことがないので、寳部に向つてこんなことを言つたりした。「いつ珊子さんが美術座に入ることが確に許可されるのですか、幹事連の相談會でもあつて、それで定るんですか？」

「いや、そんなものはあつてもほんの形式だけです、」と寳部は言ふのだ。「たゞ珊子さんとつき子の間に理解が成立てばいゝんです。」

「その、」と法學生はそこで珊子に向つて言つた。「あなたとつき子氏との間の理解が仲々成立たないんですね？」

「いゝえ、成立つ成立たぬといふより、つき子さんは私に何にも話して下さらないんですもの、」と珊子は不平らしく顏を歪めて言つた。彼女の顏は、少し變つた顏の表情をすると、普段の目鼻立のはつきりした美人型が、不思議なほど

一瞬の間にくづれて、時とすると醜怪にさへ感じられることがあつた。さて、彼女は寶部に向つて聞いた。「一體つき子さんは私のことをどう思つてゐらつしやるんでせう？」

「いえ、別にその…………」と暫くは、寶部はそれに對して白とも黒とも附かぬ言葉をつかつてゐたが、到頭思ひ切り惡さうに斯う言つた。「實は藪原先生もつき子さんも、あなたがその…………その、これ迄派手な生活をしてゐらつした方ぢやないか、とそれを大變心配して居られるんですが…………」

そして寶部は尙言葉をつゞけて、珊子が餘りけばけばしい色彩の服裝をしたり、舞臺でのやうな化粧をしたり、立派な旅館に泊り込んだり、色んな俳優と交際したり、つまり、さういふ「派手な生活」ぶりに對して、誰よりもつき子が面白く思つてゐない、と述べ、それから當のつき子の女優としての心掛けなるものを傳へて言ふには、彼女はこれ迄演劇協會にゐた時から、舞臺の上では人一倍衣裳のことを喧しく詮議する方だが、それは役者の生命といふものは卽ちそこにあるからで、當然のことである、しかし私生活は役者にとつてはお添物の生活に外ならぬから、その時はどんなお三どんのやうな身裝をしてゐてもいゝ、のみならず特に誘惑の多い職業であるから、好んでさうしてゐる方がいゝ、と斯う言ふのである。「つき子としては一應もつともな考へですよ、」と寶部もその方に讚成らしく、最後に斯ういつたものだ。

「それは、」と珊子は負けぬ氣を出して、躍氣になつて、さうなると先にも言つたやうに醜く見える顏を振つて、そして反駁した。『それは、人に依つてそれぞれ自分の考があるのですもの、自分の考を人に押しつける譯にも行かねば、人の考を自分に押し付けられる譯のものでもありませんわ。」

「勿論、」と寶部は稍々相手の權幕に恐縮した形で言つた。「勿論美術座は新入の集まりなんですから、殊に箇性といふものを尊重し、形式的のことを排斥して、出來るだけ自由な氣持でやつて行かうといふのが理想なのです。………………」

けれども、と、それから彼は團隊の意義といふやうなことを説き出して、つまりつき子の所謂女優の粗服主義は、外の女優に惡い感化を及ぼさないためで、言ひ換へると、一人の朋輩が美い着物を着ると、すぐ他の者がそれを採用したく思ふ、その時彼女がそれが出來ない貧乏な境遇にゐたとすると、そこで、女は弱いものだから、知らず識らず墮落の淵に陷ることになる、さういふ弊害を避けたいからに外ならぬ、と言つた。

そこで寶部は、今は、遠慮も何も忘れて、正面から珊子に對して、つき子の意見か、彼自身の考か分らないが、兎に角珊子に反對の意見を述べ、從つて珊子もたしなみを忘れて、美人の相恰をくづして、彼に反駁した、默つて解放して行くと、それがいつ迄續くか分らない狀態なので、傍觀者の位置にあつた大下は外の話に變へさせようと思つて、彼等の議論の一寸でもの切れ目をねらつた。

「丸尾つき子はさすがに仲々しつかりしたことを言ふ、ゑらい女ですね、」と彼は素早く彼等の隙を見て言葉を挾んだ、そして寶部と珊子との顏をうかゞつて、「波川珊子さんがゑらいやうに…… ……………」と斯う下の句をつけた。

そこで、珊子も仕方なささうに、寶部も一緒に、苦笑したが、しかし直に

「どうして私がゑらいのです？」と今度は大下に突つ掛かつて來た。

「いや、それは、」と法學生も亦すぐに恐縮してしまつて、「つき子氏を代表する寶部君の議論、そのあなたの反駁論が仲々盡きさうにありませんのを見ても…………いや、仲々面白かつたですよ、」と赤いにきびの跡だらけの顏を、更に赤くして、しどろもどろの挨拶をした。

「まつたく、」とその時、寶部も大分議論にへこたれたと見えて、その調停のやうに口を挾んだ。「まつたく、丸尾といふ女も解らない女ですよ。何しろ、自分より奇麗な女や、自分より奇麗な風をする女は嫌ひなんですからね。」

「それは仲々よく解つてるぢやありませんか？」と大下は又元氣を回復してこんなことを言つた。

やがて、寶部は、今日これから事務所に行く用事があるから、その時藏原に會つて、珊子のことをよく頼んで來よ

う、彼がそこに來てゐなかつたら、彼の自宅へ行つて來る、といふので、珊子は、何分よろしく願む、と頼んでゐた。

それから、實部が歸るとすぐ、大下は珊子を芦屋の下宿まで送つて行つてやることにした。が、先にも言つたやうな關係から、法學生自身は芦屋に會ふことを好まなかつたので、そこの玄關から彼だけは歸つて來ることにして、取次までしてやると、やがてそれを通じて玄關に歸つて來た女中の言葉に、彼女はいぶかしさうな顔をして、

「芦屋さん、今日は少し差支がありますので、失禮します、と言つて居られます。」と言ふのだつた。

で、二人はひどくてれて、歸る途々、

「これや、僕が手拔かりでした。」と大下は言つた。「あれは多分下宿の女中が芦屋君に、あなたと僕と、僕の人相を言つたんですよ、一緒に來たと傳へたので、それで芦屋は僕を憚つて、會はなかつたんですよ。つまり、あなたは傍杖を食つたんです、芦屋君は決してあなたのことを惡く思つて、あんな挨拶をしたんぢやないんですよ。惡く思はない方がいゝですよ。」

「いゝえ、」と珊子はそれを打消して言つた。「芦屋さんは私のことを怒つてゐらつしやるんです。實は此地へ來てから、いろ／＼と私も忙しかつたものですから、芦屋さんに通知狀もさし上げないで、ゐるもんですから、それで氣を惡くしてゐらつしやるんでせう。」

「何にしても、近いうちに、もう一遍、今度はあなた一人で行つて、そしてあやまつておいたらいゝでせう。」

それから、近いうちに珊子は大下の下宿の空いてゐる部屋を借りることに定めておいてくれ、と彼に頼んで、そして、途で、彼等は別れた。

六

それから二三日後、愈よ珊子は大下千吉郎の下宿の一間に引越して來ることになつた、その日の午前に荷物と共に彼

女は移つて來た、午後丸尾つき子を訪問しに出かけて行つた。

退屈なのも困るが、やつぱり斯うごたごたと取込むのは何宜しくない、と呟きながら、大下千吉郎が押入から枕と小蒲團を取出して、晝寢をしようと思つて横になつた時、

「斯ういふ方がいらつしやいました、」と女中が名札を持つて來た。誰だらう、名札なぞを通してやつて來る者は？と早速起き直つて、それを見ると、中貫林次と讀まれた。

「おや〳〵、珍しい、中貫君が上京したのかな？　人の集まる時には一度になるものだな、」と大下は獨言ちながら、

「通してくれ給へ、」と女中に言つた。

中貫林次は大下と同じ大學の英文科に、去年まで籍をおいてゐた、彼の文學友達の一人で、法學生は東京に來た始め、かの芦屋の紹介で彼と知り合ひになつた者であつた。去年の夏の始め頃のことであつたが、それまでは中學以來の秀才らしい面影をもつて、人に訪れられることを好きだが、人を自分からは餘り訪れない方で、從つて始終自分の書齋とする部屋の机の前に坐つてゐた、中貫は、青年であつたが、ふとした動機から、といふよりも或時が來て、彼は所謂茶酒屋に溺れ始めた。その溺れ方が又目醒ましい程で、それは一ケ月以上一晩も下宿の自分の部屋で寢たことがなかつた程であつた。そして最後に、と言つても遊蕩を始めてから三ケ月以上ではなかつた、或見ず轉藝者を引かして、彼女と共に暫く、それが又一ケ月以上ではなかつた、世帶を持つて、さういふ事件と共に學校は無論いつの間にか止めてしまつたのであるが、結局それが千葉縣にゐる彼の兩親の耳に入つたと共に、少なからざる金を出さして、彼女とも變な風に別れてしまひ、以來郷里の方に歸つてゐたのであつた。

「やあ、暫く」と言つて、中貫はその丸形の坊ちやん坊ちやんした顏を笑はせながら、大下の部屋に入つて來た。

「暫く、」と大下も久しぶりで友達に會つた嬉しさうな顏で答へた。「いつ出て來たんだ？」

「二三日前、」と中貫は甲高い聲で答へた。「親父が上京したらどうだ、と言ふもんだから、半年ばかりの豫定でやつて

來たんだ。親父は僕を傍において、見てゐるのが厭になつたんだよ。だが、今度は眞面目にやるつもりだ。イヒヒヒ」
と、と聲に相當した、笛のやうな音を發する笑聲で結んだ。
「相變らず元氣で結構だね、」と大下は言つた。「大分田舍に引込んでたやうだが、勉強したらう？」
「仲々、それが君、お互に若い人だからね、」と可愛らしい顏だつだが、だん〳〵それが凸凹に骨張つて來て、少し男前が下つたな、と相手に思はせた、彼は一流の能辯で、甲高い聲を張上げてつゞけた。「お互に若い人だからね、田舍に引込んで勉強もないぢやないか？　僕は回想したよ、樂しき回想をね。京の夢大阪の夢でね、…………」
と言つたやうな雜談の末、大下は波川珊子が京都からやつて來て、美術座に入る目的で目下この下宿に來てゐることを話した。といふのは、その以前から時々大下は彼の友達に波川の話をしたことがあつて、どうかすると彼女が彼の愛人のやうに思はれたことがある程、既に彼女の名前は彼の友達仲間に知れ渡つてゐたのである。すると、中貫は忽ちその可愛らしい、彼のも亦どうかした拍子に藪睨みになることがあるところの、丸い目を輝かして、大いに好奇心を働かされたらしく、それからは外の一切の雜談を排して、恐く彼女に關した話、例へば女優に就いて、演劇に就いて、ばかり話し出した。そして終には「僕も女優の戀人が一人欲しいな、」なぞと言ひ出したので、この男また一役演じるかも知れないな、と大下は察すると共に、やつぱりそれでも珊子が來たので、賑かになつて嬉しいやうな、しかし又變なものを背負ひ込んだと悔むやうな、二つの氣になつた。
大體、中貫といふ男は、その容貌が語つてゐるやうに、坊ちやん坊ちやんした、その代り始終友達なぞにも我儘を働く癖がある、秀才らしいところと、同時に腕白らしいところとを持つてゐた。彼は嘗て彼の友人の從妹に見ぬ戀をして、實際寫眞でさへも見たことがなくて、唯友人の從妹といふ存在に對して戀をして、それから二三ケ月經つてから始めてその相手に會つて、さて又改めて戀をしたといふ履歴を持つてゐた、つまり戀を戀する人に屬する代表的な人物であつた。だから、この場合でも、早速波川珊子の存在にすでに早く戀をしたのも不思議ではないのだ。

そんな譯で、彼はもう二人の間に話の種が盡きてしまつてからも、容易に歸らうとはしないで、何處へ彼女は行つたのだ、とか、何處かへその行先から廻るんぢやないか知ら、とか、でも、もう夕飯時分だから歸りさうなもんだね、とか、その同じことを幾度も幾度とも大下に尋ねて、彼を閉口さしたが、やがて思ひ切り惡さうに立上つて、「又、ぢやあ、來よう。」と言つて、まるで、始めの訪問の主旨を忘れて、珊子に會へなかつたので、用が足りなかつた、といふ挨拶をして歸つて行つた。

が、生憎、それと殆ど入れ違ひに珊子が歸つて來て、彼女は自分の部屋に歸る前に大下のところへやつて來た。

「こんな本を貰つて來ました。」と言つて、彼女は瀬原の最近に著した「夢と夢」といふ本を彼の手に渡した。大下はそれを手にとつて、何氣なく開いて見ると、それの扉に、その下の左の隅に「つき子」として、まん中に「呈波川珊子樣」と拙い筆蹟で認めてあつた。

「これは、ほオー」と法學生はわざとらしく叫んだ。「つき子さんが著者といつた格ですね。」

「なか〳〵、大下さん。」と珊子は眞顔で言つた。「今日もつき子さんは、私と瀬原先生との話は、それやまるまる嘘といふ譯ぢやありません、といふやうな始まりで、それはそれは手放しですのよ。」

「へえー」と大下はわざと呆れたらしく言つた。そこへ女中が夕食の膳を持つて入つて來て、

「あの、波川さんもこちらで御一緒にお上りになりますか?」と言つた。

「えゝ、持つて來て頂戴。」と珊子は女中に言つて、それから大下の顏を見て、「ねえ、いゝでせう?」と駄目を押した。

夕食が濟むと、珊子はすぐ又何處かへ出かけて行つたので、その後、大下はこの間うちから一度に活動した疲れが出たのか、少し身體の具合が惡いと感じて、早々女中に床をとらせて、宵のうちから寢てしまつた。ところが、さうしてから可成り時間が經つたと思へた頃、彼はふと枕元で誰か起すものがあるのを感じて、目を醒ますと、珊子が例の敷畔

みの目をして、甘へるやうな表情を浮べて彼の頭の上に笑ひながら立つてゐるのであつた。

「どうしたんです？」と法學生が目をこすりながら聞くと、

「え〻？　何でもないんですけれど、…………　あなたもうお寢みになつたの？」と珊子は言ふ。

「何時でせう」

「未だやつと十時よ、」と珊子は答へる。

大下は先程床に着く前は、可成り身體の具合がよくないと感じて、今度目を醒ましたら本當に病氣になつてゐるんぢやないかな、と心配しながら眠りに就いたのだが、それがすつかり氣分がよくなつてゐたので、何か拾ひ物でもしたやうに愉快になつてゐた。

「私の部屋に話しに入らつしやいませんか？」とそこへ珊子に勸められたので、心よく起き上つて、彼女の部屋に行つて見ると、案外、そこには既に二人ばかりの男の客が來てゐたので、彼はその時まで二三割眠りの續きの氣分にあつたので、少なからず狼狽しながらも、輕く客の方に會釋をすると、その一人から馬鹿叮嚀な挨拶を返されたので、更に愈よ狼狽して、彼も亦馬鹿叮嚀な挨拶を返した。

「私は日本劇場の歌劇部の井波三五郎といふものです。どうか宜しく、」とその客ははつきりした、多分に誇らしい調子で言つて、ぶん〱香料の匂のする名刺を出した。大下は腋の下に冷汗をかきながら、つまり氣の弱い男の常として、相手に對して、肩書のない自分がひどく弱少なもの〻やうに痛感されて、辛うじて初對面の挨拶を終り、それから今一人の方に向ふと、これは思ひがけなく、曾て或友人の家で會つた見知りの男で、もつともこの男も某俳優養成所を出て當時は現代劇社といふ新劇團に屬してゐた、木内といふのがその名であつた。

「お見それしました。…………………」

「しばらく…………」

この方は簡單に濟んだ。

それから、例に依つて彼等は取止めもない雜談に時を移したが、やがて十二時が打つと、井波が「さようなら」の挨拶をしたので、大下も同宿の誼として、珊子が彼を送り出して行く後から、彼も木内を部屋に殘して立つて行くと、玄關までの長い、片側が雨戸になつてゐて、片側が下宿人の部屋なのだが、そこでは人々が既に灯を消してゐたので、暗い廊下は、辛うじてその向ふの端にある、玄關への曲り口の所に點いてゐる電燈の光だけで、それをたよりにやつと歩いて行ける程だつたが、ふとその眞暗な中を歩きながら、法學生が見上げると、彼の一間ほど前を、暗くて見えないと思つて、寄り添つて歩いて行く珊子と井波の姿が、活動寫眞で見る盜賊の寄合ふ地下室でのやうに、影法師になつて黑くはつきりと見えるのだ。五尺八寸もあるかと思はれるやうな、大男の井波が、これは又五尺に滿たない少女の珊子の肩に、そおツと手を廻した、無論それを珊子は拒絶するだらう、と思つて、尙も目を放さずにゐると、拒絶しないどころか、そのうちに男がその顏を女の顏にぴつたりと寄せたので、氣の弱い大下は暗がりの中で、突然羞恥心に襲はれて、赤くなつて、どうしよう？ こんな場面を見て？ と思つてゐるうちに、廊下が盡きて、玄關との曲り角の電燈の下に近づいたので、前に行く二人はさつと離れた、で、彼も漸く心臟の鼓動を收めて、丁度井波が庭に下りて靴を穿いてゐた時、やつと遲れ走せのやうな顏をして、玄關に行つて、彼に「さよなら」を言ふと、靴をむすび終つた彼は、先程まで話してゐた時と同じ顏をして、同じやうに叮嚀な挨拶返をして歸つて行つた。そこで大下は珊子を部屋に歸して、入口の戸を後から閉めかけておいて、自分の部屋に一寸寄つて卷煙草をとりに行つてから、遲れて彼女の部屋に歸つて行くと、珊子も亦先程までと少しも變らない、同じ顏をして、木内と向ひ合つて坐つてゐた。

色の黑い、鷲のやうな目をした、骨張つた顏をした木内は、三枚目役者らしい雄辯で、それが又非常な雄辯さで、よくもまあそれだけ喋りつゞけられた、そしてよくもまあそれを聞く人を笑ひつゞけさせられたと思ふほど、それから明け方の三時頃まで喋つて、家を抑へてゐるのか、それとも下宿してゐるのか、飄然と何處へともなく歸つて行つた。

大下と珊子とが木内を送り出して、取敢ず一先づ珊子の部屋に歸つて一服してゐた時、戸の外で靜な雨が降り出した。彼等は、客の應接に、殊に彼女はその間に二度までも外出したのだ、へと／＼に疲れた身體を覺えたがそれと共に反對に神經は益々映えて來るやうに感じた。その時、ふと窓の外に、それがすぐ隣の陸軍大將の家の庭の邊にでもゐるのだらう、木の枝から他の木の枝に渡つては鳴く梟の聲が、だん／＼此方に向つて歩いてでも來るやうに、近づいて來るのが聞えた。何も言へぬ氣味の惡さを感じながら、それにも拘らず、知らず知らずその方に氣をとられて、二人とも疲れた身體をぐつたりさせて耳傾けてゐると、又全然違つた方角から、他の一羽の梟の鳴く聲が起つた、それは稍々暫くの間一所から聞えてゐたが、やがてそれも又次第に風のやうに動いて行つた。

「何です、あれ？」と珊子はその薮睨みの目を大きく、無邪氣に見開いて、ひどく恐しさうに、息をはづまして言つた、「あれ、あの赤ン坊の泣くやうな聲？」

「梟ですよ、」と法學生は突然眠つてゐたのを揺り起されたやうに、はツとした表情をして、その赤いにきびの跡だらけの顔の中に、申し譯のやうに付いてゐる小さい目を、小さいながらに見開いて答へた。「あなた、始めてですか。梟ですよ。」

『恐い！…………』と彼女は少女のやうに言ひ張つて、相手が戀人なら抱きつくところを、さうもならないので自分と自分の胸を抱いた。

その結果、彼女の頼みに、濟まないが、この部屋で、私の傍で寢んで下さいませんか、と言ふことになつて、仕様がないので、法學生は彼の二階の部屋から、蒲團と枕とを擔いで來て、彼女の傍で寢てやることになつた。部屋が六疊なので、蒲團は無論別つだが、蚊帳を一つにして寢なければならなかつたものだから、さういふことに餘り經驗と度胸のない法學生は、床に就くなり、割合に女らしくない大きな鼾をかく、彼女が易々眠り入つてしまつたのに、彼だけは夜が明けるまで眠り入れないで困つた、そして夜が明けると早速、又蒲團と枕とを引擔いで、二階の自分の部屋に歸つて、

それから死んだやうに熟睡に陷つた。

七

翌日、午後、瑚子は十二時過に起きたので、食事を濟ますと直、例の美術座のことで、實部の家に出かけた。と、その後へ、丁度その時床を出て顏を洗ひ終つた大下のところへ、その日は日曜だつたので、日本劇場の方の稽古を休んだと言つて、瑚子の留守に訪れて來た井波が、無論彼の歸りを待つための暇つぶしに、訪れて來た。

その時、大下は始めて井波の顏や姿を泌々と觀察することが出來たのだが、それは二寸ばかり延した頭の毛を、櫛の目正しく撫で上げてゐる樣子から、色は少し淺黑くして、品格には乏しいが、文字通りぱつちりした目付をして、鼻は高く、それに鼻眼鏡を掛けてゐて、口元は締り、先づ申し分のない美男である上に、その手の指には、法學生の友達には一人も見られない、石の入つたのや、延のや、合して三つの金の指輪を嵌めてゐて、思ひ切つて變つた仕立方のアルパカの洋服を着てゐる姿は、萬事西洋風ではあるが、一口に言ふと「芝居者」といふ感じが全體を蔽うてゐた。彼はその淺黑い顏に、目立つて白い齒を、物言ふ度にむき出すやうに見せながら、法學生を相手に雜談を始めた、がそれをいつの間にか音樂の方に持つて行つて、それがだん／＼大ツぴらな自慢話になつて、大下が『はあ、はあ、』と大人しく聞いてゐるので、日本に歌劇といふものを起した、自分は取も直さず先驅者である、といふ邊に及んだ時は、まるで講義でもしてゐるやうな口調で喋つたものだ。

「僕は唯何といふことなく、好きで、その癖よくは分らないのですが、兎に角音樂といふものはいゝ藝術に違ひない、と無條件に尊敬してゐます、」と法學生は、それでも怒らなかつたのみか、そんなお世辭を言つた。

すると、井波は更に藝術に移つて行つて、それが又仲々盡きさうにないので、大下は閉口して、早くそれを切り上げさせるつもりで、「藝術といふものも、どうも解つたつもりでゐましたが、よく考へて見ますと、僕にはどうもまだ十分

に解らないのです、」と正直なところを答へた。

「いや、」と井波は、すると、益々得意な顔をして言つた。「藝術々々と皆えらさうなことを言つて、高く止まつてゐますが、その藝術は誰が見、誰が味ふのでせう？　それは即ち民衆ではありませんか？　民衆を離れて、僕は藝術といふものはあり得ないと思ふのです。」

「して見ると、」相手が興奮して來ると、反對に冷靜になつて來て、臆病氣が消えてしまふ癖の法學生は、そこで例の多少皮肉を弄する氣分にかへつて言つた。「して見ると、日本劇場なぞは、その藝術の主旨にかなつてゐる譯ですね、…………成程！。」

「いや、」とその容貌が示してゐるやうに、餘り敏感でない井波は、相手の言葉を眞面にとつて、得意らしく白い齒をむき出して言つた。「いや、そんな譯でもありませんが…………先づそれに近い方だと思ひますね。」

これは堪らない、と思つて、さすがの法學生も持て餘してゐると、そこへ又昨夜の木内が、「今起きたところです、昨晩は失禮、と言ひながら入つて來た。そして彼は座に着くと、早速三枚目役者の喋り方で、聞手を徹頭徹尾くすぐるやうに笑はせないではおかない喋り方で、饒舌を弄し出した、それと前後して、そこへ珊子が歸つたので、一同は法學生の部屋から彼女の部屋に引越して行つた。木内の身振り入りの饒舌は、そこへ移つてからも、一刻も絶え間なくつゞいた。そして夕方彼が歸つて行く時は、肝心の話手の彼を除いた、聞手たちはすつかり疲れてしまつた。ところが、玄關に、大下が一人で木内を送り出してゐるところへ、ひよつこり中貫がやつて來たので、法學生は新しい訪客をそのまゝ自分の部屋に案内して、そこで二言三言雑談してゐると、珊子が入つて來て、

「これから、」と彼女は立つたまゝ、一寸中貫に會釋して、部屋の主人に向つて言つた。「約束がしてありましたので、井波さんと佐伯さんの家へ行つて參ります。」佐伯といふのは、日本劇場の歌劇部の舞臺監督をしてゐる男なのである。

「さうですか、行つてらしやい、」と大下が座つたまゝで顔を上げて言ふと、

「珊子さんですか、始めまして…………」と突然中貫が立つてゐる彼女に挨拶を始めた。

「あら、失禮、始めまして、」と彼女も少し狼狽して、斯う半分口の中で、言ひながら、その場に坐つてお辭儀をした。

「中貫林太君です、」と大下があわてゝ、遲れ走せに、斯う紹介の言葉を言ふのと同時に、

「私、中貫林太です、」と客は自ら名乘りを上げた。

「私…………」と言つて、珊子は益々狼狽して、後は自分の名前を口の中で言つた。

「まあ、どうぞ、」と言つて、中貫は拔ケ目なく、そこで、座蒲團なぞを勸めて、「何だか私はあなたに何處かで一度くらゐお目にかゝつたやうな氣がします、そんな筈はないのですが…………」と事實そんな筈がないことを、中貫は持前の甲高い、笛のやうな聲で言つた。

「まあ、ホホホホホ、」と珊子は返事に困つて、斯う笑にまぎらした。そこで一寸一座が無言になつた。

「あの、珊子さん、」と暫くしてから大下は言つた。「井波君が、ちやあ、下で待つてるんぢやあないんですか？　中貫君に失敬して、お出かけなすつたらどうです？」

「それでは失禮します、」と珊子はやつと解放されたやうに言つた。

「それでは、又、」と中貫はその語尾の言葉に力を入れた、が直に法學生に向つて言つた。「どうだ、僕たちもその邊に散歩に出ようぢやないか？」そして又珊子に向つて言つた。「その邊まで一緒にお供しませう。」

法學生は從順に從つて、珊子を先に、中貫と共に部屋を出て、その時まで玄關でぼんやり立つて待つてゐたらしい井波と共々外に出た。だが、電車の停留所までは二町とないところなので、間もなくそこに出ると、そこで四人の一行は二人づゝに別れねばならなかつた。

「さやうなら、又、」とそこでも中貫は語尾の「又」に力を入れて、斯う珊子に向つて言つた。

『失敬します。』と井波は法學生に向つて、その白い齒をむき出して言つて、片手でパナマ帽をさし上げて、ひよいと輕々に電車に飛び乘つた、つゞいて瑠子が乘つた。

八

その時大下千吉郎は二十三歳であつた。一面ににきびの跡のある、赤ら顏の青年であることは前に述べた通りだが、もう少し詳しく言ふと、一般に色黑の顏に通有する如く、髮の毛は多くて、漆黑であつたが、女でいふとそれが癖毛であつた、顏立は瘠形で、少し長過ぎる方で、細い目の代りに濃い眉を持つた、大きな鼻の代りに口元の可愛らしい、だがその口を開く度にすけて見える齒は思ひ切つて大形で、而も可成り亂杭で、齒と齒の間が順席不同に空いてゐた。性質は、腹の中は時とするとひどく弱いことを考へることもあるが、大體に於いて可成り物にたかをくゝる不敵なところがある代り、上部は、人に對して、彼自身の意見を主張するといふやうなことは、十の場合の九まではない、と言つてよかつた。中學を出た年、彼は彼を保護してゐた親類と暫くの間、一方は『文科に行きたい。』一方は『法科に入らなければいけない。』といふので意見の衝突を來たして、それが結局彼が折れて出て現在後者に籍をおいてゐる次第であるが、當時そのための示威運動として、二ケ月程故郷の田舍で小學教師をしてゐたことがあつた。それが緣で、彼はその後高等學校に入つてからも、時々學校を休んだりしてその小學校へ遊びに行つたことがあつたが、或時そこで彼は新しく赴任して來た女教員と知り合ひになつて、彼女が文學が好きだといふことから、簡單に親密になつて手紙の取り遣りなぞしてゐるうちに、つひ青年男女のことであるから、双方の手紙の文句が優しくなつて來た。それが彼女の方では可成り眞面目であつたが、彼の方は隨分無責任な獻酬をしたものだ、彼女が一度お訪ねしたい、と言へば、直に差支へありません、いつでも入らつしやい、と答へたり、訪問されると調子のいゝことを言つて、そして一緒に郊外を散歩したり、そのうちに、始めのうちは、好奇心からだけでも、さして相手を嫌つてゐた人ではなからうが、さう斯うするうちに、僅

四五回の手紙の往復と、一二度の出會ひの後、田舍女のはしたない、露骨な戀愛氣分に忽ち恐れをなして、二三度の手紙に漸く返事をしたり、二度ばかり訪問された時居留守を食はせたり、そのうちの一度は約束しておきながら會はなかつたり、それに丁度、その頃のことである、先に言つた彼が、秋澤の紹介で珊子と知り合ひになつたのは、すると、無論珊子と彼女とは比べものにならない程優劣が感じられたので、女友達もよいが、あゝ言ふ田舍女と交際するのは御免だ、と自ら腹を定めて、いつとなく避けてしまつたことであつた。それだけならよい、ところが、それから一年ほど後、ふらりと又大下は例の小學校の、その時は學校に出かけないで、元の彼の同僚の教員の家へ遊びに行つた時、その女教員の噂が出て、君はあの女と友達以上の深い關係はなかつたんだらうね？ それならいゝが、あの女は用心し給へ、仕樣のない淫婦で、君が交際してゐた頃から、次第に惡い品行に陷り始めて、君は知らないだらうが、その後或惡病系統のある男教員と關係したのが始まりで、それから二三人相手の男を變へて、この學校にもゐられないものだから、他所へ轉校して行つたよ、と言ふ話を聞いた。すると又變な好奇心を法學生は起したものと見えて、その女が轉校して行つた先の學校をその翌日訪問したが、もうそこになかつたので。それから彼女が當時住んでゐた下宿を聞いて、そこに出かけて見ると、生憎親の家に用事があつて、今し方歸つたとのことなので、そこから又一里餘り離れたその方に訪ねて行つたところが、その家の門を入る時、明らかに玄關の間にちらりと彼女の姿を彼は見かけたに拘らず、愈よ案内を乞ふと、今度は逆様に居留守を使はれたのだ。で、止むを得ず歸る途々、一時間ばかりそのことを思つて、憤慨したものだが、そのまゝ以來すつかり忘れてしまつた、とさういふ男であつた。―― だから、彼は始終人に對してにや〱笑つてゐるやうな感じを與へたが、それが決して氣味惡く見えないで、却つてその可愛らしい口元から大形の亂杭齒ののぞいて見える樣子が、人に、善良ではないが、頼もしげに、それでゐて何處か乘じ易さうな感じを與へた。無論、珊子にもさうであつた。そこで彼女は、何處かに女性特有の警戒性を發揮しながらも、大抵のことを彼にうち明けた、うち明けられないことも、或ひは遠廻しに、或ひは二重にも三重にも衣を着せて、或ひは全然反對の嘘で、彼女は彼に話したが、彼

は彼獨特の敏感さでそれ等の眞相を推察した。が、同時に、彼を組し易いと見てとつた彼女は、今度東京に來てからも、年上の、だが家來筋の、相談役のやうに取扱ひ、彼も亦それに甘んじてゐるやうに、從つてゐた。

で、その翌日の午後も、法學生は珊子の求に應じて、北の方の郊外に住んでゐる、前に言つた美術座の脚本係をしてゐる、劇作家の前川の家に案內する役目を務めた。そこで三時間ばかり取止めのない世間話をして、無論その訪問は彼女にとつて、美術座に入る道を一つでも便利に開いておくつもりからであつた、さて前川の家を辭して歸る道で、法學生は又彼女に芦屋の話をもち出した。

「丁度こゝから歸る道順で、A――町の方へ出て行くと、芦屋君の下宿の前を通りますから、珊子さん、今日はあなた一人でお訪ねになつたらいゝでせう。」

「さうしませう、」と彼女は答へた。そして彼等が芦屋の下宿の前を通つた時、彼女は彼と別れてその下宿の門をくゞつた。

一人で、默つて澄ました顏をしてゐると、何か深刻なことを冥想してゐるやうに見えるのだが、實は大抵無念無想の狀態で、大下が彼の下宿の方への道を急いで行くと、一町も行かない時に、後から人の追つて來る氣配がしたので、振り返るとそれは珊子で、

「芦屋さんはお留守でしたの、」と彼女は言つて、足を止めて待つてゐた法學生と並んで、彼等の下宿に歸つて行つた。すると、そこに中貫が來て待つてゐた。もう夕方の時刻であつた。

その晚、美術座の事務所で幹事會と、前川もその幹事の一人なので、そのことは彼が先程報告したのだ、それから役者の脚本朗讀會があるといふので、客を合はして三人で夕食を濟ますと、珊子はその方へ出かけて行つた。その後で、大下と中貫は久しぶりで親しい友だち同志の水入らずで、色んな話をした。

「君は今どこにゐるんだ?」と大下が聞いた。

「下宿を探してるんだがね、當分は國の友達の家に居候をしてゐるつもりだ、ホヽヽヽヽ」と中貫は一流の笑ひ方で笑つた。

「田舍では隨分方々から緣談を持ち込まれて困つたといふぢやないか？」

「なあに、そんなものは皆斷つたさ。」

「でも、」とこれ迄に一向そんな話を持ち込まれたことがないので、多少羨ましさうな氣持で法學生は言つた。「十も二十もの、君んとこなぞは國では素家なんだらうから、澤山の申込の中には、仲々別嬪もあるだらう。君の田舍は東京に近いんだし、そしたら君の御兩親の氣にも入るだらうし、君自身としても、靜かに勉强が出來ていゝし、どうして結婚しなかつたんだい？」

「そんなことをして、君、」と中貫は例の疳高い聲で叫んだ。「この若い日をどうするんだ？」

大下は嘗て彼が藝者の一件でしくじつて、國に歸つて間もなくの或頃、彼の故鄕の家へ遊びに行つて、四五日も逗留して來たことがあつた。中貫の母といふ人は、年とつた人の母によく見る、自分のことはないやうに忘れてしまつて、新しい時代に生れた自分の子に全身全心の血と淚をそゝいで、明け暮れくよくよと物を案じるといつたやうな、老女の一人であつた。彼女はその時、その子のゐない一室で、その子の友人の法學生に、皺の目に淚をたゝえながら、「どうしてあの子は」と彼女はもう二十歲を過ぎた子を五歲か六歲の子のやうに言ふのだ。「あんな風になつてしまつたんでせう！」そして彼女は聞手に憚りなく目の淚を拭つてつゞけた。「勿論、父はあゝ言ふ人で、子を一度でも荒い聲で叱つたことがありませんし、私は何といつても女のことですから、自然恐い者が一人もない譯でしたから、あの子は小さい時から手の附けようのない我儘者でしたが、その代り、親の欲目で、子供の時分から中學を卒業する迄、學問だけは他所樣のお子にひけを取らずに出來てくれたものですから、父も私もそれを樂みに、我儘は大きくなつたら直るだらう位に思つて、なるべく外のことでは不自由させぬやうに言ふまゝに育てゝ來ました。ですけど、女のことだけは、その方だ

けは堅い子だと人も申し親たちも思ひ込んでゐましたのに、それが今度の始末でせう…………」といふのは例の藝者の一件なのだ。「私等の家も、勿論、今日明日には困るといふ程でもありませんが、父はあゝ言ふ無慾な人でして、以前から何度となく人の借金の證文の連判などをしまして、近頃では隨分土地を人手に渡しましたり、色々と無理をして子のために盡してゐるんですが…………あの此間のあの子の不始末の時などは、父も私も心配させられた餘り、とうたう二人とも前後して病氣をしてしまつた程でした。或晩、到頭あの子がこつそり歸つて來まして、家の門に立ちました時、父はまだ病氣をしてゐまして、それに夜分でもありましたから、床の中にゐました。女中は女中部屋で居眠りでもしてゐましたのか、門の戸が鳴つても直には誰も開けに行く氣配がしませんし、その時ふと私は、あの子ぢやないか知ら、といふ氣がしたものですから、的に行つて見ますと、それがやつぱりさうなのでした。で、家に入れて、取敢ず病氣の父さんに挨拶したらいゝだらうと申しますと、あの子も仕方がないものですから不承不承に父の枕元に坐つて、唯今、と挨拶しましたが、流石に少しは何とか言はれるだらうと思つてが、氣まり惡さうに俯向いてゐますと、どうでせう、父は强ひて嬉しさうに一寸枕から顏を上げて、よく歸つて來た、歸つて來てよかつた、とさう言つて、今夜はもう遲いから、明日又久しぶりで話さう、お休み、とさう言つた切りでした…………」

この話は非常に法學生大下千吉郎を感動さしたので、その後その事を中貫に話すと、

「今度こそ、さすがの親父も何とか叱るだらうと思つて、枕元に座つたら、さういふ譯なんだらう。」と中貫は說明した。「却つて氣味が惡いやら、氣まりが惡いやらうで、早速退出して、その翌朝親父と顏を合はした時などは、どうも此方の氣持がてれて仕樣がないもんだから、反對に僕の方から、お父さん、私も隨分馬鹿なことをしました、申譯がありません、が、あの始末をつける時に何故お父さんかお母さんが來て下さらなかつたんです？ あなた方は一言には外聞とか何とか仰言る癖に、あんな時に親類の者などを寄遣して下すつて、却つて恥を外へ廣めるやうなものぢやありませんか？ と斯う僕の方から出たんだ、何かその事で一言何方からか言はないと、どうも濟まない氣がしたもんだからね。

すると、親父は、それは惡かつた、それは俺の手落ちだつた、何しろ俺はあの時分身體が惡かつたものだからな、と言つてあやまるんだ、——無手勝流だね。さすがに僕も穴に入りたい氣がしたよ、その時は。」

この話をした時は、さすがの中貫も冗談の調子で、笑ひながらだつたが、眞味に言つた、聞手の法學生は、だが笑ふことさへ出來ないで、沁々した調子の相槌を受つて、聞き入つたことである。

「お父さんはお達者か？」とそこで、今も。その話をぼんやりと思ひ出しながら、法學生は中貫に聞いた。

「あゝ、有難う、達者だ。」と中貫は答へた。「毎日、朝起きて、庭を一人で歩いてゐる。そして午後は、小さい僕の弟を相手にして、一時間でも二時間でも、客さへなければ、話をしてゐる、新聞の講談をお伽話にして親父に聞かしてやつたり、又弟を話手にして小波のお伽話の梗概を、うむ、うむ、と根氣よく聞いたりしてゐる。それから、夜は弟を傍に寢かして、晝間は弟がその上で本なぞを讀んでゐる小机の上で、古い支那の本なぞを讀んでゐる、といつた調子だ。僕はこんな癇癪持だから、家にゐる時など、どうかすると母を叱り付けたり、はては癇癪を起して疊の上に小道具などを打突けたりしたもんだ、で、餘り騷しい音を立てると、親父は一寸境の唐紙を開けて、さう騷がずに、もう遲いからお休み、なんて言つて、直また唐紙を閉めて、讀みかけの支那の本を讀んでゐる、彼仲々味をやるよ、僕がゐなければ靜でいゝだらう、ホホホ、、、、」と例の如く笑で結んだ。

だが、大下は笑ふどころか、眞面目になつた時の癖で、これも又長目に延してゐる縮れ毛を、無暗に撫でながら人の話を混ぜつ返す癖なぞは影をひそめた形で、大人しく聞いてゐた。すると中貫は座が陰氣になるのを恐れるやうに、忽ち話頭を變へて、彼等の通例の、女の話を主とした雜談に移つて、夜の更けるのを知らなかつた。

そこへ美術座の事務所に行つてゐた珊子が實部と一緒に歸つて來て、大下の部屋に入つて來た。

「今日は井波君が來ませんでしたかね？」とそれ〴〵の座が定ると、大下が珊子に言つた。

「井波君とは誰です？」と傍から實部が、何か大事件でもあるやうに、急き込んで、口を入れた。

「日本劇場の井汲三五郎君のことです。」と大下はわざとらしく落着いた調子で答へたが、案外根強い寶部の詰問するやうな目の色と、珊子の少なからず狼狽したやうな顔付とに、彼は一たまりもなく鼻つ柱を折られたやうに口を噤んだ。

「井汲がこゝへ來るんですか、さう度々？」と寶部は唯事ならぬといふやうに、珊子に向つて詰問した。「あなたはいつ頃から井汲とはお知り合ひなんです？」

「この間現代劇社の『ファウスト』が彼地(あちら)に來ました時から…………」と珊子も可成り恐縮したらしい調子で答へた。

「さうですか？」と寶部はやつと彼等の交際が比較的まだ日の淺いのを確めて多少安心したやうに言つた。「あの男は藝術ぢやありません。あれこそ唯の『芝居者』で、そして色魔です！」

「寶部君、」とその時大下が口を開いた。「御紹介し遲れましたが、これは僕の友人の中貫林次君です。」

「これは、」と大下は同時に寶部の方を指して中貫に言つた。「これは藏原さんの美術座の…………」

それから四人はくつろいだ氣分になつて、藏原と丸屋つき子との戀愛事件を中心に、話に花が咲いて行つた。寶部と中貫とは頻りに彼等の今度の物語がロマンチックで美しい、と賞めそやして、終には二人とも言葉を合はして、心中すると一層いゝんですがね、などと勝手なことを言ひ合つて、殊に寶部はそれを自分の身の上に當て嵌めて、「僕は乾度、やがては心中して果てる男です、僕は自分でさう覺悟してゐるんです！」と叫んだ。それには大下は勿論、中貫もほゝ笑んだゞけで、答へなかつた、珊子も例の藪睨みの目をして、甘へるやうな笑ひ方で笑つてゐた。だが、再び心中の話が盛り返して來て、それは主に寶部と中貫との間にだつたが、どうだらう、藏原とつき子とは心中するだらうか？　やがてはそんなことになるだらう、いや、僕は彼等は心中しまいと思ふ、すれば素的なんだがな、といふやうな話が盡きずはづんで行つて、寶部が歸つて行つたのは一時過で、それから二時になつても、しかし、中貫は仲々歸らうとしなか

つた。

「珊子さん、」と大下は、これは大變な女を擔ぎ込んだ、散々な鎖夏法になつてしまつた、珊子がこの下宿に來てからまだ二日にしかならないのに、昨夜が夜明しで、又今夜こんな目に遭つて、而も起きてゐるだけなら大した苦痛ではないが、起きてゐる間中、自分の客のみでなく、彼女の客まで背負ひ込んで、その相手をする堪らなさ！　さう思ふと、持前の苛々が起つて來て、中貫の思はくなどかまつてゐられなくなつたので、遠慮なく斯う言つた。「あなたはお疲れでせうから、どうぞ部屋に歸つてお休みなさい？」

珊子も亦、自分のところへ來る客だけでもうんざりしてゐるのに、大下さんツたら、彼の客まで無暗に紹介するものだから……………本當に此方の身體がつゞかない！　と不平を起してゐた矢先なので、

「ぢやあ、失禮しますわ、」と顏だけは笑つて見せて、斯う言つて、男二人を殘して、階下の自分の部屋に歸つて行つた。

で、後に殘つた大下と中貫の氣分は隨分氣まづいものになつたが、それでも中貫は返らうとしないで。煙草ばかり立て續けに吹かしてゐた、そして二人は頑固に默り込んでしまつた。すると、下から又珊子が上つて來て、

「大下さん、」と部屋の入口から顏だけ中に突込んで言つた。「又あの梟が鳴いてるんですわ…………………濟みませんけど、又泊りに來て下さいね。」

「今、中貫君が歸つたら行きますから、」と大下はつんけんした聲で答へた。「先に行つて、辛抱してゐらつしやい！」

それでも中貫は歸らうとはしないで、彼も變に意地になつて來たのに違ひなかつた、珊子が階下に行つてしまふと、

「どうしたといふんだい？」と大下に聞いた。

「いや、まだあれで何といつても子供だからね、」と大下は言つた。「隣の庭で鳴く梟の聲を氣味惡がつて、僕に傍で寢てくれ、といふんだ。………………君ももう遲いから泊つて行くだらう？　こゝで泊つて行き給へ。僕は下へお守

に行つて寢て來るから…………」

「いゝぢやないか、一晩くらい。」と中貫は、機嫌が惡くなると、可愛い目が一變して恐い藪睨みになるそれを光らして、言ひ張つた。「僕は泊めてもらうが、こゝで一人ぢや困るよ。君も今晩はこゝで寢給へ。」

「だつて、」と大下もむきになつて叫んだ。

「君は男で彼女は女だから、彼女の方の要求を入れる方が當前ぢやないか？」

「珊子さんだつて、もう大人ぢやないか、一人でかまはず寢かしとき給へ。」

「ところが、その方はまだ一向赤ちやんなんだ。」

だが、斯うなると、我儘さを張り合ふ點に於いて、大下は到底中貫の敵ではなかつた。で、止むを得ず蚊帳を吊つて、その中に二人の床をとつて、中貫が、どうだ、今夜は語り明さうぢやないか？といふのに、いやもう身體がたまらない、寢よう、と大下が主張して、漸く二人は横になつた。だが、二人とも急に寢られなかつた。而も二人とも默りこくつてゐた。その上ばかに蒸し暑い晩なのだ。その時、かすかに、ホウ、ホウ、と梟の鳴く聲がその部屋まで聞えて來た。そこで又、大下が、「君」と中貫に向つて、「君。こゝで一人で寢てくれ給へ。珊子さんが可愛さうだから………………」と言ふと、「いゝぢやないか。もう默つてるぢやないか？」と相變らず中貫は讓歩しなかつた。二三分おき位に二三度さうして床の中で問答してゐると、突然、中貫は起き上つて、蚊帳の外に出たかと思ふと、大急ぎで着物を着更へ始めた。そして默つて大下の部屋を出て行つた。そこで、二三分の間、大下はちつとそのまゝ寢てゐた。靜になると、又梟の聲が聞えて來るのだ。すると、再び部屋の外に足音がして、中貫が歸つて來たのだな、と大下は思つたので、ぢつとしてゐると、それは寢間着姿の珊子で、彼女は部屋の入口から顏を出して、「やつぱり、濟みませんけど、寢に來て下さいな。」と言つて、「おや、中貫さんは？」と聞いた。

「知りません。」と大下は冷淡な調子で答へて、床の上に起き上りながら、「今外へ出て行つたやうでし[illegible]が、或ひは歸

つたのでせう。」と言つて、それからくる／＼と蒲團と枕を卷いて、それを擔いで、珊子の後から、梯子段を下りて、彼女の部屋の方へ無言で步いて行つた。

九

けれども、その夜は、中貫がひどく、何といふ事なく、氣を惡くして歸つたゞらう、と思ふと、根が人一倍氣の弱い大下は、梟の聲が恐いなどと言つて、よくそれを聞く間さへないうちに、枕に頭をつけると、女らしくない鼾をかいて寢込んでしまふ珊子の傍で、長い間梟の聲を聞きながら、それが氣になつて寢られないのであつた。だが、直に又、どうせ友達なぞといふものは、双方がさう馬鹿でない限り、中貫は決して頭の惡くない男だ、少し位睨み合つたつて、少し時が經てば直るものだ、して見れば、丁度これから珊子がこの下宿にゐる間中ぐらゐ、彼と睨み合つて、彼が近づいて來なければ、却つてそれもいゝかも知れぬ、さう思つて、彼も實はひどく身體が疲れてゐたのに違ひなかつた、間もなく死んだやうに寢てしまつた。ところが、その翌朝は、案外早く、大下は八時過に目が醒めたので、そつと傍に寢てゐる珊子を起さないやうに氣をつけて、例の如く蒲團と枕とを引擔いで、自分の部居に歸つて、朝飯を濟ましたか濟まさぬところへ、中貫が何事もなかつたやうな顏をしてやつて來た。そして、「失敬、」と大下、「昨夜は失敬した、」と中貫、それが濟むと、「珊子さんは？　まだ寢てるの？　もう起してもいゝだらう、行かう、」と中貫は言つて立ち上つた。昨夜のこと以來、ひどく氣の弱くなつてゐる大下は、隨分亂暴な男だ、と心の中では大いに憤慨したが、相手の意氣込にすつかり呑まれてしまつたのと、兼ねて昨夜の睨み合ひの仲直りのつもりで、中貫の後から從いて行つた。

そして中貫は遠慮なく、しかし例の甲高い聲に十分の愛嬌を含ませて、珊子を起して、彼女七分、大下三分の割合で相手にして、取止めない無駄話をして、下宿の女中が晝飯の膳を持つて來たのを機會に、思ひ切り惡さうに歸つて行つた。

すると、それと殆ど入れ違ひに、珊子の部屋で、彼女と大下とが晝飯を食つてゐるところへ、井波がやつて來た。彼は珊子が昨日のやうに留守だと、彼女が歸つて來る迄の暇潰しに、大下の部屋に來て大下に可成り愛想よく話しかけたものだが、その時のやうに、珊子が彼女の部屋にゐて、大下がそこに來てゐるやうな時には、後者に對して如何にも邪魔者扱ひにするので、頗に似合はず敏感な大下は、憤然として、だが表面上はこそ〳〵と自分の部屋に退いて行つた。

部屋に歸つて暫くの間は、法學生はひどく心が平らかでなかつたが、結局斯ういふ時こそ十分に利用して、「鬼の來ぬ間に洗濯」といふ譯で、疲れ休めに晝寢でもしておかう、と久し振りでゆつくりと晝寢をして、次に目を醒ますと、もうすつかり日が暮れてゐた。夕食の膳を運んで來た女中に。「珊子さんは？」と訊くと、「お晝からのお客様がずつと…………」と答へる。「一人！」「えゝ」「あの背の高い、鼻眼鏡をかけた人？」「えゝ」そこで法學生は恐れをして、夕飯を食ふと、久しぶりで一人で散歩に出かけた。

それから法學生の歸つて來たのは、十時を過ぎた時分であつた。餘り度々珊子の客に就いて聞くのも可笑しい、と思ふまでもなく、大下はふと玄關のタタキに亂雜に脱ぎ捨てられた十數足の靴や下駄の中に、見覺えのある井波の、大きな、十分十一文以上の足の入りさうな、ブルドック型の赤い編上げ靴を見出したので、何といふ譯もなく、ぞつとして、そのまゝこそ〳〵と逃げるやうに自分の部屋に入つて、いつ迄もゐるのは勝手だが、傍に寢ることを仰せ付かつてゐる者にとつて、斯う毎夜毎夜遲く迄ゐる客が珊子に來るのは困るなア、と本當に困りながら、仕樣がないので、馴れない机に向つて、この男は本を讀むのに殆ど机に向つたことはなく、いつも寢轉んでだが、夜は蚊のためにさうもならないので、蚊遣線香をくすべながら、まだ井波は歸らないのか、歸つたら珊子が現れる筈だ、と待ちながら、到頭十二時が打つ迄小說本を讀んでゐたが、愈よ根が盡きたので本を伏せてしまつた、が、珊子の部屋に覗きに行く譯にも行かず、と云つて女中に聞く譯にも行かず、それにしてももう女中は皆寢てしまつたらう、井波の奴も井波の奴だが、珊子のだら

しのなさ加減もあきれたものだ、それなら臭が恐いなぞと言つて、人に守を頼みに來なければいゝのに。と大分嫉妬も混つて、いつそ後で呼びに來ようが、かまはず寢てやらうか、と一人で蔭で腹を立てゝゐたが、ふと思ひついて、さうだ、玄關にあのブルドッグ型の赤靴があるかないか見に行つてやらう、と氣がついた、が、それだけしに行くのも氣がとがめると思つたので、便所に立つて行つて、無論もう誰も起きてゐる筈のない時間だつたが、玄關を通りがゝりに横目でちらと、タタキの上を窺ふと、赤靴は依然として、主待ち顔に、向ふ向きにそろへられてあつたものだ。

苛々しながら、大下は便所から歸つて來て、さて思ひ切つて寢もならずに、暫くぼんやりと、蚊遣線香の煙の中で、額を顰めて坐つてゐると、そこへ珊子が目のふちを赤くして、明らかに興奮した顔をして、慌しく入つて來た。

「私…………大下さん、私…………」と彼女は切れ切れの言葉で言つた。「あの井波といふ男は…………本當に仕様のない男なんですよ。…………………今夜はね、あなたは此方でお休みなすつて下さい、私、一つうんと彼に説教をしてやらうと思ひますから。…………………」

「どうぞ御自由に、」と法學生は例の冷淡な口調で言つた。「しかし、殊にさういふ『仕様のない男』なんかに説教なぞといふことが通用しますかね？」

「えゝ、」と彼女は多少ぐつと詰まつた形だつたが、直に氣を取直した樣子で、後の言葉を言ふ時にはもう部屋の外へ出てしまつてゐた。「ですけど…………」

その次の朝、法學生が起き出て、洗面所に行かうとすると、廊下の曲り角で、遇つた、赤い目をした珊子と顔を見合はした。

「お早う！」

「お早う！」

「井波君はもう歸りましたか！」

「えゝ」と、珊子はいつになく目を反らして言つた。「今先。」

「昨夜はずつと起きてゐらつしたんですか？」

「えゝ。」

「お疲れでせう？」

「いえ、別に…………」

そこで二人は別れて、大下は顏を洗つて飯を濟ますと、用事を思ひ出して外出した。歸つて來たのは夕方で、何だか大分珊子に會はないやうな氣がするので、下宿の玄關を上ると、早速彼女の部屋の方へ行かうとしたが、ふと氣が付いて、女中の一人を呼んで、「珊子さんに誰かお客様？」と聞いた。

「えゝ、」と十四歲になる鼻のぺつちやんこの、お道化た顏をした女中が、目を輝かして、「それは恐かない顏をした方なのよ、」と珍しさうに報告した。で、大下は色々とその人相を聞いて、それが芦屋であることを確めた。が、目下仲違ひして、變な風な間柄になつてゐる芦屋に會ふのは？　と大下は二三度彼女の部屋の方に行きかけて躊躇したものだが、どうせ彼が斯うして來始めたからには、これから幾度も顏を合はすことになるだらう、と思ひ返したので、せめて挨拶だけでもしておかうと思つて、思ひ切つて、珊子の部屋に行つて見た。その時、丁度芦屋は歸り仕度をしてゐるところで、珊子も彼に誘はれたのか、彼と一緒にどこかへ出る樣子だつたので、大下は芦屋と簡單に「暫く」の挨拶を交換して、そして出て行く二人を玄關に送つて行つた。ところが、芦屋が一足先に下宿の入口を出て、つゞいて珊子が玄關からタタキの下駄の上に下りようとしてゐた時、一人の車夫の使が「波川さんといふ方を？」と言つて入つて來て一通の手紙を丁度そこにゐた波川珊子に手渡した。

「まあ？」と彼女はその手紙の裏の差出人の名前を見ると、輕く驚きの聲を上げて、「中貫さんよ、」と法學生の方を見て小聲で言つた。「どうしたんでせう？」

「遊びに來て下さい、とでも言ふんぢやないんですか？」と法學生は冷淡な調子で言つた。

「まあ、その通りですわ！」と珊子は玄關に立ちながら、その手紙を讀み了つて、さてそれをどういふつもりなのか、まるで家來にでもするやうに、法學生に手渡した。法學生は又それを家來のやうに受取つて、彼等を送り出すと、それをわざ／＼珊子の部屋の机の上に置きに行つて、そして自分の部屋に歸つて行つた。

さて、彼はがつかりして、倒れるやうに、机の前に仰向きに寢轉がつたことだ。二方の壁の上の方には、申す迄もなく昨日の通り、一昨日の通り、横に長い窓がついてゐて、その窓の向ふには、直隣りの陸軍大將の庭の、どす黒い木の葉が繁つてゐる。その葉は依然として彼の部屋の中には少しも訪れて來ない微風にそよいで、そよぐ度に白い日の光がちら／＼と、人の目を射るやうに輝いてゐる。大方その奥でだらう、鳴いてゐる小鳥の聲さへ息苦しく感じられる、暑い日だ。それ等の光景は、昨日と、一昨日と、珊子がまだ現れなかつた日と、少しも變りがないのに、これは又何といふ變り方だ！　法學生はそれ等の暑苦しさと、彼自身の餘り強健でない身體を忘れてしまつた程、この數日來、激しい人間の渦卷の中に卷き込まれてしまつたことだ。一人の女の周圍を何人もの男が、そして大下自身もその一人に相違ないのだ、ぐる／＼と廻り燈籠のやうに廻つてゐる光景は、斯うして一人樂々と自分の部屋の中で、大の字に寢そべつて思ひ浮べると、言ふばかりなく面白いに違ひないが、その中に入つてゐる時の辛さ、苦しさ、不快さは、もう大分堪らなくなつて來た、何とか逃れる方法はないものか、と大下は思案したが、何の考もつかないうちに、彼は眠り入つてしまつた。

夕方、中貫林次がペパミンの青い瓶を下げて、大下を訪れて來た時も、彼はまだ机の前に兩腕を枕にしたまゝで、大の字になつて、額にべつとり汗をかいて、その醜顏や姿に似合はぬ優しい寢息をしながら、寢入つてゐた。大下はそのまゝにしておけば、それ以上三時間も眠つてゐたのに違ひなかつた、だから中貫が彼を、身體を搖すつて起した時は、彼はひどく不機嫌な顏をして、起き上つて、すつかり眠氣が醒めてからも、まだ十分不機嫌で、中貫の奴、俺が酒が飲

めないのを知りながら、青い酒なぞ持つて來やがつて、察する所、まだ瑚子が歸つてゐないんだな、と心の中で考へた。

「瑚子さんはゐないのかい？」とつんけんした調子で、逆様に大下が中貫に聞いた。

「瑚子さんなんか、」と中貫は多少狼狽氣味で、しかし普段の愛想のいゝ調子で、可愛い丸顔に笑を浮べて、相手をいたはるやうに言つた。「瑚子さんなんか、ゐなくても、いゝぢやないか？　その代り君が一つ大いに勧めて、僕の相手をして飲んでくれ給へ、」とどつちが大下だか中貫だか分らないやうな會話の後、中貫は叮嚀に用意して來たもの と見えて、懐から新聞紙にくるんだ小さなコツプを三つ出して、その二つに青い酒をついだ。そこへ瑚子が歸つて來て、大下の部屋に入つて來た。

「芦屋君は？」と大下は聞いた。

「お歸りになりました、」と瑚子は彼等の傍に坐りながら言つた。「今夜又いらつしやるかも知れません。」

「芦屋君？」と中貫は驚いて聞いた。「芦屋君がこゝへ來るのか？」

芦屋の名を聞いて、中貫が驚いたには、そこに多少の理由があつた、といふのは、中貫も亦芦屋に絶交された一人なのであつた。絶交してからは、芦屋は前者の可愛らしい顔をも、見方に依つて、それが凸凹してゐるので、どうかするとそれが多少人に不快な感覺を與へることがある、それを「彼奴の顔は變に露出してゐていかん、」などゝ言つたものだ。芦屋が中貫を絶交する前は、その時分から何かの理由で彼を厭がり出したのだが、中貫は無論さう鈍感な男ではないから、それを感じながらも、名譽回復のつもりで、田舎に引込んでゐる頃、東京に出て來る度に最先に芦屋を訪問したものだ。ところが、到頭一本氣な芦屋を怒らしてしまつて、或時、彼は彼に面と向つて、「君、もう歸つてくれ給へ。お別れに一言注告しておくがね、當分田舎に引込んでゐた方がいゝだらう、」ときめつけたものだ。で、中貫はそれから芦屋の家へは行かなくなつたのだが、その時、彼は芦屋に注告された通り、直には田舎に歸らずに、四五日東京に方々

の友達の家をごろ〳〵して廻つて、さて故郷の家へ歸つて見ると、彼の留守中に芦屋が彼の父に宛て、「どうもあなたの息子はとても見込がない、度し難い、以後私は交際を止めたい、」といふ意味の手紙を送つて來てゐたのを發見したものである。以來、中貫は芦屋の名を聞いたゞけでも恐れをなす所以なのだ。

が、彼は今は芦屋の名で恐れをなして、青い酒の瓶を下げて歸らうとはしなかつた。のみならず、彼は珊子が坐につくと共に、殘つてゐた他の一つのコップに早速ペパミンを注いで彼女にすゝめた。さうして大下が一杯の酒をちびり〳〵と少しづゝ嘗めてゐる間に、中貫は無論のこと、珊子も、どうしたのか、本當は餘り飲めない方なのだが、お調子に乘つたやうに、「私、西洋酒は何でも好きですわ、」などと言つて、二人で一時間餘りのうちに、その可成り大きな瓶を空にしてしまつた、だが、その飲用者たちはいづれも眞赤になつてゐて、殊に中貫はその凸凹の顔の額に三本の大きな筋さへ立てゝゐた。その時、女中が入つて來て、珊子に「お客様がお見えになりました、」と知らしに來たので、彼女は部屋を出て行つた、多少よろ〳〵した足取に見えた。

「芦屋か知ら?」と中貫は、別に聞える筈もないのに、聲をひそめて言つた。

「さうだらう、」と大下は冷淡に言つた。

そして二人は默つた、が、あまり忽に中貫が悄氣てしまつたのが、氣の毒に見えたので、暫くして、

「井波君かも知れないよ、」と大下が言つた。「今珊子さんを訪ねて來たのは。」

「さうだ、」と中貫は稍々愁眉を開いたやうに言つた。「井波君だらう。」

だが、二人の間にもう餘り話がはづまなかつた。で、切れ切れに、ぽつり〳〵と話してゐた時に、

「果物が欲しいね、」と突然中貫が言つた。

「君は?」

「僕は欲しくない、」と大下は答へた。

「まあ、さう言はないで附き合ひ給へ、僕が買つて來るから、」と中貫は言つて、立ち上つた。これは珍しいことであつた、といふのは、斯ういふ場合に、お坊ちやん氣質の中貫は、自分で言ひ出しても、決して自分で出かけたことはなく、大抵傍にゐる友達に、一流の押し付けた賴み方で賴んで、その使をさせるのが常なのであつた。で、大下は不思議さうに目を見張つて、默つて友達の出て行くのを見送つた。すると、間もなく中貫は大きな水蜜桃の箱をかゝへて歸つて來た。

「隨分澤山買つて來たんだね、」と大下は言つた。

「あゝ、」と中貫はまだ先程の酒の醉が醒め切らないと見えて、ひよろ〳〵して息を切らしながら言つた。「君、何か少し大きな皿のやうなものがないか？」

で、大下が女中を呼んで、西洋皿を持つて來させると、中貫は箱の中からなるべく色や形のよさゝうなのを取り出して、それを皿に盛り上げた。

「これを、」と、そして、彼は大下に言つた。「君、これを珊子さんに上げて來てくれないか？」

「えゝ？」と言つて、大下は何か反對しさうに見えたが、直に又思ひ返した調子で、「よし、よし、」と從順にそれを階下の珊子の部屋に運んで行つた。

丁度、彼が水蜜桃の皿を抱えて、珊子の部屋の前に立つた時、部屋の中から、大きな身體の井波が、例に似ず不安さうな、あわてた恰好で出て來るところだつた。

「やー！」と彼は出會ひ頭に大下を認めて、驚いたやうな、がそれと共に救はれたやうな聲で叫んだ。

「もうお歸りですか？」と大下は愛想よく言つた。「どうです、こんないゝものを持つて來たんですが、」と抱えてゐる皿の水蜜桃を顎で示しながら、「これに釣られて、もう少しお出でになつたら？」

「いや、」と全くいつもに似ず、井波はそわ〳〵した様子で、詑るやうに言つた。「折角ですけど、今日は少し急ぎますか

ら……」

普段の、厚かましい、長尻の彼にしては、どうも様子が變だ、と大下は思つて、何氣なく珊子の部屋の中を見ると、芦屋が悠然とした恰好で、長髮を肩になびかしながら、然し恐ろしく恐い顏をして、きちんと膝をそろへて坐つてゐる、それと對して反對の側には、半吊りにした蚊帳の中の寢床の上に、蚊帳を通して微かにだが、しどけなく珊子が姿を亂して横になつてゐるのだ。で、大下も驚いて、井波を引止めることを止めて、そこ〳〵に部屋の入口の隅に水蜜桃の皿をおいて、逃げるやうにそこを出た、そして玄關まで歸る井波を送つて行つた。

「珊子さんは、一體、どうしたんです？」と法學生は井波に聞いた、

「その、」と井波は言つた。「大變身體が惡いんださうです、お酒を大分飲んだと言ふぢやありませんか？」

「えゝ、少し……」と法學生は驚きながら言つた。「それにしても、そんなに惡いんですか？」

「ところで、」と井波はそれはかまはず急に話を變へた。「あの芦屋とか言ふ人をあなたは御存知ですか？」

「えゝ、よく知つてゐます、」と大下は答へて、そして聞いた。「が、それは兎も角、芦屋君とあなたとはどちらが先に入らしつたのです？」

「私が先です、」と井波は玄關に立つたまゝ、下に下りようとはしないで言つた。「私が來ると、間もなく珊子さんは急に身體が惡くなつてもどすやら何やらで大變だつたんです。で、私がいろ〳〵介抱して、蒲團を敷いて、寢かして、やつと少し落ち着いたところへ、あの芦屋とか言ふ人が來たんです。……」と言つて、彼は聲をひそめて、大下の耳の傍に口を寄せるやうにした、大下は激烈な香水の匂を感じた、そして言つた。「ひどく高慢な人ですね？　あなた御存知なんですか、あれは何をする人です？」

玄關の臺の上に立つたまゝ、井波は昨日とは反對に、にきび面の法學生の足元に今にも平伏するかと思はれるやうな態度で言ふのだ。彼は言葉なかばに鼻眼鏡を外して、それをポケットの中から出したサックの中に入れて、又別のサッ

クから普通の耳掛眼鏡を出して掛けた。その樣子までが何とも言へずいぢらしく見える上に、鼻眼鏡を外すと共にそれ迄そのために吊り寄せられて、物凄く見えてゐた目が、枷を外されて解放されたためか生れたまゝの普通の目付になつたのが、それが又ひどくしほらしくさへ見えた。で、氣の弱い大下は、昨日の恨みを忽ち忘れて、いたく憐れを催した。

「あの、大下さん、」と井波は歌劇役者らしい、幅の廣い聲だが、それでゐて憐れつぽい聲でつゞけた。「大下さん、あなたお邪魔でせうが、これから少しあなたの部屋で、あなたのお話が伺ひたいんですが？……」

その時、敏感な大下は、おや〳〵と思つた、やつぱりこれは圖々しい男に違ひない、俺の部屋に來てゐて、珊子の樣子を偵察しようといふ腹だな、と推察したので、

「それや失敬ですが、」と彼は忽ち冷淡な調子で言つた。「生憎、今夜は僕の方にも少し變つた人物の客が來てゐますのでお話は又の日に願ひたいと思ひます。……」

「さうでしたか、では……では、又、」と井波は何如にも落膽したやうに、だがあきらめた樣子で、その五尺八寸の大きな身體を玄關の臺の上から下ろす恰好が、それが又いつもとは反對に悄然と見えた。そして例のブルドッグ型の赤靴を穿き始めた。それを穿きながら、彼は言葉をつゞけた。「それにしても、芦屋といふ人は變な人ですね。私が珊子さんを介抱してゐるところへ、突然入つて來たかと思ふと、碌に挨拶も終らないうちに、『僕が來ましたから、もうあなたはお引取り下さい！』とあの恐らしい顔で斯う呶鳴りつけるやうに言ふんです。……」そして彼は靴を穿き終つたが、その時はもう大分普段の、役者らしい、表情たつぷりの顔に復つて、例の白い齒を出して、愛嬌笑さへ口元に浮べながら、別れの印なのだらう、法學生に手をさし出した。そして法學生の手を振りながら、

「あの人は、」と彼は少し聲をひそまして言つた。そして法學生の手を放してから、自分の左手の人差指と中指とに、右の手の人差指を組合はして、それを相手に示しながら、「あの人はこれぢやありませんか、これぢや！」と言つた。

「え？　え？」と大下が彼の暗號の意味を解き兼ねて、斯うくり返してばかりゐると。相手は彼の方に口を突き出す恰好をして、わざとらしく囁くやうな聲で、「キ、キ、………キ印！」と言つて、直又普通の聲で、「ねえ、本當にあの人は少し氣が變なのぢやないんですかねえ？」と言つた。

「さあ、」と法學生も可愛らしい口元ににつと大型の亂杭齒をのぞかして、だが、やつぱり冷淡な調子で言つた。「或ひは少しさうかも知れませんね。………さやうなら！」

「失禮します！」と言つて、思ひ切り惡さうに井波は歸つて行つた。

そこで、大下が急いで彼の部屋に歸つて行くと、むつとする程の蚊遣の烟のうち込めた中に、中貫が仰向けに寢そべつて、蚊を拂ふつもりか、折々足をばたばたさせてゐた。彼はその寢てゐる者の頭の所に坐つて、今し方の出來事を報告した。

「ぢやあ、芦屋はまだゐるのか！」と中貫は外の話には時々笑ひ聲で相槌を打つたゞけで、よく聞いてもゐなかつたやうだが、相手の話し了るのを待ち兼ねたやうに、斯う叫んだ。

「あゝ、ゐるよ、」と大下は少しむつとしたやうな調子で答へた。

「芦屋は遲くまでゐるつもりだらうか？」

「あゝ、今夜は泊つて行くつもりだらう、彼女の看病に、」と大下は冷淡に答へた。

「ぢやあ、」と突然、はね上るやうに中貫は立上つて、「僕は失敬しよう、瑚子さんに宜しく………」と言つて、消えるやうに歸つて行つた。

大下が中貫を送り出した、玄關に出た時には、中貫はもう入口の外に出てゐて、前者が「ぢやあ、失敬」とかけた聲に返事もしないで、外の暗に沒してしまつた。で、大下は自分の部屋の方には歸らないで、瑚子の部屋に、彼女を見舞ふつもりで出かけて行つた。そこには、先程井波が歸る時に、大下が見た時のまゝ、そのまゝ化石したかと思はれる程

同じ恰好をした芦屋が、例の虛無的な目を光らして、長髮を肩になびかして、女にしても小さ過ぎる口を、一段小さく點のやうに噤んで、端然と坐つてゐた。そしてその反對の側には、蚊帳の中の寢床の上に、珊子が、彼女は先程のしどけない樣子を改めて、薄い蒲團を身體の上に掛けて、橫になつてゐた。

「失敬、」と大下は芦屋に挨拶して、そこに坐つた、が、芦屋はそれに言葉も返さなかつた。

「珊子さんが大變からだが惡いと言ふが、どうしたんだ？」と大下は心配さうに裝つて、斯う芦屋に聞いた。

「どうしたんだ、もない！」と芦屋はぶつきら棒に言ひ放つた。「脚氣が衝心しさうなんだ！」

「脚氣？」と大下は細い目を見張つて叫んだ。「そんな病氣を珊子さんは持つてゐたのかい？」

「どうして、」と芦屋は、まるで自分の子が怪我でもさせられたやうに、大下を詰問する口調できめつけた。「どうして、君たちは酒なんか飲ましたんだ？」

「どうしてツて？……」と大下は、腹の中はひどく不平だつたが、持前の氣の弱さから、斯う口ごもつて言つたまゝだ。

「君たちが無理に珊子さんを引張り込んで、酒を强ひたんだらうと、」芦屋は更につゞけて叫んだ。「中貫といふ男も相變らず度し難い奴だ、ちつとも人間といふものが分つてゐない。少し考へて見ろ、と君から言つておき給へ！」

「いや、」とそこで又大下は、少し落着いて來ると、臆病に代るに、辨の皮肉な氣持が出て來たので、態度を一變して言つた。「いや、僕にも未だに人間なぞといふものがよく分らない、まして、いくら傳言でも、そんな注告が他人に出來る譯のものではないから、それは勘忍してくれ給へ、君から直接言つてやつてくれ給へ。」

「つまり、君が人間ぢやないんだからだ。」と相手も仲々その鋭鋒をおさめなかつた。「よし、僕が明日でも會つて、言つてやらう。」

この男こそ、度し難い男だ、と大下は腹の中で考へたが、そのまゝ默つてしまつた。

「一體、」と相手は大下に默られてしまつたので、多少張り合ひ拔けのした氣味で、少し言葉の調子を柔らげて言つた。
「……何と言つても、彼女はまだ年の行かぬ娘さんなんだから、さう君たちの玩具にしてもらつては困るよ。」
大下はもう臆病氣も、人の興奮に反抗するくそ落着の皮肉も、一緒になくなつてしまつて、唯ぽつねんとして默り込んでゐた。
「困るよ、玩具にしてもらつては、」と芦屋は部屋の中が沈默してしまふのを恐れるやうに、しかし二度目には半分口の中で言つた。その時又隣の陸軍大將の家の庭から、ボウ、ボウ、と梟の鳴く聲が蒸し暑い風に送られて聞えて來た。
「今夜は梟は一羽だな、」と大下は獨言のやうに言つた。だが、無論、それには芦屋は答へなかつた。で、そのまゝ二人が默つてゐると、ボウ、ボウ、といふ芦の聲だけが、我物顔に近くなつたり、遠くなつたりして聞えたものだ。
「もう、」と暫くしてから芦屋が言つた。「もう用がないから、そして今夜は僕がこゝにゐて彼女を保護するから、君は君の部屋に歸つて寢給へ！」
「僕は僕の部屋に歸つて、……」と大下は鸚鵡返しに言つた。「それでは君の言葉に從つて、失敬して寢よう、」そして。先程から、眠つてゐるのか、目を醒ましてゐるのか、今夜は鼾の聲も立てずに、蒲團の中に俯伏してゐる珊子の方に、念のために「珊子さん、お大事に……」と挨拶の聲をかけて、大下はいそ〳〵と自分の部屋に歸つて行つた。

(つゞく)

十二月二日朝。作者曰く、讀者よ、讀者よ、これから、といふ所で切つて申譯なし。



泉のほとり

(田園雜記ノ一)

正宗白鳥

私は日の出前に起きて、顏を洗ひに山麓の泉まで出掛けるのを每朝の例としてゐる。水質の惡い井戸水を用ひるのは氣持が惡いからでもあるし、朝食前の散步が健康上に必要なためでもあつた。

人家の間の汚らしい道を急いで通り拔けて、小川の橋を渡り、大根畠の側を橫切り、墓地への通ひ路から岐れて、石ころ道を數十步も上ると、苔の蒸した石に圍まれた淸冽な泉が目の前に現はれるのである。古い石地藏が傍に安置されてゐて、後は繁つた竹藪が奧深く續いてゐる。共用の大柄杓で碧く澄んだ淸水を汲んで、口を漱ぎ顏を洗ひ、あるひは全身を拭つたりしてゐると、爽かな朝風が身に染みて氣持がいゝ。空を仰ぐと、殘月が竹の葉越しに見えたり、少し時刻の遲れた時には、向ひの山の端が微紅くなつてゐたりしてゐる。

少しぐらゐ雨が降つてゐようとも、霜が置くほど冷たい朝であらうとも、私はまだこの習慣を止めないでゐる。たまに水汲み女に出會ふこともあるが、出稼ぎの漁夫の揃つて歸村してゐる時節とは違つて、早朝の泉に人影を見ることは甚だ稀れだ。

はじめの間は、私の顔が珍らしさうに見詰められて、「何方へお出でなさる？」と、途中で誰れ彼れから訊ねられることもあつたが、この頃は事情が沿道一帶の人々に分つたので、顧みるものもなくなつた。私は歸郷するたびに、日毎に山へ上り濱へ出るのであるが、村の人々と打解けて話をしたことは殆んど無かつた。自分の家以外の家の閾を跨いだことも殆んど無いと云つていゝ。

したがつて、村の誰れからも懷かしげに話掛けられることはなかつたが、たゞ一人仙太といふ男は、何處でゞも私を見つけると、いかにも懷かしさうに大きな聲で呼留めて、傍へ寄つて來るのを例としてゐた。彼れの家の前を通るたびに、「お寄んなさい」と私を招かないことがなかつた。彼れの方で私の住んでゐる離れ座敷の側を通る時にも、をり／＼は塀越しに話を仕掛けた。それなのに、今度は歸郷して以來暫く彼れの聲を耳にしない。私が歸つて來たことは村中の噂になつてゐて、無論彼れの耳にも入つてゐるだらうのにと、私は怪んでゐた。泉へ行く途中から見上げられるところに彼れの家があるので、私は時々曉の光を通してその方を見やつたが、彼れの姿は一度も見られなかつた。

しかし、私の方では強いて會ひたくはないのだから、この男の動靜を家の者に訊ねることもなかつた。十九の年に親分を殺害して北海道の監獄へ十六年三ケ月も入つてゐた彼れは、七年前に放免されて歸郷して以來、薄資本で魚類や穀類の荷ひ賣りをしてゐたのであつたが、若い時に苦勞を掛けた兩親には入牢中に死なれ、僅か十七の年齡に娶つた最初の女房も、入牢中に行方知れずなつてゐるし、村の中からはやゝもすると疎外され勝ちだつたので、二十代三十代の若い盛りを監獄の中で苦しみながら、ひそかに戀焦れてゐた生れ故郷も、彼れに住みよき感じは與へてゐなかつた。彼れの兩親や幼い頃の彼れには家事を手傳はせて、昔風の主從のやうな關係で生活の保護をしてやつてゐた私の家でも、出獄後の彼れには關り合はないやうにしてゐた。

「あれでさへ、何年置きかに故郷へ歸るたびに、村の樣子の變つたのに氣がつくが、お前は尚更さう思ふだらう。十六年も世間の風に吹かれないでゐると、世間はその間にすつかり變つてゐるんだから、生れた土地へ歸つて來ても

狐に抓まれたやうな氣がするだらう」と、數年前、彼れとの話の間に云ふと、

「さうですなあ。……昔は皆んなが親切だつたやうに思はれます」と、彼れは細い目をパチ〳〵させながら、將に落ちぬやうな顏して云つた。

「今時の十六年は昔の百年よりも世の變りやうに烈しいんだから」

「しかし、若旦那。この村は昔の方がよう御座いましたなあ。あの時分には私一人が惡人で、他の人はみんなえゝ人であつたやうに思はれますが、今はみんなが意地が惡うなつたやうに思はれますがな」と、彼れは感慨を籠めて云つた

彼れはその後獨住みに堪へられなくなつて、二度も三度も他村から女房を連れて來たが、どれも長くは居つかないで、徒らに村人の物笑ひとなつてゐた。

歸鄕後彼れの消息をはじめて私の耳に入れたのは、山の泉のほとりで手足を洗つてゐる時であつた。珍らしく早目に水汲みに來たある男は、私の側に立つて擔桶に水を入れながら、「どこのお人かと思ひました。あなたも歲をお取んなさつた」と話しかけた。

「君は誰れだつたね。忘れちやつた」

「私は藤吉で御座います。この頃は西谷の方に家を持つとります」

「あゝ、さうか。」私は相手の顏を見上げるとともに、彼れが子供の時分に仙太に庖丁で額を深く傷けられたことを先づ思出した。額の傷は薄く跡を殘してゐた。で、「仙太はこの頃どうしてる?」と、咄嗟に訊ねた。

「あれは今年の四月からまた牢へ入つとります。巡査さんの主婦さんの肩を斬つたんで、三年の懲役にやられました」

「相變らず無茶をやるぢやないか巡査の身內を斬つちや罪が重いだらう」

幼い時から感情を壓へ得ない彼れの所行としては不思議とも思はれなかつた。

「去年の暮れに、備後から二人も連れ子のある四十くらゐな女を連れて來とつたんですが、その女もはじめから永う

辛抱する氣ぢやなかつたらしいんです。仙太の方ぢや今度逃げられちやかなはんと思つたと見えて、わしの居らん間に逃げでもしたら、何處までゞも追かけて見つけ次第叩き殺してやる。そのつもりで居れと商賣に出掛けるたんびに脅しとつたさうですが、そんなことを云はれるから、尚のこと氣味が惡うなつたと見えて、その女は巡査さんの家に手助けに行つてる間に、主婦さんに頼んで×村へ姿を隱したんでさあ。また女が逃げたなと、仙太の奴、前後見ずに巡査さんの家へ怒鳴込んで、主婦さんが言譯するのを碌に聞きもせんで、側にあつたサーベルを拔いて斬りつけたんださうです。その時巡査さんは便所に入つとつたんださうですが、大變な騷ぎでした」

「そして、その女や連れ子はどうしてる？」

「それつきりこの村へ姿を見せません、」

「以前米造を殺した時には、盥に乘つて逃出したさうだが、今度はさうは行かなかつたらう。ね。今時分仙太の奴、あの細い目をパチ〱させて後悔してるんだらう」

「何しろ、五人の女房に逃げられたんですからな。一度は女の方で亭主と馴合ひで仙太の女房になつて、折角資本に借りて來とる金をみんな持つて、逃げたことがありました」

さう云つてゐる間に、藤吉は擔桶へ水を滿たして、坂道を下りて行つた。私も隨いて下りたが、話は續けられなかつた。

幼い頃、仙太と私とは屢々寢床を並べて眠つたことがあつた。

「月はあんなに小く見えても大きいんだ。周圍が何百里もあるんだ」と私が教へると

「阿房云ひなさい。本にはさう書いてあるか知らんけれど、わしの目でどう見ても、そないに大きいもんとは思へん」

と、彼れは例の細い目で澄んだ大空を見上げた。

仙太がゐないとすると、他に私を懷かしがつて聲を掛けて呉れるものはこの故鄕に一人もゐないのだ。私は道すがら仙太のゐた家の方を見詰めた。其處の軒先からは朝餐の煙が洩れてゐた。



鐘ケ淵

上司小劍

一

鐘ケ淵へ、鐘ケ淵へと、村人は殆んど皆家を空ふして集つた。鐘ケ淵には何がある。

都から來た大久保といふ人が、鐘ケ淵の水を干して沈んだ釣鐘を引き揚げるのだといふ評判が村いツぱいになつて、薄汚ない子守りの背に負はれた幼兒までが、驚きの眼を瞠るほどであつた。

『そんな勿體ないことをして、村に祟りがあつたら、何んとするぞい……』

一生懸命になつて、こんなことを言ふ老人には、流石にもう眞面目で取り合ふものはないまでに村も開けてゐた。

『鐘ケ淵には釣鐘が沈んでゐるて、そんなことほんまやろか。…………』といふやうな疑ひを抱いても、直ぐ淵の主に業をされるといふほどに恐れられてゐたものが、寺小屋を小學校に直して、小供へ惡智惠を附けてから、淵の主を侮るも

のがだん／＼多くなつて來た。

この鐘ヶ淵の主は百年目に一度づゝ村人へ姿を見せるが、それは必ず三日三夜の雨風が續いた後で、眞夜中頃に眞ッ赤な火の柱のやうな形で現はれるのは、まさしく龍である。——といふ傳說は、何百年或は何千年の昔から村に傳つてゐる。

昔平家の大將とかで、唐の國の育王山といふ大きな寺へ、何萬貫といふ黄金を納めたので、其のお寺からは返禮に大きな釣鐘を送つて來たけれど、其の時はもう平家が檀の浦に亡びた後で、折角の釣鐘も受取人がなく、釣鐘の迷兒が牛車に乘せられてこの淵の側を通つた時、何うしたことか、車が少しも動かなくなつて、牛は口から白い泡を吹きつゝ斃れて了つた。さうして、淵の眞ん中に大きな渦卷が起つたと思ふと眞ッ赤な龍王が現はれて、其の釣鐘を摑むなり直ぐ、車もろともにまた淵の底へ沈んだのだといふ。

『そんなこと、眞ッ赤な噓ちやい、噓に眞ッ赤といふ色が附いたのはそれから始まつた。』と、うツかり戲談を言つた爲めに、村方からけんぺつ（絶交）されて、秋祭の夜若い衆が擔ぎ廻はる樽太鼓の大棒で、住家を散々に突き壞されたものもあつた。

『鐘が淵の主の祟りより、若い衆の太鼓の祟りが恐ろしいわい。』と、うツかり口を滑らしたものが、またけんぺつの制裁を受けかけて、平あやまりにあやまつた末、漸く村方へ一札を入れて免して貰つたといふ滑稽も、この村では立派な、正當な、合法的とかいふことゝして通用して來た。兎に角愚なる村であつた。

近頃は時節が惡うなつたと、村の故老は口々に歎息してゐる。其の歎息の仲間も一人減り、二人減りして、今はもう二三人になつた。米の價が高くなつて、村は上景氣でも、故老どもは決して歎息を止めない。惡ければ惡い、良ければ良いで、何か知ら理屈を附けて歎息してゐる。彼等故老の仲間をば、村の若者どもは、歎息院と綽名したりした。

けれども、長い間の習慣は恐ろしいもので、村端れの鐘ヶ淵に對しては、まだ何んとなく恐れを抱いてゐる村人が

多かつた。赤龍が棲むといふことは信じなくとも、釣鐘が沈んでゐるといふことは信じてゐるものもあつた。釣鐘が沈んでゐるといふことを信じなくとも、なほこの紺碧の水を湛へた淵に向つて、一種の恐れを感じるものは多かつた。

まことに深い淵であつた。可なりに大きい山川が、村に沿ふて流れ、里に向つて走る出口が、急な瀬になつてゐて、其處から川がくるりと一つ山に添ふて曲る途端に、崖を摧つて大きな淵を造つてゐる。それが鐘ケ淵だ。深さを測ると主の赤龍が怒るといふことで、昔から測つたものもない。深いにも深いので、普通の竿竹ぐらゐでは底まで屆かない。龍宮まで通じてゐるなぞといふものもあつたが、其の傳說は何ういふものか流行らなくて、この淵にも矢張り底はあるものと、迷信の強い人々にもさう思はれて來た。

曾つて、この川を通る筏師が、この淵の深さを測らうとして、其の長い〳〵棹で眞ん中を探つた時は、ずぶ〳〵と底の泥へまで屆いて、白い泡が浮き上つたさうだが。其の筏師は其の夜から大熱を發し、何者にか咽喉を締められるやうな恰好をして狂死をしたといふことである。

恐ろしくはないけれど、無益なことをするに及ばないといふことで、今もなほこの淵の深さを測らうとする村人は一人もない。實際舟といふものは一つもないこの村では、筏師でゞもなければ、可なりな溜池ほどもあるこの淵の眞ん中へ乘り出して行くこともならぬ。岸は皆巖石で、屛風を立てたやうになつて、裾を水に浸してゐる。岸のところからもう深くて、藥研形に眞ん中へと滑り込んでゐるらしい。夜なんぞ流石に物凄く如何に野法圖なものでも、一人でこの淵の岸に立つてゐることは出來なかつた。

其の淵を干して沈んでゐる釣鐘を引き揚げるのだといふので、都から來た大久保といふ人は、村人の目を欹たゝせた。

二

大久保といふ人は、三十五六の男盛りで、疎らな頬髯が、パッと兩方へ開いたやうになつて長く生えてゐた。色が白く額が廣く、背がすらりと高くて、それに相應の恰幅もあるから、誰れの眼にも立派な人と見えた。先祖代々鍬に取つ付いて、殆んど眞ツ直ぐに立つことを知らぬ風で働いて來た土色に染つた村人どもとは、同じ種の人間とは思はれないほどであつた。面長で髯のない、三十恰好の番頭とか支配人とかいふやうなものを一人連れて來て、村の檀那寺光格寺の座敷を借りて逗留してゐた。

『可哀さうに、あの人は、今に鐘ヶ淵の主に食はれて了うぞい。』と、村の故老は言つた。

『いんや、あの旦那なら、屹と鐘ヶ淵を乾かして、沈んだる釣鐘を揚げはるやろ。』と、若い者は言つた。

『何んにしても、俺アあの旦那に頼まれたかて、鐘ヶ淵へ水をかへ出す仕事に行くのは厭やぢや。』と、尻込みするものもあれば、『日傭賃さへはずんで呉れたら、何んぼでも行たるがな。』と、平氣で慾張るものもあつた。けれども、大久保は別段大勢の人足を雇ふでもなく、毎日／＼ブラリと一人で、黄色い金具のピカ／＼光る洋杖を振りながら、鐘ヶ淵へ出かけて、岩の上からぢいッと紺碧の水面を覗んでゐた。番頭は光格寺へ殘つて手紙なんぞを幾通も／＼積み重ねるほど書いてゐることもあれば、また大久保の供をして、一所に淵を覗に行くこともあつた。

鐘ヶ淵には昔から鹽辛い水が、眞水に混つて水面へ噴き出すことがある。それをば村人は、龍王の含嗽の水ぢやと言つたり、また沈んだ鐘の精ぢやとも言つたりしてゐる。大久保は其の鹽辛い水の噴き出す元を究めて、沈んだ鐘の龍頭を探らうとするらしかつた。

やがて大久保は、妙な男を一人都から呼び寄せて來た。其の男は龍宮の兵隊さんの着る鎧のやうなものを頭から被つて、臍の緒を引ツ張つた胎兒の如く、ぐにや／＼した長い管をくツ付けながら、大膽にも鐘ヶ淵の紺碧の水に大きな波紋を留めて、底深く潜り込んだ。この時である村人が殆んど家を空ふして鐘ヶ淵の周圍へ集つたのは。…………

龍宮の使のやうな其の男は、臍の緒の端を岩の上に殘して置いたが、それは大久保と番頭とが大切に番をしてゐた。

三十分から小一時間ほども、其の男は水面へ現はれなかつた。いよ〳〵主に取つて食はれたのではあるまいかと危むものもあつたけれど、それにしては大久保と番頭とが、平氣で世間話をしてゐるのが面憎いほどであつた。水面へは絶え間もなくぶく〳〵と泡沫が浮き上つた。

『淵の主がお放屁してはんね。』と、見物人の中の十歳ぐらゐの男の子が眞顏で言つたので、それを耳にした村人は皆笑つたが、其の子だけは決して笑はなかつた。『これ罰が當るがなと。』言つて、其の子の親らしいのが叱つてゐた。

淵の波紋は全く消え去つて水面は鏡のやうになつた。底から浮き上る泡沫もなくて、紺碧の色は麗はしく秋の日光を受けてゐた。山と山とに挾まれてゐるこの淵が日光を受けるのは、一日のうちで一時間ばかり、それも冬になると紺碧の水は全く日の目を見ないことになつて、水の色が黒くなつたかと思はるゝほどである。著るしく南に移つた日晷は、遠い山々の頂だけを照らして、村の家の棟にさへさう長くは光を落して呉れない。殊に山の尾と山の尾とが相觸れ、相迫まつて、其の間を怖さうに川の水が流れ落ちる途端に、崖を抉つて造つたこの淵だもの、一年中を殆んど日蔭で暮らしてゐる。成るほど夏はそれでも稍一時間ぐらゐ、淵の面が日光を受けてゐるけれど、秋になるとそれが一時間ぐらゐに減つて了ふのである。

龍宮の使のやうな姿をして、妙な鎧みたいなものを頭から引ツ被つた都の男が、鐘ケ淵の底に沈んだ時は、丁度秋の日晷が淵の面をおとづれやうとしてゐた。其の弱い光が淵を甜めつゝ西に移つて、淵にはたゞ黒い山の影だけを殘さうとする頃になつても、沈んだ男は浮んで來なかつた。

『何してはんねやろ。』

『沈んだ鐘を探してはるね。あの鎧みたいなもの着てはるさかい、水の中に何んぼ長いこと居たかて、息の切れることあれへん。』

『見いや、あの大久保の旦那の前にある管から息が通ふてるんや。』

『そんなこと言ふてるけど、今頃はもう龍王さんに食はれてしもたか知れへんで。』

村の人々が口々にガヤ〳〵言つて騒いでゐる頭の上を、大久保が噴かす葉卷煙草の紫色の烟が、ゆら〳〵と呑氣さうに流れてゐた。

一時間あまり後に、水面へ俄に波紋が起つたと思ふと、龍宮の鎧を着けた男は、ぽかりと浮き揚つた。『そら龍王さんが現はれはつた。』と村の誰れかゞ大聲に叫んだので、群集の頭が一時に動搖して、足は齊しくたぢろいた中を、其の男はゆツたりと大久保の側へ行つて、何事か頻りに私語いてゐた。

大きな釣鐘が横倒しになつて、淵の底に沈んでゐたとか、釣鐘は泥の中に埋まつて、龍頭だけが錆びて見えてゐたとか、釣鐘は見えないので、龍王の二つの眼が鏡のやうに光つてゐたとか、其の夜、村中にはいろ〳〵の噂さがいツぱいになつた。

『なアに、思つたほど深くはなかつたよ。』

龍宮の鎧を着けた男の口から出た言葉で、直接村人の耳へ入つたのは、たゞこれだけの爽やかな、歯切れのよい東京辯であつた。

三

國有地の借用、民有地の買收等、此の國特有の煩瑣な手續きといふことを要する仕事が、其の後大久保の名で頻りに行はれた。勿論この村の鐘ケ淵を中心として、其の周圍を限つてのことであるが、面倒を面倒とも思はれない風で、大久保の番頭は南京鼠のやうに、くる〳〵と駈け廻はつてよく働いた。

其のうちに鐘ケ淵の近くの岩の上へ、可なり大きな長屋風の家が建つた。鐵の管が十本からも運び込まれて、それが何時の間にか見えなくなつた。そんなことをば皆釣鐘を引き揚げる爲めの仕度だと、村人は思つてゐた。

町から石屋が來て、岩の上へ四角い穴を堀り始めた。大工でも人夫でも、村で間に合ふものは皆間に合はして、成るべくは村へ金の落ちるやうな大久保の方針であつたけれど、石屋だけは村になかつたので、遠く町から呼んで來た。其の石屋は聾の老爺で、自分に自分の鑿の音を聞くことは出來なかつたが、石を穿つ響が村中に傳はつて、村人の耳を刺すやうであつた。

初めは鐘ケ淵の主の祟りを恐れたり、遠國（くに）もんの大久保に雇はれるのを潔としないものが多くて、大工や人夫の不足を感じてゐた番頭も、石屋の鑿の響に刺戟された村人が、追々とよい日傭賃を貰つて、美味い濁酒に有り付く有り難さを、隣りから隣りへと傳へるので、果ては使つて呉れと頼んで來る多くの村人を持てあますやうになつた。たゞ二三人の村の故老だけは、今にも龍王のえらい祟りが、淵の底から湧き出して、大きな災害を村人の上に注ぎかけるであらうと言つて、岩を穿つ石屋の鑿の響に耳を掩ふてゐた。

聾の石屋は二三人の弟子を連れて來て、毎日コン／＼カチ／＼と岩に穴を穿つてゐた。三尺四方くらゐの四角な井戸みたいな穴で、石屋が其の中に立つても、頭の見えぬまでになつたけれど、何んの爲めの穴だか、石屋自身も知らなかつた。『もう少し深くして呉れ、其の倍になつたらいゝだらう。』と、番頭は上から促し立てた。

大工、左官、石屋なぞの働く音で、眠つた村が急に眼を覺ましたやうになつた。いろ／＼の音と響とのうちに、大久保の事業は捗取つた。石屋の穿つた岩の上の穴には、鐘ケ淵の底から鐵管で導かれて來た塩辛い水が波々と溜つて、また元の淵へ溢れ出した。『鐘印炭酸水製造鐘ケ淵商會』と書いた大きな看板が、木の香の新らしい長屋の入口に揭げられ、炭酸水の瓶詰めを拵へる機械は、いろ／＼と町の方から運び込まれたので、村の人は皆アッと驚いて、『何んちや、釣鐘を引き揚げるんぢやないのか。釣鐘の精を吸ひ取つて、瓶詰めを拵へるんぢやな。』と呆れ顔をした。

『當商會製造の炭酸水は、△△縣××郡〇〇村字鐘ケ淵なる深さ十數尋の水底より湧出する天然瓦斯含有の鑛泉を原料としたるものにして、人造瓦斯を用ゐたるものとは自ら選を異にせり、右鐘ケ淵の鑛泉は往昔唐の育王山より送り來り

し梵鐘が水底に沈みて、其の精氣の靈泉と化したるものなりとの傳說あり、單に淸凉飲料としてのみならず、醫[illegible]としてこれを用うるも、其の効能の絕大なるを疑ふべからず。」

こんな文句をレッテルに刷り込んで、商標には梵鐘の繪を用ゐてあつた。さうして藥學博士何某の分折表をも附けてあつたが、製造の初めから賣れ行きが良くて、大久保も番頭も、にこやかな顏をして、其の年を越した。

鐘ヶ淵に近い山腹の、南向けの地所を拓いて建てた大久保の新宅も、春には漸く竣工して、大久保は都から家族を呼び迎へた。家族と言つても三十恰好の、額にケンのある女と、貰ひ兒だとかいふ五歳ぐらゐの女の子と、それから犬が二頭とであつた。犬は黑くて大きい方がジョン、白くて小さいのをジャックと言つた。二頭とも新建ちの家の內へノソ〳〵と上り込むので、まだ全く仕事の手を離れてゐない建具や疊の職人どもは喫驚したが、夜になるとジョンにジャックの二頭は、大久保の臥床へ潛り込み、左右から主人に抱かれて寐るので、村から下女に雇はれて行つた娘は、逢ふ人毎に眼を圓くして話した。

番頭の佐々木は、まだ獨身ださうで、壁の乾かぬ玄關で、獨りゴロリと寐て、朝は暗い中から製造場の方へ出かけた。佐々木が玄關の戶をガラリ開くと同時に、ジョンとジャックとは主人の臥床から飛で出し、佐々木よりも先きに駈け拔けて、製造場のぐるりを廻はつた

四

機械の原動力は、初め人夫が四人づゝ交代して廻はしてゐたが、それでは足りなくなつたので、淵の上の方の瀨を利用して、小型の發電機を据え付け、其の餘りで方々に電燈を點けた。別に銅線を長く引ツ張つて村役場へ三個の八燭燈を寄付したので、大久保の人望は間もなく村長の次ぎぐらゐになつた。村にはまた電燈を珍らしがるものがあつて、夜になるとわざ〳〵着物を着更へて、大久保の新宅や、村役場へ電燈拜見に來るものもあつた。總べてを都風に造つた大

久保の家は、型に嵌つた田舍家ばかりを家と思つてゐた人々には、電燈がなくとも一覽の價値はあつた。家と言へばいづれも前が廣場で、牛部屋と入口とが並び、薄暗い土間があつて、廣くて五室か六室、狹ければ二室ぐらゐが、秋から冬になつても蠅の多い眞ッ黑な天井の下に箱の如く仕切られたものときまつてゐるのに、大久保の家へ來て見ると、先づ粹な衡門からして、何んだかお宮の入口のやうな氣がするのである。正面に植ゑ込みがあつて、まだ落ち付きも見えず、さびも出て來ないが、そんなことは村人に分らないで、手綺麗に造られた前庭をば、土足に蹈むのを勿體ないと思ふほどであつた。美しい格子戸の中に、雪洞型の電燈の輝くのも神々しいやうで、ジョンとジヤックとは、人の足音にわん〳〵吠え立てた。

西洋館まがひの應接室もあれば、二階の書齋には、紫檀の大机が、人の顏を映すばかりにぴか〳〵光つてゐた。何から何まで村人の眼には珍らしく綺麗に見えて、ちやちな普請も御殿の如くに思はれた。

働くと言へば、田か畑か山か、それより外に仕事のなかつた村が、鐘ケ淵商會のお蔭で、息子は職工に、娘は女工に雇はれることを覺えた。息子が山へ行つて柴や薪を取つて來ても、それを町へ賣りに行くまでには三日ぐらゐかゝつた。三日目に漸く柴や薪を錢に代へて來ても、其の高は、鐘ケ淵の製造場で一日働いた日傭賃の半分にも當らなかつた。若者は皆鎌を棄て、鍬を投げて、鐘ケ淵の製造場へ行きたがつた。鐘ケ淵の事業はだん〳〵盛んになるけれど、まだ〳〵男女合はせて三十五六人以上の職工は要らなかつた。缺員が一人出來ると、希望者が四五人も集つて、抽籤で職工になることを爭つた。職工の株が一ケ月分の賃錢ぐらゐで賣買されるやうになつて來た。何んにしても大久保の勢ひはえらいものであつた。

女工の仕事は重に瓶洗ひと、レッテル貼りとであつた。十人ばかりの女工が對ひ合つて炭酸水の瓶にレッテルを貼つてゐる。詰め方の手で詰められた瓶が、手車でゴロ〳〵と仕上げ部の方へ廻はつて來ると、其處で一寸改めて、レッテル貼りの方へ送るのであるが、詰め方は佐々木が引き受けて、白の事務服も小ざッぱりと、機械を扱つて瓶詰めを拵へ

た。仕上げ部の主任は、村の若者の中で氣の利いたものを選んだのであるが、早くも洋服なぞ着込んで、澄まし込んでゐた。

この小さな工場の爲めに、村全體の農業氣分が少しづゝ工業氣分に染まりかけて、故老たちはいよ〳〵眉を顰めた。

『昔は雷神と言つて、雷を怖がつたもんぢやが、今は雷を捉へて、役場の門番をさしたるね。』なぞと、小生意氣な若者が、役場の入口に點いてゐる八燭の電燈を指さして言ふやうになつたが、歎息院の故老たちには、其の意味が解らないで、たゞ〳〵今時の若い者にも困つたものだと思つてゐた。

レツテル貼りの女工の中に、勇魚といふのがあつた。色が拔けるほど白くて、目鼻立ちも調つてゐた。鄙には珍らしいと昔の本によく書かれてゐる型の美人で、ほんたうの美しい女は都よりも鄙にあるものぢやと、この娘を生きた標本にして、齒の拔けた故老たちが、口をもぐ〳〵さして言ふこともあつた。もと村の小學校長をした人の娘で、遠國もんであるが、長らく校長を勤めた父がこの村の土になつたから、母と二人で村に落ち付いて、細々と畑を立てつゝ、村人の情けに活きて來た。

この工場が出來ると、勇魚は眞ツ先きに母親と二人で、大久保を訪ねて、女工を志願したのであるが、大久保は事情を聽いて氣の毒に思ひ、母子二人とも女工にといふのを、勇魚だけ採用して、窃かに二人分の賃銀を與へることにした。

美しいけれど、髮の毛の赤いのだけが勇魚の缺點であつた。十人ばかり並んで、一心にレツテルを貼つてゐる女工の頭だけを見れば、背後からでも直ぐあれが勇魚だと分つた。詰め場から仕上げ場を通つて來た炭酸水の瓶をば、勇魚の白い手が其の一本を臺の上に載せて、レツテルを貼らうとした刹那、炭酸の分量でも多過ぎたのか、パーンと劇しい音を立てゝ破裂した。折柄仕上げ場に居合はせた大久保は、直ぐ振り向いて、勇魚の赭い頭髮を見た。勇魚は、『あツ痛ツ。』と叫んで、薄赤い掌で白い手首を押さへてゐた。赤い血が白い指の間から染み出した。

『怪我をしたか。』と言つて、大久保は誰れよりも先きに勇魚の側に立つてゐた。勇魚は三日月のやうな眉に皺を寄せて

『大事おまへん。』と、遠慮しい〳〵言つた。『勇ちやん痛いやろ。』とか、『たんと切れて。』とか言つて、他の女工たちも皆勇魚の周圍に立つた。けれども大久保を憚かつてか、さう近くへ寄るものもなかつた。詰め場や仕上げ場の方からも、男の職工が三四人駈け付けて來た。佐々木も詰め方を中止してやつて來た。勇魚の血に彩られたといふやうになつて、工場は一時運轉を中止した。

『こらッ誰れぞ繃帶と石炭酸を持つて來てやれ。…………それから醫者を呼んで來なけれやなるまい。』と言つた大久保の言葉の下を潜り拔ける風にして、一人の男工は山を駈け登つたが、やがて大久保の家から、繃帶と石炭酸とをば汚ない手に攫んで、すう〳〵息を切らせつゝ駈せ戻つて來た。其の二品を待ち遠しさうに取つて、大久保は手早く石炭酸で勇魚の傷を洗つてやつた。赤い血がだら〳〵と流れて、大久保の手をも染めた。

『痛いか。』と、大久保は優しい言葉で勞はりつゝ、勇魚の美しい顔が眼を細くし、齒を食ひしばりつゝ、痛みをこらへてゐるのを見てゐたが、傷は案外に深さうで、一卷きの繃帶を殆んど眞ッ赤に染めて了つても、まだ血が止まらなかつた。氣の利いた男工が、また山を駈け登つて、今一卷きの繃帶を持つて來たのを、大久保は嬉れしさうに受け取つて、それをもまたぐる〳〵勇魚の手に卷き付けた。勇魚の手首は足ほどの太さになつて、血は漸く止まつたらしかつた。

勇魚は大久保に扶けられて、靜かに山を登り、窮屈がつて遠慮するものを無理に、新宅一室で靜かに息ませられた。

工場はまた息を吹き返へしたやうに、機械も人も動き始めた。

『顔見たゞけで、氣が濟むならば、飲酒家や、樽見て醉ふであろ。…………』

レッテルの貼り場では、女工たちが聲を揃へて、いつもよくうたふ唄をうたひ出した。

五

『あれぐらゐの怪我で、醫者どんにも及ぶまいがのう。』と、蔭で不平を言ひ〳〵、機械場の方の職工が一人、二里から

ある川下の町へ醫者を呼びにやられたが、折柄初夏の晴れた日で、淵にも日光がいツぱいにあたつてゐた。醫者の人力車とともに駈け戻つて來た職工の背中には、水を浴びたやうに、汗が染み出してゐた。

『勇の鼻垂れめが、えらい目に遭はしよつた。』と、汗みづくの職工は、ブツ〳〵溢してゐた。他の職工は男も女も顔見合はせてくす〳〵笑つた。

勇魚の傷は、左の手で、筋を痛めてゐるから、手當てがわるいと、一生手首の自由が利かなくなるかも知れないと、醫者に驚かされた。醫者はもう餘ほどの老人で、人力車から下りるのも大儀さうであつた。しかし元縣立病院の外科主任をしてゐたといふので、大久保も信頼して、勇魚をこの醫者に任かせた。年を取つて手が震ふから、もう大手術は出來ないらしかつたが、傷の手當ぐらゐでは、流石に熟練を見せて歸つて行つた。

この老いた醫者に、毎日二里からの山道を往復させるのは氣の毒だからと言つて、大久保は醫者の家へ勇魚を寄宿させるやうに賴んでみた。家が廣くて、曾つては病院の設備をもしたことがあるからといふことで、醫者は早速承知をして與れた。

『まア勿體ない。』と、勇魚の母は泣くやうに言つて嬉しがつた。『この御恩を忘れたら罰が當るで。』とも母親は言つた。

『歩かしてやります、勿體ない。』と母親の言ふのを構はずに、村に一臺しかない人力車の息子は、野仕事から呼ばれて來て、百姓着物のまゝで梶棒を握つた。鉢卷きをした手拭ひの眞新らしいのが目に立つて、泥だらけになつた縞物の筒袖の縞さへ消えかゝつたのと、昔は紺色であつたと思はるゝ腿引の襤褸のやうになつてゐるのとが、醫者の車夫の黑鴨仕立てなのに對ひ合つて、いよ〳〵汚なく見えた。それでも車は近頃塗りかへたのでよく光つてゐた。

醫者の車を先きに、勇魚は繃帶をした手首を大仰に首から吊して、六歳の時亡父とゝもに乘つたきりの人力車へ嬉れしさうにして乘つた。二臺の人力車は石塊だらけの縣道を南へ、揺られ〳〵て走つた。長い初夏の日も漸く西に傾いて、

淵はもう疾くに腐つてゐた。風が吹いても漣さへ立たぬ油のやうな水は、巨人の眼の如く、何ものかを睨んでゐた。

六

これまでとても、大久保は一週に一度や二度、川下の町へ二里あまりを、村に一臺の人力車で往復したものであつたが、近頃は一週に三度ぐらゐ出かけるやうになつた。それも往きには歩いて、還りだけ町の人力車に乘るやうになつた。勇魚が町の外科醫院へ泊り込んで治療を受けることになつてから、さうなつたのだとは、誰れもうツかり氣の附くものがなかつた。

ヒステリックな大久保の妻は、額から腮まで、鼻も頬も總べてが同じ蒼白さをして、始終眼を吊り上げてゐる。かういふ山の中が好きだ、靜かでいゝと言つて、大久保が今度の事業を始めると間もなく自ら進んで五歳の連れ子とゝもに寂しい村へやつて來たのであるが、晝は工場のガヤ〳〵した雜音に紛れてゐるけれど、夜になると、梟の啼き聲を除いて、外から聞えて來るものとては、松風の音ばかり、夢に聞く按摩の笛を懷かしんで、都の生活を思ひ出しつゝ、ヒステリーが更に劇しくなりさうであつた。連れ子の鈴江も、寂しさにベソを搔いて泣き寢入りに眠つて了ふことも多かつた。連れ子と言つても解らないかも知れぬが、妻の私生兒で、妻はこの私生兒と幾萬の持參金とを持ち込んで、大久保の家に入つたのである。そんな事情はもとより村人の知るところでない。

心の底から滲み出す熱い〳〵血液のやうな女の愛に飢えてゐた大久保は、勇魚の姿を一目見た時、既に其の冷たく凝結しかけた心の溶けかゝるのを覺えた。都では隨分美しい女を見た。榮華の夢の浮き彫りの臺の上に坐つたやうな女に秋波を送られたこともある。しかし大久保は書生の折から世話になり盡くした亡き先輩の遺兒と遺產の幾分とを大事にして、他を顧ることがなかつた。女の眞の情とか愛とか戀とかいふことゝは、まるで係り合ひのない冷かな心で、全身の熱はたゞ他人の多く試みない珍らしい事業の上にのみ注ぎかけようと思つてゐた。ところが其の堅く冷たい心が、何

うしたことか、村娘の勇魚の前に溶けかゝつたのだ、大久保がもうたまらないと思つた時、丁度勇魚が手首に怪我をしたのである。

大久保がまたもや急ぎ足で、××の町へ入つて行くと、勇魚は何うして打ち合はしてあつたのか、しよんぼりとして、長い板橋の袂に立つてゐた。如何にも人目を厭ふ様子なのと、おど／＼して物を恐れる風とが、痛々しく可憐であつた。十七の初戀に大久保を思ふのが、大久保にはぞく／＼と嬉れしかつた。

勇魚は急いでやつて來る大久保の姿を見るなり、直ぐ橋の袂から寂しい裏通りを河岸に附いて歩き出した。それを追ふやうにして、一二丁も大久保が勇魚の背中ばかりを見た後に二人は初めて、にツこりと笑ひながら、肩を並べて行つた。

『お醫者さんが不審に思はないだらうか。』と、大久保は勇魚の白い額を覗き込みながら言つた。三十六の男盛りも、まるで二十歳前の少年の心になつてゐた。頬髯をば勇魚の爲めに剃り落したので、年よりは十歳も若く見えて、誰れの眼にも戀に狂ふ若い男女とより外は映らなかつた。

『いゝえ。』と、勇魚は首を振つた。

『僕と君とは、何うしてこんなことになつたんだらうね。』と、大久保はまた勇魚の白い額を覗き込んだ。

『旦那はんがわるいのや。』と、勇魚はもうそんなに顔を赧らめることもなくなつてゐた。

『また旦那はんなんて言ふのか、それだけは廢して貰ひたいな。』と、大久保は顔を顰めつゝ言つた。

『そいでも、あんたといふのが羞かしい。』と、勇魚は袖口で口元を押へた。

『何んでもいゝから、旦那はんだけは、何うぞ廢して呉れ。』と、大久保はまた顔を顰めた。それから暫らく二人は默つて歩いてゐた。

田舍の小都會であるから、十丁も行くと、もう町端れが見えた。紺屋の物干場があつて、其の前の溝を藍色の水が流れてゐた。留守か空屋か、入口の壁に夥しく樂書のしてある家のあるところから、一面の麥畑になつてゐた。雲雀の囀

りが喧ましく聞えて、町にも野路にも人通りのない午後であつた。二人はぼんやり其處に立つて、楽書を見てゐた。大久保は黙とむづかしい顔をしてゐたが、到頭横を向いて笑ひ出して了つた。

『ほゝゝ。』と、勇魚はまた袖口で口元を押へて笑つた。楽書の文句に誘はれたのである。

『さア行かう。』と、大久保は先きに立つて、野路へさしかゝつた。今まで始終洋服ばかり着てゐたのであるが、勇魚と逢ふやうになつてからは、好んで和服を用ゐるのである。薄セルの着物に結城の袷せ羽織で、歩くと少し汗ばむぐらゐのいゝ初夏であつた。勇魚はこの町へ來てから、急いで呉服屋に仕立てさしたセルの着物に、帶だけは家の一張羅の赤い紺絣に黒襦子の腹合せを締めて、頭髪はいつもの新蝶々が都振りの束髪に變つてゐた。

野も森も皆青々と、初戀のやうな色に萠えてゐた。其の若緑りに包まれつゝ、二人の足は、初めて此の國に機を織ることを教へたといふ昔のムスメの祠に向つて進んだ。馬場先きともいふべき道は、野路から急に廣くなつてゐたが、草蓬々と生ひ繁つて、眞ん中に土の見えてゐるところは、却つて野路よりも狹かつた。『何ごとのおはしますかは知らねども…………』と、言つたやうな姿をして、こんもりとした若葉の森が、草蓬々の道の正面に見えてゐた。銀杏らしいのが美しい若芽を着けて、一際高く聳えてゐた。道の中程に苔の附いた石の鳥居があつて、其の棟に多くの雀が儀仗兵のやうに首を揃へて並んでゐた。さうして二人の姿が近づくと、羽根を聯ねて、パッと飛び去つた。雀の立つた跡には、礫がドッサリ積み重つて載つかつてゐた。

雀の細い脚で蹴落して行つた礫が二つ、青い草の上にあつたのを、二人は一つ宛拾つて、また鳥居の棟に載せようとした。勇魚の礫は直ぐ載つたが、大久保のは二度三度、放り上げても放り上げても、なか／＼載らないで果てはまた他の礫をも卷き添へに落して了つた。

『あきまへんなア、旦那はんは。…………』と、勇魚は可愛らしいおちよぼ口に、微笑を含みつゝ言つた。

『また旦那はんなんて言ふね、厭やになつちまう。』と、大久保は勇魚を睨む眞似をして、なほも熱心に礫を放り上げた

『信心が足らんよつて、旦那はんはあかん。其の石が載らんと、願ひ事が叶はん言ひまッせ。』と、勇魚のおちよぼ口は、いよ〳〵可愛らしかつた。

『また旦那はんか、厭して呉れッてば。』と、臀にも手にも力を入れて、大久保は一心に放り上げたので、漸く落したのと二つとも、礫が鳥居の棟に止まつた。

『男と女で、この鳥居の上へ石を上げると、女のお腹へ嬰兒が宿ると言ひまッせ。』と、勇魚は矢張りさう顏の色を赧くもしないで、心持ち羞らう風を見せながら、差し俯向いて言つた。

『そら、大變だ。載せた石を落さうか。』と、大久保は慌てた樣子で言つた。

『いきまへんの、嬰兒が出けたら。…………』と、勇魚は俯向いたまゝ、横目でちよい〳〵大久保の顏色を覗つた。

『小供が出來てもいゝが、今出來ると困るぢやないか。…………第一君の阿母さんに申し譯がない。』と、大久保は深く息を引いて、何事をか考へ〳〵した。

『阿母アはん、喜びますわ。』と、勇魚はいよ〳〵俯向いて、にッこりした。

『阿母さんは、もう君と僕とがこんなになつてるのを知つてるのかい。…………そいつはいけないなア。』と、大久保は溜息を吐いた。

『阿母アはんが知らなんだら、これからかうして二人を逢はして呉れえへん。』と、勇魚も沈んだ顏をして言つた。

二人はいつか、機織の神の森に入つてゐた。古い祠に拜殿もあつて、可なり立派な宮ではあるが、御手洗には一滴の水もなく、『奉納』の文字の薄く讀まるゝ古手拭が東風に飜つてゐた。先刻鳥居の棟に石を載せる時、背中に湧き出した汗が、漸く收まつたやうに思はれて、大久保は其の横の石に腰をおろしつゝ、燐寸を摺つて、好きな葉卷きに火を點けた。紫の烟が長閑に流れて、遙か向ふに古い注連繩のかゝつてゐる神主の門は、半分だけ開いてあつた。

『かうやつて、いつまでも二人で居たいね。』

『わたへかて。…………』

こんなことを言つてから、二人は稍暫らく默つて、誰れも人の居ないところで、涼しい風になぶられつゝ、心ゆくまでに顔を見合はしてゐた。

『厭や、そないに顔ばッかり見るの。』と、勇魚は長い袂で、大久保の肩を打つ眞似をした。さうして大久保の腰を卸してゐる石の片隅へ、白いハンケチを敷いて、窮屈さうに自分も腰をかけた。

『旦那はん、煙草止めなはれな。煙草臭い。』と、勇魚は徇と男に與へた唇を、袖口で押へながら言つた。

『また旦那はんか。…………君が旦那はんと言ふのを廢したら、僕も好きな煙草を止めよう。』と、大久保はにツこりして言つた。

『ほんまに。…………』と、勇魚は嬉れしさうにした。

『でも當分は苦しいだらうな、好きな煙草を止めたら、…………君が一度旦那と言つたら、僕も一本煙草を吸ふことにしようぢやないか。』と、大久保は白く溜つた葉卷きの灰を、今落ちるか、今落ちるかと思ひながら、チツと動かさずに持つてゐた。

『あの、紙に卷いたの、あれにしなはれな。其の葉で卷いた太いのん、餘計臭うおますわい。』と、勇魚も大久保の手にある葉卷きの先きの灰を見てゐた。

『僕は勇ちやんが剃れといふから、髯も剃つたんだぜ。』と、大久保は少し恩に着せるやうに言ひながら、片手で頬を撫でゝゐた。長く伸びてゐる時には、疎らながらに見事であつたのが、剃つて了うと、滑々して、まるで髯のない人のやうであつた。

『ふゝゝッ。』と、勇魚は烟でも噴き出すやうにして笑つた。

『隨分惜しかつたよ、長い間伸ばしてた髯がなくなつたんだもの。』と、大久保はまた頬を撫で廻はした。

『奥さんが、どない言やはりました。』

『別に何んとも言はなかつたが、妙な顔をしてたよ。…………それより職工が顔を見てくす〳〵笑ふので、きまりがわるかつた。』

『また伸ばしたら厭や。…………それがいツち心配だす。』と、勇魚はもうスツカリ癒つて、ほんの申し譯けばかりに繃帶の卷いてある左の手を、大久保の右の手に握られたまゝ、羞かしさうにして言つた。

『そんなに聲が厭やか。』と、大久保はいよ〳〵堅く勇魚の手を握つた。

『聲があると怖い。』と、勇魚は首を縮めて言つた。

『ほんとだね、初めて手を握つた時は、まだ聲があつたもんだから、おど〳〵して怖がつたね。…………僕は初めて君を見た時から、君が好きでたまらなかつたんだよ。阿母さんと一所に家へ來て、兩手でちやんと茶碗を持つてまるで茶の湯でもやるやうにして、お茶を飲んだらう。あの時から慄ひ付きたいほど好きだつたんだよ。』

『あの時は怖かつた。』

『君はいつから僕が好きになつたの。』

『工場で瓶がはぜて、怪我をした時、石炭酸で洗ふて、繃帶を卷いておくなはつたやろ。あの時から。…………』

と、勇魚は駒下駄で砂をかき均らしつゝ差し俯向いた。

『だけど、怪我も癒つたから、もう近いうちに村へ歸らなけれやならないが、歸つたらさう逢へないね、こんなにして。』

と、大久保は自分たちの運命がこれから何うなるかと痛ましい氣になりながら言つた。

『逢へんようになつたら、わたへ悲しいわ。…………そやけど旦那はん、わたへに飽きて見棄てたら、わたへ死にますわ。』と、勇魚も痛まし氣な顔をして言つた。

『お前が死んだら、僕も死ぬ。最愛の勇魚だもの。第一勇魚といふ名が好きだ。』と、大久保は低いけれど、堅く力の籠つた聲をして言つた。

『人間より名の方がお好きだすの。』と、勇魚は少し不滿らしい顔を見せた。

七

大久保と勇魚との噂さは、人の口に堰をすることが出來ないので、村中にパッと傳はつた。それでも、大久保の妻の耳に入るのは一番遲かつた。

賃錢に不足はなく、大久保の開けた考へから、一日に八時間以上は決して働かせなかつたけれど、職工等は寄り〳〵不平を言つて、仕事を怠けるやうになつた。時ならぬ時分に動力の運轉が止まつて、忠實な番頭佐々木の力だけでは何うすることも出來なくなつた。勇魚は手首の傷がスッカリ癒つてから、また暫らくレッテル貼りをしてゐた。盛んに浮名が立つても、矢張り製造場へ來ることを止めなかつた。

『餘ッぽど鰭の太い女ぢや。』と、男の職工たちは、後指をさして言ひ合つた。

『顏見たゞけて、氣が濟むならば。酒飮家や樽見て醉ふであろ。こらさの。……………』

發動機の運轉が止まると、女工たちは皆聲を揃へて、この唄をうたつた。

だん〳〵と夏の陽氣になつて來て、夥しい註文が來るのに、鐘印炭酸水の製造力は、開業當時の半額にも足りなかつた。

其のうちに、大久保の妻は氣が狂れて、變なことを口走りつゝ、村中を犬とゝもに走り廻はつた末、鐘ケ淵へ身を投げようとして、僅に職工の手で抱き止められた。連れ子の鈴江がおい〳〵と泣く聲は、山の下まで響いた。

大久保は霖雨の續いた揚句に、勇魚と手に手を取つて、行方を晦ました。ジョンとジャックとが、毎日寂しさうに吠えてゐた。

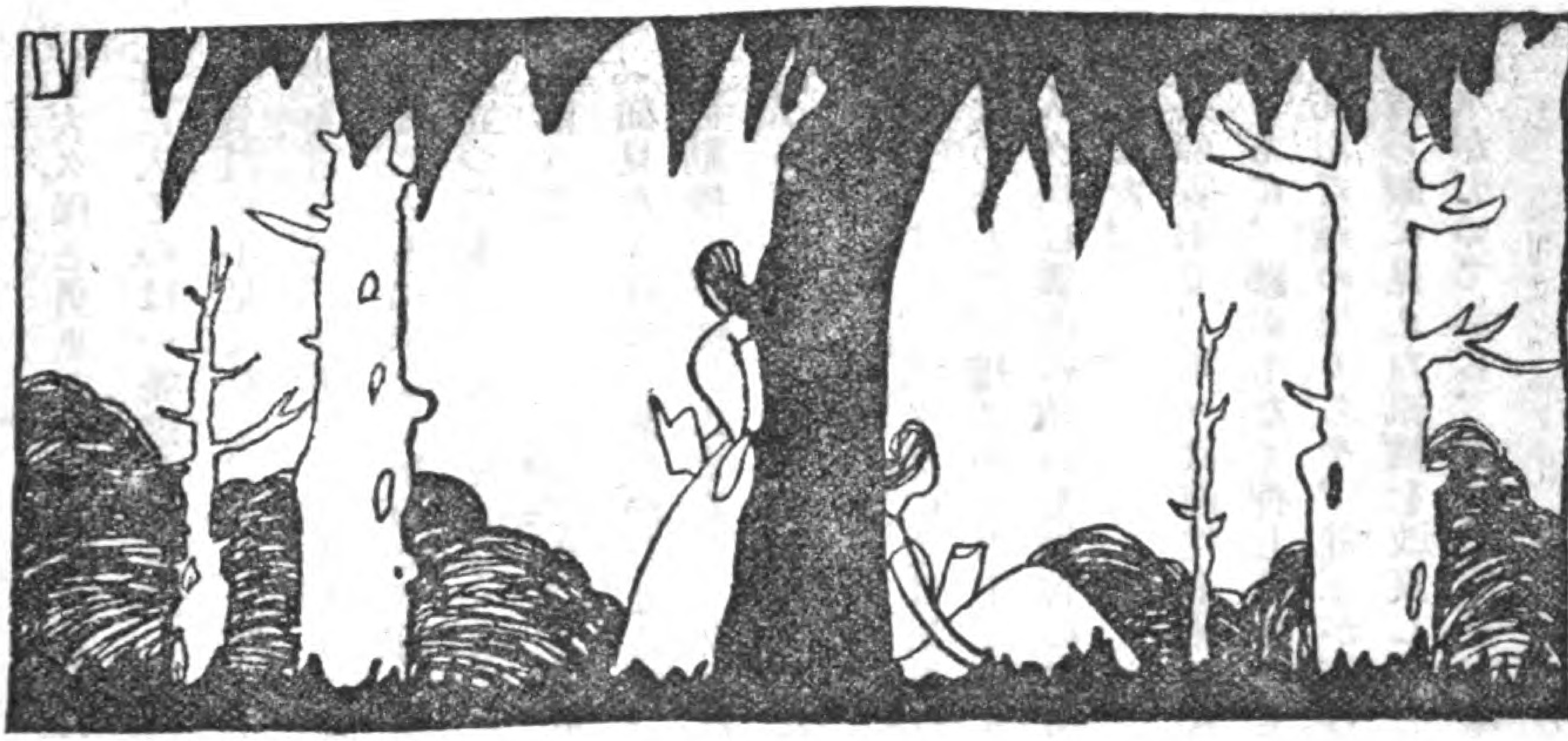
其の霖雨で、川へは前代未聞の大水が出て、淵も瀨も、一帶の凄い流れになつた。鐘ケ淵商會の建物は、機械や材料とゝもに、跡形もなく押し流されて了つた。

『沈んだ鐘の祟りぢや、龍王が怒らはつたんぢや。』と、村の故老は得意氣に身慄ひをした。

『我ら眼に見えた組織を改良して、賃錢を殖やしても、男と女の道がこのまんまで殘つてゐてはなア。……………』

大水が引いてから、番頭の佐々木は鐘ケ淵の岩の上に立つて、腕組みをしながら、かう言つた。

——一九・一一・二八——



途上

谷崎潤一郎

東京T・M株式會社員法學士湯河勝太郎が、十二月も押し詰まつた或る日の夕暮れの五時頃に金杉橋の電車通りを新橋の方へぶらぶら散歩して居る時であつた。

「もし、もし、失禮ですがあなたは湯河さんぢやございませんか。」

ちやうど彼が橋を半分以上渡つた時分に、かう云つて後ろから聲をかけた者があつた。湯河は振り返つた、――すると其處に、彼には嘗て面識のない、しかし風采の立派な一人の紳士が慇懃に山高帽を取つて禮をしながら、彼の前へ進んで來たのである。

「さうです私は湯河ですが、……」

湯河はちよつと、その持ち前の好人物らしい狼狽へ方で小さな眼をパチパチやらせた。さうしてさながら彼の會社の重役に對する時の如くおどおどした態度で云つた。なぜなら、その紳士は全く會社の重役に似た堂々たる人柄だつたので、彼は一と目見た瞬間に、「往來で物を云ひかける無禮な奴」と云ふ感情を忽ち何處へか引込めてしまつて、我知らず月給取りの根性をサラケ出したのである。紳士は獵虎の襟の附いた、西班牙犬の毛のやうに房々した黒い玉羅紗の外套を纏つて、(外套の下には大方モーニングを着て居るのだらう)と推定される縞のヅボンを穿いて、象牙の

ノップのあるステッキを衝いた、色の白い、四十恰好の太つた男だつた。

「いや、突然こんな所でお呼び止めして失禮だとは存じましたが、わたくしは實は斯う云ふ者で、あなたの友人の渡邊法學士――あの方の紹介狀を頂いて、たつた今會社の方へお尋ねしたところでした。」

紳士は斯う云つて二枚の名刺を渡した。湯河はそれを受け取つて街燈の明りの下へ出して見た。一枚の方は紛ぎれもなく彼の親友渡邊の名刺である。名刺の上には渡邊の手でこんな文句が認めてある、――友人安藤一郎氏を御紹介する右は小生の同縣人にて小生とは年來親しくして居る人なり君の會社に勤めつゝある某社員の身元に就いて調べたい事項があるさうだから御面會の上宜敷御取計ひを乞ふ」――もう一枚の名刺を見ると、「私立探偵安藤一郎事務所　日本橋區蠣殼町三丁目四番地　電話浪花五〇一〇番」と記してある。

「ではあなたは、安藤さんと仰つしやるので、――」

湯河は其處に立つて、改めて紳士の樣子をぢろぢろ眺めた。「私立探偵」――日本には珍しい此の職業が、東京にも五六軒出來たことは知つて居たけれど、實際に會ふのは今日が始めてである。それにしても日本の私立探偵は西洋のよりも風采が立派なやうだ、と、彼は思つた。湯河は活動寫眞が好きだつたので、西洋のそれにはたびたびフイルムでお目に懸つて居たから。

「さうです、わたくしが安藤です。で、渡邊君の名刺に書いてございますやうな要件に就いて、幸ひあなたが會社の人事課の方に勤めておいでの事を伺つたものですから、それで唯今會社へお尋ねして御面會を願つた譯なのです。いかゞでせう、御多忙のところを甚だ恐縮ですが、少しお暇を割いて下さる譯には參りますまいか。」

紳士は、彼の職業にふさはしい、力のある、メタリツクな聲でテキパキと語つた。

「なに、もう暇なんですから僕の方はいつでも差支へはありません、……」

と、湯河は探偵と聞いてから「わたくし」を「僕」に取り換へて話した。

「僕で分ることなら、御希望に從つて何なりとお答へしませう。しかし其の御用件は非常にお急ぎの事でせうか、若しお急ぎでなかつたら明日では如何でせうか?、今日でも差支へはない譯ですが、斯うして往來で話をするのも變ですから、——」

「いや、御尤ですが明日からは會社の方も御休みでせうし、わざわざお宅へお伺ひするほどの要件でもないのですから御迷惑でも少し此の邊を散歩しながら話して頂きませう。それにあなたは、いつも斯うやつて散歩なさるのがお好きぢやありませんか。はゝゝ」

と云つて、紳士は輕く笑つた。それは政治家氣取りの男などがよく使ふ豪快な笑ひ方だつた。

湯河は明かに困つた顏つきをした。と云ふのは、彼のポケットには今しがた會社から貰つて來た月給と年末賞與とが忍ばせてあつた。その金は彼としては少からぬ額だつたので、彼は私かに今夜の自分自身を幸福に感じて居た。此れから銀座へでも行つて、此の間からせびられて居た妻の手套と肩掛とを買つて、——あのハイカラな彼女の顏に似合ふやうなどつしりした黑い毛皮の奴を買つて、——さうして早く內へ歸つて彼女を喜ばせてやらう、——そんなことを思ひながら歩いて居る矢先だつたのである。彼は此の安藤と云ふ見ず知らずの人間の爲めに、突然樂しい空想を破られたばかりでなく、今夜の折角の幸福にひゞを入れられたやうな氣がした。それはいゝとしても、人が散歩好きのことを知つて居て、會社から追つ駈けて來るなんて、何ぼ探偵でも嫌な奴だ、どうして此の男は己の顏を知つて居たんだらう、さう考へると不愉快だつた。おまけに彼は腹も減つて居た。

「どうでせう、お手間は取らせない積りですが少し附き合つて頂けますまいか。私の方は、或る個人の身元に就いて立ち入つたことをお伺ひしたいのですから、却て會社でお目に懸るよりも往來の方が都合がいゝのです。」

「さうですか、ぢや兎に角御一緒に其處まで行きませう」。

湯河は仕方なしに紳士と並んで又新橋の方へ歩き出した。紳士の云ふところにも理屈はあるし、それに、明日になつ

て探偵の名刺を持つて內へ尋ね來られるのも迷惑だと云ふ事に、氣が付いたからである。

歩き出すと直ぐに、紳士——探偵はポッケットから葉卷を出して吸ひ始めた。が、ものゝ一町も行く間、彼はさうして葉卷を吸つて居るばかりだつた。湯河が馬鹿にされたやうな氣持でイライラして來たことは云ふまでもない。

「で、その御用件と云ふのを伺ひませう。僕の方の社員の身元と仰つしやると誰の事でせうか。僕で分ることなら何でもお答へする積りですが、——」

「無論あなたなら御分りになるだらうと思ひます。」

紳士はまた二三分默つて葉卷を吸つた。

「多分何でせうな、其の男が結婚するとでも云ふので身元をお調べになるのでせうな。」

「えゝさうなんです、御推察の通りです。」

「僕は人事課に居るので、よくそんなのがやつて來ますよ。一體誰ですか其の男は？」

湯河はせめて其の事に興味を感じようとするらしく好奇心を誘ひながら云つた。

「さあ、誰と云つて、——さう仰つしやられるとちよつと申しにくい譯ですが、その人と云ふのは實はあなたですよ。あなたの身元調べを頼まれて居るんですよ。こんな事は人から間接に聞くよりも、直接あなたに打つかつた方が早いと思つたもんですから、それでお尋ねするのですがね。」

「僕はしかし、——あなたは御存知ないかも知れませんが、もう結婚した男ですよ。何かお間違ひぢやないでせうか。」

「いや、間違ひぢやありません。あなたに奧樣がおあんなさることは私も知つて居ます。けれどもあなたは、まだ法律上結婚の手續きを濟ましては居らつしやらないでせう。さうして近いうちに出來るなら一日も早く、その手續きを濟ましたいと考へて居らつしやることも事實でせう。」

「あゝさうですか、分りました。するとあなたは僕の家內の實家の方から、身元調べを頼まれた譯なんですね。」

「誰に頼まれたかと云ふ事は、私の職責上申し上げにくいのです。あなたにも大凡そお心當りがおありでせうから、どうか其の點は見逃して頂きたうございます。」

「えゝよござんすとも、そんな事はちつとも構ひません。僕自身の事なら何でも僕に聞いて下さい。間接に調べられるよりは其の方が僕も氣持ちがよござんすから。――僕はあなたが、さう云ふ方法を取つて下すつた事を感謝します。」

「はゝ、感謝して頂いては痛み入りますな。――僕はいつでも(と、紳士も「僕」を使ひ出しながら)結婚の身元調べなんぞには此の方法を取つて居るんです。相手が相當の人格のあり地位のある場合には、實際直接に打つかつた方が間違ひがないんです。それにどうしても本人に聞かなけりや分らない問題もありますからな。」

「さうですよ、さうですとも!」

と、湯河は嬉しさうに贊成した。彼はいつの間にか機嫌を直して居たのである。

「のみならず、僕はあなたの結婚問題には少からず同情を寄せて居ります。」

紳士は、湯河の嬉しさうな顔をチラと見て、笑ひながら言葉を續けた。

「あなたの方へ奥様の籍をお入れなさるのには、奥様と奥様の御實家とが一日も早く和解なさらなけりやいけませんな。でなければ奥様が二十五歳におなりになるまで、もう三四年待たなけりやなりません。しかし、和解なさるには奥様よりも實はあなたを先方へ理解させることが必要なのです。それが何よりも肝心なのです。で、僕も出來るだけ御盡力はしますが、あなたもまあ其の爲めと思つて、僕の質問に腹藏なく答へて頂きませう。」

「えゝ、そりやよく分つて居ます。ですから何卒御遠慮なく、――」

「そこでと、――あなたは渡邊君と同期に御在學だつたさうですから、大學をお出になつたのはたしか大正二年になりますな?――先づ此の事からお尋ねしませう。」

「さうです、大正二年の卒業です。さうして卒業すると直ぐに今のT・M會社へ這入つたのです。」

「左様、卒業なさると直ぐ、今のT・M會社へお這入りになつた。――それは承知して居ますが、あなたがあの先の奥樣と御結婚なすつたのは、あれはいつでしたかな。あれは何でも、會社へお這入りになると同時だつたやうに思ひますが――」

「えゝさうですよ、會社へ這入つたのが九月でしてね、明くる月の十月に結婚しました。」

「大正二年の十月と、――(さう云ひながら紳士は右の手を指折り數へて、)するとちやうど滿五年半ばかり御同棲なすつた譯ですね。先の奥樣がチブスでお亡くなりになつたのは大正八年の四月だつた筈ですから、」

「えゝ」

と云つたが、湯河は不思議な氣がした。「此の男は己を間接には調べないと云つて置きながら、いろいろの事を調べてゐる。」――で、彼は再び不愉快な顔つきになつた。

「あなたは先の奥さんを大さう愛して居らしつたさうですね。」

「えゝ愛して居ました。――しかし、それだからと云つて今度の妻を同程度に愛しないと云ふ譯ぢやありません。亡くなつた當座は勿論未練もありましたけれど、その未練は幸ひにして癒やし難いものではなかつたのです。今度の妻がそれを癒やしてくれたのです。だから僕は其點から云つても、是非とも久滿子と、――久滿子と云ふのは今の妻の名前です。お斷りするまでもなくあなたは疾うに御承知のことゝ思ひますが、――正式に結婚しなければならない義務を感じて居ります。」

「イヤ御尤もで」

と、紳士は彼の熱心な口調を輕く受け流しながら。

「僕は先の奥さんの御名前も知つて居ります。筆子さんと仰つしやるのでせう、――それからまた、筆子さんが大變病身なお方で、チブスでお亡くなりになる前にも、度び度び煩ひなすつた事を承知して居ります。」

「驚きましたな、どうも。さすが御職掌柄で何もかも御存知ですな。そんなに知つて居らつしやるならもうお調べになるところはなささうですよ。」

「あはゝゝ、さう仰つしやられると恐縮です。何分此れで飯を食つて居るんですから、まあそんなにイヂメないで下さい。――で、あの筆子さんの御病身の事に就いてですが、あの方はチブスをおやりになる前に一度パラチブスをおやりになりましたね、……斯うツと、それはたしか大正六年の秋。十月頃でした。可なり重いパラチブスで、なかなか熱が下らなかつたのであなたが非常に御心配なすつたと云ふ事を聞いて居ります。それから其の明くる年、大正七年になて、正月に風を引いて五六日寢て居らしつたことがあるでせう。」

「あゝさうさう、そんなこともありましたつけ。」

「その次ぎには又、七月に一度と、八月に二度と、夏のうちは誰にでも有りがちな腹下しをなさいましたな。此の三度の腹下しのうちで、二度は極く輕微なものでしたからお休みになるほどではなかつたやうですが、一度は少し重くつて一日二日伏せつて居らしつた。すると、今度は秋になつて例の流行性感冒がはやり出して來て、筆子さんはそれに二度もお罹りになつた。即ち十月に一遍輕いのをやつて、二度目は明くる年の大正八年の正月のことでしたらう。その時は肺炎を併發して危篤な御容態だつたと聞いて居ります。その肺炎がやつとの事で全快すると、二た月も立たないうちにチブスでお亡くなりになつたのです。――さうでせうな? 僕の云ふことに多分間違ひはありますまいな?」

「えゝ」

と云つたきり、湯河は下を向いて何か知ら考へ始めた、――二人はもう新橋を渡つて歳晩の銀座通りを歩いて居たのである。

「全く先の奥さんはお氣の毒でした。亡くなられる前後半年ばかりと云ふものは、死ぬやうな大煩ひを二度もなすつたばかりでなく、其の間に又膽を冷やすやうな危險な目にもチョイ〳〵お會ひでしたからな。――あの、窒息事件があつ

たのはいつ頃でしたらうか？」

　さう云つても湯河が默つて居るので、紳士は獨りで頷きながらしやべり續けた。

「あれは斯うッと、奥さんの肺炎がすつかりよくなつて、二三日うちに床上げをなさらうと云ふ時分、――病室の瓦斯ストーブから間違ひが起つたのだから何でも寒い時分ですな、二月の末のことでしたらうかな、瓦斯の栓が弛んで居たので、夜中に奥さんがもう少しで窒息なさらうとしたのは。しかし好い鹽梅に大事には至らなかつたものゝ、あの爲めに奥さんの床上げが二三日延びたことは事實ですな。――さうです、さうです、それからまだこんな事もあつたぢやありませんか、奥さんが乘合自働車で新橋から須田町へおいでになる途中で、その自働車が電車と衝突して、すんでの事で……」

「ちよつと、ちよつとお待ち下さい。僕は先からあなたの探偵眼に少からず敬服して居ますが、一體何の必要があつて、いかなる方法でそんな事をお調べになつたのでせう。」

「いや、別に必要があつた譯ぢやないですがね、僕はどうも探偵癖があり過ぎるもんだから、つい餘計な事まで調べ上げて人を驚かして見たくなるんですよ。自分でも惡い癖だと思つて居ますが、なか／＼止められないんです。今直きに本題へ這入りますから、まあもう少し辛抱して聞いて下さい。――で、あの時奥さんは、自働車の窓が壞れたので、ガラスの破片で額へ怪我をなさいましたね。」

「さうです。しかし筆子は割りに呑氣な女でしたから、そんなにビックリしても居ませんでしたよ。それに、怪我と云つてもほんの擦り傷でしたから。」

「ですが、あの衝突事件に就いては、僕が思ふのにあなたも多少責任がある譯です。」

「なぜ？」

「なぜと云つて、奥さんが乘合自働車へお乘りになつたのは、あなたが電車へ乘るな、乘合自働車で行けとお云ひつけ

になつたからでせう。」

「そりや云ひつけました——かも知れません。僕はそんな細々した事までハッキリ覺えては居ませんが、成る程さう云ひつけたやうにも思ひます。さう、さう、たしかにさう云つたでせう。それは斯う云ふ譯だつたんです、何しろ筆子は二度も流行性感冒をやつた後でしたらう、さうして其の時分、人ごみの電車に載るのは最も感冒に感染し易いと云ふ事が、新聞なぞに出て居る時分でしたらう、だから僕の考へでは、電車より乘合自働車の方が危險が少いと思つたんです。それで決して電車へは乘るなと、固く云ひつけた譯なんです、まさか筆子の乘つた自働車が、運惡く衝突しようとは思ひませんからね。僕に責任なんかある筈はありませんよ。筆子だつてそんな事は思ひもしなかつたし、僕の注告を感謝して居るくらいでした。」

「勿論筆子さんは常にあなたの親切を感謝しておいでゞした、亡くなられる最後まで感謝しておいでゞした、けれども僕は、あの自働車事件だけはあなたに責任があると思ひますね。そりやあなたには奥さんの御病氣の爲めを考へてさうしろと仰つしやつたでせう。それはきつとさうに違ひありません。にも拘らず、僕はやはりあなたに責任があると思ひますね。」

「なぜ？」

「お分りにならなければ說明しませう、——あなたは今、まさかあの自働者が衝突しようとは思はなかつたと仰しやつたやうです。しかし奥樣が自働車へお乘りになつたのはあの日一日だけではありませんな。あの時分、奥さんは大煩ひをなすつた後で、まだ醫者に見て貰ふ必要があつて、一日置きに芝口のお宅から萬世橋の病院まで通つて居らしつた。それも一と月くらゐ通はなければならない事は最初から分つて居た。さうして其の間はいつも乘合自働車へお乘りになつた。衝突事故があつたのはつまり其の期間の出來事です。よござんすかね、ところでもう一つ注意すべきことは、あの時分はちやうど乘合自働車が始まり立てで、衝突事故が屢々あつたのです。衝突しやしないかと云ふ心配は、少し神經

質の人には可なりあつたのです。——ちよつとお斷り申して置きますが、あなたは神經質の人です、——そのあなたがあなたの最愛の奥さんを、あれほど度び度びあの自働車へお乘せになると云ふ事は少くとも、あなたに似合はない不注意ぢやないでせうか。一日置きに一と月の間あれで往復するとなれば、その人は三十回衝突の危險に曝されることになります。」

「あは〻〻〻、其處へ氣が付かれるとはあなたも僕に劣らない神經質ですな。成る程、さう仰つしやられると、僕はあの時分のことをだん〳〵思ひ出して來ましたが、僕もあの時滿更それに氣が付かなくはなかつたのです、けれども僕は斯う考へたのです。自働車に於ける衝突の危險と、電車に於ける感冒傳染の危險と、孰方がプロバビリティーが多いか。それから又、假りに危險のプロバビリティーが兩方同じだとして、孰方が餘計生命に危險であるか。此の問題を考へて見て、結局乘合自働車の方がより安全だと思つたのです。なぜかと云ふと、今あなたの仰つしやつた通り月に三十回往復するとして、若し電車に乘れば其の三十臺の電車の孰れにも、必ず感冒の黴菌が居ると思はなければなりません。あの時分は流行の絶頂期でしたからさう見るのが至當だつたのです。既に黴菌が居るとなれば、其處で傳染するのは偶然ではありません。然るに自働車の事故の方は此れは全く偶然の禍です。無論どの自働車にも衝突のポシビリテイーはありますが、しかし始めから禍因が歴然と存在して居る場合とは違ひますからな。次ぎには斯う云ふ事も私は云はれます。筆子は二度も流行性感冒に罹つて居ます、此れは彼女が普通の人よりもそれに罹り易い體質を持つて居る證據です。だから電車へ乘れば、彼女は多勢の乘客の内でも危險を受ける可く擇ばれた一人とならなければなりません。自働車の場合には乘客の感ずる危險は平等です。のみならず僕は危險の程度に就いても斯う考へました、彼女が若し、三度目に流行性感冒に罹つたとしたら、必ず又肺炎を起すに違ひないし、さうなると今度こそ助からないだらう。一度肺炎をやつたものは再び肺炎に罹り易いと云ふ事を聞いても居ましたし、おまけに彼女は病後の衰弱から充分恢復し切らずに居た時ですから、僕の此の心配は杞憂ではなかつたので。ところが衝突の方は、衝突したから死ぬと極まつて

やしませんからな。よく〳〵不運な場合でなけりや大怪我をすると云ふ事もないし、大怪我がもとで命を取られるやうな事はめつたありやしませんからな。さうして僕の此の考へはやはり間違つては居なかつたのです。御覧なさい、筆子は往復三十回の間に一度衝突に會ひましたけれど、僅かに擦り傷だけで濟んだぢやありませんか。」

「成る程。あなたの仰つしやることは唯それだけ伺つて居れば理窟が通つて居ます。何處にも切り込む隙がないやうに聞えます。が、あなたが唯今仰つしやらなかつた部分のうちに、實は見逃してはならないことがあるのです。と云ふのは、今のその電車と自働車との危險の可能率の問題ですな、自働車の方が電車よりも危險の率が少い、また危險があつても其の程度が輕い、さうして乘客が平等にその危險性を負擔する、此れがあなたの御意見だつたやうですが、少くともあなたの奥様の場合には、自働車に乘つても電車と同じく危險に對して擇ばれた一人であつたと、僕は思ふのです。決して外の乘客と平等に危險に曝されては居なかつた筈です。つまり、自働車が衝突した場合に、あなたの奥様は誰よりも先に、且恐らくは誰よりも重い負傷を受けるべき運命の下に置かれて居らしつた。此の事をあなたは見逃してはなりません。」

「どうしてさう云ふ事になるでせう？僕には分りかねますがね。」

「はゝあ、お分りにならない？どうも不思議ですな。――しかしあなたは、あの時分筆子さんに斯う云ふ事を仰つしやいましたな、乘合自働車へ乘る時はいつも成る可く一番前の方へ乘れ、それが最も安全な方法だと――」

「さうです、その安全と云ふ意味は斯うだつたのです、――」

「いや、お待ちなさい、あなたの安全と云ふ意味は斯うだつたでせう、――自働車の中にだつて矢張りいくらか感冒の黴菌が居る。で、それを吸はないやうにするには、成るべく風上の方に居るがいゝと云ふ理屈でせう。すると乘合自働車だつて、電車ほど人がこんでは居ないにしても、感冒傳染の危險が絶無ではない譯ですな、あなたは先この事實を忘れておいでのやうでしたな。それからあなたは今の理屈に附け加へて、乘合自働車は前へ乘る方が震動が少ない、奥さ

んはまだ病後の疲勞が脱け切らないのだから、成るべく體を震動させない方がいゝ。――此の二つの理屈を以て、あなたは奥さんに前へ乘ることをお勸めなすつたのです。勸めたと云ふよりは寧ろ嚴しくお云ひつけになつたのです。奥さんはあんな正直な方で、あなたの親切を無にしては惡いと考へて居らしつたから、出來るだけ命令通りになさらうと心かけておいでゞした。そこで、あなたのお言葉は着々と實行されて居ました。」

「…………」

「よござんすかね、あなたは乘合自働車の場合に於ける感冒傳染の危險と云ふものを、最初は勘定に入れて居らつしやらなかつた。居らつしやらなかつたにも拘らず、それを口實にして前の方へお乘せになつた。――こゝに一つの矛盾がありまず。さうしてもう一つの矛盾は、最初勘定に入れて置いた衝突の危險の方は、その時になつて全く閑却されてしまつたことです。乘合自働車の一番前の方へ乘る、――衝突の場合を考へたら、此のくらゐ危險なことはないでせう、其處に席を占めた人は、その危險に對して結局擇ばれた一人になる譯です。だから御覧なさい、あの時瑕我をしたのは奥樣だけだつたぢやありませんか、あんな、ほんのちよつとした衝突でも、外のお客は無事だつたのに奥樣だけは傷をなすつた。あれがもつとひどい衝突だつたら、外のお客が擦り傷をして奥だけが重傷を負ひます。更にひどかつた場合には、外のお客が重傷を受けて奥樣だけが命を取られます。――衝突と云ふ事は、仰つしやる迄もなく偶然に違ひありません。しかし其の偶然事が起つた場合に、瑕我をすると云ふ事は、奥樣の場合には偶然でなく必然です。」

二人は京橋を渡つた。が、紳士も湯河も、自分たちが今何處を歩いて居るかをまるで忘れてしまつたかのやうに、一人は熱心に語りつゝ一人は默つて耳を傾けつゝ眞直ぐに歩いて行つた。――

「ですからあなたは、或る一定の偶然の危險の中へ奥樣を置き、さうして其の偶然の範圍内での必然の危險の中へ、更に奥樣を追ひ込んだと云ふ結果になります。此れは單純な偶然の危險とは意味が違ひます。さうなると果して電車より安全かどうか分らなくなります。第一、あの時分の奥樣は二度目の流行性感冒から直つたばかりの時だつたのです、從

つて其の病氣に對する免疫性を持つて居られたと考へるのが至當ではないでせうか。僕に云はせれば、あの時の奥樣には絕對に傳染の危險はなかつたのでした。擇ばれた一人であつても、それは安全な方へ擇ばれて居たのでした。一度肺炎に罹つたものがもう一度罹り易いと云ふ事は、或る期間を置いての話です。」

「しかしですね、その免疫性と云ふ事も僕は知らないちやなかつたんですが、何しろ十月に一度罹つて又正月にやつたんでせう。すると免疫性もあまりアテにならないと思つたもんですから、……」

「十月と正月との間には二た月の期間があります。ところがあの時の奥樣はまだ完全に直り切らないで咳をして居らしつたのです。人から移されるよりは人に移す方の側だつたのです。」

「それからですね、今お話しの衝突の危險と云ふ事もですね、旣に衝突その物が非常に偶然な場合なんですから、その範圍内での必然と云つて見たところが、極く〳〵稀な事ぢやないでせうか。偶然の中の必然と單純な必然とは矢張り意味が違ひますよ。況んや其の必然なるものが、必然瑕我をすると云ふだけの事で、必然命を取られると云ふ事にはならないのですからね。」

「けれども、偶然ひどい衝突があつた場合には必然命を取られると云ふ事は云へませうな。」

「えゝ云へるでせう、ですがそんな論理的遊戲をやつたつて詰まらないぢやありませんか。」

「あはゝゝ、論理的遊戲ですか、僕は此れが好きだもんですから、ウツカリ圖に乘つて深入りをし過ぎたんです。イヤ失禮しました。もう直き本題に這入りますよ。――で、這入る前に、今の論理的遊戲の方を片附けてしまひませう。あなただつて、僕をお笑ひなさるけれど實はなか〳〵論理がお好きのやうでもあるし、此の方面では或は僕の先輩かも知れないくらゐだから、滿更興味のない事ではなからうと思ふんです。そこで、今の偶然と必然の研究ですな、あれを或る一個人の人間の心理と結び付ける時に、茲に新たなる問題が生じる、論理が最早や單純な論理ではなくなつて來ると云ふ事にあなたはお氣付きにならないでせうか。」

「さあ、大分むづかしくなつて來ましたな。」

「なにむづかしくも何ともありません。或る人間の心理と云つたのはつまり犯罪心理を云ふのです。或る人が或る人を間接な方法で誰にも知らせずに殺さうとする。――殺すと云ふ言葉が穩當でないなら、死に至らしめようとして居る、さうして其の爲めに、その人を成るべく多くの危險へ露出させる。その場合に、その人は自分の意圖を悟らせない爲めにも、又相手の人を其處へ知らず識らず導く爲めにも、偶然の危險を擇ぶより外仕方がありません。しかし其の偶然の中に、ちよいとは目に付かない或る必然が含まれて居るとすれば、猶更お誂へ向きだと云ふ譯です。で、あなたが奥さんを乘合自動車へお乘せになつた事は、たまたま其の場合と外形に於いて一致しては居ないでせうか？僕は『外形に於いて』と云ひます。どうか感情を害しないで下さい。無論あなたにそんな意圖があつたとは云ひませんが、あなたにしてもさう云ふ人間の心理はお分りになるでせうな。」

「あなたは御職掌柄妙なことをお考へになりますね。外形に於いて一致して居るかどうか、あなたの御判斷にお任せするより仕方がありませんが、しかしたつた一と月の間、三十回自動車で往復させただけで、その間に人の命が奪へると思つて居る人間があつたら、それは馬鹿か氣違ひでせう。そんな頼りにならない偶然を頼りにする奴もないでせう。」

「さうです、たつた三十回自動車へ乘せただけなら、其の偶然が命中する機會は少いと云へます。けれどもいろいろな方面からいろいろな危險を捜し出して來て、其の人の上へ偶然を幾つも幾つも積み重ねる、――さうするとつまり、命中率が幾層倍にも殖ゑて來る譯です。無數の偶然的危險が寄り集まつて一個の焦點を作つて居る中へ、その人を引き入れるやうにする。さうなつた場合には、もう其の人の蒙むる危險は偶然でなく必然になつて來るのです。」

「――と仰つしやると、たとへばどう云ふ風にするのでせう？」

「たとへばですね、こゝに一人の男があつて其の妻を殺さう――死に至らしめようと考へて居る。然るに其の妻は生れつき心臟が弱い。――此の心臟が弱いと云ふ事實の中には、既に偶然的危險の種子が含まれて居ます。で、その危險を

増大させる爲めに、ますます心臓を悪くするやうな條件を彼女に與へる。たとへば其の男は妻に飲酒の習慣を附けさせようと思つて、酒を飲むことをすゝめました。最初は葡萄酒を寝しなに一杯づゝ飲むことをすゝめる、その一杯をだんだんに殖やして食後には必ず飲むやうにさせる、斯うして次第にアルコールの味を覺えさせました。しかし彼女はもともと酒を嗜む傾向のない女だつたので、夫が望むほどの酒飲みにはなれませんでした。そこで夫は、第二の手段として煙草をすゝめました。『女だつて其のくらゐな樂しみがなけりや仕様がない』さう云つて、舶來のいゝ香ひのする煙草を買つて來ては彼女に吸はせました。ところが此の計略は立派に成功して、一と月ほどのうちに、彼女はほんたうの喫煙家になつてしまつたのです、もう止さうと思つても止せなくなつてしまつたのです。次ぎに夫は、心臓の弱い者には冷水浴が有害である事を聞き込んで來て、それを彼女にやらせました。『お前は風を引き易い體質だから、毎朝怠らず冷水浴をやるがいゝ』と、其の男は親切らしく妻に云つたのです。心の底から夫を信頼して居る妻は直ちに其の通り實行しました。さうして、それらの爲めに自分の心臓がいよいよ悪くなるのを知らずに居りました。ですがそれだけでは夫の計劃が充分に遂行されたとは云へません。彼女の心臓をそんなに悪くして置いてから、今度は其の心臓に打撃を與へるのです。つまり、成るべく高い熱の續くやうな病氣、――チブスか肺炎とかに罹り易いやうな狀態で、彼女を置くのですな。其の男が最初に擇んだのはチブスでした。彼は其の目的で、チブス菌の居さうなものを頻りに妻君に喰べさせました。『亞米利加人は食事の時に生水を飲む、水をベスト・ドリンクだつたと云つて賞美する』などゝ稱して、妻君に生水を飲ませる。刺身を喰はせる、それから、生の牡蠣と心太（ところてん）にはチブス菌が多い事を知つて、それを喰はせる。勿論妻君にすゝめる爲めには夫自身もさうしなければなりませんでしたが、夫は以前にチブスをやつたことがあるので、免疫性になつて居たんです。夫の此の計劃は、彼の希望通りの結果を齎しはしませんでしたか、殆んど七分通りは成功しかゝつたのです。と云ふのは、妻君はチブスにはなりませんでしたけれども、パラチブスにかゝりました。さうして一週間も高い熱に苦しめられました。が、パラチブスの死亡は一割内外に過ぎませんから、幸か不幸か心臓の弱い妻君は助

かりました。夫はその七分通りの成功に勢ひを得て、其の後も相變らず生物を喰べさせることを怠らずに居たので、妻君は夏になると屢々下痢を起しました。夫は其の度毎にハラハラしながら成り行きを見て居ましたけれど、生憎にも彼の注文するチブスには容易に罹らなかつたのです。するとやがて、夫の爲めには願つてもない機會が到來したのです。それは一昨年の秋から翌年の冬へかけての惡性感冒の流行でした。夫は此の時期に於いてどうしても彼女を感冒に取り憑かせようとたくんだのです。十月早々、彼女は果してそれに罹りました、――なぜ罹つたかと云ふと、彼女は其の時分咽喉を惡くして居たからです。夫は感冒豫防嗽ひをしろと云つて、わざと度の强い過酸化水素を拵へて、それで始終彼女に嗽ひをさせて居ました。その爲めに彼は咽喉カタールを起して居たのです。のみならず、ちようど其の時に親戚の伯母が感冒に罹つたので、夫は彼女を再三其處へ見舞ひにやりました。彼女は五度び目に見舞ひに行つて、歸つて來ると直ぐに熱を出したのです。しかし、幸ひにして其の時も助かりました。さうして正月になつて、今度は更に重いのに罹つてとう〳〵肺炎を起したのです。……」

かう云ひながら、探偵はちよつと不思議な事をやつた、――持つて居た葉卷の灰をトン〳〵と叩き落すやうな風に見せて、彼は湯河の手頸の邊を二三度輕く小突いたのである、――何か無言の裡に注意をでも促すやうな工合に。それから、恰も二人は日本橋の橋手前まで來て居たのだが、探偵は村井銀行の先を右へ曲つて、中央郵便局の方角へ歩き出した。無論湯河も彼に喰着いて行かなければならなかつた。

「此の二度目の感冒にも、矢張り夫の細工がありました。」

と、探偵は續けた。

「その時分に、妻君の實家の子供が激烈な感冒に罹つて神田のS病院へ入院することになりました。すると夫は頼まれもしないのに妻君を其の子供の附添人にさせたのです。それは斯う云ふ理屈からでした、――『今度の風は移り易いから、めつたな者を附き添はせることは出來ない。私の家内は此の間感冒をやつたばかりで免疫になつて居るから、附添人に

は最も適當だ。』——さう云つたので、妻君も成る程と思つて子供の看病をして居るうちに、再び感冒を背負ひ込んだのです。さうして妻君の肺炎は可なり重態でした。幾度も危篤のことがありました。今度こそ夫の計略は十二分に効を奏しかゝつたのです。夫は彼女の枕許で彼女が夫の不注意から斯う云ふ大患になつたことを詫りましたが、妻君は夫を恨まうともせず、何處までも生前の愛情を感謝しつゝ靜かに死んで行きさうに見えました。けれども、もう少しと云ふところで今度も妻君は助かつてしまつたのです。夫の心になつて見れば、九仭の功を一簣に缺いだ、——とでも云ふべきでせう。そこで、夫は又工夫を凝らしました。これは病氣ばかりではとてもいけない、病氣以外の災難にも遇はせなければいけない、——さう考へたので、彼は先づ妻君の病室にある瓦斯ストオブを利用しました。その時分妻君は大分よくなつて居たから、もう看護婦も附いては居ませんでしたが、まだ一週間ぐらゐは夫と別の部屋に寢て居る必要があつたのです。で、夫は或る時偶然にかう云ふ事を發見しました。——妻君は、夜眠りに就く時は火の用心を慮つて瓦斯ストオブを消して寢る事。瓦斯ストオブの栓は、病室から廊下へ出る閾際にある事。妻君は夜中に一度便所へ行く習慣がありさうして其の時には必ず其の閾際を通る事。閾際を通る時に、妻君は長い寢間着の裾をぞろ〳〵と引き擦つて歩くので、その裾が五度びに三度までは必ず瓦斯の栓に觸る事。若し瓦斯の栓がもう少し弱かつたら、裾が觸つた場合に其れが弛むに違ひない事。病室は日本間ではあつたけれども、建具がシツカリして居て隙間から風が洩らないやうになつて居る事。——偶然にも、其處にはそれだけの危險の種子が準備されて居ました。玆に於いて夫は、その偶然を必然に導くにはほんの僅かの手數を加へればいゝと云ふ事に氣が付きました。それは卽ち瓦斯の栓をもつと緩めることです。彼は或る日、妻君が晝寢をして居る時にこつそりと其の栓へ油を差して其處を滑かにして置きました。彼の此の行動は、極めて秘密の裡に行はれた筈だつたのですが、不幸にして彼は自分が知らない間にそれを人に見られて居たのです。——見たのは其の時分彼の家に使はれて居た女中でした。此女中は、妻君が嫁に來た時に妻君の里から一緒に附いて來た者で非常に妻君思ひの、氣轉の利く女だつたのです。まあそんな事はどうでもよござんすがね、——」

探偵と湯河とは中央郵便局の前から兜橋を渡り、鎧橋を渡つた。二人はいつの間にか水天宮前の電車通りを歩いて居たのである。

「――で、今度も夫は七分通り成功して殘りの三分で失敗しました。妻君は危く瓦斯の爲めに窒息しかゝつたのですが、大事に至らないうちに眼を覺まして、夜中に大騷ぎになつたのです。どうして瓦斯が洩れたのか、原因は間もなく分りましたけれど、それは妻君自身の不注意と云ふ事になつたのです。其の次ぎに夫が擇んだのは乘合自動車です。此れは先もお話したやうに、妻君が醫者へ通ふを利用したので、彼はあらゆる機會を利用する事を忘れませんでした。そこで自動車も亦不成功に終つた時に、更に新しい機會を掴みました。彼に其の機會を與へた者は醫者だつたのです。醫者は妻君の病後保養の爲めに轉地する事をすゝめたのです。何處か空氣のいゝ處へ一と月ほど行つて居るやうに、――そんな勸告があつたので、夫は妻君に斯う云ひました、『お前は始終煩つてばかり居るのだから、一と月や二た月轉地するよりもいつそ内中でもつと空氣のいゝ處へ引越すことにしよう。さうかと云つて、あまり遠くへ越す譯にも行かないから、大森邊へ内を持つたらどうだらう。彼處なら海も近いし、己が會社へ通ふのにも都合がいゝから。』此の意見に妻君は直ぐ贊成しました。あなたは御存知かどうか知りませんが、大森は大さう飲み水の惡い土地ださうですな、さうして其のせいか傳染病が絶えないさうですな、――殊にチブスが。――つまり其の男は災難の方が駄目だつたので再び病氣を狙ひ始めたのです。で、大森へ越してからは一層猛烈に生水や生物を妻君に與へました。相變らず冷水浴を勵行させ喫煙をすゝめても居ました。それから、彼は庭を手入れして樹木を澤山に植ゑ込み、池を掘つて水溜りを拵へ、又便所の位置が惡いと云つて其れを西日の當るやうな方角に向き變へました。此れは家の中に蚊と蠅とを發生させる手段だつたのです。いやまだあります、彼の知人のうちにチブス患者が出來ると、彼は自分は免疫だからと稱して屢々其處へ見舞ひに行き、たまには妻君にも行かせました。かうして彼は氣長に結果を待つて居る筈でしたが、此の計略は思ひの外早く、越してからやつと一と月も立たないうちに、且今度こそ充分に効を奏したのです。彼が或る友人のチブスを見舞

ひに行つてから間もなく、其處には又どんな陰險な手段が弄されたか知れませんが、妻君は其病氣に罹りました。さうして遂に其の爲めに死んだのです。――どうですか、此れはあなたの場合に、外形だけはそつくり當てはまりはしませんかね。」

「えゝ、――そ。そりや外形だけは――」

「あはゝゝゝ、さうです、今迄のところでは外形だけはです。あなたは先の奥さんを愛して居らしつた、兎も角外形だけは愛して居らしつた。しかし其れと同時に、あなたはもう二三年も前から先の奥樣には內證で今の奥樣を愛して居らしつた。外形以上に愛して居らしつた。すると、今迄の事實に此の事實が加はつて來ると、先の場合があなたに當てはまる程度は單に外形だけではなくなつて來ますな。――」

二人は水天宮の電車通りから右へ曲つた狹い横町を歩いて居た。横町の左側に『私立探偵』と書いた大きな看板を掲げた事務所風の家があつた。ガラス戸の嵌まつた二階にも階下にも明りが煌々と燈つて居た。其處の前まで來ると、探偵は「あはゝゝゝ」と大聲で笑ひ出した。

「あはゝゝゝ、もういけませんよ、もうお隱しなすつてもいけませんよ。あなたは先から顫へて居らつしやるぢやありませんか。先の奥樣のお父樣が今夜僕の內であなたを待つて居るんです。まあそんなに怯えないでも大丈夫ですよ。ちよつと、ちよつと此處へお這入んなさい。」

彼は突然湯河の手頸を摑んでぐいと肩でドーアを押しながら明るい家の中へ引き擦り込んだ。電燈に照らされた湯河の顏は眞靑だつた。彼は喪心したやうにぐらぐらとよろめいて其處にある椅子の上へ臀餅をついた。

(大正八、十二月作)

二月號豫告

■政治期節に入つた二月號は、多數國民の要求して居る、普通選擧問題を提げて

議會改造號

を出すことにした。執筆者は堀江、末廣、暉道、佐藤（丑次郎）諸博士に、小泉信三、森戸辰男、山川均氏等の新人、並に實際政治家をして、極めて眞摯に、熱烈に此問題を研究して見たいと思ふ

■尚文藝欄は、創作に、評論に、感想に、愈々努力して讀者諸賢の期待に副ひたいと思ふ。二月號決定の分は左の如くである

階級鬪爭の倫理（六十枚の長評論）……	生田長江
生命の藝術……	與謝野晶子
創作……	島田淸次郎
おせい（百三十枚の長編）……	岩野泡鳴
田園雜記（創作）……	正宗白鳥
創作……	廣津和郎

毎月一日發行一回

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五十錢	二錢
半ヶ年	二圓九十錢	不要
壹ヶ年	五圓八十錢	不要

外國行郵稅は一部十四錢增大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候
▼廣告は御便宜の取次店へ御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵劵代用一割增の事
▼御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正八年十二月二十日印刷納本
大正九年一月一日發行

本號に限り
金壹圓

編輯發行兼印刷者　東京府中目黒七八六　橫關利藤太

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番　秀英舍

發行所　東京芝區櫻山久保町七　改造社

電話新橋一八五九
振替東京八四〇二

謹賀新年

大正九年元旦

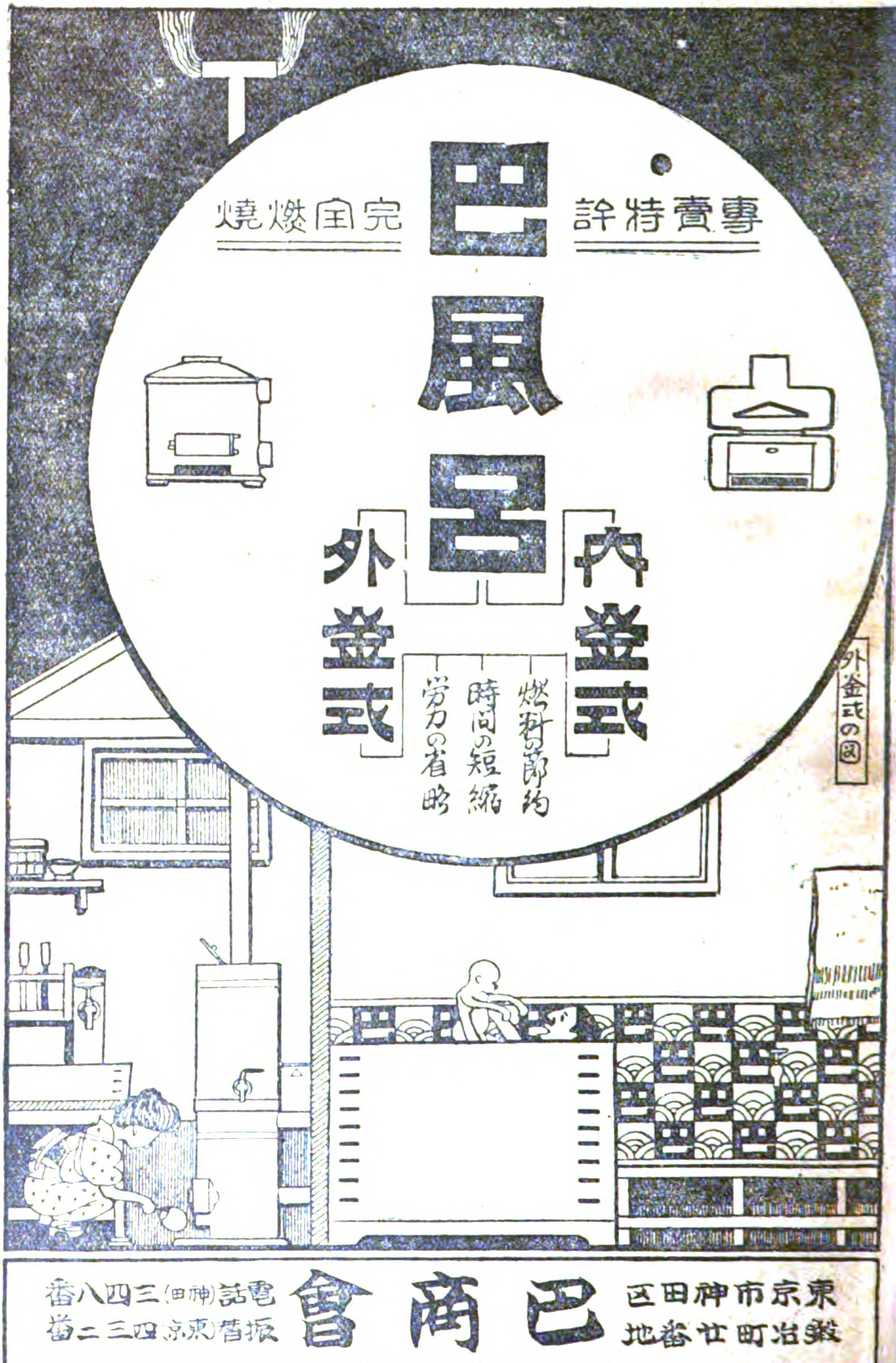
東京市神田區表神保町三番地
東京堂書店
振替東京二七〇番

東京市京橋區銀座三丁目一番地
東海堂書店
振替東京八六七番

東京市京橋區元數寄屋町三丁目七番地
北隆館
振替東京七五〇番

東京市日本橋區本石町三丁目十四番地
至誠堂書店
振替東京一七四四番

東京市神田區裏神保町一番地
上田屋書店
振替東京三〇八六番


專賣特許
完全燃焼
巴風呂
內釜式
外釜式
燃料の節約
時間の短縮
労力の省略
外釜式の図
東京市神田区
鍛冶町廿番地
巴商會
電話(神田)三四八番
振替(東京)四三二番


BEST MADE
REDHAT
WEAR GUARANTEED
赤帽印滑（スリップ）ネクタイ
星宿新たに商勢頓に佳氣に充ち高
閣愈瑞祥至極に被在候段奉大賀候
弊店儀逐年繁盛を加へ申候事偏に
各位の絶えざる御厚庇に依る義と
奉感銘候本年は特に一層奮勵致し
御厚意に對し充分應酬仕度心組に
御座候間何卒倍舊御引立被成下度
願上候先は右歳首の御挨拶御祝儀
申上度如此に御座候　敬具
赤帽印ネクタイ
發賣元
東京
南商店
大阪